

大阪大学大学院文学研究科

年報 2018

教育・研究 (2016-2017 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一七二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勸奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〔釈文〕

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相応に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべきの事
 - 一 人の切磋を受け、却つて立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2018

目次

大阪大学大学院文学研究科『年報2018』の刊行に寄せて 福永 伸哉	1
大阪大学大学院文学研究科『年報2018』発刊の趣旨 評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	4
1-2	教育・研究の支援体制	9
	研究推進室	9
	評価・広報室	12
	教育支援室	17
	国際連携室	21
	国際交流センター	24
1-3	国際交流活動	26
1-4	外部資金の導入	30
1-5	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	33
1-6	記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座 「記憶の劇場」 「記憶の劇場Ⅱ」	34
1-7	グローバル・ジャパン・スタディーズ	38
1-8	国際的連携型人文学研究教育クラスター	40
	グローバル日本研究クラスター	40
	グローバルヒストリー研究	42
	国際古典籍学クラスター	44
	比較デザイン学クラスター	46
	アーツ&リサーチ	48
	役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究	50
1-9	教育ゆめ基金調査研究助成制度	52
1-10	懐徳堂研究センターの活動	53
1-11	埋蔵文化財調査室の活動	55
1-12	ハラスメント問題委員会の活動	58

第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	63
2-2	現代思想文化学	76
2-3	臨床哲学	88
2-4	中国哲学	99

2-5	インド学・仏教学	108
2-6	日本学	117
2-7	日本史学	134
2-8	東洋史学	157
2-9	西洋史学	177
2-10	考古学	196
2-11	人文地理学	211
2-12	日本文学	221
2-13	比較文学	240
2-14	中国文学	252
2-15	国語学	259
2-16	英米文学	270
2-17	ドイツ文学	282
2-18	フランス文学	291
2-19	英語学	304
2-20	日本語学	314
2-21	美学・文芸学	330
2-22	音楽学・演劇学	343
2-23	美術史学	369
2-24	共生文明論	390
2-25	アート・メディア論	400
2-26	文学環境論	415
2-27	言語生態論	423
2-28	留学生専門教育	433
2-29	国際交流センター	435
	編集後記	438

大阪大学大学院文学研究科 『年報2018』の刊行に寄せて

大阪大学大学院文学研究科で行われている諸活動の内容を定期的に公表する取組みは、1994年刊行の自己評価書『大阪大学文学部』をもって始まりました。大学と社会とのかかわりが増す中で、積極的な情報発信によって「閉ざされた大学」から「開かれた大学」へと性格を変えていくことを目指した対応であると同時に、みずからの活動実績を整理し顧みることによって課題を見だし、より魅力的な研究科にしていこうとする動きの一環でもありました。計3冊の自己評価書を公刊した後、2002年度からは『年報』と名を変えて2年ごとに編集を行うこととし、2016・2017年度の活動を対象とした今期の『年報2018』はその第9冊目となります。『年報』はすべてウェブ上で公表していますので、この間に本研究科がどのような活動を行い、それについてどのような問題点や課題を認識してきたかをご覧くださいことができます。

大学における活動の両輪となるのは教育と研究です。これを国際的、社会的な連携のもとに展開すること、あるいは教育研究を通じてそうした連携自体を生み出すこと、そしてその成果をしっかりと社会に発信していくことが、21世紀の「開かれた大学」としていっそう強く求められるようになっていきます。本研究科では、研究推進室、評価・広報室、教育支援室、国際連携室の4室が、事務部の協力を得てこれらの活動を担う体制をとっています。

今期の国際的な連携としては、EUの中心的な教育助成プログラムであるエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の欧州域外フル・パートナーとしての活動や、ハイデルベルク大学と連携するISAPプログラム（Internationalen Studien und Ausbildungspartnerschaft 国際学習教育パートナーシップ）による学生・教員の交流を前期から継続して行っているほか、2018年4月に本学にて開催された日独6大学学長会議（HeKKSaGOn）のコンソーシアム会議の準備に携わりました。また、トリニティ・カレッジ・ダブリン、建国大学校、ゲッティンゲン大学、グローニンゲン大学、イーストアングリア大学、四川大学の6大学と新たに部局間交流協定を締結しています。研究面でも、2016年にフランス国立東洋言語文明研究所、2017年にはトリニティ・カレッジ・ダブリンと共同で、それぞれ現地で国際シンポジウムを開催し、大きな成功を収めました。こうした国際交流の経験を活かし、2017年度に国際日本研究の人材育成を目指した大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」を立ち上げたことは、今期の特筆すべき取組みといえます。

さらに国際連携と社会連携を組み合わせたプロジェクト型の研究教育組織として、2014年度より特別な予算枠を設けて創設した「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター」は、今期も計6グループを選定し、それぞれが独創性のある活動を展開しています。その中からは、たとえば国文学研究資料館の大型プロジェクトと連動した「国際古典籍学クラスター」や、文化庁事業として採択された「記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座」と不可分の関係で進められる「アーツ&リサーチ」のように、新たな連携がつつぎと生み出されています。

このほかにも、学内外の組織や機関と連携して、あるいは教員それぞれのネットワークを駆使して、数多くの市民向け講座等を通じて研究成果を社会に発信する取組みが積極的に行われています。多彩な分野を擁する文学研究科ならではの活動といえるでしょう。

これらの活動の基礎が、本研究科で日々行われている研究教育にあることはいまでもありません。本年報では、それらのデータを研究科、専門分野・コース、教員個人という単位ごとに余すところなく収集し、掲載しています。

大学院入学定員が未充足となったこと、科研費獲得が芳しくないことなど、今期の課題も見え、対策の検討を始めたところです。こうして年報という形でデータをとりまとめることは、私たちの活動を社会に広く知っていただくだけでなく、自身の現状を把握し、改善につなげる重要な作業にもなります。

本年報の編集を進めた2018年度は、旧制の法文学部として大阪大学の人文学教育研究がスタートして満70年の節目の年にあたります。23の専門分野・4つのコースからなる本研究科の力を結集し、次なる80年さらには100年へ向けて魅力ある教育研究をいかに組み立てていくか。あらたな挑戦が続きます。

2019年3月

文学研究科長・文学部長 福永 伸哉

大阪大学大学院文学研究科 『年報2018』発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

本書『年報2018』は、2016年度・2017年度の2年間における大阪大学大学院文学研究科および文学部の教育・研究活動について客観的にデータを集積し、その点検・評価、また今後の改革に当たっての基礎資料とすべくまとめられたものである。『年報』としては9冊目、継続的なデータ蓄積の期間としては20～21年目に当たる。

本書の構成は、これまで通り二部構成である。第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要」は、文学研究科・文学部の教育および研究活動の全般に関わる事項を報告する。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」は、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色、所定の項目ごとのデータ、および各専門分野・コースによる自己評価を提示する。

こうした資料の性質上、データを比較する上での質的連続性が重要であるので、上記の構成はもとより、データ収集の範囲や方法等に関しても、基本的には前号以前のものを踏襲している。

前々回以来『年報』は、冊子体による発行を取りやめ、電子ファイルでの公開のみとした。それまでも『年報』は、その全号についてpdfファイル化したものを文学研究科ウェブサイト(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通して公開していたが、文書の電子化は加速度的に進んでいる。殊に『年報』のようなデータ集では、閲覧や過去のデータとの比較対照などの面で、電子データ化の利点が多い。そうした現状を踏まえ、より利便性が低いと考えられる冊子体の発行を取りやめることとしたものである。

この他、今回の『年報』においては従前と編集方針・内容構成について大きな変更はない。

2016年度より第3期中期目標期間が始まった。来年度には早くも現況調査表の作成着手が予定されている。文学研究科にとって重要な課題が山積する中、本書を通して本研究科の教育・研究活動全般について広く知っていただき、忌憚のないご意見を頂戴して今後の糧とできれば、無上の幸いである。

文学研究科 評価・広報室長
岡田 裕成

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として2016年度および2017年度のデータに関するものであるが、『年報2016』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度5月1日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

博士前期課程（定員75名）・修士課程（定員19名）の入学者数は、2009年度・2010年度には博士前期、修士課程ともに定員割れとなった。特に、2010年度は前期58名、修士16名にまで落ち込んだ。その後増加に転じ、2013年度には両課程ともに定員を満了したものの、2014年度には再び定員割れとなった。2015年度は、前期課程は定員を満了したが、修士課程は2014年度に続き、大きく定員を割った。2016年度・2017年度は、再び前期課程、修士課程ともに定員割れとなった。少子化と構造的な不況、そして大学教員ポストの減少を背景とする将来の就職先に対する不安などがこのような状況をもたらしているが、今後いかに阪大大学院の魅力をアピールし、院生の確保に努めるかが課題である。また、一年に2回、入試の機会を設けてはいるものの、他大学大学院への進学ならびに就職のための入学辞退者が引き続き出ており（2017年度修士課程を除く）、これに対する対策も必要である。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2008	70・18	4・3	10・0	84・21
2009	58・15	3・1	8・2	69・18
2010	48・12	4・2	6・2	58・16
2011	57・20	4・0	7・4	68・24
2012	50・13	5・2	11・3	66・18
2013	59・14	6・3	13・3	78・20
2014	47・8	3・3	12・1	62・12
2015	58・9	5・1	14・1	77・11
2016	43・9	2・1	23・1	68・11
2017	51・8	2・1	11・6	64・15

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

学生総数は、文化動態論専攻設置2年目の2009年度以降、200名を切ることはなかったが、2015年度は198名となった。2016年度は200名以上へと戻したものの、2017年度は再び200名を切った。休学者数と留年者数の合計の学生総数に対する割合は、2016年度は博士前期課程22%、修士課程28%、2017年度は同29%、44%となっており、引き続き高い数値を示している。今後、改善の努力が必要である。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2008	208・21	22・0	40・—	83・—
2009	188・39	18・0	40・10	77・11
2010	158・43	16・8	32・10	68・17

2011	158・49	17・8	32・9	60・10
2012	161・55	13・6	27・14	60・22
2013	173・50	21・8	29・12	68・19
2014	164・42	23・7	28・13	72・17
2015	164・34	13・8	26・10	61・13
2016	170・32	18・4	20・5	71・10
2017	158・36	20・6	26・10	70・12

1-3. 大学院博士後期課程入学者

2012年度・2013年度の入学者はそれぞれ35名・32名で、定員(41名)を大きく割り込んだが、2014年度・2015年度はほぼ定員と同数となった。2016年度・2017年度は再び定員を割り込んだ。社会人の入学状況については、ここ10年ほどは3名前後で安定している。外国人入学者数は、2014年度・2015年度は2012年度・2013年度に較べ、ほぼ倍増したが、2016年度・2017年度は再び以前の水準に戻しつつある。大学教員ポストが減少している昨今、博士後期課程を取り巻く状況は厳しく、絶えず定員割れの危険性がつきまとっている。本研究科だけの努力では如何ともしがたい部分があるが、これまで以上の努力が必要である。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2008	30	4	13	47
2009	31	3	6	40
2010	36	4	8	48
2011	29	2	8	39
2012	27	4	4	35
2013	24	3	5	32
2014	31	1	10	42
2015	28	4	9	41
2016	29	1	5	35
2017	24	4	8	36

1-4. 大学院博士後期課程学生

2017年度の学生数は186名で、減少傾向が認められる。休学者数、退学者数についてはやや減少傾向が認められるものの、休学者数は、学生数に対して2016年度28%、2017年度26%と依然高めの水準で推移している。退学者数は、学生数に対して2016年度13%、2017年度12%となっている。

学位論文提出者は、2010年度は前年に比べて半減、2011年度には大幅に増加したが、翌年度は再び2010年と同水準となった。その後は順調に増加しつつある。学生数に対する学位論文提出者数の比率はかなり低いというべきであるが、この点は、人文科学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程修了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討する必要がある。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数*	退学者数
2008	276	80	48(25)	46
2009	248	68	45(18)	23

2010	245	68	23(12)	40
2011	232	71	33(19)	37
2012	215	69	22(9)	31
2013	195	54	24(18)	26
2014	202	66	27(14)	29
2015	198	57	29(17)	25
2016	198	56	29(10)	25
2017	186	49	34(14)	23

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

研究生数は2007年度まで20名以上であったが、2008年度以降、10名台、年によっては10名を割るまでになった。かつては研究生のうちの大半が日本人であったが(2004年度では日本人20名、留学生2名、2005年度では同じく21名、2名)、日本人研究生の減少とともに留学生の比率が急上昇し、年によっては日本人研究生を上回るようになり、この傾向は2016年度・2017年度も続いている。研究生は院生予備軍としての性格が強いが、日本人研究生の減少により留学生の比率が高まったことも考え合わせ、今後、文学研究科として研究生をどのように教育していくべきか検討する必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2008	8	9	17
2009	8	6	14
2010	6	5	11
2011	8	4	12
2012	5	8	13
2013	4	4	8
2014	8	5	13
2015	3	8	11
2016	3	7	10
2017	3	7	10

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学者の数は、2013年度までは例年定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5~10名程度上回る数で推移していたが、2014年度・2015年度は170名を切り、2016年度も同様であった。2017年度は世界適塾AO入試が導入されるとともに後期日程が廃止され、一般入試の定員が135名となった。一般入試の入学者数151名は定員を16名上回っているが、これはAO入試の入学者数が定員30名に対して21名にとどまり、その不足分を補うためである。AO入試の定員を充足することが喫緊の課題であることは明らかである。外国人入学者は、2004・2005の両年度は0名であったが、2006年度以降は毎年入学者があり、2016年度の9名にみられるように、近年はその数を増しつつある。なお、一般入試の志願者数は2015年度までは減少傾向にあったが、2016年度以降は増加傾向に転じている。2017年度のAO入試の志願者数は定員を1名上回る31名であった。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	AO	外国人	計
2008	170		2	172
2009	171		3	174
2010	175		2	177
2011	171		1	172
2012	171		2	173
2013	172		4	176
2014	165		7	172
2015	169		4	173
2016	165		9	174
2017	151	21	8	180

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数は 2014 年度・2015 年度にやや減少したが、2016 年度・2017 年度はそれ以前の水準に戻した。留年者数は減少しつつあるものの、休学者数については依然 30 名台が続いている。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2008	770	16	80	165
2009	779	34	84	166
2010	786	28	79	174
2011	777	30	73	165
2012	780	25	82	170
2013	776	34	79	193
2014	756	36	63	166
2015	768	36	70	165
2016	776	33	69	181
2017	778	30	61	171

2-3. 学部研究生

研究生の総数は、2005 年度より減少傾向が見られるようになり、2009 年度には 10 名にまで落ち込んだが、その後回復し、2011 年度からは 20 名台で推移していたものの、2016 年度には 20 名を割り、再び減少傾向が見られる。留学生は、2011 年度に 20 名に激増したあと、2012 年度を除き、その水準をほぼ維持している。日本人と留学生の比率については 2011 年度以降、留学生数は日本人の 2.5 倍以上、2016 年度・2017 年度については 10 倍弱となっており、留学生の割合が非常に高い。今後も、中国をはじめアジアから多様な宗教・文化を背景にもつ留学生が増えることが予想でき、彼らのための環境作りが重要課題となっている。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2008	7	13	20
2009	2	8	10

2010	9	10	19
2011	8	20	28
2012	6	15	21
2013	5	18	23
2014	5	18	23
2015	5	21	26
2016	2	17	19
2017	2	18	20

(石割 隆喜、データ提供：教務係)

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。室員は文学研究科の教職員からなり、室長、副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱する。室には部門を置き、室長が委嘱した部門チーフを中心に、それぞれ管掌する業務を実務的に進めた。

2014年度までは科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門、懐徳堂部門の4部門が室業務を分掌したが、2015年度、若手研究者支援を強化すべく、あらたに若手支援部門を単独で立ち上げるとともに、図書管理部門、紀要・論叢部門の業務を統合継承する形で図書部門を設けた。この結果、研究推進室の業務は、科研・共同研究部門、若手支援部門、図書部門、懐徳堂部門の4部門が担う体制となった。2016年度、2017年度の室業務も、この体制を受け継ぐ形で行われた。

室の活動は、構成員全員が参加する室会議(原則として教授会開催日の午後)において、必要事項を協議するとともに、各部門が担当する業務について状況を報告し、室員間の情報共有をはかりながら行った。室会議前には正副室長、教務職員からなる実務会議を開催して、室会議の議題整理と室業務執行状況の確認を行った。また、年度計画や達成度評価など重要案件の検討に際しては、室会議に先立ってチーフ会議を招集し、協議の機会を持った。このほか、大阪大学教員出版支援制度の推薦論文選考など特命的な事項については、その都度委員会やワーキンググループを設置して対応した。

活動状況

近年、若手研究者支援、競争的資金獲得および研究公正化等にかかわる業務が急増しており、本室としてもさまざまな新規案件への迅速な対応を迫られている。2016～2017年度に各部門が担当した主要な業務及び活動状況は以下の通りである。

<2016・2017年度>

1. 科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科共同研究の募集・選定をおこない、2016年度は1件、2017年度は3件を採択し、補助を行った。
- 2) 「公開研究会等への補助」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科教員が中心となって開催する各種の公開研究会等の経費補助として、2016年度は7件、2017年度は6件を選定し、補助を行った。
- 3) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供するとともに、各種研究助成プログラムが一覧できるリストを作成して本室のHPに掲載した。
 - ・科研費の応募に関するセミナーを開催するとともに、申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。採択状況は次表の通り。

年度	新規課題			新規課題+継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付件数	交付総額(円)
2016	55	28	51	83	177,130,000
2017	62	37	60	90	177,370,000

- 4) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。
- 5) その他

- ・第二期（2017・2018年度）「文学研究科国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター（人文学クラスター）」の実施要領の策定および選考を行った。
- ・研究科内に設置した「人文学クラスター室」の使用規定に基づき管理運営を行った。

2. 若手支援部門

- 1) 独立行政法人日本学術振興会特別研究員の申請書作成等の補助に関すること
 - ・日本学術振興会特別研究員の応募にあたって、「若手研究者向けセミナー」を2回開催するとともに、申請書類のチェック、面接候補者への模擬面接を実施した。2017年度採用分は申請者60名、採用者14名、採用率は23%、2018年度採用分は申請者44名、採用者10名、採用率は23%であった。
- 2) 若手研究者等の招へい研究員資格審査に関すること
 - ・若手研究者の科研費応募の機会を確保するため、「若手研究者等への招へい研究員資格付与の審査」を行った。
- 3) 大学院学生の調査研究、成果発表等の支援に関すること
 - ・若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、2016年度は選定した10件、2017年度は14件に対して、「外国語論文発表補助」（外国語による論文や口頭発表原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った。
 - ・大学院学生を対象として研究科で創設した「教育ゆめ基金調査研究補助」の助成者の選考を行い、2016年度は国内9件、海外7件、2017年度は国内7件、海外6件の補助を実施した。
- 4) その他
 - ・日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、石橋湛山新人賞の候補者の選考・推薦を行った。

3. 図書部門

- 1) 文学研究科共同施設「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
 - ・学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間開室も実施した。
- 2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
 - ・附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
- 3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること
 - ・収蔵資料の閲覧、特別利用などへの対応を含めて、同室の日常的な管理・運営に務めた。
- 4) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行に関すること
 - ・2016年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第57巻及び『待兼山論叢』第50号、2017年度は『大阪大学大学院文学研究科紀要』第58巻及び『待兼山論叢』第51号を刊行した。
- 5) 文学研究科の刊行物に関連する諸問題の処理に関すること
 - ・定期的に著作権関連の研究会に参加して情報収集を行い、研究科刊行物の編集・発行に際し、助言・アドバイスをを行った。
 - ・文学研究科刊行物へのISBNコード付与の手続きを行った。2016年度・2017年度ともにISBNコード付与件数は1件。

4. 懐徳堂部門

- 1) 文学研究科の附属施設である懐徳堂研究センターの業務に関すること
 - ・2016年度は『懐徳堂研究』第8号、2017年度は同9号を刊行し、研究成果と活動内容をひろく公表した。
 - ・2016年度、大阪大学総合博物館主催、文学研究科・懐徳堂記念会共催で「大阪大学総合学術博物館 第20回企画展 大阪の誇り ―懐徳堂の美と学問―」を開催した。
 - ・2017年度、梅花学園所蔵の中井終子関連資料のデジタルアーカイブ化を実施し、梅花女子大学・凸版印刷㈱との共同主催で関係のシンポジウム（「梅花女子大学所蔵 中井終子日記を通して探るvol.2 懐徳堂研究と女学生文化」）を開催した。

- ・2017年度、懐徳堂文庫資料の文化財指定の方向性を探るため、大阪府教育委員会と協議を行った。
 - ・両年度を通じて、センターHPを随時更新するとともに、懐徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。
 - ・両年度を通じて、学内外からの資料見学、調査依頼等に対応した。
- 2) 懐徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること
- ・両年度を通じて、古典講座、春期講座、秋期講座、見学会等の企画・運営に協力した。
 - ・2016年度は『懐徳』85号、2017年度は同86号の編集・刊行に協力した。また、両年度を通じて、『記念会だより』の編集・刊行に協力した。

5. その他

- ・大阪大学教員出版支援制度（大阪大学出版会）推薦論文選考委員会を組織して選考にあたった。
- ・『文学研究科紀要』『待兼山論叢』を中心に、文学研究科刊行物の大阪大学機関リポジトリ（OUKA）での公表を進めた。
- ・教育支援室と協力して、名誉教授・現役教員の教育研究交流を目的とする「教育研究フォーラム」を企画した。

（浅見 洋二）

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っており、研究評価、教育評価、広報、ネットワークの4部門から構成され、室長・副室長を除く室員全員が、そのいずれかに所属している。研究評価部門は教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント(FD)の実施など、広報部門は各種メディアへの広告掲載依頼、オープンキャンパスの開催、高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科リーフレット』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの運営など、またネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長は副室長とともに、室全体の活動を統括するとともに、全学基礎データの収集、外部評価、メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統括している。また、事務補佐員2名が配意され、室の事務全般を担当している。

(服部 典之)

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. データ収集（年度計画・達成状況と全学基礎データ）

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、評価・広報室長の下、事務補佐員が担当し、その収集、データの整理などを行い「リサーチマップ」に研究業績データを提供した。

また、全学規模の取り組みである「部局別年度計画達成状況」に関するデータを教員と研究室から収集・整理し、報告した。内容からみて他の室の管掌である項目も含まれるが、データを提供する側と収集する側の双方の効率を鑑み、評価・広報室でまとめて収集整理した後、当該部署へデータを提供した。

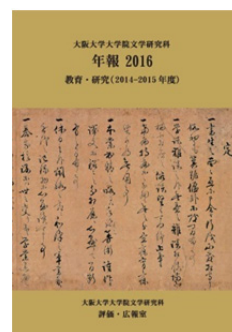
このほか、文学研究科独自のものとして、2016年度および2017年度においても引き続き、専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

(服部 典之)

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2016年度に、過去2年間（2014～2015年度）における教育・研究活動の情報を収集・整理した『大阪大学大学院文学研究科年報2016』（A4判頁。以下、『年報2016』と略称）をPDFファイル形式で刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務部と教育・研究活動に関する情報を共有した（ただし、教員および事務部の責任者には、特別に冊子体にして配布）。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第1部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第2部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前々号・前号に引き続き、過去2年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。なお第1部では、『年報2016』において創設が言及されている「国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター」に関して、その時に動き始めた5件の共同研究がその後順調に進展していることが記されている。



2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報2016』を2016年度に刊行したことを受けて、各専門分野においてその後の改善状況の検証を行った。具体的には次期に刊行予定の『年報2018』に関して、早くも2016～2017年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当

初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『年報 2018』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野における教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。このようにして、点検・評価・改善が連続して実行されていく動きが本格化し、実質性を持った自己点検・自己評価が実現することとなった。

(加藤 正治)

3. 教育評価部門

2016～2017 年度に教育評価部門が実施した KOAN 授業アンケートおよび卒業時・修了時アンケート、また教育支援室と隔年で担当して実施している FD 研修会について報告する。

3-1. KOAN 授業アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014 年度より、学部生を対象とした授業アンケートを新たに実施している。アンケートは 7 項目からなり、文学部共通概説・語学科目・大学院科目などを除く登録学生 10 名以上の講義・演習科目を対象におこなった。2016 年度は、2016 年 7 月 7 日から 8 月 1 日にかけて実施し、608 名から回答を得た(回答率 13.3%)。本年度より年 2 回行うこととし、1 月 10 日から 31 日にかけて再度実施、今回より大学院科目も対象とし、回答率は学部 15.6%、大学院 25.8%であった。2017 年度はさらに集中講義科目についてもアンケートの対象とし、7 月 7 日から 8 月 10 日(学部回答数 848、回答率 15.1%、大学院回答数 262、回答率 27.7%)および 1 月 9 日から 2 月 2 日(学部回答率 14.3%、大学院回答率 25.2%)の期間で実施した。KOAN によるアンケートの回答率は、この間ほぼ一定していると思われる。いずれのアンケートについても、教授会室報告において報告を行った。

3-2. 卒業時・修了時アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014 年度より、卒業・修了生を対象として学習・研究環境全般に関するアンケートを新たに実施している。部門では自由記述を含む 8 項目の質問からなる用紙を作成し、2016・2017 年度においても、それぞれ卒修論の提出期間、論文提出場所に回収箱を設置するかたちでアンケートを実施した。2016 年度は、卒業時アンケート 160 枚(87.4%)、修了時アンケート 71 枚(86.6%)を回収した。2017 年度は、卒業時アンケート 156 枚(92.3%)、修了時アンケートは 81 枚(97.6%)を回収した。

アンケートの結果については教授会懇談会において報告し、討論をおこなった。卒業生・修了生に対しては研究科ホームページにおいて集計結果を報告するとともに、学部・研究科への要望に回答した。

3-3. ファカルティ・ディベロップメント (FD)

2017 年度実施される学部入試において、後期日程入試を廃止して、新たに A0 入試が導入されることを受け、2016 年 11 月 17 日に以下のテーマのもと FD 研修会を実施した。

「A0 入試の実施に向けて—二つの入試セミナー参加報告を中心に—」

評価・広報室 教育評価部門チーフ 加藤洋介

「A0 入試の面接マニュアルの説明」

教育支援室 入試関連部門チーフ 石割隆喜

(加藤 洋介)

4. 広報部門

少子化、大学の差別化、情報流通の拡大の進む現在、大学からの情報発信は重要な課題である。広報部門では、冊子メディア、電子メディア、文学部オープンキャンパス・文学部見学会などを通じて、受験生や社会に向けた情報発信に取り組んでいる。

4-1. 冊子メディア

大阪大学文学部を目指す、ないし、その可能性のある高校生、受験生を対象とした冊子『大阪大学文学部紹介』を毎年

発行している。カラー刷り約 80 ページ、発行部数は 5,000 部程度である。全国各地の高校に送付するとともに、オープンキャンパス・文学部見学会などで配布している。

『大阪大学文学部紹介』は、大阪大学文学部の概要および各専修の教育・研究内容の紹介を中核とし、卒業後の進路に関する情報、在学生や卒業生の声、文学部全教員のメッセージなどを加え、必要な情報を伝えるとともに文学部を身近に感じてもらえる内容にしている。

文学研究科を目指す大学生、社会人に対する広報を目的とした印刷物としては、『文学研究科リーフレット』を発行し、大学院説明会その他で配布している。

また、外国での広報や外国からの訪問者などに対する広報のために、文学研究科、文学部の概要を英文で紹介した『英文リーフレット』を発行した。

なお、冊子ではないが、大学院入試の広報のために、メディアラボのデザインによるポスターの作成もおこなっている。2016 年度、2017 年度においては大学院説明会のポスターを作成した。



文学部紹介 2016-2017



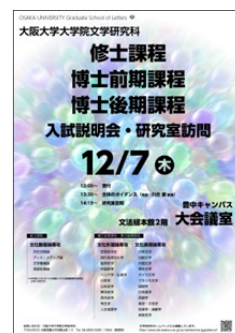
文学部紹介 2017-2018



文化動態論専攻説明会
ポスター



文学研究科
入学者募集ポスター



文学研究科
入試説明会ポスター

4-2. 電子メディア

文学研究科・文学部の公式ホームページについては各種情報の追加、更新を行ったほか、文学研究科における社会人学生募集のためページなどを作成した。

4-3. 外部メディア

文学研究科の広報の一環として、大学院受験情報サイトに文学研究科の情報を掲載するとともに、一般紙に社会人学生募集の広告を掲載した。

4-4. オープンキャンパス・各種見学会

大阪大学の実施するオープンキャンパスの一環として「文学部オープンキャンパス」を毎年夏に開催している。2016 年度は 8 月 9 日、2017 年度は 8 月 8 日に開催した。参加者数は各年とも千人程度である。

「文学部オープンキャンパス」では、大阪大学会館での概要説明会と模擬授業の実施のほか、全専修の研究室を解放し、参加者が教員や学生と交流できるようにしている。また、事務職員や学生による進学、留学、学生生活などに関する各種の相談会も開いている。

オープンキャンパス以外の時期においても、随時高校生の団体による見学希望を受け付け、「文学部見学会」を実施している。「文学部見学会」では、文学部の概要説明のほか、模擬授業を提供している。2016 年度には、大阪府立高津高等学校、島根県立出雲高等学校、大阪府立天王寺高等学校、大阪教育大学附属高等学校平野校舎、清風南海高等学校、大阪府立大手前高等学校、2017 年度には、大阪府立高津高等学校、島根県立出雲高等学校、大阪府立大手前高等学校、和歌山開智高等学校、清風南海高等学校の生徒を対象として見学会を実施した。また、洛星高校、島根県立隠岐高等学校、兵庫県立北摂三田高等学校、熊本県立済々黌高等学校を始めとする高等学校 13 校に教員が出向いて講義等を行った。

(田野村 忠温)

5. ネットワーク部門

5-1. 文学研究科ウェブサイト

基本的に、必要十分なかたちで滞りなく運営できている。特記事項としては、2016年度に英語版コンテンツの拡充に着手した。従来は、基本的に日本語での研究・教育環境であることを理解している留学希望者を念頭に置いたかたちで、最低限の情報のみを記していたが、英語コンテンツ拡充によって、必ずしも留学希望者だけをターゲットとしない、界の研究者コミュニティの中で本研究科の活動に興味を持つ広範な層に潜在的にアピールしうるものとなった。また、2017年度には社会人学生募集のためのページを新設した。これによって、今後の大学・大学院教育にとってきわめて重要な、リカレント教育の充実に向けての準備を整え、また、その重要性を意識していることを対外的にアピールすることが可能になった。

(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/wpe/wpe>)



(輪島 裕介)

5-2. 文学研究科サーバ管理

本研究科が運営する Web サーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、国際的社会連携型人文学研究教育クラスター、人材育成プログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会における IT への依存度が増せば増すほど、各種サーバの安定運用が求められている。ネットワーク部門では、Web サーバやメールサーバが停止することのないように、機器やソフトウェアのメンテナンスを担当している。また外部からのクラッキング、ウィルスメール、無線 LAN の傍受など、インターネットに対する脅威が高まる状況のなかで、セキュリティーを維持する作業もまた、重要な業務となっている。ネットワーク部門では、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバソフトウェアのアップデート作業やセキュリティーホールを埋めるパッチ作業もまた日常の業務として担当している。全学で実施されるセキュリティーチェックを活用して、本研究科のサーバが安全かつ安定に稼働するようつとめている。

5-3. メールアカウント

文学研究科では who@let.osaka-u.ac.jp のアカウントを発行している(サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託し、メールアカウントの発行削除をはじめとする諸管理は、引き続いてネットワーク部門が行っている)。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、教育システムによるメールが使えることから、研究科でのアカウントは発行していない。その結果、メールサーバのリソースを研究科スタッフに割り当てることで、メールサーバの安定した運営をおこなうことができるようになった。一方、メーリングリスト開設の希望は増加している。室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究會運営においても、メーリングリストはもはや不可欠な連絡ツールとなっている。現行のサーバでは、いままで以上に簡便なインターフェイスをつかったメーリングリストの管理が可能となっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、安全かつ安定した運用が求められている。ウィルスメールやスパムメール等を一括で排除するようなセキュリティーサービスの拡充、ならびにサーバのダウンを回避するバックアップ経路をそなえた運用をおこなっている。

サーバの維持およびバックアップ経路の確保については、前節に述べたとおりで、本部の情報推進部と連携することで実現している。またウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムおよび情報推進部のウィルス管理システムと 2 重の監視を介することによって、一定の安全性を維持できている。しかし特定の利用者に向けられたフィッシングメールなどを完全に防ぐことはできないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェック、不審なメールが届いた際の安全な対応などの啓発活動を継続的におこなうことになる。

5-4. ネットワークの維持

ネットワークの不具合や不調はなくなることはない。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどのトラブルの原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等などがあり、その特定は容易ではない。ネットワークトラブルが発生した際には、ネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるような体制を整えている。

近年はネットワークの機械的なトラブルに加えて、不正アクセスやハッキング行為の踏み台に悪用されることも問題となっている。ハッキング行為が発生した際、問題となっているサーバやネットワーク機器を迅速に特定することが求められる。そのための資料として、本研究科のネットワーク台帳を作成し、効率的かつ迅速なトラブル対応に備えている。

(吉田耕太郎)

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、2016年度・2017年度も引き続き、(1)教務・学位関連部門・(2)入試関連部門・(3)学習・生活支援部門・(4)キャリア支援部門・(5)共通教育部門の5つの部門(部門チーフおよび室員)に分かれて業務をおこない、室長(1名)および副室長(2名)で全体を統轄した。

教務・学位関連部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、キャリア支援部門は、室窓口に配置された事務補佐員2名とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、全学教育推進機構との連絡を担当した。

各部門は、教授会開催日に定例会議を開催するほか、教務係、庶務係、会計係とも連携し機動的に日常業務を遂行した。また原則的に月1回、室長、副室長、各部門チーフで構成するチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

室内の学生用スペースでは、2016年度末より事務補佐員を1名から2名に増員して、2名が窓口を担当し、常時学生からのリクエストや相談を受ける体制の充実化をおこなった。これにともない、それまで10時～19時であった開室時間を2017年度より9時30分～19時へと拡大し、17時～19時は学生の事務補佐員を配置してスペース利用の便をはかった。同スペースにはコンピュータ端末8台を設置するほか、キャリア形成関連の新聞・書籍・雑誌などを常備し、求人情報を掲示するなどして、学生のキャリア支援をおこなった。

さらに、事務補佐員により、ミーティングルームの管理、授業用AV機器やノートブック作業に必要なパソコンの貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

活動状況

1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものを中心となるが、2016・2017年度はこれらに加えて、2016年度から始まるAO入試に対して、室長が座長を務めるAO入試ワーキングを組織し、入試関連部門・教務係と連携しながら、AO入試の設計・準備・広報・実施に取り組んだ。また、全学で進めるシラバスの英文化については、2016年度に、教務・学位関連部門と教育担当の副研究科長、教務係が協力して、次年度からのシラバスの英文化を積極的に促した結果、2016年度の文学研究科の英文シラバスが3.2パーセントであったのに対して、2017年度には82.0パーセントまで上昇し、顕著な効果があらわれた。2017年度に新たに導入された4学期制に対しては、年2回の集中講義期間を維持するとともに、ターム科目の設定などをおこなった。

文学部生に対する初年次教育として、2016年度より「文学部共通概説」の計3コマ(1クラス1コマ)を使って、「アカデミック・ライティング入門」を導入した。総合図書館の全面的協力を得て、学術的テーマに関する文献の調べ方や参考文献の書き方など、文学部で学んでいくためのアカデミック・スキルを図書館で具体的に学ぶ授業であり、今後さらに授業内容の充実化をはかっていきたい。また、2017年度「学部学生による自主研究奨励事業」の発表会を開催し、優秀な研究発表をおこった3組をチーフ会議で選抜し、2018年度の文学部共通概説において発表の場を設けることとした。

これまで大学院入試説明会は、キャリア支援部門がおこなう学内向けの大学院進学ガイダンスと、文化動態論専攻が学外向けに実施する専攻説明会だけであったが、大学院志願者の減少という事態に対応するため、2017年にはじめて文学研究科全体の大学院入試説明会を、豊中キャンパスと箕面キャンパスで実施した。今後も継続して開催していきたい。

(川合 康)

2. 教務・学位関連部門

2016年度・2017年度において、教務・学位関連部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下の6点である。

2016 年度：

- ①2017 年度導入の新学事暦（4 学期制）案への対応
- ②文学研究科として支出する 2017 年度非常勤講師枠削減案の策定
- ③2017 年度授業における英文シラバスの導入

2017 年度：

- ①2019 年度導入予定の全学共通教育科目新カリキュラム案への対応
- ②2019 年度創設予定の「学問の扉（マチカネゼミ）」実施案への対応
- ③2019 年度導入予定の新カリキュラムにおける大学院課程の修了要件（専門教育科目、高度教養教育科目、国際性涵養教育科目の単位数の内訳など）の設定

（山上 浩嗣）

3. 入試関連部門

入試関連部門は、これまでどおり教務係と緊密に連携して、大学院入試および関連業務の計画、実施、改善などに取り組んだ。また、引き続き学部入試についても本部門で積極的に対応した。特に 2016 年度・2017 年度は、平成 29 年度入試より導入された世界適塾 AO 入試（平成 30 年度入試からの呼称は「AO 入試」）についても、AO 入試ワーキングと緊密に連携しながら積極的に対応した。

2016 年度・2017 年度における重要な取り組みは、以下のとおりである。

①AO 入試関連の制度設計

平成 29 年度入試より導入される AO 入試に向けて、小論文のあり方、「面接マニュアル」「面接時の留意事項」「面接採点表」を含む面接の具体的内容や実施形態、AO 入試の効果や改善点を検討するための評価項目、「AO 入試に対するアンケート調査」の具体的な進め方等について、AO 入試ワーキングや教育支援室チーフ会議に提案するための原案を作成した。

②入試ミスへの対応

平成 29 年度大学院博士前期課程入学試験（春期）において発生したミスに伴う再試験の実施体制を整えたとともに、同様のミスを防ぐための新たな入試問題チェック体制を検討・整備した。

また 2017 年度には、平成 29 年度一般入試（前期日程）でのミスを受けた再点検（学部編入学試験問題・大学院入試問題）のための体制を整え、実施した。

③豪雪により試験を受けることができなかった受験者への対応

北陸地方の豪雪により平成 30 年度大学院博士後期課程（一般選抜）入学試験を受けることができなかった受験者 1 名のために追試験を実施することとなり、そのための体制を整えた。

（石割 隆喜）

4. 学習・生活支援部門

学習・生活支援部門は、奨学金、TA、インターンシップ、学習・生活相談を主な業務とし、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。

学習・生活相談デスクに寄せられた相談は、2016 年度は 11 件、2017 年度は 21 件であり、2014 年度が 9 件、2015 年度が 5 件だったことを考えると、大幅に増加している。これは相談体制が十分に確立されたことにもよると思われるが、今後動向を注視する必要がある。学習・生活相談以外の活動のうち、以下の 3 点に関して特記しておく。

① FD 研修会

文学研究科では、毎年、教員の教育・研究能力の開発・拡充をはかって FD 研修会をおこなっている。企画及び実施は、



学習・生活相談ポスター

隔年で評価・広報室と教育支援室が担当しており、2017年度は学習・生活支援部門が中心的な働きを担うこととなった。2017年1月の部門会議から内容の検討を始め、種々協議の結果、研究科長経験者である部門員の経験談と、文学研究科元教務係長による事例を元にしたフィクションを中心に、文学研究科の制度に関する情報も加え、学生対応に関してどのような問題があり、どのように解決がなされたか、また対応がうまくいかなかった場合にはその要因がどこにあったのか、解決する手掛かりはどこにあったのかを、それぞれ具体的に提示することとなった。専門家によるレクチャーとは異なり、同僚が経験した具体例はきわめて身近なことと感じられ、また似たような問題を抱える教授会メンバーも多いため、意見交換においては積極的な発言がいくつもなされ、終了予定時刻をはるかに超える、非常に実のある研修会となった。

② ガイダンス

数年前から始められた他大学出身の院生のみを対象とした「他大学から来た大学院新入生のためのガイダンス」を2016年度もおこない、図書館・生協・サイバーメディアセンター等、広く豊中キャンパス内の諸施設を紹介するとともに、文学研究科内の設備・サポート体制について、より詳細な情報提供をおこなった。2017年度はキャリア支援部門と協力し合って、「他大学から来た大学院新入生のためのガイダンス」を拡充し、対象を社会人学生にも広げ、「他大学から来た大学院新入生・社会人新入生のためのガイダンス」を催した。また、ガイダンス後、初めての試みとして懇談会の場を設けたが、非常に盛況であった。両年度とも、ガイダンスの参加者は33名、懇談会の参加者は19名。

③ TA 制度

2014年度より導入が検討されていたTF（ティーチング・フェロー）が、2017年度より本格的に任用されることとなった。TFは、授業の企画・立案に関わり、より高度な補助業務を担当することのできたSTA（シニア・ティーチング・アシスタント）をさらにグレードアップし、従事学生の教育企画・展開能力をより一層育成する目的で導入された。したがって、2016年度は従来通り、JTA（ジュニア・ティーチング・アシスタント）とSTAによって、2017年度はTAとTFによって、TA制度を構成したことになる。

TA任用はさまざまな意味において教育の一環であること、また任用される学生は、受講学生と教員の間という微妙な立場に立つことなどから、学期初めにガイダンスが必要であり、両年度ともに、2度ずつ講習会を開催し、任用学生全員の参加が得られた。なお、STA及びTFは、より密接に教育とかわるため、また任用学生のキャリア形成にも影響が大きいため、学期ごとに学生からは業務報告書、教員からは評価報告書の提出を求め、それらを元にSTA及びTFに関する報告書を作成した。報告書は、「業務報告書の要旨」「評価報告書の要旨」「総評」を内容とし、任用学生及び教員にフィードバックするとともに、研究科におけるTA制度の自己点検に役立てた。

（舟場 保之）

5. キャリア支援部門

① 各種キャリア支援事業の実施

キャリア支援部門は2016年度・2017年度も、「就活サポート講座」（4回連続の就職セミナー）を軸に、各種のキャリア支援事業をおこなった。就活サポート講座については、具体的には、①スタートアップ、インターンシップ対策、自己分析、②文学部生・院生のための業界研究、OB・OGからのアドバイス、③エントリーシート対策、就職内定者の体験談、④模擬面接からなる。近年の傾向として、学部3年生・博士前期課程1年生などを対象とした、インターンシップを重視する傾向にあるので、その対策講座を新たに取り入れた。なお、面接対策については、人間科学部学生支援室と連携して、合同模擬面接やグループディスカッションも別途実施している。

また、2012～2015年度に引き続き、社会人学生教育支援基盤経費より資金を得て、正規の講座とは別に、文学研究科所属の現役の社会人学生および社会人学生修了者にして、社会人学生としての経験談や、就職上の問題点などについてディスカッションをするなど、各種情報交換を促す企画を実施した。そして、2016年度からは新たな試みとして、4月に他大学から来た大学院新入生・社会人学生のためのガイダンスを実施した。現役の大学院生による説明、社会人学生による体験談、大学施設の案内をおこなったのち、昼食会を催して社会人学生の交流をはかった。

さらに、2014年度まで文学部単体主催での合同企業説明会を実施していたが、大学本部および生協主催で実施される同種の企画が多く実施されるようになったことを受け、2015年度より開催を見合わせている。これに代わって、2016・

2017年度も、文学部と関係の深い、あるいは学生の関心の高い業種については、単独で業界説明会を複数回開催した。

②大学院進学ガイダンスの実施

2016年度は4月に、2017年度は5月に大学院進学ガイダンスを実施した。制度面などの説明を教員側から説明した後、本研究科博士前期課程・後期課程の在籍者を講師に招き、それぞれの体験談を語ってもらい、質疑応答をおこなった。これは学部学生に大学院進学後の将来設計について検討を促すもので、大学院進学後のキャリアが多様化している現実を理解させるという点で、たいへん有意義であった。



大学院進学ガイダンス



就活サポート講座ポスター



就活サポート講座

(市 大樹)

6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の全学教育推進機構兼任教員3名で構成されている。うち2名が実施推進部に、1名（教育支援室副室長）が企画開発部に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討するとともに、教育活動が円滑におこなわれるように尽力することにある。

従来、文学部は基礎教養教育科目だけでなく、専門基礎教育科目、現代基礎教育科目、基礎セミナーに多くの開講科目を提供してきたが、2016～17年度には2019（平成31）年度からの新カリキュラムの審議がおこなわれ、新型基礎セミナー「マチカネゼミ」の必修化、基礎教養科目などに替わり文型専門基礎科目の役割も受け継ぐ「基盤教養教育科目」の発足、学部高学年・博士前期（修士）課程における高度教養教育科目の単位取得の義務づけなどの大規模な改編がおこなわれることが決まった。しかも教育職員免許法の改正にともなう教職課程の再認定が2018年度に要求され、2019～20年度の教職科目カリキュラム（専門教育科目だけでなく教養教育科目の一部を含む）がその影響を受けるため、改編作業は複雑をきわめている。そこで機構と文学研究科側関係者との話し合いなどを経て、2017年夏以後に既存科目の置き換えと改廃、高度教養教育科目の選定などの作業が開始され、現在も継続中である。旧教養部からの教員ポストの移行との連動を解消しきれず、しかも専修やブロックの請負制になっている科目負担システムには色々な矛盾があり、たとえば退職教員の不補充にともなう継続開講困難の問題について、本部門として全学教育推進機構と文学研究科の両方の教授会で問題提起をおこなった。全学的な教員定員削減などと連動したこの問題は、全学や研究科レベルで対処する枠組みを作る方向での検討が必要である。

(桃木 至朗)

7. 博物館実習委員会

博物館実習委員会では、毎年、博物館学（館園実習）と博物館学（学内実習）を実施しており、その他にも、学芸員資格取得に必要な科目を開講するために非常勤講師等の任用にかかわる交渉を行っている。館園実習は、2度の事前指導を行った後、2014年度・2015年度ともに大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、高島屋史料館などを受入機関として実施した。実習生の数は、2014年度が31名、2015年度が35名であった。学内実習は、大阪大学総合学術博物館の協力を得て実施した。実習生の数は、2012年度が46名、2013年度が33名であった。

(高橋 照彦)

国際連携室

組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の 4 部門の室員（各部門にチーフ 1 名を配置）、国際交流センター助教 1 名、同事務職員 1 名、および教務系の留学担当職員 1 名で室を構成し、活動を行っている点は、前回の年報報告時と変わらない。室員に関しては、2015 年度に 1 名の増員したが、2017 年度はさらに 1 名増加し、室長、副室長を含め 18 名である。また国際連携室と密接な関係を持つ教員として、2016 年 10 月より、グローバル・ジャパン・スタディーズ担当助教が採用された。

「連携推進部門」は部局間協定の締結・更新・終結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入れ等を行い、海外の研究教育機関との交流をはかることを目的としている。ヘキサゴン（日独 6 大学学長会議）に関する連絡窓口および ISAP プログラムによる教員・学生の交換等についても業務の一部として明確化した。「留学生受入部門」は留学生の受入れと学習・生活支援、タンデム学習プロジェクトの運営等を担当している。「留学助成部門」は、学生の海外派遣に関する業務を行っている。これには、1 年次学生への留学説明会の実施、派遣学生の選考、奨学金受給者の選考、夏期短期英語研修プログラムの運営に関する業務などが含まれる。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、文学研究科が欧州域外フルパートナーとして参加している、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」のコンソーシアムに基づく学生・教員の受入れと派遣、英語コースの運営、事務局との折衝などを担当している。なお、2017 年に同プログラムは新たに採択され、プログラム全体で 3,500,000 euro（4 億 5 千万円程度）の事業費を獲得した（事務局はオランダのグローニンゲン大学に置かれている）。

さらに、国際連携室のもとに国際交流センター（室長および副室長がセンター長および副センター長を兼務）を設置し、学生の海外派遣と留学生の受入れに関わる相談業務、および情報提供、海外からの研究者の受け入れ、海外への研究者の派遣に関する相談業務および情報提供、タンデム学習プロジェクトやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡・調整など、高度な実務を担当している。2016 年 10 月より、芸術棟 4 階に国際交流センターの場所を確保し、上述のグローバル・ジャパン・スタディーズ担当助教、および国際交流センター助教の 2 名が任にあっている。

活動状況

1. 国際連携室全般

国際交流センター付き助教の国際公募を行い、2016 年度から 1 名を採用した。国際交流センターの居室は、芸術棟 4 階に確保することになり、ここに 2016 年後期から採用されたグローバル・ジャパン・スタディーズ担当助教も加わり、従来の国際連携室に加えて、新たに留学生対応の拠点となった。

また 2015 年度より、海外の大学と連携して開催する一連のシンポジウムが開催されてきたが、2016 年度、2017 年度にもそれぞれ 1 件が開催され、成功を収めた。その開催地とテーマをまとめると次のようになる。

2015 年 12 月 ハイデルベルク大学 「江戸庶民文化の諸相」

2016 年 3 月 大阪大学 「開く日本・閉じる日本」

2016 年 12 月 パリ フランス国立東洋言語文化研究所 「モノと文献からわかる古代・わからない古代」

2017 年 12 月 ダブリン トリニティ・カレッジ・ダブリン 「グローバルなコンテキストにおける日本研究」（日愛国交樹立 60 周年記念プログラム）

部局間協定校については、近年拡大に努めてきたが、2016 年度にはトリニティ・カレッジ・ダブリン、建国大学、ゲッティンゲン大学、グローニンゲン大学と新たに協定を結んだ。また 2017 年度にはイーストアングリア大、四川大が増加し、2017 年度末時点で合計 19 校（20 学部）と部局間協定を結んでいる。

正規留学生の獲得に関しては、JASSO 等が主催する留学生対象の進学説明会および日本留学フェア等に、これまで通り教職員を派遣し、文学部・文学研究科に関する広報を行った。

この他に広報活動として、Facebook の国際連携室ページにおいて、引き続き国際交流に関わるイベントの周知、国際

連携室の活動の報告等を行っている。また、研究科の国際交流活動全般を幅広く広報することを目的とした『国際交流 Newsletter』を年 1 回刊行するとともに、在學生に留学を促し、情報提供をするために Let's Study Abroad という小冊子を刊行し配布することも継続している。

この他、学外からの協定締結等に関する問い合わせ、来客への対応、本部からの来客への対応に関する協力要請に応じるなどした。

海外在住私費外国人留学生特別入試に関しては、引き続き国際連携室が主体となって実施している。

さらに、留学生と日本人学生の交流の機会を作ること、留学生の日本語学習、日本人学生の外国語学習を支援することを目的として、引き続きタンドム学習プロジェクトの運営を行っている。また、各学期初めに行う、ランチタイム交流会は盛況で、研究科内外からの参加者を集めている。

留学生に特化した支援としては、引き続き、論文添削アルバイト制度の運用、外国人留学生の研究発表・論文執筆等の情報発信をサポートする事業を予算の許す範囲で行った。また、日本の文化を実体験してもらう機会として、ゆかた教室、着物教室をそれぞれ年 1 回実施している。

日本人学生の海外留学を促すためには、JASSO の海外留学支援制度(協定派遣)に、部局間協定校に学生を派遣する「人文学をグローバルに学ぶ」というプログラムを申請し、多少規模を縮小しつつも、2016 年度・2017 年度とも認められた。また、引き続き、部局独自の奨学金制度として、「教育ゆめ基金を利用した学部学生のための海外留学支援制度」を運用した。さらに、派遣留学生危機管理サービス(略称 OSSMA)が、大学本部において義務化されたことに伴い、派遣留学生に同サービスの加入について情報提供を行う必要が生じたため、国際連携室においてこの作業を行っている。

2. 連携推進部門

1. 上述のとおり、2016 年度にはトリニティ・カレッジ・ダブリン、建国大学、ゲッティンゲン大学、グローニンゲン大学とまた 2017 年度にはイーストアングリア大、四川大と部局間協定を結んだ。

2. 外国人招へい研究員として、2016 年度 19 名、2017 年度 18 名の外国人研究者を海外から受け入れた。

3. ハイデルベルク大学日本学研究所が DAAD の資金によって実施している ISAP プログラムに協力して、2016 年度、2017 年度とも、教員 2 名を派遣し、2 名を受け入れた。派遣教員の確保と日程調整、受け入れた教員による講演会等の企画・運営を行った。また、2016 年度、学生 6 名(各 1 セメスター)を受け入れ、6 名(各 1 セメスター)を派遣した。2017 年度は学生 6 名(各 1 セメスター)を受け入れ、4 名(各 1 セメスター)を派遣した。派遣学生の決定に関して面接を行った。

4. 日独 6 大学学長会議(HeKKSaGOn)の部局担当窓口として、2018 年 4 月に大阪大学で開催されるコンソーシアム会議を準備し、人文社会科学部会シンポジウムの発表者の選定、学生ワークショップの発表者の公募・選考等を行った。

3. 留学生受入部門

1. 従来どおり、正規外国人学部および大学院留学生(国費・私費)、外国人研究生、部局間協定と大学間協定による iExpo、OUSSEP、Maple 各プログラムへの特別聴講学生および特別研究学生の受け入れ関連業務を行った。2016 年度は 27 の国・地域からの 152 名、2017 年度は 33 の国・地域からの 179 名の留学生が在籍した。

2. 在学中の留学生を対象とした業務として、短期留学生の受け入れ教員の選定、各種奨学金推薦者の選考、入学後 1 年以内の留学生を対象としたチューター制度の運用を行った。

3. OUSSEP および Maple プログラムの参加学生に対して、国際連携室長および留学生受け入れ部門チーフへのメールでの連絡の経路を開き、危機管理体制の一部とした。

4. 異なる言語を母語とする 2 人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うタンドム学習プログラムを引き続き運営した。この制度の運用のため、リサーチ・アシスタント(RA)とアルバイトを雇用し、スチューデント・スタッフとして活用した点もこれまでどおりである。2016 年度は、延べ 42 組、2017 年度は延べ 54 組のペアリングを行った。学期末に行っているアンケート調査では、回答者の満足度は高いと判断できる。

4. 留学助成部門

1. 引き続き、協定校への派遣学生の募集・選考に関わる業務を行った。
2. 留学プログラム一覧を掲載したパンフレット Let's Study Abroad をコンパクトな形ではあるが作成、配布した。また、新入大学院生を対象としたガイダンスと学部1年生を対象とした共通概説の授業において、留学に関する情報を提供するとともに、部局間協定派遣の説明会も別途、開催した。
3. 引き続き、リスク・マネジメントの一環として、海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を維持・更新した。また上述の通り、派遣留学生危機管理サービス（略称 OSSMA）の加入について情報提供を行った。
4. JASSO の海外留学支援制度(協定派遣)に、「人文学をグローバルに学ぶ」というプログラムで応募し、2016 年度(2017 年度派遣分)、2017 年度 (2018 年度派遣分) とも採択された。その結果、部局間協定校に派遣する学生 (2016 年度に 5 名、2017 年度に 4 名) に奨学金給付が可能となった。
6. 上記 JASSO の奨学金および研究科独自の基金「教育ゆめ基金」によって運営する協定校への派遣学生に給付する奨学金の受給者の選考を行った。

5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. ユーロカルチャー・マスター・プログラムの学生を 2016 年度は 6 名、2017 年度は 5 名、受け入れた。
2. 5 科目から成る英語授業 Contemporary Japan in the Global Context (3 ヶ月) を計画・実施した。2015 年度より 5 科目すべてを文学研究科の専任教員が担当することとしたが、この方針を引き継ぎ、新たに採用された国際交流センター助教も加わって内容を更新している。また、引き続き、円滑な指導が行えるように各授業に STA (2016 年度)、または TF (2017 年度) を配置した。
3. カリキュラム外の活動として、希望者には日本語学習のサポートを行った。
4. 生活・学習両方が問題なく進められるよう、ビザ申請等の各種手続き、宿舎の手配等、生活面に関わるサポートをおこなうとともに、来日直後にガイダンスを行った。
5. 大阪大学の学生のユーロカルチャー・マスター・プログラムへの派遣 (推薦) について、学内で説明会を実施して、応募者の選考を行った。2017 年度に 1 名を派遣した。
6. 2016 年度に 2 名の教員が来学し、次期プログラムへの申請について研究科長を交えて会合をもった。2016 年度 2 名、2017 年度に 1 名の教員をコンソーシアム内の大学に派遣した。
7. コンソーシアム校の担当者が集まって行われるマネージメント・ミーティングに 2016 年度 2 名 (オロモウツ)、2017 年度 2 名 (クラクフ) の教員を派遣し、運営上の問題や今後の方針に関する協議に参加した。

(伊東 信宏)

国際交流センター

組織・体制

国際連携室のもとに国際交流センターを設置している。

国際交流センターは、センター長1名（国際連携室長兼任）、副センター長1名（同副室長兼任）、助教2名、職嘱託職員1名で構成され、それに留学生専門教育講師1名が加わって、オリエンテーション、親睦パーティーといった各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムやISAPプログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携して留学生および招へい研究員の受入れサポートなど、国際交流に関する様々な業務を担当している。また、助教および事務職員は、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。

留学生専門教育講師は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

活動状況

1. 留学生相談・留学相談

国際交流センターでは、①留学生の学習・研究や生活についての質問・相談、②留学に関する質問・相談などに対応している。相談・質問等での訪問回数は、延べ2016年度約400、2017年度約540。

①留学生の学習・研究に関する相談・質問は留学生の種別によって異なる。交換留学生においては、授業登録や単位の取得、成績についての質問が多く、研究生や正規生では、大学院入試、奨学金の応募情報についての一般的なことから、研究の方法や学位論文について、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまでより幅広い質問・相談が寄せられる。長期にわたって在籍する正規生に特徴的な、休学・退学・転学といった修学制度については、教務係と連携のうえ対応している。また、例年特定の時期に寄せられる生活上の問い合わせとしては、在留資格の延長・変更手続きといった手続き、あるいは、生活用品の入手・処分方法や引越しに関する問い合わせがある。ときおり寄せられるのが医療機関の受診についての問い合わせである。質問・相談内容によって即答・即決がむずかしい場合は、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対処する、3. 「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」（留学交流に携わる学内の教職員で組織、年4回定例ミーティングを開催）を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方に対応している。

②2016年から2017年にかけては部局間協定校の新規締結・更新が10件あった。協定校への留学に関する質問・相談も増加傾向にある。教務係を通じて本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図り、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。質問・相談内容は、留学先の選び方、申請時期等のスケジュール、交換留学等で利用・申請可能な奨学金、留学先の大学に提出すべき書類（申請書や推薦書）、ビザ申請・取得手続などについてである。

2. その他の支援活動

1. 新規入学の留学生には在籍する研究室の学生がチューターとして配置されている。留学生が日本での、とりわけ、文学部・文学研究科での学生生活になじむためのサポートができるよう、チューターの新規採用者を対象に説明会を実施している。また、学位論文執筆者は、日本語の添削を目的とする「論文添削アルバイト」の制度を利用することが出来る。

2. 国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語や英語でのプログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、留学生を対象とした学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、必要に応じて申込み手続等を補助した。

3. エラスムス・ムンドゥス・プログラム、ISAPプログラムといった研究科で運営するプログラムについて、関係部門や事務部と連携しつつ、プログラムの運営をサポートした。

4. 学生派遣については、交換留学や短期語学研修、学内で実施されているプログラムをはじめ、海外の研究・教育機

関への留学を希望する学生に関連情報を提供した。海外留学オリエンテーションや各種プログラムへの参加者を募るとともに、必要に応じて応募書類の作成補助などを支援した。また、交換留学に参加する学部学生が対象の留学支援「ゆめ基金」において、学生への募集案内から留学助成金の支給までをサポートをした。

3. 年間行事

留学受入れに関連しては以下の行事を実施した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション（各年4月・10月）
- ・タンデム学習（各年前期・後期）
- ・チューター説明会（各年4月・10月）
- ・浴衣教室（各年7月）・着物体験教室（各年12月）

学生の留学支援については説明会を開催した。

- ・留学説明会（各年5月）
- ・Erasmus Mundus Euroculture 奨学候補生説明会（各年10月）
- ・留学助成金「ゆめ基金」募集案内（各年5月・1月）

留学生だけでなく、文学部・文学研究科の学生、教職員との交流の機会として以下の企画を実施した。

- ・ランチタイム交流会（各年4月・10月）



留学説明会 2017年5月



新入生オリエンテーション 2016年10月



着物体験教室 2016年12月



ランチタイム交流会 2016年10月



ゆかた体験教室 2016年7月

4. 広報活動

文学部・文学研究科で実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流ニューズレター』を年1回刊行した（7号、8号）。また、文学部・文学研究科の学生が申請・利用できる留学・研修についての情報をまとめた冊子「Let's study abroad」を作成した。

(CHUNG AEMEE)

客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

出身国	2016年度		2017年度	
	人数	受け入れ講座	人数	受け入れ講座
中国	11	日本文学・国語学 5、中国文学 4、日本語学、東洋史学	7	日本文学・国語学 2、東洋史学 2、中国文学、音楽学・演劇学 2
韓国	1	日本文学・国語学	1	日本学
台湾			3	日本語学 2、中国文学
イギリス	1	日本学	1	日本学
アメリカ			1	西洋史学
ドイツ	2	西洋史学、倫理学	1	倫理学
チェコ	1	日本史学	1	日本史学
イタリア	1	西洋史学		
ロシア			1	日本語学
タイ			1	哲学・思想文化学
シンガポール	1	音楽学・演劇学		
日本(海外在住者)	1	国際交流センター	1	国際交流センター
合計	19		18	

2. 教員の海外研究活動

	外国出張		海外研修	
	2016年度	2017年度	2016年度	2017年度
	31ヶ国・地域 延べ 105名 (116件)	17ヶ国・地域 延べ 118名 (129件)	10ヶ国・地域 延べ 13名 (13 件)	9ヶ国・地域 延べ 8名 (11 件)
中国・香港	11・2	17・1	2	
韓国	14	16	2	1
台湾	4	10	2	1
タイ	3	3		2
シンガポール	1	3	1	1
マカオ	1			
ベトナム	3	3		
フィリピン	2	1		
カンボジア		1		
インドネシア		4		
インド	3	2		
アメリカ	8	13		
カナダ	1	1		
オーストラリア	6	5	1	1
ニュージーランド		1		
イギリス	9	8	1	1
フランス	10	1	1	
ドイツ	8	9	1	2
チェコ	4			
オーストリア	3	2		
オランダ	2	1	1	
アイルランド		4		
北アイルランド		1		

スイス	2	1		
イタリア	5	2		
スペイン	2	2		
ポルトガル	2	2		
ギリシャ	1			
クロアチア				1
スロバキア				1
スロベニア	1			
ハンガリー		1		
ポーランド	1	3		
ロシア		1		
スウェーデン	3	3	1	
フィンランド		1		
ノルウェー		1		
デンマーク	1			
ベルギー	1			
トルコ	1	1		
イスラエル		1		
エチオピア		1		
ブラジル		1		
ペルー	1	1		

留学状況および留学生の受入れ状況

1. 留学状況

学生派遣

2016年度 留学等による派遣は39名。(2016年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

2017年度 留学等による派遣は42名。(2017年2月1日付け、休学事由「留学」を含む)

研究科							
課程	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年	3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2016年	10	1	4	6	0	2	1
2017年	13	4	1	2	1	1	0
学部							
学年	4年	3年	2年				
2016年	7	9	1				
2017年	12	6	1				

渡航先	件数	
	2016年	2017年
ドイツ	6	10
中国	6	3
フランス	5	8
アメリカ	4	3
イギリス	3	4
カナダ	3	1
チェコ	2	2
フィリピン	1	0
台湾	1	1
ベトナム	1	0
インド	0	1
インドネシア	1	1
スリランカ	0	1
アイルランド	0	1
ハンガリー	1	0
スウェーデン	0	1
フィンランド	0	1

スペイン	1	1
イタリア	1	0
オランダ	1	1
オーストリア	1	2
オーストラリア	1	0
合計	39	42

大学で実施されている語学研修等参加者

	エセックス		モナシュ		グローニンゲン		その他		合計	
	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部
2016年			1	1		3	1	1	2	5
2017年	1	4		1	1		5	1	7	6

2. 留学生の受入れ状況

留学生受入れ

課程		研究科						
		博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年		3年	2年	1年	2年	1年	2年	1年
2016年		15	10	4	15	24	1	1
2017年		24	4	9	25	13	1	6

学年		学部			
		4年	3年	2年	1年
2016年		6	7	4	9
2017年		7	4	8	8

		研究科			学部	
		研究生	特別研究学生	特別聴講学生	研究生	特別聴講学生
2016年	合計	8	2	9	21	16
	部局間		1	8		
	大学間			1		31
	協定外		1			
2017年	合計	10	5	11	27	26
	部局間			7		1
	大学間		2	4		25
	協定外		3			

OUSSEP, Maple 学生の受入れ

	プログラム	OUSSEP		Maple	
		研究科	学部	研究科	学部
2016年	合計	5	7	3	8
	部局間				
	大学間	5	7	3	8
2017年	合計		14	3	8
	部局間				
	大学間		14	3	8

留学生の出身国・地域（OUSSEP, Maple を除く）

	2016 年度	2017 年度
	出身国・地域 27	出身国・地域 33
中国	57	83
香港	1	1
韓国	36	44
台湾	19	9
タイ	1	2
フィリピン		1
インド	2	
アメリカ	3	2
カナダ		1
メキシコ	1	1
アルゼンチン	1	1
イギリス	2	5
フランス		1
ドイツ	4	6
イタリア	1	1
スペイン	1	1
スイス		1
ブルガリア	2	
オランダ	1	3
オーストリア	2	1
デンマーク	1	1
ポーランド		1
チェコ		1
スウェーデン	2	1
ノルウェー	1	1
ベラルーシ	1	1
リトアニア	2	2
ボスニア・ヘルツェゴビナ	1	1
イラン	2	2
ロシア	5	6
シンガポール	1	1
オーストラリア		3
ニュージーランド	1	1
エジプト	1	1
モンゴル		1
合計	152	188

留学生の博士学位取得

留学生（元留学生）の博士号取得

専門分野	2016 年度	2017 年度
日本学		2
国語学		1
日本語学	3	1
考古学		2
美学・文芸学		1
計	3	7

(CHUNG AEMEE)

ここ数年大幅に運営費交付金が減らされているため教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業（以下「科研費」という。）の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科研費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
件数	94	108	121	128	127	122	114	124
増減	1.02	1.15	1.12	1.06	0.99	0.96	0.93	1.09
金額(千円)	161,560	181,930	188,017	202,700	199,850	193,400	169,255	166,304
増減	1.03	1.13	1.03	1.08	0.99	0.97	0.88	0.98
科研費予算総額 (億円)	2,000	2,633	2,566	2,381	2,276	2,273	2,273	2,284
増減	1.02	1.32	0.97	0.93	0.96	1.00	1.00	1.00

本表には表示されていないが、科研費の取得件数は、2006年度から上昇しているが2013年度をピークに減少傾向にある。また、2011年度に科研費の一部が基金化されたため一時的に全体の予算総額が大幅に拡大するも翌年から微減している。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
特定領域研究件数	1	0	0	0	0	0	0	0
同金額(千円)	7,300	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究(A)	4	8	8	8	10	8	7	7
同金額(千円)	37,600	58,600	57,800	62,700	69,700	64,400	42,900	41,100
基盤研究(B)	14	14	16	15	13	13	10	12
同金額(千円)	50,400	44,400	49,200	42,700	37,650	37,100	30,000	34,500
基盤研究(C)	31	31	39	43	44	40	31	37
同金額(千円)	27,600	29,600	38,867	44,800	42,900	39,900	30,093	34,300

基盤研究(A)は、2010年度までの取得数は4、5件ほどであったが、2011年度から8件に倍増し現在においても高い水準を維持している。なお、特定領域研究は2008年度より新規募集を行ってない。また、基盤研究(B)は、2009年度から件数・金額とも減少に転じ、2012年度には一旦上昇したものの2013年度から減少、2016年度に底を打ち、2017年度はやや回復した。このほか、基盤研究(C)については、2009年度以降2011年度までは横ばいであったが2012年度から2014年度まで上昇、2015年度からは減少傾向となったが、2017年度にやや回復した。

2. その他の外部資金

科研費以外の外部資金も極めて重要である。2013 年度から文化庁の文化芸術振興費補助金（大学を活用した文化芸術推進事業）を取得し、劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業を3年間行った。また、2015 年度以降、国立大学改革強化推進補助金（優れた若手研究者採用拡大支援）を受け、優れた若手研究者を4名採用することができた。また、同年始めて民間等との共同研究が始まった。なお、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。

種類	件数と金額	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度
グローバル COE	件数	1	1	—	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	3,400 ¹	1,050 ¹	—	—	—	—	—	—
組織的な若 手研究員等 海外派遣プロ グラム (OVC)	件数	1	1	1	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	28,697	30,558	25,109	—	—	—	—	—
優秀若手研 究者海外派 遣事業	件数	—	—	—	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	—	—	—
研究拠点形 成費等補助 金(海外先進 研究実践支 援) ²	件数	—	—	—	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	—	—	—
頭脳循環を 活性化する 若手研究者 海外派遣プロ グラム	件数	1	1	1	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	11,574	23,797	20,347	—	—	—	—	—
国宝重要文 化財等保存 整備補助金	件数	—	1	1	1	—	—	—	—
	金額 (千円)	—	15,000	7,600	4,000	—	—	—	—
卓越した大学 院拠点形成 支援補助金 (研究拠点形 成費等補助 金(若手研究 者養成費))	件数	—	—	1	1	—	—	—	—
	金額 (千円)	—	—	10,640	7,650	—	—	—	—

国立大学改 革強化推進 補助金(優れた若手研究者採用拡大支援)	件数	—	—	—	—	—	3	3	2
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	34,171	18,440	14,194
文化芸術振 興費補助金 (大学を活用 した文化芸術 推進事業)	件数	—	—	—	1	1	1	—	—
	金額 (千円)	—	—	—	10,000	15,000	21,792	—	—
各種財団など からの研究助 成金	件数	6	5	3	4	5	8	8	5
	金額 (千円)	4,930	3,243	2,539	3,164	2,828	7,651	12,091	3,386
大学院生の 獲得している 研究助成金	件数	22	17	21	43	50	42		
	金額	10,255 千円 2,000 豪ドル 8,100 ユーロ	7,572 千円	12,426 千円	13,512 千円	30,211 千円	26,522 千円 283,220 ハンガリー フォリント		
預かり個人交 付補助金(国 文学研究資 料館共同研 究)	件数	—	—	—	—	1	1	1	1
	金額 (千円)	—	—	—	—	1,400	1,800	450	150
受託研究	件数	1	1	0	2	1	2	1	1
	金額 (千円)	1,950	1,870	0	4,794	4,398	3,154	1,430	10,348
共同研究	件数	—	—	—	—	—	1	1	1
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	1,000	1,000	300

1 文学研究科教員獲得分

2 大学教育の国際化推進プログラム

2008年4月よりエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」の圏外協定校としての活動を始めたが、2011年10月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の3つの圏外協定校(メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ=パーデュ大学インディアナポリス)とともにプログラムの運営により深く関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学もパートナー校として参加しており、世界的な規模で展開されている最先端の教育プログラムであるといえる。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室は、同室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門(EM部門)、RA2名とともに、同プログラム運営を担当している(受け入れる学生および教員の宿舎の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会開催と面接選考実施、本学からの教員派遣等)。例年10月~12月の3ヶ月間、同コンソーシアムの学生最大5名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業5科目を10回にわたって開講し、25ECTS(10単位相当)を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加している。授業を行う際には双方向性を重視しており、各授業内においてフィールドトリップも実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員1~2名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの4校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2016年度は、コンソーシアム大学から6名の学生を受け入れた。また、本研究科から2名の教員(橋本准教授と田中均准教授)を派遣した。6月には、チェコのアオロモウツで開催されたコンソーシアム全体会議に本研究科教員2名(宇野田准教授と上野教授)が参加し、プログラム運営の改善策について集中的に審議した。

2017年度には、コンソーシアム大学から5名の学生を受け入れ、本学から1名を推薦した。また6月にはクラコフ(ポーランド)で開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員2名(宇野田准教授、丁愛美助教)が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

(宇野田尚哉)

記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座 「記憶の劇場」「記憶の劇場Ⅱ」

目的と概要

本プログラムは、大阪大学総合学術博物館を主な舞台として、近隣の劇場・音楽堂・美術館等とも共同し、主として社会人のための文化芸術ファシリテーター養成講座を推進することを目的として開催した。また、これまで博物館が収集、維持保存し、またその研究に努めてきた、過去の様々な遺品、記念品、芸術作品、文献資料、民族資料などの「ミュージアム・ピース」を「生きたアート」として現代市民社会に開いていくことも志向した。同時に、大学博物館としての強みを生かし、文理融合的あるいは基礎研究的な潜在力と連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求していくこともねらいとした。このような大学博物館や大学の潜在力を活用しながら、「ミュージアム・ピース」と「生きたアート」を統合する文理融合能力のある総合的な文化芸術ファシリテーターを実践的に育成することをねらいとして、平成 28（2016）年度および平成 29（2017）年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」に申請し、採択された。ここでは、平成 28 年、平成 29 年度の 2 年間にわたって実施した事業について簡単に報告する。なお、本プログラムは、3 年計画のもので、最終年度となる 3 年目の平成 30 年度にも採択が決まっている。

この事業は、大阪大学総合学術博物館が主催し、大阪大学文学研究科と共催して推進するプログラムである。大阪大学総合学術博物館と大阪大学文学研究科芸術系ブロックの教員が中心になり、能勢浄るりシアター、吹田メイシアター、尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）、ザ・フェニックスホール、大阪新美術館建設準備室（当時、現在は大阪中之島美術館準備室）といった芸術諸機関と連携して実施する。また、それらの芸術諸機関からアドバイザーを迎え、事業担当者とともに「大学博物館を活用する芸術文化ファシリテーター育成連絡協議会」を組織し、プログラム全体を監督し、評価に努めた。「大学博物館を活用する芸術文化ファシリテーター育成連絡協議会」は、初年度の平成 28 年度には年 1 回、平成 29 年度には年 2 回開かれ、計 3 回の会議にて、アドバイザーから具体的に専門的な助言をうけた。

1 年間のプログラムを集中して学習できるように、1 年を 3 期に分けた。それぞれ、第 1 期を全体的な理念、学知を学ぶ座学中心の学習期間（活動①）、第 2 期を各事業担当者の推進する事業への配属をして具体的な研修を行う期間（活動①～⑦）、第 3 期を 1 年間の研修成果を大学博物館において展示・上演する期間（活動①）とした。

研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々や働くことを希望する社会人などを中心にして広く公募し、2 年間で約 101 名を受講生として受け入れた。受講生は、各種セミナーやワークショップを受講し、各事業担当者的実施する活動（②～⑦）に専属することで、専門的な知識を得るとともに、各種イベントに実践的にかかわり、共同作業をすることで、様々なプログラムを受講した。また、1 年の最後には成果発表の場として展覧会を開催し、その企画運営には受講生が携わった。受講生が受講した研修科目は、以下の通り。

活動①「記憶の劇場—オープニング講座」（2016 年度・2017 年度）、活動①「セミナー「大阪の記憶と未来」（2017 年度）

各活動を統括するものとして、オープニング講座を開催した。この講座は、(A) 本事業全体のオリエンテーション、(B) 各事業担当者によるガイダンス、(C) 総合学術博物館見学から構成された。この講座によって、本事業の理念（「ミュージアム・ピース」と「生きたアート」を統合する文化芸術ファシリテーター育成）と「社会と大学との協奏を生かしたリサーチ型ミュージアムの探求」を共有した。また、活動②～⑦の各活動の趣旨やねらいの下で各活動に受講生と事業担当者がどう関わるかを確認し、年度末の展覧会に向けて総合学術博物館を見学した。また、2 年目にあたる 2017 年度には、新たに「セミナー「大阪の記憶と未来」・博物館オリエンテーション」を実施した。このセミナーは、大阪新美術館建設準備室の協力のもと開催され、大阪の芸術活動に焦点をあてて、文化芸術拠点としての大阪の将来を考察した。また、大学博物館での博物館オリエンテーションも開催し

た。受講生は、座学にて展覧会実施における実践的な経験やスケジュール管理などについて学習し、博物館実習にて博物館展示に必要な実践的な技術を体験した。

活動②「地域文化の検証・発信とメディアリテラシー」(2016年度・2017年度)

大阪の都市文化・芸術に関するセミナーと現地でのフィールドワークを行い、受講生自らが大阪という地域の文化を、固定化されたイメージにとらわれず発信するワークショップを行った。2016年度には「大阪の川」を、2017年度には、大阪が培ってきた文化的価値を、「大阪の橋（「浪花八百八橋」）」をテーマとした。講座は、レクチャーと街歩き見学ツアー（2016年9月18日、2017年9月10日）、乗船による水上からの大阪の街への理解と船上解説（平成28年10月2日、2017年9月30日・12月17日）を中心に開催された。さらに、大阪という街への歴史的、地理的理解を深めるため、SPレコードコンサートや受講生による企画「中之島おむすびプロジェクト」も実施した。最終的には受講生の手による小冊子を2年間で計9冊作成した。

活動③「自然科学に親しむ・触る・アートする」(2016年度・2017年度)

理系研究者の視点、特に自然科学の中でも化石・鉱物のアートとしての魅力を紹介すると同時に、その科学的視点からも考察した。具体的には、鉱物標本を結晶学的な視点からだけでなく、結晶の美しさをアートとして表現する実習を行った。2016年には、化石標本を利用する学習として、マチカネワニ化石を中心にした実習を展開した。2017年には、鉱物の展示方法や鉱物図鑑を作成する過程などを中心に講習を進めた。特に2017年11月18日には、受講生が企画した講義「図鑑の一生」において、編集者や鉱物の専門家などと活発な意見交換と議論を展開した。その成果や講座での写真ワークショップを活かし、ガイドブックとしても効果的に機能する鉱物図鑑「GOKAN」を作成した。

活動④「オペラ『新しい時代』をめぐるワークショップ」(2016年度・2017年度)

2000年に初演された三輪眞弘氏のオペラ『新しい時代』を再演することを目指し、2016年度にはオペラへと結実していく原型的作品やオペラの素材から派生した作品などを集めた演奏会「声のような音／音のような声」を企画・実施し、2017年度にはオペラ上演の再演を実現した。2016年はオペラの創作過程や作品への理解をトークセッションやリハーサルを通じて学習し、12月25日に演奏会を開催した。演奏会では、キーボード奏者を受講生2名が担当した。2017年には、勉強会（10月7日）やリハーサル見学（12月2日、3日）を通し、さらに作品の理解を深め、12月8日、9日には愛知県立芸術劇場にて、12月16日にはあいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホールにてオペラを上演した。オペラ公演は、2017年度佐治敬三賞（サントリー芸術財団）を受賞するなど、大きな反応を得た。

活動⑤「パフォーミング・ミュージアム Vol.1」(2016年度)・「パフォーミング・ミュージアム Vol.2」(2017年度)

文学研究科演劇学研究室に寄贈され、現在大学総合学術博物館に寄贈されている「森本薫関係資料」(2016年度)および「劇団くるみ座関係資料」(2017年度)を取り扱い、調査・研究を重ねて、上演を行った。講座の内容は、資料閲覧と説明・解説（2016年10月15日、2017年9月9日）と、シンポジウム（2016年11月12日）および演劇ワークショップ（2016年12月4日、2017年9月30日）を中心に行った。それらの成果を活用し、上演に向けて準備を進めた。上演にあたっては、演出家山口浩章が資料をもとに上演台本を作成して演劇作品をつくり、受講生は制作業務（チラシ作成、広報、稽古運営、仕込み、鑑賞申込受付、招待者対応その他）を行った。一部の受講生は演劇作品に出演した。上演は、2017年3月4日と2017年12月16日・17日の計3回開催され、盛況であった。

活動⑥「紛争・災害の TELESOPHIA」(2016年度)・「旅・芸の TELESOPHIA」(2017年度)

時間的または空間的に遠い (=TELE) 知識やわざ (=SOPHIA) が現代の私たちにどのように伝えられているの

かを、2016年度には震災（主に阪神淡路大震災）を、2017年度には旅（移動）を伴う芸をテーマとして調査・考察した。また関係する人々がどのように携わり、協力しているのかを探り、座学やワークショップにて内容を深め上演や展示などの方法で成果を公開した。2016年度には2017年2月26日に「1995年1月17日のAM神戸を朗読する」という上演を、2月27日には震災の映像の上映会を、3月3日には受講生企画による「震災カフェ」を開催した。2017年度も同様に、芸能の鑑賞や講義などを実施し、受講生による企画（2017年1月21日 トークイベント「劇場とは何だろう？－伝統芸能と劇場の関係を考える」、3月10～12日ちんどん通信社による宣伝・上演・解説）を実現した。

活動⑦「ドキュメンテーション／アーカイヴ」（2016年度・2017年度）

本プロジェクトでは、パフォーマンスアーツを地域の文化遺産としてドキュメンテーション／アーカイヴしてゆきながら、その実践を通してアートのドキュメンテーション／アーカイヴの可能性を探った。2016年度には、記録を「つくる」と「つかう」ふたつのアプローチから、公演の前後のプロセスを受講生の計画と着眼で記録したり、演劇作品における個人の記憶と歴史を様々な視点で深めるワークショップを行ったりして、パフォーマンスアーツの価値の継承を考えた。2017年度も2つの企画からなり、地域の多文化性に取り組む演出家や国際的な評価の高い活動を続けるNPO法人、都市論と移民に焦点を当てた作品を創ってきた劇団と連携し、実践的なスキルを身につけながらパフォーマンスアーツの継承と創造の可能性を探った。

活動⑧「クロージング・エキジビション「展覧会ー記憶の劇場」

具体的で実践的な講座を展開した、活動②～⑦の成果をもとに、年度の最後には、大阪大学待兼山修学館において展覧会を開催した（2016年度：2017年2月27日～2017年3月11日、2017年度：2018年2月27日～2018年3月16日）。この展覧会は主に受講生によって企画運営され、1年間の活動内容を表すとともに受講生の講習成果を発表する機会となった。展覧会には、のべ1222名の来場者があり、好評であった。また、両年度の展覧会最終日には、クロージング・シンポジウムを開催し、受講生が1年間の活動内容や学びなどについて口頭発表を行い、事業担当者、受講生、来場者とともに質疑応答、意見交換を行った。

成果と将来

受講生は、全体を統括するセミナーと、各事業担当者が推進する実践的な活動に専属して参加するとともに、具体的な成果（冊子作成、写真・映像撮影、公演の制作、イベントの企画運営など）をあげながら、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。活動への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し2年間でのべ68名の受講生に修了証を授与し、アートマネジメント人材を育成した。

アートマネジメント人材育成の目標として、「ミュージアム・ピース」を「生きたアート」として現代市民社会に開いていくことや大学の研究力を活用する「リサーチ型ミュージアム」設定した。また、特定の分野のみではなく、多様な芸術ジャンルにも対応できる人材育成を行うこととした。本プログラムでは、2年間で約7割の受講生に修了証を授与することができた。この3年間の事業は、初年度は準備期間、2年目を発展期間と位置付けた。3年目にあたる2018年度にもプログラムを開催することになっており、3年間の成果を外部へ還元すべく「記憶の劇場 芸術祭」の開催を予定している。育成事業としても、それぞれの活動において受講生に



よる企画が生まれており、実現し運営まで担っており、育成事業として実りの多いものとなった。

3年間の事業終了後は、これまでの経験を土台として、文化芸術ファシリテーター育成の教育的経験をさらに大学の研究教育に活かしていくために、文学研究科や総合学術博物館の芸術政策論関連の授業や公開講座に組み込んで行く。文学研究科が主催し、総合学術博物館と共催して、文化庁「大学における文化芸術推進事業」に申請した新しいプログラムを実施する予定である。また、社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探求すべく、大阪大学の芸術・アートを活用した社会学連携の拠点とする計画である「中之島アゴラ案」において、芸術の教育プログラムの中での展開を計画している。これらの事業により、社会学連携的な芸術文化事業を展開していく。

(永田 靖・山崎 達哉)

文学研究科は、2017年度から、全学に対し、大学院等高度副プログラム「グローバル・ジャパン・スタディーズ」の提供を始めた。プログラムの詳細は下記の通りである。なお、本プログラムの英語科目の担当者はコバヤシ・ヤスコ助教である。

プログラム名	グローバル・ジャパン・スタディーズ	
プログラム実施部局	文学研究科	
履修対象者	修士・博士	
修了要件	10単位以上	<p>下記①のうち1科目2単位を選択必修とします。</p> <p>下記②のうち1科目2単位を選択必修とします。</p> <p>下記③の5つの分野の3つから1科目2単位ずつ履修するものとします。</p> <p>以上の条件を満たして10単位以上修得していることを修了要件とします。</p>
趣旨・概要	<p>研究/教育のグローバル化にともなって、日本には海外からますます強い関心が寄せられています。そのような関心に有効に応えるためには、学問分野ごとに深められてきた日本研究の成果を総合し、全体像を把握しやすいかたちで提示する必要があります。また、日本研究の成果を英語で発信する能力を高めることも不可欠です。本プログラムは、そのようなグローバル化時代の要請に応える新たな日本研究プログラムとして設置されました。</p>	
到達目標（修了時に身に付く能力）	<p>本プログラムでの学習を通して、以下の能力を備えた方に修了認定証を授与します。</p> <p>(1)複数の分野の日本研究の最新の成果を理解している。</p> <p>(2)海外の日本研究の最新の動向を踏まえて議論することができる。</p> <p>(3)日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけている。</p>	
カリキュラムの構成	<p>上記(1)～(3)の到達目標を達成するため、3つの科目群（下記①～③）を設け、さらにそのうちの1つは5つに下位区分して、系統的かつ効果的な学修を促します。</p> <p>(1)下記③のうち、異なる分野（1～5）の授業を3科目6単位履修するものとして、日本についての多面的・総合的理解を促します。</p> <p>(2)下記②の授業を選択必修とし、海外の日本研究の動向を踏まえて議論する能力を高めます。</p> <p>(3)下記①の授業を選択必修とし、日本研究の成果を英語で発信するための基礎的なスキルを身につけます。</p>	
履修資格・条件	<p>グローバルな観点から日本を研究し、その成果を積極的に発信したいという意欲を持つ学生を歓迎します。</p>	
前提知識の目安	<p>日本研究のいずれかの分野で学部レベルの知識を身につけていることが望ましい。</p>	
特記事項	<p>本プログラムは、2年間のプログラムとします。</p>	

構成科目							
時間割 コード	授業科目名	単位数			開講学期 (4学期制)	開講部局(課程)	備考
		必修	選必	選択			
204750	Academic Skills for Humanities 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204751	Academic Skills for Humanities 2		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	①英語のアカデミック・スキルを学ぶ科目
204752	Issues in Contemporary Japanese Studies 1		2		春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204753	Issues in Contemporary Japanese Studies 2		2		秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	②英語による講義
204754	世界のなかの日本史 I			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③-1 歴史
204755	世界のなかの日本史 II			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-1 歴史
204756	世界文学のなかの日本文学 I			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③-2 文学
204757	世界文学のなかの日本文学 II			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-2 文学
204758	日本語の歴史			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-3 言語
204759	現代日本語の諸相			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③-3 言語
204760	世界のなかの日本美術			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-4 芸術
204761	世界のなかの日本演劇			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-4 芸術
204762	現代日本のポピュラー音楽			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-4 芸術
204763	日本の民俗と宗教			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③-5 文化・社会
204764	日本の社会と思想			2	春～夏学期	文学研究科 (博士前期)	③-5 文化・社会
204765	異文化交流のなかの日本			2	秋～冬学期	文学研究科 (博士前期)	③-5 文化・社会

(宇野田 尚哉)

大阪大学文学研究科では、世界に開かれた人文学研究を推進するために、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、2014年度より「国際的社會連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）」Global Linkage Clusters for Humanities (GLinCH)を創設しました。主要な目的は以下の通りです。(1) 国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと。(2) 個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること。(3) 大学内外の競争的資金を獲得するため、研究実績を積み重ねることによって常に準備体制を整えておくこと。以上の目的のもとに、文学研究科内で募集し選考を経て採択し、2014年度から国内外の大学・研究機関等とのより積極的な共同研究等の研究教育活動を推進しています。

グローバル日本研究クラスター

概要

本クラスターは、大阪大学大学院文学研究科内に2014年度に設けられた「国際的社會連携型人文学研究教育クラスター（Global Linkage Clusters for Humanities）」（略称「人文学クラスター（GLinCH）」）の1つとして、同年度に設けられた。

この「人文学クラスター」は、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、(1)国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと、(2)個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること、などを目的としている（http://www.let.osaka-u.ac.jp/ja/research/activities/projects/cluster_h26）。

この「人文学クラスター」の1つとして設けられた本クラスターは、既存の枠組を横断するプロジェクト型の研究組織として、海外の日本研究者と緊密なネットワークを構築しつつ研究教育にあたることで、①本研究科の日本研究のグローバル化と、②本研究科の日本研究領域の大学院教育のグローバル化を図るとともに、③本研究科が日本研究領域の世界的拠点として認知されることを目指して、活動している。

組織・体制

第1期（2014～2016年度）の構成員は、入江幸男、浜渦辰二、舟場保之、三谷研爾、合山林太郎、宇野田尚哉、第2期（2017～2018年度）の構成員は、入江・浜渦・三谷・宇野田のほか、浅見洋二、輪島裕介、山本嘉孝、ヤスコ・ハッサル・コバヤシ、モハンマド・モインウッディンで、代表は、2014年度は入江、2015年度以降は宇野田がつとめている。構成員にドイツ研究者が多いのは、ハイデルベルク大学の日本学研究所との交流を担っていた教員がその実績を踏まえて本クラスターを立ち上げたという経緯があるからであり、そこに中堅・若手の日本研究者が加わることで現在の人員構成となった。グローバル日本研究クラスターは、講座などの既存の枠組を横断するかたちで教員を組織して日本研究に取り組むことにより、国際連携を拡大・深化するとともに国際発信力を強化することを目指している。もともとハイデルベルク大学東アジア研究センター日本学研究所との研究交流を深めていた教員グループの活動が前提となっているため、本クラスターは本研究科のドイツ研究者と日本研究者からなり、同研究所は主要な連携先の1つとなっている。

本クラスターの活動を展開するうえでは、本学の国際共同研究促進プログラムの支援を受けてきた。2016年度には、ケンダル・ハイツマンさんに、このプログラムによる人件費の支援により、特任教員として1ヶ月ほど本学にご滞在いただき、研究・教育に従事していただいた。同プログラムによる人件費支援に、この場を借りてお礼申し上げたい。

活動状況

- 2016年5月26日, ハンス・マーティン・クレーマさん(ハイデルベルク大学教授)講演会, 演題は「公教育に見られる政治と宗教の分離: その類型の日欧比較」, 橋本順光さん(本研究科准教授)コメント
- 2016年6月21日, マーレン・エーラスさん(ノース・カロライナ大学准教授)講演会, 演題「アメリカにおける日本近世史研究の現在」, 宇野田尚哉さん(本研究科准教授)コメント
- 2016年8月5日, 国際ワークショップ「日本研究の現在」。第1部「戦時期の言説を読みなおす」, 昆野伸幸さん(神戸大学准教授)「戦時期の国体論を再考する」, オリオン・クラウタウさん(東北大学准教授)「15年戦争期における日本仏教論の展開」。第2部「グローバル化時代の日本研究」, 宇野田尚哉さん(本研究科准教授)発題, 昆野伸幸さん, オリオン・クラウタウさん討論
- 2016年10月7日, ヴォルフガング・ザイフェルトさん(ハイデルベルク大学名誉教授)講演会, 演題「竹内好「近代とは何か」を西ヨーロッパで読む」
- 2016年12月1日, 韓国・仁川で開催された第1回東アジア日本研究者協議会において早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「東アジアの人文知」と共同でパネル報告「東アジア冷戦と1950年代日本の文化運動」を主管。司会趙寛子さん(ソウル大学校助教授), 発表者宇野田尚哉さん(本研究科准教授)・鳥羽耕史さん(早稲田大学教授), 討論者馬京玉さん(極東大学校教授)・黒川伊織さん(神戸大学研究員)
- 2016年12月23日, 国際ワークショップ「戦後日本の文学と〈記憶〉」, ケンダル・ハイツマンさん(アイオワ大学助教授)「Yasuoka Shotaro: Mass Memory and Individual Memory」, 崔範洵さん(嶺南大学校副教授)「小林勝の小説における〈戦後〉の形象化: 植民地体験・反戦運動体験とその記憶」, 山崎信子さん(リーハイ大学助教授), 川口隆行さん(広島大学准教授)コメント
- 2017年1月10日, 公開セミナー, ケンダル・ハイツマンさん(アイオワ大学助教授)「アメリカ大学院事情」
- 2017年3月11日・12日, 国際ワークショップ「冷戦経験の同時代史: トランスパシフィックな想像力を読みなおす」, アン・シェリフさん(オーバーリン大学教授)「Enemies into Friends: Popular Front and Red Fascism in Cold War Arts and Literature」, 大西雄一郎さん(ミネソタ大学教授)「Thinking through Occupied Okinawa: The Challenge of Afro-Asian Solidarity, Then and Now」, 益田肇さん(シンガポール国立大学助教授)「冷戦とは何だったのか: 想像上の現実, ひとびとの日常戦争, 社会的装置」, 篠田徹さん(早稲田大学教授), 辛島理人さん(神戸大学准教授), 大野光明さん(日本学術振興会特別研究員), 黒川伊織さん(神戸大学研究員), キアラ・コマストリさん(オックスフォード大学大学院)コメント
- 2017年4月6日, ヴィアチェスラフ・ヴェトロフさん(ハイデルベルク大学助教)講演会, 演題「『淮南子』における光と闇の象徴性: 比較研究の視点から」, 浅見洋二さん(本研究科教授), 山本嘉孝さん(本研究科講師)コメント
- 2017年5月11日, ヤン・シーコラさん(カレル大学教授)講演会, 演題「チェコにおける日本研究の現状: カレル大学を中心に」
- 2017年6月1日, 国際ワークショップ「『在日文学』研究の現在: 北米の動向を中心に」, クリステイーナ・イさん(ブリティッシュ・コロンビア大学助教授)「Postcolonial Legacies and the Divided “I” in Occupation-Period Japan」, 平田由美さん(文学研究科教授), 廣瀬陽一さん(大阪府立大学研究員)コメント
- 2017年6月5日, 国際ワークショップ「『朝鮮』から戦後日本を問う」, ゲスト権赫泰さん(聖公会大学校教授), 富永悠介さん(本研究科助教)「権赫泰さんの近業をめぐって」, 宇野田尚哉さん(本研究科教授)「関連報告: 雑誌『朝鮮人』をめぐって」
- 2017年7月22日, Osaka University Japanese Studies Workshop 2017 *このワークショップについては, 本報告書「特集2」をご覧ください。
- 2017年9月10日・11日, 国際シンポジウム「海保青陵の時代としての江戸後期: 没後200年記念」(青陵談話会と共催), M・キンスキーさん・徳盛誠さん「2015年の青陵ワークショップ報告をめぐって」, 渡辺浩さん「海保青陵研究の意義と方法」, M・キンスキーさん「海保青陵の政治意識」, 八木清治さん「江戸期の文人ネットワークと海保青陵」, 小室正紀さん・青柳淳子さん「経済史の中の海保青陵」, 前田勉さん「近世日本における読書文化と知の拡大」, ア

ニック・ホリウチさん「木村兼葭堂のネットワークについて」, 「総括討議」(小島康敬さん司会)

2017年9月29日, 国際ワークショップ「東アジアから原爆文学を読みなおす」(嶺南大学校人文学事業団東アジア平和学チーム主催, 原爆文学研究会・大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター協賛。韓国・大邱の嶺南大学校で開催) *このワークショップについては, 本報告書「特集1」をご覧ください。

2017年10月17日, ユディット・アロカイさん(ハイデルベルク大学教授)講演会, 演題「日本文学史の『古典』とは?」, 吉田耕太郎さん(本研究科准教授), 山本嘉孝さん(本研究科講師)コメント

2017年10月30日, 国際ワークショップ「〈東アジア思想史〉の可能性を探る」, 田世民さん(台湾大学副教授), 浅見洋二さん(本研究科教授), 佐藤由隆さん(本研究科大学院生)コメント

2017年12月9日, 国際ワークショップ「人の移動と外国人嫌悪」(建国大学校アジア・ディアスポラ研究所・大阪大学グローバル日本研究クラスター共催, 建国大学校・在外同胞財団後援。韓国・ソウルの建国大学校で開催), 申寅燮さん(建国大学校アジア・ディアスポラ研究所所長)「開会の辞」, 宇野田尚哉さん(本研究科教授)「1990年代以後の在日外国人数の動向とヘイト・スピーチ」, 徐己才さん(建国大学校)「「嫌韓」言説形成の場としての引揚者: 児童文学『お星さまのレール』」, Yasuko Hassall Kobayashiさん(本研究科助教)「ヘイトに立ち向かう社会的免疫力: オーストラリアのイスラムフォビアの事例から」, 李真亨さん(建国大学校)「戦後日本の分裂した歴史認識に内在する二重的他者感情: 羞恥心と嫌悪—大江健三郎『万延元年のフットボール』を中心に—」, 安岡健一さん(本研究科准教授)「二つの嫌悪: 「嫌韓」と世代間格差に関する試論」, 姜宇源庸さん(カトリック関東大学)・禹妍熙さん(建国大学)・尹頌雅さん(慶熙大学)・李丞鎮さん(東国大学)・李漢正さん(祥明大学)「総合討論」, 朴鐘明さん(建国大学校)「閉会の辞」

(宇野田 尚哉)

グローバルヒストリー研究

概要

世界中の学界で注目されているグローバルヒストリー研究の国際的ネットワークを、世界主要地域の拠点大学と協力して構築し、大阪大学文学研究科をその中心に位置づけることで、日本からの研究面での情報発信と、若手研究者(院生・ポストドクを含む)の活躍の場を創出する。大阪大学における世界史研究に関係した研究者が部局横断的に結集し、研究セミナー・ワークショップや、外国人研究者を招聘した国際会議等を通じて、アジア太平洋地域における研究・教育のハブとして活動することを目標としている。

組織・体制

研究科内に2014年10月に設置された「グローバルヒストリー研究クラスター」(文化形態論5名、文化動態論1名、外国人研究協力者3名)を中心に、同じく2014年に開設され、2016年に名称が変更された全学的研究組織・先導的学際研究機構(The Institute for Open and Transdisciplinary Research Initiatives: OTRI、旧・未来戦略機構)「グローバルヒストリー研究部門」(17名で構成する各研究科横断の研究機構)のメンバーと協力して活動している。

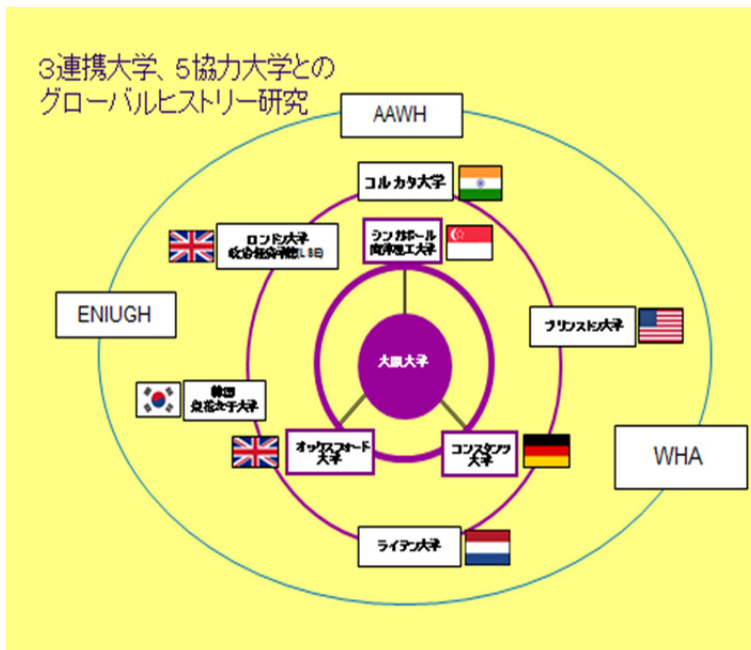
文学研究科世界史講座では、従来から、グローバルヒストリーに関して具体的な研究課題を設定し、世界的に注目される業績を蓄積してきた。すなわち、①中央ユーラシア史研究: 古代・中世のユーラシア遊牧民・商人の活動を、モンゴル帝国に代表されるアジアの諸帝国の興亡と関連付けて考察する、②海域アジア史研究: 中近世から近代初頭の、日本を含む国家間の交渉・相互認識と、商人・通商ネットワークの関係を考察する、③アジア国際経済秩序研究: 近代以降のアジア独自の国際経済秩序の形成・発展を、世界システム論の見直しを通じて考察する、以上の三点である。大阪大学は、古代から現代まで一貫して、通時的な世界史研究を行っており、近世世界や近現代史の研究に特化した欧米の他の研究拠点とは異なる長期の時間軸を持ち、日本を含むアジアの観点から、第一次史料に基づいて実証的な研究を展開してきた点で、独自性を有している。我々は、この三群の研究成果をさらに緊密に結びつけて、アジアから見たトータルな独自の世界史像を構築することを目指しており、その際に、旧大阪外大が蓄積してきたアジア地域研究の成果も取りこんでいる。

同時に、「社会学連携」による研究成果の広範な情報発信を通じて、大阪大学における文系部局の研究成果を広めることも重視している。具体的には、毎月一回開催している「大阪大学歴史教育研究会」を舞台に、全国の中等教育の歴史教員、マスコミや教科書会社の関係者等との討議・情報交換・共同企画を通じて、歴史認識・歴史教育に関する問題提起を行っている。

こうしたグローバルヒストリー研究は、歴史学だけでなく、「日本学」(Global Japanese Studies)を含めたアジア地域研究、国際関係論、比較文明論、世界システム論、現代経済論など、多岐にわたる隣接諸領域の研究ともリンクしてくる。このような分野横断的で学際的な性格と、高度な国際的コミュニケーション能力が求められることから、既存の分野や領域を超えて国際的に活躍できる若手研究者の育成も可能になる。

活動状況

具体的には、イギリス・オクスフォード大学から参加を要請された、6大学の連携によるグローバルヒストリー国際共同研究(The Leverhulme Trust 後援、Oxford, Princeton, Leiden, Konstanz, Kolkata, 大阪)の東アジアにおける拠点校として、2015年4月から3年間で7回におよぶ国際ワークショップの開催(大阪は2016年3月に第2回ワークショップを実施)に積極的に協力している。同時に、アジア太平洋地域におけるグローバルヒストリー研究のハブ・ゲートウェイとして、2008年に結成されたアジア世界史学会(The Asian Association of World Historians: AAWH、本部事務局は現在、大阪大学文学研究科)と緊密に連携し、3年に一度の国際会議(2012年:韓国・梨花女子大学、2015年:シンガポール・南洋理工大学、2018年:中国・東北師範大学を予定)を結節点として、アジアで世界史・グローバルヒストリーを研究する学者との連携・交流を強化するなかで、我々が目指す「アジア発の世界史研究」の充実を目指している。



定期的(平均すると1ヶ月半に一回)に、グローバルヒストリー・セミナー(研究会)を開催している。講師としては、世界の主要大学でグローバルヒストリー研究を展開する研究者を招聘して、英語で討議を行い、重要な成果については、Working & Discussion Papersとして印刷・刊行している(現在、第21号まで刊行、同時にwebsiteにも掲載して公開)。

具体的な活動の履歴については、<http://www.globalhistoryonline.com/> (日英二か国語で掲載)を参照していただきたい。

セミナーに加えて、集中的な討議を行うために、定期的に国際ワークショップを開催している。2016年度には、外国語学部を中心とする地域研究フォーラム(OUFAS)、海域アジア史研究会と共催で、国際交流基金アジアセンターの協

力を得て、”Southeast Asia: Eyes from Outside and on the International Borders”と題するワークショップを開催した。また、2017年度は、シンガポールの南洋理工大学と共同で、若手研究者主体のワークショップ“Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives”を主催した。海域アジア史と大西洋史(Atlantic History)の研究成果を相互に比較し関係づけながら、16世紀以降のいわゆる「大航海時代」の歴史像を再考する試みであった。阪大卒業のOBだけでなく、現役の後期課程大学院生にも研究発表を求め、次世代の若手研究者の育成とネットワークづくりを目指した。現在、英文論集の刊行準備を進めている。

本クラスターの重点的協力相手であるAAWHとは、二度にわたるワークショップを開催した。2016年6月には、淡路島の国際会議場「淡路・夢舞台」において、“Awaji Workshop for the 2018 Conference in China”と題する会議を行い、2018年7月に予定されていた第四回AAWH大会の主題(メインテーマ)とパネル構成、さらに学会誌 *Asian Review of World*

Histories (ARWH) の改善と特集号のテーマを議論した。翌 2017 年 6 月には、中国・北京の北京外国語大学グローバルヒストリー研究センターにおいて、中国各地から世界史・グローバルヒストリーを研究する約 30 名の専門家を集めて、2018 年会議の広報・宣伝と、「アジアから見たグローバルヒストリー」構築(Creating Global History from Asian Perspectives)の可能性と具体性を議論した。この 2 回の集中的討議の成果は、2018 年 7 月に予定された AAWH 長春会議に反映される予定であった [諸般の事情により、長春会議は中止を余儀なくされ、代替措置として、2019 年 1 月に大阪で、第四回大会を開催した]。

また本クラスターでは、OTRI グローバルヒストリー研究部門と協力して、OTRI 等の予算で大阪大学に招聘された外国人特任教授とも連携して、研究教育活動を展開した。2016 年度は、アメリカ・カリフォルニア州立大学フラトン校・歴史学部教授の Sun Laichen 氏、2017 年は、前述の南洋理工大學・人文社会科学研究科長の Liu Hong 氏のそれぞれ 3 か月にわたる滞在をフルに利用して、近世以降の海域アジア史に関する共同研究を継続した。特に Laichen 氏は、研究指導に加えて、若手の現役院生を対象とする「英語プレゼン塾」を定期的に開催され、英語でのプレゼンに対する若手の訓練の場を提供していただいた。

文学研究科を中心とするグローバルヒストリー研究クラスターは、今後とも、アジア太平洋地域における新たな世界史、グローバルヒストリー研究のハブとしての役割を果たしていきたい。

(秋田 茂)

国際古典籍学クラスター

概要

国文学研究資料館が、2014 年度から 10 カ年計画で行う大型プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築」は、『国書総目録』所載の約 50 万点の日本語の歴史的典籍のうち、約 30 万点の画像データベースを作成し、その画像データベースにかかわる国際共同研究ネットワークを構築するものである。本プロジェクトを遂行するために、20 の拠点大学が選ばれたが、大阪大学もそのひとつに入っている。拠点として大阪大学が行う主な事業は、A 画像データベースの構築と、B 国際共同ネットワーク構築における拠点主導共同研究であるが、歴史的典籍が主要な研究対象となるため、A は図書館が、B は文学研究科が中心となって進めることとなった。これに関わって本クラスターは 2014 年度に発足した。当初本クラスターでは、国文研に提供する「懐徳堂文庫」「適塾記念センター所蔵の理医学書」の他、大阪大学附属図書館・武田科学振興財団杏雨書屋・大阪府立中之島図書館所蔵の理医学書も視野に入れた画像データベースに対応する目録作成と、新たな大阪学芸史の構築という、大きな構想を有していたが、国文研の予算縮小を受け、簡易目録作成をもって一応の区切りとし、同年度にクラスターのもう一つの柱となった国際シンポジウム「日本研究の新地平 歴史的典籍画像の 30 万点 Web 公開と国際共同研究」を発展させる方向に舵を切った。2015 年度は、歴史的典籍画像を内外の研究者が利用するための必須ツールとしての、くずし字学習支援アプリ KuLA の開発と、世界のくずし字教育の情報交換のための国際シンポジウムを開催した。

2016 年度より、本クラスターの名称を「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター」から「国際古典籍学クラスター」に改称した。もともとこの名称は、前名称の略称として用いていたものであった。

2016 年度の主要な活動は 3 点ある。①歴史的典籍画像を利用する国際共同研究のひとつとしてハイデルベルク大学日本文学科と共同で行っている「デジタル文学地図」プロジェクトに関わる国際ワークショップの開催、②くずし字学習支援アプリのバージョンアップ版のリリース、③くずし字学習支援アプリの使用法を中心とする書籍出版である。

本クラスターは 2016 年度をもって終了した。本クラスター事業は、科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」(2015～2016 年度、代表者 飯倉洋一)と連携して遂行されたものである。

組織・体制

飯倉洋一	文学研究科
岡島昭浩	文学研究科

山本嘉孝	文学研究科
橋本雄太	文学研究科特任研究員 京都大学文学研究科博士後期課程
康 盛国	文学研究科招聘研究員
有澤知世	RA 文学研究科博士後期課程
久田行雄	RA 文学研究科博士後期課程
ダニエル・小林ベター	RA 文学研究科博士後期課程
河野光将	RA 文学研究科博士後期課程

活動状況

10月13日(木)に本クラスターの主催で国際ワークショップ「デジタル文学地図の試み」を大阪大学基礎工学部国際棟セミナー室で開催し、33名が参加した。デジタル文学地図作成プロジェクトとは、日本の詩歌や文学作品における歌枕・名所をデジタル地図の形で表示し、歌枕・名所にまつわる文化的、詩歌的な意味をデータベースに記録して、その意味合いをデジタル地図で辿ることを目的としたものである。開発中のデジタル文学地図について紹介し、問題点を洗い出し、その後の開発に資するためのワークショップである。なお、このデータベースでは歌枕・名所が記される原典へのアクセスとして、国文学研究資料館が提供する歴史的典籍画像のオープンデータへのリンクが張られている。

ワークショップの発表は以下の通りである。

- 1 文学地図プロジェクトの発想 ユディット・アロカイ (ハイデルベルク大学日本学科教授)
- 2 デジタルデータベースの紹介 ドミニク・ワルナー (ハイデルベルク大学日本学科講師)
- 3 デジタルプログラムのプレゼンテーション レオ・ボーン (ハイデルベルク大学情報言語学大学院生)

以上の発表について、活発な質疑応答・討論が行われた。

2016年11月、ダニエル・小林ベターと橋本雄太によって進められた、くずし字学習支援アプリの英語版が完成し、その他のマイナーチェンジも含め、バージョンアップ版がリリースされた。

2017年2月には、くずし字学習支援アプリケーションの使用法の解説と、2016年2月に開催した国際シンポジウムの登壇者の発表を踏まえた原稿、およびくずし字教育の実例やくずし字教育の意義などについての識者のエッセイなどを加えた書籍版『アプリで学ぶくずし字 くずし字学習アプリ KuLA の使い方』(笠間書院)を刊行した。

その目次は以下の通りである。

はじめに — くずし字は絶対に読めるようになる！

1 アプリで何ができるのか？

くずし字とはなにか？ なぜくずし字が読めないのか？ (仮名編) なぜくずし字が読めないのか？ (漢字編)

なぜくずし字が読めないのか？ (記号編) くずし字の文章を読むためにどうすればいいのか？

このアプリで何ができるのか？ どんな文字が覚えられるのか？ (仮名・漢字一覧)

アプリは何で使うことができる？

2 アプリを使いこなそう！

① ダウンロードしてみよう ② 「まなぶ」機能を使ってみよう ③ 「よむ」機能を使ってみよう

④ 「つながる」機能を使ってみよう ⑤ 英語版を使ってみよう

3 KuLA以外の学習方法は？

① 書籍編 ② アプリ・サイト編

4 オンライン座談会 刀剣ゲームファンがKuLAでくずし字を学ぶ！

5 アプリ活用法&くずし字を学ぶということ

① わたしはアプリでこう教える・学ぶ

くずし字アプリの授業活用／合山林太郎 (慶應義塾大学)

くずし字アプリでの学習実践／南清恵 (ホノルル美術館)

② くずし字で広がる知の世界

古地震学とくずし字解説／加納靖之（京都大学防災研究所）

文字を書く壁／ロバート キャンベル（東京大学）

変体仮名の文字コードセット／矢田勉（東京大学）

くずし字アプリケーションの目指すべき未来／金時徳（ソウル大学奎章閣韓国学研究院）

③ 海外のくずし字学習事情

ケンブリッジ大学のくずし字教育

／ラウラ・モレッティ（ケンブリッジ大学）・山邊進（二松學舎大学）

ハイデルベルク大学のくずし字教育／ユディット・アロカイ（ハイデルベルク大学）

6 【付録】「よむ」資料『しん板なぞなぞ双六』注釈 有澤知世（RA）

あとがきにかえて 飯倉洋一（大阪大学） 橋本雄太（特任研究員）

（飯倉 洋一）

比較デザイン学クラスター

概要

比較デザイン学クラスターは、広い意味のデザインとして、工芸・衣服・家具・展示・建築・景観・広告・印刷・映像など、人間の創造活動全般にかかわる比較研究を進めてきた。本研究プロジェクトのねらいは、次の点から、人文学の新たな展開のしかたを模索することにある。① デザイン研究をとおした諸学の総合：デザインとは（学問）の知見をもちいて（芸術）の創意によって課題にあたらうとする総合的な創造活動である。デザインの実践は、人文科学・社会科学・自然科学のどれにも通じており、当然と思われていたことに反省をうながしたり、思ってもみない解決を導こうとする点において、現代アートの力を必要とする。文系学者によって展開されるデザイン研究は、デザインの歴史を明らかにするだけでなく、社会のかかえる諸問題にたいして、文化的な観点から様々な可能性を示唆できる。デザイン研究をとおして、文理融合の領域が切り開かれるとともに、学問がさまざまな技芸（アート）が結びつくことで新たな次元が見い出される。② 変化する美術館との連携：現代の美術館は、絵画彫刻のみならず、建築文化を紹介したり、ポスターから工業製品まで身近なものに新たな見方を加えたり、アニメーションの特集を組んだり、ヴァーチャルリアリティの空間をつくったりと多元化している。世界各地においてデザインミュージアムが新設されている。美術館のほう学問に先んじて現代の傾向をとらえている場合が多いなかで、人文系のデザイン研究もまた新たな話題を提供できる。③ 産業との連携：デザイン研究は、美術館で展示される芸術作品だけでなく、量産されて一般に流通している工業製品や、各種メディアの広告などもあつかう。デザイン研究は、産業にイノベーションのヒントをあたえることができる。

比較デザイン学クラスターは、2015年に大阪大学においてアジアデザイン史学国際会議を始めたが、同会議は2017年に津田塾大学で開催され、2019年には九州産業大学で開催される予定である。回を重ねるごとに、日本の研究者が参加しやすい国際学会として定着しつつある。2017年度・2018年度において、比較デザイン学クラスターは次の活動をおこなった。① デザイン研究の国際化：2018年1月29日にコミュニケーションデザインの専門家 Christof Breidenich 教授（ドイツ・マクローメディア大学ケルン）をゲスト講師として招いて研究会をおこなった（英語）。2018年12月9日に東洋陶磁美術館と共同で、現代写真家エリック・ゼッタクイスト氏を迎えてのシンポジウムを企画した。② 中之島エリアの美術館との連携：東洋陶磁美術館において授業を行い（2018年7月11日・11月14日）、同美術館と上記のシンポジウム企画した。2021年に開館予定の中之島美術館はこれまで家電製品にまつわる情報や、近代日本の広告資料などの保存整理をおこなっており、将来デザインミュージアムの機能をにうことが期待されている。そこで、2018年4月13日・10月16日に大阪中之島美術館準備室のデザイン担当者に聞き取り調査および企画相談をおこない、2018年12月12日に同準備室の平井直子氏を招いて公開研究会をおこなった。③ 地域デザイン研究への協力：大阪では、1960年代頃まではデザイン活動が活発で、今

日の標準（スタンダード）となるような多くの製品が生み出されていた。そこで、2018年3月20日に藤本英子教授（京都市立芸術大学）と「大阪発デザイン研究会」を開始するとともに、ヤンマー（2018年12月17日）クボタ（2019年2月3日）モリサワ（2018年12月20日）の関係者に聞き取りを行ない、芸術工学会の特別冊子にて成果を公表した。④ 雑誌特集の企画：学術雑誌『a+a 美学研究』13号において特集「デザイン新潮流」を組んで、現代のデザイン状況にかかわる諸論考を公表した。

組織・体制

高安啓介 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学・デザイン思想史

田中均 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学

橋本順光 | 大阪大学大学院文学研究科 | 比較文学

土田耕督 | 大阪大学大学院文学研究科 | 美学

協力・連携

東洋陶磁美術館 大阪中之島美術館準備室 大阪大学 CO デザインセンター

活動内容

2017年6月10日：デザインクリエイティブセンター神戸で開催された芸術関連学会シンポジウム「21世紀いま新たに装飾について考える」で、藤田治彦名誉教授が総合コメンテーターをつとめ、高安がパネリストとして「無装飾から超装飾へ」と題する報告をおこなった。

2017年9月30日：京都工芸繊維大学で開かれたデザイン関連学会連携シンポジウム「パウハウスとデザイン思想」の実施協力（司会進行・報告書の作成）。

2017年11月5日～7日：大阪大学中之島センターにて懷徳堂秋季講座「デザインにおける日本的なもの」と題する連続講座を企画した。高安啓介「簡素さの美はいかに発見されたのか」橋本順光「いつから銀杏のデザインは二葉になったのか」藤田治彦「西洋建築と日本」。

2018年1月29日：第1回比較デザイン学研究会 Creative (Mis)Communicationを実施した。大阪大学COデザインセンターとの共催。ドイツからコミュニケーションデザインの専門家 Christof Breidenich教授（マクロメディア大学ケルン）をゲスト講師として招いた。コミュニケーションの不具合にむしろポジティブな可能性をみるという趣旨のもと6つの英語発表がおこなわれた。約30名の参加者があった。Yorimitsu HASHIMOTO, In Praise of the Hands or the Mind? An Episode in Smiles's Self-Help and Its Hybridization with Zen. Kosuke TSUCHIDA, Communication based on Misreading: From Renga to Chanoyu. Keisuke TAKAYASU, Learning from Typographic Art: Poetry and Communication など。

2018年3月20日：大阪デザインセンター SEMBAにおいて「大阪発デザイン研究会：生活のスタンダードをつくった大阪人」を開催した。大阪で活躍したプロダクトデザイナーである吉川博教氏が「世界仕様のカッターナイフ誕生秘話」について報告を行い、学者・デザイナー・行政担当者を含む参加者9名が、戦後の大阪のデザイン史について意見交換を行い、今後の研究の方向について話し合った。

2018年12月9日：第2回比較デザイン学研究会（シンポジウム）「現代アートと古陶磁との出会い」を東洋陶磁美術館と共同で企画した。同美術館において「オブジェクト・ポートレート：エリック・ゼッタクイスト展」が開催されるにあたり、作者ゼッタクイスト氏とともに一般参加者をまじえながら陶芸の東西交流などについて意見を交わした。

2018年12月12日：第3回比較デザイン学研究会「大阪中之島美術館とデザインアーカイブ」を豊中キャンパスでおこなった。大阪中之島美術館準備室の平井直子氏をまねいて、デザイン資料をもちいてどんな研究ができるのか、調査研究をどのように展示へと展開していけるのか、参加者と意見交換をおこなった。

2019年3月31日：雑誌『a+a 美学研究』特殊号「デザイン新潮流」の発行。北村仁美（東京国立近代美術館）

「3Dプリンタ時代の工芸家像」、田中均（大阪大学文学研究科）「デザイン哲学の陥穽：スローターダイクにおける〈島化〉と〈泡塊〉」など。

（高安 啓介）

アーツ&リサーチ

概要

クラスター「アーツ&リサーチ」は、設立初年度から文化庁による「大学を活用した文化芸術推進事業」と不可分な関係にあり、その事業を補完する形で活動してきた。2016年度には同事業は、「記憶の劇場」（大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成事業）へと展開した（大阪大学学術博物館主催、文学研究科共催）。またそれまでの芸術祭を中心として事業の発展として、本年度には新たに中之島センターで開催される文学研究科の授業「芸術計画論」もスタートし、本クラスターの活動、そして上記文化庁による助成事業の両方と合わせて、広い意味での芸術マネジメント教育を担っている。本報告においては、上記プロジェクトの活動全体の成果を報告する。

同プロジェクトは、文学研究科では芸術系の教員を中心とし、大学博物館や近隣地域の諸芸術機関との連携を基に、主として社会人を対象にしたアートマネジメント人材の育成を行うものである。事業は3年計画であったが、本報告書の対象である2016年度（記憶の劇場）・2017年度（記憶の劇場II）について、ここに記す。

組織・体制

上記事業は前記のとおり、主として社会人から成る受講生を中心として進められたが、クラスターとしての活動には文学研究科から次の構成員が関わった。

クラスター構成員名	所属・専門領域
文学研究科	
永田靖	演劇学
伊東信宏	音楽学
渡辺浩司	文芸学
古後奈緒子	アートメディア

また、事業全体については、下記の事業担当者、および各連携機関からのアドバイザーに参画していただいた。

	所属・専門領域
博物館	
橋爪節也	大阪大学総合学術博物館／日本美術史
上田 貴洋	大阪大学総合学術博物館／物理化学
伊藤 謙	大阪大学総合学術博物館／生薬学
横田 洋	大阪大学総合学術博物館／演劇学
山崎達哉	芸術祭事務局／アートメディア
連携機関アドバイザー	
石橋 隆	公益財団法人益富地学会館
松田正弘	能勢町立浄るりシアター
尾西教彰	兵庫県立尼崎青少年創造劇場（ピッコロシアター）
古矢直樹	吹田市文化振興事業団（吹田メイシアター）
菅谷富夫	大阪新美術館建設準備室

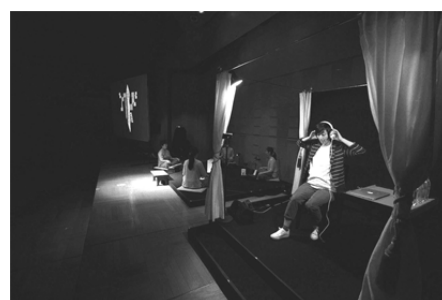
宮地泰史 本山昇平	あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール 豊中市都市活力部文化芸術課
--------------	--

活動内容

活動は、これまで通り、年度ごとに社会人や学生などから受講生を募り、その受講生が主体となって、各事業を展開し、最終的には博物館で行われる展覧会「記憶の劇場」の企画運営を行い、そのような経験を通じて人材育成をはかる、というものである。年度の終わりには、所定の条件を満たした受講者に修了証が手渡される。2016年度には37名、2017年度には31名の修了生を出した。両年度について、下記のような活動が展開された。

2016年度

- 1) 「記憶の劇場」オープニング講座
- 2) 「地域文化の研究による発信・顕彰とメディアリテラシー」
- 3) 「自然科学に親しむ・触る・アートする」
- 4) 「オペラ『新しい時代』をめぐるワークショップ」
- 5) 「パフォーミング・ミュージアム Vol.1」
- 6) 「紛争・災害の TELESOPHIA」
- 7) 「ドキュメンテーション／アーカイヴ」



2017年度

- 1) 「記憶の劇場 II」オープニング講座
- 2) 「地域文化の研究による発信・顕彰とメディアリテラシー」
- 3) 「自然科学に親しむ・触る・アートする：研究からアートそして発信」
- 4) 「三輪眞弘『新しい時代』の再演」
- 5) 「パフォーミング・ミュージアム Vol.2」
- 6) 「旅・芸の TELESOPHIA」
- 7) 「ドキュメンテーション／アーカイヴ」

それぞれの活動においては、演劇公演、オペラ制作、展覧会、ワークショップ、冊子の作成、記録作成、など多種多様な事業が展開された。次に、そのうちの一部を挙げる。

- ひとり芝居『在日バイタルチェック』公演、大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ、2016年9月9日。
- ラボカフェ「ポスト・ドラマ演劇WS ― 演技を、形から物語りに」アートエリアB1、2016年9月10日、ファシリテーター：筒井潤（dracom）、ゲスト：きむきがん（劇団石）、ささきようこ（NGO オリーブとローズマリー | 南山大学）。
- 阿波木偶箱まわし保存会による上演と解説、大阪大学豊中キャンパス、2017年9月3日
- 菅谷富夫氏（大阪新美術館建設準備室、研究主幹）講演「「大阪の記憶と未来」―大阪の新しい美術館 建設に向けて―」大阪大学豊中キャンパス、2017年9月16日（土）
- 大阪の水の回廊体験―運河から見た大阪と橋梁、「月刊「島民」の情報発信と53の橋について」中島淳氏（140 講義場所 堂島ビル会議室、その後天満ラブレポート棧橋から乗船（一本松汽船）。乗船コース「水の回廊」中之島～東横堀～道頓堀～木津川～中之島 船上解説・橋爪節也、中島淳、古川武志 氏（大阪市史料調査会）船上解説、特別参加の成瀬國晴氏（イラストレーター）、藤本英子京都芸術大学教授、2017年9月30日
- 三輪眞弘+前田真二郎、モノローグ・オペラ『新しい時代』上演。2017年12月8日、9日愛知県立芸術劇場、および12月16日あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール（本公演は、サントリー芸術財団による2017年度の佐治敬三賞を受賞した）。

■ 『豆の波音』上演、大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ、2017 年 12 月 16 日、17 日、構成・演出山口浩章（劇団このしたやみ）

また年度の終わりには、上記成果をとりまとめ、展覧会を開催した。初年度は 2017 年 2 月 27 日～3 月 11 日に、また翌年度は 2018 年 2 月 27 日～3 月 17 日の会期で、いずれも大阪大学総合学術博物館待兼山修学館において開催されたものである。全体は 7 つのブロックに分けられ、それらを「記憶の劇場」の 7 つの事業が受け持った。会期中、それぞれ 552 人（2016 年度）、670 人（2017 年度）の観覧者があり、プロジェクトの成果が広く社会に還元された、と言える。クラスター「アーツ&リサーチ」は、上記事業の様々な面を補完し、有効に機能した。

（伊東 信宏）

役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究

概要

役割語・キャラクター言語研究は、主としてフィクションの会話に現れる、話し方の様式と話し手の人物像のステレオタイプな、あるいは個別作品的な結びつきを研究するものである。この計画では特に、日本語と他言語との間の翻訳に焦点をあて、役割語・キャラクター言語研究がいかに翻訳の質的向上に寄与するかという点を明らかにしていく。具体的には、「村上春樹翻訳調査プロジェクト」を推進していくものである。文学研究科の外国文学の教員も糾合しつつ、高度な日本研究の一端を担っていく。

組織・体制

金水敏（国語学）をチーフとし、学内の教員として岡島昭浩（国語学）、斎藤理生（日本文学）、新井由美（日本文学、2017 年度まで）、橋本順光（比較文学）、小橋玲治（比較文学、H29 年度まで）、浅見洋二（中国文学）、山上浩嗣（フランス文学）、三谷研爾（ドイツ文学）、服部典之（イギリス文学）、中尾薫（演劇学）、石割隆喜（アメリカ文学）、麻子軒（招へい研究員、2018 年度より）がメンバーに加わった。

また、学外の協力者として、山木戸浩子（藤女子大学）、河崎みゆき（國學院大學）、曾秋桂（台湾・淡江大学村上春樹研究センター長）、岡本能里子（東京国際大学）に参加いただいている。

活動状況

2017 年度は、下記のような活動を行った。

1 役割語研究会

下記の日程で実施した。

2017 年 4 月 26 日、5 月 31 日、6 月 28 日、8 月 5 日、9 月 11 日、11 月 19 日、

2 その他の研究会・講演会

2017 年 11 月 20 日、「コリンヌ・アトラン氏講演会 読むこと、書くこと、訳すこと」を実施した。

3 学会・研究会等での講演・研究発表

金水 敏（2017/7/8）「役割語・キャラクター言語の観点から見た 村上春樹作品と翻訳 -『海辺のカフカ』『1Q84』を中心に-」第 6 回村上春樹国際シンポジウム基調講演、淡江大学村上春樹研究センター主催、於同志社大学今出川キャンパス良心館 RY304

金水 敏、文雪、セバスティアン・リンドソグ、劉 翔、チュティパック・チャイウィロート、トマシュ・ヴォイチェフオヴィッチ、依田恵美（2017/9/16）「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に—」第 40 回社会言語科学会研究大会ワークショップ 2、関西大学第一学舎 1 号館（A 棟）6F A602 教室

金水 敏（2017/11/10）「現代小説のキャラクター分析と翻訳—村上春樹翻訳調査プロジェクトを中心に—」日本近代語研究会 2017 秋季大会講演、金沢歌劇座

金水 敏 (2017/12/1) “Role language, fiction, and translation,” in Trinity College Dublin and Osaka University Joint International Symposium: Japanese Studies in a global context: The art of friendship, 大阪大学大学院文学研究科/Trinity College Dublin, Trinity Long Room Hub, Trinity College Dublin

金水 敏 (2017/12/9) 「フィクションの話し言葉—ジブリ・アニメ、村上春樹小説を題材に—」

平成 29 年度國學院大學国語研究会後期大会講演、國學院大學渋谷キャンパス 120 周年記念 1 号館 1 階 1101 教室

金水 敏 (2018/1/22) 「フィクションの構造とキャラクターの言語 —ジブリ・アニメ、村上春樹小説を題材に—」藤女子大学講演、藤女子大学 1 6 条キャンパス 7 5 1 教室

金水 敏 (2018/2/10) 「村上春樹小説のキャラクター分析と翻訳—「海辺のカフカ」を中心に—」東西学術研究所 第 23 回研究例会、関西大学千里山キャンパス 以文館 4 階セミナースペース

4 書籍・論文等

金水 敏 (編) (2018) 『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書 (1)』大阪大学。大阪大学リポジトリ OUKA で公開中。

金水 敏 (2017) 「誌上講座「役割語・キャラクター言語とその習得」」『第二言語としての日本語の習得研究』第 20 号 137-147, 編集: 第二言語習得研究会, 発行: 凡人社

金水 敏 (2018) 「魅惑するナカタさんワールド」沼野充義 (監修)・曾秋桂 (編集)『村上春樹における魅惑』43-60 頁、淡江大学出版中心

(金水 敏)

教育ゆめ基金調査研究助成制度

「教育ゆめ基金」は、文学部創立 60 周年の 2008 年（平成 20 年）に文学部・文学研究科の教育活動の支援のために創設された。この基金は主に人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としている。

本基金を設置した 2008 年は、ヨーロッパで大規模に展開されているエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）に域外協定校として参加した最初の年でもあった。前年度からはグローバル COE プログラムが始まるなど、日本の大学にもグローバル化の波が打ち寄せてきた時期だった。エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムによって受け入れる留学生の授業料分の奨学金を賄う必要性が本基金創設の直接的なきっかけだった。

当初は文学部・文学研究科同窓会の協力を得て、同窓会ニューズレター送付の際に「教育ゆめ基金」の案内を同封して寄付を募ることとなり、初年度に 66 件のご寄付をいただいた。ほとんどすべてが同窓生や教職員個人の寄付であるが、気の向くときに繰り返し寄付していただきたいとの願いも徐々に定着してきた。2013 年（平成 25 年）からは全学の「未来基金」（2009 年創設）と窓口統合を実施し、卒業生・修了生のほとんど全員に案内を送付するに至り、寄付件数も飛躍的に増え、しかも年々増加している。

当初は国際的な教育プログラムを軌道に乗せるための使用が中心だったが、基金が安定したことに伴い、文学部学生の海外留学支援制度、大学院生の調査補助、障がいを持つ学生の支援など、学生たちの修学支援に幅広く活用できるようになり、教育の活性化に大いに寄与している。

年度	収入額	支出額	残額	備考
2008 年度	2,187,900 (66 件)	0	2,187,900	本部管理等経費 1% (平成 24 年度まで同じ)
2009 年度	297,000 (9 件)	288,000	2,196,900	支出：留学生奨学金 288,000
2010 年度	1,004,850 (46 件)	300,264	2,901,486	支出：留学生奨学金 144,000 留学生宿舎費補助 90,000 留学生用インターネット補助 66,264
2011 年度	514,800 (24 件)	351,180	3,065,106	支出：留学生奨学金 288,000 留学生用インターネット補助 63,180
2012 年度	834,570 (35 件)	64,842	3,834,834	支出：留学生用インターネット補助 64,842
2013 年度	1,829,700 (53 件)	480,000	4,281,084	本年度より大阪大学未来基金と窓口統合（本部管理等経費 5%、以下同じ） 支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000
2014 年度	1,377,975 (84 件)	560,000	6,002,509	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 調査研究助成 200,000
2015 年度	2,644,800 (111 件)	782,565	7,864,744	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000 大学院生海外調査等助成 278,565 障がいのある学生のための支援補助 24,000
2016 年度	1,890,500 (57 件)	836,960	8,918,284	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 250,000 大学院生海外調査等助成 298,960 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000
2017 年度	3,243,007 (142 件)	1,028,000	11,133,291	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 大学院生海外調査等助成 380,000 エラスムス・ムンドゥス留学生奨学金 288,000

(金水 敏)

1. 懐徳堂研究センターの目的と意義

2009年5月、旧「懐徳堂センター」が改組され、新たに「懐徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懐徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懐徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。

その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懐徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懐徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懐徳堂研究の総合サイト「WEB 懐徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懐徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懐徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懐徳堂関係資料の調査等の協力

2. 諸活動

(1) 刊行物の発刊

2016年度：『懐徳堂研究』第8号、および「懐徳堂ニューズレター」6号を刊行した。

2017年度：『懐徳堂研究』第9号を刊行した。「懐徳堂ニューズレター」の刊行を停止した。

なお、『懐徳堂研究』とニューズレターのバックナンバー（刊行後1年を経過したもの）は、懐徳堂研究センターHPからPDFファイルとしてダウンロードできるように設定している。

(2) ホームページの更新……旧「懐徳堂センター」時代から引き継がれていたホームページを一新した。センターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懐徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーをPDFファイルで提供するなど、大幅なりニューアルを完成し、逐次更新している (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)。

(3) 大阪大学中之島センターにおけるレプリカ展示……懐徳堂文庫の貴重資料である入徳門聯、天図などのレプリカを、中之島センター1階ロビーにて常設展示している。

(4) 展覧会の開催

2016.10.22～12.22、大阪大学総合学術博物館第20回企画展「大阪の誇り ―懐徳堂の美と学問―」（文学研究科共催）を待兼山修学館において開催した。

(5) シンポジウムの開催

2017.1.22、シンポジウム「懐徳堂研究と女学生文化」をグランフロント大阪北館ナレッジキャピタル「The Lab.」2階アクティブスタジオにおいて開催した。

(6) 資料調査

2016年度：三木研司氏所蔵中井竹山書添付屏風（仮）に関する調査を行った。

(7) 寄贈品の受け入れ

2017年度：宮武氏より寄贈された「答宮武生書」「萬年先生遺筆」を受け入れ、基調資料室に収蔵した。加地伸行氏寄贈の図書・器物（加地文庫）の保管および調査を行った。

(8) その他

来訪者の見学、各種資料調査に随時対応した。

3. 運営上の課題

2009年5月に懷徳堂研究センターが発足して以来、センター実務はセンター長・研究員・職員が担当しているが、センター長・研究員はいずれも文学研究科教員が兼務し、職員も非常勤であるなど、上記のような膨大な業務を適切に行うに十分な体制が整っているとは言えない。文学研究科予算が減少をつづけている状態を踏まえて、運營業務を抜本的に見直す必要に迫られている。

見直しの第一歩として、2017年度から「懷徳堂ニューズレター」の刊行を停止したほか、懷徳堂画像データベースの運用を停止した。今後も、真に重要な業務に各種リソースを集中すべく、業務の見直しを続けてゆく必要がある。

(浅見 洋二)

活動の概要とその特色

2016年度・2017年度の専任スタッフは中久保辰夫助教の1名である。2016、2017年度は金水敏文学研究科長が室長となり、兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦教授の2名が業務を担った。

大阪大学構内には多くの遺跡が存在している。豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として国の遺跡台帳に登録されており、2009年度には吹田キャンパスにおいて遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることになった。また、大阪大学中之島センターでは、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施した。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、文化財保護法の規定に基づき、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が構内遺跡の調査にあっている。

2016年度・2017年度は、吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修および耐震補強・新設工事が引き続き多く実施された。その対応として、発掘調査、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理作業をすすめ、2017年度には成果報告として『埋蔵文化財調査室年報4』を刊行した。さらに大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している出土品の解説、大阪大学21世紀懐徳堂が主催するアウトリーチ活動にも力を注ぎ、精力的な活動を実施している。

現在の組織

教授 2(兼任2) 助教 1

教授：福永 伸哉(兼任)、高橋 照彦(兼任)

助教：上田 直弥

組織の活動

1. 発掘調査

2016・2017年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2016年度】

・吹田地区

3月30日 総合研究棟（文理融合型）新営その他工事に係る立会調査

・豊中地区

4月19日 大阪大学リノベーションセンター取壊しに伴う支障移設工事に係る立会調査

5月6日 基礎理学プロジェクト研究センター新営その他工事に係る立会調査

6月17日 基礎理学プロジェクト研究センター新営その他機械・電気設備工事に係る立会調査

6月1日 全学教育実験棟Ⅰ等改修その他機械・電気設備工事に係る立会調査

9月23日 豊中学生センター時計台設置に係る立会調査

10月3日～14日 待兼山修学館排水管改修工事に係る発掘調査

10月12日 基礎理学プロジェクト研究センター新営その他機械設備工事に係る立会調査

2月15日 豊中総合グラウンド改修工事に係る立会調査

3月4日 正門入構ゲート通信管路敷設工事に係る立会調査

3月21日 基礎理学プロジェクト研究センター新営その他工事に係る立会調査

・箕面地区その他

8月10日 箕面地区留学生会館給湯設備改修工事に係る立会調査

【2017年度】

・吹田地区

6月28日 総合研究棟改修（AR棟）工事に係る立会調査

9月4日 理工学図書館屋外掘削工事に係る立会調査

11月6日 歯学部附属病院立体駐車場に係る立会調査

11月7日 ライフライン（ガス・排水）改修事業に係る立会調査

2月2日 大阪産官学民オープンイノベーション拠点新 営その他工事に係る立会調査

・豊中地区

9月25日 大学会館電気室B種接地極改修工事に係る立会調査

11月16日 大学内水道工事に係る豊中市教育委員会との共同立会調査

11月6日～16日 理学部廃棄物保管庫新営工事に係る発掘調査（1）

1月22日 理学部廃棄物保管庫新営工事に係る発掘調査（2）

・箕面地区その他

11月21日 箕面地区留学生会館給湯設備改修工事に係る立会調査（1）

1月9日 箕面地区留学生会館給湯設備改修工事に係る立会調査（2）

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2016年度】

大阪大学構内出土資料のいちよう祭における展示・解説

21世紀懐徳堂×大阪ガス アカデミックッキング 講師（中久保）

東近江市・歴史に親しむ講座「雪野山古墳の時代」 講師（中久保）

大阪大学UR A 二頁だけの読書会 講師（中久保）

『大阪大学埋蔵文化財調査室年報4』刊行

【2017年度】

大阪中学生サマー・セミナー2017 講師（中久保）

待兼山サイエンスカフェ 講師（中久保）

奈良県・東海旅客鉄道株式会社 奈良学ナイトレッスン 平成29年度第9夜 講師（中久保）

大阪大学×りそな銀行 対話サロン 講師（中久保）

国立民族学博物館 2017年度博物館学集中コースの案内

大阪大学構内出土資料のいちよう祭における展示・解説

大阪府茨木高校学外授業への協力

大阪大学21世紀懐徳堂編集「待兼山PRESS」への寄稿

『埋蔵文化財調査室ニュースレター 第10号』の発行

『大阪大学待兼山遺跡マップ』発行

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。しかしながら、開発件数の増加により 2016 年度・2017 年度におこなわれた埋蔵文化財調査は 21 件を数えるなど依然として多く、そのすべての調査や事前の調整業務、調査後の遺物整理や報告書刊行を専任教員 1 名で対応することには困難が生じつつある。調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務である。

待兼山遺跡は近年の調査成果により、これまで知られていた弥生時代から古墳時代のみならず、古代、中世、近世各時代の遺構・遺物の様相が判明しつつある。2017 年度の理学部廃棄物保管庫新営工事にかかる発掘調査では大正期の家屋を検出し、キャンパス建設以前の土地利用の実態について貴重な手がかりを得ることができた。とはいえ発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多く、今後の調査や整理作業では、これらを学術的に解明したうえで、地域の歴史を復元することに努めたい。

吹田キャンパスに所在する山田丘遺跡に関しては、継続的な調査の実施により、旧地形および地層の堆積状況、そして大規模造成の範囲を把握しつつある。今後も調査を継続することにより、キャンパス内における埋蔵文化財包蔵の有無を確認し、将来的には開発行為に対し、柔軟な対応がはかることができるよう努めたい。

この数年、大阪大学埋蔵文化財調査室への市民講座などの依頼が増加している。キャンパスに眠る文化財の価値を地域に発信するためにも、大阪大学 21 世紀懐徳堂や総合学術博物館をはじめ、近畿地域を中心とした文化財関係機関と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用してアウトリーチ活動をさらに進めていく予定である。

(上田 直弥)

組織・体制

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名（主として、セクシュアル・ハラスメントを担当）、副委員長1名（主として、アカデミック・ハラスメントおよびパワー・ハラスメントを担当）を含む全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談、ならびに解決に当たる。

2016年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

2017年度：委員会メンバー14名(女性7名、男性7名)。

活動状況**2016年度実績**

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明（題目：「ハラスメントに出会ったら」）。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。また、ハラスメント防止対策講演会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学ハラスメント相談室専門相談員）。
4. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
5. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第22回全国集会（広島で開催）に、委員1名が参加。(8月)
7. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)
8. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会を開催。演題：「大学におけるハラスメントと防止の取り組みについて」、講師：杉村直哉さん（関西学院大学ハラスメント相談センター専門相談員）(1月)
9. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を作成。(3月)
10. 年間相談・対処件数は2件。

(浅見 洋二)

2017年度実績

1. 文学部新入生オリエンテーションで、委員長から委員会の活動について説明（題目：「ハラスメントに出会ったら」）。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学研究科新入生オリエンテーションで、パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。また、ハラスメント防止対策講演会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学ハラスメント相談室助教・専門相談員）。
4. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
5. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(4月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第23回全国集会（京都で開催）に、委員1名が参加。(8月)
7. TA研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)

8. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会を下記の通り開催。(12月)

第1部 演題：「大阪大学の SOGI の多様性に関する取組みについて」、講師：本間直樹さん(大阪大学 CO デザインセンター／文学研究科准教授)

第2部 パネルディスカッション：「大学で LGBT などが置かれている現状と課題」、パネラー：安食真城さん(龍谷大学宗教部課長)、龍谷大学 LGBTs 交流サークル「にじりゅう」

9. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を作成。(3月)

10. 年間相談・対処件数は1件。

(山上 浩嗣)

第 2 部

各専門分野・コースにおける

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I. 現在の組織については、教員は2018年4月1日、在學生は2018年5月1日を基準とし、この時点での教員および在學生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2016年度(2017年3月修了・卒業)および2017年度(2018年3月修了・卒業)について記す。

- II. 大学院生の研究業績、受賞等は、2016年度～2017年度に在籍した者が、その在籍期間中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2016年度～2017年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。

- III. 教員の研究活動については、原則として2016年度～2017年度に各専門分野・コースに在職した者のデータを示す。研究業績については2016年度～2017年度の在籍期間中に発表されたものを記載する。2016年度～2017年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2016年度～2017年度にかぎらず記載する。

2-1 哲学 哲学史

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：入江 幸男、舟場 保之
講師：嘉目 道人
助教：三木 那由他

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
27	2	10	0	1	2	0	0

*うち留学生 3名、社会人学生 2名

**哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	6	2	3	1
2017	6	2	0	0
計	12	4	3	1

*哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎セミナーを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフィシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講する。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 12 号、第 13 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフュシカ』第 47 号、第 48 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会もしくは特別講演会を年度内に 2 回程度行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の〈ビデオ・メタフュシカ〉から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。/哲学ワークショップを開催し、院生および学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 12 号、第 13 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフュシカ』第 47 号、第 48 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。海外の研究者を招いた *handai metaphysica* 特別講演会は 4 回、また *handai metaphysica* 研究例会を 1 回開催した。スタッフが国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された〈ビデオ・メタフュシカ〉から、スタッフの最終講義等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際連携を図った。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成された。

3. 社会連携

前記の活動を踏まえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	1	2
2017	0	0	0
計	1	1	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

藤野幸彦 「存在・本質・力能 ——スピノザ形而上学における一義性と同一性——」 2017/3
主査：上野修 副査：入江幸男、須藤訓任

【論文博士】

伊東道生 「哲学史の変奏曲」 2016/10
主査：入江幸男 副査：山口信夫、上野修、舟場保之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	1(0)	4(0)	0(0)	0(0)	5(0)
2017	1(1)	2(0)	3(0)	0(0)	0(0)	6(1)
計	1(1)	3(0)	7(0)	0(0)	0(0)	11(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	3	8	1	0	0	12
2017	1	5	9	0	0	15
計	4	13	10	0	0	27

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

小田裕二郎 「スピノザ『エチカ』における規範という問題」『待兼山論叢』第50号, pp.57-72, 2016/12

立花達也 「《文献紹介》フィリップ・ゴフ編著『スピノザの一元論』『メタフュシカ』第47号, pp.93-98, 2016/12/25

朱喜哲「奈落の際で踊る哲学——ネオ・プラグマティズム第三世代による「表象」概念回復の試み—反表象主義による「表象」の回復——」『メタフュシカ』第 47 号, pp.23-34, 2016/12/25

仲宗根勝仁「意味論的内在主義の擁護に向けて—指示の概念の検討—」『メタフュシカ』第 47 号, pp.35-48, 2016/12/25
三輪泰之「第三アンチノミーの論証と解決のあいだ：なぜ定立と反定立は「真でありうる」のであり「真である」のではないのか」『メタフュシカ』第 47 号, pp.49-62, 2016/12/25

【2017 年度】

〔博士後期〕

天野恵美理「バルクソンにおける外界についての一考察—『意識の直接与件についての試論』から『物質と記憶』第四章にかけて」『待兼山論叢』第 51 号, pp.37-52, 2017/12/25

澤邊興平「推論規則と二項論理をめぐって」『メタフュシカ』第 48 号, pp.29-46, 2017/12/20

立花達也「スピノザにおける身体の変化と同一性」『フランス哲学・思想研究』第 22 号, pp.183-194, 2017/9

立花達也「われらに似たるものと自己の観念：スピノザの感情論を自己認識の理論として読む」『メタフュシカ』第 48 号, pp.47-59, 2017/12/20

朱喜哲「ジェノサイドに抗するための、R.ローティ「感情教育」論再考」『待兼山論叢』第 51 号, pp.53-68, 2017/12/25

米田恵「カントにおける〈法の道徳からの独立〉と〈法の道徳への依存〉の整合性」『メタフュシカ』第 48 号, pp.75-88, 2017/12/20

(2) 口頭発表

【2016 年度】

〔博士後期〕

阿部倫子「表出される世界のパースペクティヴ —ライプニッツにおける世界と知覚表象」, 日本哲学会第 75 回大会, 京都大学吉田キャンパス, 2016/5/15

阿部倫子「ライプニッツにおけるモノダの表出作用と選択肢の熟考」, 関西哲学会第 69 回大会, 大阪大学吹田キャンパス, 2016/10/22

小田裕二郎「スピノザにおける行為と認識」, 関西哲学会第 69 回大会, 大阪大学吹田キャンパス, 2016/10/22

Tachibana Tatsusya“Understanding Things as Necessary in Spinoza’s Theory of Affect”, Chulalongkorn University - Osaka University International Joint Conference: Frontiers of Philosophical Investigation in Asia, Chulalongkorn University, 2016/7/17

立花達也「スピノザにおける部分と全体——書簡 32 の読解から『エチカ』へ」, スピノザ協会第 65 回研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3/19

朱喜哲「反表象主義による「表象」の回復——ネオ・プラグマティズム第三世代のローティからの継承と離反——」, 第 3 回アメリカ哲学フォーラム, 京都大学吉田キャンパス, 2016/6/12

仲宗根勝仁「直接指示論はモンスターと共存できるか」, 応用哲学会第 8 回大会, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2016/5/7

Nakasone Katsuhito“Semantic internalism and individualism”, Chulalongkorn University - Osaka University International Joint Conference: Frontiers of Philosophical Investigation in Asia, Chulalongkorn University, 2016/7/17

仲宗根勝仁「「土人が！」 —言語行為としての差別—」, 2016 年度世界哲学の日記念ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/11/26

早瀬勝明「法の存在論と判例」, 関西アメリカ公法学会, 大阪大学中之島センター, 2016/11/26

Higuchi Tomoko, “Spinoza and His Geometric Order, Philosophy and the World”, Graduate International Conference of Philosophy, National Taiwan University, 2016/5

三輪泰之「カントにおける恒常性と自由の因果性」, 日本哲学会第 75 回大会, 京都大学吉田キャンパス, 2016/5/14

【2017年度】

〔博士前期〕

末田圭果「生命倫理とQOLについてのショーペンハウアー哲学による批判的考察——終末医療における人間と医療の関係改善に向けて——」, 第16回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/3/10

〔博士後期〕

立花達也「実体一元論の諸相：現代形而上学の観点から」, ワークショップ：スピノザと現代形而上学, 東京大学本郷キャンパス, 2017/7/15

立花達也「スピノザにおける感情と生理学」, 関西哲学会第70回大会, 大阪体育大学, 2017/10/21

立花達也「最後にスピノザのものとされて残ったもの：イギリス観念論と分析哲学の対立を通して見るスピノザ」, 関西哲学会第70回大会（ワークショップ：一元論の多様な展開）, 大阪体育大学, 2017/10/22

立花達也「人間はいかにして「擬人化」されるのか」, 第16回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/3/10

和泉悠, 朱喜哲, 仲宗根勝仁「ヘイトスピーチの言語哲学的考察」, 応用哲学会第9回年次研究大会シンポジウム, 福山平成大学, 2017/4/23

朱喜哲「「推論」理解の変遷に見るネオ・プラグマティズムの一系譜」, 2017年度哲学若手研究者フォーラム, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2017/7/15

朱喜哲「データによる正当化——ビジネスにおける説得と専門知の権威」, STS Network Japan 夏の学校, 長野県大町温泉郷, 2017/9/14

Heechul Ju「Incarnated Vocabularies and Cultural Politics」, Revisiting Richard Rorty, Universidade do Minho, 2017/9/26

朱喜哲「反表象的自然主義としてのネオ・プラグマティズム」, 関西哲学会第70回大会, 大阪体育大学, 2017/10/22

朱喜哲「データによる正当化と推論主義」, 第50回日本科学哲学会, 東京大学, 2017/11/18

朱喜哲「推論主義からみた統計的因果推論——規範的語用論における因果性の取り扱いに向けて」, 京都推論主義ワークショップ, 京都大学, 2017/12/10

和泉悠, 朱喜哲, 仲宗根勝仁「ヘイトスピーチの言語哲学的考察」, 応用哲学会第9回年次研究大会シンポジウム, 福山平成大学, 2017/4/23

仲宗根勝仁「クリプキ以降の指示の概念の批判的検討」, 第15回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/6/24

仲宗根勝仁「意味の所在：意味論的内在主義と外在主義の論争」, 哲学Dynamite!!, 上智大学, 2017/12/26

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 2名 (計2名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 2名 DC1: 2名 (計4名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

嘉目 道人、博士後期課程修了、大阪大学大学院文学研究科、特任講師(常勤)、2017/11

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 13名

2016年度：5名 2017年度：8名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 11名

*学部卒業者については現代思想文化学との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2016年度：0名 2017年度：0名

9. 刊行物

2016年度 『メタフュシカ』第47号、*Philosophia OSAKA*, No. 12

2017年度 『メタフュシカ』第48号、*Philosophia OSAKA*, No. 13

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

共同研究会「第3回大阪哲学ゼミナール」	2016年9月28日～30日
於：大阪大学文法経済学部本館	
共同研究会「第4回大阪哲学ゼミナール」	2016年12月10日～11日
於：大阪大学文法経済学部本館	
共同研究会「第5回大阪哲学ゼミナール」	2018年3月17日～19日
於：大阪大学文法経済学部本館	
日本フィヒテ協会事務局	2015年4月～2017年3月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

新入生歓迎企画<アラン=マルク・リュ氏講演会>(2016年4月14日(木)、全学教育推進機構総合棟1・ステューデント commons 1階 カルチェ・ミュルチラング)
テーマ「The Power of Thought」 参加者21名。

第20回 handai metaphysica 特別講演会(2016年7月1日、大阪大学文法経講義棟3F「経32教室」)。

発表者：Benjamin Schnieder (Hamburg Universität)

タイトル：Ground and Consequence

参加者21名。

第21回 handai metaphysica 特別講演会(2016年10月28日、大阪大学文法経講義棟1F「文11教室」)。

発表者：B. Gierat-Bieron (Jagiellonian University, Poland)

タイトル：How the EU cultural policy is influencing the phenomenon of *European Identity*

参加者 24 名。

第 22 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2017 年 12 月 25 日、大阪大学文法経講義棟 2F 「法 23 教室」）。

発表者：Halla Kim (Nebraska University, USA)

タイトル：How is the Corruption of the Will Possible? – Kant on natural dialectic and radical evil –

（意志の墮落はどのようにして可能か？ カントの自然弁証法と根源悪について）

参加者 7 名。

第 23 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2018 年 3 月 1 日、大阪大学文法経本館 2F 大会議室）。

発表者：M. Jorge de Carvalho （リスボン新大学）

タイトル：Perception, Extension and Space: Fichte's Final Brush Strokes on Kant's Canvas

参加者 9 名。

第 20 回 *handai metaphysica* 研究例会（2017 年 3 月 3 日、文法経済学部本館大会議室）

大久保歩（現代思想文化学博士後期課程）

国家の死：ニーチェにおける正統性と主権の問題

朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）

奈落の際で踊る哲学??ネオ・プラグマティズム第三世代による「表象」概念回復の試み??

上野修（哲学哲学史教授教授）

スピノザの存在論的實在論

参加者 19 名。

上野修教授最終講義（2017 年 3 月 17 日、文法経済学部本館大会議室）

上野修（哲学哲学史教授）「大いなる逆説スピノザ」

参加者 96 名。

2016 「世界哲学の日」記念哲学ワークショップ（2016 年 11 月 26 日、文経中庭会議室）

テーマ：哲学で考える「悪口／ヘイトスピーチ」

スピーカー和泉悠（日本学術振興会 PD）

コメンテーター朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）、仲宗根勝仁（哲学哲学史博士後期課程、日本学術振興会 DC1）

参加者 21 名。

2017 「世界哲学の日」記念講演会（2017 年 11 月 18 日、文法経済学部本館 2F 大会議室）

タイトル：「ノンヒューマンなものになること、あるいは人間であることの偶然性」

講演者：上野修大阪大学名誉教授

参加者 20 名。

第 3 回大阪哲学ゼミナール（2016 年 9 月 28 日～30 日、大阪大学文法経済学部本館 4F 講義室 461）

9 月 28 日（水）10:30-12:30 “Freedom as a postulate (1)”：Marcus Willaschek (Johann Wolfgang Goethe Universität)

14:00-17:00, „Anwendbarkeit der Diskursethik“

久高将晃（琉球大学）

- 29日(木) 10:30-12:30 “Freedom as a postulate (2)” Marcus Willaschek (Johann Wolfgang Goethe Uni)
 14:00-17:00 „Faktum und Tathandlung der Vernunft. Fichtes
 Auffassung von Kants Lehre des Sittengesetzes“
 嘉目道人(日本学術振興会 PD)
- 30日(金) 10:30-12:30 「超越論的語用論の可能性(1)」
 久高將晃(琉球大学)
 14:00-17:00 「超越論的語用論の可能性(2)」
 嘉目道人(日本学術振興会 PD)

参加者は、のべ18名。

第4回大阪哲学ゼミナール(2016年12月10日-11日、大阪大学文法経済学部本館3F哲学共同研究室A)

テーマ: カント実践哲学の可能性

- 12月10日(土) 10:00-12:00 「アンチノミー論を考える」
 三輪 泰之(哲学哲学史博士後期課程)
- 13:30-15:30 「カントの公法および国家法について」
 石田 京子(慶應義塾大学助教)
- 16:00-18:00 「カントにおける政治的自律とその条件」
 金 慧(千葉大学助教)
- 11日(日) 9:30-11:30 「〈世界共和国〉に関するアンビヴァレンスの法的必然性について」
 米田恵(哲学哲学史博士後期課程)
- 12:30-14:30 「カント的グローバル・エシックスの可能性」
 田原彰太郎(早稲田大学非常勤講師)
- 15:00-17:00 「カント倫理学の二階の主張」
 永守伸年(京都市立芸術大学講師)

参加者は、のべ16名。

第5回大阪哲学ゼミナール(2018年3月17日~19日、大阪大学文法経済学部本館4F講義室467)

テーマ: ナショナリズムと世界市民主義

- 3月17日(土) 9:00-12:00 樽井正義『カント全集 別巻』論文合同大合評会
 13:00-15:00 斎藤拓也(北海道大学准教授)
 「カントにおけるパトリオティズムとコスモポリタニズム」
- 18日(日) 9:00-12:00 金慧『カントの政治哲学』合評会 I (1,2,4,7章)
 コメント: 斎藤拓也(北海道大学准教授)
 田原彰太郎(茨城大学准教授)
- 13:00-15:00 御子柴善之(早稲田大学教授)
 「カントの道徳的世界市民主義—「道徳性」概念の再検討から—」
- 15:30-17:30 寺田俊郎(上智大学教授)
 「健全なナショナリズムのために——日本の現状を直視しつつ」
- 19日(月) 9:00-12:00 金慧『カントの政治哲学』合評会 II (3,5,6,8章)
 コメント: 石田京子(慶應義塾大学助教)
 舟場保之(大阪大学教授)

参加者は、のべ30名。

第15回哲学ワークショップ(2017年6月24日(土) 14:00~16:20、大阪大学豊中キャンパス 文学部棟2F大会議室)

個人研究発表

14:00~15:00 「クリプキ以降の指示の概念の批判的検討」

発表者：仲宗根勝仁(文学研究科・哲学哲学史博士後期課程、DC1)

(司会：小田裕二郎)

パネルディスカッション

15:10~16:20 「専門知の多様性と社会」

発表者：垣本伊守幹(文学研究科・現代思想文化学博士前期課程)

「戦後公害史にみる<法と科学>のインターフェイス」

発表者：中村文彦(文学研究科・現代思想文化学博士後期課程)

「心理学から考える『再現性』問題」

(司会：仲宗根勝仁)

参加者15名。

第16回哲学ワークショップ(2018年3月10日(土) 14:30~17:20、大阪大学豊中キャンパス 文法経本館2F大会議室)

個人研究発表

14:30 - 15:20 人間はいかにして「擬人化」されるのか

発表者：立花達也(文学研究科・哲学哲学史博士後期課程、DC2)

15:30 - 16:20 生命倫理とQOLについてのショーペンハウアー哲学による批判的考察

——終末医療における人間と医療の関係改善に向けて——

発表者：末田圭果(文学研究科・哲学哲学史博士前期課程1年)

16:30 - 17:20 死の害の反事実条件的比較説

発表者：佐々木渉(人間科学研究科・博士前期課程2年)

参加者15名。

12. 教員の研究活動(2016年度~2017年度の過去2年間)

1. 入江 幸男 教授

1953年生。1983年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003年10月から現職。専攻：哲学哲学史

1-1. 論文

Irie, Yukio, "Questions and the Meaning of Identity Sentences" *Philosophia Osaka.*, 13, 文学研究科哲学思想文化学, pp. 21-33, 2018/3

Irie, Yukio, "Semantic Inferentialism from the Perspective of Question and Answer" *Philosophia Osaka.*, 13, 文学研究科哲学思想文化学, p. 39, 2016/12

1-2. 著書

Claude Piche, Tom Tockmore, Irie, Yukio 他, *Transcendental Inquiry: Its History, Methods and Critiques*, Palgrave Macmillan, pp. 233-261, 2017/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

入江幸男, 原田淳平 (共訳) (翻訳、ポール・ホーリッジ (Paul Horwich)) 「真理」『真理』勁草書房, pp. 1-188, 2016/5

1-4. 口頭発表

Irie, Yukio, "Are deictic and anaphoric uses distinguishable? ", Chulalongkorn University—Osaka University International Joint Conference, Frontiers of Philosophical Investigation, Chulalongkorn University, 2016/7

Irie, Yukio, "Ethical Thoughts in modern Japan influenced by the West -- In the case of Tetsurō Watsuji and Keiichirō Hirano --", Euro Culture Master Course 講演会, Euro Culture Master Course, Groningen University, 2016/5

Irie, Yukio, "Ethical Thoughts in modern Japan influenced by the West --- In the case of Tetsurō Watsuji and Keiichirō Hirano --", Euro Culture Master Course 講演会, Euro Culture Master Course, Goettingen University, 2016/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第1回フヒテ協会賞(研究奨励賞), フヒテ協会, 1995/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号: 16K02123

研究題目:心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献

研究経費:2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

「心の哲学に対するドイツ観念論からの貢献」の研究目的:脳研究や人工知能研究の発展に刺激されて盛んになっている、脳のプロセスと心の関係をどうとらえるかを論じる「心の哲学」は非常に重要である。なぜなら、その答えは道徳や法制度をどのように理解するかに関わるからである。その意味で心の哲学は、現代社会にとって重要な喫緊の課題である。ところで、この心の哲学の問題は近代哲学において唯物論と観念論の論争として議論されてきた伝統的な問題でもある。なかでもドイツ観念論にとっては、これは最も基本的な課題であり、彼らは(現代風に言えば)心の哲学に関する一定の立場に基づいて、その上に道徳論や法論を体系的に構築した重要な前例である。心の哲学の探究とそれに基づく実践哲学の構築という現代の課題に対して、ドイツ観念論からの貢献の可能性を探究することが、本研究の目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2004年11月～現在に至る

日本フヒテ協会・常任委員, 1999年11月～現在に至る

2. 舟場 保之 教授

1962年生。1992年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。立命館大学嘱託講師、大阪大学准教授を経て、2017年4月から現職。専攻:ドイツの近代・現代哲学

2-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, "Nationalismus und/ oder Potenzialität des Weltbürgerrechts bei Fichte" *Philosophia OSAKA*, 13, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of

Letters, Osaka University, pp. 35-44, 2018/3

舟場保之他「コミュニケーション論の現代的意義——カントとハーバーマス——」『新・カント読本』法政大学出版局, pp. 325-335, 2018/2

舟場保之「手続きとしての公表性をもつポテンシャルティ」『日本カント研究』(日本カント協会), 18, 知泉書館, pp. 24-37, 2017/7

Funaba, Yasuyuki, "Solidarität und das substantialistische Verständnis der Volkssouveränität" *Philosophia OSAKA*, 12, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 95-104, 2017/3

2-2. 著書

Halla Kim, Steven Hoeltzel, Funaba, Yasuyuki et al., *Transcendental Inquiry Its History, Methods and Critiques*, palgrave macmillan, pp. 285-297, 2017/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

舟場保之「フィヒテにおけるナショナリズムと世界市民法の可能性」第5回大阪哲学ゼミナール, 大阪哲学ゼミナール, 大阪大学(豊中キャンパス), 2018/3

舟場保之「金慧『カントの政治哲学』合評」第5回大阪哲学ゼミナール, 大阪哲学ゼミナール, 大阪大学(豊中キャンパス), 2018/3

舟場保之「『内的国境』論と世界市民法」日本フィヒテ協会第33回大会, 日本フィヒテ協会, 明治大学(中野キャンパス), 2017/11

Funaba, Yasuyuki, "Nationalismus und/ oder Potenzialität des Weltbürgerrechts bei Fichte", 11. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Duisburg-Essen Universität, 2017/9

舟場保之「『グローバル化時代の人権のために』合評」第2回カント法論研究会, 大阪大学, 2017/3

舟場保之「討議倫理学と道徳的認知主義」第1回討議倫理学研究会, 琉球大学, 2017/3

舟場保之「手続きとしての公開性をもつポテンシャルティ」日本カント協会第41回学会, 日本カント協会, 福島大学, 2016/11

Funaba, Yasuyuki, "Solidarität und das substantialistische Verständnis der Volkssouveränität", 10. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium, Johann Wolfgang Goethe Universität, 2016/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005年度前期), 大阪大学共通教育推進機構, 2005/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度~2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:26370016

研究題目:法と道徳の関係に関するカント派および現代の議論の研究

研究経費:2016年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

K.-O. アーペルと J. ハーバーマスは、現代ドイツを代表する哲学者であり、ともにカント主義を標榜するが、ふたりは法と道徳の関係に関してまったく異なった見解をもっており、それがアクチュアルな問題に対して積極的になされる発言にも影響を及ぼしている。法と道徳の関係に関してふたりの見解が異なるのは、それぞれのカント解釈に相違が見られるからだが、これはカント自身の考えが揺れているせいでもあり、カントと同時代のカント派と言われる人たちの間でも、カントについての解釈は一樣ではなかった。本研究では、カント派の代表的な解釈を比較・検討することを通じて、この件に関するカントの議論をもっとも整合的に読む方法を提

示するとともに、それに基づき、現代の論争状況にとって実りのある見解を提示したい。

2-6-2. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:17K02168

研究題目:カントの平和論を現代の議論に接続し新たな提言を行うための理論的研究

研究経費:2017年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

カントは永遠平和を実現する体制として「諸国家連合」を提唱したが、これが後の国際連盟および国際連合の定礎となったことは非常によく知られている。本研究は、カントが『理論と実践』においては「国際国家」ないし「世界共和国」を積極的に評価していたにもかかわらず、『永遠平和のために』において「諸国家連合」を選択せざるを得なかった理論的前提を明確にし、この理論的前提をハーバーマスやルツ＝パッハマンらの現代の平和論に接続することを通じて、カントの議論にはいまなお有効な側面があることを明らかにする。それと同時に、現代的な視点を踏まえて、この理論的前提に必要な修正を加え、逆に現代の平和論によってまだ答えられていない問題に対して解決案を提示する。それは、「諸国家連合」か「国際国家」ないし「世界共和国」か、という二者択一を超えて第三の選択肢を示し、かつこの選択肢の現代における有効性を明らかにすることでもある。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイヒテ協会・委員, 2013年3月～現在に至る

日本カント協会・編集委員, 2012年6月～2016年11月

日本カント協会・常任委員, 2012年4月～現在に至る

日本カント協会・委員, 2007年4月～現在に至る

3. 嘉目 道人 特任講師 (常勤)

1979年生。2015年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員、近畿大学非常勤講師を経て、2017年11月から現職。専攻: 超越論哲学、コミュニケーションの哲学・倫理学

3-1. 論文

Michihito, Yoshime, "On the Precedence of the First-personal Point of View in Contemporary Kantian Moral Arguments" *Philosophia Osaka*, 13, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 45-53, 2018/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

嘉目道人 「討議倫理学におけるフイヒテ的アプローチ——「当事者性」と「普遍」を手掛かりとして——」日本カント協会第42回学会, 日本カント協会, 明治大学中野キャンパス, 2017/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-2 現代思想文化学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 1(兼任) 講師 0 助教 0

教授：須藤 訓任、望月 太郎

准教授：中村 征樹(全学教育推進機構所属・兼任)

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
27	5	8	0	1	2	0	0

*うち留学生3名、社会人学生3名

**哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	6	2	1	0
2017	6	3	1	0
計	12	5	2	0

*哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1年生対象の基礎セミナーを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録をHPにアップする。/博士後期課程の学生には、『メ

タフシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講し、授業外での指導も行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 12 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 47 号を刊行し、Web 上に公開する。/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 *handai metaphysica* の研究例会および特別講演会を行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の〈ビデオ・メタフシカ〉から、さまざまな情報を発信する。/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で哲学教育と国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/英語による授業を開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/院生および学生の哲学に対する関心を深化させた。目標は達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 12 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 47 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。海外の研究者を招いた。集中講義において海外から講師を招き、英語による授業を開講して、学生たちの英語によるディスカッション能力の向上を図った。哲学哲学史専門分野と共同で、*handai metaphysica* 特別講演会、*handai metaphysica* 研究例会を開催した。また、大阪大学国際共同研究促進プログラム(タイプ B)に 1 件の応募が採択され、「日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー」の設置に向けて共同研究を開始し、ワークショップを計 3 回開催した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際ジョイントラボの設置により国際連携を進めている。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標はほぼ達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

国内での学会発表や国外の国際コロキウムへの参加があり、また欧文誌と和文誌発行による研究成果の国内外への発信という点で目標はおおむね達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	0	1
2017	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	1(1)	2(0)	1(1)	0(0)	2(0)	6(2)
2017	2(2)	1(0)	1(1)	0(0)	1(0)	5(3)
計	3(3)	3(0)	2(2)	0(0)	3(0)	11(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	3	0	0	0	3
2017	0	0	7	0	0	7
計	0	3	7	0	0	10

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

- 井西弘樹「ニーチェ「教育者としてのショーペンハウアー」における Genius と人間形成」『教育思想・教授法研究年報』第1号, pp.2-15, 2016/11/20
- 大久保歩「国家の死：ニーチェにおける正統性と主権の問題」『メタフュシカ』第47号, pp.11-22, 2016/12/25
- 谷山弘太「ニーチェ『曙光』における「習俗の倫理」の問題」『関西哲学会年報 アルケー』第24号, pp.78-89, 2016/6
- 谷山弘太「L・コールバーグの道徳教育論における正義 justice と公正 fairness」『教育思想・教授法研究年報』第1号, pp.51-66, 2016/11/20
- 井西弘樹「伝統的倫理学と道徳」田中潤一編著『イチからはじめる道徳教育』, pp. 84-94, 2017/3
- 谷山弘太「普遍的な倫理思想を求めて——ニーチェ以降の倫理学——」田中潤一編著『イチからはじめる道徳教育』, pp. 95-105, 2017/3

【2017年度】

〔博士後期〕

- 井西弘樹「気質から情熱へ—中期ニーチェ哲学の転換点—」『倫理学研究』第47号, pp.65-76, 2017/8
- 井西弘樹「「公共の精神」はいかにして育まれるか—内村鑑三『後世への最大遺物』を題材とした道徳教育の研究—」『教育思想・教授法研究年報』第2号, pp.1-7, 2018
- 入江祐加「反省から客観性へ —ディルタイの精神科学における「心理学」の展開—」『倫理学研究』第47号, pp.158-168, 2017/8
- 上里正男「フランスにおける技術・職業教育と高等教育との接続問題—数学教育、エンジニア科学教育、リセ技術教育課程改革をめぐる—」『現代フランスの教育改革』, pp.248-270, 2018/1
- 西村知紘「ハイデガーにおける解釈と言明の主題化」『メタフュシカ』第48号, pp.61-74, 2017/12/20

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士後期〕

- 井西弘樹「生きる意味としての学問—中期ニーチェにおける「認識」概念の変容をめぐる—」, 2016年度関西倫理学会大会, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2016/11/6
- 谷山弘太「道徳の「価値」を問題にすること—ニーチェ『曙光』における「あらゆる価値の価値転換の試み」」, 2016年度関西倫理学会大会, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2016/11/6
- 谷山弘太「道徳教育論における倫理的相対主義の意義—中期ニーチェの道徳批判から」, 関西教育学会第68回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2016/12/3

【2017年度】

〔博士後期〕

- 垣本伊守幹、中村文彦「専門知の多様性と社会」, 第15回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/6/24
- 井西弘樹「認識者としてのニーチェ」, 京都教育文化センター, 2017/7/2
- 井西弘樹「真理の「血肉化」としての笑い—ニーチェ『愉快な学』における「実験」思想—」, 第27回ニーチェ・セミナー, 大学セミナーハウス, 2017/4/30
- 入江祐加「ディルタイの精神科学における哲学的自己省察」, 日本ディルタイ協会関西研究大会, 京都大谷大学, 2017/7/1
- 谷山弘太「「仮説」としての「力への意志」説—後期ニーチェの「真理」理解」, 第14回ニーチェ研究者の集い, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/9/9
- 垣本伊守幹、中村文彦「専門知の多様性と社会」, 第15回哲学ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/6/24

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016 年度】

[博士後期]

山本哲哉「『文献紹介』ミハイロ・ジュリッチ、ヨーゼフ・ジーモン編著『ニーチェにおける芸術と科学』から」『メタフェシカ』第 47 号, pp.99-105, 2016/12/25

谷山弘太「研究ノート：ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における歴史的哲学」『ショーペンハウアー研究』第 3 号, pp.103-122, 2016/12

【2017 年度】

[博士後期]

中村文彦「<文献紹介>上山隆大著『アカデミック・キャピタリズムを超えて アメリカの大学と科学研究の現在』」『メタフェシカ』第 48 号, pp.133-138, 2017/12/20

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2017 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

2017 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2016 年度～2017 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

入谷秀一 龍谷大学文学部

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016 年度～2017 年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 5 名

2016 年度 : 5 名 2017 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 3 名

* 学部卒業者は哲学哲学史との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2016 年度 : 0 名 2017 年度 : 2 名

9. 刊行物

2016年度 『メタフュシカ』第47号、*Philosophia OSAKA*, No. 12

2017年度 『メタフュシカ』第48号、*Philosophia OSAKA*, No. 13

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- 第13回ニーチェ研究者の集い 2016年9月17日
於：大阪大学豊中キャンパス文経中庭会議室
- 共同研究会「第3回大阪哲学ゼミナール」 2016年9月28日～30日
於：大阪大学文法経済学部本館
- 共同研究会「第4回大阪哲学ゼミナール」 2016年12月10日～11日
於：大阪大学文法経済学部本館
- 第14回ニーチェ研究者の集い 2017年9月9日
於：大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

新入生歓迎企画<アラン=マルク・リュ氏講演会> (2016年4月14日(木)、全学教育推進機構総合棟1・ステューデントコモンズ1階 カルチェ・ミュルチラング)
テーマ「The Power of Thought」 参加者21名。

第20回 *handai metaphysica* 特別講演会 (2016年7月1日、大阪大学文法経講義棟3F「経32教室」)。

発表者：Benjamin Schnieder (Hamburg Universität)

タイトル：Ground and Consequence

参加者21名。

第21回 *handai metaphysica* 特別講演会 (2016年10月28日、大阪大学文法経講義棟1F「文11教室」)。

発表者：B. Gierat-Bieron (Jagiellonian University, Poland)

タイトル：How the EU cultural policy is influencing the phenomenon of *European Identity*

参加者24名。

第20回 *handai metaphysica* 研究例会 (2017年3月3日、文法経済学部本館大会議室)

大久保歩 (現代思想文化学博士後期課程)

国家の死：ニーチェにおける正統性と主権の問題

朱喜哲 (哲学哲学史博士後期課程)

奈落の際で踊る哲学??ネオ・プラグマティズム第三世代による「表象」概念回復の試み??

上野修 (哲学哲学史教授)

スピノザの存在論的實在論

参加者19名。

上野修教授最終講義 (2017年3月17日、文法経済学部本館大会議室)

上野修 (哲学哲学史教授)「大いなる逆説スピノザ」

参加者96名。

2016「世界哲学の日」記念哲学ワークショップ (2016年11月26日、文経中庭会議室)

テーマ：哲学で考える「悪口／ヘイトスピーチ」

スピーカー和泉悠（日本学術振興会 PD）

コメンテーター朱喜哲（哲学哲学史博士後期課程）、仲宗根勝仁（哲学哲学史博士後期課程、日本学術振興会 DC1）

参加者 21 名。

公開セミナー「原子力表象をめぐる」

1 部 中尾麻伊香著『核の誘惑 戦前日本の科学文化と「原子力ユートピア」の出現』合評会

2 部 ドキュメンタリー映画『よみがえる京大サイクロトロン』上映会

主催：大阪大学文学部哲学・思想文化学専修

企画：哲学・思想文化学専修 中村ゼミ

日時：2016年8月8日（月）14：00～17：00

会場：全学教育総合棟 I カルチュ・ミュルチラング

参加者 20 名

公開セミナー「SDI 構想と対峙した専門家たち—Computers in Battle を読む」

ゲスト：喜多 千草 氏（関西大学総合情報学部 教授）

日時：2017年2月24日（金）10:30 から 12:00

会場：大阪大学豊中キャンパス 全学教育推進機構

学生コモンズ 1 階 カルチュ・ミュルチラング

主催：大阪大学文学部哲学・思想文化学専修

共催：公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）

企画：哲学・思想文化学専修 中村ゼミ

参加者 15 名

国際共同研究ワークショップ「東南アジア哲学の可能性 I」

日時：2017年7月25日（火）

主催：日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー（大阪大学国際共同研究促進プログラム・タイプ B）

会場：京都大学文学部会議室

共催：京都大学大学院文学部出口研究室

提題者：出口康夫（京都大学文学研究科）、San Tun（ヤンゴン大学文学部）、清水展（京都大学東南アジア研究所）、Jay Garfield（スミスカレッジ）

参加者 10 名

国際共同研究ワークショップ「東南アジア哲学の可能性 II」

日時：2017年7月26日（水）

主催：日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー（大阪大学国際共同研究促進プログラム・タイプ B）

会場：大阪大学全学教育推進機構セミナールーム

共催：京都大学大学院文学部出口研究室

提題者：望月太郎（大阪大学文学研究科）、Kasem Phenpinant（チュラロンコン大学文学部）、Srinivas Kunchapudi（ボンディチェリ大学文学部）

参加者：8 名。

国際共同研究ワークショップ「東南アジア哲学の可能性 III」

日時：2017年12月22日（金）

主催：日本-ASEAN グローバル哲学研究交流ラボラトリー（大阪大学国際共同研究促進プログラム・タイプB）

会場：京都大学文学部会議室

共催：京都大学大学院文学部出口研究室

提題者：出口康夫、望月太郎、Kasem Phenpinant

参加者6名

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955年生。1983年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学博士（京都大学）。大谷大学助教授、同教授を経て、2004年10月より現職。専攻：西洋近現代哲学

1-1. 論文

須藤訓任「『解釈学的状況』の出生——『存在と時間』第二部の意図したもの——」『メタフィシカ』48, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-15, 2017/12

Suto, Norihide, "Was heißt "Indifferenz"? Zur "Durchsichtigkeit" in Martin Heideggers Sein und Zeit" *Philosophia OSAKA*, 12, Philosophy and History of Philosophy/ Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters Osaka University, pp. 71-94, 2017/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任(書評)「続・ハイデガー読本」秋富克哉・安部浩・古庄真敬・森一郎(編)『週刊読書人』3149, 週刊読書人, pp. 3-3, 2016/7

1-4. 口頭発表

須藤訓任「『解釈学的状況』の出生——『存在と時間』期ハイデガーの学と実存」第50回関西ハイデガー研究会, 関西ハイデガー研究会, 京都大学大学院人間・環境学研究科, 2017/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2007年11月～現在に至る

2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学教育実践センター教授、2012年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。2014年4月、大阪大学海外拠点本部教授・ASEANセンター(バンコクオフィス)センター長(学内派遣)。2017年4月、文学研究科へ帰任。専攻：フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

2-1. 論文

富田紘央, 望月太郎(共著)「世代をまたぐ日本語教育—ベトナム人高校生の日本留学へのニーズと展望」『東海大学国際教育センター紀要(留学生支援教育部門・国際教育部門)』第8号, 東海大学国際教育センター, pp. 91-103, 2018/3

富田紘央, 望月太郎(共著)「留学して日本語で学ぶことの意味—タイ人高校生の日本留学へのニーズと展望—」『日タイ言語文化研究』No. 4, 日タイ言語文化研究所, pp. 23-33, 2017/3

富田紘央, Mochizuki, Taro(共著), 'Thai Students' Preferences in Studying Abroad in Japan and the Japanese Government's Policy on Accepting Foreign Students in Universities', *JSN Journal*, Vol. 6-No. 1, Japan Studies Association in Thailand, pp. 132-146, 2016/6

2-2. 著書

Libing Wang, Wesley Teter, Mochizuki, Taro et al. (共著), *Recalibrating Careers in Academia: Professional Advancement Policies and Practices in Asia-Pacific*, Co-edited by Libing Wang and Wesley Teter, UNESCO Bangkok Office, pp. 167-183, 2017/3

Mochizuki, Taro, Gerhold K. Becker, Soraj Hongladarom et al. (共著), *Energy Ethics: Intergenerational Perspectives in and for the ASEAN Region*, Edited by Roman Meinhold, Konrad Adenauer Stiftung and Guna Chakra Research Center, Graduate School of Philosophy and Religion, Assumption University, Bangkok, Thailand, pp. 3-9, 2016/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Mochizuki, Taro, 'Still continue after Fukushima? Energy Ethics and Courage to Let Go of Nuclear Power', Joint AUSN, Center for Ethics of Science and Technology, and EUBIOS Ethics Institute Roundtable and Conference: Bioethics, Development Ethics, and Global Policy into Action, American University of Sovereign Nations, EUBIOS Ethics Institute, and Center for Ethics of Science and Technology, Chulalongkorn University, Room 815, Maha Chakri Sirindhorn Building, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, 2017/1

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

3. 中村 征樹 准教授

1974年生。2005年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了（博士（学術））。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官を経て、2007年10月より大阪大学大学教育実践センター准教授。同年11月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

3-1. 論文

中村征樹「技術と学問のあいだ—実学化と純化に揺れた革命期の学問」『学術の動向』22(2), pp. 32-36, 2017/2

中村征樹「科学者の社会的責任と科学者倫理—科学技術イノベーション政策の展開と研究不正問題—」『科学史研究』55(278), pp. 165-171, 2016/7

中村征樹「研究不正問題をどう考えるか—研究公正と「責任」の問題—」『哲学』67, pp. 61-79, 2016/4

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村征樹, 松行輝昌, 朴寿美「バトルから読書へ—書評対決・ビブリオバトル・ショセキカという挑戦—」全国大学生活協同組合連合会教職員委員会監修『大学教育と読書：大学生協からの問題提起』大学教育出版, pp. 109-111, 2017/10

中村征樹「「ドーナツの穴」から考える学問の現在」『看護研究』50-4, pp. 335-339, 2017/7

中村征樹「池島から考える日本社会のこれまでとこれから」黒沢永紀著『池島全景 離島の《異空間》』三才ブックス, pp. 144-145, 2017/5

中村征樹「研究不正問題についてどう考えるか—STAP問題を切り口に—」『科哲』18, pp. 5-10, 2017/1

3-4. 口頭発表

中村征樹「若手看護学研究者への期待—若手アカデミーの経験から」第37回日本看護科学学会学術集会, 日本看護科学学会, 仙台国際センター, 2017/12

中村征樹「日本の研究公正の現状と課題」第88回 現代科学技術論研究会, 国士舘大学, 2017/12

中村征樹「戦後の石炭政策と産炭地」, 科学技術社会論学会第16回年次研究大会, 九州大学, 2017/11

中村征樹「市民のための科学教育」日本科学教育学会第41回年会シンポジウム『科学教育とは何か』, 日本科学教育学会, サポート高松, 2017/8

中村征樹「炭鉱島の形成—長崎県池島炭鉱の事例」日本科学史学会第64回年会, 日本科学史学会, 香川大学, 2017/6

中村征樹「日本の研究公正の現状と課題」, 科学技術社会論学会, 北海道大学, 2016/11

中村征樹「大学教育と産炭地：大阪大学池島プロジェクト」第6回全国石炭産業関連博物館等研修交流会, かもい岳温泉, 2016/10

中村征樹「研究不正再考—研究不正行為・好ましくない研究行為の類型学」第67回大会主題別討議「研究公正の最前線」, 日本倫理学会, 早稲田大学, 2016/10

中村征樹「バトルから読書へ—書評対決・ビブリオバトル・ショセキカという挑戦」2016 全国教職員セミナー in 岡山, 全国大学生活協同組合連合会, 岡山市コンベンションセンター, 2016/9

中村征樹「研究倫理教育をめぐる現状と展望」IDE 大学セミナー—研究倫理教育の挑戦—不正防止から能力構築へ—, IDE大学協会近畿支部, 京都大学, 2016/8

中村征樹「技術と学問のあいだ—実学化と純化に揺れた革命期の学問」日本学術会議公開シンポジウム融合を問う—学問の消滅と生成の系譜学から, 日本学術会議若手アカデミー—学術の未来検討分科会, 日本学術会議, 2016/7

中村征樹 「長崎県池島炭鉱と戦後日本の石炭政策」第63回年会, 日本科学史学会, 工学院大学, 2016/5

中村征樹 「研究不正問題をどう考えるか—研究公正と「責任」の問題」学協会シンポジウム科学と社会と「研究公正」, 日本哲学会, 京都大学, 2016/5

中村征樹 「研究不正」東大科哲の会総会, 東大科哲の会, 東京大学, 2016/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術会議・連携会員, 2017年10月～現在に至る

日本医療研究開発機構・課題評価委員, 2017年4月～現在に至る

京都府立医科大学・評価会議外部委員 (AMED 研究公正高度化モデル開発事業), 2017年4月～現在に至る

大阪成蹊大学・大阪成蹊短期大学・運営諮問委員, 2016年8月～現在に至る

大阪大学生活協同組合・理事, 2016年6月～現在に至る

一般財団法人公正研究推進協会・理事, 2016年4月～現在に至る

IDE 大学協会近畿支部・事業実施委員会委員, 2016年4月～現在に至る

大阪府立大学 21 世紀科学研究機構研究公正インスティテュート・客員研究員, 2016年4月～現在に至る

文部科学省 公正な研究活動の推進に関する有識者会議・委員, 2015年4月～現在に至る

特定非営利活動法人 ratik・理事, 2013年1月～現在に至る

4. 藤田 公二郎 助教

1980年生。2015年パリ東大学人文科学研究科哲学専攻博士課程修了。博士(哲学)。2016年4月より現職(2018年3月退職)。専攻: 西洋現代哲学。

4-1. 論文

藤田公二郎 「フーコーの身体概念」, 『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 51, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-17, 2017/12

藤田公二郎, 「傅柯的哲学如何行旅?」, 林士鈞訳, 『文化研究季刊』(文化研究學會), 159, 文化研究學會, pp. 25-31, 2017/9

Fujita, Kojiro, "Comment la philosophie de Foucault voyage-t-elle?", *Philosophia OSAKA*, 12, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Graduate School of Letters, pp. 105-113, 2017/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

藤田公二郎「博士論文紹介『主体化の哲学のために—ミシェル・フーコー研究』」, 公開セミナー「フーコー研究の現在」, 大阪
大学文学部哲学・思想文化学専修中村征樹ゼミ, 大阪大学, 2018/3

藤田公二郎「博士論文報告『主体化の哲学のために—ミシェル・フーコー研究』」, 共同研究「フーコー研究—人文科学の再批
判と新展開」第1回例会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学, 2017/5

藤田公二郎「狂気の呼び声—フーコーの超越論的考古学とその自己解体」, 2017 年春季研究大会, 日仏哲学会, 立命館大
学, 2017/3

Fujita, Kojiro, “Comment la philosophie de Foucault voyage-t-elle?”, Young Scholar’s Forum “Critical Theories and Local
Societies: How do philosophy, theories and concepts travel?”, Institute of Social Research and Cultural Studies, National Chiao
Tung University (Taiwan), 2016/6 (*Critical Theories and Local Societies: How do philosophy, theories and concepts travel?*, pp.
21-35, 2016/6)

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 1(兼任) 講師 1 助教 0

教授：堀江 剛

准教授：本間 直樹(兼任)

講師：小西真理子

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
21	4	9	0	0	0	2	0

*うち留学生 2名、社会人学生 4名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	11	4	2	1
2017	3	6	0	6
計	14	10	2	7

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

当分野は、現代社会における大小さまざまな問題（例えば、科学技術、医療、看護、介護、福祉、教育、アート、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、学部生には「倫理学基礎」等の授業により倫理学の基礎知識を吸収させるよう務め、院生には「臨床哲学講義」「社会哲学講義等の授業により過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にすることを目指した。また分科会形式をとる授業を設定することで、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することを目標とした。また、外国語（主として英語）の発信能力を組織的に養成す

ることを、さらに、生命・医療の倫理学および人間学については、先端的テーマに関する教育を提供することを目標とした。

また、社会人院生が多いため、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、社会人学生教育の支援をするチューターを院生のなかから雇うとともに、社会人学生の職場と研究室での教育をつなぐ支援コーディネータ（ゲストスピーカー）を招聘して、社会人学生のモチベーションを高めるとともにネットワークを作ることを目標とした。

2. 研究

教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、研究に関しては、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。また、そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。さらに、その活動の一環として、他方では任意団体 Café Philo と連携してさまざまな地域で定期的に哲学カフェを開催し、CO デザインセンター連携して、哲学的対話の文化を社会に浸透させることを目標とした共同研究を行った。さらに、学内に結成されている医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進することを目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実化させることを目標とした。大学外のような職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させることでその教育的な意義も視野に入れた形で、社会連携につながる活動を行った。また、そういった研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。さらに、任意団体 Café Philo と連携しながら、研究活動に関係する事柄について各種のイベントを実施することでじかに市民との交流を図ることを目標とした。また、大阪大学中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 2~3 回の「超高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度~2017 年度)

1. 教育

学部生には「倫理学基礎」等の授業を通して倫理学の基礎知識を吸収させるとともに、院生には「臨床哲学講義」「社会哲学講義」等の授業を通して、過去の哲学思想の振り返りに基づく臨床哲学の理念の明確化を実施した。分科会形式をとる授業では、学生が積極的にイニシアティブをとり、学生の自主性を促進することに成功している。それらの成果として、学生がグループを形成して学外におけるワークショップに積極的に取り組んだり、哲学カフェを企画運営したり、身近なところで「臨床哲学」的なテーマを開拓してそれを研究的なものに結びつけたりしている。外国語の発信能力の養成についても、英語で行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたりして対応した。院生・社会人院生には、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、社会の現場と研究室での教育をつなぐ支援コーディネータ（ゲストスピーカー）を招聘して、社会人学生のモチベーションを高めるとともにネットワークを作ることを推進した。

2. 研究

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行った。これらは企業・自治体・NPO などからも注目を集めた。また、これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な、またインターンシップにもつながる経験を積んだ。また任意団体 Café Philo と連携して、さまざまな地域で定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用いつつ、京都の洛星高校でこれまで 12 年間にわたり、学生を巻き込んで、あるいは学生の企画運営を監督しつつ、哲学の授業を行った。共同研究については、韓国

江原大学哲学科とともに「哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー」を共同開催、「東アジア哲学会議」を単独開催した。また、教員が韓国で開催された International Conference On Philosophical Counseling & Therapy において研究発表を行った。

3. 社会連携

洛星高校など学外での哲学の授業の実施など、大学の内外を越境する研究に従事し、かつそのような研究に学生もイニシアティブをとって従事するよう促し、かつそれに成功した。また、中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年3回の「超高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、毎回100人程度の参加者があり、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることに成功した。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

臨床哲学の理念の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育の目標としたのであるが、それについては大学内での授業および大学外と連携した活動への従事という点で、両者ともその目標は達成できたものと考えている。

2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、およびその研究成果を広く社会に発信するという点など、いずれの目標も達成されたものと考えている。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものとする。また、社会からの認知および反響もえられた。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	0	1
2017	6	1	7
計	7	1	8

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

川崎唯史「メルロ＝ポンティと生き方の問い：交流の問題を中心に」2017/2/6

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、村上靖彦、加國尚志

前原なおみ「老衰死という現象」2018/1/4

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、西村ユミ

永浜明子「ひとつひとつの関係性からみた自閉症スペクトラム：アスペルガー症候群と診断された青年との歩みから」
2018/1/25

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、長積仁

日高悠登「わが国における看取りへの視座：宗教者によるケアの臨床哲学的探求から」2018/2/7

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、ほんまなほ

山口弘多郎「フッサー『危機』における公式の意味の問題」2018/2/9

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、三村尚彦

正置友子「メルロ＝ポンティと〈子どもと絵本〉の現象学：子どもたちと絵本を読むということ」2018/2/13

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、ほんまなほ、中岡成文

中川雅道「探求のある風景：Philosophy for Children について考えたこと」2018/2/13

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、ほんまなほ、中岡成文

【論文博士】

堀寛史「痛みのある存在意義：臨床哲学と理学療法学の視座」2017/6/8

主査：浜渦辰二 副査：堀江剛、中岡成文、奈良勲

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	4(4)	0(0)	8(4)	1(0)	2(0)	15(8)
2017	0(0)	0(0)	6(6)	0(0)	0(0)	6(6)
計	4(4)	0(0)	14(10)	1(0)	2(0)	21(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	9	3	0	0	12
2017	1	2	1	0	8	12
計	1	11	4	0	8	24

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2017年度】

〔博士前期〕

三ツ田枝利香「ひとりの人が自宅で暮らす中で“食べられなくなっていくこと”について考える『臨床哲学』第19号、pp.156-172, 2018/3 (活動報告)

〔博士後期〕

小川長「経営学における倫理に関する小論」尾道市立大学経済情報論集、第17巻1号、pp.27-39, 2017/7

小泉朝未「ダンスワークショップで実現する表現の考察」『メタフェシカ』48号、pp.89-102, 2017/12

竹内幸子「精神科病院での集団音楽療法を考える：関係し合う時間の中で」『メタフェシカ』48号、pp.103-116, 2017/12

永浜明子「わたしの考える「臨床哲学」と「当事者研究」『臨床哲学』19号、pp.3-16, 2018/3

前原なおみ「看護師にとって老衰死とはどのようなものか：「祝い熨斗の菓子箱」看護師Bさんの語りから」『臨床哲学』

(2)口頭発表

【2017年度】

〔博士前期〕

萩野彩香「女性のための哲学カフェ」実践」哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー、2017/8/8

Zach, Victoria「ソーシャル・インクルージョンをエピソードで描く」実践」哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー、2017/8/8

三ツ田枝利香「Tさんが自宅で暮らすということを支えるということ：訪問看護師としての体験より」実践」哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー、2017/8/8

菊竹智之「私は踊っている：福祉施設のダンスに見る表現の主体」哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー、2017/8/8

三ツ田枝利香「ひとりの人が自宅で暮らすことを支える：訪問看護師としての体験より」第95回臨床実践の現象学研究会、2017/11/4

〔博士後期〕

竹内幸子「A Venue Consisting of a New King of Care: Focusing on Relationships In a Cooperative Venue」第15回世界音楽療法大会、2017/7/4-8

高原耕平「Guilt and Numbing: R. J. Lifton's Philosophy of Survival」Osaka University Japanese Studies Workshop、2017/7/22

高原耕平「戦争と心的外傷」哲学相談治療・臨床哲学国際合同セミナー、2017/8/8

日高悠登「リングス思想とスピリチュアリティ」日本宗教学会第76回学術大会、2017/9/16

高原耕平「ナイ・チャイ・パーブ：タイ南部スマトラ沖地震津波被災による仏教用語に依拠した罪責感表現について」日本災害復興学会2017神戸大会、2017/9/31 (ポスター発表)

高原耕平「疎外と時間：20年目の復興住宅での対話から」日本災害復興学会2017神戸大会、2017/10/1

高原耕平「R.J.リフトンのサバイバー研究における「贖罪感も同心円」理念の倫理的な可能性」関西倫理学会2017/11/19

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2017年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

計 1名

2016年度：0名

2017年度：1名

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2016年度：0名 2017年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2016年度：0名 2017年度：1名

9. 刊行物

2016年度 『臨床哲学 vol.18』

2017年度 『臨床哲学 vol.19』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第39回臨床哲学研究会	2016年7月30日
第40回臨床哲学研究会	2017年3月21日
第41回臨床哲学研究会	2017年7月29日・8月27日
哲学相談治療・臨床哲学 国際合同セミナー	2017年8月7-9日
東アジア哲学会議	2018年1月29日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第35回大阪大学医療人文学研究会 2017年2月25日

第36回大阪大学医療人文学研究会 2017年7月22日

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 浜渦 辰二 教授

1952年生。1984年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学。文学博士（九州大学）。1989年、九州大学文学部助手。1991年、静岡大学人文学部助教授。1996年、同教授。2008年4月より現職（2018年3月退職）。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

1-1. 論文

浜渦辰二「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす：活動報告」池田喬・合田正人・志野好伸『異境の現象学—（現象学の異境的展開）の奇跡 2015-2017』pp. 231-258, 2018/3

Hamazu, Shinji, "On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology"『臨床哲学』19, 臨床哲学研究室, pp. 79-94, 2018/3

浜渦辰二「フッサールにおける「できる／できない」の現象学」京都大学哲学論叢刊行会『哲学論叢』44, 京都大学哲学論叢刊行会, pp. 16-27, 2017/12

浜渦辰二「ケアの臨床哲学～生老病死の現場から～」『椋山人間学研究』12, 椋山女学園 椋山人間学研究センター, pp. 23-33,

2017/3

Hamauzu, Shinji, "To Live Together With Others —from Husserl's Phenomenology of Intersubjectivity"『臨床哲学』18, 臨床哲学研究室, pp. 191-205, 2016/12

1-2. 著書

浜渦辰二 『可能性としてのフッサール現象学—他者とともに生きるために—』晃洋書房, 487p., 2018/3

Hamauzu, Shinji, *On Development from Husserl's Phenomenology - Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring* -, 大阪大学大学院文学研究科, 310p., 2018/3

浜渦辰二 『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』大阪大学出版会, 2018/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高山佳子, 浜渦辰二(共訳) 「インガ・レーマー「最大限の価値に到達するマシーン」から道理にかなう愛ある人間へ——フッサールの倫理学における主観性」『臨床哲学』18, 臨床哲学研究室, pp. 175-190, 2016/12

1-4. 口頭発表

浜渦辰二 「日本における終末期ケアの現状」2017年度臨床死生学・倫理学研究会: エンドオブライフ・ケアの日中う比較, 東京大学大学院人文社会系研究科死生学・応用倫理センター, 東京大学, 2018/2

浜渦辰二 「看護の原点について考える」平成 29 年度在宅ターミナル検収, 静岡県訪問看護ステーション協議会, アクトシティ浜松交流研修センター, 2018/2

Hamauzu, Shinji, "Zwei Wege der Klinischen Philosophie in Japan", :Phaenomenologische Pscychopathologie und Psychotherapie, Klinik fuer Allgemeine Psychiatrie, Ruprecht-Karls-Universitat Heidelberg, Germany, 2017/12

Hamauzu, Shinji, "Die Begriffe "Verhaeltnis", "Amae" und "Aida" im Vergleich", Institute fuer Japanologie, Ruprecht-Karls-Universitaet Heidelberg, Germany, 2017/12

Hamauzu, Shinji, "Phenomenology, Clinical Philosophy and Ethics", International Conference, Korean Society for Phenomenology, Seoul National University, Korea, 2017/12

浜渦辰二 「意思決定支援について」研修会, 庄内地域包括支援センター, 豊中市労働会館, 2017/12

浜渦辰二 「グループホームでの義母の看取り」「看取り」セミナー&カフェ, 患者のウェルリビングを考える会, 神戸市東灘区民センター, 2017/11

浜渦辰二 「日本における終末期ケアの現状」講演会, 東アジア研究センター・日本学研究所・翻訳通訳学科, ハイデルベルク大学, ドイツ, 2017/11

浜渦辰二 「大阪大学での10年間」第70回大会ワークショップ: これまでの哲学教育、これからの哲学教育, 関西哲学会, 大阪体育大学, 2017/10

浜渦辰二 「死に行く患者のための家族によるケア—尊厳死を法制化すべきなのか?—」NCCU-OU Workshop on Clinical Philosophy, 政治大学哲学科, 政治大学、台湾, 2017/9

浜渦辰二 「日本における精神医療」中山大学心理健康教育センター講座, 広州中山大学, 広州中山大学附属第三病院、中国, 2017/9

浜渦辰二 「日本における医療倫理」中山大学心理健康教育センター講座, 広州中山大学, 広州中山大学附属第三病院、中国, 2017/9

浜渦辰二 「高齢者ケアにおける自己決定を考える」, 〈ケア〉を考える会(第113回), 京都市山科区の民家, 2017/7

浜渦辰二 「共同研究のためのイントロダクション」科研「北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学」第2回研究会, 科研プロジェクト, 明治大学駿河台キャンパス, 2016/12

浜渦辰二 「事前指示と事前ケア計画の比較」シンポジウム「超高齢社会のなかでACPを考える」, 大阪大学「ケアの臨床哲学」研究会, 大阪大学中之島センター, 2017/7

- 浜渦辰二 「意思決定支援について—二人の母を見送った体験から—」研修会, 大阪市中央区介護事業者, 大阪市中央区在宅サービスセンター, 2017/7
- Hamauzu, Shinji, “On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology”, Annual Conference: Phenomenology and the Body, Nordic Society for Phenomenology, Norwegian University for Science and Technology, Norway, 2017/6
- 浜渦辰二 「看護の原点を見つめて—臨床哲学の視点から—」第18回学術集会: 赤十字看護の原点を見つめて, 日本赤十字看護学会, 北九州国際会議場, 2017/6
- 浜渦辰二 「ドイツの介護保険、後見人制度、事前指示書」講演会「超高齢社会のなかドイツに学ぶ」, 大阪大学「ケアの臨床哲学」研究会, 大阪大学中之島センター, 2017/3
- 浜渦辰二 「フッサール現象学における「能力と障がい」の問題について」講演会, 中国・廣州中山大学, 中国・廣州中山大学, 2017/3
- 浜渦辰二 「現代日本における終末期医療の問題」研究会, 中国・香港中文大学, 中国・香港中文大学, 2017/3
- 浜渦辰二 「海外との比較でケアを考える」シンポジウム「超高齢社会のなかでこれからのケアを考える」, 大阪大学「ケアの臨床哲学」研究会, 大阪大学中之島センター, 2017/2
- 浜渦辰二 「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」第3回講演会「ケア・ジェンダー・いのち: 北欧における現象学の展開」, 明治大学人文科学研究所総合研究「現象学の異境的展開」, 明治大学駿河台キャンパス, 2017/1
- 浜渦辰二 「ACPを知る～ACPの功罪～」2016年度第5回リビングウィル作成会「エンディングノートとリビングウィルノート」, 患者のウェル・リビングを考える会, あすてっぷ KOBE, 2017/1
- 浜渦辰二 「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす」第3回講演会: ケア・ジェンダー・いのち: 北欧における現象学の展開, 明治大学人部科学研究所総合研究「現象学の異境的展開」, 明治大学, 2017/1
- Hamauzu, Shinji, “On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology”, The 7th PEACE Conference: Phenomenology of Dis/Ability, Phenomenology for East Asia Circle, Tokyo University, Komaba Campus, 2016/12
- 浜渦辰二 「老いと若さの対立を越えて」第48回大阪大学公開講座, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2016/12
- 浜渦辰二 「ケアの臨床哲学～生老病死の現場から～」創立111周年記念 相山フォーラム, 相山女学園, 相山女学園大学 星が丘キャンパス, 2016/12
- Hamauzu, Shinji, “On Dis/Ability in Husserl’s Phenomenology”, The 7th PEACE Conference “Phenomenology of Dis/Ability”, Phenomenology for East Asian Circle, The University of Tokyo, Komaba I Campus, 2016/12
- 浜渦辰二 「看護ケアにおける臨床哲学的アプローチ」開設10周年記念講演, 甲南女子大学看護リハビリテーション学部看護学科, 甲南女子大学 芦原講堂, 2016/11
- 浜渦辰二 「こころの苦しみ～終末期鎮静を考える～」20周年企画「こころの時代の緩和ケア」, 姫路聖マリア病院緩和ケア病棟, 姫路聖マリア病院タボールホール, 2016/10
- 浜渦辰二 「セデーションについて知る、考える」2016年度第4回リビングウィル作成会「がんになったら」, 患者のウェル・リビングを考える会, 東灘区民センター, 2016/9
- Hamauzu, Shinji, “Phenomenology, Clinical Philosophy and Medical Ethics in End-of-Life Care”, NIIDS Seminar Series: Phenomenology: An Interdisciplinary Dialogue, Hong Kong Shue Yan University, Hong Kong Shue Yan University, China, 2016/9
- Hamauzu, Shinji, “To Live Together With Others – From Husserl’s Phenomenology of Intersubjectivity –”, 人文哲学60年, Renmin University, Beijing (China), 2016/9
- 浜渦辰二 「植物状態になったら—脳死とどうちがうの?—」2016年度第3回リビングウィル作成会「植物状態になったら」, 患者のウェル・リビングを考える会, あすてっぷ KOBE, 2016/6
- 浜渦辰二 「障がいもちながら老いることと、老いるとともに障害をもつことの間」2015年度第5回リビングウィル勉強会「障がいをもつこと、老いること—障害者の自立支援と「65歳」問題(介護保険優先の規定)—」, 患者のウェル・リビングを考える会, あすてっぷ KOBE, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2016年度～2018年度、基盤研究(B) 一般、代表者:浜渦辰二

課題番号:

研究題目:北欧現象学者との共同研究に基づく傷つきやすさと有限性の現象学的研究

研究経費:2016年度 直接経費 3,600,000円 間接経費 1,080,000円

2017年度 直接経費 3,200,000円 間接経費 960,000円

研究の目的:

日本の現象学者と北欧現象学者の交流が始まって8年が経ち、これまで先行してきた独・仏・米といった国々の現象学者とは少し異なる研究の交流が行われて来ている。その違いは、北欧諸国が福祉とケアの先進国であること、その事と連動して女性の研究者が多いこと、こうしたことが背景にあるように思われる。その特徴を人間の傷つきやすさと有限性に着目した現象学の動向として捉え、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性といった問題の広がりを経験学的に考察する共同研究を行うことが、本研究の課題である。本研究は、当事者の視点から考察を始めることで、社会の側からの視点ではこぼれ落ちてしまう現象を解明し、ひいては、超高齢社会、少子化、男女共同参画といった現代社会の諸問題の解明にも貢献することが期待される。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学研究倫理委員会・委員, 2013年9月～2017年3月

九州大学哲学会・委員, 2005年4月～現在に至る

日本現象学会・委員, 2000年4月～現在に至る

西日本哲学会・委員, 2000年4月～2017年3月

静岡大学哲学会・幹事, 1991年4月～現在に至る

2. 堀江 剛 教授

1961年生。2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（臨床哲学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2003年）。2004年、広島大学総合科学部助教授。2007年、同准教授。2011年、同教授。2016年4月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

堀江剛 『ソクラテック・ダイアローグ:対話の哲学に向けて』大阪大学出版会, 233p., 2017/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Horie, Tsuyoshi, "Philosophy as a Therapy: Spinoza and Philosophical Counseling", International Conference On Philosophical

Counseling & Therapy, 江原大学(韓国), 江原大学(韓国), 2017/12

堀江剛「組織における対話と哲学」哲学相談治療・臨床哲学 国際合同セミナー, 江原大学(韓国)哲学相談治療、大阪大学臨床哲学, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2019年度、挑戦的萌芽研究、代表者:堀江剛

課題番号:17K18462

研究題目:組織における価値の働きに関する臨床哲学的研究

研究経費:2017年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究の目的は、組織、特にヒューマンサービス組織において「価値がどのように働いているか」を、理論・方法に関する新たな試みによって解明することである。すなわち、理論的には哲学・倫理学と組織論における分野横断的な交流を通して、方法的には哲学対話を用いた独自の研究調査方法によって。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. ほんま なほ (本間 直樹) 准教授

1970年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士(大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005年4月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に着任し、文学研究科を兼任。2006年4月より現職。専攻:哲学/倫理学/臨床哲学

3-1. 論文

ほんま なほ 「語る主体になる:語りあいの活動と対話の経験を書くことについて」『臨床哲学』19, 臨床哲学研究室, pp. 46-91, 2018/3

3-2. 著書

高橋 綾, 本間直樹(共著)『こどものてがつく:ケアと幸せのための対話』大阪大学出版会, pp. 3-11, 2018/3

梅原賢一郎, 本間直樹, レジーヌ・ショピノ他(共著)『身体感覚の旅』大阪大学出版会, pp. 121-139, 2017/1

森下静香, 光島貴之, 本間直樹他(共著)『ソーシャルアート:障害のある人とアートで社会を変える』学芸出版社, pp. 206-212, 2016/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

ほんま なほ 「臨床哲学とフェミニズム」東アジア哲学会議, 東アジア哲学会議, 大阪大学, 2018/1

Homma, Naho, (招待講演)“Philosophical Practice and Writing”, Internatinal Conference on Philocophical Counseling &Therapy,

Kangwon University BK+, Kangwon University, 2017/12(*Seaching gor the various Methods of Philosophical Counseling and Therapy*, pp. 39-56, 2017/12)

ほんま なほ 「哲学者のメチエ:分断と排除をうみださないために」臨床哲学研究会, 臨床哲学研究会, 大阪大学, 2017/8

高橋綾, 本間直樹 (招待講演)「Safe Community of Inquiry と死の臨床」第40回死の臨床研究会年次大会, 死の臨床研究会, 札幌コンベンションセンター, 2016/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アートミーツケア学会・理事, 2006年10月～現在に至る

2-4 中国哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 1

教授：湯浅 邦弘
講師：辛 賢
助教：草野 友子

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	3	2	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	1	0	0	1
2017	0	1	0	0
計	1	1	0	1

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むために必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室 HP の更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懐徳堂の研究は、本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①中国出土文献研究会の事務局として、新出土文献の研究を推進し、海外学術調査を進めるとともに、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究

集刊』を刊行する。③懐徳堂研究会の事務局として、懐徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する、などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、一般財団法人懐徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懐徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進めて公開する。②中国や台湾の大学と共催して国際学会・シンポジウム、または講演会を開催する。③懐徳堂記念会の各種講座について、企画・運営に協力する、などである。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解読に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、懐徳堂事業や中国出土文献に関する研究情報について、研究室 HP に公開し、随時更新を行った。

2. 研究

【2016年度】

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会が、上海博物館、安徽大学、安徽博物館などへ赴き、学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 62 号を刊行し、「出土文献研究」の特集を組んだ。懐徳堂文庫の調査研究については、重建懐徳堂開学 100 周年記念事業に協力しつつ、『増補改訂版懐徳堂事典』、図録『懐徳堂の至宝』（いずれも大阪大学出版会）を刊行した。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。大学院生も、懐徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

【2017年度】

新出土文献研究については、中国出土文献研究会が、安徽大学を訪問し、新出の戦国簡を実見調査した。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 63 号を発刊したが、ここには「儒学—蜀学と文献学—」の小特集を組んだ。懐徳堂文庫の調査研究については、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。大学院生も、懐徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

3. 社会連携

【2016年度】

重建懐徳堂開学 100 周年記念事業に協力した。①10月22日～12月22日の二ヶ月間にわたって開催された「懐徳堂展」（待兼山修学館）の企画・運営、資料調査、解説の作成、ミュージアムレクチャーなどに積極的に関わった。②10月29日に開催された懐徳堂記念会の秋季講座「よりよく生きるために」の企画・運営に協力し、シンポジウムのコーディネートを務めた。③その秋季講座の直後に行われた懐徳堂展の参観についても、研究室のメンバーが誘導・資料解説などにあたった。

【2017年】

一般財団法人懐徳堂記念会と連携して、西村天四郎旧蔵資料調査のため、種子島（鹿児島県西之表市）を訪問し、その調査結果を懐徳堂記念会の学術誌『懐徳』に掲載した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

【2016年度】

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。また、名古屋大学の中国学関係研究室との定期的な研究交流は当該年度（第15回）で一旦休止にすることとなったが、学生の学力向上に資するという所期の目的は十分に達成されたと評価している。

【2017年度】

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には2016年度同様、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。

2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懷徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。2017年には、湯浅邦弘教授が編者となり、清華大学蔵戦国竹簡についての研究成果を『清華簡研究』（汲古書院）として刊行した。

3. 社会連携

国際学術交流は、儒蔵の編纂協力や国際学会の共催という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懷徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教授・学生とも全面的な協力を努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	0	1
2017	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

椛島雅弘、古代中国兵学思想史の研究、湯浅邦弘（主査）、荒川正晴（副査）、川合康（副査）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2017	1(1)	1(1)	1(1)	0(0)	0(0)	3(3)
計	1(1)	2(2)	1(1)	0(0)	0(0)	4(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	2	1	2	0	0	5
2017	0	0	2	0	0	2
計	2	1	4	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

佐藤由隆「懷徳堂学派の格物致知論」『東アジア文化交渉研究』第10号, pp.523-548, 2017/3

【2017年度】

〔博士後期〕

佐藤由隆「懷徳堂学派の知行論」『日本中国学会報』第69号, pp.228-241, 2017/10/7

佐藤由隆「懷徳堂関連資料（二〇一六）資料暫定目録」『懷徳』第86号, pp.70-77, 2018/1/31

佐藤由隆「五井蘭洲の「敬」論についての一考察」『懷徳堂研究』第9号, pp.81-92, 2018/2/28

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士後期〕

梶島雅弘「古代中国兵學中“合理”與“占術”的思想——以銀雀山漢墓竹簡為線索」, 「哲學與世界」國際研究生哲學研討會, 臺灣大學, 水源校區哲學系會議室, 2016/5/15

梶島雅弘「銀雀山漢墓竹簡「四時令」篇の時令説について」, 第63回中国出土文献研究会, 大阪大学, 中国哲学資料室, 2016/7/16

佐藤由隆「知行並進派的系譜——以日本懷徳堂為中心」, 「哲學與世界」國際研究生哲學研討會, 臺灣大學, 水源校區哲學系會議室, 2016/5/15

佐藤由隆「五井蘭洲と中井履軒の格物致知論」, 第25回懷徳堂研究会, 大阪大学, 文学部中庭會議室, 2016/8/22

佐藤由隆「懷徳堂学派の知行論 —五井蘭洲と中井履軒を中心に—」, 日本中国学会第68回大会, 奈良女子大学第四会場, 2016/10/8

【2017年度】

〔博士後期〕

佐藤由隆「五井蘭洲の「敬」論」, 第27回懷徳堂研究会, 大阪大学, 文学部中庭會議室, 2017/12/3

佐藤由隆「田世民「東アジアで儒教を研究するとはどういうことか?—台湾から考える—」, 〈東アジア思想史〉の可能

性を探る, 大阪大学, 文学部中庭会議室, 2017/10/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016年度】

〔博士前期〕

佐藤由隆・中村成美「懷徳堂関係文献提要（三十三）」（『懷徳』第85号, pp.81-89, 2017/1/31）

〔博士後期〕

梶島雅弘『懷徳堂事典 増補改訂版』（湯浅邦弘主編, 大阪大学出版会, 2016/10/25, 337pp）

佐藤由隆『懷徳堂事典 増補改訂版』（湯浅邦弘主編, 大阪大学出版会, 2016/10/25, 337pp）

佐藤由隆・中村成美「懷徳堂関係文献提要（三十三）」（『懷徳』第85号, pp.81-89, 2017/1/31）

【2017年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2017年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2017年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

中村未来 (2012年度修了, 福岡大学人文学部専任講師)

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2016年度:1名 2017年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2016年度:1名 2017年度:0名

9. 刊行物

2016年度 『中国研究集刊』第62号 刊行

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)	2000年～現在に至る
中国出土文献研究会(2010年10月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受)	1998年～現在に至る
大阪大学中国学会(学会、事務局引受)	1984年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第24回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)	2016年6月19日
第63回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)	2016年7月16-17日
第25回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)	2016年8月22日
第64回中国出土文献研究会(於島根大学教育学部)	2016年9月15日
第65回中国出土文献研究会(於京都大学人文科学研究所)	2016年11月23日
「儒学—蜀学と文献学—」国際シンポジウム(於大阪大学文学部大会議室)	2016年12月10-11日
第26回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)	2017年3月25日
第27回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)	2017年12月3日
第66回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)	2017年7月15-16日
第67回中国出土文献研究会・特別講演会「竹簡学の現状と展望」(於大阪大学文学部大会議室)	2017年7月16日
第68回中国出土文献研究会・特別講演会「新出土文献による中国学の展開」 (於大阪大学文学部中庭会議室)	2018年2月10日

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士(文学、大阪大学、1997年)。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000年4月現職。2011年7月、大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門)受賞。2013年7月、中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」受賞。専攻：中国哲学／中国思想史／懐徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘「北大簡《老子》の性質—結構、文章及詞彙」『古簡新知—西漢竹書《老子》與道家思想研究』(北京大學出土文獻研究所編), 上海古籍出版社, pp. 128-149, 2017/8

湯浅邦弘「“異端”説—日本懐徳堂學派之《論語》解釋—」『儒家典籍與思想研究』9, (北京大学《儒藏》編纂與研究中心), 北京大学出版社, pp. 171-181, 2017/3

湯浅邦弘「「水戰」的思想—銀雀山漢墓竹簡《十陣》」羅秉祥(主編)『先秦諸子與戰爭倫理』中華書局, pp. 349-379, 2016/6

湯浅邦弘「清華簡『殷高宗問於三壽』の思想的特質」『中国研究集刊』(大阪大学中国学会), 62, 大阪大学中国学会, pp. 31-51, 2016/6

1-2. 著書

湯浅邦弘『呻吟語』KADOKAWA, 319p., 2017/10

湯浅邦弘(編)『清華簡研究』汲古書院, 410p., pp. 5-14, pp. 65-112, pp. 409-412, 2017/9

湯浅邦弘(監修)『えんびつで老子・莊子』ポプラ社, 182p., 2017/8

- 湯浅邦弘『孫子の兵法』KADOKAWA, 228p., 2017/6
- 湯浅邦弘『別冊 NHK100分 de 名著 菜根譚×呻吟語—成功と挫折の処世訓』NHK 出版, 183p., 2017/6
- 湯浅邦弘『竹簡学—中国古代思想的探究』中国出版集团東方出版中心, 285p., 2017/1
- 湯浅邦弘『貞観政要』KADOKAWA, 196p., 2017/1
- 湯浅邦弘(監訳)『竹簡学入門—楚簡冊を中心として—』東方書店, 216p., 2016/12
- 湯浅邦弘(監修)『えんぴつで菜根譚』ポプラ社, 157p., 2016/11
- 湯浅邦弘(編)『増補改訂版懐徳堂事典』大阪大学出版会, 337p., 2016/10
- 湯浅邦弘『懐徳堂の至宝—大阪の「美」と「学問」をたどる—』大阪大学出版会, 92p., 2016/10
- 湯浅邦弘『超入門「中国思想」』大和書房, 302p., 2016/9

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

- 湯浅邦弘「種子島西村家資料調査の概要」講演会「西村天因関係資料調査報告—種子島に残る天因の貴重資料—」, 大阪大学中国学会, 大阪大学, 2017/12
- 湯浅邦弘「時令説的展開—北大漢簡《陰陽家言》與銀雀山漢簡“陰陽時令、占候之類”—」中國簡帛學國際論壇 2017・新出土戰國秦漢簡牘研究, 武漢大学, 2017/10
- 湯浅邦弘「北京大学竹簡『陰陽家言』に見る陰陽思想の伝播」第9回東アジア文化交渉学会, 東アジア文化交渉学会, 北京外国語大学, 2017/5
- 湯浅邦弘「幕末の漢文力—ロシア軍艦来航始末—」, 公益社団法人温故学会記念講演会, 埴保己一史料館, 2016/5
- 湯浅邦弘「懐徳堂研究とデジタルアーカイブ事業」第8回国際學術大会, 東アジア文化交渉学会, 関西大学, 2016/5
- 湯浅邦弘「懐徳堂學派的論語解釋—有關“異端”之説」四川大学學術講座, 四川大学古籍整理研究所, 四川大学, 2016/5
- 湯浅邦弘「人類的文化遺産“版木”的數字圖書館—以大阪大學懐徳堂文庫所藏版木為中心」四川大学學術講座, 四川大学古籍整理研究所, 四川大学, 2016/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 湯浅邦弘 大阪大学総長表彰, 大阪大学, 2013/10
- 湯浅邦弘 2013年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀學術論文賞」, 中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会, 2013/7
- 湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門), 大阪大学, 2011/7
- 湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号:26284009

研究題目:中国新出土文献の思想史的研究—戦国簡・秦簡・漢簡—

研究経費:2016年度 直接経費 2,500,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

現在、中国思想史研究の分野で世界的に注目を集めている新出土文献の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦から漢代思想の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清华大學蔵戦国竹簡』『岳麓書院蔵秦簡』『北京大学蔵西漢竹書』等に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専

門家からなる共同研究によって解読し、最終的には、これらの新出土文献の研究を通じて得られた新知見をもとに、新たな中国古
代思想史の記述を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

島根県立出雲高等学校SGH運営指導委員会・運営指導委員, 2015年7月～現在に至る

一般財団法人懐徳堂記念会・理事, 2014年4月～現在に至る

日本中国学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

中国出土文献研究会・会長, 2012年4月～現在に至る

東方学会・学術委員(東方学査読委員), 2011年7月～現在に至る

全国漢文教育学会・理事, 2005年4月～現在に至る

日本道教学会・理事, 2004年4月～現在に至る

懐徳堂研究会・代表, 2000年4月～現在に至る

中国出土資料学会・理事, 1989年4月～現在に至る

2. 辛賢講師

1967年、韓国ソウル生。2002年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004年4月現職。専攻：中国哲学、漢代易学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

辛賢『はじめて学ぶ中国思想』ミネルヴァ書房, 2018/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

辛賢「先天易的来源」東亜易学国際研討会, 山東大学易学与中国古代哲学研究中心, 山東大学, 2016/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞, 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事, 2012年1月～現在に至る

日本中国学会・広報委員会委員, 2007年4月～現在に至る

三国志学会・評議員, 2006年7月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：榎本 文雄

准教授：堂山英次郎

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	2	0	0	8	3	0	0

*うち留学生 8名、社会人学生 3名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	1	0	0	1
2017	1	0	0	1
計	2	0	0	2

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・

協力を教員が主導して促進することを目標とした。

3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。2016 年度には、教員 1 名が外国語学部の兼任教員として授業（1 学期 2 学期 1 コマずつ）を担当し、その授業の TA を本研究室の大学院生が務めたことで、その大学院生の指導にも役立った。またこの授業にはインド学にも深く関係することから、本研究室の学生も参加し、学生の専門的学識の深化にもつながった。2017 年度（2 学期 1 コマ）にも同じ授業を開講し、同様の効果を得た。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流も活発に行なった。教員は、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。学生については、論文作成演習の授業（上記 1. 教育）の中で予備発表・予備議論を行なうことで、論文の質を大きく高めることに成功した。その他特記すべき活動として以下のものがある。教員 1 名は、2016 年度より、インド仏教の基本的術語の基準訳語集構築を目指す科学研究費補助金基盤研究（A）の研究分担者を務めている。別の教員 1 名は、2016 年度にベルギーのリエージュで開催された国際学会において研究発表を行った。また 2017 年度には、アメリカのハーヴァード・イェンチン研究所で行われたワークショップに招待され、講演を行なった。更に別の教員 1 名は、2016 年度から 2 年間の予定で科学研究費補助金研究活動スタート支援を獲得した。

3. 社会連携

教授会メンバーの教員はいずれも「日本印度学仏教学会」等で、理事・評議員等の職務を遂行している。特に教員 1 名は、2017 年度途中より日本歴史言語学会の大会委員長として、学術大会の開催等にかかる実務に従事している。

教員 1 名は、2017 年度に仏教系私立大学が定期開催する一般向けの公開講座で講演を行なった。また別の教員 1 名は、寺院、病院などに直接出向き、本専門分野の知識を提供・共有したり、地域の公的機関の開催する講演会等でも積極的な情報発信を行なっている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力に向上が見られ、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、幅広い視点や掘り下げた議論で構成される卒業論文が提出された。また、博士前期課程以来在籍した学生が当該年度に 2 人（1 人は社会人学生）も博士（文学）の学位を得たことは、当研究室が設定した教育目標が継続的に機能し実を結んだひとつの証拠であって、客観的に見て評価できることであろう。当該年度における大学院生の学会発表等の数は当研究室に在籍する学生の数に起因するところが大きく、直ちに教育効果の問題に帰せられるわけではない。今後、新たに進学してくる学生たちが同様の教育を受けることで、これまで在籍した学生以上の成果を彼らが発信していくことが大いに期待できよう。当分野における教育の中心はサンスクリットなどで書かれた各種古典文献群の読解が中心となるため、長期にわたる粘り強い訓練を必要とすると同時に、学生個々人のレベルアップやその速度にも当然ながら個人差がある。し

かし、学生 1 人 1 人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、如上の結果につながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行なっており、全体として目標を達成したと考えられる。また外部資金（科学研究費補助金）は、教員 3 名のうち 2 名は研究代表者、1 名は分担者として獲得しており、順調と言える。国際学会への参加は近年特に活発になされており、今後そうした活動の教育・研究への還元・効果が更に期待できる。一方、外国語による論文の執筆や海外ジャーナルへの投稿については、教員は一定の成果を出してはいるが、今後はより積極的に行ない、特に大学院生にも促していくことが必要であると考えられる。

3. 社会連携

一般向けの著作や、学会等における役員の責務遂行において、目標は達成されたと言える。ただし、複数の役員等を兼務しているような場合、それらの仕事の本務の教育・研究に影響しないよう気をつける必要がある。一方、一般向けの講演会などへの参加という点では、一定の実績は見られるものの、当該研究室が主催をする場合も含め、研究成果の社会への還元や情報発信により積極的な役割を担う余地を残している。

V. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	0	1
2017	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

古川洋平『パリー聖典における「信」の構造研究—分類・格支配・内容の観点から—』

主査: 榎本文雄 副査: 堂山英次郎, 内田次信

富田真理子『初期仏典における涅槃の基礎的研究 —『スッタニパータ』を基本資料として—』

主査: 堂山英次郎 副査: 榎本文雄, 湯浅邦弘

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2017	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	0	0	0	0	0
2017	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2017年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:1名 (計1名)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

計 1名

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016 年度～2017 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2016 年度：0 名 2017 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2016 年度：0 名 2017 年度：0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「第 7 回ヴェーダ文献研究会」を主催、2016 年 9 月 25 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」(東洋史学専門分野と共同で主催)

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 榎本 文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。2014 年度パーリ学仏教文化学会賞。専攻：インド仏教学

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

榎本文雄 『上座仏教事典』「四諦」pp. 64f., 「涅槃」pp. 372f., めこん, 2016/10

榎本文雄 「セッション No.3 の発表に対するコメント」『日本佛教学會年報』(日本佛教学会), 81, pp. 254-256, 2016/8

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

榎本文雄 2014 年度パーリ学仏教文化学会賞, パーリ学仏教文化学会, 2014/5

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員, 2011年9月～現在に至る

日本チベット学会・委員, 2005年10月～現在に至る

佛敎史学会・評議員, 2003年11月～現在に至る

インド思想史学会・理事, 2003年4月～現在に至る

パリー学仏敎文化学会・理事, 1999年4月～現在に至る

日本印度学仏敎学会・理事, 1996年4月～現在に至る

日本佛敎学会・理事, 1996年4月～現在に至る

2. 堂山 英次郎 准教授

1972年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期3年の課程単位取得退学。文学修士（東北大学）、博士（文学、東北大学）。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004年4月大阪大学大学院文学研究科講師、2014年9月同研究科准教授。2007年日本南アジア学会第1回学会賞受賞、2008年第50回日本印度学仏敎学会賞受賞。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

Jan E.M. Houben, Julieta Rotaru & Michael Witzel (ed.), *Dōyama, Eijirō*, Thennilapuram Mahadevan, Hartmut Scharfe et al., *Vedic Śākhās: Past, Present, Future*. Proceedings of the Fifth International Vedic Workshop, Bucharest 2011, Cambridge 2016: Department of South Asian Studies, Harvard University: pp. 935-954

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Dōyama, Eijirō Aitareya-Āraṇyaka (Ed. Keith), electronically prepared by Eijiro Doyama, Osaka, 20.4.2017; TITUS version by Jost Gippert, Frankfurt a.M., 19.11.2017 = Aitareya-Āraṇyaka (ed. Keith) 電子テキスト校訂; Jost Gippert (Johann Wolfgang Goethe-Universität, Frankfurt) 主催テキストデータベースサイト TITUS

2-4. 口頭発表

堂山英次郎「ことばは世界をどう動かしたか ―古代インドの「言霊」―」, 大正大学総合仏敎研究所公開講座, 大正大学総合仏敎研究所, 2018/2

堂山英次郎「古代インドの捨て子伝説をめぐって」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」第3回シンポジウム, 京都大学人文科学研究所, 2017/10

堂山英次郎「育む母と奪う母 ―インド神話における母の表象とその継承―」日本印度学仏敎学会第68回学術大会パネル「『越境』するヴェーダ研究 ―ヴェーダ文献研究の方法と広がり」, 花園大学, 2017/9

堂山英次郎「サンスクリット語における形容詞の扱いについて」, 平成29年度大阪大学国際共同研究促進プログラム主催・待兼山ことばの会共催シンポジウム Nominalization Festival 3, 大阪大学, 2017/7

堂山英次郎「神話の起源と伝承について ―捨て子伝説に関する一考察―」, 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム ―南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第3回研究会, 京都大学人文科学研究所, 2017/6

Dōyama, Eijirō ‘Translating Rigvedic India’, read at the Workshop “Ancient Indian History as seen in the Oldest Indian Texts, Rigveda & Sangam”, Harvard Yenching Institute, Cambridge, MA, 2017/5

堂山英次郎 「8 番目に生まれる話」, 第 8 回ヴェーダ文献研究会, 淑徳大学東京キャンパス, 2017/3

堂山英次郎 「印欧祖語の接続法接辞について ——古アヴェスタ語資料の検討——」, 日本歴史言語学会第 6 回大会, 九州大学西新プラザ, 2016/11

Dōyama, Eijirō “Reflections on YH 40,1 from the Perspective of Indo-Iranian Culture”, Colloque international *Aux sources des liturgies indo-iraniennes* (To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies), Chaire de Langues et Religions du monde indo-iranien ancien, Faculté de Philosophie et Lettres, Université de Liège, Liège, 2016/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成 20 年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 大阪大学, 2009/2

堂山英次郎 第 50 回日本印度学仏教学会賞, 日本印度学仏教学会, 2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第 1 回学会賞, 日本南アジア学会, 2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第 3 回学会賞, 印度学宗教学会, 2006/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2018 年度, 基盤研究(C) 一般, 代表者: 堂山英次郎

課題番号: 15K02042

研究題目: 接続法を中心とするヴェーダ語叙法の研究 ——文法研究と思想研究の融合を目指して——

研究経費: 2016 年度: 直接経費 900,000 円 間接経費: 270,000 円

2017 年度: 直接経費 900,000 円 間接経費: 270,000 円

研究の目的:

ヴェーダ語動詞の文法範疇「叙法」は、動詞の内容に対する話し手の態度を表示する。その正しい理解は、話し手の価値観や聞き手との関係性を知る有力な手がかりとなる。本研究は、叙法が最も豊富に用いられる『リグヴェーダ』を中心に、姉妹言語アヴェスタ語の資料をも参照しつつ、(1) 積極的な態度表明を担う狭義の叙法(接続法・希求法・命令法)のうち接続法の機能を、他の二者との相関関係の中で明らかにし、(2) 祭式・神話での祭官や神々の発言・会話に見る叙法の機能から、彼らの関係性や、その社会的・宗教的背景の解明を目指す。本来表裏一体の文法研究と思想研究とが、相互補完的にヴェーダ文化の理解に繋がる範例としたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・理事, 2016 年 1 月～現在に至る(2018 年 1 月～大会委員長)

インド思想史学会・評議員(監事), 2013 年 4 月～現在に至る

日本印度学仏教学会・評議員, 2004 年 7 月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員, 2004 年 6 月～現在に至る

3. 名和 隆乾 助教

1984 年生。2013 年、日本学術振興会特別研究員 (DC2)。2014 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 (インド学・仏教学専攻) 単位取得退学。2015 年、京都光華女子大学真宗文化研究所委嘱研究員。2015 年、大阪大学文学研究科特任研究員。博士 (文学) (大阪大学, 2016 年)。2016 年 4 月より現職 (2018 年 3 月退職)。専攻: インド学・仏教学

3-1. 論文

名和隆乾 「nāmarūpassa avakkanti-について」『印度學佛教學研究』66-3, 2018/3

3-2. 著書

加治洋一, 中西麻衣子, 名和隆乾他 『『義足経』研究の視点 附・『義足経』訓読』自照社出版, pp. 1-20, 2018/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

名和隆乾 「パーリ聖典におけるブラフマー神の諸相」京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドウイズム: 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第3回シンポジウム「古代・中世インドの[神話][説話][表象]」, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2017/10

名和隆乾 「nāmarūpassa avakkanti-について」日本印度学仏教学会第68回学術大会, 日本印度学仏教学会, 花園大学, 2017/9

名和隆乾 「パーリ聖典における cha- Xkāya-について」平成28年度第2回バウダコーシャ研究会, バウダコーシャ・プロジェクト(科研費基盤研究(A)「バウダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」(代表者・斎藤明)), 国際仏教大学院大学, 2017/3

名和隆乾 「パーリ聖典における cha- Xkāya-と Saṃyuttanikāya 12.2 について」第8回ヴェーダ文献研究会, ヴェーダ文献研究会, 淑徳大学, 2017/3

名和隆乾 「パーリ聖典における梵我一如の併存」「ブラフマニズムとヒンドウイズム」定例研究会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2017/1

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2017年度、研究活動スタート支援、代表者:名和隆乾

課題番号:16H06919

研究題目:パーリ聖典における梵我一如思想の併存

研究経費:2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

インドにおける仏教の興起以前、紀元前6世紀頃、最高原理ブラフマン(梵)と、アートマン(自我)との合一(梵我一如)は、目指すべき究極の境地として信奉されていた。この梵我一如思想は、その後、程なくして現れた仏教に痕跡を残す。このことは従来も断片的に指摘されてきた。これに対し、筆者は更に、唯一完本が現存する初期仏教文献、すなわちパーリ聖典中に、相異なる複数の梵我一如思想が併存すること、更には仏教が、その異なる梵我一如思想を、自身の優位性を保持しつつ修行体系中に取り込んでいることを発見した。

本研究では、上記内容の論証を目指し、関連する用例をパーリ聖典から網羅的に回収、整理し、客観的データを提示する。その際、仏教とそれ以外の思想家たちとのそれぞれが、梵我一如に到達し得るとして主張する修行法をも併せて整理する。そして仏教の修業体系において、異教の修行法がどの様に位置づけられているかを示す。これにより、最初期の仏教による異教対応の、従来知られていなかった形態が明らかとなる。また本研究の提示する網羅的なデータは、現状、コンコーダンスすら存在しない諸語についての俯瞰をもたらし、仏教外諸分野をも裨益することが期待される。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 0

教授：平田 由美、北原 恵、宇野田尚哉

准教授：北村 毅、安岡 健一

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
45	5	9	0	2	1	0	1

*うち留学生 10名、社会人学生 3名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	18	5	4	2
2017	9	3	1	7
計	27	8	5	9

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の6点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携)⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の 3 点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果を『日本学報』において発信する(『日本学報』の活用とその内容の充実)。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける(研究に関わる討議空間の創出)。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する(研究ネットワークの強化)。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の 2 点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGO をはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。これらを達成するため、研究室のホームページをリニューアルした。今後、さらに充実を図っていく予定である。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境が達成されつつある。具体的には、複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が強化された。また、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」において、学外者とのコミュニケーションも深まった。特に注目すべきは、2012 年度から「日本学学生企画補助金」の制度を設けて学生主導のシンポジウムや講演会を経済的に支援し、それによって複数の学生による企画が実現したことである。2013 年度からは、院生と学部生が共催する研究会も始動し、ともに自発的な議論の場を持つようになった。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考えるが、今後もさらなる教育体制の充実をはかるため、継続的なカリキュラムの改革に取り組む。

2. 研究

「日本学方法論の会」を開催し、学外の研究者との学術交流を行った。京都大学や同志社大学、立命館大学、神戸大学といった関西圏の大学との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館、北九州市漫画ミュージアム、南山宗教文化研究所などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の場が機能しつつある。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも市民が多く参加している。また大阪で活動する NPO や NGO のグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深化がすすんだ。また、海外との学術交流も活発に行い、国際日本学研究会の開催や、学生主催の研究会の実施は、特筆される教育活動の成果だと言える。また、学部生も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場として

の日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。とりわけ、2017年度には国際日本文化研究センターを拠点とする「国際日本研究コンソーシアム」が発足し(9月)、その際には阪大日本学研究室所属教員が大きく貢献した。今後の国際的日本研究の発展の基盤づくりが進んだといえる。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動するNPOやNGOならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に関連しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	1	0	1
2017	7	0	7
計	8	0	8

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

黛友明「伊勢大神楽における歴史と実践—「継続」の民俗誌的記述—」2017/9

主査：北村毅 副査：杉原達、北原恵、川村邦光

鹿野由行「繁華街における周縁のセクシュアリティの受容過程—近現代大阪の「ゲイタウン」形成史—」2018/3

主査：北原恵 副査：宇野田尚哉、北村毅

謝花直美「復興都市の異音—沖縄占領下、「流動する生活圏」—」2018/3

主査：杉原達 副査：北原恵、北村毅

西井麻里奈「戦災復興の社会史的研究—被爆地広島における土地区画整理と「立退き」の経験をめぐって—」2018/3

主査：杉原達 副査：宇野田尚哉、安岡健一

湯天軼「中国における日本サブカルチャー受容現象の研究—絡み合うものたちの世界へ—」2018/3

主査：北村毅 副査：北原恵、宇野田尚哉

ソアレス モッタ フェリッペ アウグスト 「ブラジル日系社会からの思想史—半田知雄論—」2018/3

主査：杉原達 副査：北原恵、安岡健一

鄭 弁芸「文学にみる〈外地〉の位相—1940年代の〈台湾〉を中心に—」2018/3

主査：杉原達 副査：平田由美、安岡健一

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	6(6)	3(3)	0(0)	0(0)	1(1)	10(10)
2017	1(1)	4(4)	0(0)	0(0)	0(0)	5(5)
計	7(7)	7(7)	0(0)	0(0)	1(1)	15(15)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	6	5	6	0	0	17
2017	5	4	6	0	0	15
計	11	9	12	0	0	32

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

鶴田幸那「少女誌から飛び出す「歴史もの」—新たな生き方を模索する“少女マンガ”—」『日本学報』第36号, 2017/3

〔博士後期〕

猪岡叶英「在阪沖繩出身者による祖先祭祀の実践」『待兼山論叢』第50号, pp.77-97, 2016/12/26

中西美穂「参加型〈裁縫〉アートの一事例-「アジアをつなぐ」展参加作品《HOUSE OF COMFORT》のワークショップを中心に」『文化/批評 Cultures/Critiques』第8号, 2017/3

湯天軼「字幕という形象, 翻訳という享受: 中国における日本アニメ字幕組とその翻訳形式について」『日本学報』第36号, 2017/3

湯天軼「機械・中・身体—中・動漫・文化的ネットワーク人類学理论研究」『探索と争鳴』第10号, pp.132-136, 2016/10/6

湯天軼「「二次元世界」の活動空間: 中国における日本サブカルチャーの受容空間「動漫論壇」をめぐって」『文化/批評』第8号, pp.49-70, 2017/1/30

謝花直美「沖縄戦後「復興」の中の離散—垣花の人々と軍作業」『同時代史研究』第9号, pp.33-49, 2016/12/1

徐潤雅「富山妙子の表現と1970年代の韓国—詩画集『深夜』とスライド「しばられた手の祈り」を中心に—」『待兼山論叢』第50号, pp.49-76, 2016/12/31

徐潤雅「【コラム】日本美術会と職場美術」『「サークルの時代」を読む—戦後文化運動研究への招待』, pp.39-44, 2016/12

仲村紗希「研究会参加記: 「語り」と出会う、つながりあう」『日本学報』第36号, 2017/3

【2017年度】

〔学部生〕

西村まりな、前川拓人、松永健聖「交流と断絶の占領期—大阪大学周辺地域を中心に—」『平成 29 年度学部学生による
自主研究奨励事業成果報告書』2018/4

〔博士後期〕

アレクサンダー・ギンナン「視覚文化と「裏日本」の地域表象」、『日本学報』第 37 号, pp.35-52, 2018/3

Alexander Ginnan “Visual Culture, Representation, and Uranihon”, 『大阪大学大学院文学研究科グローバル日本
研究クラスター報告書』2017 年度版, 2018/3

中西 美穂「女たちのフィリピン-1980 年代日本の女性グループ「カラヤアン関西」をめぐる一考察」、『日本学報』第
37 号, pp.75-86, 2018/3/31

仲村紗希「近代沖縄と生活改善運動の射程—1930 年代を中心に—」『待兼山論叢』第 51 号, pp.79-94, 2017/12

(2)口頭発表

【2016 年度】

〔博士前期〕

稲田光太郎「近代仏教における従軍僧研究とその可能性—佐藤巖英を手がかりに—」, 第 13 回「仏教と近代」研究会 (若
手研究発表会), 佛教大学紫野キャンパス 11 号館 2 階 231 (会議室), 2016/5/22

堀詩織「元「慰安婦」たちと生きる—福岡「関釜裁判を支援する会」の活動から—」, 国際日本学研究会・琉球社会アジ
ア社会文化研究会共同学術大会, 琉球大学, 2016/9/3

陣内恵梨「神功皇后の視覚表象—時代・場面・衣装から見る女神像の変遷」, 美術と戦争: 1940-50 年代、日本・朝鮮・
台湾, 大阪大学, 2016/7/23

〔博士後期〕

猪岡叶英「1960 年代 70 年代の沖縄をめぐる人類学・民俗学の周辺」, 日本オーラル・ヒストリー学会第 14 回大会, 一
橋大学、佐野書院, 2016/9/4

猪岡叶英「在阪沖縄女性が沖縄の民俗の世界と出会う／出合いなおすとき」, 沖縄近現代史若手会議, 大阪大学、待兼山
会館, 2017/3/4

中西美穂「参加型アートはだれのもの?—展覧会「アジアをつなぐ・境界を生きる女たち 1984-2012」関連企画アルマ・
キントのワークショップを中心に」, フォーラム「美術と戦争: 1940-50 年代、日本・朝鮮・台湾」における院生発
表, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/7/23

湯天軼「「二次元世界」の活動空間—中国における日本サブカルチャーの受容空間「動漫論壇」をめぐる」, 国際日本
学研究会学術大会, 琉球大学, 2016/9/3

湯天軼「開かれる「他者」(ニジゲン)を求めて—中国における日本サブカルチャー受容をめぐる報告」, 国際日本学研究会
若手研究者交流発表会「他者と想像力—(日本)を揺さぶる文化研究のために—」, 早稲田大学, 2016/11/19

湯天軼「「恋声」の研究—中国における日本声優とその声の受容をめぐる考察」, コンテンツ文化史学会年度大会, 奈良
県立大学, 2016/12/4

謝花直美「軍作業が編成する空間—那覇市、真和志村への帰還と労働」, 同時代史学会 2016 年度大会「現代日本におけ
るナショナリズムの歴史的位相」, 首都大学東京, 2016/12/3

徐潤雅「額縁を出てスライドへ—富山妙子の表現と 1970 年代韓国」, 「美術と戦争—1940-50 年代、日本・朝鮮・台湾」,
大阪大学、待兼山会館, 2016/7/23

ファクンド・ガラシーノ「ラテンアメリカの近代と<日本>: エンリケ・ゴメス・カリージョの紀行文を中心に」, 国際
日本学研究会若手研究者交流発表会「他者と想像力—(日本)を揺さぶる文化研究のために—」, 早稲田大学, 2016/11/19

ファクンド・ガラシーノ「エンリケ・ゴメス・カリージョが捉えた「日本」—紀行文の方法論と先行する日本像との比較
を中心に」, 日本比較文学会・第 78 回全国大会, 東京大学, 2016/6/19

仲村紗希“Okinawans identity crisis : A case study of “Osaka Kyuyo Shimpo””, Australia Japan Graduate
Conference 2016, ANU, 2016/8/30

西井麻里奈「廃墟と描線——広島・誓願寺における区画整理事業の経験」, 国際日本学研究会・琉球アジア社文化研究会 2016 年度 学術大会, 琉球大学, 2016/9/3

西井麻里奈「廃墟と描線—陳情書から読み解く、「平和都市」広島の復興都市計画と土地区画整理事業—」, 同時代史学会 2016 年度大会, 首都大学東京, 2016/12/3

西井麻里奈「被爆地における復興空間の政治——敗戦から広島復興大博覧会まで——」, 世界政治研究会, 東京大学, 2016/12/9

【2017 年度】

〔学部生〕

西村まりな、前川拓人、松永健聖「交流と断絶の占領期—大阪大学周辺地域を中心に—」, 平成 29 年度「学部学生による自主研究奨励事業」文学部成果発表会, 大阪大学豊中キャンパス 文法経本館 2 階大会議室, 2018/2/1

〔博士後期〕

猪岡叶英「生活空間の喪失と再構築という経験—本土で再移住を経験した沖縄出身者への聞き取り調査から—」, 沖縄文化協会 2017 年度公開研究発表会, 沖縄県立芸術大学 附属研究所 (金城キャンパス), 2017/6/24

猪岡叶英「祖先祭祀の継承過程にみる沖縄と大阪の往還関係」, "東西若手研究者交流シンポジウム 第 2 弾〈移動〉が紡ぐ世界——フィールドとテキストの架橋にむけて", 大阪大学豊中キャンパス 文法経講義棟, 2017/7/29

Alexander Ginnan 「「裏日本」の美学と地域の表象」, 表象文化論学会第 12 回大会, 前橋市中央公民館, 2017/7/1
Alexander Ginnan "Visual Culture, Representation, and Uranihon", Osaka University Japanese Studies Workshop 2017, 大阪大学 (待兼山会館), 2017/7/22

Alexander Ginnan 「海を越えてカナダと繋がる山陰地方の歴史と風土を巡って」, シンディ望月展《石/紙/鉄》シンポジウム, 米子市美術館, 2018/3/3

中西美穂「新聞に見る「芸術療法」と「アートセラピー」」, アートミーツケア学会大会 2017 年度, 京都市立芸術大学, 2017/12/17

仲村紗希「沖縄の 150 年」, "世界は変わる、カルチュラル・スタディーズも変わる !!", 早稲田大学, 2017/6/24

仲村紗希「海を越える「労働力」—近代沖縄の人の移動と動員—」, 第 2 回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, 2018/1/10

Facondo・Galasino "Re-framing Japan in a transnational network: Exoticism and global modernity in the works of Enrique Gómez Carrillo", British Association for Japanese Studies, Japan Chapter Spring 2017 Mini-Conference, Critique of/in Japanese Studies: New challenges and new approaches, 千葉大学西千葉キャンパス, 2017/5/27

Facondo・Galasino "Situación Actual de los Estudios Japoneses en Japón: Experiencias, problemáticas y perspectivas para pensar la disciplina desde Argentina", Segundo Encuentro de Estudios Japoneses en Argentina 2017, Centro Cultural de la Cooperación, Buenos Aires, Argentina, 2017/8/3

Facondo・Galasino 「日本研究を開く: 東アジア・日本とラテンアメリカを結ぶトランスナショナルな近代思想史の展望」, 第二回東アジア日本研究者協議会国際学術大会, 中国天津賽象ホテル, 2017/10/27

Facondo・Galasino 「ブラジル日本移民史の再考: 「開拓植民」(settler colonialism) と帝国史から」, 第 2 回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/10

Facondo・Galasino "Writing East Asia and Japan from Latin America: Literature, Nationalism and Critique in the Works of Enrique Gómez Carrillo New Ideas in East Asian Studies, Special Edition for 2017, 2017/12

山本潤子「歴史認識としての「中国殉難烈士慰霊之碑」—秋田県花矢町長山本常松と遺骨送還運動—」, 同時代史学会 2017 年度年次大会, 国立歴史民俗博物館, 2017/12/10

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

西村まりな、前川拓人、松永健聖

「大阪大学 学部学生による自主研究奨励事業 全額選抜自主研究成果発表会」優秀賞

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2017年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2017年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

湯天軼 南通大学(中国・南通市)

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2016年度:1名 2017年度:1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2016年度:0名 2017年度:1名

9. 刊行物

2016年度 『日本学報』36、『Cultures/Critiques』8

2017年度 『日本学報』37、『杉原達退職記念文集』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日本学研究会・事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2016年度】

1、美術と戦争：1940-50年代 日本・朝鮮・台湾(担当 北原恵)

日付・場所 2016年7月23日 待兼山会館(大阪大学・豊中キャンパス)

発表者：金容澈(高麗大学・グローバル日本研究院)、白適銘(国立台湾師範大学・美術学部)、白凜(東京大学総合文化研究科)、鈴木勝雄(東京国立近代美術館)、中西美穂(大阪大学大学院日本学専攻)、陣内恵梨(大阪大学大学院生)、徐潤雅(大阪大学大学院)

2、国際日本学研究会第10回学術大会（担当 北村毅）

日付・場所 2016年9月3日 琉球大学（沖縄県中頭郡西原町）

発表者：黛友明（大阪大学大学院生）、檜田那美紀（大阪大学大学院）、鄭毅（北華大学）、全成坤（北華大学）、中山良子（大阪大学招聘研究員）、湯天軼（大阪大学大学院）、堀詩織（大阪大学大学院）、西井麻里奈（大阪大学大学院）、内間安朗（琉球大学大学院）、鎌倉祥太郎

3、戦争と優勢思想：ジェノサイドの加害者であった父と被害者である私（担当 北村毅）

日付・場所 2016年11月7日 大阪大学（豊中キャンパス）

発表者：安積遊歩

4、他者と想像力：〈日本〉を揺さぶる文化研究のために（担当 北村毅）

日付・場所 2016年11月19日 早稲田キャンパス（早稲田大学）

発表者：鈴木彩（慶応義塾大学大学院）、大道晴香（國學院大學大学院特別研究員）、乾英治郎（立教大学兼任講師）、黛友明（大阪大学大学院）、湯天軼（大阪大学大学院）、ファクンド・ガラシーノ（大阪大学大学院）

【2017年度】

5、『日本・女性芸術家』を超えて：長澤伸穂と塩田千春の作品におけるトランスナショナルな対話（担当 北原恵）

日付・場所 2017年6月29日 大阪大学豊中キャンパス・芸術研究棟1階・日本B

発表者：由本みどり

6、東西若手研究者交流シンポジウム第2弾〈移動〉が紡ぐ世界——フィールドとテキストの架橋にむけて（担当 北村毅）

日付・場所 2017年7月29日 大阪大学 豊中キャンパス 文法経講義棟4階 法42講義室

発表者：猪岡叶英（大阪大学大学院）、栗山新也（国際日本文化研究センター日本学術振興会研究員）、西田桐子（工学院大学非常勤講師）、富永真樹（慶應義塾大学大学院）、番匠健一（同志社大学〈奄美・琉球・沖縄〉研究センター研究員）、コメント：辛島理人（神戸大学准教授）、司会：茂木謙之介（日本学術振興会）

7、日本学方法論の会（担当 北村毅）

日付・場所 2017年11月3日 待兼山会館（大阪大学豊中キャンパス）

テーマ 体験的フィールドワーク論～民俗学者・宮本常一の足跡をたどることから～

発表者：木村哲也

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 杉原 達 教授

1953年生。1975年京都大学経済学部卒業。1977年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。1977-91年、関西大学経済学部助手、専任講師、助教授、教授を経て、1992年大阪大学文学部助教授、1997年同教授、1998年大阪大学大学院教授（2018年3月退職）。専攻：日本学／文化交流史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

杉原達 「1990年代以降の和解を実現する運動について」シンポジウム 中国人強制連行の戦後 民間が拓いてきた日中交流——引揚げ・遺骨送還から和解へ:シンポジウム 中国人強制連行の戦後, 西松安野友好基金運営委員会, 広島市文化交流会館, 2016/10

杉原達 「歴史との向き合いかた——帝国主義研究の中から」第15回歴史家協会大会・総会, 歴史家協会, 立命館大学大阪いばらきキャンパス, 2016/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学)。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:日本文学・文化研究/ジェンダー研究

2-1. 論文

Hirata, Yumi, "Recounting War, Experience and Memory: The Representation of Space in Zainichi Literature During the Korean War" 『哲學與文化』(哲學與文化月刊編輯委員会), 45-3, 哲學與文化月刊雑誌社, pp. 7-24, 2018/3

平田由美 「《マイナー文学》の政治と言語——後藤明生における《他者》とのめぐり合い——」 『日本学報』33, 韓国日本学会, pp. 111-128, 2017/12

平田由美 「在日朝鮮人女性文学におけるセクシュアリティの表出とその変化——宗秋月・李良枝・鷺沢萌——」 『在日朝鮮人が語る』(東国大学文化学院叙事文化研究所・東岳語文学会国際学術大会), 予稿集, 東国大学, pp. 38-47, 2017/11

平田由美 「《マイナー文学》の政治と言語——脱植民地過程における「他者」という隘路あるいは通路」 『東アジアの人文精神と日本研究』予稿集, 韓国日本学会, pp. 177-186, 2016/8

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

平田由美 (招待講演)「在日朝鮮人女性文学におけるセクシュアリティの表出と変化——宗秋月・李良枝・鷺沢萌——」在日朝鮮人が／を語る, 東国大学文化学院叙事文化研究所・東岳語文学会, 東国大学, 2017/11

平田由美 (パネリスト)「Southeast Asia in Japanese imagiNation:A case of the Philippines」Japanese Studies Association in Southeast Asia International Conference 2016, Japanese Studies Association in Southeast Asia, Radisson Blu Hotel Cebu (Cebu, Phillipines), 2016/12

平田由美 (招待講演)「《マイナー文学》の政治と言語——脱植民地過程における「他者」という隘路あるいは通路」韓国日本学会 第5回大会:東アジアの人文精神と日本研究, 韓国日本学会, 嘉泉大学校(ソウル), 2016/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山なを賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:25370414

研究題目:移動する作家たちの東アジア:交渉の場としての文学運動

研究経費:2016年度 直接経費 565,305円 間接経費 0円

研究の目的:

20世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集団的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

2-6-2. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:60153326

研究題目:脱植民地過程における文学のナショナリズムとインターナショナリズム

研究経費:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

地域研究としての日本文学研究を脱中心化し、近代東アジアの文学活動の連関や全体像をとらえる《場》と歴史領域を設定し、《場》の意味を変革する文学主体の動きを跡づける。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 北原 恵 教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美學及び芸術學)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学大学院文学研究科准教授、2012年より現職。専攻:表象文化論/ジェンダー研究

3-1. 論文

- 北原恵 「学生から見た大阪大学一女子学生、戦時・占領期の歴史調査プロジェクト」『大阪大学アーカイブズニューズレター』(大阪大学アーカイブズ), 11, pp. 2-4, 2018/3
- 北原恵 「既存のモダンガール像に挑戦した日本画家——谷口富美枝(仙花)展」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 79, pp. 146-148, 2018/2
- 北原恵 「「日本画家・谷口富美枝の思い出、足跡をたどって——船田富士男氏に聞く」」『待兼山論叢(日本学篇)』(文学研究科), 51, pp. 1-20, 2017/12
- 北原恵 「なぜ女性の偉大な戦争画家がいなかったのか——谷口富美枝の場合」『美術手帖』(美術手帖編集部), 69/1061, pp. 102-103, 2017/11
- 北原恵 「ベトナムの現代史と難民を表現する——リー・ホアン・リー個展」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 78, pp. 159-161, 2017/11
- 北原恵 「演劇「白い花を隠す」: NHK・ETV 改ざん事件から、抑圧の連鎖を断つ試み」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 76, pp. 159-161, 2017/4
- 北原恵 「報告:国際シンポジウム「美術と戦争:1940-50 年代、日本・朝鮮・台湾」」『REPRE』(表象文化論学会), 29, 表象文化論学会, 2017/3
- 北原恵 「「会いたい顔」展——ソウル、李韓烈記念館」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 75, ピープルズ・プラン研究所, pp. 163-166, 2017/1
- 北原恵 「急増する現代美術の「戦争画」」『Let's (レッツ)』(戦争責任資料センター), 87, 戦争責任資料センター, pp. 10-11, 2016/12
- 北原恵 「阪田清子個展「対岸——循環する風景」(新潟)」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 74, ピープルズ・プラン研究所, pp. 144-146, 2016/10
- 北原恵 「クォン・ユンドクさんの絵本世界——創作が史実を描く困難と可能性」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 73, ピープルズ・プラン研究所, pp. 167-170, 2016/7
- 北原恵 「詩と美術をつなぐ「キム・ヘスナー橋展」——トランク・ギャラリー(於ソウル)」『ピープルズプラン』(ピープルズ・プラン研究所), 72, ピープルズ・プラン研究所, pp. 169-173, 2016/4

3-2. 著書

- 北原恵 『科研報告書 特集:谷口富美枝研究——論文・資料集』大阪大学文学研究科・北原恵研究室, 128p., 2018/1
- 高雄さくえ, 河口和也, 北原恵他 『『被爆 70 年ジェンダー・フォーラム in 広島「全記録」—ヒロシマという視座の可能性をひらく』「昭和天皇の広島・被爆者慰問——1947 年国立大竹病院巡幸」』ひろしま女性学研究所, pp. 59-87, 2016/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

- Kitahara, Megumi, "Postwar US-Japan Collaborative Production of "War Painting" for the Reports of General MacArthur", 2018 AAS (Association for Asian Studies) Annual Conference: Rethinking the Scope and Significance of "Sensoga" (War Painting) during the 15-Year War, AAS (Association for Asian Studies), Washington Marriott Wardman Park Hotel, 2018/3(2018 AAS HP, 2018/3)
- 北原恵 「谷口富美枝の画業と業績」開館 35 周年記念、呉市立美術館術間のあゆみ展」講演会, 呉市立美術館, 呉市立美術館, 2018/1
- 北原恵 「「戦争画」概念再考——「空襲」は銃後の図像か?」日本近代洋畫の養成及發展」国際學術研討會:「日本近代洋畫の養成と發展」国際シンポジウム, 国立台北教育大学, 国立台北教育大学, 2017/10
- 北原恵 「急増する現代の戦争画と戦争の記憶 "Increasing Contemporary War Paintings and War Memories in Japan"」The 2nd

International Forum for war visual in Asia-pacific Area, The International Study Project on war visual in Asia-pacific Area, 国立台北教育大学, 2017/10

北原恵 「急増する現代の「戦争画」」15年戦争研究会 第209回例会, 15年戦争研究会, 大阪府教育会館, 2017/6(『15年戦争研究会会報』202, p. 2, 2017/6)

北原恵 「アート・アクティビズムとわたし」視覚文化 とセクシズム : サバイルのためアプローチ , 東京大学表象文化論・大学院リーダーディング, 東京大学(駒場キャンパス), 2017/1

北原恵 「「戦争画」概念を問い直す——戦後日本における言説・研究史の再検証」「戦後文化とアジア」, 「戦後日本文化再考」(共同研究), 日本文化研究所, 2016/12

北原恵 「昭和天皇の広島・被爆者慰問——一九四七年国立大竹病院巡幸」象徴天皇制研究会, 明治大学, 2016/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北原恵

課題番号: 26360046

研究題目:軍事主義から見る女性美術家と視覚表象

研究経費:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本プロジェクトは、1930年代から50年代にかけての日本及び東アジア圏の女性アーティストと戦争との関わりについて、ジェンダーと軍事主義、移動の視点から再考することを目的としている。具体的には、①アジア・太平洋戦争期から戦後における女性画家の調査、②日本の植民地化と戦争が与えた東アジア圏の美術・文化表象のジェンダー的分析、③当該時期の資料収集、基本文献集の編纂・出版、④国際的交流である。

3-6-2. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北原恵

課題番号:17KO2359

研究題目:「戦争画」概念を問い直す—アジア太平洋地域の比較調査から

研究経費:2017年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

本プロジェクトの目的は、アジア太平洋地域の戦争画研究とそれに関する作品を調査することによって、軍事主義やポストコロニアルの視点から日本の「戦争画」研究そのものを捉え直すことにある。具体的には、①アジア太平洋地域における戦争画研究と作品調査、②戦争を経験し複数の土地に移動した日系美術家の調査、③「戦争」をテーマにした現代作品の調査・聞き取り、④戦後の「戦争画」言説と分析概念の検証(「戦争画」「前線/銃後」等)。以上を踏まえて⑤「戦争画」研究の問題点を明らかにし、理論的組替えを試みる。戦争画研究はこの20年間で急速に発展・多様化し、実証的研究と図像分析は精緻化しているが、対象へのアプローチなど視点が固定化し語りの定型化が見られる。過渡期にあると言える現在、具体的作品の分析を通して理論化をはかる。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

韓国、高麗大学グローバル日本研究院、学術誌『日本研究』・海外編集委員, 2016年1月～現在に至る

イメージ&ジェンダー研究会・事務局, 2008年4月～現在に至る

4. 宇野田 尚哉 教授

1967年生。1993年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1996年同後期課程単位修得退学。博士（文学）。2000年神戸大学国際文化学部講師、2001年同助教授、2007年同大学大学院国際文化学研究科准教授。2010年より大阪大学大学院文学研究科准教授、2017年より同教授。専攻：日本思想史

4-1. 論文

宇野田尚哉「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者—御庄博実の詩業を中心に—」『グローバル日本研究クラスター報告書』(大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター), 1, pp. 19-26, 2018/3

4-2. 著書

小野信爾, 宇野田尚哉, 西川祐子他(共著)『京大生小野君の占領期獄中日記』京都大学学術出版会, pp. 243-263, 2018/2

宇野田尚哉, 川口隆行, 坂口博『「サークルの時代」を読む』影書房, 366p., pp. 16-38, 2016/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

Unoda, Shoya, "Thirty Years of Nihongaku(Japanese Studies):Between 1980s and 2010s", EAJS 大会, EAJS, リスボン新大学, 2017/8

宇野田尚哉「松江藩儒桃白鹿の『大学』解釈」日本思想史学会 2016 年度大会, 日本思想史学会, 関西大学, 2016/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2016 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:宇野田尚哉

課題番号:16K02402

研究題目:1950 年代文化運動における農村女性文学の研究:山代巴と無名の書き手たち

研究経費:2016 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2017 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、「山代巴資料」(広島県三次市山代巴記念室所蔵)をはじめとする諸資料により、山代を取り巻く無名の人々が〈語る〉あるいは〈書く〉という行為を通じて主体化を遂げていくさまを具体的に明らかにするとともに、そのような無名の人々に支えられた山代の作品世界の特質を明らかにして、戦後日本文学の裾野を照射することである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2016 年度～2016 年度、6 : 研究助成、助成金獲得者:宇野田尚哉

助成金名:人文科学、社会科学に関する学際的グループ研究助成

研究題目:冷戦下の文化的コンフリクトをめぐる環太平洋的研究—移動・マイノリティ・ジェンダー—

助成団体名:サントリー文化財団

助成金額:2016 年度 直接経費 800,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、日韓米の中堅・若手研究者がトランスパシフィックな視座を構築しつつ文化的コンフリクトの国際共同研究を進

めることにより、20 世紀後半以来の同時代史の経験を私たちの共通の経験と捉えうるような視野を開くことである。この場合、日韓米それぞれの関与の仕方は異なるとはいえ、冷戦構造とそのもとでの局地的熱戦(朝鮮戦争・ベトナム戦争)は、それぞれの地域の人々の経験の同時代性を担保する共通の前提であったといえる。このことに留意しながら、無名の人々のコンフリクトに満ちた営みを一つの同時代経験と展望しうるような視野を開くことが、本研究の目的である。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本思想史学会・総務委員兼事務局長, 2017 年 10 月～現在に至る

日本思想史学会・大会委員, 2016 年 10 月～2017 年 9 月

社会思想史学会・企画委員, 2015 年 11 月～2017 年 10 月

日本思想史学会・編集委員長, 2014 年 10 月～2016 年 9 月

松江市史専門部会近世史部会・専門委員, 2010 年 6 月～現在に至る

5. 北村 毅 准教授

1973 年生。2006 年早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。2007 年早稲田大学高等研究所助教、2009 年同准教授。2010 年早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授。2015 年より現職。専攻: 文化人類学・民俗学、オーラルヒストリー

5-1. 論文

北村毅 「「沖縄の精神衛生実態調査」の医療人類学的研究—疫学調査から歴史経験を読み解く—」『琉球・沖縄研究』(琉球・沖縄研究所), 5, pp. 9-30, 2017/6

北村毅 「戦争の「犠牲」のリアリティー: 当事者不在の政治の行く末にあるもの」『 α -Synodos』(シノドス), 222, pp. 40-60, 2017/6

北村毅 「遺骨調査と収集」『沖縄県史各論編 6』(沖縄県教育庁文化財課史料編集班, 沖縄県教育委員会, pp. 666-671, 2017/3

北村毅 「慰霊祭と慰霊の塔」『沖縄県史各論編 6』(沖縄県教育庁文化財課史料編集班, 沖縄県教育委員会, pp. 672-682, 2017/3

北村毅 「米軍保護下の住民と戦争被害の心理的側面」『名護市史本編』(名護市史編さん委員会), 3, 名護市役所, pp. 662-675, 2016/8

北村毅 「戦争と虐待に関わる一考察: ある家族の戦後史から」『子どもの虐待とネグレクト』(日本子ども虐待防止学会), 18-2, 日本子ども虐待防止学会, pp. 207-213, 2016/8

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北村毅 「書評『法廷で裁かれる沖縄戦』」『琉球新報』(琉球新報社), 琉球新報社, 2016/8

北村毅 「書評『死者の土地における文学』」『共同通信(配信)』(共同通信社), 共同通信社, 2016/8

5-4. 口頭発表

北村毅 「沖縄から見る「平和」のかたち——アーカイブとしての刻銘碑」広島大学環境平和学講演会, 広島大学環境平和学, 広島大学総合科学部, 2017/11

北村毅 「戦争と子ども虐待: 軍事教育が形成する環境をめぐる問題」三菱財団人文科学助成研究会, 三菱財団人文科学助成研究会, ホテル新大阪, 2016/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

北村毅 第38回澁澤賞, 澁澤民俗学振興基金, 2011/12

北村毅 第33回沖縄文化協会賞(比嘉春潮賞), 沖縄文化協会, 2011/11

北村毅 第30回沖縄タイムス出版文化賞正賞, 沖縄タイムス社, 2009/12

北村毅 第5回櫻井徳太郎賞大賞, 東京都板橋区, 2007/1

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北村毅

課題番号:26370962

研究題目:アジア太平洋戦争の精神的後遺症に関する研究—「戦後補償」関連公文書を主資料として

研究経費:2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、主に「戦後補償」関連の公文書を基本資料として、アジア太平洋戦争の精神的後遺症について医療人類学的に検証し、戦争体験の長期的な影響を社会や制度との関わりのもとで明らかにすることを目的としている。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

上方文化芸能協会 運営委員

日本オーラル・ヒストリー学会 編集委員

6. 安岡 健一 准教授

1979年生。2009年京都大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学、2011年農学博士(京都大学)取得。日本学術振興会特別研究員、飯田市歴史研究所研究員を経て、2015年に大阪大学へ。2017年4月から現職。専攻:日本近現代史

6-1. 論文

安岡健一 「「老い」に集団で向きあうということ」『日本史研究』(日本史研究会), 667, pp. 115-137, 2018/3

安岡健一 「基地とコンビナート」『人民の歴史学』(東京歴史科学研究会), 213, pp. 13-24, 2017/9

安岡健一 「土地所有と民族問題」『立命館言語文化研究』28-3, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 49-64, 2017/1

6-2. 著書

Yasuoka, Kenichi, *Others in Japanese Agriculture*, Trans Pacific Press, 351p., 2018/2

安岡健一(共著) 「無念に触れる」『社会問題と出会う』古今書院, pp. 180-192, 2017/6

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

安岡健一 「書評 『パレスチナの民族浄化』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞, p. 9, 2018/3

安岡健一 「書評 『例外時代』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞, p. 9, 2018/1

安岡健一 「書評 今泉裕美子・柳沢遊・木村健二編著『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究』」『同時代史研究』(同時代史学会), 10, pp. 144-147, 2017/12

安岡健一 「書評 『古都の占領』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, p. 13, 2017/10

安岡健一 「書評② 田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本』」『飯田市歴史研究所年報』(飯田市歴史研究所), 15, pp. 77-81, 2017/9

安岡健一 「書評 玉真之介『総力戦体制下の満洲農業移民』」『歴史評論』(歴史科学協議会), 808, pp. 87-92, 2017/8

- 安岡健一 「書評 『飯場へ』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, p. 10, 2017/8
- 安岡健一 「書評 『歴史の逆襲』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, p. 11, 2017/7
- 安岡健一 「書評 安志那著『帝国の文学とイデオロギー』」『ノートル・クリティーク』(ノートル・クリティーク編集委員会), 10, pp. 48-54, 2017/5
- 安岡健一 「書評 『満蒙開拓団』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, p. 11, 2017/5
- 安岡健一 「書評 『砂糖の社会史』」『信濃毎日新聞』信濃毎日新聞社, p. 12, 2017/4
- 安岡健一 「ブラジルの中の下伊那」『歴研ニュース』(飯田市歴史研究所), 86, 飯田市歴史研究所, p. 3, 2017/2
- 安岡健一 「全史料協近畿部会第 134 回研究例会「体験してみよう！よその現場」に参加して」『Monthly News』(全史料協近畿部会), 127, 全史料協近畿部会, p. 2, 2016/9

6-4. 口頭発表

- 安岡健一 「オーラルヒストリーを受け継ぐ」日本オーラルヒストリー学会シンポジウム, 日本オーラルヒストリー学会, 上智大学, 2018/3
- 安岡健一 「二つの嫌悪」人の移動と外国人嫌悪, 建国大学(韓国)アジアディアスポラ研究所・大阪大学グローバル日本研究クワスター, 建国大学, 2017/12
- 安岡健一 「「老い」に集団でむきあうということ」日本史研究会大会, 日本史研究会大会, 京都学園大学, 2017/10
- 安岡健一 「「個」の歴史から地域を見る」飯田市地域史研究会, 飯田市教育委員会, 飯田市役所, 2017/7
- Yasuoka, Kenichi, "Ethnicity, Empire and Alien-landownership: Koreans in Japanese Rural Villages", (Sub-)Empires and Migration, UC San Diego Transnational Korean Studies, UC San Diego, 2017/5
- 安岡健一 「基地とコンビナート」東京歴史科学研究会大会, 東京歴史科学研究会, 早稲田大学, 2017/4
- 安岡健一 「「老後の心配」の戦後史」同時代史学会・第 21 回関西研究会, 同時代史学会, 関西学院大学大阪梅田キャンパス, 2017/3
- 安岡健一 「書評:田嶋一『〈少年〉と〈青年〉の近代日本:人間形成と教育の社会史』」歴研書評会, 飯田市歴史研究所, 飯田市役所, 2017/2
- 安岡健一 「オーラルヒストリーの利用と活用」飯田市歴史研究所共同研究班「オーラルヒストリー」ミーティング, 飯田市歴史研究所, 飯田市歴史研究所, 2016/10
- 安岡健一 「近代日本農業と人の移動」workshop on postwar Japan and East Asia, アジア太平洋学群歴史学科, オーストラリア国立大学, 2016/6
- 安岡健一 「よそ者のいる歴史のために」日本移民学会ラウンドテーブル「移民研究のフロンティアを語る」, 日本移民学会第 26 回年次大会, 阪南大学, 2016/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 安岡健一 日本村落研究学会研究奨励賞, 日本村落研究学会, 2015/11
- 安岡健一 日本農業史学会賞(学会賞), 日本農業史学会賞, 2015/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者:安岡健一

課題番号:15K16839

研究題目:高度成長期における地域社会高齢化過程の研究

研究経費:2016 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 0 円

2017 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

現在深刻な社会的課題となっている高齢化について、その発端となった高度成長期に着目し、高齢者たちがどのように社会的な

結合を作り上げていったのかを老人クラブ等に即して検討する。「若い」という現象に、どのように人びとが主体的に向き合っていたのかを当事者により残された資料を発掘しながら解明してゆく。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

信濃毎日新聞・書評委員, 2017年4月～現在に至る

飯田市歴史研究所・調査研究員, 2015年10月～現在に至る

2-7 日本史学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：村田 路人、飯塚 一幸、川合 康

准教授：市 大樹、野村 玄

助教：北泊謙太郎

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
56	15	17	0	0	4	0	1

*うち留学生 4名、社会人学生 6名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	18	8	0	4
2017	19	2	2	2
計	37	10	2	6

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

- ①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

- ①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒論・修論中間発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、藪田貫氏とシーコラ、ヤン氏、原田敬一氏に、自らの研究の経緯と成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を修得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『日本近代の歴史』（吉川弘文館）をはじめとする講座・通史の執筆や、『緒方洪庵全集』といった史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が所蔵または借用している旧撰津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧撰津国住吉郡猿山新田奥田家文書、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めるとともに、両年ともその成果の一端を、大学行事である「いちよう祭」において披瀝した。
- (2) 学会活動については、日本史研究会、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会、史学研究会、史学会、続日本紀研究会、条里制・古代都市研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。また、上記のうち、大阪歴史科学協議会の事務局を本専門分野で引き受けている。
- (3) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。村田路人教授は、「幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内・近国藩」（科研、京都大学、代表岩城卓二）、「播磨国小藩領における地域社会構造の歴史的研究」（科研、神戸女子大学、代表今井修平）、「西播磨小藩・旗本領における領主支配と地域社会構造の歴史的研究」（科研、神戸女子大学、代表今井修平）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）に参加した。また、大阪大学適塾記念センターとともに緒方洪庵書状の調査を進めている。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会（代表桃木至朗）、軍港都市史研究会（代表上山和雄）、吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）、「研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門」（科研、大阪大学、代表桃木至朗）、「帝国日本の移動と動員」（科研、小

樽商科大学・大阪大学、代表今西一）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）に参加した。川合康教授は、「戦国軍記・合戦図屏風と古文書・古記録をめぐる学際的研究」（科研、共立女子大学、代表堀新）、中世文化史研究会（代表川合康）に参加した。市大樹准教授は、「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」（科研、奈良大学、代表角谷常子）、「日本墨書土器データベースの全国的達成」（科研、明治大学、代表吉村武彦）などに参加した。野村玄准教授は、公益財団法人サントリー文化財団調査研究「天皇の近代」（主査は御厨貴東京大学名誉教授）にゲスト参加して研究報告を行った。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動を通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料を調査・整理する一方で、『続日本紀』を読む会のボランティア講師、河内長野市文化財保護審議会委員、史跡古市古墳群整備検討委員会委員、二子塚古墳保存整備検討委員会委員などを務めた。
- (2) 『摂津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 日本史研究室では、2015年度に数年間にわたる旧摂津国住吉郡北田辺村三杵家文書の整理を終え、目録を完成させたが、この事業の成果をうけ、北田辺地域において「古文書を読む会」を毎月開くなど、その成果を地域住民と共有する取り組みを行っている。また、旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書、旧河内国古市郡駒ヶ谷村西應寺文書の整理・研究を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。非常勤講師による講義も、これまでの2つ体制を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論発表会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。また本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	4	1	5
2017	2	0	2
計	6	1	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

- 久野 洋「近代日本の地方政治と民力休養論」2016/9
主査：飯塚一幸 副査：村田路人、野村 玄
- 中村 博司「豊臣政権形成過程と大坂城の研究」2017/3
主査：村田路人 副査：野村 玄、川合 康
- 本井優太郎「戦後社会運動史像の再検討—1950年代・地域社会運動史論—」2017/3
主査：飯塚一幸 副査：川合 康、野村 玄
- 東野 将伸「近世地域金融構造の研究」2017/3
主査：村田路人 副査：野村 玄、飯塚一幸
- 内田 敦士「日本古代護国国会の研究」2018/3
主査：市 大樹 副査：川合 康、飯塚一幸
- 高木 純一「日本中世後期における京郊荘園村落の研究」2018/3
主査：川合 康 副査：野村 玄、村田路人

【論文博士】

- 長谷川賢二「修験道組織の形成と地域社会」2016/12
主査：川合 康 副査：村田路人、市 大樹、平 雅行（京都学園大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	8(8)	5(0)	0(0)	0(0)	1(0)	14(8)

2017	8(8)	6(0)	0(0)	0(0)	1(0)	15(8)
計	16(16)	11(0)	0(0)	0(0)	2(0)	29(16)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	31	12	4	4	52
2017	2	28	17	3	3	53
計	3	59	29	7	7	105

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1) 論文

【2016年度】

〔学部生〕

鈴木秋葉「鎌倉将軍上洛と東海道—三河国を中心に—」『史敏』※14, 史敏刊行会, pp.163-179, 2016/4

〔博士前期〕

丸岡大祐「2016年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1) 日明関係史研究の最前線と教科書記述」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ14』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.1-23, 2017/3

※斉藤誠氏・杜雨霏氏・八木啓俊氏との共著

網澤広貴「熊本藩在御家人のライフサイクル—松岡忠九郎を事例に—」『地理歴史人類学論集(琉球大学)』7, 琉球大学法文学部, pp.37-60, 2017/3 ※武井弘一氏・丸山大輝氏・井戸菜摘氏・新里翔大氏・中村武氏・古謝加奈子氏・山田翔平氏・吉山盛貴氏との共著

〔博士後期〕

内田敦士「季御読経の成立と防災方針の変化」『待兼山論叢<史学篇>』50, 大阪大学文学会, pp.43-69, 2016/12

高木純一「東寺領山城国上久世荘における年貢収納・算用と「沙汰人」」『史学雑誌』※126-2, 史学会, pp.40-63, 2017/2

高木純一「和泉国上守護と下守護」『史敏』※15, 史敏刊行会, pp.94-100, 2017/3

中村博司「大坂遷都論」再考—羽柴秀吉の政権構想をめぐって—『史学雑誌』※125-11, 史学会, pp.40-64, 2016/11

中村博司「豊臣期大坂の「惣構」をめぐる諸問題」『ヒストリア』※259, 大阪歴史学会, pp.272-300, 2016/12

濱田恭幸「旧両替商長田家の処分過程と親族小西新右衛門家—「長田事件」を中心に—」『地域研究いたみ』46, 伊丹市立博物館, 伊丹市立博物館, pp.80-106, 2017/3

東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営—幕府・所領との関係を中心に—」『ヒストリア』※259, 大阪歴史学会, pp.180-209, 2016/12

東野将伸「19世紀後期日本の農村部における生業と人口移動」, 大阪大学大学院文学研究科編『グローバル日本研究国際シンポジウム「開く日本・閉じる日本—人間移動学」事始め—」成果報告書』, 大阪大学大学院文学研究科, pp.39-47, 2017/3 ※大阪大学大学院文学研究科ホームページ上での公開

久野 洋「地域政党鶴鳴会の成立—明治期地方政治史研究の一視角—」『史学雑誌』※125-7, 史学会, pp.1-36, 2016/7

久野 洋「地域史料からみえる帝国日本—小川貴の父宛書簡より—」『岡山県立記録資料館紀要』12, 岡山県立記録資料館, pp.39-50, 2017/3

平井 誠「明治期における城址公園の性格変化—萩公園を例として—」『地方史研究』※66-5, 地方史研究協議会, pp.68-85, 2016/10

【2017年度】

[博士前期]

有藤 萌「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)『歴史学入門』第5章「歴史の重層性と地域からの視線」—言語教育にみる地域と国家—」、『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.1-17, 2018/3 ※梅谷莉奈氏・綱澤広貴氏との共著

越智勇介「六国史に見える堤防修築記事の検討—茨田堤・伎人堤の検討を中心に—」、『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書(2017年度大学院学内GP<他他大学院との研究交流プログラム>)』,明治大学大学院文学研究科, pp.49-55, 2018/3

越智勇介「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)時間認識と時代区分をめぐって」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.18-37, 2018/3 ※柏恭平氏・望月みわ氏との共著

金沢大輔「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(3)福井憲彦『歴史学入門』第9章「人と人とを結ぶもの」を書き換える」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.38-56, 2018/3 ※森井一真氏・藪内夏実氏との共著

佐藤一希「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(4)政治と文化の関わりを考える—「政治文化」を中心に—」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.57-75, 2018/3

※松平桃子・丸山祐生氏との共著

綱澤広貴「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)『歴史学入門』第5章「歴史の重層性と地域からの視線」—言語教育にみる地域と国家—」、『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.1-17, 2018/3 ※有藤 萌氏・梅谷莉奈氏との共著

望月みわ「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)時間認識と時代区分をめぐって」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ15』,大阪大学歴史教育研究会, pp.18-37, 2018/3 ※越智勇介氏・柏恭平氏との共著

[博士後期]

伊藤大貴「応仁・文明の乱と山名氏」『日本史研究』※660,日本史研究会, pp.26-41, 2017/8

糸川風太「紀州藩・鳥羽藩領における幕府広域支配実現の特質—近世中後期の公儀浦触廻達を素材として—」『ヒストリア』※264,大阪歴史学会, pp.92-119, 2017/10

内田敦士「平安時代の仁王会」『ヒストリア』※265,大阪歴史学会, pp.50-75, 2017/12

康 昊「蒙古襲来后日本禪宗の歴史叙述與王權」『佛教史研究』※1,浙江大学東亜宗教文化研究中心編,台北:新文豐出版, pp.295-316, 2017/8

康 昊「『元亨釈書』の歴史構想における顕密仏教と禪宗」『日本史研究』※665,日本史研究会, pp.1-27, 2018/1

高木純一「東寺領山城国上久世荘における山林資源利用—「鎮守の森」と「篠村山」—」『地方史研究』※67-2,地方史研究協議会, pp.43-62, 2017/4

高木純一「東寺領山城国上久世荘における「荘家の一揆」と損免・井料」『ヒストリア』※264,大阪歴史学会, pp.66-91, 2017/10

増成一倫「律令制下の「土毛」調達について」『ヒストリア』※263,大阪歴史学会, pp.1-25, 2017/8

(2)口頭発表

【2016年度】

[学部生]

野間俊希「天正期における立花氏の家臣団編成—立花氏と与力の国人領主の関係の考察を通じて—」,大阪歴史学会近世史部会卒論報告会,大阪歴史学会,大阪市立旭区民センター/大阪府大阪市, 2016/4/24

上原駿一「近世中後期の城詰米制と幕府上方代官支配—但馬生野代官を中心に—」第12回地域史卒論報告会,歴史資料ネットワーク・神戸史学会,六甲道勤労市民センター/兵庫県神戸市, 2017/3/19

[博士前期]

安東 峻「日本古代における蝦夷認識の変遷」,続日本紀研究会10月例会,続日本紀研究会,アウィーナ大阪/大阪府大

阪市, 2016/10/28

安東 峻「論評：大高広和「大宝律令の制定と「蕃」「夷」(大会共同研究報告者業績検討会)」, 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 機関紙会館 2F 会議室/京都府京都市, 2017/3/12

苧野瑞生「明治期キリスト者のアジア主義—大日本海外教育会を中心に—」, 大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会・大阪歴史学会近代史部会・日本史研究会近現代史部会合同卒業論文報告会, 大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・日本史研究会, 機関紙会館 2F 会議室/京都府京都市, 2016/8/6

苧野瑞生「大日本海外教育会のキリスト教徒—その活動とアジア主義思想を中心に—」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2016/9/18

田村 亨「鎌倉期公武関係と人的ネットワーク」, 鎌倉時代研究会 7 月例会, 鎌倉時代研究会, 京都大学文学部/京都府京都市, 2016/7/25

田村 亨「撰家将軍期の寺社紛争解決と公武間ネットワーク」, 大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 東淀川区民会館/大阪府大阪市, 2016/11/6

田村 亨「長村祥知氏の業績について(大会共同研究報告者業績検討会)」, 日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 機関紙会館 2F 会議室/京都府京都市, 2017/3/28

平田良行「近世後期幕府代官所支配システムの一考察—信楽代官役所勢州支配地を中心に—」, 第 55 回近世史サマーセミナー分科会, 第 55 回近世史サマーセミナー実行委員会, ファミリー神立/新潟県南魚沼郡, 2016/7/16

丸岡大祐「古代における地震観の検討」, 続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会, 続日本紀研究会・日本史研究会, ウィングス京都/京都府京都市, 2016/6/5

丸岡大祐「古代における地震観の検討」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2016/7/9

丸岡大祐「高校日本史教科書における日明関係再考(院生グループ報告「日本対外関係史の現在」)」, 大阪大学歴史教育研究会第 99 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2016/10/15

※斉藤誠氏・杜雨霏氏・八木啓俊氏とのグループ報告

丸岡大祐「論評：若尾政希「江戸時代前期の社会と文化」に関して」, 第 33 回歴史学入門講座実行委員会勉強会, 第 33 回歴史学入門講座実行委員会, 関西大学/大阪府吹田市, 2017/2/25

[博士後期]

内田敦士「称徳朝の仏教改革」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2017/1/9

内田敦士「平安時代の護国法会体系」, 続日本紀研究会 1 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2017/1/27

内田敦士「平安時代の仁王会(第 1 回大会準備報告)」, 続日本紀研究会 3 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪/大阪府大阪市, 2017/3/31

尾崎真理「小酒井大悟氏の業績について(大会共同研究報告者業績検討会)」, 日本史研究会近世史部会, 日本史研究会, 機関紙会館 2F 会議室/京都府京都市, 2016/4/9

尾崎真理「古文書からみえる、江戸時代の村運営のしくみ」, 高槻市文化財スタッフの会交流会, 高槻市文化財スタッフの会, 高槻市しろあと歴史館/大阪府高槻市, 2016/9/13

尾崎真理「近世中後期における幕領支配の変質過程—大坂代官の支配替をめぐる—」, 歴史学研究会近世史部会 1 月部会, 歴史学研究会, 東京大学史料編纂所大会議室/東京都文京区, 2017/2/2

康 昊「渡宋僧与日本密教的中国観」, 第 12 回北京大学史学フォーラム, 第 12 回北京大学史学フォーラム, 北京大学/中華人民共和国, 2016/3/26

康 昊「『元亨釈書』の歴史構想における顕密仏教と禅宗」, 仏教史学会 7 月例会, 仏教史学会, 佛教大学/京都府京都市, 2016/7/16

- 高岡 萌「大正期における高等教育の制度改革と学校増設」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2016/7/9
- 高岡 萌「大正期における高等学校制度改革・増設政策の展開—「中央」・「地域」相互の影響に着目して—」, 大阪歴史科学協議会前近代史・帝国主義合同部会, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央/大阪府大阪市, 2016/9/1
- 高岡 萌「大正期における旧藩主家の育英事業の再編—佐賀鍋島家の動向を中心に—」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 北区民センター/大阪府大阪市, 2016/11/18
- 高木純一「里山・棚田・鎮守の森—日本の村と「日本の原風景」を考える—」, 大阪大学歴史教育研究会第100回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2016/11/19
- 田辺 旬「北条政子発給文書の基礎的考察」, 鎌倉遺文研究会例会, 鎌倉遺文研究会, 早稲田大学/東京都新宿区, 2016/7/28
- 田辺 旬「鎌倉期武士の先祖観と南北朝内乱」, 中世政治史研究会, 中世政治史研究会, 東京大学史料編纂所/東京都文京区, 2017/1/28
- 永野弘明「熊本地震における被害状況と資料保全活動」, 2016年度歴史資料ネットワークシンポジウム, 歴史資料ネットワーク, 神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ/大阪府大阪市, 2016/7/3
- 永野弘明「実習・乾式クリーニング」, 国立文化財機構防災ネットワーク推進事業研修会, 国立文化財機構, 熊本県博物館ネットワークセンター/熊本県宇城市, 2016/10/12
- 永野弘明「伊賀国黒田荘の成立過程における郡司と荘官」, 大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, 東淀川区民会館/大阪府大阪市, 2016/11/18
- 永野弘明「熊本現状確認」, 歴史資料ネットワーク1月委員会, 歴史資料ネットワーク, 西宮市市民交流センター/兵庫県西宮市, 2017/1/26
- 中村博司「大坂城「惣構」の変遷をめぐる諸問題」, 大阪歴史学会大会近世史部会個人報告, 大阪歴史学会, 関西学院大学上ヶ原キャンパス/兵庫県西宮市, 2016/6/26
- 永山 愛「軍勢催促状の発給に関する一考察」, 日本古文書学会大会, 日本古文書学会, 早稲田大学国際会議場(井深大記念ホール)/東京都新宿区, 2016/9/25
- 永山 愛「元弘～建武戦乱期における軍事編成」, 悪党研究会11月例会, 悪党研究会, 文化会館たづくり/東京都調布市, 2016/11/5
- 永山 愛「畿内武士論の成果と課題(大会共同研究報告反省会)」, 日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 機関紙会館2F会議室/京都府京都市, 2016/11/22
- 永山 愛「軍勢催促状の基礎的考察—南北朝期における御判御教書を中心に—」, 大阪歴史科学協議会前近代史研究部会, 大阪歴史科学協議会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2017/1/27
- 濱田恭幸「「難治県」の解体過程—「大石川県」を中心に—」, 日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 機関紙会館2F会議室/京都府京都市, 2017/1/26
- 久野 洋「松沢裕作『自由民権運動—〈デモクラシー〉の夢と挫折』を読む」, 第5回日本近現代史の再検討研究会, 日本近現代史の再検討研究会, 佛教大学/京都府京都市, 2016/12/10
- 久野 洋「日露戦後～第一次大戦期における非政友勢力の地域的基盤—犬養毅の選挙地盤を中心に—(第1回大会準備報告)」, 大阪歴史学会近代史部会, 大阪歴史学会, 大淀コミュニティセンター/大阪府大阪市, 2017/3/8
- 東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営—幕府・所領との関係を中心に—(第2回大会準備報告)」, 大阪歴史学会近世史部会, 大阪歴史学会, 大阪市立中央区民センター/大阪府大阪市, 2016/5/6
- 東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営—幕府・所領との関係を中心に—」, 畿内近国史研究会6月例会, 畿内近国史研究会, 大阪大学大学院文学研究科/大阪府豊中市, 2016/6/12
- 東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営—幕府・所領との関係を中心に—」, 大阪歴史学会大会近世史部会部会報告, 大阪歴史学会, 関西学院大学上ヶ原キャンパス/兵庫県西宮市, 2016/6/26

- 東野将伸「書評：安国良一「貨幣改鑄と新旧貨引替機構—文政期、十五軒組合の設立を中心に—」」，畿内近国史研究会 9 月例会，畿内近国史研究会，神戸大学大学院人文学研究科／兵庫県神戸市，2016/9/11
- 東野将伸「江戸時代の村と年貢」，高槻市文化財スタッフの会交流会，高槻市文化財スタッフの会，高槻市しろあと歴史館／大阪府高槻市，2016/9/13
- 東野将伸「江戸時代の兒山家と兒山家文書について」，兒山家文書調査班研究報告，兒山家文書調査班，兒山家住宅／大阪府堺市，2016/9/20
- 古林小百合「豪農による地誌出版の経緯とその受容—備中国川上郡平川村平川金兵衛による地誌『備中府志』の出版活動を事例として—」，岡山地方史研究会例会，岡山地方史研究会，岡山大学／岡山県岡山市，2016/7/2
- 古林小百合「村の由緒—備中国川上郡平川村平川家を事例として—」，高槻市文化財スタッフの会交流会，高槻市文化財スタッフの会，高槻市しろあと歴史館／大阪府高槻市，2016/9/13
- 古林小百合「家の由緒—備中国川上郡平川村の庄屋平川家を事例として—」，大阪歴史学会近世史部会，大阪歴史学会，淀川区民センター／大阪府大阪市，2016/11/25
- 増成一倫「論評：本庄聡子「大宝二年戸籍と寄口」（大会共同研究報告者業績検討会）」，日本史研究会古代史部会，日本史研究会，機関紙会館 2F 会議室／京都府京都市，2016/4/11
- 増成一倫「修理池溝料の成立とその背景」，続日本紀研究会 4 月例会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2016/4/22
- 増成一倫「救急料の成立と機能」，明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，明治大学と大阪大学・京都府立大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2017/1/9

【2017 年度】

〔学部生〕

- 澤居美奈実「文久期御親兵制度と幕府・公卿・諸藩」，第 13 回地域史卒論報告会，神戸史学会・歴史資料ネットワーク，六甲道勤労市民センター／神戸市灘区，2018/3/18
- 〔博士前期〕
- 有藤 萌「弘仁期における検非違使の私鑄銭・強窃盗専決権獲得の背景」，続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会，続日本紀研究会・日本史研究会，大阪歴史博物館／大阪府大阪市，2017/6/4
- 有藤 萌「第 5 章「歴史の重層性と地域からの視線」—教育に見る地域と国家—（院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える①》）」，大阪大学歴史教育研究会第 108 回例会，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市，2017/10/21 ※梅谷莉奈氏・網澤広貴氏との共同報告
- 有藤 萌「古代の刑罰体系について」，大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪西／大阪府大阪市，2018/1/27
- 安東 峻「古代東北における人身支配と地域支配」，続日本紀研究会 10 月例会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2017/10/27
- 上原駿一「近世後期幕府上方代官と貯穀運用体制—但馬国生野代官所地役人史料を基底に—」，大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪西／大阪府大阪市，2018/1/27
- 越智勇介「古代河内地域における開発とその意義」，大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪中央／大阪府大阪市，2017/10/14
- 越智勇介「第 4 章「時間認識と時代区分」をめぐって（院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える①》）」，大阪大学歴史教育研究会第 108 回例会，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市，2017/10/21 ※柏恭平氏・望月みわ氏との共著
- 越智勇介「六国史に見える堤防修築記事の検討—茨田堤・伎人堤の検討を中心に—」，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考

- 古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2018/1/8
- 苧野瑞生「大韓帝国期の日語学校「京城学堂」の研究—日本の対韓政策・韓国内の動向を踏まえて—(三学会合同修士論文報告会)」, 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 機関紙会館 2 階会議室／京都府京都市, 2018/2/18
- 金沢大輔「治承寿永内乱期における畿内近国武士の動向—木曾義仲との関係を中心に—(日本史研究会中世史部会卒業論文報告会)」, 日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 機関紙会館 5 階大会議室／京都府京都市, 2017/8/6
- 金沢大輔「第 9 章「人と人とを結ぶもの」を書き換える(院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える②)》」
大阪大学歴史教育研究会第 109 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市,
2017/12/16
- 佐藤一希「近世後期における皇統意識の変容—天皇・后妃・皇子女葬送の検討を中心に—」, 大阪歴史学会近世史部会,
大阪歴史学会, 大阪市立東住吉会館／大阪府大阪市, 2017/4/23
- 佐藤一希「近世天皇・后妃・皇子女葬送の基礎的考察」, 畿内近国史研究会例会, 畿内近国史研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2017/6/4
- 佐藤一希「近世京都における天皇・后妃・皇子女葬送の基礎的考察」, 第 56 回近世史サマーセミナー分科会, 近世史サマーセミナー実行委員会, 鹿島屋旅館／石川県金沢市, 2017/7/15
- 佐藤一希「近世後期天皇研究の課題と展望」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2017/10/14
- 佐藤一希「現代歴史学における「政治文化」(院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える②)》」, 大阪大学歴史教育研究会第 109 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2017/12/16
- ※松平桃子氏・丸山祐生氏との共同報告
- 網澤広貴「第 5 章「歴史の重層性と地域からの視線」—教育に見る地域と国家—(院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える①)》」, 大阪大学歴史教育研究会第 108 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2017/10/21 ※有藤 萌氏・梅谷莉奈氏との共同報告
- 網澤広貴「在方(村)支配のシステム」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪西／大阪府大阪市, 2018/1/27
- 網澤広貴「近世後期津山松平藩における村方支配機構の構造」, 畿内近国史研究会例会, 畿内近国史研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市, 2018/3/17
- 長谷川昇平「奈良時代における巡察使・弾正台と百姓撫育」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2017/10/14
- 丸岡大祐「日本古代災害観の検討」, 続日本紀研究会 9 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市,
2017/9/22
- 望月みわ「日露戦争後における電信利権をめぐる対外交渉の展開(三学会合同卒業論文報告会)」, 日本史研究会近現代史部会・大阪歴史学会近代史部会・大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会, 日本史研究会・大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 機関紙会館 2 階会議室／京都府京都市, 2017/7/16
- 望月みわ「第 4 章「時間認識と時代区分」をめぐる(院生グループ報告《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える①)》」,
大阪大学歴史教育研究会第 108 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス／大阪府豊中市,
2017/10/21 ※越智勇介氏・柏恭平氏との共同報告
- 望月みわ「高木博志「古都京都イメージの近代」の検討」, 大阪歴史学入門講座準備会, 大阪歴史学入門講座実行委員会,
大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2018/1/20
- 望月みわ「大陸政策における現業官庁・通信省」, 大阪歴史科学協議会若手研究者問題関心報告, 大阪歴史科学協議会,
クレオ大阪西／大阪府大阪市, 2018/1/27
- 望月みわ「現業官庁・通信省からみる日露戦争と大陸利権」, 日露関係史研究会, 日露関係史研究会, 大阪大学大学院法学研究科／大阪府豊中市, 2018/2/20

〔博士後期〕

- 内田敦士「平安時代の仁王会（第2回大会準備報告）」，続日本紀研究会4月例会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2017/4/28
- 内田敦士「平安時代の仁王会（第3回大会準備報告）」，続日本紀研究会5月例会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2017/5/26
- 内田敦士「平安時代の仁王会（大阪歴史学会2017年度大会・古代史部会報告）」，大阪歴史学会2017年度大会，大阪歴史学会，大阪市立大学／大阪府大阪市，2017/6/25
- 尾崎真理「書評：酒井一著『日本の近世社会と大塩事件』」，畿内近国史研究会例会，畿内近国史研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2017/6/4
- 康 昊「西番帝師興亡國邪法」，評論與反思：中國史的國際視野國際シンポジウム，評論與反思：中國史的國際視野國際シンポジウム，東北師範大學／中華人民共和国長春市，2017/6/17
- 康 昊「書評：平雅行『鎌倉仏教と専修念仏』序章・第1章」，大阪歴史科学協議会前近代史部会，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪中央／大阪府大阪市，2017/7/7
- 康 昊「日本中世の禅宗における三学兼修と一向禅院」，第2回東アジア日本研究者協議会，東アジア日本研究者協議会，南開大学／中華人民共和国天津市，2017/10/27
- 康 昊「唐宋時代の台禅論争と虎関師鍊の『済北集』」，第115回史学会大会，史学会，東京大学／東京都文京区，2017/11/12
- 康 昊「南北朝・室町前期における禅院の千僧齋、水陸会と追善」，日本史研究会中世史部会，日本史研究会，機関紙会館2階会議室／京都府京都市，2018/1/23
- 高岡 萌「大正期における高等学校制度改革—第二次高等学校令と高等教育機関創設及拡張計画を中心に—」，第40回大学史研究セミナー，大学史研究会，香川大学／香川県高松市，2017/11/19
- 高岡 萌「歴史講座 坂上廣野の顕彰運動」，平成29年度第4回平野区歴史講座，大阪市コミュニティ協会平野区支部協議会，平野区民センター／大阪府大阪市，2017/12/3
- 高木純一「東寺領山城国上久世荘における鎮守・寺庵」，中世史研究会11月例会，中世史研究会，ウインクあいち／愛知県名古屋，2017/11/10
- 田村 亨「撰家将軍期公武関係の展開と特質—社社紛争解決と公武ネットワーク—」，第37回中世政治史研究会，中世政治史研究会，東京大学史料編纂所／東京都文京区，2017/6/18
- 田村 亨「六波羅探題の成立と鎌倉幕府訴訟制度の展開」，鎌倉時代研究会9月例会，鎌倉時代研究会，京都大学文学部陳列館／京都府京都市，2017/9/25
- 田村 亨「平雅行氏「鎌倉仏教の成立と展開」について—治承・寿永内乱画期説に注目して—」大阪歴史科学協議会前近代史研究部会，大阪歴史科学協議会，大阪市北区民センター／大阪府大阪市，2018/3/7
- 永野弘明「日本中世社会形成期における荘園制の展開と震災復興」，高梨学術財団平成29年度助成授与式及び研究説明会，高梨学術財団，オアーゼネクスサス芝浦／東京都港区，2017/6/8
- 永野弘明「熊本地震被災歴史資料保全活動の現状」，2017年度歴史資料ネットワークシンポジウム，歴史資料ネットワーク，神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ／大阪府大阪市，2017/7/9
- 永野弘明「災害から地域歴史資料を守る」，平成29年度愛媛県博物館等関係職員研修会，愛媛県博物館協会，愛媛県総合科学博物館／愛媛県新居浜市，2018/2/28
- 永野弘明「水損資料の応急処置」，平成29年度愛媛県博物館等関係職員研修会，愛媛県博物館協会，愛媛県総合科学博物館／愛媛県新居浜市，2018/2/28
- 永山 愛「護良親王令旨論—鎌倉幕府滅亡時における軍事編成—」，鎌倉遺文研究会第231回例会，鎌倉遺文研究会，早稲田大学／東京都新宿区，2017/6/29
- 永山 愛「南北朝期における武士団構造—安芸国三入庄地頭熊谷氏を事例として—」，第115回史学会大会，史学会，東京大学／東京都文京区，2017/11/12

- 永山 愛「南北朝期の惣領について—軍事指揮権の問題を中心に—」, 日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 機関紙
会館 2 階会議室/京都府京都市, 2017/12/12
- 永山 愛「南北朝期の軍役について」, 段銭研究会, 段銭研究会, 大阪大学豊中キャンパス/大阪府豊中市, 2018/3/19
- 平田良行「近世後期幕府公金貸付政策における代官役所の役割—信楽代官役所の事例を中心に—」, 大阪歴史学会近世史
部会, 大阪歴史学会, 淀川区民センター/大阪府大阪市, 2017/10/27
- 平田良行「近世後期幕府代官役所における貸付金政策の検討—幕府公金貸付政策との関わりを中心に— (仮)」近世史フ
ォーラム 2018 年 3 月例会, 近世史フォーラム, 北区民センター/大阪府大阪市, 2018/3/24
- 増成一倫「賦役令貢献物条の特質と機能 —律令財政制度における位置づけをめぐって—」, 歴史学研究会古代史部会 10
月例会, 歴史学研究会, 東洋大学白山キャンパス/東京都文京区, 2017/10/29

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016 年度】

〔学部生〕

- 長田晃平「歴史学入門講座参加記」, 『歴史科学』 225, 大阪歴史科学協議会, pp.27-29, 2016/6
- 星 和音「地域史卒論報告会に参加して」, 『史料ネット News Letter』 83, 歴史資料ネットワーク, p.9, 2016/11
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会): 2016 年 1 月近現代史部会渡邊桂子報告討論要旨」, 『日本史研究』 645, 日本史
研究会, pp.83-84, 2016/5

〔博士前期〕

- 安東 峻「部会ニュース(古代史部会): 2015 年 11 月古代史部会内田敦士報告討論要旨」『日本史研究』 646, 日本史研究
会, pp.84-85, 2016/6
- 安東 峻「2・11 集会—各地の記録 大阪」, 『歴史評論』 796, 歴史科学協議会, pp.108-109, 2016/8
- 安東 峻「第 50 回『建国記念の日』不承認大阪府民のつどい」の記録」, 『歴史科学』226, 大阪歴史科学協議会, pp.12-14,
2016/12
- 小野潤子「書評: 夫馬進『朝鮮燕行使と朝鮮通信使』」, 『ヒストリア』 255, 大阪歴史学会, pp.80-89, 2016/4
- 苧野瑞生「質疑・討論 (2016 年度大阪歴史学会大会近代史部会・本井優太郎「1950 年代における市町村合併の展開—兵
庫県明石市とその周辺自治体を事例に—」報告討論要旨)」, 『ヒストリア』, 259, 大阪歴史学会, pp.270-271, 2016/12
- 苧野瑞生「部会ニュース(近現代史部会): 2016 年 8 月近現代史部会報告要旨」, 『日本史研究』652, 日本史研究会, pp.72-73,
2016/12
- 苧野瑞生「部会ニュース(近現代史部会): 2016 年 8 月近現代史部会石塚洋介報告討論要旨」, 『日本史研究』 652, 日本史
研究会, p.73, 2016/12
- 田村 亨「『歴史学の方法』と向き合う—入門講座参加記として—」, 『歴史科学』 225, 大阪歴史科学協議会, pp.27-29,
2016/6
- 平田良行「2015 年 9 月例会彙報」, 『歴史科学』 226, 大阪歴史科学協議会, pp.62-63, 2016/12
- 八木貴裕「大阪歴史科学協議会委員会記録 (2015 年度 7 月・9 月・10 月・11 月)」, 『歴史科学』 224, 大阪歴史科学協
議会, pp.65-67, 2016/4 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 八木貴裕「大阪歴史科学協議会委員会記録 (2015 年度 12 月・1 月・2 月)」『歴史科学』225, 大阪歴史科学協議会, pp.59-61,
2016/6 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 八木貴裕「大阪歴史科学協議会委員会記録 (2015 年度 3 月・4 月・5 月・6 月臨時、2016 年度 6 月)」『歴史科学』 226,
大阪歴史科学協議会, pp.64-65, 2016/12 ※北泊謙太郎氏との共同執筆

〔博士後期〕

- 内田敦士「部会ニュース(古代史部会): 2015 年 11 月古代史部会報告要旨」『日本史研究』 646, 日本史研究会, pp.83-84,
2016/6
- 内田敦士「称徳朝の仏教改革」, 『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生

- 研究交流プログラム 成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp.58-63, 2017/3
- 尾崎真理「『近世の上町台地を歩く』に参加して」, 『歴史科学』224, 大阪歴史科学協議会, pp.38-40, 2016/4
- 尾崎真理「第55回近世史サマーセミナーの記録:はじめに、分科会F」, 『新潟史学』74, 新潟史学会, p.63, p.69, 2016/10
- 尾崎真理「2015年5月例会彙報」, 『歴史科学』226, 大阪歴史科学協議会, pp.61-62, 2016/12
- 高木純一「新刊紹介:木村茂光・小山俊樹・戸部良一・深谷幸治編『大学でまなぶ日本の歴史』」, 『高大連携歴史教育研究会会報』2, 高大連携歴史教育研究会, pp.243-245, 2016/7
- 高木純一「討論と反省(日本史研究会大会共同研究報告・中世史部会生駒孝臣「中世国家と畿内武士」報告討論要旨)」, 『日本史研究』655, 日本史研究会, pp.54-58, 2017/3
- 永野弘明「熊本における文化財レスキュー」, 『史料ネット News Letter』, 83, 歴史資料ネットワーク, pp.2-3, 2016/1
- 中村博司「大坂城「惣構」の変遷をめぐる諸問題(2016年度大会報告要旨)」, 『ヒストリア』256, 大阪歴史学会, pp.108-109, 2016/6
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会):2016年11月中世史部会田中誠報告討論要旨」, 『日本史研究』655, 日本史研究会, pp.164-165, 2017/3
- 濱田恭幸「2・11集会の歩み—2・11集会プレ勉強会の記録」, 『歴史科学』224, 大阪歴史科学協議会, p.61, 2016/4
- 濱田恭幸「部会ニュース(近現代史部会):2016年8月近現代史部会苧野瑞生報告討論要旨」, 『日本史研究』652, 日本史研究会, pp.76-77, 2016/12
- 濱田恭幸「質疑・討論(2016年度大阪歴史学会大会近代史部会・前田結城「府藩県三治一致の特質と展開に関する一考察」報告討論要旨)」, 『ヒストリア』, 259, 大阪歴史学会, pp.239-240, 2016/12
- 濱田恭幸「例会ニュース:4月例会「『地方利益』論の現在」討論要旨」, 『日本史研究』655, 日本史研究会, pp.160-161, 2017/3
- 東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営—幕府・所領との関係を中心に—(2016年度大会報告要旨)」, 『ヒストリア』256, 大阪歴史学会, pp.105-106, 2016/6
- 久野 洋監修, 伊丹市立博物館編『伊丹市立博物館史料集12 明治期伊丹の鉄道』, 伊丹市立博物館, 総頁数185頁, 2017/3 ※奥村 弘氏と共同監修
- 久野 洋「討論と反省(日本史研究会大会共同研究報告・近現代史部会内山一幸「旧誼と朝臣」報告討論要旨)」, 『日本史研究』655, 日本史研究会, pp.151-156, 2017/3
- 増成一倫「新刊紹介:条里制・古代都市研究会編『古代の都市と条里』」, 『古代文化』68-1, 古代学協会, p.140, 2016/6
- 増成一倫「救急料の成立と機能」, 『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書』, 明治大学大学院文学研究科, pp.64-70, 2017/3

【2017年度】

〔学部生〕

- 荻原 悠「第32回歴史学入門講座に参加して」, 『歴史科学』230, 大阪歴史科学協議会, pp.18-20, 2017/11
- 〔博士前期〕
- 有藤 萌「部会ニュース(古代史部会):2017年6月古代史部会報告要旨(卒業論文大報告会)」, 『日本史研究』665, 日本史研究会, pp.93-94, 2018/1
- 有藤 萌「部会ニュース(古代史部会):2017年6月古代史部会久住駿介報告討論要旨(卒業論文大報告会)」, 『日本史研究』665, 日本史研究会, pp.98, 2018/1
- 安東 峻「2015年11月例会彙報」, 『歴史科学』228, 大阪歴史科学協議会, p.59, 2017/4
- 安東 峻「部会ニュース(古代史部会):2017年1月古代史部会毛利憲一報告討論要旨」, 『日本史研究』662, 日本史研究会, pp.121-122, 2017/10
- 上原駿一「参加記:地域史卒論報告会に参加して」『史料ネット News Letter』86, 歴史資料ネットワーク, pp.13-14, 2018/2
- 苧野瑞生「第32回歴史学入門講座参加記」, 『歴史科学』230, 大阪歴史科学協議会, pp.15-17, 2017/11

- 金沢大輔「大阪歴史学会委員会報告(2016年度第11回・臨時新旧合同委員会)」、『ヒストリア』264, 大阪歴史学会, p.154, 2017/10 ※岸本直文氏との共同執筆
- 金沢大輔「大阪歴史学会委員会報告(2017年度第1回・第2回)」、『ヒストリア』265, 大阪歴史学会, pp.252-253, 2017/12 ※岸本直文氏との共同執筆
- 金沢大輔「大阪歴史学会委員会報告(2017年度第3回・第4回)」、『ヒストリア』265, 大阪歴史学会, pp.105-106, 2018/2 ※岸本直文氏との共同執筆
- 金沢大輔「部会ニュース(中世史部会):2017年8月中世史部会報告要旨(卒業論文報告会)」、『日本史研究』666, 日本史研究会, pp.232-233, 2018/2
- 金沢大輔「部会ニュース(中世史部会):2017年8月中世史部会岩永紘和報告・佐々木舜報告・池田さやか報告・岩本晃一報告討論要旨(卒業論文報告会)」、『日本史研究』666, 日本史研究会, p.240, 2018/2
- 佐藤一希「質疑・討論(2017年度大阪歴史学会大会近世史部会・井戸田史子「近世大坂市中と大坂湾における舟運の構造—上荷船・茶船の実態を通して—」報告討論要旨)」、『ヒストリア』, 265, 大阪歴史学会, pp.161-162, 2017/12
- 長谷川昇平「大阪歴史科学協議会委員会記録(2017年度7月・9月・10月)」、『歴史科学』231, 大阪歴史科学協議会, pp.59-60, 2018/2 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 丸岡大祐「部会ニュース(古代史部会):2016年6月古代史部会報告要旨(卒業論文大報告会)」、『日本史研究』657, 日本史研究会, pp.76-77, 2017/5
- 丸岡大祐「2016年7月例会彙報」、『歴史科学』230, 大阪歴史科学協議会, p.56, 2017/11
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会):2017年7月近現代史部会報告要旨」、『日本史研究』663, 日本史研究会, pp.129-130, 2017/11
- 望月みわ「部会ニュース(近現代史部会):2017年7月近現代史部会森島香恋報告討論要旨」、『日本史研究』663, 日本史研究会, pp.132-133, 2017/11
- 望月みわ「質疑・討論(2017年度大阪歴史学会大会近代史部会・久野洋「犬養毅・立憲国民党の地方基盤—大正期「第三党」構想の前提—」報告討論要旨)」、『ヒストリア』, 265, 大阪歴史学会, pp.238-240, 2017/12 [博士後期]
- 内田敦士「平安時代の仁王会(2017年度大会報告要旨)」、『ヒストリア』262, 大阪歴史学会, pp.81-82, 2017/6
- 尾崎真理「近世中後期における幕領支配の変質過程—大坂代官の支配替をめぐる—」、『歴史学研究月報』691, 歴史学研究会, pp.4-5, 2017/7
- 尾崎真理「書評:酒井一著『日本の近世社会と大塩事件』」、『日本史研究』664, 日本史研究会, pp.119-125, 2017/12
- 高岡 萌「大阪歴史科学協議会委員会記録(2016年度10月・11月・12月)」、『歴史科学』228, 大阪歴史科学協議会, pp.63-64, 2017/4 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史科学協議会委員会記録(2016年度1月・2月)」、『歴史科学』229, 大阪歴史科学協議会, p.69, 2017/5 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史科学協議会委員会記録(2016年度3月・4月・5月・6月臨時、2017年度6月)」、『歴史科学』230, 大阪歴史科学協議会, pp.58-59, 2017/11 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 高木純一「例会ニュース:2016年11月例会「中世都市論のこれまでとこれから」討論要旨」、『日本史研究』660, 日本史研究会, p.87, 2017/8
- 高木純一「書評:荘園・村落史研究会編『中世村落と地域社会—荘園制と在地の論理—』」、『ヒストリア』264, 大阪歴史学会, pp.129-137, 2017/10
- 高木純一「新刊紹介:春田直紀編『中世地下文書の世界—史料論のフロンティア—(アジア遊学209)』」、『史学雑誌』126-12, 史学会, pp.84-85, 2017/12
- 田辺 旬「書評:坂井孝一著『曾我物語の史的研究』」、『日本史研究』660, 日本史研究会, pp.56-63, 2017/8
- 田村 亨「2016年度「第32回歴史学入門講座」の記録」、『ヒストリア』261, 大阪歴史学会, pp.73-75, 2017/4
- 田村 亨「2016年5月例会彙報」、『歴史科学』228, 大阪歴史科学協議会, pp.61-62, 2017/4

- 田村 亨「第55回中世史サマーセミナー参加記」,『歴史学研究月報』,歴史学研究会,2017/11
- 永野弘明「資料保全活動の現状とこれから—第3回全国史料ネット研究交流集会参加記—」『地方史研究』67-3,地方史研究協議会,pp.65-69,2017/6
- 永野弘明「質疑・討論(2017年度大阪歴史学会大会中世史部会・松井直人「室町幕府侍所と京都」報告討論要旨)」,『ヒストリア』,265,大阪歴史学会,pp.72-75,2017/12
- 濱田恭幸「部会ニュース(近現代史部会):2017年1月近現代史部会報告要旨」,『日本史研究』657,日本史研究会,pp.89-90,2017/5
- 古林小百合「巻頭言 史料ネット運営委員になって思うこと」『史料ネット News Letter』85,歴史資料ネットワーク,p.2,2017/6
- 古林小百合『新版八尾市史 近世史料編1 古文書で学ぶ江戸時代の八尾』,市史編纂委員会・市史編集委員会編,八尾市,pp.16-35,pp.42-47,pp.72-77,pp.90-93,pp.202-205,2017/7
- 増成一倫「質疑・討論(2017年度大阪歴史学会大会古代史部会・内田敦士「平安時代の仁王会」報告討論要旨)」,『ヒストリア』,265,大阪歴史学会,pp.130-132,2017/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

尾崎真理「近世中後期における幕領支配の研究」,第14回徳川奨励賞,公益財団法人徳川記念財団,奨励金:50万円,対象年度:2017年4月-2018年3月,受賞年月:2016/12/9

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:3名 DC2:2名 DC1:1名 (計6名)

※PD:溝口優樹・芳澤 元・久保田裕次、DC2:尾崎真理・増成一倫、DC1:永山 愛

2017年度 PD:3名 DC2:1名 DC1:1名 (計5名)

※PD:溝口優樹・東野将伸・久野 洋、DC2:増成一倫、DC1:永山 愛

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名) ※金 旻俊(短期留学)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

後藤 敦史 博士後期課程、京都橘大学、准教授、2017/4

芳澤 元 博士後期課程、明星大学、助教、2017/4

久保田裕次 博士後期課程、京都大学、特定助教、2017/4

中村 翼 博士後期課程、京都教育大学、講師、2017/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8名

2016年度:4名 2017年度:4名

<内訳>2016年度 中・高等学校の教員 1名(神戸女学院大学中等部・高等学部)
博物館等の学芸員 1名(あわら市立郷土歴史資料館)

技術職 1名（株式会社泉放送制作） ジャーナリスト 1名（毎日新聞社）
2017年度 中・高等学校の教員 2名（西大和学園中学校・高等学校、大手前丸亀中学高等学校）
技術職 1名（EIZO株式会社） ジャーナリスト 1名（日本放送協会）

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2016年度：1名（シーコラ，ヤン先生 [カレル大学]） ※2017年1月～7月

2017年度：1名（シーコラ，ヤン先生 [カレル大学]） ※2017年1月～7月

9. 刊行物

2016年度 『史友会会報』第31号（待兼山史友会編、同、2017年3月）

2017年度 『史友会会報』第32号（待兼山史友会編、同、2018年2月）

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」（学会、事務局引き受け） 2014年6月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会（1998年度～2017年度）

- ・「戦後歴史学」のいくつかの波～職業としての歴史学・思想としての歴史学～ 2017年1月18日
発表者：藪田 貫先生（関西大学名誉教授）
- ・「明治末期・大正期における消費社会の成り立ち」 2017年7月6日
発表者：シーコラ，ヤン先生（カレル大学東アジア研究所）
- ・「横着な歴史学研究と真面目な歴史教育」 2018年1月17日
発表者：原田敬一先生（佛教大学歴史学部教授）

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 村田 路人 教授

1955年生。1977年大阪大学文学部史学科卒業。1981年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士（大阪大学、1994年）。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002年4月より現職。専攻：日本近世史

1-1. 論文

村田路人「触の書き留められ方—触留帳論の試み—」枚方市教育委員会文化財課市史資料室『枚方市史年報』20, 枚方市教育委員会文化財課市史資料室, pp. 1-24, 2018/3

1-2. 著書

村田路人他(共著)『日本史B 新訂版』実教出版, pp. 154-213, 2018/1

村田路人, 清水喜美子, 田村正孝(監修)『豊中市文書館史料集1 麻田藩豊鳴郷大庄屋日記』豊中市, 114p., 2017/3

村田路人他(共著)『ふるさとを知ろう 摂津市の歴史』摂津市, pp. 24-27, 2016/12

村田路人, 馬部隆弘, 上田長生他(共編著)『新修茨木市史 第二巻 通史編Ⅱ近世』茨木市, pp. 129-162, 163-205, 208-229, 2016/7

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

豊中市歴史的文化的文書審議会・委員, 2014年11月～現在に至る

豊中市文化財保護審議会・委員, 2014年4月～現在に至る

文化庁文化審議会・専門委員, 2014年3月～現在に至る

歴史科学協議会・理事, 2013年11月～2016年11月

摂津市文化財保護審議会・委員, 2013年7月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員長, 2012年6月～2016年6月

吹田市立博物館協議会・委員, 2011年11月～現在に至る

摂津市史編さん委員会・編さん委員長, 2011年7月～現在に至る

茨木市編さん委員会・編さん委員, 2010年5月～2017年3月

島本町文化財保護審議会・委員, 2008年10月～現在に至る

吹田市文化財保護審議会・委員, 2003年11月～現在に至る

2. 飯塚 一幸 教授

1958年生。1988年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学博士（大阪大学、2018年）。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010年1月より現職。専攻：日本近代史

2-1. 論文

飯塚一幸「川北稔名誉教授に聞く—大阪大学の思い出—」大阪大学共創機構社会学共創本部アーカイブズ『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学共創機構社会学共創本部), 58-別冊, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-74, 2018/3

飯塚一幸「2016年の歴史学界—回顧と展望— 日本近現代三政治・社会(明治)」『史学雑誌』(史学会), 126-5, 史学会, pp. 148-152, 2017/5

飯塚一幸「自由党「広域蜂起派」と愛知県の自由民権運動」愛知県史編さん委員会『愛知県史のしおり』(愛知県), 愛知県, pp. 1-4, 2017/3

飯塚一幸「原敬の日露戦争認識」原敬を想う会『宝積』(原敬を想う会), 11, 原敬を想う会, pp. 4-5, 2017/3

飯塚一幸「二〇一五年度日本史研究会大会報告批判」『日本史研究』(日本史研究会), 664, 日本史研究会, pp. 60-66, 2016/4

2-2. 著書

藤井鹿男, 飯塚一幸, 山本長次他(監修)『佐賀近代史年表大正編大正4年1月～12月』佐賀大学地域学歴史文化研究センター

一, pp. 1-135, 2018/3

岸本忠三, 飯塚一幸(共編著)『岸本忠三 第十四代大阪大学総長回顧録』大阪大学出版会, pp. 1-209, 2018/3

今西一, 飯塚一幸, 石川亮太他(共編著)『帝国日本の移動と動員』大阪大学出版会, pp. 51-82, 2018/1

飯塚一幸『明治期の地方制度と名望家』吉川弘文館, 308p., 2017/10

飯塚一幸『日本近代の歴史3 日清・日露戦争と帝国日本』吉川弘文館, 243p., 2016/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

飯塚一幸「日清戦争・日露戦争研究の現在」第4回日本近現代史の再検討研究会, 日本近現代史の再検討研究会, 仏教大学, 2016/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号:26284096

研究題目:小西家資料の総合的研究

研究経費:2016年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

2017年度 直接経費 2,100,000円 間接経費 630,000円

研究の目的:

伊丹市の小西家は近世から現代に至る日本を代表する酒造家である。本研究は、伊丹市立博物館に寄託されている小西家資料と小西酒造萬歳蔵から発見された新出資料を対象として、(1)近世史・近代史・思想史・経済史・文学にまたがる学際的研究を行う、(2)(1)の研究を踏まえ『小西家資料の総合的研究』(仮)を刊行する、(3)(1)(2)の前提として、小西酒造萬歳蔵に所蔵されている新出資料の目録化を行い、CD-Rによる配布といった方法で公開することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

歴史科学協議会・理事, 2016年11月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員長, 2016年6月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2013年6月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011年4月～現在に至る

摂津市史編さん委員会・編さん委員, 2011年4月～現在に至る

枚方市史編纂委員会・編纂委員, 2011年4月～現在に至る

3. 川合 康 教授

1958年生。1987年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程単位修得退学。文学博士(神戸大学、1994年)。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012年4月より現職。専攻:日本中世史

3-1. 論文

川合康 「中世の始まりをより深く理解するための5冊」『kotoba』30号(2018年冬号), 集英社, pp. 54-57, 2017/12

川合康 「保元・平治の乱と相模武士」関幸彦『相模武士団』吉川弘文館, pp. 14-34, 2017/8

Kawai, Yasushi, with Karl F. Friday, 'Medieval warriors and warfare', *Routledge Handbook of Premodern Japanese History*, edited by Karl F. Friday, Routledge, pp. 310-329, 2017/7

3-2. 著書

川合康, 君島和彦, 加藤公明他(共著) 『高校日本史B 新訂版』実教出版, pp. 52-61, 64-75, 2018/1

川合康 『赤間神宮叢書 28 平清盛と「鹿ヶ谷事件」』源平シンポジウム委員会, 41p., 2017/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

川合康 (解説) 「3章のねらい」『高校日本史B教授用指導書』実教出版, p. 50, 2018/1

川合康 (解説) 「鎌倉幕府に失望した東国武士 —熊谷直実の出家—」『国立劇場第 196 回文楽公演解説書』独立行政法人日本芸術文化振興会国立劇場, pp. 20-21, 2016/9

3-4. 口頭発表

川合康 「平安末期の内乱と山内首藤氏」第38回中世政治史研究会, 中世政治史研究会, 東京大学史料編纂所, 2017/11

川合康 「保元・平治の乱と相模武士」第8回中世文化史研究会, 中世文化史研究会, 奈良女子大学, 2016/12

川合康 「平清盛と「鹿ヶ谷事件」 —『平家物語』の虚構を読み解く—」第31回源平シンポジウム, 源平シンポジウム委員会, 赤間神宮, 2016/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:川合康

課題番号:15K02831

研究題目:京都大番役の成立・展開に関する実態的研究

研究経費:2016年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2017年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究の目的は、鎌倉幕府のもとで制度的に確立した京都大番役について、Ⅰ平安末期、Ⅱ治承・寿永内乱期(文治年間以前)、Ⅲ鎌倉前期(建久年間から承久の乱以前)、Ⅳ鎌倉中後期の4段階に区分して、その成立・展開の段階的特徴を実態的に明らかにすることである。その際、(a)里内裏警固、(b)大内守護(警固)、(c)院御所警固という3種類の御所の警固役を明確に区別したうえで、Ⅰ～Ⅳの段階においてそれぞれの警固役がどのように成立・展開し、鎌倉幕府のもとで京都大番役として統合・整備されていくのかを検討する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

河内長野市文化財保護審議会・委員, 2012年11月～2018年1月

4. 市大樹 准教授

1971年生まれ。2000年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学、2001年）。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員を経て、2009年4月より現職。日本学術振興会賞（2012年）、日本学士院学術奨励賞（2012年）、濱田青陵賞（2013年）、古代歴史文化賞大賞（2014年）。専攻：日本古代史

4-1. 論文

市大樹 「古代淀川流域の動向」『新修摂津市史 史料と研究』(摂津市教育総務部総務課市史編さん室), 3, 摂津市, pp. 247-271, 2018/3

市大樹 『万葉集』からみた古代交通制度の運用実態『美夫君志』(美夫君志会), 95, 美夫君志会, pp. 1-25, 2018/1

市大樹 「日本古代木簡の資料的特質—廃棄論・機能論・形態論の視点から—」『歴史学研究』(歴史学研究会), 964, 歴史学研究会, pp. 2-13, 2017/11

市大樹 「門籍制に関する一考察」『史聚』(史聚会), 50, 史聚会, pp. 27-38, 2017/4

市大樹 「木簡と大化改新」『學士會會報』(学士会), 918, 学士会, pp. 62-66, 2016/5

4-2. 著書

市大樹, 近藤大典, 早川万年他(共著) 『壬申の乱の時代—美濃国・飛騨国の誕生に迫る—』岐阜県博物館, pp. 8-13, 2017/9

市大樹, 鈴木靖民, 金子修一他(共著) 『日本古代交流史入門』勉誠出版, pp. 490-500, 2017/6

市大樹, 鈴木靖民, 荒木敏夫他(共著) 『日本古代の道路と景観—駅家・官衙・寺—』八木書店, pp. 131-148, 2017/5

市大樹, 玉田芳英, 黒坂貴裕他(共著) 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告V—藤原京左京六条三坊の調査—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所, pp. 329-331, 400-417, 2017/3

市大樹 『日本古代都鄙間交通の研究』塙書房, 686p., 2017/2

市大樹, 鷹取祐司, 館野和己他(共著) 『古代中世東アジアの関所と交通制度』立命館大学, pp. 31-78, 2017/2

市大樹, 塚口義信, 生田厚司他(共著) 『塚口義信博士古稀記念 日本古代学論叢』和泉書院, pp. 63-72, 2016/11

市大樹, 早川和子, 山本崇他(共著) 『飛鳥むかしむかし 国づくり編』朝日新聞出版社, pp. 179-194, 2016/10

市大樹, 豊島直, 木下正史他(共著) 『ここまでわかった飛鳥・藤原京』吉川弘文館, pp. 143-176, 2016/8

市大樹, 笹川尚紀, 瀬間正之他(共著) 『古代史研究の最前線 日本書紀』洋泉社, pp. 184-195, 2016/7

市大樹, 秋田茂, 桃木至朗他(共著) 『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会, pp. 319-345, 2016/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹(書評) 「俣野好治著『律令財政と荷札木簡』」古代学協会『古代文化』(古代学協会), 610, 古代学教会, pp. 139-141, 2017/12

市大樹(書評) 「相原嘉之著『古代飛鳥の都市構造』」日本歴史学会『日本歴史』(日本歴史学会), 834, 吉川弘文館, pp. 93-95, 2017/11

4-4. 口頭発表

市大樹 「聖武天皇の伊勢行幸と万葉集・志摩国荷札木簡」久留倍官衙遺跡シンポジウム, 久留倍遺跡まつり実行委員会, 四日市市文化会館第2ホール, 2017/11

市大樹 「出雲国計会帳の魅力—節度使関係文書を中心に—」平成29年度大会報告, 島根史学会, 県民会館多目的ホール, 2017/9

市大樹 『万葉集』からみた古代交通制度の運用実態」平成29年度大会発表, 美夫君志会, 中京大学, 2017/7(『美夫君志』95, pp. 1-25, 2018/1)

市大樹 「日本古代における漢字文化の始まり」モノと文献でわかる古代・わからない古代, 大阪大学文学研究科・フランス国立東洋言語文化大学, 国際交流基金パリ日本文化会館ホール, 2016/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市大樹 古代歴史文化賞大賞, 島根県, 2014/10

市大樹 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2013/9

市大樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2012/7

市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

市大樹 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:25370771

研究題目:東アジアにおける日本古代文書論の再構築

研究経費:2016年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、奈良時代から平安時代にいたる行政文書に焦点を定めて、木簡、古文書、編纂史料、古記録の相互比較をおこなう。〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉に注意しながら、日本古代の行政システムの構造とその変質過程を具体的に再現し、従来の文書様式論に変わる新たな枠組みの構築を模索する。以上の考察にあたっては、その模範となった中国・韓国など古代東アジアの行政文書にも広く目配りし、次なる目標とする「東アジア古代文書論」を構築するための布石とする。

4-6-2. 2017年度～2021年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:

研究題目:日本古代木簡の源流と特質

研究経費:2017年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究では、(1)東アジアという視点から「日本古代木簡の源流と特質」を探ることを最大の目標としている。中国・韓国の木簡研究にも正面から向き合うことによって、その方法論を学ぶとともに、日本古代木簡の研究で培われた方法論の発信につとめ、その相乗効果によって日本古代木簡研究の飛躍を図りたい。関連して、(2)木簡研究から導き出される〈文書機能論〉の観点から、従来の〈文書様式論〉に依拠した古文書学の再検討をおこない、新たな史料学に向けた提言をする。さらに、(3)木簡研究の成果を日本古代国家成立論のなかに反映させることも狙う。(2)(3)によって、木簡研究の有効性を示したい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

二子塚古墳整備検討委員会・委員, 2016年4月～現在に至る

新修摂津市史・編さん委員, 2011年7月～現在に至る

古代文化刊行委員会・編集参与, 2010年4月～現在に至る

続日本紀研究会・編集委員, 2006年6月～現在に至る

条里制・古代都市研究会・集会委員, 2006年4月～現在に至る

福岡市史・専門委員, 2006年4月～現在に至る

5. 野村 玄 准教授

1976年生まれ。2004年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学)。大阪青山短期大学専任講師、防衛大学校講師、同准教授を経て、2016年4月より現職。専攻：日本近世史

5-1. 論文

野村玄 「国事行為臨時代行の制度と勅書」『二十世紀研究』(二十世紀研究編集委員会), 18, 二十世紀研究編集委員会, pp. 127-152, 2017/12

野村玄 「皇位継承と天皇の意思」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 51, 大阪大学文学会, pp. 1-26, 2017/12

野村玄 「近世における天皇の地位と正統性－大刀契・剣璽・通過儀礼及び皇統の扱いに注目して－」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学文学研究科, pp. 1-54, 2017/3

5-2. 著書

野村玄 『豊国大明神の誕生 変えられた秀吉の遺言』平凡社, 292p., 2018/3

野村玄 吉峯真太郎, 杉本寛郎他(共著) 『悪の歴史 日本編 下』清水書院, pp. 48-59, 2017/12

筈谷和比古, 小宮山敏和, 野村玄他 『徳川家康－その政治と文化・芸能－』宮帯出版社, pp. 74-93, 2016/6

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

野村玄 「書評と紹介 大桑斉著『近世の王権と仏教』」『日本歴史』820, 吉川弘文館, pp. 97-98, 2016/9

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

野村玄 研究奨励賞, 財団法人防衛大学校学術・教育振興会, 2009/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻：日本史学／日本近現代史。

6-1. 論文

北泊謙太郎 「歴史認識問題の諸相－田中仁報告に寄せて－」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 226, 大阪歴史科学協議会, pp. 33-41, 2016/12

北泊謙太郎「2・11 集会の史学史的検討に向けての覚書—「科学運動」としての「建国記念の日」反対運動—」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 224, 大阪歴史科学協議会, pp. 45-60, 2016/4

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎「金津日出美報告・小室輝久報告討議要旨(第 54 回部落問題研究者全国集会・歴史分科会)」公益社団法人部落問題研究所(編)『部落問題研究』(公益社団法人部落問題研究所), 221, 公益社団法人部落問題研究所, pp. 105-107, 2017/5

北泊謙太郎, 上脇博之(論評(インタビュー記事))「自衛隊の位置づけを考える—日本史の観点から—(特集 憲法公布 70 年②)」新聞うずみ火編集部(編)『新聞うずみ火』135, 新聞うずみ火編集部, pp. 6-7, 2017/1

北泊謙太郎(論評(インタビュー記事))「押し付け論は本当か—GHQ 草案に民間の英知—(特集 憲法公布 70 年①)」新聞うずみ火編集部(編)『新聞うずみ火』134, 新聞うずみ火編集部, pp. 8-9, 2016/12

6-4. 口頭発表

北泊謙太郎 (パネリスト)「軍事研究の「歯止め」と抜け道—大阪大学の場合—」子どもたちと考える「戦争と平和」展記念シンポジウム, 子どもたちと考える「戦争と平和」展 in 高槻・島本実行委員会 2017, 高槻文化劇場文化ホール会議室, 2017/8

北泊謙太郎 (パネリスト)「軍学共同をめぐる大阪大学の動向」軍学共同に反対する市民と科学者のつどい, 軍学共同反対大阪連絡会, 大阪社会福祉指導センター多目的ホール, 2017/5

北泊謙太郎 (基調講演)「戦時下日本の労働力動員政策と「徴用」制度」現代日本の戦争協力について考える集会, 大阪労働者弁護団・大阪社会文化法律センター, エル・おおさか南館 5 階南ホール, 2016/6

北泊謙太郎「リニューアル後のピースおおさか展示の再検討—新展示 B・F ゾーンをめぐる—」ピースおおさか検討会, 大阪歴史学会・大阪歴史科学協議会, 大阪市立大学文化交流センター談話室, 2016/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・庶務委員長, 2014 年 6 月～現在に至る

歴史科学協議会・全国委員, 2012 年 6 月～現在に至る

2-8 東洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 4 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：荒川 正晴、桃木 至朗、松井 太、田口宏二郎
助教：伊藤 一馬

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
24	6	7	0	0	2	0	1

*うち留学生 5名、社会人学生 3名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	6	5	0	2
2017	6	4	0	2
計	12	9	0	4

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

大学院の教育においては、以下の6項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生相互の批評を糧にして学位論文の水準を向上させる。2016年度は博士論文2本、修士論文5本を、2017年度は博士論文3本、修士論文4本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年1回は発表するようにする。⑥専門教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部の教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆のための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3年次生、4年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員では毎年1人平均で単著論文ないしそれに匹敵する内容のもの1本を発表することを目標とする。ただし東洋史学分野では印刷・編集などの関係で毎年確実に1本という目標はそもそも無理なので、実際には3年に3本を目標とする。本分野の単著論文とは、理科系の共同論文の少なくとも5本程度、一般的には10本程度、さらに場合によっては20本以上に相当する時間と労力を要するものである。博士後期課程の院生では2年に1本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

2016～2017年度を通じて、合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。

2016年度においては卒業論文6本、修士論文5本、博士論文2本を提出させることができた。

院生の発表した研究論文は計4点とやや少なかったが、博士後期課程院生による査読論文1点、また外国語によるもの2点(英語1点・ベトナム語1点)を含む。院生の国内外の学会・研究会における口頭発表は計20件で、うち4件は国内の全国学会、また4件が国際学会におけるものである。

2017年度においては卒業論文6本、修士論文4本、博士論文2本を提出させることができた。

院生の発表した研究論文は計18点と4倍以上に増し、その過半数が査読論文であり、また外国語によるもの9点(英語・ベトナム語・韓国語)を含む。院生の国内外の学会・研究会における口頭発表は計29件と50%増加し、半数を超える15件が国際学会におけるものである。

提出された学位論文はいずれも水準が高く、また院生の論文発表および国内外の学会での口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。

2. 研究

【2016年度】

片山剛(2018年3月退職)は、2005年度から組織してきた研究チームの成果を、片山剛(編)『近代東アジア土地調

査事業研究』(B5判 446頁)としてとりまとめ、科研費(研究成果公開促進費、学術図書)を利用して2017年2月に大阪大学出版会から刊行した。

荒川は、中央アジアにおける交易活動に関する英語論文1本と、トゥルファン漢文文書の様式・機能面に関する日本語論文1本を執筆するとともに、中央ユーラシア史の研究入門書の準備をすすめた。

桃木はグローバルヒストリー・世界史関係で2冊の論集(単著・共著の論文4本を含む)の共編著にあたったほか、ベトナム史について論文1点(ベトナム語)、国際会議報告2点(英語・ベトナム語各1点)を発表し、また2月に開始された「グローバル展開プログラム」で3月に第1回ワークショップを組織した。

松井は、科学研究費(基盤B・挑戦的萌芽研究)および共同研究プロジェクト(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)による調査研究を進め、その成果として中央アジア出土の古テュルク語・モンゴル語文献を歴史的に検討した論文計7点(和文3点・英文2点・中文2点;うち査読誌掲載3点)を公刊し、2つの国際学会(敦煌、呼和浩特)で研究報告を行なった。また中国(敦煌)での史跡調査を実施した。

田口は、南京国民政府の土地登記事業に関する論考1篇を京都大学人文科学研究所より刊行された論集に掲載、同じく2篇を上述の片山(編)『近代東アジア土地調査事業研究』に掲載した。また近世・近代東アジアの政治的動態に関する英語論考を桃木・Sun Laichen共編の論集向けに執筆。2つの国内学会(神戸・静岡)にて研究報告を行なった。また科学研究費(基盤B)による資料調査を台北にて行った。

岡田雅志(2017年3月退職)は、科学研究費(若手B)による調査・研究の成果をもとにインドシナ北部山地における火器と社会の関係を分析した論考を含む2篇の日本語論文を公刊したほか、ラオス研究国際会議ほか2件の国際会議で研究報告を行った。

【2017年度】

片山は、単著作目目の準備を進め、2018年11月に『清代珠江デルタ閘甲制の研究』(大阪大学出版会)を出版する。また、JFE21世紀財団の研究助成により台北・南京での資料調査を企画・実施するとともに、新規採択の科研費(基盤研究A・海外学術調査)による研究チームを組織し、夏・春の台北の国史館での資料調査を企画・実施した。それらの成果は片山(編)『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第8号(2018年3月)に掲載された。

荒川は、編著者として関わってきた『中央ユーラシア史研究入門』の最終校正を終えるとともに、敦煌文書に見える女性の地位に関するコラム1点(日本語)およびトゥルファン文書よりうかがえる遊牧民とソグド商人に関する論稿1点(中国語)を公表した。さらに東洋史懇話会大会において仏教信仰と冥界観の形成について講演を行った。また、新規採択の科研(基盤C)による東部ユーラシア地域に展開した駅伝制の比較研究を開始し、本年度は中国(陝西省・寧夏回族自治区)において「京師四面関」の主要遺跡を実地調査した。さらに、松井とともに10月に2017年度内陸アジア史学会大会を主催した。

桃木は、中世ベトナムの土地制度に関する英語論文の短縮版をオランダの*ILAS New Letter*に投稿・掲載された(フルペーパーはアメリカの論文集に投稿して査読待ち)。日本の歴史教育に関連して監修図書1点、ベトナム語での報告1件を公表した。また前年度から継続する「グローバル展開プログラム」でハノイ社会・人文科学大学の歴史教育の調査を行ったほか、歴史教育科研、日朝越比較史科研のとりまとめを行った。

松井は、科学研究費(基盤B・挑戦的萌芽研究)および共同研究プロジェクト(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)による敦煌石窟の共同調査の成果を、松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』(B5判、総計522頁、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017年7月)として公刊した。さらに、中央アジア・西アジア発現の古テュルク語・モンゴル語文献を歴史的に検討した論文計6点(和文3点・英文1点・中文1点・トルコ語1点;うち査読誌掲載2点)を公刊した。また、新規採択の科研(基盤B・一般)により中央ユーラシア世界の交通・交易システムの実証研究を開始するとともに、既採択の科研(基盤B・海外、挑戦的萌芽研究)により敦煌・トゥルファン地域の仏教石窟の学際的研究を継続した。

田口は、1930年代中国の治外法権と土地行政に関わる研究成果を、日本孫文研究会編『孫文とアジア太平洋』(汲古書院、2017年)の1章分の論考として寄稿した。また分担参加の科研により、台北(国史館)・ロンドン(National Archive)において1920~40年代の中国土地制度に関する資料調査を進めた。

伊藤は、2015年度より行ってきたオールドス地域の現地調査の成果を科研報告書に掲載したほか、宋代の文書制度に関する論文を発表した。また、荒川の科研の分担者として、宋代駅伝制の研究を始めるとともに、中国での現地調査を行った。

なお2016～2017年度を通じて、中央アジア学フォーラム、海域アジア史研究会などを予定通り開催するとともに、その運営を主導することによって、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上に貢献した。また荒川・松井は『内陸アジア言語の研究』を編纂し、この分野の日本優位に尽力した。

3. 社会連携

【2016年度】

片山は、史学会評議員ならびに京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員として日本における人文学、とりわけグローバル化に対応した成果発信のあり方についての提言を行い、懷徳堂記念会の運営審議員としては、当該記念会を通じた市民への学術成果の還元について提言した。また2016年度も、(公財)大学基準協会の大学評価委員会委員として、日本の大学を対象とする認証評価活動および内部質保証の向上に貢献した。

桃木は、荒川とともに大阪大学歴史教育研究会の運営に当たり全国の高校教員などとの連携を進めたほか、全国組織「高大連携歴史教育研究会」運営委員長、日本学術会議連携会員などの資格で歴史教育改善に取り組んだ(大学・高校生・市民向けおよび高校教員向けの講演・出前講義やそれらの企画は計13件)。また東方学会、史学研究会(京大)などの評議員として歴史学・東洋学の学会運営に参画した。

松井は東方学会(学術委員)・内陸アジア史学会(理事・編集委員)の運営に参画するとともに、龍谷大学仏教文化セミナーで講演し、研究成果のアウトリーチに努めた。

岡田はNPO法人大阪府高齢者大学校において、「世界史から学ぶ科」のコーディネーターの一人として、最新の世界史研究成果に基づく生涯学習における世界史教育の実践に取り組んだほか、21世紀懷徳堂主催の「i-spot」講座において、シナモンの歴史研究を通じて地域をつなぐ取組みを紹介した。

【2017年度】

片山は2016年度に引き続き、史学会評議員、京都大学人文科学研究所 共同利用・共同研究拠点共同研究委員会委員、懷徳堂記念会の運営審議員として活動した。とくに、史学会評議員として若手研究者支援等に関する提言を行なった。また、文学研究科として「人文学の魅力」を発信するべく、文化勲章を受章した斯波義信名誉教授と文化功労者として顕彰された東野治之名誉教授を招待して行う受賞記念講演会(2018年4月30日)の企画・準備に参画した。

荒川は、今年度より内陸アジア史学会の会長に就任して、その運営を主導し、中央ユーラシアに関する歴史用語の精選に関する部会を新たに設けた。

桃木は、荒川とともに全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させる計画を進め、月例会活動以外に、堺市「日本と世界が会おうまち 堺2017」プロジェクト(審査委員長)や神奈川県世界史研究会(夏季セミナーのコーディネーター)など、各地域の活動との協力を実施した。また、新たに全国規模で結成された「高大連携歴史教育研究会」の運営委員長として、7月の第3回大会(東京外大)その他の活動に取り組んだ。特に、同会の「歴史的思考力の検討」「教科書・入試の用語精選」のワーキンググループ責任者として、世界史・日本史の「用語精選第一次案」のとりまとめ・公表(10～11月)と、その後のアンケートの結果をふまえた「用語精選3つの基準と2つの検討事項」の策定などを実施した(これには大きな社会的反響があった)。このほか、日本学術会議(連携会員)・東方学会(理事)として東洋史研究と歴史教育の双方にまたがる活動、関西大学高等部でのスーパーグローバルハイスクールの研究指導、神戸大附属中等教育学校での新科目「歴史総合」の研究開発への助言などもおこなった。

松井は、東方学会(学術委員)・内陸アジア史学会(理事)の運営に引き続き協力参画した。

田口は、懷徳堂記念会主催の行事として阪大アジア学関係の講演会を企画・運営し、松井とともに講演した。

伊藤はNPO法人大阪府高齢者大学校において「世界史から学ぶ科」の講師として講義を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

2016～2017年度を通じて、教育目標として掲げた諸項目については、おおむね順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の3分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られ、卒業論文・修士論文・博士論文の提出に結びつけることができた。提出論文は何れも高いレベルで作成されている。また院生の査読付き全国学会誌を中心とする論文発表および、国際学会を含む学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

2. 研究

前記の活動を総括して自己評価すれば、2016～2017年度を通じて、教員・大学院生による著書・論文の執筆および学会発表その他の研究活動については、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動を総括して自己評価すれば、2016～2017年度を通じて、社会連携の目標について、おおむね当初の目標を達成したと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	2	0	2
2017	2	0	2
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

富田（博士後期課程）「阮朝治下ベトナムにおける国家統合と貨幣経済」

主査：桃木至朗 副査：片山剛、田口宏二郎

藤澤聖哉（桜花学園大学学芸学部・准教授）「近代の琉球問題と清国」

主査：片山剛 副査：桃木至朗、田口宏二郎、飯塚一幸

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	3(1)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(1)
2017	17(10)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	18(10)
計	20(11)	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	22(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	4	4	12	0	0	20
2017	15	8	0	6	0	29
計	19	12	12	6	0	49

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

齊藤誠, 杜雨霏, 丸岡大祐, 八木啓俊 (研究室所属学生は下線の2名) 「日明関係史研究の最前線と教科書記述」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第14巻, pp.1-23, 2017/03

〔博士後期〕

多賀良寛「19世紀ベトナムにおける鑄銭事業の展開」『東洋学報』第98巻第2号, pp.29-59, 2016/09 [査読有]

Yoshikawa, Kazuki “Late Fifteenth-Century Embassies Dispatched between Đại Việt and China: Arrival of the Đại Việt Mission in Yunnan in 1475”, Thuy Linh Le, Leigh G. Dwyer, Phan Le Ha eds., *Knowledge Journeys & Journeying Knowledge: The 7th “Engaging with Vietnam – An Interdisciplinary Dialogue” Conference* (Hanoi: The Gioi Publisher), pp.279-293, 2016/07

Yoshikawa, Kazuki “Hai quả chuông đúc tại Phật Sơn (Quảng Đông) được lưu giữ ở Lạng Sơn và Cao Bằng”, *Thông báo Hán Nôm học năm 2015*, pp.968-974, 2016/12

【2017年度】

〔博士前期〕

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제언: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of ‘Relationship and Comparison’)」*The Future of ASEAN-Korea Partnership 2*, pp. 186-204, 2018/01

藪内夏実ほか「福井憲彦『歴史学入門』第9章「人と人とを結ぶもの」を書き換える」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』第15巻, pp.38-56, 2018/03

〔博士後期〕

旗手瞳「フランス国立図書館蔵敦煌チベット語文書 P. t. 1185 訳註」, 『待兼山論叢』史学篇 52, 2017/12

吉川和希「十七世紀後半における北部ベトナムの内陸交易—諒山地域を中心に—」, 『東方学』第134輯, pp. 45-60, 2017/07

【査読有】

YOSHIKAWA Kazuki, “V□ hai đ□o s□c th□i C□nh H□ng liên quan đ□n phiên th□n h□ Nguy□n Đình □ châu Thoát Lãng, L□ng S□n (諒山省脱朗州藩臣阮廷氏に関する景興年間の勅二道について).” *Thông báo Hán Nôm học năm 2016*, pp. 696-704, 2017/08/15

YOSHIKAWA Kazuki, “Gi□i thi□u công văn liên quan đ□n Phiên th□n h□ Vi □ xã Xu□t L□, châu L□c Bình, t□nh L□ng S□n(諒山省禄平州率礼社韋氏関連文書の紹介).” *ghiên cứu Hán Nôm năm 2017*, pp. 657-667, 2017/11/15

YOSHIKAWA Kazuki, “Văn bia Lê Hy Cát” th□i Lê s□ (黎朝前期の黎希葛碑文).” *T□p chí Hán Nôm* 146, pp. 38-52, 2018/02

遠藤総史「未完の「統一」王朝—宋朝による天下理念の再構築とその「周辺」—」, 『史学雑誌』126編第6号, pp. 1050-1075, 2017/06 【査読有】

遠藤総史「南宋期における外交儀礼の復興と再編—南宋の国際秩序と東南アジア・中国西南諸勢力—」『南方文化』第44

卷, pp.1-22, 2018/03/31 【査読有】

Hisashi Hayakawa, Yasuyuki Mitsuma, Yasunori Fujiwara, Akito Davis Kawamura, Ryuho Kataoka, Yusuke Ebihara, Shunsuke Kosaka, Kiyomi Iwahashi, Harufumi Tamazawa, Hiroaki Isobe (研究室所属学生は下線の1名), “The earliest drawings of datable auroras and a two-tail comet from the Syriac Chronicle of Zūqñn”, *Publications of Astronomical Society of Japan* 69, p. 17, 2017/04 【査読有】

Harufumi Tamazawa, Akito Davis Kawamura, Hisashi Hayakawa, Asuka Tsukamoto, Hiroaki Isobe, Yusuke Ebihara (研究室所属学生は下線の1名), “Records of sunspot and aurora activity during 581–959 CE in Chinese official histories concerning the periods of Suí, Táng, and the Five Dynasties and Ten Kingdoms”, *Publications of the Astronomical Society of Japan* 69(2), p. 22, 2017/08 【査読有】

早川尚志, 岩橋清美 (研究室所属学生は下線の1名) 「東アジアの歴史書に記録されたキャリントン・イベント」, 『天文月報』110(7), pp. 455-463, 2017/07 【査読有】

玉澤春史, 早川尚志, 河村聡人, 磯部洋明 (研究室所属学生は下線の1名) 「歴史書に眠る太陽活動1000年の再検討」, 『天文月報』110(7), pp. 464-471, 2017/07 【査読有】

三津間康幸, 早川尚志 (研究室所属学生は下線の1名) 「世界最古のオーロラ文字記録と画像記録」, 『天文月報』110(7), pp. 472-479, 2017/07 【査読有】

早川尚志, 玉澤春史, 海老原祐輔, 宮原ひろ子, 河村聡人, 青山忠申, 磯部洋明 (研究室所属学生は下線の1名), “Records of sunspots and aurora candidates in the Chinese official histories of the Yuán and Míng dynasties during 1261–1644”, *Publications of the Astronomical Society of Japan* 69(4), p. 65, 2017/08 【査読有】

Hisashi Hayakawa, Kiyomi Iwahashi, Yusuke Ebihara, Harufumi Tamazawa, Kazunari Shibata, Delores J. Knipp, Akito D. Kawamura, Kentaro Hattori, Kumiko Mase, Ichiro Nakanishi, Hiroaki Isobe (研究室所属学生は下線の1名), “Long-lasting extreme magnetic storm activities in 1770 found in historical documents”, *Astrophysical Journal Letters* 850(2), L31 (12 pp.), 2017/12 【査読有】

早川尚志 「歴史的文献にみるオーロラの記録」, 『京都大学大学院理学研究科附属天文台年次報告』2016, p. 21, 2018/02

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

中井勇人 「15世紀の建州女真と朝鮮王朝」, 韓国前近代史若手研究者セミナー, 福岡県・宗像市グローバルアリーナ, 2016/08/28-30

中井勇人 「15・16世紀の朝鮮東北辺における女真系地域首長の権力構造」, 海域アジア史研究会3月例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/03/13

明山曜子 「「新疆」成立当初の統治における陝甘両省の役割」, 日本中央アジア学会2016年度年次大会, KKR江ノ島ニュー向洋, 2017/03/26

浮田怜奈 「宋代の朝貢使節における防援官」, 海域アジア史研究会4月例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/04/30

斉藤誠, 杜雨霏, 丸岡大祐, 八木啓俊 (研究室所属学生は下線の2名) 「日明関係史研究の最前線と教科書記述」, 大阪大学歴史教育研究会第99回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/10/15

八木啓俊 「ティムール朝の宴会とその機能」, 第53回野尻湖クリルタイ (日本アルタイ学会), 長野県, 藤屋旅館, 2016/07/16

八木啓俊 「ティムール朝シャルフ期のアフガーニスターン」, 若手アジア史論壇関西西部会, 京都大学, 2016/09/09

八木啓俊 「新刊紹介: K. Franz and W. Holzwarth (eds.) *Nomad Military Power in Iran and Adjacent Areas in the Islamic Period*, Wiesbaden: Reichert, 2014」, 第58回中央アジア学フォーラム, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/12/10

〔博士後期〕

旗手瞳 「日本近10年間 (2005-2015) 吐蕃与古蔵語的研究動態」, 第33回西北出土文献与中古歴史研読班, 西北民族大

学（中国蘭州市），2016/06/19

多賀良寛「阮朝治下ベトナムにおける産物税の問題—別納戸を中心として」，東南アジア学会第95回大会研究大会，大阪大学豊中キャンパス，2016/06/04

多賀良寛「近世ベトナムの錢貨流通と東アジア」，近世史フォーラム6月例会，大阪市立北区民センター，2016/06/24

多賀良寛「海域アジア史と貨幣史研究—『海域アジア史研究入門』新版の執筆に向けて—」，海域アジア史研究会10月例会，大阪大学豊中キャンパス，2016/10/23

多賀良寛『『日本近世貨幣史の研究』を読んで：ベトナム近世史の立場から』，貨幣史研究会2017年1月例会，松山大学温山記念会館，2017/01/08

多賀良寛「19世紀前半のベトナムにおける国家財政と物流」，京都大学東南アジア研究所・共同研究拠点「植民地体制下の東南アジアにおける地域経済の変容に関する比較史的考察」第2回研究会，京都大学東南アジア研究所，2017/1/29

吉川和希「十八世紀のベトナム黎鄭政權と諒山地域—藩臣集團の祖先移住伝承に関する分析を中心に—」，第22回ゾミア研究会，京都大学東南アジア研究所，2017/02/03

Yoshikawa Kazuki, "Late Fifteenth-century Envoys Dispatched between Đại Việt and China and their implications", The 5th International Conference on Vietnamese Studies, Hanoi, National Convention Center, 2016/12/16

Yoshikawa Kazuki "Về hai đạo sắc thời Cảnh Hưng liên quan đến phiên thần họ Nguyễn Đình ở châu Thoát Lãng, Lạng Sơn", Hội nghị Thông báo Hán Nôm học năm 2016, Hanoi, Viện Nghiên cứu Hán Nôm, 2016/12/28 (ペーパー参加)

Yoshikawa Kazuki, "Journeys of tributary envoys and their implications during the Ming period: The cases of the Đại Việt and Korean envoys", IAS Conference "Vietnam and Korea as 'Longue Duree' Subject of Comparison: From the Pre-modern to the Early Modern Periods", Hanoi, National University, 2017/03/03-04 (ペーパー参加)

遠藤総史「宋徽宗期における天下の拡大とその背景—天下理念の動的側面—」，第186回宋代史談話会，大阪市立大学，2016/5/28

遠藤総史「貢納からみた宋朝の天下秩序—宋朝の天下理念と東南アジア—」，東南アジア学会第95回研究大会，大阪大学豊中キャンパス，2016/06/04

【2017年度】

〔博士前期〕

藪内夏実ほか「福井憲彦『歴史学入門』第9章「人と人とを結ぶもの」を書き換える」，第109回大阪大学歴史教育研究会，大阪大学，2017/12/16

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제안: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of 'Relationship and Comparison')」，ASEAN-Korea Youth Academic Workshop, Busan University of Foreign Studies, 2017/12/05

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제안: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of 'Relationship and Comparison')」，Introduction of the Contest and essays by the winners to the staff at the embassy, ROK Embassy to Singapore, 2018/01/18

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제안: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of 'Relationship and Comparison')」，Dialogue with Mr. Tham Borg Tsien, Deputy Director of ASEAN Directorate, Singapore Ministry of Foreign Affairs, 2018/01/18

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제안: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of 'Relationship and Comparison')」，Discussion session with RSIS researchers, S. Rajaratnam School of International Studies, Nanyang Technological University, 2018/01/19

趙浩衍「새로운 동남아시아사를 위한 제안: 관계성과 비교의 가능성으로부터 (A Proposal for New Southeast Asia History: From the Possibilities of 'Relationship and Comparison')」，Discussion session with ASC researchers, ISEAS Yusof-Ishak Institute, 2018/01/19

〔博士後期〕

- 旗手瞳「吐蕃支配下の吐谷渾とその王」, 内陸アジア史学会 2017 年度大会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/10/28
- 旗手瞳「(新刊紹介) Andrew Shimunek, Languages of Ancient Southern Mongolia and North China, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden, 2017」, 中央アジア学フォーラム (第 61 回), 大阪大学, 2018/03/31
- 猪原達生「唐代宦官経歴与政治活動」, 珞珈中古史青年学術沙龍, 武漢大学, 2018/01/04
- YOSHIKAWA Kazuki (吉川和希) “Giới thi công văn liên quan đến Phiên th h Vi xã Xu L, châu L Bình, tỉnh Lạng Sơn (諒山省禄平州率礼社韋氏関連文書の紹介)”, Hội thảo thông niên Nghiên cứu Hán Nôm năm 2017, Hà Nội, Việt Nam, 2017/09/01
- 吉川和希「十八世紀のベトナム黎鄭政権と北部山地—諒山地域の在地首長の動向に関する分析を中心に—」, 東南アジア学会関東例会, 東京外国語大学, 2017/11/25
- 吉川和希「十八世紀のベトナム黎鄭政権と北部山地—諒山地域の在地首長の動向に関する分析を中心に—」, 東南アジア学会第 98 回研究大会, 神田外語大学, 2017/12/02
- 遠藤総史「南宋における外交儀礼の再編と復興—南宋の国際秩序と東南アジア—」, 2017 年度宋代史研究会夏合宿, かんぼの宿奈良, 2017/08/09
- 遠藤総史「宋徽宗期 (1100 年~1126 年) における天下理念の拡大とその背景」, 九州歴史科学研究会 1 月例会, 西南学院大学, 2018/01/20
- 遠藤総史「宋越熙寧戦争の背景と宋朝の南方認識」, 第 203 回宋代史談話会, 大阪市立大学, 2018/02/24
- 早川尚志 “Scaling Space Weather Events Before Carrington Event”, SPOD Seminar of Rutherford Appleton Laboratory, Rutherford Appleton Laboratory, 2017/06/20
- 早川尚志「モグール・ウルス下でのイリ・ユルドゥーズルートの衰亡」, ヘレニズム~イスラーム考古学研究会, 金沢大学, 2017/07/08
- 早川尚志「歴史文献で遡る太陽活動」, 天文教育普及研究会, 東本願寺宿坊, 2017/08/08
- 早川尚志 “The days when aurorae were seen in Japan: Tracing back Japanese historical documents beyond the Carrington event”, World Data System Asia-Oceania Conference 2017, Kyoto University, 2017/09/26
- 早川尚志 “Caravans, Cities, and Urban Authorities in East Turkistan after the Mongolian Empire”, International Conference for Power and Daily Living in Urban Space, Kyungpook National University, 2017/11/10
- 早川尚志「歴史文献におけるオーロラ画像史料と宇宙天気研究における可能性」, 地球電磁気・地球惑星圏学会, 京都大学, 2017/10/19
- 早川尚志 “Great Auroral Displays under Carrington Magnetic Storm”, International Conference on Traditional Sciences in Asia 2017, 京都大学, 2017/10/27
- 早川尚志「歴史書で復元する太陽活動, 科学データ源としての歴史文献」, 東西知識交流と自国化—汎アジア科学文化論, 京都大学, 2017/11/05
- 早川尚志「チャガタイ・ウルスの公共交通と私交通についての一試論」, イスラーム地域研究・若手研究者の会, 早稲田大学, 2017/11/26
- 早川尚志 “Historical Auroral Drawings: Their Value for Scientific Discussion”, The Symposium on Polar Science, 国立極地研究所, 2017/12/05
- 早川尚志 “Carrington-class storms excavated from Historical Documents”, SAC Seminar, The University of Aarhus, 2018/01/16
- 早川尚志 “Surveying Major Historical Space Weather Events: Beyond the Coverage of Magnetic Observations”, NSO Weekly Seminar, The National Solar Observatory, 2018/02/22
- 早川尚志 “Overview of Oriental Sunspot Observations: Historical Perspective to Modern View”, Symposium on Historical Astronomical Records and Modern Science, 国立天文台, 2018/03/22
- 早川尚志「河川流路と交通路: 14-17 世紀中央アジアの事例研究」, 中央アジア学フォーラム, 大阪大学, 2018/03/31

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2017年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:1名 大学院:4名 (計5名)

2017年度 学部:1名 大学院:2名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

鈴木宏節 招へい研究員 青山学院女子短期大学現代教養学科 助教 2016/4

山本 一 招へい研究員 立命館大学文学部 講師 2017/4

伊藤一馬 特任研究員 大阪大学文学研究科 助教 2017/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2016年度:2名 2017年度:2名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 5名

2016年度:2名 2017年度:3名

9. 刊行物

【2016年度】

- ・『内陸アジア言語の研究』31号, 2016年10月, ii+100p. (中央ユーラシア学研究会:東洋史学研究室に事務局)
- ・片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会, 2017年2月, 446p.

【2017年度】

- ・『内陸アジア言語の研究』32号, 2017年10月, 176pp. (中央ユーラシア学研究会:東洋史学研究室に事務局)
- ・松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017年7月, x+495 p., +16 pls.

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

・中央ユーラシア学研究会「中央アジア学フォーラム」

参加人数は毎回 35 名～45 名，参加者の所属機関は延べ約 30

2016 年度 2016 年 4 月 2 日(第 56 回)、2016 年 7 月 30 日(第 57 回)、2016 年 12 月 10 日(第 58 回)、2017 年 3 月 25 日(第 58 回)

2017 年度 2017 年 7 月 30 日(第 60 回)、2018 年 3 月 31 日(第 61 回)

・海域アジア史研究会

参加人数は毎回 20 名～40 名，参加者の所属機関は延べ約 30

2016 年度 2016 年 4 月 30 日、2016 年 5 月 28 日、2016 年 7 月 24 日、2016 年 9 月 24 日、2016 年 10 月 6 日、2016 年 10 月 23 日、2016 年 11 月 26 日、2016 年 12 月 18 日、2017 年 1 月 22 日、2017 年 2 月 24 日、2017 年 3 月 13 日

2017 年度 2017 年 5 月 28 日、2017 年 6 月 24 日、2017 年 5 月 28 日、2017 年 9 月 23 日、2017 年 11 月 29 日、2017 年 11 月 25 日、2018 年 2 月 10 日、2018 年 3 月 10 日

・大阪大学歴史教育研究会

2016 年度 2016 年 4 月 16 日 (第 95 回)、2016 年 5 月 21 日 (第 96 回)、2016 年 6 月 18 日 (第 97 回)、2016 年 7 月 16 日 (第 98 回)、2016 年 10 月 15 日 (第 99 回)、2016 年 11 月 19 日 (第 100 回)、2016 年 12 月 17 日 (第 101 回)、2017 年 1 月 21 日 (第 102 回)、2017 年 3 月 18 日 (第 103 回)、

2017 年度 2017 年 4 月 15 日 (第 104 回)、2017 年 5 月 20 日 (第 105 回)、2017 年 6 月 17 日 (第 106 回)、2017 年 7 月 15 日 (第 107 回)、2017 年 10 月 21 日 (第 108 回)、2017 年 12 月 16 日 (第 109 回)、2018 年 1 月 20 日 (第 110 回)、2017 年 3 月 17 日 (第 111 回)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

金浩東 “Ulus system of the Mongol Empire”, 科研費 (基盤 B) 「古代・中世中央ユーラシアの交通・交易・交流」研究セミナー, 2017/10/26

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 片山 剛 教授

1952 年生。1981 年、東京大学大学院人文科学研究科第一種博士課程中退。文学修士 (東京大学)。1981 年高知大学人文学部講師、1984 年同助教授、1989 年大阪大学文学部助教授、1996 年同教授を経て、1999 年 4 月より大学院文学研究科教授 (2018 年 3 月定年退職)。専攻：中国近世／近代史。

1-1. 論文

片山剛 「日中戦争期、南京の人と建物をめぐる時空間 —— 南京土地登記文書の活用方途をさぐる」『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』8, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 40-61, 2018/3

1-2. 著書

片山剛 (編) 『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会, 446p., 2017/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

片山剛 「広州」『中国文化事典』丸善出版, pp. 112-113, 2017/4

1-4. 口頭発表

片山剛 (招待講演) 「土地改革前夜、土地利用に対する共同規制と(村の領域)の存在形態：広東省高要県金東圍を中心に」京

都大学人文科学研究所共同研究班「転換期中国における社会経済制度」:転換期中国における社会経済制度, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2018/1

片山剛 (招待講演)「1937年南京事件に先行する南京空襲(8月～12月)の時空間復元」ICUアジア文化研究所・JFE21世紀財団共催シンポジウム 歴史の智慧をどう活かすか? —21世紀の日本がアジアと共生をめざすための歴史研究—, 国際基督教大学アジア文化研究所・JFE21世紀財団(共催), 国際基督教大学アジア文化研究所, 2017/12

片山剛 (招待講演)「農民對“田”(單宗耕地)的所有 村莊對“lang”(小地名)的管轄 ——以土改前夕廣東省高要縣金東圍爲主」台湾大学歴史学系外賓研究報告, 台湾大学歴史学系, 台湾大学歴史学系, 2017/3

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(A) 海外、代表者:片山剛

課題番号:17H01644

研究題目:地理空間情報を用いた近現代中国の都市・農村社会の実相復元と空間分析

研究経費:2017年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

旧中国を対象に都市・農村の実相を復元した研究は皆無に近い。本課題は、大縮尺の地形図・地籍図や空中写真等の地理空間情報を利用して、一筆々々の土地区画のレベルから一個の都市の物的実相を復元し、これに統計等の文字資料も加えて総合的分析を行い、都市の地区別特徴を描き出すことを目的とする。これは中国大陸を対象とする初めての試みであり、将来行われるべき研究の先駆的試みである。対象とする都市は1930～40年代の南京である。農村についても、広東省高要市金東圍を対象に、村落が小字(こあざ)において有する用益権に着目し、旧中国農村に関する新たな像を提示する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2016年度～2017年度、6:研究助成、助成金獲得者:片山剛

助成金名:アジア歴史研究助成

研究題目:1937年南京事件の時空間復元

助成団体名:(公益財団法人)JFE21世紀財団

助成金額:2016年度 直接経費 1,500,000円

2017年度 直接経費 0円

研究の目的:

1937年南京事件(南京大虐殺とも呼ばれる)について、本事件の記録を直接の目的としていない第三者資料(国史館所蔵の「南京土地登記文書」)にもとづき、建物被害の実相を時空間に沿って復元し、これを通じて政治的議論を超える実証研究を促進する予定であった。しかし実際に「南京土地登記文書」を子細にみていくと、被害を受けた具体的日時が記されていない、あるいは一律に日本軍の南京入城時に帰すものが多いことに気づいた。そしてその理由は、1937年8月から始まる日本軍による南京空襲、その後の南京城攻防戦により、建物の所有者や借入者は避難して不在であるため、建物が被害を受ける現場に立ち会っていないからであること、これが判明した。

そこで改めて本資料を活用する方途を模索し、その結果、対象期間を日中戦争の全期間に広げうえて、この時期の南京の諸相について、時空間の復元に重きをおいて分析・解明することとした。限られた時間と共同研究者を含めて4名のマンパワーではあるが、従来の日中戦争期を対象とする研究に対して、未利用資料の活用と新たな手法による成果を提示する。研究成果は2019年春にJFE21世紀財団のホームページに公開される。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

一般財団法人東方学会・学術委員, 2015年7月～現在に至る
公益財団法人大学基準協会 大学評価委員会・委員, 2015年4月～2017年3月
一般財団法人東方学会・地区委員, 2011年7月～現在に至る
公益財団法人史学会・評議員, 2001年10月～現在に至る

2. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。(財)東洋文庫研究員。専攻：中央アジア古代史

2-1. 論文

荒川正晴「敦煌文書にみる妻の離婚、娘の財産相続」『中国ジェンダー史研究入門』(小浜正子ほか編), pp. 127-134, 2018/2
Arakawa, Masaharu, "The Silk Road Trade and Traders"『Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko』(The Toyo Bunko), 74, pp. 29-59, 2016/12
荒川正晴「西突厥汗国の Tarqan 達官与粟特人」『粟特人在中国』(寧夏文物考古研究所、北京大学中国古代史研究中心), pp. 13-23, 2016/6

2-2. 著書

荒川正晴, 松井太, 吉田豊他『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』東洋文庫, 493p., pp. 101-114, 2017/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

荒川正晴「ユーラシア東部における仏教伝来と冥界観の形成」第43回東洋史懇話会大会, 早稲田大学東洋史懇話会, 早稲田大学, 2018/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2010/11
荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 流沙海西奨学会, 1986/12

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:荒川正晴

課題番号:17K03131

研究題目:唐帝国の駅伝体制の特質とその時代的変遷－日本および宋の駅伝制との比較を踏まえて－

研究経費:2017年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

本研究は、唐帝国の駅伝制を天聖令と出土史料により再検討し、併せて宋朝や日本の駅伝制と比較することにより、ユーラシア東部の移動・流通に対する公的管理のあり方とその時代的な変遷を究明することを目的とする。とくに駅道の果たした役割と機能、および通行証(過所と公驗)とそれをチェックする関津体制の実態とその時代的な変容の解明に努める。本研究を通じて、断代史的に検討されてきた従来の駅伝制研究を乗り越えて、ユーラシア東部地域の新たな交通史の構築を目指す。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会・会長, 2017年4月～現在に至る

3. 桃木 至朗 教授

1955年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科単位取得退学。論文博士(文学、広島大学)。大阪外国語大学専任講師(ベトナム語)、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授(いずれも東洋史学)などを経て2001年から現職(2010～12年度はコミュニケーションデザイン・センターと兼任)。現在、日本学術会議史学委員会連携会員。専攻: 東南アジア史/海城アジア史/歴史教育。

3-1. 論文

Momoki, Shiro, “Thử phân tích quan chế Đại Việt thời Lý thông qua tài liệu văn khắc” *Tạp chí Khoa học, Đại học Quốc gia Hà Nội*, 32-1S, VNU Journal of Science, pp. 90-99, 2016/12

3-2. 著書

桃木至朗, 藤村泰夫, 岩下哲典他(共著)『地域から考える世界史』勉誠出版, pp. 3-6, 2017/10

桃木至朗, 中村薫, 安達淳他(共編著)『高等学校教科書及び大学入試における歴史系用語精選の提案(第一次案)』高大連携歴史教育研究会, pp. 1-62, 2017/

秋田茂, 永原陽子, 桃木至朗他『世界史叢書総論 「世界史」の世界史』ミネルヴァ書房, pp. 97-106, 2016/9

秋田茂, 桃木至朗, 田中仁他『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会, pp. 1-21, 2016/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Momoki, Shiro, “Nguy cơ và Cải cách của Giáo dục Lịch sử Cấp PTTH và Đại học ở Nhật Bản Hiện đại”(現代日本における高校・大学レベルの歴史教育の危機と改革), International Symposium: “Reforming Teaching History in School: International Experiences and Implications for Vietnam”, University of Social and Human Sciences, Vietnam National University, Hanoi, Vinh Yen: Song Hong Resort, 2017/9

Momoki, Shiro, “Land Categories and Taxation Systems in Đại Việt from the Tenth to the Fourteenth Century: A New Perspective From Goryeo and Early-Medieval Japan”, conference: Vietnam and Korea as “Longue Durée” Subject of Comparison: From the Pre-modern to the Early Modern Periods, IAS-VNU, Hanoi: University of Social and Human Sciences, 2017/3

Momoki, Shiro, “Tình hình nghiên cứu lịch sử Việt Nam tại Nhật Bản: Lịch sử và đặc trưng của nó”, Hội thảo khoa học của Ban Biên soạn Quốc sử Việt Nam, Quý Phát triển Khoa học và Công nghệ Quốc gia, Hanoi: Army Guest House, 2017/3

Momoki, Shiro, “History education in Japanese universities”, Seminar: “A Comparison of History Education in East Asian Universities”, JSPS Global Initiatives: Reinventing University History Education: International comparison on how to adapt nation-state based University history education to globalization, 大阪大学待兼山会館, 2017/3

桃木至朗 「アジアを正に位置づけ自国史を完全に組み込んだ世界史を目ざして」第16回日韓歴史家会議「現代社会と歴史学」第2セッション「歴史教育の新しい動きと歴史学」, 日韓文化交流基金, 東京・都市センターホテル, 2016/11(『第16回日韓歴史家会議「現代社会と歴史学」』pp. 67-79, 2017/3)

桃木至朗 「記念講演「中世(10-14世紀)ベトナム史と仏教勢力—皇帝権・国家との関係を中心とした問題提起」」2016年度大会, 龍谷史学会, 龍谷大学大宮学舎, 2016/11

桃木至朗 「報告4 用語リストにもとづく教科書記述の例示」第95回研究大会パネル1「高校世界史における東南アジア関係用語の厳選 その3」, 東南アジア学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/6

桃木至朗「研究と教育をつなぐ歴史学入門講義」第5部会研究会「大学の教養教育と教員養成を考える—高大接続の入口と出口」、高大連携歴史教育研究会、東京大学駒場キャンパス、2016/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

2015年7月 大阪大学総長顕彰 2015・研究部門の顕彰を受ける

2013年12月 ベトナム・ハノイ国家大学 20周年にあたり同大学の事業に貢献した外国人として記念章授与

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014年度～2017年度、基盤研究(A) 一般、代表者:桃木至朗

課題番号:26244034

研究題目:研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門

研究経費:2016年度 直接経費 5,700,000円 間接経費 1,710,000円

2017年度 直接経費 7,300,000円 間接経費 2,190,000円

研究の目的:

大阪大学における高大連携を通じた歴史教育刷新の取り組みの一環として、専門研究の基礎となるだけでなく、初中等教育の教員をみざす学生、広く歴史学に関心を持つ市民・知識人にも理解できるような、新しい歴史学入門のモデル構築と入門書の作成をみざす。

3-6-2. 2016年度～2017年度、挑戦的萌芽研究、代表者:桃木至朗

課題番号:16K13278

研究題目:史料形態の検討を通じた日朝越比較史研究の基盤形成

研究経費:2016年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

2017年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

比較検討の重要性が認識されながら語学や学界の壁に阻まれて深い検討が行われてこなかった中国周辺の三国について、修史および公文書のスタイルの比較を手がかりとして、本格的な比較史研究の土台を築こうとする共同研究である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・理事, 2017年9月～現在に至る

東洋史研究会・評議員, 2017年4月～現在に至る

東南アジア学会・理事, 2017年1月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2011年10月～現在に至る

文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア分科会専門委員, 2006年12月～現在に至る

アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局・アジア太平洋研究賞審査委員, 2004年4月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2000年4月～現在に至る

4. 松井太教授

1969年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2001年弘前大学人文学部講師、2004年同助教授、2007年同准教授、2010年同教授。2015年4月、大阪大学文学研究科准教授。2017年10月より現職。(財)東洋文庫客員研究員。

4-1. 論文

- 松井太 「榆林窟第 16 窟叙利亞字回鶻文景教徒題記」『敦煌研究』2018-3, 敦煌研究院, pp. 34-39, 2018/3
- ‘Imād al-Dīn Šayḥ al-Ḥukamā’ī, 渡部良子, 松井太 「ジャライル朝シャイフ=ウワイス発行モンゴル語・ペルシア語合璧命令文書断簡2点」『内陸アジア言語の研究』32, 中央ユーラシア学研究会, pp. 49-149, 2017/10
- 松井太 「蒙古時代の畏兀兒農民與佛教教團」『西域研究』2017-3, 新疆社會科學院, pp. 97-115, 2017/9
- Matsui Dai, “An Old Uigur Account Book for Manichaeian and Buddhist Monasteries from Temple α in Qočo” *Zur lichten Heimat: Studien zu Manichäismus, Iranistik und Zentralasienkunde im Gedenken an Werner Sundermann*, Harrassowitz, pp. 409-420, 2017/8
- 松井太 「吐魯番諸城古回鶻語稱謂」『吐魯番學研究』2017-1, 新疆吐魯番學研究院, pp. 95-116, 2017/6
- 松井太 「英國圖書館藏“蕃漢語詞對譯”殘片 (Or. 12380/3948) 再考」『敦煌研究』2017-3, 敦煌研究院, pp. 60-65, 2017/6
- Matsui Dai, “Mazar Tagh Harabesi’nden getirilen Eski Türkçe-Çince bir lügatçe” *Prof. Dr. Talât Tekin hatıra kitabı*, 2, Çantay, pp. 679-696, 2017/5
- 松井太 「トウルファン=ウイグル人社會の連保組織」『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』287-310, 汲古書院, pp. 287-310, 2017/4
- 松井太 「高昌故城寺院址 α のマニ教徒と仏教徒」『大谷探検隊収集西域胡語文獻論叢』龍谷大学, pp. 71-86, 2017/3
- 松井太 「黑城出土蒙古語契約文書與吐魯番出土回鶻語契約文書: 黑城出土蒙古語文書 F61:W6 再讀」『北方文化研究』7, 檀國大學校附設北方文化研究所, pp. 203-214, 2016/12
- 白玉冬, 松井太 「フフホト白塔のウイグル語題記銘文」『内陸アジア言語の研究』31, 中央ユーラシア学研究会, pp. 29-77, 2016/10
- Matsui Dai, “Uigur-Turkic Influence as Seen in the Qara-Qota Mongolian Documents” *Actual Problems of Turkic Studies: Dedicated to the 180th Anniversary of the Department of Turkic Philology at the St. Petersburg State University*, St. Petersburg State University, pp. 559-564, 2016/9
- 松井太 「蒙元時代回鶻佛教徒和景教徒的網絡」『馬可・波羅 揚州 絲綢之路』北京大學出版社, pp. 283-293, 2016/9
- 松井太 「大英圖書館所藏對訳語彙断片 Or. 12380/3948 再考」『東方学』132, 東方学会, pp. 87-74, 2016/7
- Li Gang, Matsui Dai, “An Old Uighur Receipt Document Newly Discovered in the Turfan Museum” *Written Monuments of the Orient*, 4, Russian Academy of Science, St. Petersburg Institute of Oriental Manuscripts, pp. 68-75, 2016/6

4-2. 著書

- 松井太, 荒川慎太郎, 橋堂晃一他(共著)『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp. 1-160, 2017/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 松井太 「唐代における「胡食」の普及」『世界史のしおり』2016-2, 帝国書院, p. 5, 2016/9

4-4. 口頭発表

- Matsui Dai, “Uigur Migrations in Eastern Mongol Eurasia”, *Migrations in Mongol Eurasia: People, Ideas, Artifacts*, Hebrew University of Jerusalem, Israel, Hebrew University of Jerusalem, Mt. Scopus, 2017/12
- 松井太 「榆林窟第 16 窟叙利亞字回鶻文題記」2017 敦煌論壇: 傳承與創新: 紀念段文傑先生誕生 100 年國際學術研討會, 敦煌研究院, 敦煌研究院, 2017/8
- 松井太 「黑城出土蒙古語契約文書與吐魯番出土回鶻語契約文書: 黑城出土蒙古語文書 F61:W6 再讀」首屆北方民族古文字研究國際學術研討會, 內蒙古大學蒙古學學院, 內蒙古大學, 2016/12
- 松井太 「英國圖書館藏蕃漢語詞對譯 Or. 12380/3948 文書殘片再考」2016 敦煌論壇: 交融與創新: 紀念莫高窟創建 1650 年國際學術研討會, 敦煌研究院, 敦煌研究院, 2016/8

松井太 「出土文書と石窟銘文からみたウイグル仏教徒の巡礼活動」仏教学セミナー，龍谷大学西域文化研究会，龍谷大学，2016/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

松井太 第23回東方学会賞，東方学会，2004/11

松井太 第12回立命館白川静記念東洋文字文化賞優秀賞，立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所，2018/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014年度～2017年度、基盤研究(B) 海外、代表者:松井太

課題番号:26300023

研究題目:多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合

研究経費:2016年度 直接経費 2,200,000円 間接経費 660,000円

2017年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

敦煌(中国甘粛省)・トゥルファン(中国新疆ウイグル自治区)および周辺地域から出土した文献資料および当該地域の諸石窟遺跡に残る銘文資料を解読研究し，その校訂テキストを歴史学的に利用して当該地域の歴史展開の諸相(特に諸文化の接触・摩擦・融合)を，総合的な視点から解明することを目的とする。

4-6-2. 2014年度～2016年度、挑戦的萌芽研究、代表者:松井太

課題番号:26580131

研究題目:モンゴル時代の漢文資料における非漢語人名表記体系の解明

研究経費:2016年度 直接経費 273,805円 間接経費 0円

研究の目的:

西暦13～14世紀にモンゴル帝国支配下の中国地域で編纂された漢文資料中にみえる非漢語人名について，その原語(モンゴル語，トルコ語，ペルシア語，アラビア語，チベット語など)表記を同時代の諸言語資料の用例に基づきつつ再構成する。

特に，モンゴル帝国支配層の中核で主要な文字表記システムとされたウイグル文字による表記形式を重点的に収集しつつ，その漢語音写形式との比較検討に重点を置く。この作業を通じて，個々の漢字に反映されるウイグル文字を体系的に解明する。

4-6-3. 2016年度～2018年度、挑戦的萌芽研究、代表者:松井太

課題番号:16K13286

研究題目:仏教石窟壁画と題記銘文の比較検討によるウイグル仏教のトレンドの分析

研究経費:2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

中央アジア東部地域の仏教石窟遺跡に遺存する壁画の美術史的検討と，石窟に残された古ウイグル語銘文の文献学的解読とを比較・融合させる学際的なアプローチにより，主に西暦7～10世紀頃の仏教壁画に表現される種々の仏教的思想が，後世(10～14世紀)のトルコ系ウイグル族により如何に受容され「トレンド」となったか，という問題を解明することを目的とする。

4-6-4. 2017年度～2019年度、基盤研究(B) 一般、代表者:松井太

課題番号:17H02401

研究題目:古代・中世中央ユーラシア世界の交通・交易・交流

研究経費:2017年度 直接経費 4,900,000円 間接経費 1,470,000円

研究の目的:

古代・中世(西暦 6 世紀～14 世紀)の中央ユーラシア世界(とくに現在の中国新疆ウイグル自治区から甘粛・内モンゴルに跨がる地域)を主要な対象に設定し、当地で展開された交易活動や文化交流の諸相,ならびにそれらを支えた交通システムを、現地出土の諸言語文獻資料と現地調査によりつつ実証的に再構成する。その成果を総合して、前近代のユーラシア世界の諸文化圏が、中央ユーラシア地域を媒介として広く連動していたことをより実態的に解明し、「ユーラシア世界史」の理解の深化に資することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

中央ユーラシア学研究会・『内陸アジア言語の研究』責任編集, 2017 年 10 月～現在に至る

内陸アジア史学会・理事・編集委員, 2016 年 4 月～現在に至る

東方学会・学術委員, 2015 年 7 月～現在に至る

5. 田口 宏二郎 教授

1971 年生。1999 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2003 年大阪大学文学研究科助手、2004 年追手門学院大学文学部講師、2008 年追手門学院大学国際教養学部准教授、2012 年大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2018 年 4 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：中国近世・近代史。

5-1. 論文

田口宏二郎「永租と登記——重畳する制度」日本孫文研究会(編)『孫文とアジア太平洋』汲古書院, pp. 83-100, 2017/9

田口宏二郎「南京国民政府時期の土地登記と「他項権利」(1)(2)」片山剛(編)『近代東アジア土地調査事業研究』大阪大学出版会, pp. 204-233, 2017/2

田口宏二郎「登記の時代」村上衛(編)『近現代中国における社会経済制度の再編』京都大学人文科学研究所, pp. 123-194, 2016/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Taguchi, Kojiro, "Early-modern globalization and de-globalization of Ming China", Global history workshop, Nutfield College, Oxford University, 2017/9

田口宏二郎「FO 文書にみる和記洋行事件(1935)」社会経済史学会大会, 社会経済史学会, 慶應義塾大学, 2017/5

田口宏二郎「南京の英国人: 民国期の永租と不動産登記」近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 京都外国語大学, 静岡市ふしみや, 2016/12

田口宏二郎「南京の外国人と不動産登記」孫文生誕 150 周年記念国際学術シンポジウム, (公財)孫中山記念会・日本孫文研究会, 神戸華僑華人研究会, 神戸大学統合研究拠点, 2016/11

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 伊藤 一馬 助教

1984 年生まれ。2013 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（東洋史学）修了。博士（文学）。大阪大学文学研究科特任研究員、日本学術振興会特別研究員 PD などを経て、2017 年 4 月より現職。

6-1. 論文

伊藤一馬「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」村井恭子(研究代表)『文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究』平成 27～29 年度科学研究費補助金成果報告書(なし), 神戸大学, pp. 35-54, 2018/3

伊藤一馬「宋西北辺境軍政文書」に見える宋代文書書式とその伝達——宋代文書体系の復元に向けて——『大阪大学大学院文学研究科紀要』(なし), 58, pp. 1-46, 2018/3

伊藤一馬「北宋陝西地区形勢与将兵制の建立」鄧小南(主編)『過程・空間:宋代政治史再探研』(なし), 北京大学出版社, pp. 415-442, 2017/7

伊藤一馬「江南の顔役——職名をもたない位階官が役所を牛耳ること——」赤木崇敏・伊藤一馬・高橋文治・谷口高志・藤原祐子・山本明志(共著)『元典章が語ること——元代法令集の諸相——』(なし), 大阪大学出版会, pp. 297-322, 2017/3

伊藤一馬「南宋建立時期的中央政府和陝西地区——《宋西北辺境軍政文書》中的高宗《登極勅書》——」復旦大学歴史系『“十一—十三世紀東亜史的新可能性” 首届中日青年学者宋遼西夏金元史研討会會議論文集』(“十一—十三世紀東亜史的新可能性” 首届中日青年学者宋遼西夏金元史研討会), 復旦大学歴史系, pp. 34-47, 2016/8

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊藤一馬「彙報:第 54 回野尻湖クリルタイ」『東洋学報』99-3, pp. 65-73, 2017/12

6-4. 口頭発表

伊藤一馬「宋代筭子の登場と展開」第 200 回宋代史談話会, 宋代史談話会, 大阪市立大学, 2017/11

伊藤一馬「《宋西北辺境軍政文書》中所見宋代文書書式与其伝遞:以宋代文書体系の復元為目的」第二届宋遼西夏金元史的中日青年学者交流会, 復旦大学歴史系・大阪市立大学文学研究科, 大阪市立大学, 2017/9

伊藤一馬「北宋期のオルドス地域とその軍事的意義」文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究」科研研究班・中央ユーラシア学研究会共催ワークショップ「文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造」, 「文物考古資料による唐～宋代オルドス地域の歴史的構造の研究」科研研究班・中央ユーラシア学研究会, 大阪大学, 2017/7

伊藤一馬「宋代筭子の諸相」中国四国歴史学地理学協会 2017 年度大会, 中国四国歴史学地理学協会, 広島大学, 2017/6

伊藤一馬「中国史・中央ユーラシア史用語「精選」:大学・研究者の立場から」第 106 回大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2017/6

伊藤一馬 「宋代中国」史の捉え方——10～13 世紀の「中国」と「周辺」——」第 101 回大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2016/12

伊藤一馬 「山西省靈石県発見「南宋抗金文書」の再検討」第 191 回宋代史談話会, 宋代史談話会, 大阪市立大学, 2016/11

伊藤一馬 「北宋の軍事基盤とその変遷」「ユーラシアの諸帝国の形成と構造的展開」平成 28 年度第 2 回研究会, 「ユーラシアの諸帝国の形成と構造的展開」研究会, 神戸大学, 2016/10

伊藤一馬 「南宋建立時期的中央政府和陝西地区——《宋西北辺境軍政文書》中の高宗《登極勅書》——」“十一十三世紀東亜史的新可能性”首届中日青年学者宋遼西夏金元史研討会, 復旦大学歴史系, 復旦大学歴史系, 2016/8

伊藤一馬 「宋代のオールド地域:2015 年夏期調査報告」第 53 回野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会), 野尻湖クリルタイ(日本アルタイ学会), 藤屋旅館, 2016/7(『東洋学報』98-3, p. 126, 2016/12)

伊藤一馬 「10～13 世紀の中国と東部ユーラシア」平成 28 年度名古屋市立高等学校社会科研究会, 名古屋市立高等学校社会科研究会, 名古屋市立菊里高校, 2016/5

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015 年度～2016 年度、特別研究員奨励費、代表者:伊藤一馬

課題番号:15J11842

研究題目:北宋軍事政策の展開と東部ユーラシア情勢

研究経費:2016 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

本研究は、北宋の軍事上の諸問題の検討を通じて、北宋をユーラシア規模の歴史展開の中に位置付けることを目的とする。そのために、北宋の軍事前線地域であった北辺・西北辺・南辺地域の軍事体制や軍事情勢が、国際情勢と連動していたことを明らかにする。また、北宋の軍事基盤を担った集団や武将が、国際情勢の変動ともに変遷していくことを示す。そして、東部ユーラシアにおける軍事的政治的な連動性や経済的な連動性の結びつきを示すことで、北宋期の「中国」が決して閉ざされたものではなかったことを明らかにする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会・庶務会計幹事, 2016 年 7 月～現在に至る

遼金西夏史研究会・会計監事, 2016 年 4 月～2018 年 3 月

2-9 西洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：秋田 茂、藤川 隆男、中野耕太郎、栗原 麻子
准教授：中谷 惣

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
47	8	4	0	0	4	0	1

*うち留学生 2名、社会人学生 6名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	17	5	1	0
2017	12	4	0	1
計	29	9	1	1

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習によって、英語の活用能力や口頭発表・論文執筆能力を向上させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを実践させること、大学院においては、①論文作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他

専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史学研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をとおした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史学研究室は、研究成果を社会一般、とりわけ高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校への出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースとの共催）、④世界史副読本の編集、⑤海外での講義の実施、⑥個人および研究室のホームページの充実を目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチ等に分化することによって、大学院、学部における論文作成指導などのシステムを効率的に運用した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に実施した。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めた。

2. 研究

西洋史学研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、学会や研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。そのうえ、グローバルヒストリー・セミナーなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化にも尽力した。教員個人も専門学術誌・研究書への寄稿、国際学会での報告など、活発に研究活動を行った。さらに、日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする競争的外部資金の代表者として、外部資金の獲得も順調であった。大学院生等は、計 15 篇の学術論文（2016 年度 7 篇、2017 年度 8 篇）、計 49 回の学会報告（2016 年度 19 回、2017 年度 30 回）を公表した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史の執筆に関わるとともに、高等学校への出張講義を実施した。また、東洋史学専修、日本史学専修、共生文明論コースと協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を 2 年間で 17 回共催した。さらに、海外での講義など、海外への発信も行った。加えて、高等学校への出張講義やサイエンスカフェの開催、それに研究室ホームページの充実など社会一般への発信も積極的に行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制は充実している。卒業論文、修士論文ともに質が向上した。さらに教職を中心に計5名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標はおおむね達成されたと言える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標は達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史学研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものと考えられる。

3. 社会連携

上記の活動をとおして、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。とりわけ高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修・共生文明論コースとの協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

石田真衣、「プトレマイオス朝エジプトにおける嘆願と社会変容」

審査教員 主査：栗原麻子、副査：秋田茂、藤川隆男、周藤芳幸（名古屋大学）

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	4(3)	3(2)	0(0)	0(0)	0(0)	7(5)
2017	3(3)	4(4)	0(0)	0(0)	1(0)	8(7)
計	7(6)	7(6)	0(0)	0(0)	1(0)	15(12)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	3	14	1	0	19
2017	3	3	24	0	0	30
計	4	6	38	1	0	49

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016年度】

[博士前期]

川瀬陽介「研究ノート 19-20世紀転換期におけるHAPAGの発展とネットワーク—自由貿易港ハンブルクの視点から—」
『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会) 14, pp.70-83, 2017/2/27

加納晴日・川瀬陽介・高木亮太郎「「鎖国」体制下の日本の歴史展開—外との交流の中で—」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』13, pp.24-38, 2017/3/15

斉藤誠・杜雨霏・丸岡大祐・八木啓俊「日明関係史研究の最前線と教科書記述(との共著)」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』13, pp.1-23, 2017/3/15

藤川沙海「18世紀末イギリス奴隷貿易廃止の正当化—クエーカー教徒の主張から—」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 14, pp.33-50, 2017/2/27

[博士後期]

Ishida, Mai, "The Complaint of Hermias: Dispute Settlement and Social Norms in the Second Century BC", *Journal of Sino-Western Communications*, 8, 2016/12

堤亮介「古代ローマの農事書における「健康的な場所」」『待兼山論叢(史学篇)』(大阪大学文学会), 50, pp.29-61, 2016/12/26

[その他]

波部雄一郎「初期ヘレニズム時代エジプトにおける体育競技会—「バシレイア競技会優勝者録」碑文を中心に—」『社会科学』(同志社大学人文科学研究所), 46-4, pp.43-68, 2017/2

【2017年度】

[博士前期]

有藤萌・梅谷莉奈・綱澤広貴「『歴史学入門』第5章「歴史の重層性と地域からの視線」—言語教育にみる地域と国家—」
『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』第15号, pp.1-17, 2018/3/15

越智勇介・柏恭平・望月みわ「時間認識・時代区分をめぐって」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』第15号, pp.18-37, 2018/3/15

福永耕人 "Militäruniform und Prächtigkeit: Als Symbol der aristokratischen Mentalität der Offiziere im deutschen Kaiserreich" 『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.30-43, 2018/2/26

佐藤一希・松平桃子・丸山祐生「政治と文化の関わりを考える—「政治文化」を中心に—」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』第15号, pp.57-75, 2018/3/15

金沢大輔・藪内夏実・森井一真「福井憲彦『歴史学入門』第9章「人と人とを結ぶもの」を書き換える」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』第15号, pp.38-56, 2018/3/15

[その他]

岸本廣大〈研究ノート〉「紀元2世紀のリュキア人のコイノンにおける名誉と過去: "πολ(ε)ιτευόμενος δὲ καὶ ἐν ταῖς κατὰ Λυκίαν πόλεσι πάσαις"の用法から」, 『西洋古代史研究』(京都大学大学院文学研究科西洋史学研究室), 第17号, pp.73-91,

2017/12

岸本廣大“Decline behind the Rise of Rome: Decline-Narrative of the Achaean Koinon,” Takashi, Minamikawa (ed.) *Decline and Decline-Narratives in the Greek and Roman World. Proceedings of a Conference held at the University of Oxford in March 2017*, pp.45-59, 2017/10

波部雄一郎「ヘレニズム時代の都市におけるギムナシオン：最近の研究動向を中心に（シンポジウム ヘレニズム史研究の最前線）」、『関学西洋史論集』（関学西洋史研究会），第 41 号, 2018/3

(2)口頭発表

【2016 年度】

〔博士前期〕

加納晴日・川瀬陽介・高木亮太郎「「鎖国」体制下における日本の歴史展開—「外」との相互作用の中で—」, 第 99 回大阪大学歴史教育研究会例会, 大阪大学／豊中市, 2016/10/15

川瀬陽介「近代ドイツ帝国のグローバル化—Sebastian Conrad, *Globalisation and the Nation in Imperial Germany* より—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 42 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/10/25

川瀬陽介「20 世紀転換期のハンブルクとイギリス商人—アジアにおける商業と海運会社—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 44 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/12/13

工藤雅史「20 世紀転換期ガリツィアにおける『ポーランド』の交錯」, 第 88 回ポーランド史研究会, KG ハブスクエア 大阪／大阪市, 2017/2/25

斉藤誠「国家の行動とアジアの繁栄の関係性—Prasanna Parthasarathi, *Why Europe Grew Rich and Asia Did Not: Global Economic Divergence, 1600-1850* を参考に—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 41 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/7/26

斉藤誠・杜雨霏・丸岡大祐・八木啓俊「高校日本史教科書における日明関係再考」, 大阪大学歴史教育研究会第 99 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/10/15

斉藤誠「インド型「財政＝軍事国家」？—18 世紀後半マイソール王国の富国強兵政策—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 44 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/12/13

高垣里衣「18 世紀後期ビルバオ商人の北大西洋貿易—ガルドキ家の一例から—」, 第 10 回関西イギリス史研究会, 大阪経済大学／大阪市, 2016/7/16

高垣里衣「18 世紀後期ビルバオ商人の商業ネットワーク—ガルドキ家の北大西洋貿易の一例から—」, スペイン史学会 2016 年度夏期研修合宿, 関西学院大学大阪梅田キャンパス／大阪市, 2016/7/24

Takagaki, Rie, “Spanish Basque Trade Network in Global History during the late 18th Century: Comparative Perspective from Atlantic History”, The 5th International Conference on ANGIS Conference (第 5 回アジア歴史地理情報学会大会), University of Philippines, Diliman Campus, 2016/12/3

藤川沙海「イギリス女性による反奴隷制運動—即時廃止論の形成過程—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 44 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/12/13

藤川沙海「近代イギリスにおける中流階級の家とジェンダー—Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family fortunes: men and women of the English middle class, 1780-1850* を参考に—」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 45 回例会, 大阪大学／豊中市, 2017/2/10

森下瑤子「イギリス大西洋帝国による海賊鎮圧の始動—17 世後半から 18 世紀前半におけるヴァージニア植民地から—」, 関西イギリス史研究会・例会, 大阪経済大学／大阪市, 2016/4/2

〔博士後期〕

堤亮介「古代ローマの『農業論』における自然観—Varro, Columella, *Palladius* を題材に—」, 平成 28 年度九州史学会 大会西洋史部会, 九州大学／福岡市, 2016/12/11

堤亮介「古代ギリシア・ローマ医学史の現在と諸課題—Vivian Nutton, *Ancient Medicine* を基に—」, 大阪大学西洋史

学会若手セミナー第 40 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/6/28

[その他]

篠原道法「古代アテナイにおける住民のコミュニケーションと社会規範—墓域に設置されたモニュメントとしての墓標に注目して—」, 立命館史学会第 38 回大会, 立命館大学／京都市, 2016/12/17

波部雄一郎『『パンとサーカス』の起源を考える : M. Domingo Gygax, *Benefaction and Rewards in the Ancient Greek City. The Origins of Euergetism*, Cambridge U. P., 2016』, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 43 回例会, 大阪大学／豊中市, 2016/11/24

波部雄一郎「ヘレニズム期エジプトにおけるギュムナシアルコス職」, 古代史研究会第 15 回大会, 京都大学／京都市, 2016/12/18

山田篤美〈講演〉「世界史を変えた真珠の話」(講演主催 : 千代田区立日比谷図書館), 日比谷カレッジ, 千代田区立日比谷図書文化館／東京都千代田区, 2016/9/7

【2017 年度】

[博士前期]

梅谷莉奈「ファシスト・イタリアと国際協調 : Elisabetta Tollardo, *Fascist Italy and the League of Nations, 1922-1935* を手がかりに」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 49 回例会, 大阪大学, 2017/7/27

梅谷莉奈「戦間期協調の時代におけるオースティン・チェンバレンとファシスト・イタリア」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 54 回例会, 大阪大学, 2017/11/24

有藤萌、梅谷莉奈、綱澤広貴「第 5 章「歴史の重層性と地域からの視線」—教育に見る地域と国家」, 大阪大学歴史教育研究会 第 108 回例会, 大阪大学, 2017/10/21

梅谷莉奈「ロカルノ条約締結におけるファシスト・イタリアとオースティン・チェンバレン」, 第 17 回関西イギリス史研究会, 京都大学, 2018/3/5

越智勇介・柏恭平・望月みわ「福井憲彦『歴史学入門』を書き替える 第 4 章「時間認識と時代区分」をめぐって」, 大阪大学歴史教育研究会 第 108 回例会, 大阪大学, 2017/10/21

柏恭平「スウェーデン財政＝軍事国家の再検討」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 51 回例会, 大阪大学, 2017/11/9

柏恭平「スウェーデン財政＝軍事国家の再検討」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 54 回例会, 大阪大学, 2017/11/24

工藤雅史「ガリツィアをめぐる理想と現実 : Wolff, *The Idea of Galicia* をてがかりに」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 48 回例会, 大阪大学, 2017/7/13

工藤雅史「オーストリア＝ハンガリー＝ポーランド三重帝国構想にみる帝国とナショナリズムの相克 : ミハウ・ボブジンスキを通して」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 52 回例会, 大阪大学, 2017/11/16

福永耕人「軍服はなぜ華美だったのか 帝政期ドイツ軍将校の貴族的エートスの表象として見る軍服」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 47 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/6/22

福永耕人「軍服はなぜ華美だったのか 帝政期ドイツ軍将校の貴族的エートスの表象として見る軍服」, 大宅の会, 京都橘大学, 2017/9/18

福永耕人「「特有の道」論とドイツ軍事史の再検討」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 52 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/11/16

藤川沙海「水田珠枝著『女性解放思想の歩み』を読む」, イギリス女性史研究会第 28 回研究会(古典を読む会), 甲南大学, 2017/6/10

藤川沙海「19 世紀イギリスにおける女性反奴隷制組織の形成過程」, 第 13 回関西イギリス史研究会, 京都大学, 2017/9/24

松平桃子「1920 年代ハーレム・ルネッサンスの再検討—James Smethurst, *The African American Roots of Modernism: From Reconstruction to the Harlem Renaissance* を踏まえて」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 50 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/10/4

松平桃子「ハーレム・ルネッサンスにおける人種概念への抵抗について」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 53 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, (2017/11/17)

- 佐藤一希・松平桃子・丸山祐生「現代歴史学にみる「政治文化」」, 大阪大学歴史教育研究会第 109 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/12/16
- 森井一真「イギリス反奴隷制運動における保守主義—Nicholas Hudson, ""Britons Never Will be Slaves": National Myth, Conservatism, and the Beginnings of British Antislavery"に基づいて」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 46 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/6/1
- 森井一真「奴隷貿易廃止運動への抵抗の再検討」, 大阪大学西洋史学会若手セミナー第 53 回例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2017/11/17
- 金沢大輔・藪内夏実・森井一真「福井憲彦『歴史学入門』「第 9 章 人と人をつなぐもの」を書き換える」, 大阪大学歴史教育研究会第 109 回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/12/16
- 森井一真「イギリス奴隷貿易廃止運動への抵抗の再検討」, 第 17 回関西イギリス史研究会, 京都大学, 2018/3/5
〔博士後期〕
- 高垣里衣「七年戦争期におけるビルバオ商人の商業ネットワーク—ガルドキ家の北大西洋貿易を中心として—」, 第 22 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学, 2017/6/10
- 高垣里衣「書評報告: 藤原敬士著『商人たちの広州—一七五〇年代の英清貿易』」, グローバルヒストリー合同ゼミ研究会, 東京大学駒場キャンパス, 2017/12/22
- 高垣里衣“Spanish Basque Trade Network in Atlantic and Asia during the 18th century” , 1970 年代のアジア国際秩序ワークショップ・院生セッション, 国立政治大学, 2017/12/26
- 高垣里衣“Bilbao merchant and their trade: Codfish trade with New England in the late 18th century” , Osaka-NTU Global History Workshop "Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspective", 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/19
- 堤亮介「古代ローマの技術書における「健康性」概念—フロンティヌス『ローマの水について』を中心に—」, 第 67 回日本西洋史学会大会, 一橋大学国立キャンパス, 2017/5/20
〔その他〕
- 岸本廣大「古代ギリシアのコイノンにおける紛争解決—アカイアとボイオティアの事例から—」, 平成 29 年度九州史学会大会 (九州大学) , 2017/12/10
- 岸本廣大“What is the Mercenary for the Koinon? From Military and Social Perspectives,” From the Markets to the Associations: A Comprehensive View of the Greek Mercenary World in the Classical and Hellenistic Periods, Second International Conference (京都大学) , 2018/3/23
- 波部雄一郎「ハリカルナッソスにおけるギュムナシオン建設—ヘレニズム君主と小アジアの諸都市をめぐる—考察—」 2017 年度広島史学研究会大会、広島大学/広島市、2017/10/29
- 波部雄一郎「ヘレニズム時代の都市におけるギュムナシオン: 最近の研究動向を中心に」第 20 回関学西洋史研究会大会 公開シンポジウム「ヘレニズム研究の最前線」、関西学院大学/西宮市、2017/11/18

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016 年度】

〔博士前期〕

斉藤誠〈書評〉「Prasanna Parthasarathi, *Why Europe Grew Rich and Asia Did Not: Global Economic Divergence, 1600-1850*」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会) , 14, pp.84-89, 2017/2/27

〔その他〕

山田篤美(展覧会企画監修)「History of Pearls—「真珠」価値の変遷—」, 日本橋三越本店/東京都中央区, 2016/6/15~6/20; 福岡三越/福岡市, 2016/11/5~11/14; 札幌三越/札幌市, 2016/11/16~11/21.

山田篤美「キツネの口から真珠が出た話」『Brand Jewelry』(インク・インコーポレーション)2016 年夏・秋号, pp. 130-133, 2016/7

山田篤美「冒険宝石商タヴェルニエのオリエント大旅行」『Brand Jewelry』（インク・インコーポレーション）2016年冬・2017年春号, pp. 110-113, 2016/12

【2017年度】

〔博士前期〕

梅谷莉奈 <書評> 「Elisabetta Tollardo, Fascist Italy and the League of Nations, 1922-1935, London, Palgrave Macmillan, 2016」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.69-74, 2018/2/26

柏恭平 <書評> 「古谷大輔・近藤和彦編『礫岩のようなヨーロッパ』山川出版社、2016年」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.51-55, 2018/2/26

工藤雅史 <書評> 「Larry Wolff, The Idea of Galicia: History and Fantasy in Habsburg Political Culture, Stanford, Stanford University Press, 2010」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.60-65, 2018/2/26

福永耕人 <新刊紹介> 「森涼子著『グリム童話と森——ドイツ環境意識を育んだ「森は私たちのもの」の伝統——』築地書館、2016年」『西洋史学』第264号, pp.137-138, 2017/12

藤川沙海 <書評> 「水田珠枝著『女性解放思想の歩み』を読む」『女性とジェンダーの歴史』第5号, pp.52-55, 2018/3

松平桃子 <書評> 「James Smethurst, The African American Roots of Modernism: From Reconstruction to the Harlem Renaissance, The University of North Carolina Press, Chapel Hill, 2011.」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.65-69, 2018/2/26

森井一真 <書評> 「Neill, Daniel I., Edmund Burke and the conservative logic of empire (Berkeley Series in British Studies, 10), Oakland, California, University of California Press, 2016」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.55-60, 2018/2/26

〔博士後期〕

高垣里衣 <新刊紹介> 「ジョン・エリオット著、立石博高・竹下和亮訳『歴史ができるまで—トランス・ナショナルヒストリーの方法』岩波現代全書、2017年」『パブリック・ヒストリー』第15号, pp.74-76, 2018/2/26

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 3名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計4名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2017年度 学部: 1名 大学院: 1名 (計2名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

藤田智子 日本学術振興会特別研究員 (PD), 明海大学外国語学部, 講師, 2016/4

森本慶太 博士後期課程修了, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8名

2016年度：5名　2017年度：3名

<内訳>　技術職　2名　ジャーナリスト　2名　アーティスト　0名　中・高等学校の教員　1名
システムエンジニア　1名、コンサルタント　2名、その他　0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計　2名

2016年度：1名　2017年度：1名

9. 刊行物

2016年度　『西洋史学』258-262号　学術誌（日本西洋史学会）

『パブリック・ヒストリー』第14号　学術誌（大阪大学西洋史学会）

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー	2008年度～現在に至る
日本西洋史学会『西洋史学』編集部	2008年度～現在に至る
大阪大学西洋史学会	2008年度～現在に至る
関西アメリカ史研究会	2008年度～現在に至る
東アジアブリテン史学会（E A A B H）事務局	2011年3月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学西洋史学会若手セミナー　学内

第40回　堤亮介「古代ギリシア・ローマ医学史の現在と諸課題—Vivian Nutton, *Ancient Medicine* を基に—」
(2016/6/28)

第41回　斉藤誠「国家の行動とアジアの繁栄の関係性—Prasanna Parthasarathi, *Why Europe Grew Rich and Asia Did Not: Global Economic Divergence, 1600-1850* を参考に—」(2016/7/26)

第42回　川瀬陽介「近代ドイツ帝国のグローバル化—Sebastian Conrad, *Globalisation and the Nation in Imperial Germany* より—」(2016/10/25)

第43回　波部雄一郎「『パンとサーカス』の起源を考える：M. Domingo Gygax, *Benefaction and Rewards in the Ancient Greek City. The Origins of Euergetism*, Cambridge U. P., 2016」(2016/11/24)

第44回　藤川沙海「イギリス女性による反奴隷制運動—即時廃止論の形成過程—」

斉藤誠「インド型「財政＝軍事国家」？—18世紀後半マイソール王国の富国強兵政策—」

川瀬陽介「20世紀転換期のハンブルクとイギリス商人—アジアにおける商業と海運会社—」(2016/12/13)

第45回　藤川沙海「近代イギリスにおける中流階級の家とジェンダー—Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family fortunes: men and women of the English middle class, 1780-1850* を参考に—」(2017/2/10)

第46回　森井一真「イギリス反奴隷制運動における保守主義—Nicholas Hudson, "'Britons Never Will be Slaves': National Myth, Conservatism, and the Beginnings of British Antislavery"に基づいて」(2017/6/1)

第47回　福永耕人「軍服はなぜ華美だったのか　帝政期ドイツ軍将校の貴族的エートスの表象として見る軍服」
(2017/6/22)

第48回　工藤雅史「ガリツィアをめぐる理想と現実：Wolff, *The Idea of Galicia* をてがかりに」(2017/7/13)

第49回　梅谷莉奈「ファシスト・イタリアと国際協調：Elisabetta Tollardo, *Fascist Italy and the League of Nations, 1922-1935* を手がかりに」(2017/7/27)

第50回　松平桃子「1920年代ハーレム・ルネッサンスの再検討—James Smethurst, *The African American Roots of Modernism: From Reconstruction to the Harlem Renaissance* を踏まえて」(2017/10/4)

- 第 51 回 柏恭平「スウェーデン財政＝軍事国家の再検討」(2017/11/9)
- 第 52 回 工藤雅史「オーストリア＝ハンガリー＝ポーランド三重帝国構想にみる帝国とナショナリズムの相克：ミハウ・ボブジンスキを通して」
福永耕人「「特有の道」論とドイツ軍事史の再検討」(2017/11/16)
- 第 53 回 森井一真「奴隷貿易廃止運動への抵抗の再検討」
松平桃子「ハーレム・ルネッサンスにおける人種概念への抵抗について」(2017/11/17)
- 第 54 回 柏恭平「スウェーデン財政＝軍事国家の再検討」
梅谷莉奈「戦間期協調の時代におけるオースティン・チェンバレンとファシスト・イタリア」(2017/11/24)
- 第 55 回 平野みか(名古屋大学大学院)「線文字B粘土板における食料の表現」
伊藤嘉純(名古屋大学大学院)「ローマ帝政初期のラコニア諸都市とエウリュクレス」(2018/2/19)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

- 第 53 回 講師：Richard Drayton (ロンドン大学キングス・カレッジ教授)
“European empires and the origins of modern inequality” (2016/6/1)
- 第 54 回 講師：Moritz von Brescius (コンスタンツ大学研究協力者・講師)
“The German and Japanese Empires: Great Power Competition and the World Wars” (2016/7/22)
- 第 55 回 (海域アジア史研究会との共催)
講師：Sun Laichen (カリフォルニア州立大学教授、大阪大学客員教授)
“Asian Warships during the Century of Warfare in Eastern Eurasia, c. 1550-1683” (2016/7/24)
- 第 56 回 (海域アジア史研究会との共催)
講師：Keat Gin Ooi (マレーシアサインズ大学教授)
“An Imperial Vision and New World Order Imperial Japan’s Greater East Asia Co-Prosperity Sphere” (2016/10/6)
- 第 57 回 (海域アジア史研究会との共催)
講師：Harmen Beukers (ライデン大学名誉教授)
“Tekijuku's crucial role in the transmission of European medicine” (2016/10/28)
- 第 58 回 講師：A. G. Hopkins (ケンブリッジ大学名誉教授)
“American Empire’ in the twentieth century” (2016/11/2)
- 第 59 回 講師：Arun Bandopadhyay (コルカタ大学名誉教授)
“Technical Education, Swadeshi and Development in Bengal: The Story of Engineering in the Global Context of the Early Twentieth Century” (2016/12/21)
- 第 60 回 講師：牧村保広 (アイオナ大学准教授)
“How 10 Trade Goods Moved World History: An Analysis of the Global Trades in Silk, Porcelain, Spices, Cotton, Guns, Slaves, Sugar, Silver, Tea, and Opium from the 15th Century to the 19th Century.” (2016/12/22)
- 第 61 回 講師 Robert H. Taylor (ロンドン大学名誉教授)
“Comparing the Role of the Military in the Politics of Southeast Asia: Controlling or Playing Politics?” (2017/5/11)
- 第 62 回 講師 Jana K. Lipman (トゥレーン大学准教授)
“Confinement and Mobility: The Paradox of the Refugee Experience” (2017/6/7)
- 第 63 回 講師 包 茂紅 Bao Maohong (中国・北京大学教授、東大東洋文化研究所客員教授)
“Environmental History and world History” (2017/7/25)
コメンテーター：水野祥子(駒澤大学)

- 第 64 回 講師 Sun Laichen (カリフォルニア州立大学 Fullerton 校教授、文学研究科客員教授)
“Early modern translation in eastern Eurasia from a global perspective” (2017/8/8)
- 第 65 回 講師 赤見 友子 (オーストラリア国立大学)
 「近現代グローバルヒストリーにおける帝国間関係とアジア」 (2017/12/20)
- 第 66 回 Osaka-NTU Global History Workshop & Preparation for Book Publication:
“Changing Dynamics and Mechanisms of Maritime Asia in Comparative Perspectives”
 (Workshop : 2018/1/19)
- 第 67 回 講師 Dane Kennedy (ジョージ・ワシントン大学教授)
“Mobility, Cross-Cultural Networks, and the Struggle for Postcolonial Sovereignty”
 講師 Bala Chandran (ジュネーブ国際関係・開発研究所教授)
“History’s global turn: perspectives from rim and region” (2018/3/9)

大阪大学グローバルヒストリー・ワークショップ

第 1 回 (大阪大学地域研究フォーラム、海域アジア史研究会との共催、協力：国際交流基金アジアセンター)

Joint seminar “Southeast Asia: Eyes from Outside and on the Internal Borders” (2017/2/24)

講師：桃木至朗 (大阪大学教授)

“Japanese Perception of Southeast Asia, Past and Present:

講師：Dr. Farish Ahmad-Noor (南洋工科大学准教授)

“Across borders in Southeast Asia Today: Envisioning future ASEAN integration based on the complex reality of people’s life.”

第 2 回 (2017/4/7)

報告者・報告題目

(1) 古谷大輔 (言語社会研究科)

Intermediators who connected between Europe and Asia: “Swedish” experiences in the early modern East Asia

(2) 岡田雅志 (文学研究科)

Highlanders’ Network in the Early Modern Sino-Vietnamese Borderlands: New Aspects of Southeast Asian Upland History

(3) 中嶋啓雄 (国際公共政策研究科)

From Inter-Imperial Relations to Transnational Connections: A Case of Japan’s Intellectual Interchange

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 秋田 茂 教授

1958 年生。1985 年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士 (文学) (大阪大学) 2003 年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003 年 10 月より現職。先導的学際研究機構(OTRI)グローバルヒストリー研究部門長、アジア世界史学会(AAWH)会長。専攻：イギリス帝国史・グローバルヒストリー

1-1. 論文

秋田茂 「序論 グローバルヒストリーから見た世界秩序の再考」秋田茂『国際政治』(日本国際政治学会), 191, 日本国際政治学会 (有斐閣), pp. 1-15, 2018/3

秋田茂 「高等学校新課程「歴史総合」の科目編成をめぐる試案第 23 号」『大阪大学教育学年報』(大阪大学人間科学研究科), 23, 大阪大学人間科学研究科, pp. 153-167, 2018/3

秋田茂 「補遺・1960年代の米印経済関係—PL480と「緑の革命」の起源」『ヨーロッパ文化史研究』(東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所), 18, 東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所, pp. 53-76, 2017/3

1-2. 著書

秋田茂, A.ムカジ, A.G.ホブキンズ他(共著) 『「大分岐」を超えて—アジアからみた19世紀論再考』ネルヴァ書房, pp. 3-16, pp. 55-79, 2018/3

Sven Beckert, Dominic Sachsenmaier, Akita, Shigeru 他(共著), *Global History, Globally*, Bloomsbury Academic, pp. 283-294, 2018/3

秋田茂 『帝国から開発援助へ—戦後アジア国際秩序と工業化』名古屋大学出版会, 242p., 2017/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

秋田茂(書評) 「水島司・加藤博・久保亨・島田竜登編『アジア経済史入門』」『社会経済史学』(社会経済史学会), 83-4, 社会経済史学会, pp. 100-102, 2018/2

Akita, Shigeru(Book Review), “Yuichiro Sakamoto, The Rise of the Investing Society—The Spread of the Financial Revolution in Britain (in Japanese)”, *Asian Review of World Histories*, (Asian Association of World Historians), 6-1, pp. 212-214, 2018/1

秋田茂 「グローバルヒストリーから見た覇権国家の行方—欧米からアジアへ」『週刊東洋経済』(東洋経済新報社), 2016年12月24日号, 東洋経済新報社, pp. 35-37, 2016/12

秋田茂 「インタビュー:アジア・西洋関係に新歴史観」『日本経済新聞 2016/11/21 朝刊・19面』(日本経済新聞社), 日本経済新聞社, p. 19, 2016/11

1-4. 口頭発表

Akita, Shigeru, “The World Bank, Green Revolution in India and International order of Asia”, Global History Project Workshop: “The Transformation of International Economic Order of Asia in the 1970s and the Oil Crises”, 大阪大学, Awaji YUMEBUTAI International Conference Center, 2018/3

Akita, Shigeru, “The 1970s as the Turning point of the World-System—the Impact of Oil Crises”, Workshop on International Order of Asia in the 1970s, 台湾政治大学, 台湾政治大学文学院, 2017/12

秋田茂 「‘PL480, US Food Aid to India and the World Bank in the 1960s’, Panel: From late colonial development to post-colonial development—Towards a history of aid’」5th European Congress on World and Global History (ENIUGH), European Network in Universal and Global History, Central European University, Budapest, 2017/9

秋田茂 「‘International Order of Asia in the 1930s—a revisionist interpretation’」Special lecture on World History, Vietnam National University, Faculty of History, College of Social Sciences and Humanities, Ha Noi, 2017/9

Akita, Shigeru, “From Empires to Development Aid—International Economic Order of Asia in the 1950s–60s in Global History”, The Practice of Global History, Global History Consortium, Nuffield College, University of Oxford, 2017/9

秋田茂 「経済援助・開発とアジア国際経済秩序」冷戦研究会第37回例会, 冷戦研究会, 東京大学総合文化研究科, 2017/6

秋田茂 「‘“Intra-Asian competition” and collaboration against the West: the Formation of the “Cotton-centered Linkages” in Asia at the end of the 19th century’」Special seminar on Global History, Beijing Foreign Studies University (BFSU), Institute for Global History, Beijing Foreign Studies University (BFSU), 2017/6

秋田茂 「‘Creating Global History from Asian Perspectives—Challenge and Collaboration from Osaka’」International Symposium on “Global History in East Asia: Coordination and Innovation”, Beijing Foreign Studies University, and Asian Association of World Historians (AAWH), Institute for Global History and Information Center for Worldwide Asia Research, Beijing Foreign Studies University (BFSU), 2017/6

秋田茂 「‘From Decolonization to Economic Development: The Colombo Plan, the Bandung Conference and Japan’s economic cooperation’」Bandung Humanisms: Towards a New Understanding of the Global South, Nanyang Technological University,

Columbia University and University of California, Los Angeles, Nanyang Technological University (NTU), 2017/6

Akita, Shigeru, "The Development of Global History Studies in Japan and an example: PL480, Food Aids to India and the United States in the 1960s", Special Lecture on Global History, Kyunpook National University, Department of History, Kyunpook National University, 2017/2

Akita, Shigeru, "Intra-Asian Competition" and Collaboration against the West-The Emergence of a "Cotton-Centered Linkage" at the end of the 19th Century", Political Economy in South Asia: An International Conference in Honour of Prof. Noboru Karashima, Jawaharlal Nehru Institute of Advanced Studies, Jawaharlal Nehru University, 2017/1

Akita, Shigeru, "Valedictory Session: "Intra-Asian competition" and collaboration against the West:N.Y.K. Bombay Line, Tata & Sons and Indian cotton at the end of the 19th century", Peoples, Places and Cultures in Asian and World History, c.1300-1900, Savitribal Phule Pune University, Department of History, Savitribal Phule Pune University, 2017/1

Akita, Shigeru, "Intra-Asian Competition" and Collaboration against the West-The Emergence of a "Cotton-Centered Linkage" at the end of the 19th Century", Konstanz Leverhulme Workshop: Flows and Orders-A Tension in Global History, University of Konstanz, Department of History, University of Konstanz, 2016/10

秋田茂 「趣旨説明、1960年代の米印経済関係—PL480と食糧援助問題」2016年度社会経済史学会近畿部サマーシンポジウム、社会経済史学会、大阪市立大学梅田サテライト、2016/8

秋田茂 「「長期の18世紀」から「東アジアの経済的再興」へ」大沼科研比較地域体系研究会・2016年度第1回例会、大沼科研比較地域体系研究会、東京大学法学研究科、2016/6

Akita, Shigeru, "PL480, Food Aid to India and the World Bank in the 1960s", Special Lecture of History Programme, School of Humanities and Social Science, Nanyang Technological University, School of Humanities and Social Science, Nanyang Technological University, 2016/5

秋田茂 「グローバルヒストリーとイギリス帝国」広島日英協会第130回例会、広島日英協会、ANAクラウンプラザ広島、2016/4(『広島日英協会会報』110, pp. 6-8, 2016/5)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 大阪大学総長顕彰・研究部門、大阪大学、2014/7

秋田茂 第14回読賣・吉野作造賞、読賣新聞社、中央公論新社、2013/7

秋田茂 第20回大平正芳記念賞、大平正芳記念財団、2004/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号:25245048

研究題目:19世紀アジア世界における開発と経済発展—グローバルヒストリーの観点から

研究経費:2016年度 直接経費 2,000,000円 (2015年度からの繰り越し分) 間接経費 0円

研究の目的:

従来の経済史研究が広めてきた欧米中心の「19世紀論」を全面的に批判し、グローバルヒストリーの観点から、アジアでの農業開発や工業化が、アジア人自身の自立的でしたたかな動きの現われであり、それが20世紀後半からの「東アジアの経済的再興」の伏線(歴史的起源)であったことを、東アジア・東南アジア・南アジアでの現地の小農・商業資本を主体とした農業開発の展開、19世紀後半の南アジアや東アジアにおける消費財部門での近代的工業化の始動に着目して明らかにする。

1-6-2. 2017年度～2021年度、基盤研究(A) 一般、代表者:秋田茂

課題番号:17H00933

研究題目:世界システムの転換点としての1970年代—石油危機の衝撃

研究経費:2017年度 直接経費 7,100,000円 間接経費 2,130,000円

研究の目的:

1970年代の二回の石油危機によって、近代世界システム・世界経済はいかに変容し、21世紀現代世界の原型が形成されたのか。「広義の東アジア地域」の経済成長(東アジアの奇跡)はなぜ可能になり、南アジアの農業開発「緑の革命」は成果をあげる一方で、アフリカの経済開発政策はなぜ失敗して「南南問題」が生まれたのか。経済援助(ODA)、民間投資の動向と関連づけて分析する。さらに、石油危機を通じて国際金融は、ブレトン＝ウッズ体制から「民営化された国際通貨システム」へといかに変容したのか、オイルマネーの行方に着目して考察する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・平成30年度科学研究費助成事業審査委員・若手研究(史学一般), 2017年4月～現在に至る
文部科学省初等中等教育局教育課程課・学習指導要領等の改善に係る検討に必要な専門的作業等のための指導・助言等,
2016年10月～2018年3月
神戸市みなと総局・神戸港将来構想研究会委員, 2016年4月～2018年3月
アジア世界史学会(The Asian Association of World Historians: AAWH)会長, 2015年6月～現在に至る
東アジアブリテン史学会(The East Asian Society of British History: EASBH)事務局長, 2012年9月～2018年9月
北海道大学スラブ研究センター・共同研究員, 2011年4月～現在に至る
東北学院大学ヨーロッパ文化研究所・共同研究員, 2011年4月～2018年3月
日本学術会議・連携会員(史学), 2006年10月～現在に至る
The Royal Historical Society (United Kingdom)・Fellow, 2002年10月～現在に至る

2. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻: 西洋史、とくにオーストラリアの歴史

2-1. 論文

Fujikawa, Takao, "Chinese Museums in Austrakia: characteristics and problems"『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 15, 大阪大学西洋史学研究室, pp. 44-50, 2018/2
藤川隆男「パブリック・ヒストリー社会の歴史意識・知識とアカデミックな歴史―」『西洋史学』(日本西洋史学会), 263, 日本西洋史学会, pp. 36-48, 2017/6
藤川隆男「乾燥大陸オーストラリアの歴史と開発」*Civil Engineering Consultant*, (建設コンサルタンツ協会), 274, 建設コンサルタンツ協会, pp. 10-12, 2017/1

2-2. 著書

橋本伸也, 平野千賀子, 藤川隆男他(共著)『紛争化させられる過去』岩波書店, pp. 109-130, 2018/3
歴史学研究会, 清水光明, 藤川隆男他(共著)『歴史を社会に活かす』東京大学出版局, pp. 39-49, 2017/5
藤川隆男『妖獣バニヤップの歴史』刀水書房, 298p., 2016/7

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Fujikawa, Takao, "Chinese History museums in Australia", The Third International Workshop on Australia in Osaka, 2016: The Third International Workshop on Australia in Osaka, 2016, 大阪大学文学研究科・西洋史専門分野, 大阪大学, 2016/11『西洋史学』263, pp. 36-48, 2017/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:26360010

研究題目:オーストラリアにおける歴史博物館の発達—20世紀最大の草の根運動

研究経費:2016年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

オーストラリアでは、1950年代末から1970年代半ばまでに1000館以上の歴史博物館が新設された。これらの博物館は、政府からの援助を受けずに、草の根の運動によって開設されたものである。現在では、その数が2000に達するほどであり、この歴史博物館の誕生と発展を検討するのが、この研究の課題である。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・代表, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・理事, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015年9月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015年5月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・編集委員, 2003年6月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003年6月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996年4月～現在に至る

3. 中野 耕太郎 教授

1967年生。1994年、京都大学文学研究科博士後期課程（西洋史学専攻現代史学）中退。博士(文学)（京都大学）。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授、大阪大学准教授を経て、2016年4月より現職。専攻：アメリカ現代史

3-1. 論文

中野耕太郎 「「アメリカの過去」と歴史叙述のグローバル化——アメリカ史研究の現在」『アメリカ研究』51, アメリカ学会, pp. 91-114, 2017/3

3-2. 著書

秋田茂, 桃木至朗, 中野耕太郎他(共著) 『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会, pp. 107-136, 2016/4

藤原辰史, 中野耕太郎他(共著) 『第一次世界大戦を考える』共和国, pp. 50-52, 2016/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中野耕太郎 「「国民」の項」アメリカ学会『アメリカ文化事典』丸善出版, pp. 168-169, 2018/1

中野耕太郎 「2016年度の歴史学界—回顧と展望、北アメリカ・後半」『史学雑誌』(史学会), 126-5, pp. 377-381, 2017/5

3-4. 口頭発表

中野耕太郎 「アメリカ例外主義批判からグローバル・ヒストリーへ — アメリカ史学史に見る国民研究の可能性」関西アメリカ史研究会春季例会, 関西アメリカ史研究会, キャンパスプラザ京都, 2017/5

中野耕太郎 「「現代」の終わり(現在の始まり)—1970年代とは何だったのか？」現代／世界とは何か—人文学の視点から(京大人文研共同研究), 京都大学, 2016/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中野耕太郎 第2回齋藤眞賞, アメリカ学会, 2012/6

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中野耕太郎

課題番号:16K03113

研究題目:アメリカ市民ナショナリズムの変容—1970年代における社会再編の歴史学的分析

研究経費:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 1,600,000円 間接経費 480,000円

研究の目的:

本研究は 1970年代を主たる対象として、現代アメリカの市民ナショナリズムの歴史の変容を検証する。その際、相互に重なり合う多様な市民(=国民)原理—①機会均等を意味するリベラルな市民権、②福祉国家の社会的な市民権、③国家への軍事奉仕と成員資格を結びつける軍事的市民権、④反植民地主義に立脚したコスモポリタンな市民権等—が交錯する場として当時の社会・思想状況を分析し、今日に至る国民統合のメカニズムを解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アメリカ学会・理事, 2016年6月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2014年6月～現在に至る

アメリカ学会・常務理事, 2012年6月～2016年6月

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2008年6月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2008年6月～現在に至る

二十世紀研究・編集委員, 2008年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2003年4月～現在に至る

アメリカ史評論・編集委員, 1995年11月～現在に至る

4. 栗原 麻子 教授

1968年生。1995年、京都大学大学院文学研究科博士課程(西洋史学専攻)指導認定のうえ退学。博士(文学)(京都大学、1998年)。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師、大阪大学助教授、同准教授を経て、2017年より現職。専攻:古代ギリシア史

4-1. 論文

栗原麻子「遊女ネアイラとアテナイ民主制ポリスへの参画をめぐって」『歴史と地理—世界史の探求—』252, 山川出版社, pp. 1-30, 2017/8

4-2. 著書

秋田茂, 桃木至朗他編, 栗原麻子他著『「世界史」のなかの世界史』ミネルヴァ書房, pp. 107-131, 2016/8

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

栗原麻子(翻訳, ロバート・パーカー著)「アテナイにおけるト占」『西洋古代史研究』17, 京都大学西洋史研究室, pp. 1-14, 2018/1

栗原麻子(解説)「ロバート・パーカー『アテナイにおけるト占』」『西洋古代史研究』17, 京都大学西洋史研究室, pp. 14-16, 2018/1

栗原麻子(書評)「岡田泰介『前5世紀アテナイの艦隊乗組員 IG I3 1032(Athenian Naval Catalogue)の分析を中心に』」『史学雑誌』124-126『法制史研究』(法制史学会), 66, pp. 425-427, 2017/3

4-4. 口頭発表

Kurihara, Asako, “Rumor and Hearsay Evidence in the Athenian Law Courts”, Witnesses and Evidence: Information and Decision in Drama and Oratory, University of Peloponessus, 2018/3

栗原麻子「石そのものの力」ギリシア文化研究所 年次総会, 東京大学, 2017/11

Kurihara, Asako, “The Effect of Written Law as Object”, Law and Writing Habits in the Ancient World, 科研共同研究(奈良大学) シンポジウム, Institute of Classical Studies, 2016/9

Kurihara, Asako, “Rich Country, Strong Army: New Phases of Old Phrases”, From Thucydides to Twitter, Centre of Oratory and Rhetoric, Royal Holloway, University of London, Institute of Classical Studies, 2016/4

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2017年度～2020年度：研究助成、助成金獲得者:栗原麻子

助成金名: 科研費・基盤研究(C)

研究題目: 互酬性と民主制—前4世紀アテナイにおける公私関係の変容—

助成団体名: 日本学術振興会

助成金額: 2017年度 直接経費 800,000円

研究の目的:

古典期のアテナイは、互酬的關係の張り巡らされた社会であった。その構造は、民衆法廷にも及んでいた。本研究においては、前4世紀アテナイの家からポリスにいたる公私關係を、互酬制と友愛を軸に把握し、さらに、そのような公私の論理が表明される場としてのアッティカ民衆法廷の性格について総合的に考察する。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・委員(編集委員、書評委員), 2013年6月～現在に至る

古代学協会・編集参与, 2009年4月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2004年10月～現在に至る
大阪大学西洋史学会理事・編集委員, 2004年10月～現在に至る

5. 森本 慶太 助教

1981年生。2013年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（西洋史学専門分野）修了。博士（文学）。大阪大学大学院文学研究科特任研究員、大阪大学・京都橘大学・佛教大学非常勤講師を経て2016年4月より現職（2018年3月退職）。
専攻：西洋史学／スイス近現代史／観光史。

5-1. 論文

森本慶太「1930年代スイスにおける観光業の危機と再編—スイス観光連盟の設立と事業内容を中心に—」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）, 14, pp. 1-16, 2017/2

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森本慶太(新刊紹介)「森田安一著『ハイジ』の生まれた世界—ヨハンナ・シュペーリと近代スイス—」『史学雑誌』(公益財団法人史学会), 126-10, p. 112, 2017/10

5-4. 口頭発表

森本慶太「南直人氏報告「19世紀ドイツにおける生改革と食改革」へのコメント」女性史総合研究会第199回例会, 女性史総合研究会, ウィングス京都, 2018/2

森本慶太「第二次大戦期スイスにおけるソーシャル・ツーリズムの展開——スイス旅行公庫協同組合の活動をめぐって——」スイス史研究会第87回報告会, スイス史研究会, 國學院大學渋谷キャンパス, 2017/12

森本慶太「書評:『新しく学ぶ西洋の歴史—アジアから考える』」大阪大学歴史教育研究会第103回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3

森本慶太「戦間期ヨーロッパにおける移動規制の強化と「国民的」余暇の普及—スイスの事例を中心に—」2016年度大阪大学文学研究科共同研究採択事業「近代における女性を中心とした「移動／異動」の力学とその表象」報告会, 大阪大学文学研究科共同研究「近代における女性を中心とした「移動／異動」の力学とその表象」, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3

森本慶太「第二次大戦期スイスにおける観光論の展開」ヨーロッパ近現代史若手研究会, 東北学院大学ヨーロッパ総合研究所, 東北学院サテライトステーション, 2017/1

森本慶太「第二次大戦期スイスにおける観光学と戦後構想」近代社会史研究会第259回例会, 近代社会史研究会, 京都大学吉田キャンパス, 2016/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2017年度～2020年度、若手研究(B)、代表者:森本慶太

課題番号:

研究題目:戦後西ヨーロッパにおけるソーシャル・ツーリズムの形成に関する比較史的研究

研究経費:2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究の目的は、西ヨーロッパにおける「ソーシャル・ツーリズム」の歴史的意義について、1950～70年代のスイスを主な事例として明らかにすることである。従来の研究は労働組合の役割や国民全体を対象とした総花的施策を扱ってきたが、本研究では、観光が社会的な権利として認められるまでの過程や国際協力関係に視野を拡大し、観光がヨーロッパ社会のなかで社会的に普及を図るべき不可欠な要素として位置づけられていく背景を歴史学的に解明するものである。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構・調査研究協力者, 2017年8月～2018年3月

ドイツ現代史研究会・事務局長, 2016年4月～2018年3月

国立教育政策研究所 「チューニングによる大学教育のグローバル質保証—テスト問題バンクの取組—」・委員, 2016年4月～2017年3月

大阪大学西洋史学会・会計事務, 2015年5月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・『パブリック・ヒストリー』編集委員, 2015年5月～現在に至る

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員, 2015年4月～2018年3月

2-10 考古学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉、高橋 照彦

助教：上田 直弥(兼任)

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
18	4	1	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	3	1	0	0
2017	8	2	0	3
計	11	3	0	3

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査や出土資料分析などにかかわる方法論や技術などといった基礎力について、確実に習得することを重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標にしている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱

い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が2本、博士後期課程在籍生が1本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、発掘成果報告会の開催やHPでの情報発信などを通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、兵庫県・京都府の丹波地域や滋賀県、香川県、神奈川県・静岡県などへの臨地研修も実施した。大学院生については、授業以外にも個別の論文指導を行っており、そのほかにもプロジェクトにかかわる共同研究の中で実践的な専門技術の教育なども行うことができた。学部生向けには、基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。就職支援については、随時指導を行いつつ、大学院修了生が文化財行政などにかかわる正規職員などとして就職することができた。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、博士後期課程の在籍者は1年に1本程度の論文をまとめており、博士前期課程の在籍者でも1人1回程度の学会発表や論文発表などを行っているため、概ね成果を挙げることができた。また、2016・2017年度には冬に兵庫県宝塚市の万籟山古墳の測量調査や発掘調査などを行い、いずれも新たな調査成果を得た。成果の国際発信という点では、ハワイ大学において Archaeological Approaches to State and Society in Ancient Japan と題する研究集会を開催したことや、大阪大学所蔵品を中心にした『野中古墳と「倭の五王」』を英訳した上で再編集し、大阪大学出版会より“Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa : The Government and Military of 5th-Century Japan” (総105頁)として刊行したことなどが特筆される。この他にも、教員は科学研究費の助成を受けて、種々の研究を推進した。

3. 社会連携

兵庫県宝塚市の万籟山古墳の発掘調査において、兵庫県宝塚市教育委員会と連携しつつ、事業を推進した。また、その

発掘調査成果の情報は、例年通り HP を利用する形で速やかに一般に向けて発信するとともに、地元の宝塚市において発掘成果報告会を開催した。このほか、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。その一方で、国の重要文化財指定を受けた野中古墳出土品については、九州国立博物館における展示に出品したのをはじめとして、各機関あるいは研究者からの閲覧や写真提供にも積極的に応じている。また、地方自治体に対する学術協力も行っており、考古学研究室としては三木市史の編纂業務などにも携わっている。このほか、「(公財)生涯学習かめおか財団」ガレリアかめおか”による「つながる須恵器職人と私たち—三角窯の再現と千年前のおはなし—」などのプロジェクトにも協力している。

IV. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果をあげている。また、大学院修了生では、専門機関での採用において、正規職員を含む就職の実績を残している。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を得た。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆において数値目標を達成できた。とりわけ博士後期課程の学生が多かったこともあり、論文数や国際学会も含めた口頭発表などが例年以上に多い結果となった。また、フィールド調査の実施、既往発掘調査の出土遺物の整理なども、予定通りに行うことができた。とりわけ海外への研究成果の発信、海外との共同研究の促進など大きな成果を収めている。当該年度の目標は十二分に達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、とりわけ新たなフィールドとして発掘調査を始めた万籟山古墳については、地元教育委員会との連携をしながら地域へ還元する成果を上げることができた。その他も、九州国立博物館などと連携を取りながら、重要文化財指定後としては初めて九州でまとまった野中古墳出土品の展示を行うなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	3	2	5
計	3	2	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

上田直弥「埋葬施設構造からみた古墳時代葬制秩序と政治権力」2018/3

主査：福永伸哉、副査：高橋照彦、清家章（岡山大学）

ライアン・ジョセフ「鉄剣と古墳出現期社会」2018/3

主査：福永伸哉、副査：高橋照彦、市大樹
 盧 柔君「唐宋期越窯系青磁の研究」2018/3

主査：高橋照彦、副査：福永伸哉、藤岡穰

【論文博士】

岡林孝作「古墳時代棺槨の系譜と展開」2018/3

主査：福永伸哉、副査：高橋照彦、荒川正晴

禰亘田佳男「農耕社会の形成と近畿弥生社会」2018/3

主査：福永伸哉、副査：高橋照彦、村田路人、都出比呂志（大阪大学名誉教授）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	4(2)
2017	3(1)	0(0)	0(0)	0(0)	7(0)	10(1)
計	5(3)	0(0)	0(0)	0(0)	9(0)	14(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	3	2	4	2	0	11
2017	3	1	5	2	0	11
計	6	3	9	4	0	22

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

木村理「円筒埴輪からみた百舌鳥・古市古墳群における陪冢の性格」『古代学研究』第212号, pp.1-19, 2017/3/31

木村理「5世紀後半における大規模埴輪生産の実態-百舌鳥古墳群出土埴輪の観察を中心として-」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書』, pp.40-45, 2017/3/31

〔博士後期〕

ライアン・ジョセフ「長茎短剣の成立過程」『古代学研究』第212号, pp.21-40, 2017/3/31

ライアン・ジョセフ「定角式鉄鏃の成立過程の再検討」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書』, pp.3-8, 2017/3/31

【2017年度】

〔博士前期〕

内藤元太「百舌鳥古墳群と初期群集墳における埴輪生産」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』, pp.451-462, 2018/3/31

内藤元太「大和盆地南部における古墳時代後期の埴輪生産に関する予察」『4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流

プログラム成果報告書』, pp.23-28, 2018/3/1

[博士後期]

木村理「小古墳出土埴輪からみた古市古墳群の埴輪生産」『埴輪論叢』第7号, pp.37-51, 2017/6/18

木村理「盾塚・鞍塚・珠金塚古墳出土埴輪の検討とその歴史的評価」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』, pp.427-440, 2018/3/31

盧柔君「越窯系青磁碗の基礎的研究—器形・法量・文様と焼成法」『待兼山論叢』第51号史学篇, pp.81-108, 2017/12/25

盧柔君「機能からみた10世紀代越窯系青磁碗」『4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム成果報告書』, pp.76-83, 2018/3/1

盧柔君「越窯系青磁碗の型式学的再検討」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』, pp.753-765, 2018/3/31

上田直弥「竪穴式石室の地域性とその意義」『考古学研究』第64巻第2号, pp.61-81, 2017/9/30

上田直弥「石劔型式の変遷と生産の画期」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』, pp.385-398, 2018/3/31

ライアン ジョセフ「蕨手状装飾付鉄剣の広域分布とその意義」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』, pp.169-182, 2018/3/31

(2)口頭発表

【2016年度】

[博士前期]

木村理「古市古墳群における埴輪供給体制」, 古代学研究会11月例会, アネックスパル法円坂, 2016/11/19

木村理「5世紀後半における大規模埴輪生産の実態—百舌鳥古墳群出土埴輪の観察を中心として—」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2017/1/9

肥田翔子「古墳時代後期における環状轡の導入と展開」, 若き考古学徒 論壇デビュー 4th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2017/2/25

肥田翔子「西山1号窯の調査成果」, 「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会, 大阪大学, 2016/12/17

[博士後期]

上田直弥「古墳時代前期における埋葬施設の広域比較—近畿・東海・関東を中心として—」, 三河考古談話会西三河例会, 安祥公民館, 2016/10/20

Ryan Joseph (ライアン・ジョセフ) “External Influence and Internal Development in the Evolution of Iron Weapons within the Japanese Archipelago”, Society for East Asian Archaeology Seventh Worldwide Conference, ボストン大学, 2016/6/11

Ryan Joseph (ライアン・ジョセフ) 「State formation as seen through the weapons of Japan's giant mounded tombs」, Eighth World Archaeological Congress, 同志社大学, 2016/8/31

ライアン・ジョセフ「定角式鉄鎌の成立過程の再検討」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学部大会議室, 2017/1/8

ライアン・ジョセフ「長茎短剣の成立過程」, 古代学研究会1月例会, アネックスパル大阪, 2017/1/21

盧柔君 “A Typology of Chinese Ceramics and Consumption Patterns in 8-11th Century Japan”, SEAA (The Society for East Asian Archaeology) 7th Worldwide Conference, Harvard University/Boston University, 2016/6/12

[学部]

平井洸史「古墳時代中期の鉄鉾について」, 若き考古学徒 論壇デビュー 4th チャレンジ, 大阪府立弥生文化博物館, 2017/3/11

【2017年度】

〔博士前期〕

内藤元太「大和盆地南部における古墳時代後期の埴輪の系統」, 第6回中之庄上ノ山古墳研究会, 奈良市埋蔵文化財センター, 2017/12/23

内藤元太「大和盆地南部における古墳時代後期の埴輪生産に関する予察」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2018/1/7

〔博士後期〕

木村理「大和出土の蓋形埴輪の系統」, 第6回中之庄上ノ山古墳研究会, 奈良市埋蔵文化財センター, 2017/12/23

木村理「篠窯跡群・西山1号窯出土平瓦の検討」, 「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会, 大阪大学, 2018/2/23

盧柔君「臺灣金屬器時代的島外交易模式初探:以洪武蘭遺址下文化層出土陶瓷為例」, 2016年台灣考古工作會報, 國立台灣自然博物館, 2017/7/7

盧柔君「機能からみた10世紀代越窯系青磁碗」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学4大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学, 2018/1/8

Ueda Naoya (上田直弥) “The excavation of Yukinoyama Kofun: rituals and politics in 4th-century Japan”, *Archaeological Approaches to State and Society in Ancient Japan*, University of Hawaii at Manoa, 2018/2/16

上田直弥「摂津前期古墳における埋葬施設の特質」, 考古学研究会関西例会第211回研究会, 神戸市勤労会館, 2018/3/24

Ryan Joseph (ライアン・ジョセフ) “The excavation of Nonaka Kofun: the military and government of 5th-century Japan”, *Archaeological Approaches to State and Society in Ancient Japan*, University of Hawaii at Manoa, 2018/2/16

〔学部〕

飯塚信幸「日本古代の蒸し調理と甑形土器—6・7世紀の摂河泉地域を分析事例として—」, 若き考古学徒 論壇デビュー!, 大阪府立弥生文化博物館, 2018/2/24

西浦熙「生駒西麓の胎土を用いた土器の生産と流通—古墳出現前後の中河内地域を対象に—」, 若き考古学徒 論壇デビュー!, 大阪府立弥生文化博物館, 2018/2/24

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016年度】

〔博士前期〕

肥田翔子「考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム「土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—」参加記『考古学研究』第251号, pp.20-23, 2016/12/1

岩越陽平・肥田翔子「西山1-1号窯・1-2号窯の発掘調査 3 西山1-1号窯の発掘調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.36-49, 2016/1

盧柔君・木村理「出土遺物」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.63-74, 2017/1/20

内藤元太「遺跡の位置と環境」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.9-20, 2017/1/20

〔博士後期〕

高橋照彦・上田直弥編「篠窯跡群西山1号窯の考古学的調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.6-80, 2017/1/20

ジョセフ・ライアン「西山1-1号窯・1-2号窯の発掘調査 4 西山1-2号窯の発掘調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.50-60, 2017/1

盧柔君・木村理「出土遺物」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究 改訂増補版』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.63-74, 2017/1/20

【2017年度】

〔博士後期〕

上田直弥「"エチオピア連邦民主共和国 アクスムの記念物（原題:The monuments of Aksum. Dil Singh Basanti 著、翻訳）"」『考古学研究』第64巻第1号, pp.109-112, 2017/6/30

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2017年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

岩越 陽平 博士課程前期, 奈良県立橿原考古学研究所, 技師, 2016/4

内藤 元太 博士課程前期, 奈良県立橿原考古学研究所, 技師, 2017/4

肥田 翔子 博士課程前期, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 学芸員, 2017/4

上田 直弥 博士課程後期, 大阪大学大学院文学研究科, 助教, 2017/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2016年度: 0名 2017年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2016年度: 0名 2017年度: 0名

9. 刊行物

【2016年度】

Teruhiko Takahashi, Tatsuo Nakakubo, Joseph Ryan, Naoya Ueda (ed), "Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa : The Government and Military of 5th-Century Japan" Osaka University Humanities and Social Science Series, Osaka University Press.2016/8

大阪大学文学研究科『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究(改訂増補版)』高橋照彦編、2017/1/20

【2017年度】

大阪大学文学研究科考古学研究室編『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設 30 周年記念論集—』大阪大学考古学友の会、2018/3

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施、2017/1/8・9、2018/1/7・8
ロラン・ネスブルス先生講演会「これからの日欧墳丘墓比較考古学」、2016/8/24
トーマス・クノフ先生講演会“Burial Mound Landscapes- Meanings and Examples from Iron Age Germany”, 2016/9/1
禹在柄先生講演会「韓国における国家形成過程を物語る注目すべき発掘成果」2018/1/15

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2017/1/8・9
「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2018/1/7・8
「考古学・古代史合同研究会」第 26 回、2016/6/1
「考古学・古代史合同研究会」第 27 回、2017/1/11
「考古学・古代史合同研究会」第 28 回、2017/1/18
「考古学・古代史合同研究会」第 29 回、2017/6/14
「考古学・古代史合同研究会」第 30 回、2017/7/12
「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究集会（第 3 回）、2016/12/26・27
「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会（第 1 回）、2016/12/17
「日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究」研究会（第 2 回）、2018/2/23

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士（大阪大学、2005 年）。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005 年より現職。専攻：日本考古学

1-1. 論文

福永伸哉「古墳出土の内行花文鏡と方格規矩鏡」『待兼山考古学論集Ⅲ』大阪大学考古学研究室, pp. 199-212, 2018/3
福永伸哉「小熊山古墳・御塔山古墳をめぐって—3～5世紀代のヤマト政権と別府湾勢力—」『東西交流の窓 小熊山古墳・御塔山古墳—九州と瀬戸内海をつなぐ両古墳—』大分県杵築市教育委員会, pp. 17-26, 2017/11
福永伸哉「ヤマト政権成立期における猪名川流域の重要性」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 50, pp. 1-27, 2016/12
福永伸哉「畿内から見た城の山古墳」『城の山古墳発掘調査報告書』新潟県胎内市教育委員会, pp. 489-494, 2016/10
福永伸哉「大学における考古学教育」『考古学ジャーナル』690, ニューサイエンス社, pp. 6-8, 2016/10
福永伸哉「日欧墳丘墓比べ」『歴博』197, 国立歴史民俗博物館, pp. 7-10, 2016/7

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉「欧州の墳丘墓と日本の古墳」上野祥史(編)『世界の眼で見る古墳文化』国立歴史民俗博物館, pp. 111-113, 2018/3
福永伸哉(翻訳:Thomas Knopf, “Burial mounds in Europe”)「ヨーロッパの墳丘墓」上野祥史(編)『世界の眼で見る古墳文化』国

1-4. 口頭発表

- 福永伸哉 「弥生から古墳時代への社会変革」講演会「弥生・登呂」, 静岡市立登呂博物館, 静岡市立登呂博物館, 2018/3
- Fukunaga, Shinya, “Mounded tombs as a window into the early state formation of Japan”, Asian Studies Program Occasional Seminar Series, University of Hawaii at Manoa, University of Hawaii at Manoa, 2018/2
- 福永伸哉 「考古学による邪馬台国研究の現状」歴史部会日本史講演会, 大阪府高等学校社会科研究会, 英真学園高等学校, 2017/12
- 福永伸哉 「小熊山古墳・御塔山古墳をめぐって—3~5世紀代のヤマト政権と別府湾勢力—」小熊山古墳・御塔山古墳国史跡指定記念シンポジウム, 杵築市, 杵築市商工会館, 2017/11
- 福永伸哉 「近畿弥生社会における銅鐸の役割」兵庫県立考古博物館開館 10 周年記念シンポジウム:松帆銅鐸と淡路の青銅器をめぐって, 兵庫県立考古博物館, 子午線ホール, 2017/11『松帆銅鐸と淡路の青銅器をめぐって』pp. 13-19, 2017/11)
- 福永伸哉 「倭国形成過程を考える」古代を偲ぶ会設立 40 周年記念シンポジウム, 古代を偲ぶ会, エル・大阪, 2017/11
- 福永伸哉 「王陵の考古学の比較研究」考古学特別講演会, 忠南大学校百済研究所, 韓国・忠南大学校, 2017/11
- 福永伸哉 「ヤマト政権成立過程の猪名川流域」豊中歴史同好会例会, 豊中歴史同好会・蛍池公民館, 豊中市立蛍池公民館, 2017/11
- 福永伸哉 「卑弥呼への回賜の品々とその行方」桜井市纏向学研究センター東京フォーラムVI:親魏倭王卑弥呼に制詔す—卑弥呼の外交—, 奈良県桜井市, よみうりホール, 2017/10『親魏倭王卑弥呼に制詔す—卑弥呼の外交—』pp. 21-26, 2017/10)
- 福永伸哉 「長尾山丘陵の古墳群と邪馬台国からの風」万籟山古墳発掘調査成果報告講演会, 大阪大学考古学研究室・宝塚市教育委員会, 宝塚市立東公民館, 2017/10
- 福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群と世界の王陵」Handai-Asahi 中之島塾, 朝日カルチャーセンター・大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター, 2017/9
- Fukunaga, Shinya, “Bronze Mirrors as Status Symbols in the Process of Early State Japan”, Second Conference of the European Association for Asian Art and Archaeology, European Association for Asian Art and Archaeology, University of Zurich, 2017/8
- 福永伸哉 「古代日本の古墳築造と社会関係」日本西アジア考古学会設立 20 周年記念セッション:モニュメントと古代社会, 日本西アジア考古学会, 天理大学, 2017/7『日本西アジア考古学会第 22 回総会・大会要旨集』pp. 21-25, 2017/7)
- 福永伸哉 「継体政権とその勢力基盤」春季特別展講演会, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 大阪府立近つ飛鳥博物館, 2017/6
- 福永伸哉 「世界の墳丘墓と日本の古墳」第6回百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進シンポジウム, 百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議, りそなグループ大阪本社ビル地下講堂, 2017/5『第6回百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進シンポジウム』pp. 19-26, 2017/5)
- 福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群と河内政権」明治大学博物館友の会総会特別講演会, 明治大学博物館友の会・明治大学博物館, 明治大学駿河台キャンパス, 2017/5
- 福永伸哉 「邪馬台国からヤマト政権へ」アスニーセミナー, 京都市生涯学習総合センター, 京都市生涯学習総合センター, 2017/4
- 福永伸哉 「3世紀のヤマトと外交」ふたかみ邪馬台国シンポジウム, 二上山博物館, 二上山博物館, 2017/3
- 福永伸哉 「王陵考古学の比較研究」韓国忠南大学校特別講義, 忠南大学校考古学科, 忠南大学校, 2016/11
- 福永伸哉 「高地性集落と前期古墳」会下山遺跡会下山遺跡発掘 60 周年国史跡指定 5 周年記念シンポジウム, 芦屋市教育委員会, 芦屋市ルナ・ホール, 2016/8
- Fukunaga, Shinya, “Mounded Tombs of the Kofun period: Monuments of Administration and Expressions of Power Relationships”, 8th World Archaeological Congress, World Archaeological Congress, 同志社大学, 2016/8
- 福永伸哉 「古墳時代の大王陵と世界の王墓」世界考古学会議東京シンポジウム, NPO 法人 WAC Japan, 東京大学, 2016/7
- Fukunaga, Shinya, “The role of foreign prestige goods in the formation of the Yamato government”, 7th Worldwide Conference, Society for East Asian Archaeology, Harvard University and Boston University, 2016/6

福永伸哉 「ヤマト政権の推移と加賀・能登の古墳時代」春季特別展記念講演会, 石川県立歴史博物館, 石川県立歴史博物館,
2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 大阪大学総長顕彰(2015年度), 大阪大学, 2015/6

福永伸哉 第19回濱田青陵賞, 岸和田市、朝日新聞社, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2016年度、挑戦的萌芽研究、代表者:福永伸哉

課題番号:26560145

研究題目:超高精細表面性状分析による弥生・古墳時代青銅鏡の摩滅痕生成過程の解明

研究経費:2016年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

走査型電子顕微鏡(SEM)、原子間力顕微鏡(AFM)、接触式表面粗さ計測器などを用いた表面性状のかつてない超高精細分析と、実物試料の摩滅実験を組み合わせるといった独創的な方法により、日本の弥生・古墳時代の遺跡から出土する青銅鏡に見られる「摩滅痕」が生じた過程を復元的に解明し、それに基づいてヤマト政権成立に関わる大論争でありながら半世紀以上にわたって膠着状態となっている「伝世鏡論争」を根本的な解決に導くことを目的としている。考古学分野、金属材料分野の専門研究者からなる文理学際的共同研究。

1-6-2. 2015年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:福永伸哉

課題番号:15H01900

研究題目:日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開

研究経費:2016年度 直接経費 9,500,000円 間接経費 2,400,000円

2017年度 直接経費 8,100,000円 間接経費 2,430,000円

研究の目的:

日本発の「世界墳丘墓考古学」を世界考古学の主要テーマとして確立し、古墳時代研究の新たな地平を開拓するという構想の下に、①人類史における墳丘墓築造の多様な歴史的意義の解明、②世界初の墳丘墓三次元データベースを開発、③日本考古学の独創的方法である「首長古墳系譜分析」の良好なフィールド調査、④世界の墳丘墓遺跡を人類の文化遺産活用に供するための確かな理念と方策の探求・提言、の4点を柱として実施する国際共同研究。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

肝付町塚崎古墳群保存活用検討委員会・委員, 2017年3月～現在に至る

三木市史通史編専門委員会・委員, 2016年12月～現在に至る

安芸高田市史跡甲立古墳保存活用計画策定委員会・委員, 2016年12月～2018年3月

東近江市国史跡雪野山古墳群保存管理計画策定委員会・委員, 2016年12月～現在に至る

藤井寺市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～2018年3月

羽曳野市史跡古市古墳群整備検討委員会・委員, 2016年8月～2018年3月

東串良町唐仁古墳群保存活用検討委員会・委員, 2016年6月～現在に至る

南あわじ市松帆銅鐸調査研究委員会・委員, 2016年5月～現在に至る
国立歴史民俗博物館展示プロジェクト外委員会・委員, 2016年4月～現在に至る
文化庁埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査検討委員会・委員, 2015年4月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第1専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
文化庁文化審議会文化財分科会第3専門調査会・委員, 2015年3月～現在に至る
日本学術会議・会員, 2014年10月～現在に至る
高槻市史跡整備検討会・委員, 2014年4月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推薦書作成検討委員会・委員, 2014年1月～2018年3月
大垣市昼飯大塚古墳保存活用委員会・委員, 2013年10月～現在に至る
大阪大学接合科学研究所・共同研究員, 2013年7月～現在に至る
兵庫県立考古博物館運営委員会・委員, 2013年3月～現在に至る
桜井市纏向学研究センター・共同研究員, 2012年11月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議・委員, 2012年7月～現在に至る
国立歴史民俗博物館外部評価委員会・委員, 2012年7月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議・委員, 2012年7月～現在に至る
桜井市纏向遺跡調査委員会・委員, 2011年10月～現在に至る
公益財団法人大阪府文化財センター・委員, 2011年4月～2017年6月
公益財団法人大阪市博物館協会・理事, 2011年4月～現在に至る
豊中市文化財審議委員会・委員, 2010年4月～現在に至る
考古学研究会・常任委員, 2009年4月～現在に至る
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員, 2008年5月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員, 2007年12月～現在に至る
京丹後市網野銚子山古墳発掘調査委員会・委員, 2007年10月～2018年3月
川西市文化財審議委員会・委員, 2006年6月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員, 2006年6月～現在に至る
京丹後市史編纂委員会・委員, 2005年6月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人, 1980年4月～現在に至る

2. 高橋 照彦 教授

1966年生。1992年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）（京都大学、2014年）。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002年大阪大学大学院文学研究科助教授、2007年同准教授、2015年より現職。専攻：日本考古学、東アジア考古学。

2-1. 論文

高橋照彦, 中久保辰夫, 橋本達也, 三好裕太郎, 竹内裕貴「大阪府野中古墳出土品の再検討」『大阪大学大学院文学研究科紀要』58, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-100, 2018/3

高橋照彦「理化学的分析と考古学からみた日本の銭貨生産」『青銅器の考古学と自然科学』齋藤努編, 朝倉書店, pp. 119-150, 2018/3

高橋照彦「正倉院三彩小塔考—国分寺草創期の東大寺前身寺院—」『待兼山考古学論集Ⅲ—大阪大学考古学研究室開設30周年記念論集—』大阪大学考古学友の会, pp. 711-722, 2018/3

高橋照彦「土器・陶磁器とアジア交流」『日本古代交流史入門』鈴木靖民・金子修一・田中史生・李成市編, 勉誠出版, pp. 538-554, 2017/6

高橋照彦「記紀と考古学の接点からみた河内政権論」『検証！河内政権論 なぜ百舌鳥に大王陵は築かれたのか』堺市文化観

光局文化部文化財課, pp. 79-121, 2017/2

高橋照彦「日本古代鉛釉陶器研究の現状と課題」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究(改訂増補版)』大阪大学大学院文学研究科, pp. 155-178, 2017/1

高橋照彦「欽明陵の比定に関する補論—檜隈邑の復元を通して—」『塚口義信博士古稀記念日本古代学論叢』和泉書院, pp. 149-158, 2016/11

2-2. 著書

高橋照彦編『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究(改訂増補版)』大阪大学大学院文学研究科, 2017/1

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦「文字を使い始めた日本人一視」『別冊太陽 日本のこころ』246, 平凡社, p. 145, 2017/1

高橋照彦「討議(コメント)」『官衙・集落と土器』2, 国立文化財機構 奈良文化財研究所, pp. 271-272, 2016/12

2-4. 口頭発表

高橋照彦「古代末期における窯業生産の変容—丹波・篠窯の須恵器・瓦・緑釉陶器を中心に—」九州史学会大会, 九州史学会, 九州大学, 2017/12(『九州史学会大会シンポジウム・研究発表要旨』p. 54, 2017/12)

高橋照彦「考古学からみた飛鳥時代の大阪」翠曜塾講演会, 翠曜塾, 大阪歴史博物館, 2017/10

高橋照彦「古墳群の動向と『記・紀』后妃・皇子伝承—畿内と日向との関係—」世界遺産としての古墳を考える, 宮崎県教育委員会ほか, 高鍋町美術館多目的ホール, 2017/8

齋藤努, 今岡照喜, 高橋照彦「山口県を中心とした鉱山・遺跡資料の高精度鉛同位体比分析」日本文化財科学会第34回大会, 日本文化財科学会, 東北工科大学, 2017/6

高橋照彦「鑄銭司・陶の土器づくり—緑釉陶器と須恵器—古代テクノポリス 鑄銭司・陶—これまでとこれから—, 山口市教育委員会, 山口南総合センターホール, 2017/3(『古代テクノポリス 鑄銭司・陶—これまでとこれから—』pp. 29-38, 2017/3)

高橋照彦「古事記・日本書紀と天皇陵」大阪大学文学研究科・フランス国立東洋言語文化大学 国際共同シンポジウム モノと文献で わかる古代・わからない古代, 国際交流基金パリ日本文化会館ホール, 2016/12(『モノと文献で わかる古代・わからない古代 要旨集』pp. 16-17, 2016/12)

高橋照彦「日本の古墳と被葬者」日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開, 大阪大学文学研究科, 2016/12

高橋照彦「正倉院の三彩陶器をめぐる諸問題」帝塚山大学考古学研究所・附属博物館共催 第372回市民講座, 帝塚山大学(奈良・東生駒キャンパス), 2016/10

高橋照彦「八尾市における氏族構成と寺院・神社・古墳」八尾市史考古部会, 八尾市立埋蔵文化財調査センター, 2016/9

高橋照彦「古墳群の動向と『記・紀』后妃・皇子伝承—畿内と日向との関係—」2016年度大阪大谷大学・宮崎県連携講座 畿内王権と日向 Part II, あべのハルカス(25階会議室), 2016/9

高橋照彦「ベトナムの陶磁器と瓦磚の生産をめぐる」研究集会:交趾郡治・ルイロウ遺跡の探求, 京都大学, 2016/7

高橋照彦「平安時代須恵器の研究現状」考古学研究会関西例会 200回記念シンポジウム, 考古学研究会関西例会, 大阪歴史博物館, 2016/5

中久保辰夫, 高橋照彦「平安京近郊における古代から中世への窯業生産の変質—京都府篠窯業生産遺跡群西山1号窯を手がかりに—」日本考古学協会第82回(2016年度)総会, 日本考古学協会, 東京学芸大学小金井キャンパス, 2016/5(『一般社団法人日本考古学協会第82回総会発表要旨』pp. 60-61, 2016/5)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋照彦

課題番号:16K03155

研究題目:日本古代～中世における瓦陶兼業窯の多面的比較研究

研究経費:2016年度 直接経費 1,500,000円 間接経費 450,000円

2017年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

本研究は、瓦や須恵器といった個別の手工業生産部門を統合した研究を目指し、瓦陶兼業窯という側面を通して、古代から中世への動態を多角的に明らかにすることを目的とする。とりわけ、注目の乏しい撰関期前後を重点的に解明することや、考古学にとどまらず、自然科学的手法を取り入れつつ、文献史学も含めた研究整理を進めることを目指している。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪府立近つ飛鳥博物館等指定管理者評価委員会・委員, 2017年4月～現在に至る

豊中市今西氏屋敷史跡整備委員会・史跡整備委員会委員, 2016年4月～現在に至る

猪名川町多田銀銅山遺跡保存活用委員会・保存活用委員会委員, 2016年4月～現在に至る

東洋陶磁学会・常任委員, 2009年5月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2005年11月～現在に至る

3. 中久保 辰夫 助教

1983年3月12日生。2011年3月大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(2011年、大阪大学)。2009年4月～2011年3月:日本学術振興会特別研究員。2011年4月より現職(2018年3月退職)。専攻:日本考古学。

3-1. 論文

高橋照彦, 中久保辰夫, 橋本達也他(共編著)「野中古墳出土品の再検討」『文学研究科紀要』(なし), 58, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-99, 2018/3

中久保辰夫「土師器直口壺と古墳時代土器の特質」『待兼山考古学論集』(大阪大学考古学研究室), 3, 大阪大学考古学研究室, pp. 315-326, 2018/3

中久保辰夫「物部氏の権力基盤—近年における布留遺跡の研究結果—」『ここまで判った物部氏 考古学の調査研究成果から』(なし), 天理市観光協会, pp. 67-79, 2018/3

高田貫太, 中久保辰夫(共著)「古墳からみた須恵器の変容 朝鮮半島」『季刊考古学』(なし), 142, 雄山閣, pp. 43-48, 2018/1

中久保辰夫, 岩越陽平(共著)「須恵器の焼成と色調分析—大阪府豊中市桜井谷2-2号窯を事例として—」『4～5世紀 日韓土器生産技術と新資料』(韓式系土器研究会・土窯研), 土窯研, pp. 64-73, 2017/11

中久保辰夫「初期須恵器の地域色と技術移動に関するノート」『考古学フォーラム』(考古学フォーラム), 23, 考古学フォーラム, pp. 64-79, 2017/11

中久保辰夫「日本古代窯業生産に関する現状の課題」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究(改訂増補版)』(大阪大学大学院文学研究科考古学研究室), pp. 131-154, 2017/1

中久保辰夫「古墳時代後半期における土器研究の現状」『考古学研究会関西例会200回記念シンポジウム『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』発表要旨集』(考古学研究会関西例会), 考古学研究会関西例会, pp. 1-40, 2016/5

3-2. 著書

中久保辰夫 『日本古代国家の形成過程と対外交流』大阪大学出版会, 334p., 2017/3

中久保辰夫 『大阪大学埋蔵文化財調査室年報4』大阪大学埋蔵文化財調査委員会, 48p., 2017/3

中久保辰夫(編) 『第 17 回播磨考古学研究集会の記録 播磨の埴輪』第 17 回播磨考古学研究集会実行委員会, 294p., 2017/1
Teruhiko Takahashi, Nakakubo, Tatsuo, Joseph Ryan 他(共編著), *Nonaka Kofun and the Age of the Five Kings of Wa: The Government and Military of 5th-Century Japan*, Osaka University Press, 105p., 2016/8

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中久保辰夫 「書評 土田純子著『東アジアと百済土器』」『考古学研究』(考古学研究会), 64-2, 考古学研究会, pp. 102-104, 2017/9

中久保辰夫 「資料集成 美囊郡」「資料集成 明石郡」『武器からみた古墳時代の播磨』(第 18 回播磨考古学研究集会実行委員会), 第 18 回播磨考古学研究集会実行委員会, 2017/2

中久保辰夫 「「邪馬台国時代の摂津市域—3世紀の土器が語る地域社会—」「古墳時代の摂津市域—継体大王とその勢力基盤—」摂津市史編さん委員会『ふるさとを知ろう 摂津市の歴史』摂津市史編さん委員会, pp. 4-7, 2016/12

Nakakubo, Tatsuo, “Trends in Archaeology in Japan: Kofun period”, , *Japanese Journal of Archaeology*, (Japanese Archaeological Association), 4-1, Japanese Archaeological Association, pp. 99-100, 2016/9

中久保辰夫 「古墳時代研究の動向」『日本考古学年報』(日本考古学協会), 67, 日本考古学協会, pp. 39-46, 2016/5

3-4. 口頭発表

中久保辰夫 「物部氏の権力基盤—近年における布留遺跡の研究成果—」天理市観光協会設立 60 周年記念「大和の中のヤマト」シンポジウム ここまで判った物部氏 , 天理市観光協会, 東京国立博物館, 2018/3(『ここまで判った物部氏 考古学の調査研究成果から』pp. 67-79, 2018/3)

中久保辰夫 「“事業承継”を考古学研究者と考える」大阪大学×りそな銀行 対話サロン第1回 , 大阪大学 URA・りそな銀行, 大阪大学中之島センター, 2018/3

中久保辰夫 「日本古代土器編年研究の現在と考古学が扱う時間幅」第 13 回人間文化研究情報資源共有化研究会, 人間文化研究情報資源共有化研究会, 京都大学 稲盛財団記念館, 2018/2

中久保辰夫 「久留美、神出、魚住窯跡群と 東播磨部の須恵器生産」第 19 回播磨考古学研究集会, 第 19 回播磨考古学研究集会実行委員会, 姫路市教育会館, 2018/2

Nakakubo, Tatsuo, “Methods and approaches in Japanese archaeology excavating mounded tombs and reconstructing ancient history”, ANTHROPOLOGY OCCASIONAL SEMINAR

SPRING 2018 Archaeological Approaches to State and Society in Ancient Japan, ハワイ大学人類学科, ハワイ大学マノア校, 2018/2

中久保辰夫 「旅にでるなら、古墳に行こう ～歩いて・見て・食べての古墳巡り指南～」奈良学ナイトレッスン 平成 29 年度第 9 夜, 奈良県・東海旅客鉄道株式会社, 奈良まほろば館, 2017/12

中久保辰夫 「万籟山古墳の発掘調査成果」万籟山古墳発掘調査成果報告講演会 , 大阪大学考古学研究室・宝塚市教育委員会, 宝塚市立東公民館, 2017/11(『万籟山古墳発掘調査成果報告講演会資料』p. 1, 2017/10)

中久保辰夫 「須恵器の焼成と色調分析—大阪府豊中市桜井谷2-2号窯を事例として—」2017 年 韓式土器研究会-土窯會 共同研究會, 韓式土器研究会・土窯研 , 釜慶大学校博物館, 2017/11(『4~5 世紀 日韓土器生産技術と新資料』pp. 64-73, 2017/11)

中久保辰夫 「出土した焼き物から探る、待兼山二千年の文化」待兼山サイエンスカフェ, 大阪大学 21 世紀懷徳堂, 大阪大学 21 世紀懷徳堂スタジオ, 2017/10

中久保辰夫 「播磨国風土記と考古資料が織り成す歴史的景観の復元」フランス国立東洋言語文化大学・大阪大学 国際共同シ

ンポジウム モノと文献でわかる古代・わからない古代, フランス国立東洋言語文化大学・大阪大学, フランス国立東洋言語文化大学 イベントホール, 2016/12『モノと文献でわかる古代・わからない古代』pp. 10-11, 2016/12)

中久保辰夫 「考古学的方法論に基づく古墳時代土器編年とその課題」地球電磁気・地球惑星圏学会 第 140 回総会, 地球電磁気・地球惑星圏学会, 九州大学伊都キャンパス, 2016/11

Nakakubo, Tatsuo, “Political changes between center and periphery as seen from the mounded tombs of Japan”, WAC-8 Kyoto, The World Archaeological Congress, 同志社大学, 2016/8(*The Eighth World Archaeological Congress*, p. 148, 2016/8)

中久保辰夫 「初期須恵器にみる土師器の意匠」第 141 回韓式系土器研究会, 韓式系土器研究会, 堺市立泉北すえむら資料館 講座室, 2016/7

中久保辰夫 「西摂・猪名川流域の古墳築造動向と集落動態」第4回東播西摂研究会, 東播西摂研究会, 神戸大学, 2016/7

中久保辰夫 「コメント」考古学フォーラム定例会 2016「開窯期の東山窯とその周辺」, 考古学フォーラム, 名古屋市教育館 第 8 研修室, 2016/6

Nakakubo, Tatsuo, “Social change and the introduction of continental craft technology”, Seventh Worldwide Conference of the SEAA, Society for East Asian Archaeology, Boston University, 2016/6

中久保辰夫 「古墳時代後半期における土器研究の現状」考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム, 考古学研究会関西例会, 大阪歴史博物館講堂, 2016/5『考古学研究会関西例会 200 回記念シンポジウム『土器編年研究の現在と各時代の特質—須恵器生産の成立から終焉まで—』発表要旨集』pp. 1-40, 2016/5)

中久保辰夫 「平安京近郊における 古代から中世への窯業生産の変質—京都府篠窯業生産遺跡群西山 1 号窯を手がかりに—」日本考古学協会第 82 回(2016 年度)総会, 日本考古学協会, 東京学芸大学小金井キャンパス, 2016/5『日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨』pp. 60-61, 2016/5)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016 年度～2019 年度、若手研究(B)、代表者: 中久保辰夫

課題番号: 16K16940

研究題目: 通時的・地域横断的視座に基づく古墳時代土器の時代的特質の解明

研究経費: 2016 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2017 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は、考古学研究上の基礎史料である土器を対象に、これまで統合的な整理が不十分であった古墳時代(西暦3世紀半ば～7世紀)の土器について、時期、地域、器質を越えて再検討を行い、その時代的な特質を解明することを目的とするものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

三木市史編さん委員会・考古部会・部会員, 2017 年 4 月～現在に至る

摂津市史編さん委員会・執筆委員, 2014 年 2 月～現在に至る

考古学研究会・常任委員, 2009 年 4 月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2(兼任 1) 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：堤 研二(兼任)、佐藤 廉也

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
30	3	2	0	0	0	0	0

*うち留学生 1名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	6	0	0	0
2017	6	3	0	0
計	12	3	0	0

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までには実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目標とした。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RAなどの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の学会発表等をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこなうだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。また、地域調査のスキルについては実地での経験を重視する教育をおこなった。

2. 研究

教員は、科学研究費での助成研究を続けつつ、研究を継続して実施し、国際学会・国際研究集会での発表をおこない、国内外での地域調査を実施した。また、院生は国内外の学会等において多くの口頭発表を実現した。教員による外部資金による獲得研究費の有効活用のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も積極的におこなっている。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスを実施するとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

教室ならびに個人の HP でその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員など学外の職務にも積極的に応じた。さらに日本地理学会・人文地理学会の理事・代議員また各種委員などをつとめ、学外の職務にも積極的に応じている。社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践が可能であった。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成された。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2017	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	4	0	0	0	5
2017	1	6	0	0	0	7
計	2	10	0	0	0	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

小林基「伝統作物の全国ブランド化—兵庫県篠山市における丹波黒を事例に—」『人文地理』第68巻第4号, pp.397-419,
2016/12/28

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

安藤竜介「第3セクター鉄道における無人駅の活用」, 日本地理学会秋季学術大会, 東北大学川内キャンパス, 2016/9/30-10/1

安藤竜介「自治体が整備する液状化ハザードマップの現状と課題」, 日本地理学会春季学術大会, 筑波大学筑波キャンパス, 2017/3/29

〔博士後期〕

佐々木敏光「森林組合の合併動向と課題—和歌山県日高川町と有田川町を事例として—」, 日本地理学会春季学術大会, 筑波大学筑波キャンパス, 2017/3/28

小林基「品種の開発・普及からみた国内イチゴ産地の盛衰」, 日本地理学会春季学術大会, 筑波大学筑波キャンパス, 2017/3/28

【2017年度】

〔博士前期〕

安藤竜介(宇根寛・中埜貴元・田中海晴・米川直志と共同)「液状化ハザードマップの現状と課題」, JpGU-AGU Joint Meeting 2017, 東京ベイ幕張ホール, 2017/5/21

安藤竜介「阪神・淡路大震災によって被災した商店街における商店主の意思決定」, 日本地理学会秋季学術大会, 三重大学, 2017/9/29

潘瑞雪「大学生の生活行動の特性に関する考察—重慶大学城を事例として—」, 日本地理学会春季学術大会, 東京学芸大学, 2018/3/23

傅鼎「中国の縁辺地域における人口移動に関する研究—河西回廊の山丹軍馬場を事例に—」, 日本地理学会春季学術大会, 東京学芸大学, 2018/3/22

舟木睦「離島における住民の食料品アクセス—隠岐の島町を事例に—」, 日本地理学会春季学術大会, 東京学芸大学, 2018/3/22

〔博士後期〕

小林基「兵庫県篠山市における丹波黒の商品化と生産・供給システムの展開」, 兵庫地理学協会夏期研究大会, 神戸大学篠山フィールドステーション, 2017/8/5

Hajime KOBAYASHI“Prosperity and decline of strawberry production districts: a special focus on variety development and diffusion”, the 12th Korea-China-Japan Joint Conference on Geography and the 3rd Asian Conference on Geography, Jeju National University, 2017/8/25

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

2017年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2016年度：1名 2017年度：1名

<内訳> 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2016年度：0名 2017年度：0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 堤 研二 教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学 教育・研究功績賞（2006）、大阪大学 総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学。

1-1. 論文

堤研二「中等教育の地理科目における授業設計について ―主権者教育を題材として―」『教育学年報』23, 大阪大学大学院人間科学研究科, pp. 215-222, 2018/3

堤研二「地理関係科目における主権者教育の新地平 ―とくに中学校社会科地理的分野を中心に―」『待兼山論叢(日本学篇)』51, 大阪大学文学研究科, pp. 21-38, 2017/12

Tsutsumi, Kenji, "Population Outflow and Regional Attributes of Peripheral Regions in Japan: Two Cases of Mountain Village and Ex-coalmining Region," *Open Japan, Closed Japan: Towards Interdisciplinary Studies in Human Mobility (Proceedings on the International Symposium on Japanese Studies in Global Context)*, (Graduate School of Letters, Osaka University), pp. 71-79, 2017/12

堤研二 「新刊短評:加藤久和著『8000 万人社会の衝撃:地方消滅から日本消滅へ』、2016 年、祥伝社『人口学研究』(日本人口学会), 53, pp. 98-99, 2017/9

Tsutsumi, Kenji, “Social Capital” Richardson, D. (Editor-in chief, *The Association of American Geographers*) (eds.) “*The International Encyclopedia of Geography: People, the Earth, Environment, and Technology*,” (The Association of American Geographers), 12, Wiley, pp. 6190-6196, 2017/3

堤研二 「考古学と人文地理学の間:科学性の検討」田中良之先生追悼論文集編集委員会(編)『考古学は科学か:田中良之先生追悼論文集』(田中良之先生追悼論文集編集委員会), 上, 中国書店, pp. 35-49, 2016/5

堤研二 「考古学と地理学・空間分析:『考古学方法論研究会』とその時代」田中良之『縄文文化構造変動論 I :もう一人の田中良之』(『縄文文化構造変動論 I :もう一人の田中良之』刊行委員会), 上, すいれん舎, pp. 439-445, 2016/5

堤研二 「人口のメガシュリンクと街づくり:過疎地域の実態から学ぶこと」富士通総研経済研究所『ER(富士通総研経済研究所 経済・経営・技術読本)』(富士通総研経済研究所), 2, 富士通総研経済研究所, pp. 38-39, 2016/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, “About Osaka University and Toyonaka City JSCs”, 日本スポーツ少年団・日独同時交流事業, 豊能地区スポーツ少年団連絡協議会, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2017/8

Tsutsumi, Kenji, “Grunddaseinsfunktionen and Social Capital in Peripheral Island Area: Sustainability of Regional Life in Oki Island”, The 14th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group (MARG), Scenic Hotel Tonga, 2017/6

Tsutsumi, Kenji, “A Struggle for Establishment of University Coop at Shimane University, 1992-1999: An Experience of Conflicts and Contradictions through a Students’ and Teachers’ Movement”, The 8th East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), The Organising Committee for The 8th East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), Hong Kong Baptist University, 2016/12

堤研二 「人口の減少と地域・社会:過疎地域の例から人口減少社会のことを考えてみよう(主権者教育の視点による)」中学校・社会科における主権者教育事業, さいたま市立桜木中学校, さいたま市立桜木中学校, 2016/12

堤研二 「大阪のスポーツ少年団」立命館プロムナードセミナー, 立命館大学・大阪大学, 立命館大阪キャンパス, 2016/11

Tsutsumi, Kenji, “Nagasaki: A Hodgepodge City of Cultures”, Crossroads of Cultures and Firms: From the Age of Discovery to the Age of Globalization, MARG(Marginal Areas Research Group), Nova University of Lisbon, Nova University of Lisbon, 2016/9

Tsutsumi, Kenji, “Coal Miners and Social Capital around Them: Cases of Miike and Takashima”, The 13th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside: Transforming Mining Cities, MARG(Marginal Areas Research Group), Hotel Scandic Ferrum, Kiruna, Sweden, 2016/6

堤研二 「ソーシャル・キャピタルと地域の持続可能性」島根県出雲市議会研修会, 島根県出雲市議会, 島根県出雲市議会, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理学会賞, 地域地理学会, 1997/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:堤研二

課題番号:26244051

研究題目:中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費:2016年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

2017年度 直接経費 4,600,000円 間接経費 1,380,000円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル (FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1)林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2)森林環境保全のための管理モデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2014年10月～現在に至る

大阪府スポーツ少年団本部・本部委員, 2014年4月～現在に至る

豊中市スポーツ振興協議会・委員, 2014年4月～現在に至る

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012年4月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012年4月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010年4月～現在に至る

2. 佐藤 廉也 教授

1967年東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程(地理学専修)中退。博士(文学)(京都大学、1999年)。京都大学総合博物館助手、九州大学大学院比較社会文化研究院助教授(准教授)を経て、2015年4月より現職。専攻:人文地理学

2-1. 論文

Makoto Ehara, Kimihiko Hyakumura, Sato, Renya et al., “Addressing Maladaptive Coping Strategies of Local Communities to Changes in Ecosystem Service Provisions Using the DPSIR Framework.” *Ecological Economics*, 149, pp. 226–238, 2018/3

Sato, Renya, “Sedentarization of nomadic shifting cultivators: The Majangir of lowland Ethiopia.” *Senri Ethnological Studies*, 95, pp. 191–229, 2017/11

Sato, Renya et al., “Aerial photographs of mainland China acquired by U-2 spy planes: Their characteristics and potential uses.” *Teledetekcja Środowiska*, 54, pp. 61–74, 2017/12

佐藤廉也 「焼畑・狩猟採集活動と環境利用」『世界地誌シリーズ8 アフリカ』朝倉書店, pp. 63–70, 2017/9

佐藤廉也 「高校地理教科書における焼畑記述一誤解の拡散とその背景一」『待兼山論叢日本学編』(大阪大学文学研究科), 50, 大阪大学文学研究科, pp. 1–20, 2016/12

2-2. 著書

佐藤廉也, 宮澤仁(共編著)『現代人文地理学』放送大学教育振興会, 252p., 2018/3

佐藤廉也, 池谷和信『狩猟採集民からみた地球環境史(分担執筆:「狩猟採集と焼畑の生態学」)』東京大学出版会, pp. 98-111, 2017/3

佐藤廉也, 田中良之先生追悼論文集編集委員会『考古学は科学か(上)(分担執筆:「人類学における科学と反科学」)』中国書店, pp. 21-34, 2016/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

佐藤廉也「書評 白戸圭一著(2017)『ボコ・ハラム イスラーム国を超えた「史上最悪」のテロ組織』』『地理』63-3, 古今書院, pp. 97-97, 2018/3

佐藤廉也「書評 ヘレン・ピアソン著(大田直子訳)(2017)『ライフ・プロジェクト 七万人の一生からわかったこと』』『地理』63-2, 古今書院, pp. 99-99, 2018/2

佐藤廉也「書評 スティーブン・ピンカー著(幾島幸子・塩原通緒訳)(2015)『暴力の人類史(上・下)』』『地理』63-1, 古今書院, pp. 114-114, 2018/1

佐藤廉也「書評 内田道雄著(2016)『燃える森に生きる インドネシア・スマトラ島 紙と油に消える熱帯林』』『地理』62-12, 古今書院, pp. 114-114, 2017/12

佐藤廉也「書評 矢原徹一著(2017)『決断科学のすすめ 持続可能な未来に向けて、どうすれば社会を変えられるか?』』『地理』62-11, 古今書院, pp. 109-109, 2017/11

佐藤廉也「書評 川原靖弘・関本義秀編著(2016)『生活における地理空間情報の活用』』『地理』62-10, 古今書院, pp. 106-106, 2017/10

佐藤廉也「書評 四方籌著(2013)『焼畑の潜在力 アフリカ熱帯雨林の農業生態誌』』『地理』62-9, 古今書院, pp. 114-114, 2017/9

佐藤廉也「書評 ジョージ・A・アカロフ&ロバート・J・シラー著(山形浩生訳)(2017)『不道徳な見えざる手 自由市場は人間の弱みにつけ込む』』『地理』62-8, 古今書院, pp. 114-114, 2017/8

佐藤廉也「書評 宮澤仁編著(2017)『地図でみる日本の健康・医療・福祉』』『地理』62-7, 古今書院, pp. 101-101, 2017/7

佐藤廉也「書評 大西拓一郎編(2016)『新日本言語地図 分布図で見渡す方言の世界』』『地理』62-6, 古今書院, pp. 89-89, 2017/6

佐藤廉也「書評 マッシモ・リヴィーバッチ著(速水融・斎藤修訳)(2014)『人口の世界史』』『地理』62-5, 古今書院, pp. 84-84, 2017/5

佐藤廉也「書評 リチャード・セイラー著(遠藤真美訳)(2016)『行動経済学の逆襲』』『地理』62-4, 古今書院, pp. 110-110, 2017/4

佐藤廉也「書評 ロビン・ダンバー(鍛原多恵子訳)(2016)『人類進化の謎を解き明かす』』『地理』62-3, 古今書院, pp. 116-116, 2017/3

佐藤廉也「書評 大石高典(2016)『民族境界の歴史生態学 ―カメルーンに生きる農耕民と狩猟採集民―』』『地理』62-2, 古今書院, pp. 112-112, 2017/2

佐藤廉也「書評 ポール・シーブライト(山形浩生・森本正史訳)(2014)『殺人ザルはいかにして経済に目覚めたか? ―ヒトの進化からみた経済学―』』『地理』62-1, 古今書院, pp. 115-115, 2017/1

佐藤廉也「書評 水野一晴(2016)『気候変動で読む地球史 ―限界地帯の自然と植生から―』』『地理』61-12, 古今書院, pp. 110-110, 2016/12

佐藤廉也「書評 藤岡悠一郎(2016)『サバンナ農地林の生態誌 ―ナミビア農村にみる社会変容と資源利用』』『地理』61-11, 古今書院, pp. 110-110, 2016/11

佐藤廉也「書評 エレツ・エイデン、ジャン＝バティスト・ミシェル(阪本芳久訳)(2016)『カルチャロミクス ―文化をビッグデータで

- 計測する』『地理』61-10, 古今書院, pp. 116-116, 2016/10
- 佐藤廉也「書評 石川博樹・小松かおり・藤本武編(2016)『食と農のアフリカ史 現代の基層に迫る』』『地理』61-9, 古今書院, pp. 90-90, 2016/9
- 佐藤廉也「書評 アレックス・メスーディ著(野中香方子訳)(2016)『文化進化論 ダーウィン進化論は文化を説明できるか』』『地理』61-8, 古今書院, pp. 83-83, 2016/8
- 佐藤廉也「書評 HGIS 研究協議会編(2012)『歴史 GIS の地平 景観・環境・地域構造の復原に向けて』』『地理』61-7, 古今書院, pp. 112-112, 2016/7
- 佐藤廉也「書評 エドワード・O・ウィルソン著(斉藤隆央訳)(2013)『人類はどこから来て、どこへ行くのか』』『地理』61-6, 古今書院, pp. 119-119, 2016/6
- 佐藤廉也「書評 水野一晴編(2016)『アンデス自然学』』『地理』61-5, 古今書院, pp. 111-111, 2016/5
- 佐藤廉也「書評 おすすめの3冊』』『地理』61-4, 古今書院, pp. 112-113, 2016/4

2-4. 口頭発表

- 佐藤廉也「小規模社会における知識の獲得プロセスと性・年齢差 —「マジヤンの森」における野生植物利用知識調査—」日本地理学会 2017 年秋季学術大会, 日本地理学会, 三重大学, 2017/9
- 佐藤廉也「ラオス中部・アランノイにおける食生活・食料獲得活動と出生力」日本人口学会 2017 年学術大会, 日本人口学会, 東北大学, 2017/6
- 佐藤廉也「森の樹木に関する知識の継承と個人差 —エチオピア南西部・マジヤンギルにおける利用知識調査—」日本アフリカ学会 2017 年学術大会, 日本アフリカ学会, 信州大学, 2017/5
- 佐藤廉也, 蔣宏偉, 西本太他「ラオス中部・アランノイの食生活と出生力 —食事調査データの分析を中心に—」2017 年日本地理学会春季学術大会, 日本地理学会, 筑波大学, 2017/3
- Sato, Renya, 王廷卓, "Deforestation, Protection, Local Use and Governmental Policies on Mangrove in Hainan Island.", IGU Conference, International Geographical Union, China National Convention Center, 2016/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 佐藤廉也 日本ナイル・エチオピア学会高島賞, 日本ナイル・エチオピア学会, 2000/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(B) 海外、代表者:佐藤廉也

課題番号:A15H051310

研究題目:中国・黄土高原における 1940 年代以降の土地被覆・土地利用・地形改変の復原研究

研究経費:2016 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

2017 年度 直接経費 3,000,000 円 間接経費 900,000 円

研究の目的:

中国・黄土高原は、20世紀以降、森林伐採・農地開発・放牧、さらには21世紀以降の造林プロジェクトによって大規模な土地改変を受けてきたことが知られているが、これらのプロセスの定量的な復原は、中国における過去の地理情報(地形図、空中写真、統計情報)の活用が大きく制限されるなかで、不明なままであった。本研究は、黄土高原の村落調査によって土地改変の歴史と要因を具体的に明らかにするとともに、近年公開されたアメリカ合衆国の公文書館が所蔵する 1940 年代～60 年代の高解像度空中写真を用いて微地形レベルの地形復原、土地被覆・土地利用復原をおこない、これに 80 年代以降の衛星データ解析をあわせ、1940 年代から現在までの環境改変の歴史を定量的に明らかにしようとするものである。

2-6-2. 2015 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:佐藤廉也

課題番号:T15K030130

研究題目:未利用の地理資料を用いたエチオピア南部の森林・サバンナ動態の検証

研究経費:2016年度 直接経費 1,410,459円 間接経費 420,000円

2017年度 直接経費 1,750,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

本研究は、アメリカ議会図書館および国立公文書館に所蔵される未利用の旧版地形図および空中写真を用いて、大規模な森林減少・サバンナ化が指摘されてきたエチオピア南部における1940年代から現在までの土地被覆・土地利用変化を復原し、具体的な検証が乏しいまま環境劣化が強調されてきたアフリカの環境問題に地理学・環境史の分野からの貢献をしようとするものである。本研究では、上記の地理資料を用いて土地被覆・土地利用変化をGISで定量的に分析するとともに、エチオピア南部の広域の現地調査と文献調査をあわせておこなうことによって、民族集団の生業動態・文化規範や国家政策との関連で変化のメカニズムを説明することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本地理学会・編集委員, 2018年3月～現在に至る

人文地理学会・集会委員, 2017年10月～現在に至る

人文地理学会・理事, 2016年4月～現在に至る

日本ナイル・エチオピア学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

日本ナイル・エチオピア学会・編集幹事, 2015年4月～現在に至る

2-12 日本文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 2 講師 1

教授：飯倉 洋一、加藤 洋介
准教授：斎藤 理生、勢田 道生
講師：山本 嘉孝

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65	14	19	0	3	1	0	0

*うち留学生 23名、社会人学生 2名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	18	13	1	5
2017	25	7	0	0
計	43	20	1	5

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指

導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修了生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本を読む会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年 1 回解題を付して展示公開し、またウェブ上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懐徳堂記念会による「懐徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

【2016 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 18 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 21 本を数えるという状況にある。

【2017 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 8 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 21 本を数えるという状況にある。

2. 研究

【2016 年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「終戦直後の新聞小説の研究—織田作之助を中心に」（2014～）、「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」（2015～）、「文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—」（2015～）、「定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性に関する文献学的研究」（2016～）、「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」（2016～）、「室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容の研究」（2016～）、等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同

研究ネットワーク構築計画」のうち「拠点連携研究」を行った。また、大阪大学大学院文学研究科による「日本語の歴史的典籍の国際共同ネットワーク構築クラスター」(2014～)を行った。

2017年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』106・107輯(2017年2月)を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』59号(2016年4月)・60号(2016年10月)、『阪大近代文学研究』14・15号(2017年3月)を刊行した。

【2017年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—」(2015～)、「定家本源氏物語と古今集・後撰集との関連性に関する文献学的研究」(2016～)、「近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—」(2016～)、「室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容の研究」(2016～)、「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」(2017～)、「1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究」(2017～)等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のうち「拠点連携研究」を行った。

2018年1月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』108輯(2017年6月)、109輯(2017年12月)を刊行した。また詳細は10の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』61号(2017年4月)・62号(2017年10月)、『阪大近代文学研究』16号(2018年3月)を刊行した。

3. 社会連携

【2016年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。懐徳堂古典講座「明治・大正期の恋愛小説を読む」(4～12月：斎藤)、大阪大学21世紀懐徳堂i-spot講座「江戸時代の文字、くずし字を読んでみよう！」(8月：山本)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

【2017年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。Handai - Asahi 中之島塾「織田作之助の〈坂田三吉〉」(6月：斎藤)、大阪大学21世紀懐徳堂i-spot講座「楠木正成はどのようにイメージされてきたか」(9月：勢田)、国立国会図書館関西館「司書と研究者のための日本関係資料研修 特別講義」(2月：飯倉)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても充分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	5	0	5
2017	0	0	0
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

瓦井 裕子「平安和歌表現と『源氏物語』摂取の研究」(2017.3)

主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一・勢田道生

宮川 真弥「北村季吟の古典学に関する基礎的研究」(2017.3)

主査：加藤洋介 副査：飯倉洋一・勢田道生

仲 沙織「西鶴中期浮世草子の研究—『懐硯』『新可笑記』を中心に—」(2017.3)

主査：飯倉洋一 副査：加藤洋介・山本嘉孝

有澤 知世「江戸戯作の研究—山東京伝の諸活動を中心に—」(2017.3)

主査：飯倉洋一 副査：加藤洋介・山本嘉孝

松田 正貴「詩的原理としての言語内翻訳—高橋新吉論—」(2017.3)

主査：出原隆俊 副査：岡島昭浩・斎藤理生

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	6(6)	1(1)	8(8)	1(1)	2(2)	18(18)
2017	1(1)	1(1)	4(3)	0(0)	2(1)	8(6)
計	7(7)	2(2)	12(11)	1(1)	4(3)	26(24)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	2	2	15	2	0	21
2017	1	7	12	1	0	21
計	3	9	27	3	0	42

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

岡部祐佳「『万の文復古』「二膳居る旅の面影」試論」『上方文藝研究』第13号, pp.106-117, 2016/6

守本もえ「川端康成『散りぬるを』における〈視線〉—初出テキストを視座として—『阪大近代文学研究』第14・15号, pp.52-65, 2017/3

白崎真亜子「稲垣足穂『一千一秒物語』の本文の変遷『阪大近代文学研究』, pp.30-45, 2017/3

〔博士後期〕

瓦井裕子「祓子内親王家歌合と『源氏物語』摂取——源師房の関与をめぐって——」『日本文学』第65巻第9号, pp.1-10, 2016/9

瓦井裕子「九月十三夜詠の誕生——端緒としての『源氏物語』摂取——」『國語國文』第85巻第7号, pp.17-33, 2016/7

瓦井裕子「大中臣家重代歌人の表現踏襲——家集を用いた歌の学習と詠歌——」『詞林』第59巻, pp.20-32, 2016/4

宮川真弥「天理図書館蔵『源氏物語打聞』の再検討—北村季吟とその後裔の古典学をめぐって—」『近世文藝』第104号, pp.71-86, 2016/7

宮川真弥「北村季吟の源氏学(三)—附・日本大学図書館蔵『源氏物語微意 下』翻刻—」『詞林』第60号, pp.19-81, 2016/10

寺田伝「冷泉家時雨亭文庫所蔵の零本『古今和歌集』考」『国語国文』第85巻第8号, pp.19-33, 2016/8

寺田伝「冷泉家時雨亭文庫所蔵零本『古今和歌集』の新出断簡」『汲古』第70号, pp.6-9, 2016/12

仲沙織「偽物の「郭巨」物語—『新可笑記』巻五の三「取やりなしに天下徳政」考—」『上方文藝研究』第13号, pp.94-105, 2016/6

仲沙織「『新可笑記』における〈眼〉の機能」『待兼山論叢』第50号, pp.49-71, 2016/12

福田涼「三島由紀夫「源氏供養」論」『日本研究論集』第14号, pp.70-91, 2016/10

福田涼「三島由紀夫「蘭陵王」論」『阪大近代文学研究』第14・15号, pp.81-95, 2017/3

有澤知世「京伝合巻と図会もの—京伝の挿絵利用方法についての一考察—」『日本文学』第65巻第6号, pp.24-35, 2016/6

有澤知世「戯作者という〈ブランド〉—式亭三馬の広告文を例に—」『上方文藝研究』第13号, pp.118-128, 2016/6

有澤知世「京伝作品における異国意匠の取材源—京伝の交遊に注目して—」『近世文藝』第104号, pp.101-115, 2016/7

李慧珏(LIHUIJUE)「雑誌『文芸時代』に見られる芥川龍之介」『日本研究論集』第十四号, pp.92-112, 2016/10/1

【2017年度】

〔博士後期〕

アブラル・バスィル「永井荷風『ひかげの花』論—〈小説〉と〈手紙〉を中心に—」『語文』第109号, pp.27-40, 2017/12

岡部祐佳「『万の文反古』「代筆は浮世の闇」考」『上方文藝研究』第14号, pp.41-51, 2017/6

小田桐ジェイク「太宰治『津軽』における『思ひ出』の引用とその効果」『日本研究論集』第16号, pp.63-83, 2017/10

小田桐ジェイク「Reading Dazai in Translation: A Paratextual Point of View of Tsugaru」『大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター報告書』第1号, pp.136-147, 2018/3

北島紬「元永二年七月忠通歌合追判の判者と文体」『詞林』第62号, pp.1-12, 2017/10

平井華恵「坪内逍遙『牧の方』の渡邊省亭口絵—明治中期の文芸書における作意と画家—」『語文』第108輯, pp.51-63, 2017/6

福田涼「三島由紀夫『愛の疾走』の「方法」—「世界」という語に着目して—」『待兼山論叢(文学篇)』第51号, pp.19-38, 2017/12

李慧珏(LIHUIJUE)「『文芸時代』における芥川龍之介の受容—「新感覚派」の直面する問題点と合わせて—」『阪神近代文学研究』第18号, pp.30-45, 2017/5

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

ティモシー・ジェイコブ「太宰治『思ひ出』——登場人物を中心に」, 新大阪ロータリー・クラブ、第1475回例会, 新大阪ワシントンホテルプラザ, 2016/10/12

ティモシー・ジェイコブ「太宰治『思ひ出』——パラテキストから読解へ」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 大阪大

学, 2017/3/13

ティモシー・ジェイコブ「「これまでの/これからの『思ひ出』」, 新大阪ロータリー・クラブ、第 1493 回例会, 新大阪
ワシントンホテルプラザ, 2017/3/15

岡部祐佳「『往来物』、『書簡文例集』と『文学』—ジャンル越境的研究への挑戦」, 高麗大学校日語日文学科・大阪大学
大学院文学研究科共同ワークショップ, 大阪大学, 2017/1/19

金智慧「明治期以来の散切物受容の諸相」, 高麗大学校日語日文学科・大阪大学大学院文学研究科共同ワークショップ, 大
阪大学, 2017/1/19

森岡綾子「『源氏物語』服喪考—朝顔の姫君を中心に—」, 第 277 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学,
2016/11/19

前田恵里「玉鬘裳着における光源氏の誤算—儀式での「過差」を手がかりに—」, 第 278 回大阪大学古代中世文学研究会,
大阪大学, 2016/12/8

〔博士後期〕

瓦井裕子「『為信集』の表現——『源氏物語』との関わり——」, 第 280 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学,
2017/2/26

瓦井裕子「風に吹かれる竹——『源氏物語』と同時代和歌——」, 韓国日本学会 第 94 回国際学術大会, 高麗大学,
2017/2/18

瓦井裕子“The reception of “The Tale of Genji” regarding laments for empress consort Kenshi”, 第二回 EAJS
日本会議, 神戸大学, 2016/9/25

瓦井裕子「『源中納言懐旧百首』と源国信の『源氏物語』摂取」, 第 277 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学,
2016/11/19

瓦井裕子「藤原妍子周辺の和歌にみえる『源氏物語』摂取」, 第 2 回大阪大学古代中世文学研究会夏季セミナー, エクシ
プ有馬離宮, 2016/8/31

宮川真弥「北岡文庫蔵北村季吟筆『源氏物語』と『湖月抄』」, 第 280 回 大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学,
2017/2/26

寺田伝「御家切に書き入れられた勘物の性格—前田家本との関係をめぐって—」, 第 276 回大阪大学古代中世文学研究会,
大阪大学, 2016/6/25

寺田伝「真田本『古今和歌集』上巻の本文について」, 第 281 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2017/3/25

福田涼「三島由紀夫『源氏供養』とその周辺」, 第 7 回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大
阪大学, 2016/7/16

福田涼「三島由紀夫『潮騒』論—隠蔽される奥行と語り手—」, 近代文学研究会, 伏見いきいき市民活動センター,
2016/9/24

福田涼「三島由紀夫『潮騒』論—初江に着目して—」, 2016 年度日本近代文学会関西支部秋季大会, 武庫川女子大学,
2016/10/29

福田涼「この「世界」の片隅に—三島由紀夫『愛の疾走』の方法—」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 大阪大学,
2017/3/13

李慧珏(LIHUIJUE)「雑誌『文芸時代』に見られる芥川龍之介」, 第 7 回チュラーロンコーン大学・大阪大学日本文学国際
研究交流集会, 大阪大学, 2016/7/16

李慧珏(LIHUIJUE)「『文芸時代』に見られる芥川龍之介—新感覚派の直面する問題点と合わせて—」, 第 52 回 阪神近代
文学会 2016 年度冬季大会, 武庫川女子大学・文学 2 号館 2 階・23 教室, 2016/12/10

【2017 年度】

〔博士前期〕

金智慧「散切物からみる幕末期世話物の面影——河竹黙阿弥作「富士額男女繁山」を中心に——」, 演劇研究会五月例会,
同志社大学, 2017/5/27

- 後藤京「『御法』巻における「法華經千部供養」—法華八講説の再検討—」, 第 283 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2017/5/20
- 後藤京「『源氏物語』における儀礼と儀式—「事削ぐ」に着目して—」, 大阪大学古代中世文学研究会 3 月例会, 大阪大学, 2018/3/31
- ハジッチ・アムラ「島崎藤村の童話集『ふるさと』に於ける「父さん」について」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 名古屋大学, 2018/3/6
- 羽原綾香「漱石作品における〈子供〉をめぐる言説について—「こゝろ」を中心に—」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 名古屋大学, 2018/3/6
- 福田亮「安部公房『幽霊はここにいる』—「箱山」の無意味な移動」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 名古屋大学, 2018/3/6 [博士後期]
- アブラル・バシル「永井荷風『花瓶』論—「花瓶」の象徴性をめぐって—」, 日本近代文学会関西支部秋季大会, 近畿大学大阪キャンパス, 2017/11/11
- 岡部祐佳「『万の文反古』巻二の一「縁付まへの娘自慢」考—「今程世間に見せかけのはやる事はなし」をめぐる—」, 日本近世文学会平成二十九年度春季大会, 東京女子大学, 2017/6/10
- 小田桐ジェイク「『津軽』における『思ひ出』——太宰治の旧作の引用」, 第 8 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2017/6/10
- 小田桐ジェイク「Reading Dazai in Translation: A Paratextual Point of View」, Osaka University Japanese Studies Workshop 2017, 大阪大学, 2017/7/22
- 小田桐ジェイク「変貌する太宰治『津軽』——パラテキストから読解へ」, 第 54 回阪神近代文学会 2017 年度冬季大会, 神戸海星女子学院大学, 2017/12/2
- 小田桐ジェイク「今年を振り返って——書誌学とパラテキストと文学研究」, 新大阪ロータリー・クラブ, 第 1543 回例会, 新大阪ワシントンテラプラザ, 2017/12/20
- 北島紘「歌合判者の判定態度について」, 第 284 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2017/6/17
- 北島紘「歌合判詞における「あらまほし」考」, 第 124 回和歌文学会関西例会, 奈良女子大学, 2017/7/1
- 北島紘「歌合における判者の先行歌利用—藤原顕季判の諸例—」, 第 287 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2017/11/25
- 北島紘「院政期歌合における判者歌の利用」, 平成 30 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2018/1/6
- 服部峰大「『あとがき』から見る戦後宮沢賢治受容」, 名古屋大学・大阪大学合同研究会, 名古屋大学, 2018/3/6
- 福田涼「三島由紀夫『祈りの日記』論—「日記」という型式に着目して—」, 昭和文学会第 61 回研究集会, 専修大学, 2017/12/9
- 間中真紀子「『大和物語』の古筆切—伝慈円筆六半切の書入部分を中心として—」, 第 283 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2017/5/20
- 李慧珏 (LIHUIJUE)「『文芸戦線』における芥川龍之介の受容」, 国際芥川龍之介学会第 12 回国際大会, 青島海洋大学, 2017/9/17
- 李慧珏 (LIHUIJUE)「『辻馬車』に見られる芥川龍之介—藤沢桓夫「ミンナの恋」を出発点として—」, 平成 30 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2017/1/6

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016 年度】

[博士前期]

岡部祐佳「紹介・福田安典著『医学書のなかの「文学」江戸の医学と文学が作り上げた世界』『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107, pp.181-182, 2017/2

[博士後期]

北島紘「紹介・加藤洋介編『伊勢物語校異集成』『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107, pp.177-177, 2017/2

寺田伝「紹介・島津忠夫・大村敦子編著『甲子庵文庫蔵紹巴富士見道記 影印・翻刻・研究』『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107, pp.180-180, 2017/2

【2017年度】

[博士前期]

後藤京「紹介・中山一麿編『神と仏に祈る山—美作の古刹 木山寺社史料のひらく世界—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 108, pp.109-110, 2017/6

後藤京「紹介・中井賢一著『物語展開と人物造形の論理—源氏物語〈二層〉構造論—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 109, pp.76-77, 2017/12

[博士後期]

小田切ジェイク「紹介・伊井春樹著『小林一三は宝塚少女歌劇にどのような夢を託したのか』『語文』(大阪大学国語国文学会), 109, pp.78-79, 2017/12

北島紬「紹介・後藤昭雄著『平安朝漢詩文の文体と語彙』『語文』(大阪大学国語国文学会), 109, pp.74-75, 2017/12

寺田伝「紹介・越野優子著『国冬本源氏物語論』『語文』(大阪大学国語国文学会), 108, pp.107-108, 2017/6

福田涼「紹介・伊井春樹著『小林一三の知的冒険 宝塚歌劇を生み出した男』『語文』(大阪大学国語国文学会), 108, pp.111-112, 2017/12

間中真紀子「紹介・島津忠夫著『源氏物語』放談 どのようにして書かれていったのか』『語文』(大阪大学国語国文学会), 109, p.73, 2017/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 3名 DC1: 0名 (計3名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名) RPD: 1名

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

勢田 道生 博士後期課程, 大阪大学, 講師, 2016/1

箕浦 尚美 博士後期課程, 同朋大学, 講師, 2016/4

丹下 暖子 博士後期課程, 甲子園大学, 講師, 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2016年度: 2名 2017年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2016年度：1名 2017年度：0名

9. 刊行物

2016年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第106・107輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第59号・第60号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)第13号
『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第14・15号

2017年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第108輯・第109輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第61号・第62号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)第14号
『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会)第16号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2016年度】

[国内学会の開催]

中古文学会秋季大会 2016年10月22・23日
大阪大学国語国文学会総会 2017年1月7日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2016年度：第275回	5月7日	第276回	6月25日	第277回	11月19日
第278回	12月18日	第279回	1月21日	第280回	2月26日
第281回	3月25日				

上方読本を読む会

2016年度：4月9日 6月11日 8月27日 10月15日 12月10日 3月4日

近代文学研究会

2016年度：12月3日

共同研究会「新聞のなかの文学」 2016年8月5日
第2回日本漢文学総合討論「“漢文学”は東アジアにおいてどう語られてきたか？」 2016年9月10日
名古屋大学・大阪大学合同研究会 2017年3月13日

【2017年度】

[国内学会の開催]

大阪大学国語国文学会総会 2017年1月7日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2017年度：第282回	4月23日	第283回	5月20日	第284回	6月17日
第285回	7月29日	第286回	9月30日	第287回	11月25日
第288回	3月31日				

上方読本を読む会

2017年度：6月3日 10月7日 11月11日 2月24日

第8回大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会 2017年6月10日
共同研究会「方法論の再検討—1930-40年代の日本文学研究」 2017年9月15日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況 229

* (国語学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1月1日間)

研究誌「語文」の編集・発行 2016年度1回 2017年度2回

* (国語学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10月4日間)

大学院研究発表会 (2016年度 7月・11月 各2日間、2017年度 7月2日間 11月3日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 飯倉 洋一 教授

1956年生。1985年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学)(九州大学、1998年)。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職。専攻：日本近世文学

1-1. 論文

飯倉洋一 「十八世紀の文学」『近世文学史研究』2, ペリかん社, pp. 3-5, 2017/6

飯倉洋一 「前期読本における和歌・物語談義」『近世文学史研究』2, ペリかん社, pp. 86-99, 2017/6

飯倉洋一 「ごぞんじですか? 第103回くずし字学習支援アプリKuLAについて」『専門図書館』(専門図書館協議会), 281, 専門図書館協議会, pp. 41-44, 2017/1

飯倉洋一 「国際シンポジウム「読みたい! 日本の古典籍」報告」『和本リテラシーニュース』(日本近世文学会), 2, 日本近世文学会, pp. 14-15, 2016/7

飯倉洋一 「木越治氏へ—「菊花の約」の尼子経久は論ずるに足らぬ人物か」『リポート笠間』60, 笠間書院, pp. 9-12, 2016/5

1-2. 著書

飯倉洋一 『江戸怪談文芸名作選第2巻 前期読本怪談集(校訂代表)』国書刊行会, 390p., 2017/7

飯倉洋一(監修) 『近世文学史研究 二 十八世紀の文学』ペリかん社, 150p., 2017/6

飯倉洋一, 大谷俊太, 加藤弓枝他 『小沢蘆庵自筆 六帖詠藻 本文と研究』和泉書院, 777p., pp. 142-213, 2017/2

飯倉洋一 『アプリで学ぶくずし字 くずし字学習支援アプリ KuLA の使い方』笠間書院, 92p., 2017/2

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

飯倉洋一 「日本文学研究における原本画像データベースの活用とくずし字学習支援アプリ」DIGITAL HUMANITIES AND DATABASES, 上智大学比較文化研究所, 上智大学, 2018/3

飯倉洋一 「クラウドソーシング翻刻のための基盤形成: 日本古典籍の場合」Europeana の翻刻プロジェクトと日本の翻刻プロジェクト, デジタルアーカイブ学会・人文情報学研究所, 東京大学情報学環本館, 2018/2

飯倉洋一 「画賛のあり方」絵入本ワークショップ, 絵入本学会, 実践女子大学渋谷キャンパス, 2017/12

飯倉洋一 「くずし字学習支援アプリの可能性」シンポジウム「変体仮名のこれまでとこれから」, 国立国語研究所, 国立国語研究所・講堂, 2017/11

飯倉洋一 「国際的くずし字教育の現状と展望」投企する古典性—視覚/大衆/現代—研究会, 国際日本文化研究センター, 慶応義塾大学, 2016/12

飯倉洋一 「寺子屋教育と双六遊び」ラインネッカー友の会講演会, ラインネッカーの会, ハイデルベルク大学, 2016/7

飯倉洋一 『土佐日記』的世界への侵入者—『春雨物語』『海賊』の方法—前近代日本文学研究集会シンポジウム「日本文学に

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一, 大谷俊太, 加藤弓枝他 第6回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞, 雄松堂書店, 2010/10

飯倉洋一 柿衛賞(第3回), 財団法人柿衛文庫, 1993/6

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2016年度、挑戦的萌芽研究、代表者:飯倉洋一

課題番号:15K12850

研究題目:日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発

研究経費:2016年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 390,000円

研究の目的:

前近代日本の典籍および歴史資料は、現在急速に画像データベースとしてWEB公開が進みつつあるが、特に国文学研究資料館が平成26年度から開始した「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」においては、今後10年間に、30万点の歴史的典籍の画像が公開される予定である。日本文学以外の異分野領域の研究者や、海外の日本研究者も、簡単に前近代の資料にアクセスできるようになりつつある一方で、それを活用するためのノウハウについては整備されていない。本研究は、日本文学以外の領域の研究者や海外の日本研究者が、これらの画像データベースを利用するための支援システムとして、くずし字解読をはじめとする歴史的典籍取り扱いのための学習支援プログラムを開発・試作し、それを用いたワークショップ開催を目的とする。

1-6-2. 2017年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯倉洋一

課題番号:17H02310

研究題目:近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉

研究経費:2017年度 直接経費 2,600,000円 間接経費 780,000円

研究の目的:

近世中後期の上方文壇における文芸は、ある〈場〉に人々が集まり、共に学び、時に戯れることで、豊かな稔りとなって結実した。それらは現代の「共同研究」「共同制作」のあり方と、共通する部分もあり、異なる部分もある。その人的交流の〈場〉や共有する知的基盤の具体的なありようを明らかにすることで、現代における人文学の再構築へのヒントを得られよう。とりわけ上方は伝統的な書物文化と学芸の〈場〉を有するとともに、志学の人々が往来し、新たな文芸を生み出してきた地域であった。本研究では、特に漢詩文や和歌和文という雅文芸を中心に、その文芸の生成を、人々の繋がりと〈場〉に注目して、総合的に考察し、近世中後期の文学史・思想史に新たな視角を提供することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

国文学研究資料館情報事業センター学術資料事業部地域資料専門部会・委員, 2017年5月～2018年3月

人間文化研究機構国文学研究資料館運営会議・委員, 2017年4月～現在に至る

独立行政法人日本学術振興会科学研究費委員会・科学研究費委員会基盤研究等第1段専門委員, 2016年12月～現在に至る

放送大学学園・客員教員, 2014年4月～現在に至る

一般財団法人懐徳堂記念会・理事, 2014年4月～現在に至る

国文学研究資料館古典籍データベース研究事業センター拠点連携委員会・委員, 2013年4月～現在に至る

一般財団法人柿衛文庫・理事, 2012年3月～現在に至る

園田学園女子大学近松研究所・評議員, 2009年4月～現在に至る

財団法人関西・大阪21世紀協会上方文化芸能運営委員会・運営委員, 2007年4月～現在に至る
日本近世文学会・常任委員, 2002年6月～現在に至る
日本近世文学会・委員, 2000年6月～現在に至る
人間文化研究機構国文学研究資料館・文献資料調査員, 1993年4月～現在に至る

2. 加藤 洋介 教授

1962年生。1989年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授、大阪大学准教授を経て、2010年10月より現職。専攻：日本平安文学

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

加藤洋介「源氏物語古写本のヴァリエーション」モノと文献でわかる古代・わからない古代, 大阪大学文学研究科・フランス国立東洋言語文化大学(INALCO)国際共同シンポジウム, フランス国立東洋言語文化大学, 2016/12

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号:16H03387

研究題目:定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性に関する文献学的研究

研究経費:2016年度 直接経費 2,700,000円 間接経費 810,000円

2017年度 直接経費 2,000,000円 間接経費 600,000円

研究の目的:

本研究の目的は、定家本源氏物語と古今集・後撰集との相関性について横断的に検証し、新たな定家本源氏物語および古今集・後撰集の本文形成史を構築しようとするものである。また源氏物語および古今集・後撰集の本文異同を確認する校本として、池田亀鑑『源氏物語大成 校異篇』(1953～56年)、西下経一・滝沢貞夫『古今集校本』(1977年)、小松茂美『後撰和歌集 校本と研究 校本編』(1961年)があるが、今日の研究環境からは信頼度に問題があると言わざるをえない。そこで二つ目の目的として、源氏物語および古今集・後撰集の本文研究のための基盤を整備・確立し、学界や社会にその成果を還元することを掲げる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・常任委員、編集委員, 2011年5月～現在に至る

和歌文学会・委員, 2007年4月～現在に至る

3. 齋藤 理生 准教授

1975年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学、2004年)。群馬大学教育学部講師、同准教授を経て、2014年4月より現職。専攻：日本近現代文学

3-1. 論文

- 齋藤理生 「《研究ノート》「けし粒小説」とその時代—敗戦直後の「朝日新聞」大阪版および名古屋版の創作欄」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 16, pp. 59-63, 2018/3
- 齋藤理生 「《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(二)「一流の鑑賞」」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 16, pp. 53-58, 2018/3
- 齋藤理生 「初等・中等教育の国語科授業に活用し得る日本近代文学作品の読解の観点—定番教材を中心に」『大阪大学教育学年報』23, 大阪大学大学院人間科学研究科教育学系, pp. 195-204, 2018/3
- 齋藤理生 「太宰治『惜別』論—魯迅と〈留学〉」『開く日本・閉じる日本—「人間移動学」事始め』大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-26, 2017/12
- 齋藤理生 「織田作之助『清楚』論—「大阪新聞」を手がかりに—」『日本研究論集』16, チュラローンコーン大学・大阪大学, pp. 24-39, 2017/10
- 齋藤理生 「「二十世紀旗手」評釈(五)」『太宰治研究』25, 和泉書院, pp. 216-235, 2017/6
- 齋藤理生 「【資料紹介】太宰治アンケート回答二篇 「貴方は狙はれて居る」と「誌上忘年会」」『太宰治研究』25, 和泉書院, pp. 185-188, 2017/6
- 齋藤理生 「「火焰木」のなかの「雀こ」：附・「火焰木」目次」『太宰治スタディーズ(別冊)』(太宰治スタディーズの会), 3, pp. 20-25, 2017/6
- 齋藤理生 「太宰治の小説の〈笑い〉—『トカントン』を中心に」『キリスト教文学研究』(日本キリスト教文学会), 34, pp. 17-27, 2017/5
- 齋藤理生 「方法としての坂田三吉—織田作之助の作品と将棋—」『日本近代文学』(日本近代文学会), 96, pp. 62-77, 2017/5
- 齋藤理生 「《資料紹介》織田作之助全集未収録作品紹介(一)「近頃大阪色」「禍なる哉長髪」」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会), 14・15, pp. 96-102, 2017/3
- 齋藤理生 「織田作之助『土曜夫人』論—「読売新聞」を手がかりに」『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107, pp. 156-169, 2017/2
- 齋藤理生 「ふるまいとしての大阪—織田作之助の小説作法」『やそしま』(関西・大阪21世紀協会 上方文化芸能運営委員会), 10, pp. 16-35, 2016/12
- 齋藤理生 「「二十世紀旗手」評釈(四)」『太宰治研究』24, 和泉書院, pp. 206-229, 2016/6
- 齋藤理生 「【資料紹介】《カルト・ブランシユ》のアンケート」『太宰治研究』24, 和泉書院, pp. 193-197, 2016/6
- 齋藤理生 「太宰治『粹人』論—物語・顔・反復」『太宰治スタディーズ』(太宰治スタディーズの会), 6, pp. 94-105, 2016/6

3-2. 著書

松本和也, 八木君人, 齋藤理生他 『テキスト分析入門 小説を分析的に読むための実践ガイド』ひつじ書房, pp. 198-209, 2016/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

齋藤理生 「戦時下大阪の新聞小説—織田作之助『清楚』の方法」第 8 回日本文学国際研究交流集会, 大阪大学・チュラロンコン大学, 大阪大学, 2017/6

齋藤理生 「方法としての坂田三吉—織田作之助の作品と将棋」日本近代文学会 6 月例会, 日本近代文学会, 昭和女子大学, 2016/6

齋藤理生 「太宰治の小説の〈笑い〉—『トカトントン』を中心に」2016 年度(第 45 回)日本キリスト教文学会全国大会, 日本キリスト教文学会, 京都外国語大学, 2016/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 24 年度), 群馬大学, 2013/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 22 年度), 群馬大学, 2011/5

齋藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞(平成 19 年度), 群馬大学, 2008/5

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者:齋藤理生

課題番号:26770078

研究題目:終戦直後の新聞小説の研究—織田作之助を中心に—

研究経費:2016 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2017 年度 直接経費 0 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究では、終戦直後の新聞小説を、創作欄以外の紙面との関わりを視野に入れて分析する。分析を通じて、この時期の新聞小説の特徴と、その社会的役割を明らかにすることが目的である。主な対象とするのは、1945 年 9 月から 1946 年 12 月にかけて、地方紙に 3 篇、全国紙に 1 篇の小説を連載した、織田作之助の作品である。織田作品の分析を軸に、太宰治・石坂洋次郎・吉川英治らが同時期に書いた新聞小説との比較を行う。このような研究は、近代小説とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座を得ることにもつながるはずである。

3-6-2. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:齋藤理生

課題番号:17K02450

研究題目:1940 年代の新聞における文芸欄の基礎的研究

研究経費:2017 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究では 1940 年代の新聞における文芸欄の実態を調査・分析する。研究の主な目的は、戦中戦後の新聞における文学者の創作・随想・論説などが、混乱期の日本の何をどのように表現していたのか、それらの特徴と社会的役割を明らかにすることである。その際、中央の大手新聞社が東京で発行したものだけでなく、その地方版や地方紙、夕刊紙、専門紙、機関紙など、多様な種類の新聞を取り扱い、多角的にアプローチする。このような研究は、個別の新聞・作家・作品の理解を深め、埋もれていた資料を発掘し、近代の文芸・文化とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座をもたらすはずである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

昭和文学会・幹事, 2016 年 5 月～現在に至る

日本近代文学会関西支部・運営委員, 2015 年 3 月～現在に至る

4. 勢田 道生 准教授

1980年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士（文学）（大阪大学、2011年）。大阪大学大学院文学研究科助教、日本学術振興会特別研究員(PD)、大阪大学大学院文学研究科特任講師（常勤）を経て、2017年10月より現職。専攻：日本中近世文学

4-1. 論文

勢田道生「神祇伯白川家学頭臼井雅胤の古今集序注一祐徳博物館中川文庫蔵『古今和歌集序註』をめぐって一」『語文』(大阪大学国語国文学会), 109, pp. 14-26, 2017/12

勢田道生「賀茂清茂の書物収集一香川大学図書館神原文庫蔵『諸記録所持之方覚』をめぐって一」『上方文藝研究』(上方文藝研究の会), 14, pp. 1-14, 2017/6

勢田道生「南朝史受容と神皇正統記」『藝林』(藝林会), 65-1, 藝林会, pp. 55-77, 2016/4

4-2. 著書

井上泰至, 倉員正江, 勢田道生他『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版, pp. 257-280, 2016/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

勢田道生(新刊紹介)「紹介 荒木浩著『徒然草への途—中世びとの心とことば』」『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107, 大阪大学国語国文学会, pp. 178-179, 2017/2

糸賀茂男, 所功, 勢田道生 他(共著)(相互討論)「主題『神皇正統記』をめぐる諸問題 相互討論」『藝林』(藝林会), 65-1, 藝林会, pp. 156-178, 2016/4

4-4. 口頭発表

勢田道生「高橋凶南の有職故実研究」科研基盤研究(B)「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会, 科研基盤研究(B)「近世中後期上方文壇における人的交流と文芸生成の〈場〉」公開研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/3

勢田道生「文学研究と歴史・有職—尾張藩有職家神村正鄰の紹介を兼ねて—」平成30年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1

勢田道生「茨城県立歴史館蔵『往復書案』紙背『大日本史』草稿について—寛文～延宝期における『大日本史』本文の実態—」第九回皇學館大學人文學會大会, 皇學館大學人文學會, 皇學館大学, 2016/7

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

勢田道生 第十回日本近世文学会賞, 日本近世文学会, 2014/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2016年度～2019年度、若手研究(B)、代表者:勢田道生

課題番号:16K16773

研究題目:近世中期の有職家・神道家をめぐる学芸ネットワークの研究—神村正鄰を中心に—

研究経費:2016年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2017年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

神村正鄰を中心的対象として、有職家・神道家の学芸の特徴とその社会的意義を明らかにする。これにより、従来の国学中心主義的近代学芸史を相対化し、近代和学の総体を把握する手がかりとする。また、神村正鄰旧蔵書を手がかりとして、有職家・神道家をめぐる人的・文献的ネットワークの実態を明らかにする。これにより、有職家・神道家をめぐる学問的影響関係のみならず、近

世における知的資源の流通構造や、知的資源の媒介者としての近世有職家の役割を明らかにする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 山本 嘉孝 講師

1985年、兵庫県生まれ。2008年、米国ハーバード大学学士号（Literature専攻）。2012年、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化分野修士号。2012～2015年、日本学術振興会特別研究員（DC1）。2016年、東京大学大学院（同上）博士課程単位取得退学。専攻：日本漢文学／日本近世文学

5-1. 論文

山本嘉孝「室鳩巢の中秋詩 — 盛唐詩の受容と儒臣像の形成」『日本漢文学研究』13, 二松學舎大学, pp. 81-104, 2018/3

山本嘉孝「『撰津名所図会』の漢詩」『2017年度 大手前大学特別教育研究費 研究成果報告書 日本の言語文化の国際的発信方法の開発—名所図会所載の和歌・俳諧の外国語翻訳を通して』大手前大学, pp. 16-25, 2018/2

Yamamoto, Yoshitaka, “Classical Chinese Poetry in the Illustrated Gazetteer of Settsu”『2017年度 大手前大学特別教育研究費 研究成果報告書 日本の言語文化の国際的発信方法の開発—名所図会所載の和歌・俳諧の外国語翻訳を通して』大手前大学, pp. 26-38, 2018/2

山本嘉孝「榎田北岸の「瓶話」 — 袁宏道受容における挿花と禅」『雅俗』16, 雅俗の会, pp. 2-17, 2017/7

山本嘉孝「室鳩巢の辺塞詩 — 盛唐詩の模倣と忠臣像の造形」『語文』108, 大阪大学国語国文学会, pp. 37-50, 2017/6

山本嘉孝「和歌英訳と詩形 — Imperial Songs (1904)における翻訳者の責務」『2016年度大手前大学特別教育研究費研究成果報告書』大手前大学, pp. 21-29, 2017/2

Yamamoto, Yoshitaka, “Prosody as Medium: The Translator’s Task in Imperial Songs (1904)”『2016年度大手前大学特別教育研究費研究成果報告書』大手前大学, pp. 30-38, 2017/2

山本嘉孝「唐宋古文の幕末・明治 — 林鶴梁の作文論を中心に」『幕末・明治 — 移行期の思想と文化』勉誠出版, pp. 371-390, 2016/6

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山本嘉孝(コラム)「上方文藝への招待(六) — 第二回漢文学総合討論「“漢文学”は東アジアにおいてどう語られてきたか」報告」『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 上方文藝研究会, pp. 113-115, 2017/6

Yamamoto, Yoshitaka(訳)(翻訳、現著者名 Masashi Tsujimoto), “Formation and Growth of an Education-Based Society 1600 to 1868”, Masashi Tsujimoto and Yoko Yamasaki, *The History of Education in Japan (1600-2000)*, Routledge, pp. 5-33, 2017/3

Yamamoto, Yoshitaka(訳)(翻訳、現著者名 Terumichi Morikawa), “Ideals of Self-Reliance and Personal Advancement: Modern Education in the Meiji Era 1868 to 1911”, Masashi Tsujimoto and Yoko Yamasaki, *The History of Education in Japan (1600-2000)*, Routledge, pp. 34-60, 2017/3

山本嘉孝「高山大毅著『近世日本の「礼楽」と「修辞」 — 荻生徂徠以降の「接人」の制度構想』(書評)『和漢比較文学』(和漢比較文学会), 和漢比較文学会, pp. 64-72, 2017/2

山本嘉孝「末木恭彦著『徂徠と崑崙』(書評)『日本思想史学』(日本思想史学会), 日本思想史学会, pp. 371-390, 2016/6

5-4. 口頭発表

山本嘉孝「室鳩巢の擬古詩」北陸古典研究会 2017 年度下半期発表会、北陸古典研究会、金沢大学、2018/3

Yamamoto, Yoshitaka, “Popularization of Literary Classics and Its Dissidents: The Case of Edo-Period Kanshibun”, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies, European Association for Japanese Studies (EAJS), Universidade NOVA de Lisboa, 2017/9

Yamamoto, Yoshitaka, “Poetry as a Non-Universal Medium: Muro Kyūsō’s Literary Exchange with the Chosōn Mission”, ASCJ 2017 Conference, Asian Studies Conference Japan (ASCJ), 立教大学, 2017/8

Yamamoto, Yoshitaka, “室鳩巢の中秋詩”, 第 62 回国際東方学会会議, 東方学会, 日本教育会館, 2017/5

Yamamoto, Yoshitaka, “Sailors’ Wives and Palace Laments: Depictions of Japanese Women in Gion Nankai’s Kanshi”, Meeting of the Early Modern Japan Network, Early Modern Japan Network, Sheraton Centre Toronto Hotel, 2017/3

Yamamoto, Yoshitaka, “Prosody as Medium: The Translator’s Task in Imperial Songs (1904)”, Japan in the World, the World in Japan: A Methodological Approach, Japan in the World, the World in Japan, 大手前大学, 2017/2

山本嘉孝「室鳩巢の辺塞詩」平成 29 年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2017/1

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山本嘉孝 第10回日本近世文学会賞, 日本近世文学会, 2014/5

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016 年度～2017 年度、研究活動スタート支援、代表者:山本嘉孝

課題番号:16H06921

研究題目:室鳩巢の漢詩における盛唐詩受容の研究

研究経費:2016 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

2017 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、江戸時代中期を代表する朱子学者、室鳩巢(1658～1734)が制作した漢詩における盛唐詩受容の実態を実証的に明らかにするところにある。現存する鳩巢の漢詩は『鳩巢先生文集』前編・後編に収められたものだけで 1,135 首に上るが、これまで詳細に分析されてこなかった。本研究では、鳩巢の漢詩において、盛唐詩(特に、李白・杜甫・王維・孟浩然の詩)がどの程度、どのように参照されているかを網羅的に分析し、江戸～明治期日本における漢詩文の隆盛に大きく寄与したと考えられる江戸時代中期における盛唐詩の流行に、鳩巢がどのように加担・参画したかを明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 新井 由美 助教

1964 年生。2001 年、大阪大学大学印文学研究科博士後期課程(日本文学専攻)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2004 年)。1997 年より京都女子大学非常勤講師。2015 年より現職(2018 年 3 月退職)。専攻:日本近代文学。

6-1. 論文

新井由美「村松梢風『綾衣繪巻』における挿絵の意義」『日本研究論集』16, pp. 1-23, 2017/10

新井由美「『絵入草紙おせん』—昭和初期における文芸書出版の一形態—」『阪大近代文学研究』(大阪大学近代文学研究会),

14・15 合併号, 2017/3

新井由美 「邦枝完二と小村雪岱―「おせん」の挿絵を読む―」『語文』(大阪大学国語国文学会), 106・107 合併号, pp. 124-144, 2017/2

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

新井由美 「舞台装置を考える―小村雪岱の仕事を中心に―」第五回文学と美術研究会, 文学と美術研究会, 相愛大学本町キャンパス, 2017/11

新井由美 「邦枝完二「お伝地獄」の新聞小説挿絵をよむ」共同研究会 新聞のなかの文学, 大阪大学, 2016/8

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015 年度～2016 年度、研究活動スタート支援、代表者:新井由美
課題番号:15H06350

研究題目:文学と美術の交流―小村雪岱の小説挿絵に関する研究―

研究経費:2016 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円
2017 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

小村雪岱の挿絵に関するこれまでの研究は、多くが美術の分野からの言及に偏っている。雪岱は文学に造形の深い画家であるにも拘わらず、その挿絵は小説との双方向の関わりという観点からは殆ど論じられてこなかった。挿絵は文学の従属物ではなく、小説の新しい読みの地平を切り拓くための有効な手段である。本研究は雪岱の挿絵をモデルケースとして、小説本文と挿絵の相乗的な関わり方について分析し、ひいては文学と美術という異分野交流のあり方を明らかにすることを目的とするものである。

6-6-2. 2017 年度～2019 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:新井由美

課題番号:17k02451

研究題目:新聞小説と挿絵の相関性解明を基盤とする大正昭和期の文化融合に関する総合的研究

研究経費:2017 年度 直接経費 1,500,000 円 間接経費 450,000 円

研究の目的:

大正末から昭和初期にかけて活躍した挿絵画家・小村雪岱の新聞小説挿絵と小説本文の関わりを、その作画の方法論を基盤として調査・考察する。雪岱の作画方法のうち演劇的手法の摂取は特に重要な要素であり、その背景には雪岱の舞台装置家としての一面や同時代の演劇状況が関連している。その他の方法論においても、本文と挿絵はある必然性の元に結びついていることを明らかにし、雪岱の仕事を文学・美術・演劇の結節点のモデルケースとして提示する。更に雪岱以外の挿絵画家と作家の連携についても調査を行い、それらを異分野融合の総合芸術ととらえ、その実態や享受のあり方を同時代の文化現象の中に位置付けてゆく。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神近代文学会・運営委員, 2016年6月～現在に至る

2-13 比較文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次

准教授：橋本 順光

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
14	2	5	0	1	6	2	0

*うち留学生 8名、社会人学生 6名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	3	3	1	1
2017	3	1	0	1
計	6	4	1	2

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低2本の論文を執筆、大学院生は毎年最低1回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国

内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することを目標とする。大学院生には、機会に応じて学内・学外の研究資金への応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部を延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

院生は、ほぼ全員が 1 本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この 2 年で教員は、目標以上の多数の論文を執筆した。科学研究費助成を継続して研究を行い、共同研究を組織したほか、研究分担者として複数の共同研究に参加した。教員は共同研究を申請したほか、大学院生も学内外の助成やプログラムなどに申請した。その結果、多くの海外調査および外国語による研究発表が可能となった。研究室の設備備品は定期的に点検した。メーリングリストや授業などで、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

外部から講師を招き、共同研究の成果発表として一般に開かれた複数のワークショップやシンポジウムを行った。その際には院生、学部生、教員が積極的に協力し、発表を行った。この 2 年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般向けの論考を寄稿したほか、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学学会、国際比較文学学会 (ICLA) の理事などに従事し、運営と社会還元努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、所期の目標は十分に達成できたと考えられる。

2. 研究

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

サワシュ 晃子 「20 世紀初頭の英国のファッションにおけるジャポニズム」

主査:橋本 順光准教授

副査:清水 康次教授・北村 卓教授・岩田 和男教授 (愛知学院大学)

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	1(0)	0(0)	0(0)	2(2)	3(2)
2017	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)	4(4)
計	1(1)	1(0)	0(0)	0(0)	5(5)	7(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	2	3	0	5	11
2017	2	3	2	0	1	8
計	3	5	5	0	6	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2016 年度】

〔博士後期〕

吉田大輔 「幸田露伴が描く陶器と記憶 太郎坊における盃をめぐる」『待兼山論叢 (文学篇)』第 50 号, pp.99-143, 2016/12

林姿瑩 「大岡昇平『野火』におけるポーの影響について」『日本研究論集』第 14 号, pp.113-137, 2016/10 (査読有)

陳潮涯「『春の鳥』における「鳥」の意味—独歩と『聊齋志異』の関係を中心に—」『日本研究論集』第 14 号, pp.52-69
(査読有)

【2017 年度】

〔博士後期〕

朴 秀浄「三島由紀夫と雑誌『奇譚クラブ』—「愛の処刑」と「憂国」との関連を視座にして—」『阪神近代文学』第 18 号, pp.76-90, 2017/05/31 (査読有)

朴 秀浄「三島由紀夫『禁色』論—異性愛と同性愛とのせめぎあいを中心に—」『日本研究論集』第 16 号, pp.40-62, 2017/10
(査読有)

陳 潮涯「国木田独歩と『聊齋志異』—「竹青」と「王桂庵」を中心に—」『阪大近代文学研究』第 16 号, pp.1-19, 2018/03
(査読有)

林 姿瑩「大岡昇平『サンホセの聖母』の意味」『阪大近代文学研究』第 16 号, pp.33-52, 2018/03 (査読有)

(2)口頭発表

【2016 年度】

〔博士前期〕

西野大輝「日本におけるフランケンシュタイン受容の始まり—映画が先か小説が先か—」, 阪大比較文学学会シンポジウム
「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」, 大阪大学, 2017/1

朴秀浄「三島由紀夫と地下出版雑誌『奇譚クラブ』—『愛の処刑』と『憂国』の再考察として—」, 第 51 回阪神近代文
学会 2016 年度夏季大会, 相愛大学, 2016/7

朴秀浄「三島由紀夫『禁色』にみる同性愛の表象—同性愛言説との関連を視座にして—」, 阪大比較文学学会シンポジウム
「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」, 大阪大学, 2017/1

朴秀浄「三島由紀夫『憂国』再考—「愛の処刑」を補助線として—」, 2016 年度比較文学研究室卒業論文・修士論文発表
会, 大阪大学, 2017/2

三好晃俊「江戸川乱歩における美容整形表象—翻案『幽霊塔』を中心に—」, 2016 年度比較文学研究室卒業論文・修士論
文発表会, 大阪大学, 2017/2

〔博士後期〕

陳潮涯「芥川龍之介と『聊齋志異』—「酒虫」材源の再考を中心に—」, 第 78 回日本比較文学学会全国大会, 東京大
学, 2016/6

陳潮涯「『春の鳥』と『聊齋志異』—「鳥」をめぐる—」, 第 7 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究
交流集会, 大阪大学, 2016/7

吉田大輔「幸田露伴『幻談』と西洋の釣り文学の移入をめぐる—」, 阪大比較文学学会シンポジウム「比較文学研究の諸相
と文学における都市表象」, 大阪大学, 2017/1

林姿瑩「大岡昇平『俘虜記』における俘虜描写の意味再考」, 平成 28 年度第二回関西大学・国立台湾大学院生共同発表
会, 関西大学, 2016/4

林姿瑩「大岡昇平の『野火』について—ポエ文学からの借用を中心に—」, 第 7 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日
本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2016/7/16

林姿瑩「小島信夫『アメリカン・スクール』論—〈靴〉と〈箸〉を手がかりにして—」, 東アジア日本研究者協議会第一
回国際学術大会, Songdo Convensia, 2016/12

【2017 年度】

〔博士前期〕

西野 大輝「日本のフランケンシュタイン受容における『フランケンシュタインの花嫁』の重要性—怪奇映画と納涼と
の関係性を視座として—」, 2017 年度比較文学研究室卒業論文・修士論文発表会, 大阪大学, 2018/2/16

有村 友里「Transmedia: 再読される横溝正史「八つ墓村」とその“場”—影丸讓也版「八つ墓村」と 70 年代横溝ブ

ームの再解釈」, 阪大比較文学会公開シンポジウム: 比較文学研究に見る 'Trans-', 大阪大学, 2018/1/26
〔博士後期〕

朴 秀浄「三島由紀夫『禁色』にみる同性愛の表象—悠—の変化に注目して—」, 第8回大阪大学・チューラーロンコーン
大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2017/6/10

朴 秀浄「三島由紀夫『禁色』における同性愛言説の援用—性科学の受容に関連して—」, 日本比較文学会第53回関西
大会, 石川県文教会館, 2017/11/4

陳 潮涯「佐藤春夫と『聊齋志異』—『支那童話集』をめぐって—」, 第53回阪神近代文学会2017年度夏季大会, 常盤会
学園大学, 2017/7/5

陳 潮涯「『首が落ちた話』と中国古典文学—切断した首という発想を巡って—」, 和漢比較文学会第十回特別例会, 西北
大学, 2017/8/30

陳 潮涯「太宰治「竹青—新曲聊齋志異—」—原典との比較考察を通じて—」, 阪大比較文学会公開シンポジウム: 比較文
学研究に見る 'Trans-', 大阪大学, 2018/1/26

林 姿瑩「大岡昇平の短編推理小説—戦争小説との連関を視座として—」, 日本比較文学会第53回関西大会, 石川県文
教会館, 2017/11/4

(3) その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤
職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通
訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2016年度: 0名 2017年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2016年度：0名 2017年度：0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2017年1月31日 阪大比較文学会シンポジウム「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」

2017年2月17日 阪大比較文学会・卒論修論発表会

2018年1月26日 阪大比較文学会シンポジウム「比較文学研究に見る‘Trans-’」

2018年2月16日 阪大比較文学会・卒論修論発表会

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部（国語学国文学専攻）卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程（国語学国文学専攻）修了。博士（文学）（京都大学、1995）。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。
専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究

1-1. 論文

清水康次 「『白樺』における西洋美術—初期数年間の西洋美術紹介を中心に—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 113-184, 2017/3

清水康次 「『書誌学』」日本近代文学会(編)『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』ひつじ書房, pp. 202-210, 2016/11

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 橋本 順光 准教授

1970年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D., (2008)。2001年4月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009年4月より現職。専攻：比較文学・英国地域研究

2-1. 論文

橋本順光 「英国外交官の黄禍論小説—ジョン・パリスの『キモノ』(1921)と裕仁親王の訪英」『大阪大学大学院文学研究科紀要』, 57, 大阪大学文学研究科, pp. 1-19, 2017/3

橋本順光 「朝顔のジャポニスム—園芸と工芸と文芸」『美学研究』, 10, 大阪大学文学研究科, pp. 160-172, 2017/3

橋本順光 「上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響—暹羅派遣経済使節から戦時猛獣処分へ—」『日本研究論集』, 14, チュラーロンコーン大学文学部, pp. 159-181, 2016/10

2-2. 著書

橋本順光, 「義経=ジンギスカン説の輸出と逆輸入—黄禍と興亜のあいだで」, 河野至恩, 村井則子(編著)『日本文学の翻訳と流通』(『アジア遊学』216), 勉誠出版, pp. 129-145, 2018/1

Hashimoto, Yorimitsu, “A Modern Symposium? Goldsworthy Lowes Dickinson and Letters from and to a Chinese Official”, Anne Tomiche(ed.), *Comparative Literature as a Critical Approach. vol.5 Local and Global*, Classiques Garnier, pp. 459-468, 2017/10

Hashimoto, Yorimitsu, “Pirates, Piracy and Octopus: From Multi-Armed Monster to Model Minority?”, Shigemi Inaga (ed.), *A Pirate's View of World History*, 国際日本文化研究センター, pp. 37-46, 2017/7

Hashimoto, Yorimitsu, *Caricatures and Cartoons: A History of the World 1906-1920, 4 volumes*, エディション・シナプス, 2017/5

橋本順光 『万国風刺漫画大全 第2期—戦争の世紀の幕開け』日本語解説パンフレット, エディション・シナプス, pp. 1-10, 2017/5

橋本順光, 鈴木禎宏編著 『欧州航路の文化誌—寄港地を読み解く』青弓社, pp. 9-51, 2017/1

橋本順光, 「インディアン・ロープ・マジック—幸田露伴から手塚治虫まで—」, 一柳廣孝監修 『怪異を魅せる』青弓社, pp. 208-230, 2016/11

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋本順光 「第7回 島山公開シンポジウム「20世紀のジャポニスム・パネル・ディスカッション」」(共著), 『ジャポニスム研究 37号別冊』, ジャポニスム学会, pp. 74-87, 2018/3

橋本順光 「赤毛の魔女っ子」『産経新聞関西版 2018年2月12日朝刊』産経新聞社, pp. 17-17, 2018/2

橋本順光 「英国の東洋航路と日本—ジャポニスム・漫遊記・建艦競争」『広島日英協会会報』115, pp. 4-5, 2018/1

橋本順光 「いつから銀杏のデザインは二葉になったのか—家紋から阪大のロゴマークまで—」『懐徳』86, pp. 120-121, 2018/1

橋本順光 「5分プラス55年」『産経新聞関西版 2017年12月4日朝刊』産経新聞社, pp. 15-15, 2017/12

橋本順光 「デス・ゲーム物語の隆盛」『産経新聞関西版 2017年10月2日朝刊』産経新聞社, pp. 13-13, 2017/10

橋本順光 「コスチュームプレイとしてのジャポニスム」『東京二期会 蝶々夫人パンフレット』pp. 26-31, 2017/10

橋本順光 「砂漠に咲くバラ」『産経新聞関西版 2017年8月7日朝刊』産経新聞社, pp. 10-10, 2017/8

橋本順光 「孫の手問題」『産経新聞関西版 2017年6月5日朝刊』産経新聞社, pp. 17-17, 2017/6

橋本順光 「フランダースの犬」『産経新聞関西版 2017年4月3日朝刊』産経新聞社, pp. 11-11, 2017/4

橋本順光, 馬淵明子, 池田祐子 「第6回 島山公開シンポジウム「ジャポニスムの人物ネットワーク・パネル・ディスカッション」」(共著)『ジャポニスム研究 36号別冊』, ジャポニスム学会, p. 100, 2017/3

- 橋本順光 「廣部泉『人種戦争という寓話』書評」『産経新聞 2017年2月26日朝刊』産経新聞社, p. 10, 2017/2
- 橋本順光 「古代ローマの逸話」『産経新聞関西版 2017年2月6日朝刊』産経新聞社, p. 13, 2017/2
- 橋本順光 「メムノンの巨像」『産経新聞関西版 2016年12月5日朝刊』産経新聞社, p. 21, 2016/12
- 橋本順光 「佐野真由子『万国博覧会と人間の歴史』書評」『西洋史学』(西洋史学会), 262, 西洋史学会, p. 98, 2016/11
- 橋本順光 「イチョウに魅せられて」『産経新聞関西版 2016年10月3日朝刊』産経新聞社, p. 11, 2016/10
- 橋本順光 「図書館での運命の出会い」『産経新聞関西版 2016年8月1日朝刊』産経新聞社, p. 10, 2016/8
- 橋本順光 「フィンガーボウルの失敗談」『産経新聞関西版 2016年6月6日朝刊』産経新聞社, p. 17, 2016/6
- 橋本順光 「欧州航路船の三島丸と与謝野晶子との交錯」, 林洋子監修 『藤田嗣治 妻とみへの手紙 1913-1916 上巻』人文書院, pp. 27-29, 2016/6
- 橋本順光 「二度目の死」『産経新聞関西版 2016年4月4日朝刊』産経新聞社, p. 17, 2016/4

2-4. 口頭発表

- 橋本順光 「日本におけるジェイン・エアのリライトと少女マンガ」, 阪大比較文学会 2017年度卒論修論発表会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/2/16
- Hashimoto, Yorimitsu, “In Praise of the Hands or the Mind? An Episode in Smiles’ s Self-Help and Its Hybridization with Zen”, Creative (Mis)Communication, 大阪大学文学研究科比較デザイン学クラスター, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/29
- 橋本順光 「西原大輔『日本人のシンガポール体験』の余白に一途中下車・諜報活動・クラ地峡」日本比較文学会関西支部 1月例会, 関西学院大学上原キャンパス, 2018/1/27
- 橋本順光 「戦間期上海における諜報活動ースメドレーとシャストリの交錯」阪大比較文学会公開シンポジウム「比較文学研究に見る‘Trans-’」, 阪大比較文学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/26
- 橋本順光 「在日インド人をめぐる諜報活動と神智学—アタル・シャストリ・サバルワル」ワークショップ「アジア・仏教・神智学」, Japanese Network for Academic Study of Esotericism (日本秘教研究ネットワーク), 龍谷大学大宮学舎, 2017/12/9
- 橋本順光 「『20世紀のジャポニスム—その波及と変容—』パネル・ディスカッション」第7回畠山公開シンポジウム, ジャポニスム学会, 帝京大学霞ヶ関キャンパス, 2017/11/26
- 橋本順光 「中国人アメリカ到達説とその環流 —メキシコのブッダからインカ皇帝日本人論まで」ワークショップ「文献と経験: 秘教思想の領域を探る」, Japanese Network for Academic Study of Esotericism (日本秘教研究ネットワーク), 京都大学人文科学研究所, 2017/11/19
- 橋本順光 「いつから銀杏のデザインは二葉になったのか—家紋から阪大のロゴマークまで—」平成 29年度懐徳堂秋季講座〔第134回〕「デザインにおける日本的なもの」, 懐徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2017/11/6
- 橋本順光 「英国の東洋航路と日本—ジャポニスム・漫遊記・建艦競争」広島日英協会第136回例会, ANAクラウンプラザホテル広島, 2017/10/30
- Hashimoto, Yorimitsu, “Jane Eyre in Japan”, Prismatic Jane Eyre: Close-reading a global novel across languages, Oxford Comparative Criticism and Translation, Jesus College, Oxford, 2017/10/6
- Hashimoto, Yorimitsu, “Obsession with Rat Torture: Attributing Past Inquisition Practices to China”, Association for Asian Studies Annual Conference, Sheraton Centre Hotel, Toronto, Canada, 2017/3/18
- 橋本順光 「インド—吉田博の版画から『スラムドッグ・ミリオネア』まで」リーガロイヤル講演・懐徳堂記念会共催講座・世界遺産シリーズ, リーガロイヤルホテル大阪・懐徳堂記念会, リーガロイヤルホテル大阪, 2017/3/9
- Hashimoto, Yorimitsu, “The Mongolian Alexander’s Tomb as Heartland: Theosophy, the Naros Cycle, and Resurrection of Genghis Khan”, Modernity and Esoteric Networks: Theosophy, Arts, Literature and Politics, みんぱく, 2017/3/7
- 橋本順光 「日英の美術教育におけるE・P・ヒューズの影響とハーンの本日本美術論」文学研究科共同研究報告会公開シンポジウム「近代における女性を中心とした「移動/異動」の力学とその表象」, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3/4
- 橋本順光 「ジョー・オゴーマンの笑話とその伝播—落語「動物園」からコッパードの「銀色のサーカス」まで—」阪大比較文学会 2016年度卒論修論発表会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/2/17

- 橋本順光 「孫文のペナンと日本のスリランカの世界—日本人客専用のハシム商会から木下恵介の映画『スリランカの愛と別れ』まで」リーガロイヤル講演・懐徳堂記念会共催講座・世界遺産シリーズ, リーガロイヤルホテル大阪, 2017/2/16
- 橋本順光 「シンガポール陥落と高浜虚子の「義経」(1942)—義経=ジンギスカン伝説の新作能への編入」阪大比較文学学会シンポジウム「比較文学研究の諸相と文学における都市表象」, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/1/31
- 橋本順光 「エジプトアガサ・クリスティ『ナイルに死す』から世界遺産条約制定の始まりまで」リーガロイヤル講演・懐徳堂記念会共催講座・世界遺産シリーズ, リーガロイヤルホテル大阪, 2017/1/18
- 橋本順光 「世界遺産から見る英国の歴史」リーガロイヤル講演・懐徳堂記念会共催講座, リーガロイヤルホテル大阪, 2016/12/26
- 橋本順光 「ジャポニズムの人物ネットワーク・パネル・ディスカッション」第 6 回畠山公開シンポジウム, ジャポニズム学会, 拓殖大学, 2016/10/22
- Hashimoto, Yorimitsu, “A Way to Conquer the Enemy by Non-violent Resistance? Jiu-jit-Suffragettes and Gandhi’s ‘Moral Jiu-jitsu’”, Faculty of Arts, Palacky University, Olomouc, Czech, 2016/10/12
- Hashimoto, Yorimitsu, “Cultural Image of the Octopus: Tentacular Alien or Multi-talented minority?”, Faculty of Arts, Palacky University, Faculty of Arts, Palacky University, Olomouc, Czech, 2016/10/11
- Hashimoto, Yorimitsu, “Three Forms of Japonisme in the Paintings of Julian Falat”, Centre for European Studies, Jagiellonian University, Krakow, Poland, 2016/10/6
- Hashimoto, Yorimitsu, “Can Octopus be a Symbol of Multicultural Society? Cultural Representation of Octopus as Model Minority”, Centre for European Studies, Jagiellonian University, Krakow, Poland, 2016/10/6
- 橋本順光 「何が『フランダーズの犬』を生かすのか?」21 世紀懐徳堂 i-spot 講座, 21 世紀懐徳堂, 淀屋橋 odona, 2016/9/9
- Hashimoto, Yorimitsu, “Searching for Genghis Khan’s Tomb: Theosophy, Pan-Asianism and the Yellow Peril”, XXI Congress of the International Comparative Literature Association, International Comparative Literature Association, University of Vienna, Vienna, Austria, 2016/7/26
- Hashimoto, Yorimitsu, “Model Minority or Miscreated Monster? English language for “Universal Brotherhood”?”, XXI Congress of the International Comparative Literature Association, International Comparative Literature Association, University of Vienna, Vienna, Austria, 2016/7/22
- 橋本順光 「上野動物園黒豹脱走事件(1936)とその余響—暹羅派遣経済使節の副産物から冒険小説の材源へ—」第 7 回大阪大学・チューラーロンコーン大学 日本文学国際研究交流集会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/7/16
- 橋本順光 「鏡を初めて見た夫婦の物語—英国における松山鏡の翻案と民話化—」ジャポニズム学会関西例会, 京都国立近代美術館, 2016/6/26
- Hashimoto, Yorimitsu, “The Asian Discovery of America? A Pseudohistory and Its Propaganda of Japan’s Manifest Destiny in America”, Association for Asian Studies-in-Asia Conference, Association for Asian Studies, 同志社大学, 2016/6/25
- Hashimoto, Yorimitsu, “Pirates, Piracy and Octopus: From Multi-Armed Monster to Model Minority?”, Pirates’ View of World History toward Possible Re-orientations, 日文研国際研究集会, 国際日本文化研究センター, 2016/4/27

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:橋本順光

課題番号:16K02601

研究題目:20 世紀前半における英国黄禍論小説と日本のアジア主義小説の比較文学的研究

研究経費:2016 年度 直接経費 1,500,000 円 間接経費 450,000 円

2017 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的: 英国では黄禍論が娯楽小説の題材として流通した。東洋の怪人が西洋世界の転覆や侵略をもくろむという小説は、その娯楽性と汎用性の高さゆえ世界に広がり、日本でも明治期から翻訳ないし翻案が続いた。本研究では、① 英国黄禍論小説と日本の翻案とを比較し、黄禍論がアジア主義へと書き換えられた系譜を発掘する。その際には、② 山田長政や源義経にまつわるアジア主義的な偽史の宣伝が相互影響した過程に注目したい。これらの作業をふまえ、③ 英国黄禍論小説が、高垣眸らのアジア主義小説へと転用された過程を解明し、日英双方でいわば共犯的に偽史が利用された可能性を探る。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2014年度～2016年度、6: 研究助成、助成金獲得者: 橋本順光

助成金名: 未来知創造プログラム

研究題目: 日タイ文化交流史の研究—山田長政から柳澤健まで—

助成団体名: 大阪大学

助成金額: 2016年度 直接経費 710,000円

研究の目的: 山田長政は、日タイ交流史で必ず言及される象徴的存在だが、これほど偶像化した経緯は十分に研究されていない。そこで、これまで見落とされてきた以下の4つの観点から、山田長政像の変遷と柳澤健を中心とする文化外交との関連を解き明かし、それにより日タイ文化交流史を、広義の文化交流のモデルとして抽出したい。第1に、大鳥圭介を好例とするように、江戸から明治における漢文資料を中心にして、長政像の連続性ないし断続性を発掘する。第2に、長政の偶像化の理由を安易に戦時体制に求めず、松岡洋右から外務省を追放された元外交官・柳澤健の文化外交から、その重層性を解き明かす。第3に、長政についての英語資料から、長政を主人公にした小説が日本のポカホンタス伝説として機能した可能性へ注目する。第4に、タイにおける資料や長政像と、現代日本におけるタイ・イメージの双方の比較を行う。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

ジャポニスム学会・奨励賞推薦委員, 2017年3月～現在に至る

International Comparative Literature Association (国際比較文学学会)・理事, 2013年7月～現在に至る

日本比較文学学会・関西支部庶務委員, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学学会・理事, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学学会・国際活動委員, 2013年6月～現在に至る

日本比較文学学会・関西支部幹事, 2009年4月～現在に至る

3. 小橋 玲治 助教

1981年生。2013年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(比較文学)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2016年)。2015年4月より現職(2018年3月退職)。専攻: 比較文学/日本近代文学。

3-1. 論文

小橋玲治 「Mrs. Henry Wood, East Lynne から伊原青々園「恋の闇」「子煩悩」への翻案—「新講話」という理想と限界—」『待兼山論叢』51, pp. 21-42, 2017/12

小橋玲治 「織田作之助と南方派遣日本語教員—「旅への誘い」から「姉妹」へ—」『語文』108, pp. 64-76, 2017/

小橋玲治 「From Literary Works to Comics in Japan: The Case of Shonen-sencho (1958) by Fujiko F. Fujio」*Annals of "Dimitrie Cantemir" Christian University Linguistics, Literature and Methodology of Teaching*, 1, pp. 22-32, 20/

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

小橋玲治 『『美女と野獣』(2017年)におけるシェイクスピア引用』2017年度比較文学研究室論文発表会, 阪大比較文学会, 大阪大学, 2018/2

小橋玲治 「書簡に見る安井てつと E.P.Hughes の関係—日本における女性の登山への影響の可能性」比較文学研究に見る‘Trans-’, 阪大比較文学会, 大阪大学, 2018/1

小橋玲治 「日タイ文化交流史の研究—山田長政から柳澤健まで—」[知の共創プログラム]合同報告会, 未来知創造プログラム及び大阪大学, 大阪大学吹田キャンパス, 2017/6

小橋玲治 「安井てつの海外経験とそのネットワーク形成」2016年度大阪大学文学研究科共同研究採択事業「近代における女性を中心とした「移動／異動」の力学とその表象」報告会, 2016年度大阪大学文学研究科共同研究費(研究代表者:小橋玲治)、基盤研究(C)「国際的娼妓運動がとらえた帝国日本の人身売買—東アジアにおける位置づけの検討」(研究代表者:林葉子)共催, 大阪大学, 2017/3

小橋玲治 「トポスから読み解く田山花袋『田舎教師』」比較文学研究の諸相と文学における都市表象, 阪大比較文学会, 大阪大学, 2017/1

小橋玲治 「安井てつに見る Transnational Network 研究の可能性」第1回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, 大阪大学, 2016/12

Kohashi, Reiji, “How are literary works adapted into comic books in Japan? : The case of The Juvenile Captain (1958), by Fujiko F. Fujio.”, 4th International Conference “Japan: Premodern, Modern, and Contemporary”, Japanese studies conferences, “Dimitrie Cantemir” Christian University, 2016/9

小橋玲治 「明治期日本における governess 表象」日本比較文学会関西支部 9月例会, 日本比較文学会関西支部, 関西大学, 2016/9

Kohashi, Reiji, “Was it possible for Japanese during the Meiji Era to create a ‘Governess Novel’?”, 21st World Congress of the International Comparative Literature Association, International Comparative Literature Association, University of Vienna, 2016/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者:小橋玲治

課題番号: 17K02661

研究題目:女性教育者とその Transnational Network に関する比較文学的研究

研究経費:2017年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的:

19世紀に出現して以降、女性の教育者は、日英共に好奇と偏見の視線にさらされてきた。一方、20世紀前半には、英語圏を中心に女性教育者の組合や団体など公私にわたる Transnational Network が形成され、日本もその一端に参加するようになる。本研究では、1)英国から教育視察のために来日した E.P.Hughes を媒介者として、日本の教育者が構築した人脈を Cambridge Woman’s Network の観点から発掘及び再考し、組合をはじめとする組織化への影響と齟齬とを検討する。2)スパイとしてあるいは反権力のジャーナリストとして、英語圏を横断して活躍し独自のネットワークを築き上げた女性たちの活動を、加藤シヅエなど両人脈に共通する人物を軸にして 1)と対比し、帝国主義的な文明化の使命論と sisterhood との関連を考察する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2015年度～2016年度、6：研究助成、助成金獲得者：小橋玲治

助成金名：2016年度大阪大学文学研究科共同研究

研究題目：近代における女性を中心とした「移動／異動」の力学とその表象

助成団体名：大阪大学大学院文学研究科

助成金額：2016年度 直接経費 227,000円

研究の目的：

本共同研究の目的は、第一に、近代において帝国内ないし帝国間流動を引き起こした時代状況や権力構造を考慮しつつ、社会的地位の上昇と下降に着目することで女性を中心とした移動と異動の境界を再編し、第二に、これらの知見を生かして「移動／異動」する女性の表象を再考することである。これまでも移動の研究については膨大な蓄積があるが、ともすればポスト帝国期を中心とした移民・難民研究と、帝国内での地位上昇・下降をめぐる社会的流動性の研究とが分断されてきたきらいがあった。それらの先行する研究を橋渡しすべく、本共同研究は女性に注目し、その移動を異動として捉えられる可能性を、あるいは異動の移動的側面を、個々の事例の学際的な比較対照によって明らかにしたい。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-14 中国文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：浅見 洋二

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	4	1	2	2	0	1	1

*うち留学生 10名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	0	0	0	0
2017	4	0	0	0
計	4	0	0	0

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになっている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関し

ては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、教員の海外出張も行われている。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは「基盤研究(B)」、「基盤研究(C)」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員は科学研究費を取得して国内外の学会で研究発表を行ったほか、国内外の学術誌に論文を発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめるなど、各学会において主導的活動を行った。

3. 社会連携

教員が年間で10回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標はおおむね達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標はおおむね達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】なし

【論文博士】なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
2017	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
計	6(6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	6(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	2	1	0	0	0	3
2017	1	0	0	0	0	1
計	3	1	0	0	0	4

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

- ・趙蕊蕊「論韓愈、蘇軾的「以食為戲」『新国学』第13巻, pp.1-16, 20166
- ・趙蕊蕊「宋代「醉道士」形象的文化闡釋」『新宋学』第5号, pp.23-35, 20168
- ・趙蕊蕊「蘇軾詩の「微物」描写における自我像」『待兼山論叢』第50号, pp.25-47, 201612

【2017年度】

〔博士後期〕

- ・趙蕊蕊「文人の食生活と文學批評—中唐から宋代へ—」『日本宋代文学学会報』第3集, pp.1-24頁, 2017/5
- ・趙蕊蕊「柏木如亭と中国詩学—『詩本草』を中心に」『中国研究集刊』果号(総63号), pp.105-120, 2017/6
- ・趙蕊蕊「嶺南時期における蘇軾の「勸農」詩」『待兼山論叢』第51号, pp.1-18, 2017/12

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士後期〕

- ・趙蕊蕊「宋代の「以食喻詩」について」, 第68回日本中国学会大会, 奈良女子大学, 2016/10/8
- ・趙蕊蕊「蘇軾對杜甫詠物詩的接受與發展 ----從“微物”的角度」, 杜甫文化接受与傳播學術研討会・暨四川省杜甫学会第十八屆年會, 吉林大学, 2016/10/25
- ・趙蕊蕊「柏木如亭とその中国詩学の受容 ——『詩本草』を中心として」, 「儒学—蜀学—文献学」国際シンポジウム, 大阪大学, 2016/12/11

【2017年度】

〔博士後期〕

- ・趙蕊蕊「中国文学批評中的“美人之喻”」, 中国宋代文学第十届年會暨宋代文学國際學術研討会, 中国人民大学, 中国北京, 2017/9/2

(3)その他(書評・翻訳など)

【2017年度】

〔博士後期〕

- ・趙蕊蕊 (翻訳), 浅見洋二著『文本的密碼—社会語境中的宋代文学』, 復旦大学出版社, 2018/8

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本學術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2016年度: 0名 2017年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 6名

2016年度：6名 2017年度：0名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学国際共同研究促進プログラム学術講演会 2016年8月7日 大阪大学大学院文学研究科2階会議室
趙蕊蕊(大阪大学文学研究科)「蘇軾的“擬物”書寫與自我形象定位」

林孜暉(政治大学文学院・大阪大学特別研究学生)「齋中風景—論韋應物詩中的閑居世界—」

黄小珠(大阪大学外国人招聘研究員)「中国古代文学中經典語彙的運用與誤讀—以《周易》“幽人”爲例—」

劉潔(西南大学副教授・大阪大学外国人招聘研究員)「“王維集二十卷”考論—以日本舊抄本《千載佳句》所錄王維詩句爲中心—」

侯體健(復旦大学副教授・大阪大学特任講師)「四六類書與晚宋駢文的知識世界」

駱曉倩(西南大学副教授・大阪大学外国人招聘研究員)「自稱、自我建構與心態變遷—以蘇軾黃州時期作品爲例—」

楊理論(西南大学副教授・大阪大学外国人招聘研究員)「江戸時代宋三大家的和刻選本研究」

林岩(華中師範大学副教授・大阪大学特任准教授)「鄉村、家庭與日常生活—蘇軾晚年詩歌的文学史意義—」

大阪大学国際共同研究促進プログラム学術講演会 2017年8月2日 大阪大学大学院文学研究科2階会議室
趙蕊蕊(大阪大学文学研究科)「中國文学批評中的“美人之喻”」

王治田(新加坡南洋理工大学中文系)「大曆聯句酬唱的“學問化”傾向及其詩歌史意義論」

淺見洋二(大阪大学教授)「黑暗中的文本，文本中的黑暗——論中國的言論與權力」

黄小珠(大阪大学外国人招聘研究員)「幕末明治《東坡策》的成書、評點述評——兼談日本近世文人的宋世感懷」

甲斐雄一(日本學術振興會研究員PD)「趙次公注と南宋出版文化」

趙瑞(上海師範大学講師)「東坡題跋新論」

曹逸梅(常熟理工學院講師・大阪大学特任講師)「黃庭堅詩中的白鷗意象及其對日本五山詩歌的典範影響」

李貴(上海財經大学教授・大阪大学特任准教授)「北宋東京的聲音景觀」

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

唐宋詩学研究会(上記大阪大学国際共同研究促進プログラム学術講演会と共催)

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 高橋 文治 教授

1953年生。1982年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士(京都大学、1979年)。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000年10月より現職(2018年3月退職)。専攻：白話文学史。

1-1. 論文

高橋文治「東の間の幻影—舒元興の文学—」『待兼山論叢』50, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-23, 2016/12

1-2. 著書

高橋文治, 谷口高志, 藤原祐子他(共著)『『元典章』が語ること—元代法令集の諸相—』大阪大学出版会, 2017/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

高橋文治 『元典章』の実際について」羽田記念館講演会，京都大学羽田記念館，京都大学羽田記念館，2016/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 第八回東方学会賞，一般財団法人東方學會，1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者：高橋文治

課題番号：15K02436

研究題目：神廟祭祀と唐代文学

研究経費：2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的：

唐代の神廟祭祀が歴史的にはどのように変遷し、その変遷が唐代文学の潮流とどのように関連したかを明らかにすることによって、本研究課題は、共同体の紐帯たる祭祀観念、ならびにそこから派生するさまざまな価値や制度が唐代に大きく変化し、その変化が文学作品においては、神々の悲哀や孤独、放浪や不在として描かれるようになることを検証する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員，2009年10月～現在に至る

日本道教学会・評議委員，1995年10月～現在に至る

2. 浅見 洋二 教授

1960年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士（京都大学、2009年）。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009年4月、現職。専攻：中国古典詩学

2-1. 論文

浅見洋二 「蘇軾与楊万里詩中山水的擬人化」『風行水上自成文：楊万里与南宋文化及紀念楊万里誕辰 890 年国際學術研討會論文集』江西人民出版社，pp. 233-247，2017/11

浅見洋二 「言論統制下の文学テキスト—蘇軾の創作活動に即して」『大阪大学大学院文学研究科紀要』(大阪大学大学院文学研究科)，57，大阪大学大学院文学研究科，pp. 55-110，2017/3

浅見洋二 「言論統制下の文学文本—以蘇軾詩歌創作為中心」『復旦学報』(復旦大学)，58-4，pp. 2-17，2016/7

浅見洋二 「「避言」ということ—『論語』憲問から見た中国における言論と権力」『中国学研究集刊』(大阪中国学会)，62，pp. 1-17，2016/6

浅見洋二 「テキストと秘密—言論統制下の文学テキスト・余説」『橄欖』(中国詩文研究会)，20，pp. 40-72，2016/4

2-2. 著書

川合康三，富永一登，浅見洋二他(共著)，文選 詩篇(一)，岩波書店，pp. 1-400，2018/1

川合康三，緑川英樹，浅見洋二(共著)『韓愈詩訳注 第二冊』研文出版，pp. 1-500，2017/10

浅見洋二『文本的密碼—社会語境中的宋代文学』復旦大学出版社, 310p., 2017/8

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

浅見洋二(書評)「渡邊義浩『古典中国』における文学と儒教」『六朝學術学会報』(六朝學術学会), 18, 六朝學術学会, pp. 81-90, 2017/3

2-4. 口頭発表

浅見洋二「蘇軾文集の編纂与尺牘」第五回人文化成国際學術研討会, 国立東華大学, 国立東華大学, 2017/10

Asami, Yoji, “Texts from the Darkness, Darkness in the Texts: Su Shi’s Literary Activities under Speech Regulation”, 33. Deutscher Orientalistentag, DOT, Friedrich-Schiller-Universität Jena, 2017/9

浅見洋二「蘇軾与楊万里詩中山水的擬人化」楊万里与南宋文化及紀念楊万里誕辰 890 年国際學術研討会, 楊万里研究会, 井岡山大学, 2017/8

浅見洋二「中国古典詩における精読の試み」第 68 回日本中国学会大会, 日本中国学会, 日本中国学会, 2016/10

浅見洋二「秘密的文本—再論言論統制下の文学文本」第 3 回宋代文学同人会, 中国宋代文学同人会, 浙江工業大学, 2016/9

浅見洋二「言論統制下の文学文本—以蘇軾詩歌創作為中心」第 20 回蘇軾国際學術研討会, 中国蘇軾学会, 中国人民大学, 2016/6

浅見洋二「言論統制下の文学文本—以蘇軾詩歌創作為中心」中国文学傳統的轉型与跨国研究, 香港城市大学, 香港城市大学, 2016/5

浅見洋二「社会脈絡中的文学文本」潘黄雅仙人文講座, 国立政治大学, 国立政治大学, 2016/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 浅見洋二

課題番号: 15K02437

研究題目: 南宋文学における故郷・田園に関する研究—陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心に—

研究経費: 2016 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2017 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

中国南宋の陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心に取りあげて、そこに表現された故郷・田園の表象について考察する。南宋文学史の特質を明らかにするとともに、士大夫の地方化が進んだとされる南宋期における文学と地域社会との関連性について新たな視点・方法を確立することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本中国学会・理事, 2017 年 4 月～現在に至る

文部科学省・大学設置・学校法人審議会大学設置分科会 文学専門委員会委員, 2016 年 4 月～現在に至る

日本宋代文学学会・会長, 2013 年 6 月～現在に至る

日本中国学会・評議員, 2011 年 4 月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員, 2006 年 4 月～現在に至る

2-15 国語学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：金水 敏、岡島 昭浩

准教授：岸本 恵実

助教：蜂矢 真弓

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65	6	11	1	2	0	1	1

*うち留学生 9名、社会人学生 1名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	18	1	0	0
2017	25	3	0	4
計	43	4	0	4

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「国

語彙史研究会」「国語文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」「懐徳堂古典講座」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

【2016 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2016 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学 1 名の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2015 年 7 月および 11 月に実施した。1 名が博士前期課程を修了した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 2 本掲載され、研究発表が 8 本行われた、という状況である。

【2017 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2017 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修のうち国語学 4 名の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2017 年 7 月および 11 月に実施した。3 名が博士前期課程を修了、4 名が博士学位申請論文を提出し、その 4 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等にのべ 6 本掲載され、研究発表が 27 本行われた、という状況である。

2. 研究

【2016 年度】

科学研究費に関わる研究は獲得できず、分担金によるもののみであった。「大阪大学国語国文学会」を 2017 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 106・107 輯(2 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。

【2017 年度】

科学研究費に関わる研究では、引き続き「キリシタン対訳辞書の語彙比較」(岸本の着任により京都府立大学より移管)が行われ、そのほか分担金によるものが複数行われた。「大阪大学国語国文学会」を 2018 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 108 輯(6 月)・109 輯(12 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。

3. 社会連携

【2016 年度】

金水教授が、ナカノシマ大学寄席、文化のとまり木-翠曜塾-、Handai-Asahi 中之島塾、大阪大学 21 世紀懐徳堂 Manga カフェ、マンガカフェ 25 に出講し、「Deans Night」を 3 回開催した。岡島教授が、懐徳堂古典講座(10 回)、懐徳堂記念会・大阪府立中之島図書館コラボレーション講演会に出講した。

【2017 年度】

金水教授が、コンシェルジュ・カフェ(葛屋書店)、マンガカフェ 26 に出講し、「Deans Night」を 2 回開催した。また、MBS ラジオ「福島のぶひろのどうぞお構いなく。」に出演した。岡島教授が、懐徳堂古典講座(8 回)に出講した。岸本准教授が、「キリシタン語学の最先端」講演会(信州大学人文学部)に出講した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、学術誌に載った論文も多かった。論文のうち査読付き雑誌に掲載されたものも少なくなく、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費では「キリシタン対訳辞書の語彙比較」のほか、分担金による複数の研究が行われ、そのほか国立国語研究所の通時コーパスプロジェクトにおける研究などを行った。それを含めて、目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	4	0	4
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

中野直樹「「字鏡」諸本の基礎的研究」

主査：岡島昭浩 副査：金水敏 岸本恵実

文雪「役割語の翻訳手法」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 岸本恵実

河野光将「近世期テニヲハ論の研究」

主査：岡島昭浩 副査：金水敏 岸本恵実

BETTER, DANIEL JOEL JOSEPH「明治時代の日本語における文字・表記の画一化について」

主査：岡島昭浩 副査：金水敏 岸本恵実 矢田勉

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	1(0)	0(0)	1(1)	0(0)	2(1)
2017	3(3)	2(0)	0(0)	0(0)	1(0)	6(3)
計	3(3)	3(0)	0(0)	1(1)	1(0)	8(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
2016	0	5	1	0	2	8
2017	3	11	11	0	2	27
計	3	16	12	0	4	35

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

久田行雄「洒落本における振り仮名付記率の推移とその意味」『国語文字史の研究』第15巻, pp.125-146, 2016/4/15

中野直樹「岩屋寺蔵『高僧傳』における鼻音韻尾の表記とその加点態度について」『待兼山論叢』第50巻, pp.73-98, 2016/12/26

【2017年度】

〔博士後期〕

久田行雄「漢字一字に後接するくの字点の用法について—古代文書から近世文書を資料として—」『語文』第109号, pp.41-53, 2017/12/10

Hisada Yukio“The Usage of Sentences Mixing Regular-Script Kanji and Hiragana in the Latter Part of the Edo Period”『大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター報告書 2017年度版』第1号, pp.170-180, 2018/3

後藤睦「上代から中世末期におけるガ・ノの上接語の通時的変化」『待兼山論叢』第51号, pp.43-61, 2017/12/25

後藤睦（中野聡子・原大介・細井裕子・川鶴和子・隅田伸子・金澤貴之・伊藤愛里・楠敬太・望月直人・諏訪絵里子・吉田裕子との共著。後藤はセカンドオーサー）「学術手話通訳における日本手話要素の表出に関する分析—ろう通訳者と聴通訳者の比較から—」『大阪大学高等教育研究』第6号, pp.1-13, 2018/3/31

劉翔（金水敏・文雪・チュティパック, チャイウィロート・セバステイアン, リントソコグ・トマシュ, ヴォイチェホヴィッチ）「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に—」『社会言語科学』第20巻第2号, pp.1-5, 2018/3

中野直樹「天文本『字鏡鈔』乙部の本文について—合点が付された本文をめぐって—」『訓点語と訓点資料』第140号, pp.22-37, 2018/3

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士後期〕

久田行雄「近世後期戯作者における仮名字体の使用実態—山東京伝を例として—」, 第36回表記研究会研究発表会, 関西大学, 2016/9/25

久田行雄、岡島昭浩「江戸時代におけるくずし字・変体仮名の使用実態」, 第1回大阪大学豊中地区 研究交流会, 大阪大学, 2016/12/20

後藤睦（林下淳一, 金水敏との共同研究の成果発表、オーサーの順は林下・後藤・金水）「日本語受身文の歴史—除項ラレと加項ラレ—」, 日本言語学会第153回大会, 福岡大学, 2016/12/3

後藤睦「ガ・ノの上接語の通時的変化」, 「通時コーパス」シンポジウム2017, 国立国語研究所, 2017/3/11

坂井晶子「明治・大正期の初等教育における句読法—作文教育を中心に—」, 第333回日本近代語研究会春季発表大会, 明治大学駿河台キャンパス, 2016/5/13

- 中野直樹「天文本『字鏡鈔』の成立過程について」, 訓点語学会研究発表会, 京都大学, 2016/5/21
- 中野直樹「岩屋寺蔵『高僧傳』における鼻音韻尾の仮名点について」, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2017/1/7
- 百瀬みのり「「ホドニ」の原因理由を表す意味の獲得について」, 大阪大学土曜ことばの会, 大阪大学, 2016/10/8
- 文雪「「打ち言葉」におけるネコキャラクタの役割語「ニャ」の使用状況—フィクションにおける使用状況と対比して—」, 表現学会近畿例会, 同志社大学今出川キャンパス, 2016/10/15
- 【2017年度】**
- 〔博士前期〕
- セバスティアン・リンドソグ「役割語としてのネイティブ・アメリカンの日本語」, 役割語研究会, 大阪大学, 2017/4/26
- セバスティアン・リンドソグ「『海辺のカフカ』のキャラクターのスウェーデン語への翻訳の仕方について」, 第40回社会言語科学会研究大会, 関西大学, 2017/9/16
- CHAIWIROJ CHUTIPUK「小説『海辺のカフカ』のタイ語訳」, 第40回社会言語科学会大会, 関西大学, 2017/9/16
- ヴォイチェホヴィッチ・トマシュ「『海辺のカフカ』の原作とポーランド語翻訳書との比較・対照」, 第40回社会言語科学会大会研究大会 ワークショップ2 役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に—, 関西大学, 2017/9/16
- 藤本能史「近代外来語の補助符号について—表記形式ごとの使用状況の比較を中心に—」, 日本語学会 2017年度春季大会, 関西大学, 2017/5/13
- 〔博士後期〕
- 久田行雄「漢字に後接するくの字点の用法について—他の踊り字との比較を通じて—」, 第343回日本近代語研究会発表大会, 関西大学, 2017/5/12
- Hisada Yukio “The Usage of Sentences Mixing Regular-Script Kanji and Hiragana in the Latter Part of the Edo Period”, Osaka University Japanese Studies Workshop 2017, 大阪大学, 2017/7/22
- 久田行雄「楷書体漢字と平仮名による漢字仮名交じり文の位置付け—江戸時代後期から明治時代初期にかけて—」, 第2回東アジア日本研究者協議会国際学術大会, 南開大学, 2017/10/28
- 久田行雄「近世整版印刷における楷書体漢字と平仮名による漢字仮名交じり文—その成立と歴史的意義について—」, 日本語学会 2017年度秋季大会, 金沢大学, 2017/11/11
- 久田行雄「近世期の振り仮名体系・再考—近世後期の実態を端緒として—」, 平成30年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2018/1/6
- 後藤睦「ガ・ノの連体修飾用法の歴史的展開—主語標示用法と関連して—」, 日本語学会 2017年度春季大会, 関西大学千里山キャンパス, 2017/5/23
- 後藤睦(林下淳一・金水敏との共著。後藤はセカンドオーサー)「古代日本語における無生物主語の受身文について」, 日本言語学会第155回大会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017/11/25
- 後藤睦「上代日本語における格標示法と有生性—有形とゼロ形の関連から—」, 土曜ことばの会(2018年第1回), 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/20
- 石村小春「藤原定家の仮名遣再考—定家監督書写本における仮名遣訂正の視点から—」, 第286回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学 中庭会議室, 2017/9/30
- 坂井晶子「投稿雑誌に見る句読法に対する意識の考察—博文館出版雑誌群を例にして—」, 第348回日本近代語研究会, 金沢歌劇座, 2017/11/10
- 文雪「村上春樹の小説にみる<女ことば>、<男ことば>の中国語について—『海辺のカフカ』を分析対象に—」, 2017年第6回村上春樹国際シンポジウム, 同志社大学今出川キャンパス, 2017/7/8
- 文雪「小説『海辺のカフカ』の中国語訳における女性キャラクターの発話の翻訳」, 第40回社会言語科学会研究大会, 関西大学, 2017/9/16
- 劉翔「(ポスター発表)『海辺のカフカ』におけるキャラクターの言語表現及び翻訳の分析—日中対照研究を通して—」, 2017年第6回村上春樹国際シンポジウム, 同志社大学今出川キャンパス, 2017/7/8

- 劉翔(金水敏・文雪・チュティパック, チャイウィロート・セバスティアン, リントソコグ・トマシュ, ヴォイチェホヴィッチ)「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に」, 第40回社会言語科学会研究大会, 関西大学千里山キャンパス, 2017/9/16
- 市地英「馬琴読本における仮名字体—稿本と板本の異同をめぐって—」, 土曜ことばの会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/10/14
- 市地英「近世の変体仮名の多様性」, 第2回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学豊中キャンパス, 2018/1/10
- 市地英「馬琴読本の仮名表記—稿本から板本への書き換えを通じて—」, 第39回表記研究会, 清泉女子大学, 2018/1/20
- 市地英「馬琴読本の仮名字体研究と学術情報交換用変体仮名」, 東洋学へのコンピュータ利用第29回研究セミナー, 京都大学人文科学研究所本館, 2018/3/9
- 高谷由貴「『明治の文豪』における接続詞「と」について—接続助詞との共通点から—」, 日本語学会2017年度春季大会, 関西大学千里山キャンパス, 2017/5/13
- 高谷由貴「即時性を持つ引用由来の接続表現について」, ヤコブセン先生を囲む研究会, 大阪大学箕面キャンパス, 2018/2/16
- 高谷由貴「通時コーパスに見る引用由来の接続表現」, 「通時コーパス」シンポジウム2018, 国立国語研究所, 2018/3/10
- 小林ベター・ダニエル「幕末の仮名遣いについて—自然科学書と漢文注釈書における実態、仮名遣い書等における規範—」, 第343回日本近代語研究会発表大会, 関西大学, 2017/5/12

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016年度】

〔博士後期〕

高谷由貴「紹介 森勇太著『発話行為からみた日本語授受表現の歴史的研究』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第106・107輯, pp.185-186, 2017/2/28

【2017年度】

〔博士後期〕

後藤睦「紹介 岡崎友子・森勇太著『ワークブック日本語の歴史』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第108輯, p.113, 2017/6/30

中野直樹「紹介 蜂矢真郷著『古代地名の国語学的研究』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第109輯, p.80-81, 2017/12/10

石村小春「紹介 蜂矢真郷著『古代語の謎を解く II』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第109輯, p.82-83, 2017/12/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

2017年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016 年度～2017 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2016 年度：0 名 2017 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2016 年度：0 名 2017 年度：0 名

9. 刊行物

2016 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会) 第 106・107 輯合併号

2017 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会) 第 108 輯・109 輯

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局	国語語彙史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	国語文字史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	土曜ことばの会	2002 年度以前から現在に至る
研究会	土曜ことばの会開催 4 回	
	国語語彙史研究会開催 3 回	

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

*(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1 月 1 日間)

研究誌「語文」を年 2 回編集・発行

*(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10 月 4 日間)

大学院研究発表会 (7 月・11 月 各 2 日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10. に詳述した。

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 金水 敏 教授

1956 年生。1982 年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士(文学)(大阪大学、2006 年)。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻：国語学／言語学

1-1. 論文

金水敏, 文 雪, セバスティアン・リンドソグ他(共著)「第 40 回研究大会ワークショップ役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に—」社会言語科学会(共著)『社会言語科学』(社会言語科学会), 20-2, 社会言語科学会, pp. 34-37, 2018/3

金水敏「文法研究におけるデータについて—文法研究は経験科学たりうるか—(特集: 文法性判断に基づく研究の可能性)」日本語学会『日本語文法』(日本語学会), 17-2, くろしお出版, pp. 54-63, 2017/9

- 金水敏, 椎名美智, 高田博行他(共著)「歴史言語学の新しい潮流—歴史語用論と歴史社会言語学—」関西言語学会『KLS』(関西言語学会), 37, 関西言語学会, pp. 265-315, 2017/6
- 金水敏「第11章「言語—日本語から見たマンガ・アニメ」」山田奨治(共著)『マンガ・アニメで論文・レポートを書く—「好き」を学問にする方法—』(なし), ミネルヴァ書房, pp. 239-262, 2017/4
- 金水敏「役割語研究の国際的展開」Aydin Ozbek, Tolga Ozsen and Kenji Kawamoto『日本語・日本文化教育研究への新アプローチ JDIシリーズ1』(トルコ日本語教師会), トルコ日本語教師会, pp. 23-37, 2016/12
- 金水敏「「ウナギ文」再び—日英語の違いに着目して—」福田嘉一郎・立石始『名詞類の文法』くろしお出版, pp. 203-214, 2016/11
- 金水敏「大学での日本語史入門—私はこんな授業をしている—」福嶋健伸・小西いずみ『日本語学の教え方—教育の意義と実践—』くろしお出版, pp. 233-250, 2016/6

1-2. 著書

金水敏(編)『村上春樹翻訳調査プロジェクト報告書(1)』大阪大学, 162p., 2018/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 金水敏「関西弁と役割語」監修: 真田信治 編集: 岸江信介、高木千恵、津染直也、鳥谷善史、中井精一、西尾純二、松丸真大『関西弁辞典』(なし), ひつじ書房, pp. 252-256, 2018/3
- 金水敏「解説」高田宏『言葉の海へ』(なし), 新潮社, pp. 340-346, 2018/3

1-4. 口頭発表

- 金水敏「役割語としてのヴァーチャル時代語」時代劇・歴史ドラマは台詞で決まる!—世界観を形作る「ヴァーチャル時代語」, 科学研究費基盤研究C「ヴァーチャル方言研究の基盤形成と展開」(研究課題番号:15K02577、研究代表者:田中ゆかり), 共催: 早稲田大学演劇博物館, 協賛: 日本大学国文学会, 早稲田大学小野記念講堂, 2018/3
- 金水敏「ポップカルチャーと役割語」国立国語研究所 第12回 NINJAL フォーラム:「ことばの多様性とコミュニケーション」, 国立国語研究所, 東京証券会館ホール, 2018/2
- 金水敏「村上春樹小説のキャラクター分析と翻訳—「海辺のカフカ」を中心に—」東西学術研究所 第23回研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学千里山キャンパス 以文館4階セミナースペース, 2018/2
- 金水敏「フィクションの構造とキャラクターの言語 —ジブリ・アニメ、村上春樹小説を題材に—」人文学クラスター講演会, 藤女子大学, 藤女子大学16条キャンパス 751教室, 2018/1
- Kinsui, Satoshi, "Role language, fiction, and translation", Trinity College Dublin and Osaka University Joint International Symposium: Japanese Studies in a global context, 大阪大学大学院文学研究科/Trinity College, Dublin, Trinity Long Room Hub, Trinity College Dublin, 2017/12
- 金水敏「フィクションの話言葉—ジブリ・アニメ、村上春樹小説を題材に—」平成29年度 國學院大學国語研究会 後期大会, 國學院大學国語研究会, 國學院大學渋谷キャンパス120周年記念1号館1階1101教室, 2017/12
- 金水敏「役割語における感動詞」友定賢治科研費会議, 友定賢治, 県立広島大学, 2017/12
- 金水敏「連体形の機能の歴史的变化について—平安・鎌倉時代を対象に—」NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象—名詞修飾表現ととりたて表現—」, 国立国語研究所, 国立国語研究所 多目的室, 2017/12
- 林板淳一, 後藤睦, 金水敏「古代日本語における無生物主語の受身文について」日本言語学会第155回大会, 日本言語学会, 立命館大学衣笠キャンパス, 2017/11
- 金水敏「現代小説のキャラクター分析と翻訳—村上春樹翻訳調査プロジェクトを中心に—」日本近代語研究会 2017 秋季大会, 日本近代語研究会, 金沢歌劇座, 2017/11
- 金水敏, 文 雪, セバステアーン・リンドソグ他「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究—村上春樹作品を中心に—」第40回社会言語科学学会研究大会, 社会言語科学学会, 関西大学, 2017/9
- 金水敏(基調講演)「役割語・キャラクター言語の観点から見た 村上春樹作品と翻訳—『海辺のカフカ』『1Q84』を中心に—」第6

回村上春樹国際シンポジウム :村上春樹の魅惑, 淡江大学村上春樹研究センター, 同志社大学今出川キャンパス, 2017/7
金水敏 (パネリスト)「騎士団長(アイデア)と顔なが(メタファー)の言語—村上春樹作品における異言・異形のキャラクターと比較して—」第 6 回村上春樹国際シンポジウム :村上春樹の魅惑, 淡江大学村上春樹研究センター, 同志社大学今出川キャンパス, 2017/7
金水敏 「第二言語習得と役割語」第 27 回第二言語習得研究会(JASLA)全国大会・基調講演, 第二言語習得研究会, 九州大学・伊都キャンパス, 2016/12
林下淳一, 後藤睦, 金水敏 「日本語受身文の歴史—除項ラレと加項ラレー」日本言語学会第 153 回大会, 日本言語学会, 福岡大学, 2016/12(『言語研究』151 号, pp. 82-83, 2017/3)
金水敏 「古典日本語の名詞修飾節再訪—連体節・準体節・主名詞内在関係節—」国立国語研究所・機関拠点型基幹研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」文法研究班「名詞修飾構文の対照研究」研究発表会, 国立国語研究所, 名古屋大学 東山キャンパス・全学教育棟 4 階 406 室, 2016/11
金水敏 「現代日本語小説の キャラクターと発話」日本語学会 2016 年度秋季大会 ワークショップ「キャラ・役割語をめぐる問題とその検討」:キャラ・役割語をめぐる問題とその検討, 日本語学会 ワークショップ企画:定延利之, 山形大学基盤教育 2 号館 2 階 222 教室, 2016/10(『日本語の研究』41317, p. 81, 2017/4)
金水敏 「フィクションにおける話し言葉—役割語とキャラクター言語—」第 47 回 メディアとことば研究会, メディアとことば研究会, 大阪大学大学院言語文化研究科 A 棟2階大会議室(豊中キャンパス), 2016/9
金水敏 「役割語研究の国際的展開」トルコ日本語・日本文化教育学会, トルコ日本語・日本文化教育学会, トルコ共和国・チャナッカレ, 2016/6(*Japon Dili ve Kulturu Egitimi Arastirmalarina Yeni Yaklasimlar*, pp. 23-37, 2016/12)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11
原口裕, 南出康世, 金水敏他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10
金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・委員, 2015 年 4 月～現在に至る
日本語学会・編集委員長, 2015 年 4 月～2018 年 3 月
日本語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る
日本学術会議・連携会員, 2014 年 10 月～現在に至る
日本語学会・評議員, 2014 年 4 月～現在に至る
関西言語学会・委員, 1996 年 4 月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961 年生。1987 年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(九州大学、1986 年)。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部(教育地域科学部)助教授、本研究科助教授・准教授を経て 2010 年現職。専攻:国語史・日本語学史

2-1. 論文

岡島昭浩 「「ひいやり・ふうわり」型から「ひんやり・ふんわり」型へ」『国語語彙史の研究』(国語語彙史研究会), 36, 和泉書院, pp. 107-117, 2017/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩 「解説」井上ひさし『新版 国語元年』新潮社, pp. 195-207, 2018/1

2-4. 口頭発表

岡島昭浩 「近代方言意識史を目指して——西郷隆盛はどう語らせられてきたか」言語接触研究班 KU-ORCAS ユニット 1 研究集会, 東西学術研究所, 関西大学, 2018/2

岡島昭浩 「近代語資料としての速記資料—落語講談・講演・帝国議会以外—」通時コーパスプロジェクト 資料性・文体グループ研究会, 国立国語研究所通時コーパスプロジェクトコーパス活用班, 国立国語研究所, 2017/8

岡島昭浩 「近代語資料の今後—発掘・賦活・保持—」日本近代語研究会, 日本近代語研究会, 関西大学, 2017/5

岡島昭浩 「通時コーパスで見る漢語副詞」通時コーパスプロジェクト・近世近代グループ第2回研究会, 国立国語研究所通時コーパスプロジェクトコーパス活用班, 明治大学, 2016/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・委員, 2017年8月～現在に至る

日本語学会・広報委員, 2014年5月～2016年5月

日本語学会・評議員, 2009年6月～現在に至る

国語文字史研究会・委員, 2008年4月～現在に至る

国語語彙史研究会・委員, 2003年4月～現在に至る

3. 岸本 恵実 准教授

1972年生。2000年、京都大学大学院文学研究科国語学国文学専修博士後期課程研究指導認定退学。博士(文学)(京都大学、2003年)。大阪外国語大学助手・講師・助教授、国際基督教大学准教授、京都府立大学准教授を経て、2017年4月より現職。専攻：国語学

3-1. 論文

岸本恵実 「Sobczyk Malgorzata「東藤次郎旧蔵本『吉利支丹抄物』の成立について」」『国語国文』(京都大学文学部国語学国文学研究室 編), 87-1, 臨川書店, pp. 72-73, 2018/1

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岸本恵実, 三橋健(共編著)「複数」『フランス学士院本 羅葡日対訳辞書』清文堂出版, 2017/1

岸本恵実(連載「遊びをせんとや」76)「仏語明要」『京都新聞』京都新聞社, 2016/6

3-4. 口頭発表

Kishimoto, Emi, “Influence of João Rodriguez’s Japanese grammar books seen in Alexandre de Rhodes’ Vietnamese books”, 10th International Conference of Missionary Linguistics, International Conference on Missionary Linguistics, Sapienza University of Rome, 2018/3

岸本恵実「キリシタン語学書の展開: ジョアン・ロドリゲスとアレクサンドル・ド・ロード」平成30年度大阪大学国語国文学会, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2018/1

岸本恵実「アレクサンドル・ド・ロード「ベトナム語・ポルトガル語・ラテン語辞書」(1651)と日本語」2017年度キリシタン文化研究会大会および講演会, キリシタン文化研究会, 上智大学, 2017/12

Kishimoto, Emi, “Japanese Words in the Dictionarium Annamiticum Lusitanum et Latinum (1651)”, The 11th International Conference of the Asian Association for Lexicography (ASIALEX 2017), ASIALEX, Guangdong University of Foreign Studies, 2017/6

岸本恵実「羅葡日辞書と日葡辞書注記語」第115回国語語彙史研究会, 国語語彙史研究会, 同志社大学, 2017/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 岸本恵実

課題番号: 15K02573

研究題目: キリシタン対訳辞書の語彙比較

研究経費: 2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

キリシタン版『羅葡日辞書』(1595刊)・『日葡辞書』(1603・04刊)は、日本語史だけでなく宣教言語学・言語史の分野でも世界的注目を集めている。本研究では、『羅葡日』『日葡』に収載された日本語語彙のうち、『日葡』に優劣や特殊語の注記のある語を中心に、語形・意義・用法の相違を調査する。そしてその背景について、キリシタン版の『落葉集』(1598年刊)など同時代の国内外の資料を手がかりに考察し、各辞書の性格の相違を一層明確にするとともに、イエズス会による日本語語彙研究の流れを把握する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-16 英米文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 3 外国人教師 1 助教 1

教授：服部 典之、片渕 悦久

准教授：石割 隆喜、山田 雄三、森本 道孝

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
36	5	3	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

** 英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	21	1	0	0
2017	10	2	0	0
計	31	3	0	0

* 英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時まで社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。また学部学生については、①英米文学全般についての幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技術を身につけさせることを目標とした。さらに、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあ

う態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会刊行物のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプログラムを継続的に実施することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好な状態を保っていると言える。

2. 研究

【2016 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2016 年度には阪大英文学会の中堅・若手を中心とした新たな企画立案が行われた。2016 年度の課程博士号提出者はなかった。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたとと言える。

【2017 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍を続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2017 年度には阪大英文学会の中堅・若手を中心とした新たな叢書刊行計画ならびに出版社が確定し、出版に向けて着々と準備を進めている。2017 年度の課程博士号提出者はなかったが、英米文の科目等履修生より論文博士の申請があり、博士が授与された。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたとと言える。

3. 社会連携

【2016 年度】

2016 年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、今後も長期継続が望めるように現行のプログラム（ペンシルベニア大学派遣）を整備中である。

【2017 年度】

2017年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、今後も長期継続が望めるように現行のプログラム（ペンシルベニア大学派遣）を整備中である。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ学部学生から多くの海外留学生が出ているのは教育指導面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	1	1
計	0	1	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

大貫隆史 20世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ—感情のリベラリズムからラディカルなネイションへ、そして「わたしのソーシャリズム」へ 2017/11

主査：山田雄三 副査：服部典之、片渕悦久

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2017	2(2)	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	4(4)
計	2(2)	1(1)	0(0)	1(1)	0(0)	4(4)

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	0	1	0	0	1
2017	0	4	2	0	0	6
計	0	4	3	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

中嶋彩佳 (Nakajima, Ayaka) “Living in the ‘Enchanted World’ of Childhood Fantasy: Mimetism and Literary Illusion in Kazuo Ishiguro’s *When We Were Orphans*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第50号, pp. 17-43, 2016/12

林日佳理 (Hayashi, Hikari) “Writing to ‘You’: The Author’s Self and the Unreachable Other in Paul Auster’s Later Novels.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第50号, pp. 45-64, 2016/12

【2017年度】

〔博士後期〕

中嶋 彩佳 「カズオ・イシグロの小説における翻訳の名残り」『ユリイカ』平成29年12月号, pp.77-85, 2017/12/1

中嶋 彩佳 (Nakajima, Ayaka) “What Stevens Does Not Narrate: Narrative Strategy for Challenging Nostalgia in The Remains of the Day” 『英文学研究 支部統合号』第10号, pp.275-285, 2018/1/20

林 日佳理 (Hayashi, Hikari) “Writing as an Empathetic Leap to Sibling Others: Post-Postmodern Sincerity and the Novels of Richard Powers” 『関西英文学研究』第10巻, pp.25-32, 2018/1/20

宮原 駿 (Miyahara, Shun) “How Buckley Shot the Russian General: Historical Surface and Personal Depth in the Layers of the Realities in *Finnegans Wake*” 『待兼山論叢』第51号, pp.83-100, 2017/12/25

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士後期〕

林日佳理 「We Are Not “Other” — Toni Morrison の *Paradise* における「色づける力」としての書くこと」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究発表会、東北大学、2016/08/07

【2017年度】

〔博士前期〕

福原 崇太 「The New York Trilogy における作者の変遷—作者であることを受け入れる」, 大阪大学・東北学院大学・東北大学合同研究発表会, 大阪大学, 2017/8/5

橋本 一平 「Cosmopolis における「分裂」の主題」, 大阪大学・東北学院大学・東北大学合同研究発表会, 大阪大学, 2017/8/5
〔博士後期〕

林 日佳理 「Writing with the Other —ポスト・ポストモダンの北米文学」, カルチュラル・タイフーン 2017, 早稲田大学, 2017/6/25

林 日佳理 「Toni Morrison の *Paradise* におけるコンヴェントの女たちのオルタナティブ・ライティング」, 日本アメリカ文学会第56回大会, 鹿児島大学, 2017/10/14

宮原 駿 「Finnegans Wake における排除と包含-Object を巡る生の感触」, 日本英文学会全国大会第89回大会, 静岡大

学, 2017/5/21

宮原 駿「ヤール・ヴァン・フーサーの排泄音：『フィネガンズ・ウェイク』における語りの断絶と共鳴」, 日本英文学会
関西支部第 12 回大会, 京都女子大学, 2017/12/17

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 1 名 (計 1 名)

2017 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016 年度 学部 : 3 名 大学院 : 2 名 (計 5 名)

2017 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2016 年度～2017 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016 年度～2017 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2016 年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 55, 2017/1

2017 年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 56, 2018/1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第 49 回大会 2016/10/22

阪大英文学会第 50 回大会 2017/10/28

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 服部 典之 教授

1958年生。1981年、大阪大学文学部（英文学専攻）卒業。1983年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士（大阪大学、2003年）。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化学部講師、同助教授を経て、2000年10月文学研究科助教授、2008年4月現職。専攻：英文学

1-1. 論文

Hattori, Noriyuki, "Trafficking Spices, Silver, and Japan: Representations of the Amboina Massacre" *OLR*, (大阪大学大学院英文学談話会), 56, pp. 23-32, 2018/1

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Hattori, Noriyuki, "Trafficking Spices, Silver, and Japan: Representations of the Amboina Massacre", 18世紀学会(アメリカ), American Society for the Eighteenth-Century Studies, アメリカ、ピッツバーグ、オムニ・ウィリアム・ペン・ホテル, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

服部典之 大阪大学共通教育賞(2003年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号:15K02299

研究題目:イギリス小説と地理学的想像力

研究経費:2016年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2017年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

イギリス小説の中には、豊かな地理学的想像力なしには成立しえなかった、ある大きな系譜がある。『ロビンソン・クルーソー』のカリブ海、『パミラ』や『ジェイン・エア』のジャマイカ、スモレットのスコットランド、『ラセラス』のエチオピアなどである。従来の研究では地域・国単位、もしくは環太平洋などの限られた視野で解釈されていたイギリス小説を、本研究ではイギリスを中心とした〈東〉＝太平洋・アジアなど、〈西〉＝カリブ海・アメリカなど、〈南〉＝アフリカなど、〈北〉＝スコットランドなどへと、東西南北に広がる豊穡なる地理学的想像力を中心に据えることで包括的に捉え直す。英文学史的に歴史＝時間を軸にするものではなく、地誌学的に空間をイギリスから見た放射状に網羅する研究である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会機関誌『英文学研究』編集委員会・委員, 2015年4月～2017年5月

阪大英文学会・会長, 2014年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・副支部長, 2013年4月～2017年3月

日本英文学会関西支部理事会・理事, 2011年4月～現在に至る

2. 片渕 悦久 教授

1965年生。1995年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、1991年）。博士（文学）（大阪大学、2007年）。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003年4月文学研究科助教授、2013年4月現職。専攻：アメリカ文学

2-1. 論文

片渕悦久「ストーリーワールドの継承／共有—『ワイキキの結婚』から『ブルー・ハワイ』へ—」『関西レビュー』（関西英語英米学会）, 34, pp. 23-35, 2017/3

2-2. 著書

片渕悦久『物語更新理論 実践編』学術研究出版／ブックウェイ, 256p., 2018/3

片渕悦久『物語更新論入門(改訂版)』学術研究出版／ブックウェイ, 100p., 2017/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

片渕悦久「物語更新する文学、文学する物語更新」静岡文化芸術大学特別レクチャー, 静岡文化芸術大学, 静岡文化芸術大学, 2018/2

片渕悦久「アダプテーションの内と外」日本英文学会関西支部第12回大会シンポジウム, 日本英文学会関西支部, 京都女子大学, 2017/12

片渕悦久「アダプテーションの『境界』」テキスト研究会第17回大会シンポジウム, テキスト研究会, 佛教大学, 2017/8

片渕悦久「文学理論:物語更新論入門」静岡文化芸術大学特別レクチャー, 静岡文化芸術大学, 静岡文化芸術大学, 2017/2

片渕悦久「ソール・ベロー文学のJewishness」日本ユダヤ学会関西研究例会, 日本ユダヤ学会, 神戸女学院大学, 2016/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:片渕悦久

課題番号:26370426

研究題目:メディア横断的物語更新理論を応用した現代表象文化の受容形態の解明

研究経費:2016年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

多様なメディアやジャンルの枠を越え、同一のストーリーをもつ作品が何度も再生産されるという、現代表象文化においていっそう顕著な特質を文化現象として解明するために、本研究課題では、物語の更新という観点からアプローチする理論(メディア横断的物語更新理論)を提案し、その理論的発展性を検討する。この物語更新理論を通じて、メディアの変換を経て物語が再創造される原理やその形態を解明すること、また更新された物語に関する受容のあり方などを考察することに焦点を絞ったうえで方法論として体系化し、新たな物語論を確立することを目的とする。

2-6-2. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:片渕悦久

課題番号:17K02660

研究題目:認知物語論および可能世界論の統合の場としての物語更新理論の可能性の探求

研究経費:2017年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

メディアやジャンルの枠を越え、同一の物語が形を変えて再生産されるという現代表象文化において顕著な事象を観察するため、独自に提案した物語更新理論を土台として、認知物語論および可能世界論という物語研究で注目されている最新のアプローチを取り入れることで、物語更新のありようを解明する理論の発展可能性を探る。そのうえで、メディアの変換を経て物語が再創造される原理やその形態、また更新された物語の受容のあり方などについても理解を深め、新たな物語論の実践過程を体系的に提示することをめざす。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ソール・バロー協会・理事, 2009年4月～現在に至る

関西英語英米文学会・理事, 2008年4月～現在に至る

3. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻:アメリカ文学

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石割隆喜 (Proceedings)「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow* における現実の表象」『日本英文学会第89回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 268-269, 2017/9

石割隆喜 (書評)「三浦玲一著『村上春樹とポストモダン・ジャパン——グローバル化の文化と文学』」『英文学研究』(日本英文学会), 93, pp. 179-184, 2016/12

3-4. 口頭発表

石割隆喜「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow* における現実の表象」日本英文学会関西支部第11回大会, 日本英文学会関西支部, 神戸市外国語大学, 2016/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:17K02545

研究題目:「見ること」を中心とする、ピンチョン小説における認識論の残余についての研究

研究経費:2017年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、「見ること」をめぐる小説としてのピンチョン作品における認識論の残余」という観点からトマス・ピンチョンの小説作品の特質を解明することを全体構想とする研究の一環として、特に『重力の虹』『ヴァインランド』『メイスン&ディクソン』を取り上げ、同観点からの分析により、これら3つの小説のピンチョン作品全体の中での位置付けを明らかにしようとするものである。3作品との関連で本研究が具体的に取り上げる「見ること」とは、映画(『重力の虹』『ヴァインランド』)と天体観測(『メイスン&ディクソン』)である。また「見ること」をより原理的に考察するために、哲学における認識論を本研究遂行上の基本的参照枠とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

4. 山田 雄三 准教授

1968年生。1990年大阪大学文学部卒業。1995年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。1995-2013年、大阪大学言語文化部、同大学院言語文化研究科講師、助教授、准教授を経て、2013年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。

4-1. 論文

山田雄三「オクシモロンというアクション—大貫隆史著『わたしのソーシャリズム』へ—二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ」川端康雄『レイモンド・ウィリアムズ研究』7, レイモンド・ウィリアムズ研究会, pp. 73-77, 2017/3

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山田雄三「書評・大貫隆史著『わたしのソーシャリズム』へ——二〇世紀イギリス文化とレイモンド・ウィリアムズ——」『図書新聞』3266, 図書新聞社, pp. 3-3, 2016/5

4-4. 口頭発表

Yamada, Yuzo, "Tokunaga Sunao's Reportage: The Unreliable Representation of the Proletariat", "Selective Tradition in the Pacific: A Conference on Class, Writing, and Culture", The Raymond Williams Society and The School of English, Film, Theatre, and Media Studies, Victoria University of Wellington, Victoria University of Wellington: Wellington, 2017/9

山田雄三「1590年代末に残されたリチャード・タールトンの遺産」〈宗教とテューダー朝演劇の成立〉研究会, 〈宗教とテューダー朝演劇の成立〉研究会, 慶應義塾大学, 2017/1

山田雄三「16世紀末に残されたタールトンの遺産」関西シェイクスピア研究会, 関西シェイクスピア研究会, 関西学院大学, 2016/12

Yamada, Yuzo, "Wales and the World: Re-Framing the Literature of Wales in an International Context", The Association for Welsh Writing in English Annual Conference, The Association for Welsh Writing in English, Newtown: Gregynog Hall, 2016/4

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山田雄三, 森祐司, 小口一郎 大阪大学共通教育賞(2011年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2012/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山田雄三

課題番号:26370316

研究題目:環境汚染問題への英語圏モダニズムの文化的介入を分析する

研究経費:2016年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2017年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は英語圏モダニズムの文学と政治とを接合する試みである。これまでモダニズムという思潮は1920年代をピークとする芸術新潮として受けとめられ、個別の作品を分析するにあたって、20世紀初めの国際情勢や社会の変動を映す、いわゆる反映論が主流だった。本研究では、このようなモダニズム観を批判的にとらえ、産業社会の負の部分に照射する政治学としてモダニズムを定義しなおしたい。たとえば、1958年に英国でモダニストを中心にカルチュラル・スタディーズ(以下CS)の試みが始められたとき、それはオルダーマストンの反核運動と連動していたからである。環境問題に介入することで、社会の諸関係を変えようとしたモダニズム政治の成功と挫折の道程を明らかにしたい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本シェイクスピア協会・協会委員, 2015年4月～現在に至る

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriental College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriental College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員(1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻:シェイクスピア/イギリスルネッサンス/英文学

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

HARVEY, A. S. Paul, *Exnihili*, Yamaguchi Shoten, 386p., 2018/2

HARVEY, A. S. Paul, *Soulsongs*, Yamaguchi Shoten, 97p., 2017/6

HARVEY, A. S. Paul, *Saint Mary 365 Book 6*, Yamaguchi Shoten, 225p., 2017/3

HARVEY, A. S. Paul, *Sport*, Yamaguchi Shoten, 230p., 2016/9

ポール・ハーヴィ 『Saint Luke 132』Yamaguchi Shoten, 143p., 2016/6

HARVEY, A. S. Paul, *Monday Songs 7*, pdf, 130p., 2016/4

HARVEY, A. S. Paul, *Psalms Lectures on English Versions 1-70*, pdf, 840p., 2016/4

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助教

1959年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987年大阪大学文学部助手。専攻：アメリカ文学。

6-1. 論文

Yoshii, Chiyo, "Fostering Logical Thinking, Empathy, and Creativity by Reading Literary Texts: A Neuroscientific Approach", *Proceedings of The Asian Conference on Education 2017*, The International Academic Forum, 2018/1

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

Yoshii, Chiyo, "Fostering Logical Thinking, Empathy, and Creativity by Reading Literary Texts: A Neuroscientific Approach", Asian Conference on Education, The International Academic Forum, 神戸アートセンター, 2017/10 (*The Asian Conference on Education 2017*, pp. 97-97, 2017/10)

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代他 第1回福原賞, 福原記念英米文学助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：クラウス・テルゲ

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
7	3	2	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	0	1	0	0
2017	5	2	0	0
計	5	3	0	0

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした文化史的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 Forschungskolloquium を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実際の運用能力の涵養にあたっては、ネイティブ・スピーカー教員による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努める。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究に積極的に参加して、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこない、海外の研究者との連携も構築する。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、専門家以外を対象とした公開講座をはじめ、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。クラウス・テルゲ特任講師は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめた。大学院では、より高度な内容の文献演習を開設するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、赤尾光春(2016、2017 年度)は、イディッシュ語の文献読解講座やユダヤ文化史に関連する授業を継続的にお願いしている。また集中講義として北島玲子(2016 年度)、藤原辰史(2017 年度)を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

2. 研究

三谷教授は科研費基盤研究(C)「〈ブラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究」(2015 年度より)の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。吉田准教授は、科研費基盤研究(C)「18 世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立」(2016 年度終了)、つづけて「18 世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死-自死を受容する社会と読者の文化史研究」(2017 年度開始)の交付を受けて研究活動をおこなった。テルゲ特任講師は、科研若手研究(B)「Poetics of the here-and-now: German-language poetry after 2000」の交付を受けて研究活動をおこなった。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。

3. 社会連携

三谷教授、吉田准教授は、日本独文学会、日本 18 世紀学会、日本ゲーテ協会、阪神ドイツ文学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、神戸ユダヤ文化研究会、また関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信および還元を図った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

授業をとおしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。*Forschungskolloquium* の開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。論文作成の工程管理についても、全ての学生に共通の問題として指導をおこなった。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考える。

2. 研究

三谷教授、吉田准教授、テルゲ特任講師は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。国内外のシンポジウムや研究会に定期的に参加し国際的な視野で研究活動をすすめている。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究活動を展開、今後とも、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをとおして、目標レベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	3(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(0)
2017	2(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)
計	5(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	5(0)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	1	0	0	0	2
2017	0	1	0	0	0	1
計	1	2	0	0	0	3

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

宇都宮孝太「イダ・ホフマン『菜食主義！ベジタリアニズム！』におけるフェミニズム的主張の役割」『独文学報』第32号, pp.101-110, 2016/11 (査読あり)

〔博士後期〕

島田淳子「越境する『ディブック』プロジェクト 翻訳・上演・シンポジウム」『独文学報』第32号, pp.61-82, 2016/11 (査読あり)

奥山裕介「「小さな世界」への向き直り ヴィルヘルム・トプスー『金羊毛皮もてるイアーソーン』における帰国者のまなざし」『独文学報』第32号, pp.7-36, 2016/11 (査読あり)

【2017年度】

〔博士前期〕

山本鉄平「「感覚」としての世界--ミュージル『寄宿生テルレスの混乱』について」『独文学報』第33号, pp.33-56, 2017/11/1

〔博士後期〕

島田淳子「ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈ブラハのドイツ語文学〉の継受」『〈ブラハのドイツ語文学〉再考』『日本独文学会研究叢書』第123巻, pp.49-62, 2017/9/30

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

山本鉄平“Das Leben als Internet und Computerspiel. Anmerkungen zu Clemens J. Setz' Erzählungen „Der Schläfer erwacht“ und „Kleine braune Tiere“”, オーストリア現代文学ゼミナール, 野沢温泉 (開催地), 2016/11/12

〔博士後期〕

島田淳子「ライネロヴァーとモニーコヴァーにみる〈ブラハのドイツ語文学〉の継受」(シンポジウム〈ブラハのドイツ語文学〉再考), 日本独文学会秋期研究大会, 関西大学, 2016/10/22

【2017年度】

〔博士後期〕

島田淳子「「ボヘミアは海辺にある」ーリブシェ・モニーコヴァーの拡大する中欧像をめぐって」, 世界文学語圏横断ネットワーク第7回研究発表会, 同志社大学, 2017/9/24

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2017年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:3名 大学院:2名 (計5名)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2016年度 『独文学報』32号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

プラハの春研究会 2016年8月

オーストリア現代文学セミナー 2016年11月

18世紀ドイツの言語と文化研究会 2017年2月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会 2016年6月、7月、10月

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士(文学、大阪大学)。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻:ドイツ、オーストリア文学および文化研究

1-1. 論文

三谷研爾「継受される境界文学 マグリス『撞着語法としてのプラハ』再読」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 32, pp. 83-100,

2016/11

1-2. 著書

三谷研爾, 阿部賢一, 川島隆他(共著)『〈プラハのドイツ語文学〉再考』日本独文学会叢書 123, 日本独文学会, pp. 1-8, 2017/9

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

三谷研爾「「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究:ドイツ語圏からの視点」「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究会, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 北海道大学, 2018/3

三谷研爾「日本における〈プラハのドイツ語文学〉研究」ボヘミア・フォーラム第1回大会, ボヘミア・フォーラム, 東京大学, 2016/12

三谷研爾「〈プラハのドイツ語文学〉再考」日本独文学会秋季研究発表会, 日本独文学会, 関西大学, 2016/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:15K02414

研究題目:〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費:2016年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960年代から2000年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテキストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会阪神地区幹事, 2016年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970年生まれ。東京外国語大学外国語学部(ドイツ語学科)卒。2007年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。学術修士(東京外国語大学)。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009年4月より現職。

2-1. 論文

吉田耕太郎「社交熱と孤独:ヨーハン・ゲオルク・ツィーママン『孤独論』の再検討」『文学研究科紀要』58-59, 大阪大学文学研究

科, pp. 141-163, 2018/3

吉田耕太郎 「18世紀の自死をめぐる言説の再検討 1」『ドイツ啓蒙主義研究』14, 大阪大学言語文化研究科, pp. 41-63, 2017/5

吉田耕太郎 「もうひとつの啓蒙論 -『ドイツの雑誌』紙上の懸賞論文(1784年)の再検討」『大阪大学文学研究科紀要』58, 大阪大学文学研究科, pp. 21-34, 2017/3

Yoshida, Kotaro, "Ein anderer Weg der Aufklärung. Christian Garves Kulturtheorie" *Contraste*, 1-1, Wilhelm Fink Verlag, pp. 235-244, 2016/11

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

吉田耕太郎 「親密さを表現する: 書簡文化からみた18世紀の人間関係」日本独文学会, 日本独文学会, 日本大学, 2017/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 吉田耕太郎

課題番号: 24520352

研究題目: 18世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立—『子どもの友』を例に

研究経費: 2016年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、児童文学という書籍ジャンルの成立過程を解明するものである。その際手がかりとなるのは、18世紀のドイツ各地では、『子どもの友』と題された雑誌が同時期に複数出版されていたという書誌データである。『子どもの友』と題された一群の雑誌は、編集者、出版年、出版地が異なるのはもちろん、その構成や内容も、雑誌によって様々であった。しかしこの雑誌の題名が示しているように、子どもを読者として想定していた点は共通していた。本研究は、各種の『子どもの友』のなかに書き込まれた、子どもと印刷メディアとの関係を読み解き、子どもという読者に関する歴史的な言説を総合的に検討するものである。これらの作業を通じて、ジャンルとしての児童文学が誕生してきたことを、文化的な視点から跡付けを試みる。

2-6-2. 2017年度～2020年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 吉田耕太郎

課題番号: 17K02616

研究題目: 18世紀ドイツの印刷メディアのなかの自死 自死を受容する社会と読者の社会史研究

研究経費: 2017年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究は、18世紀ヨーロッパとりわけドイツにおける自死の意味について、印刷メディアという視点からアプローチするものである。この時代、自死をモチーフとする文芸作品が出版されていた。こうした作品が創作され受容されるための背景を、神学、哲学、医学といった言説、多数出版されていた自死報告、書評誌を手がかりに、とりわけ当時の若い読者層がフィクションとしての自死をどのように受容したのかという側面から解明することで、自死をとりまく社会状況ならびに自死の持っていた文化史意味を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会・渉外幹事, 2018年4月～現在に至る

阪神ドイツ文学会・学会誌編集委員, 2016年4月～2018年3月

阪神ドイツ文学会・庶務幹事, 2014年4月～2016年3月

ゲーテ協会・関西支部理事, 2011年6月～2016年5月

3. クラウス・テルゲ 特任講師 (常勤)

Literatur- und Kulturwissenschaftler. Studium der Fächer Angewandte Sprachwissenschaft, Literatur und ästhetische Kommunikation und Politikwissenschaft an der Universität Hildesheim und der Universidad de Valladolid (M. A. 2007). Promotion an der Universität Leipzig und der University of Arizona (Dr. phil./Ph.D. 2015). Von 2009-2010 Teaching Assistant am Department of German Studies der University of Arizona. Promotionsstipendium der Studienstiftung des deutschen Volkes (2009-2013). Von 2013-2015 wissenschaftlicher Mitarbeiter am Institut für Germanistik der Universität Leipzig; seit 2015 Associate Professor für Neuere Deutsche Literatur am Institut für Germanistik der Universität Osaka. 専攻：ドイツ近現代文学。

3-1. 論文

TELGE, Claus, "(De-)Konfigurationen des 'Deutsch-Jüdisch-Seins': Translationsfiktionen bei Maxim Biller"『待兼山論叢』50, 大阪大学文学会, pp. 1-18, 2016/12

TELGE, Claus, "in sich verschlungen sind wir manchmal redundant": Ann Cottens Spiel mit der Sprach-DNA" Eva Binder; Birgit Metz-Baumgartner; Siglinde Klettenhammer *Transkulturelle Lyrik*, 無し, Königshausen & Neumann, pp. 91-107, 2016/11

TELGE, Claus, "Erste Sätze. Christoph Ransmayrs zyklisch-serielle Ursprünglichkeit" Roxanne Barras; Simone Höhn; Mark Ittensohn *Variations*, (Literaturzeitschrift der Universität Zürich), 24, Peter Lang, pp. 165-174, 2016/9

3-2. 著書

TELGE, Claus, *Bruederliche Egoisten. Die Gedichtuebersetzungen aus dem Spanischen von Erich Arendt und Hans Magnus Enzensberger*, Winter, 312p., 2017/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

TELGE, Claus, "Ländliche Liminalität. Anmerkungen zum Werk von Reinhard Kaiser-Mühlecker", Seminar zur österreichischen Gegenwartsliteratur, オーストリア現代文学研究会, 野沢温泉, 2017/11

TELGE, Claus, "Übersetzen als Entharmonisierungsstrategie: Hans Magnus Enzensbergers poésie impure", H. M. Enzensberger / Constellations, Université de Liège, Université de Liège, 2017/4

TELGE, Claus, "Anthologie und Appropriation: Hans Magnus Enzensbergers 'Weltsprache der modernen Poesie'", Symposium 2017 mit Prof. Robert Stockhammer :Welt/Literatur, Tatehshina-Kulturseminar der Japanischen Gesellschaft für Germanistik, Resort Hotel Tatehshina, 2017/3

TELGE, Claus, "Why study Literature?", Careers Exploration Day: Careers Exploration Day, Senri & Osaka International Schools of Kwansai Gakuin, Senri & Osaka International Schools of Kwansai Gakuin, 2016/12

TELGE, Claus, “Am Nullpunkt des Menschseins. Anmerkungen zum Werk von Clemens J. Setz”, オーストリア現代文学ゼミナール: Clemens J. Setz, オーストリア現代文学ゼミナール, Nozawa Onsen, 2016/11

TELGE, Claus, “Displaced Speech: Surface Translation as (Post-)Conceptual Form of Writing in Contemporary German-speaking Poetry”, Internationale Konferenz: Sound / Writing: On Homophonic Translation: Homophone Übersetzungen, 無し, École Normale Supérieure, Paris, 2016/11

TELGE, Claus, “Vom Sinn der Klang oder vom Klang der Sinn. Zur performativen Komik lyrischer Begriffsarbeit”, Herbsttagung : Deutschsprachige Gegenwartsliteratur, Japanische Gesellschaft für Germanistik, Kansai-Universität, 2016/10

TELGE, Claus, “Intermediale (Neu-)Übersetzung: Lisa Oppenheims Filminstallation Cathay”, Forscherkreis Deutschsprachige Japanologie im Kansai : Japanbezogene Forschungsarbeiten DJiK Kolloquium Bibliothek (OPAC) Forscherkreis “Deutschsprachige Japanologie im Kansai JAPANOLOGIE Mitarbeiter Semestertermine Kyōto-Aufenthalt Kyōto-Anmeldung Forschungsaktivitäten Gastvorträge DJiK Kolloquium Bibliothek (OPAC) Forscherkreis Deutschsprachige Japanologie im Kansai, Tübinger Zentrum für Japanstudien (TCJS) in Kyōto, 同志社大学内テュービンゲン大学同志社日本研究センター, 2016/7

TELGE, Claus, “Watching things to work out their own fate: Zur Überlagerung von Text und Bild in Lisa Oppenheims Cathay”, 21. Weltkongress der International Comparative Literature Association : Interferenzen: Dimensionen und Phänomene der Überlagerung in Literatur und Theorie, International Comparative Literature Association, Universität Wien, 2016/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 0 特任准教授 1 助教 1

教授：和田 章男、山上 浩嗣

特任准教授：エリック・アヴォカ

助教：太田 晋介

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	4	4	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	4	2	0	0
2017	3	2	2	0
計	7	4	2	0

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身につける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・講義・演習を通じてフランス文学の基礎知識やフランス語読解の基礎的方法を習得させるとともに、フランス語作文および会話の基礎的能力を養う。
- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。
- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、フランス語運用能力を高めるとともに、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を奨励・支援する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。バックナンバーのデータを OUKA (大阪大学学術情報庫) 上で公開し、「大阪大学フランス文学研究室」サイトからも閲覧できるようにする。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。
- ・フランス文学研究室のホームページ (<http://www.gallia.jp/wordpress/>) を充実させ、研究・教育活動ならびに研究成果をより広く公開する。

3. 社会連携

- ・放送大学テレビ番組「フランス語入門 1」担当の主任講師を務め、フランス語・フランス文化の一般への普及に貢献する。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、中世から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2016 年度には 4 本の、2017 年度には 3 本の、それぞれきわめて優れた卒業論文が提出された。
- ・大学院生の研究指導においては、各セメスターに 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2016 年度の博士前期課程修了者は 2 名であった。うち 1 名は博士後期課程に進学し、研究を継続している。もう 1 名は博士後期課程には進学せず、松山地方裁判所職員に採用された。また、2017 年度の博士前期課程修了者は 2 名であった。その 2 名とも博士後期課程には進学せず、うち 1 名は一般企業に就職した。
- ・2016-2017 年度には、以下の講演会を開催した。
 - ①ミレイユ・ユション氏 (パリ・ソルボンヌ大学名誉教授)、「Poétique : les 'genres d'écriture' au milieu du XVI^e siècle」(「詩法 : 16 世紀中葉の<書き物のジャンル>」)。2016 年 10 月 28 日、主催 : 大阪大学大学院言語文化研究科。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学言語文化研究科 3 階講義室にて。通訳は岩下綾氏 (慶應義塾大学准教授)。
 - ②同上、「Rabelais : art et artifice」(「ラブレール : 技芸と技巧」)。2016 年 10 月 28 日。主催 : 大阪大学大学院言語文化研究科。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学言語文化研究科 2 階大会議室にて。通訳なし。
 - ③関口涼子氏 (作家、詩人)、「味の翻訳、文化の翻訳」。2016 年 12 月 5 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。
 - ④エレヌ・ミション氏 (フランソワ・ラブレール大学准教授)、「La vanité : Écriture et réécritures」(「聖書におけ

るく空しさ」のテーマ、および後代の文学作品におけるその変奏)。2017年2月17日。主催：大阪大学フランス文学研究室。共催：筑波大学大学院人文社会科学研究所哲学・思想専攻。通訳は山上浩嗣。

- ⑤アラン・カンチオン氏（パリ第三大学准教授）、« *Remarques sur la crise présente des Pensées-de-Pascal, et quelques suggestions pour en sortir* »（「パスカル『パンセ』に現れている危機についての考察および、そこから脱却するためのいくつかの提案」）。2017年3月8日。主催：文芸事象の歴史研究会（代表：野呂康・岡山大学准教授）。共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は山上浩嗣。
- ⑥アニエス・ディソン氏（元大阪大学大学院文学研究科外国人教師）、« *Jacques Roubaud : quelques poèmes sur Tokyo, Osaka — et pourquoi le Mont Fuji n'existe pas...* »（「ジャック・ルーボー：東京、大阪に関するいくつかの詩——また、なぜ富士山は存在しないのか……」）。2017年5月15日。主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳は山上浩嗣。
- ⑦イヴァン・グロ氏（台湾中央大学教員）、« *Croquis reporter sémiologue : De la littérature appliquée au journalisme et à la radio* »。2017年5月29日。主催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳なし。
- ⑧ジャンヌ・ベム氏（サール大学名誉教授）、« *Revisiter Désir et savoir dans l'œuvre de Flaubert. Étude de La Tentation de saint Antoine* »。2017年6月5日。主催：科研費研究課題「フローバール『聖アントワーヌの誘惑』におけるファム・ファタル神話研究」（代表：大鐘敦子・関東学院大学教授）。共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳なし。
- ⑨ナタリー・プライス氏（ランス大学教授）、« *Balzac et l'illustration* »（「バルザックと挿絵」）。2017年9月22日。主催：大阪大学フランス文学研究室。後援：日本バルザック研究会、日仏美術学会、日本フランス語フランス文学会関西支部。大阪大学文学部本館2階大会議室にて。通訳は松村博史氏（近畿大学文芸学部教授）。
- ⑩コリンヌ・アトラン氏（日本文学翻訳家・作家）、« *Lire, écrire, traduire* »（「書くこと、読むこと、訳すこと」）。2017年11月20日。主催：大阪大学文学研究科国際的・社会的連携型人文学研究教育クラスター「役割語・キャラクター言語から見た翻訳研究」主催講演会。共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は山上浩嗣。

・2016年度には、交換留学制度を利用し、学部生1名がフランスに、学部生1名が米国に留学した。

2. 研究

- ・2016年度、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌『関西フランス語フランス文学』（22号）に博士後期課程学生2名の論考が掲載された。2017年度、同誌（23号）に博士後期課程学生1名の論考が掲載された。
- ・2016年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会秋季大会にて、博士後期課程学生の1名が発表した。また、日本フランス語フランス文学会関西支部大会にて、博士後期課程学生の1名が発表した。2017年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会秋季大会にて、博士後期課程学生の1名が発表した。
- ・2016年度より、博士後期課程学生の1名が、フランス政府給費留学生に採用された。
- ・2016年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として10月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』56号を「金崎春幸教授・春木仁孝教授退職記念号」として刊行、7本の学術論文（うち4本はフランス語で）、金崎、春木両教授の略歴・研究業績一覧、両教授の思い出に関するエッセー17本を収めた。2017年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として10月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』57号を刊行、8本の学術論文（うち3本はフランス語で）、ジャック・ルーボー氏によるエッセー、アニエス・ディソン氏の講演原稿、原亨吉先生追悼小特集のエッセー3本を収めた。
- ・毎年、関西の大学でフランス文学を研究する大学院生が合同の研究発表会として、「関西学生フランス文学研究会」を開催している。2016年度は9月1日に京都大学にて開催し、大阪大学からは大学院生2名が発表した。2017年度は8月31日に関西学院大学にて開催し、大阪大学からは2名が発表した。現在のところ、参加大学は、大阪大学、京都大学、神戸大学、関西学院大学の4校だが、今後さらに増やしたい。

- ・2016年度まで、『ガリア』所収論文は刊行の1年後に OUKA にて公開していたが、2017年度からは刊行後すぐに OUKA でも公開することになった。

3. 社会連携

- ・和田教授が、次の一般向け講演を行った。「パリが変わる！——パリ大改造と詩人ボードレール」(リーガクラブ講演会、リーガロイヤル・ホテル「桐の間」、2017年6月14日)。
- ・和田教授が、「エコール ド ロイヤル」(リーガロイヤルホテルの会員制カルチャースクール)にて、「世界遺産——歴史と文化を巡る旅：フランス」という題で3回の連続講演を行った(リーガロイヤル・ホテル「梅の間」、2017年7～9月)。
- ・山上教授が放送大学客員教授としてテレビ講座「フランス語入門Ⅰ」を担当した(2012-2017年度)。
- ・山上教授が、次のラジオ番組に出演した。みのおFM「まちのラジオ(大阪大学社会学連携事業)」(2016年9月8日)
- ・山上教授が、次の講演を行った。「パスカル『パンセ』入門——「考える葦」から「賭け」へ」(空気調和・衛生工学会近畿支部記念講演、ガーデンシティクラブ大阪、2017年5月19日)。
- ・山上教授が、次の講演を行った。「パスカル『パンセ』入門——「考える葦」から「賭け」へ」(ラスタ教養大学・言葉文化コース、伊丹ラスタホール、2017年10月16日)

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。

学外の研究者、詩人による講演会を、2016年度は5回、2017年度も同じく5回開催し、研究交流を推進した。とりわけフランス語による講演会で、いつも学生たちから活発な質問が出されることは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

2016年度、博士後期課程の学生1名が、フランス政府給費留学生に採用された。

3. 社会連携

教員の1名が放送大学客員教授(2015年度から客員教授)として2012年開講のテレビ講座「フランス語入門Ⅰ」を担当(2017年度まで継続)することにより、社会連携の目標も達成している。また研究室のホームページおよび OUKA(大阪大学学術情報庫)上で公開している『ガリア』誌掲載論文へのアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	2(2)	1(0)	1(1)	0(0)	0(0)	4(3)
2017	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)
計	4(4)	1(0)	1(1)	0(0)	0(0)	6(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	1	2	0	0	3
2017	0	2	2	0	0	4
計	0	3	4	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

安達孝信 『『パリの胃袋』のチーズ交響曲をめぐる自然主義のポエジー : バルベールによる批判とユイスマンスの擁護』

『GALLIA』第56号, pp.51-60, 2017/3/4

安達孝信 「ユイスマンスの自然主義小説における理想的画家像の変遷-『ヴァタール姉妹』から『所帯』へ-」『関西フランス語フランス文学』第22号, pp.39-49, 2016/5

川上紘史 「アルノー『頻繁なる聖体拝領』に見る行為と意志の関係」『待兼山論叢』第50号, pp.85-117, 2016/12

川上紘史 「パスカルにおける好奇心-アルノー、ジャンセニウスと比較して-」『関西フランス語フランス文学』第23号, pp.3-14, 2017/3

【2017年度】

〔博士後期〕

植村実江 「スタール夫人『ルソーに関する書簡』における天才の概念」『待兼山論叢』第51号, pp.101-116, 2017.12

植村実江 「スタール夫人における天才像 — ルソー、ディドロとの比較において —」『Gallia』第57号, pp. 23-33, 2018.03

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

水田博子「エレヌ・シクスーDedans におけるエクリチュールの実験」, 関西学生フランス文学研究会, 京都大学, 2016/9/1

宮田駿介『『失われた時を求めて』における気候療法』, 関西学生フランス文学研究会, 京都大学, 2016/9/1

〔博士後期〕

川上紘史「パスカルとアルノーの好奇心観比較」, 日本フランス語フランス文学会関西支部大会, 大阪大学, 2016/11/26

【2017年度】

〔博士前期〕

道廣 千世 「ロマンティック・バレエにおける男の美醜とニジンスキー」, 第6回関西学生フランス文学大会, 関西学院大学, 2017/8/31

〔博士後期〕

安達孝信「ゾラ『クロードの告白』における「郊外」から「自然」への道—ゴンクール兄弟『ジェルミニー・ラセルトゥー』書評を通して」日本フランス語フランス文学会秋季大会, 名古屋大学, 2017/10/28

植村 実江「スタール夫人における天才像」大阪大学フランス語フランス文学会第81回研究会, 大阪大学, 2017/10/7

川上 紘史「パスカルにおける意志に基づく認識について」, 第6回関西学生フランス文学研究会, 関西学院大学, 2017/8/31

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 2名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計4名)

2017年度 PD: 2名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計4名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 2名 大学院: 3名 (計5名)

2017年度 学部: 2名 大学院: 4名 (計6名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

足立和彦 博士後期課程単位取得退学、名城大学法学部、准教授、2016/4

谷口智美 博士後期課程単位取得退学、辻静雄料理教育研究所、研究員、2017/4

林千宏 博士後期課程修了、大阪大学大学院言語文化研究科、准教授、2017/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2016 年度 : 1 名 2017 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2016 年度 *GALLIA*(機関誌 : 大阪大学フランス語フランス文学会) n°56

2017 年度 *GALLIA*(機関誌 : 大阪大学フランス語フランス文学会) n°57

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第 79 回)(国内学会)、2016 年 10 月 1 日

ミレイユ・ユション氏(パリ・ソルボンヌ大学名誉教授)講演会、「Poétique : les 'genres d'écriture' au milieu du XVI^e siècle»(「詩法 : 16 世紀中葉の<書き物のジャンル>」)。2016 年 10 月 28 日、主催 : 大阪大学大学院言語文化研究科。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学言語文化研究科 3 階講義室にて。通訳は岩下綾氏(慶應義塾大学准教授)。

同上講演会、「Rabelais : art et artifice」(「ラブレール : 技芸と技巧」)。2016 年 10 月 28 日。主催 : 大阪大学大学院言語文化研究科。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学言語文化研究科 2 階大会議室にて。通訳なし。

関口涼子氏(作家、詩人)講演会、「味の翻訳、文化の翻訳」。2016 年 12 月 5 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。

エレヌ・ミション氏(フランソワ・ラブレール大学准教授)講演会、「La vanité : Écriture et réécritures」(「聖書における<空しさ>のテーマ、および後代の文学作品におけるその変奏」)。2017 年 2 月 17 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。共催 : 筑波大学大学院人文社会科学研究科哲学・思想専攻。通訳は山上浩嗣。

大阪大学フランス語フランス文学会(第 80 回)(国内学会)、2017 年 3 月 4 日

アラン・カンチオン氏(パリ第三大学准教授)講演会、「Remarques sur la crise présente des Pensées-de-Pascal, et quelques suggestions pour en sortir」(「パスカル『パンセ』に現れている危機についての考察および、そこから脱却するためのいくつかの提案」)。2017 年 3 月 8 日。主催 : 文芸事象の歴史研究会(代表 : 野呂康・岡山大学准教授)。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。通訳は山上浩嗣。

アニエス・ディソン氏(元大阪大学大学院文学研究科外国人教師)講演会、「Jacques Roubaud : quelques poèmes sur Tokyo, Osaka — et pourquoi le Mont Fuji n'existe pas...」(「ジャック・ルーボー : 東京、大阪に関するいくつかの詩——また、なぜ富士山は存在しないのか...」)。2017 年 5 月 15 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。通訳は山上浩嗣。

イヴァン・グロ氏(台湾中央大学教員)講演会、「Croquis reporter sémiologue : De la littérature appliquée au journalisme et à la radio」。2017 年 5 月 29 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。通訳なし。

ジャンヌ・バム氏(サール大学名誉教授)講演会、「Revisiter *Désir et savoir dans l'œuvre de Flaubert. Étude de La Tentation de saint Antoine*」。2017 年 6 月 5 日。主催 : 科研費研究課題「フローバール『聖アントワヌの誘惑』におけるファミ・ファタル神話研究」(代表 : 大鐘敦子・関東学院大学教授)。共催 : 大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。通訳なし。

ナタリー・プライス氏(ランス大学教授)講演会、「Balzac et l'illustration」(「バルザックと挿絵」)。2017 年 9 月 22 日。主催 : 大阪大学フランス文学研究室。後援 : 日本バルザック研究会、日仏美術学会、日本フランス語フラン

ス文学会関西支部。大阪大学文学部本館 2 階大会議室にて。通訳は松村博史氏（近畿大学文芸学部教授）。
大阪大学フランス語フランス文学会(第 81 回)(国内学会)、2017 年 10 月 7 日
コリンヌ・アトラン氏（日本文学翻訳家・作家）講演会、「Lire, écrire, traduire」（「書くこと、読むこと、訳すこと」）。
2017 年 11 月 20 日。主催：大阪大学文学研究科国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター「役割語・キャラクター
一言語から見た翻訳研究」主催講演会。共催：大阪大学フランス文学研究室。大阪大学文学部本館中庭会議室にて。
通訳は山上浩嗣。
大阪大学フランス語フランス文学会(第 82 回)(国内学会)、2018 年 3 月 3 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学フランス語フランス文学会(第 79 回)(国内学会)、2016 年 10 月 1 日
大阪大学フランス語フランス文学会(第 80 回)(国内学会)、2017 年 3 月 4 日
大阪大学フランス語フランス文学会(第 81 回)(国内学会)、2017 年 10 月 7 日
大阪大学フランス語フランス文学会(第 82 回)(国内学会)、2018 年 3 月 3 日

12. 教員の研究活動(2016 年度～2017 年度の過去 2 年間)

1. 和田 章男 教授

1954 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士（文学）。大阪大学文学部助手、言語文化
部講師、助教授を経て、1993 年大阪大学文学部助教授、1999 年文学研究科助教授、2004 年より現職。専攻：フランス
文学

1-1. 論文

和田章男 「プルーストとワーグナー受容—啓示としての『パルジファル』」『STELLA』36, 九州大学フランス語フランス文学研究会,
pp. 85-99, 2017/12
Wada, Akio, “Illiers dans la genèse de « Combray » : la photographie et la mémoire”, *Proust et Alain Fournier. La transgression
des genres 1913-1914*, Honoré Champion, pp. 27-35, 2017/3
和田章男 「プルーストとショパン」『STELLA』35, 九州大学フランス語フランス文学研究会, pp. 85-99, 2016/12

1-2. 著書

和田章男, 春木仁孝, 井元秀剛他 『新・フランス語文法(三訂版)』朝日出版社, 103p., 2017/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

和田章男 「吉川佳英子『失われた時を求めて』と女性たち—サロン・芸術・セクシュアリティ—」『Cahier』18, 日本フランス語フラン
ス文学会, pp. 27-28, 2016/9

1-4. 口頭発表

和田章男 「プルーストとベートーヴェン受容」定例研究会, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2018/3
和田章男 「モダニズムの詩—エッフェル塔とミラボー橋—」エコールドロイヤル「世界遺産—歴史と文化を巡る旅:フランス(3), リ
ーガロイヤル文化教室, 懐徳堂記念会, リーガロイヤル・ホテル, 2017/9
和田章男 「ナポレオン神話とモニュメント」エコールドロイヤル「世界遺産—歴史と文化を巡る旅:フランス(2), リーガロイヤル文化
教室, 懐徳堂記念会, リーガロイヤル・ホテル, 2017/8
和田章男 「ヴェルサイユ宮殿を巡る—バロックからロココへ—」エコールドロイヤル「世界遺産—歴史と文化を巡る旅:フランス(1),
リーガロイヤル文化教室, 懐徳堂記念会, リーガロイヤル・ホテル, 2017/7
和田章男 「パリが変わる—パリ大改造と詩人ボードレール—」リーガクラブ講演会, リーガクラブ, リーガロイヤル・ホテル, 2017/6

和田章男「プルーストとワーグナー批評」定例研究会, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2017/4

Wada, Akio, "Proust et la critique wagnérienne", Proust et la critique, 京都大学, 2016/12

和田章男「プルーストとワーグナー受容」定例研究会, 関西プルースト研究会, 京都大学, 2016/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C)一般、代表者:和田章男

課題番号:17K02593

研究題目:プルーストにおける音楽受容と小説創造

研究経費:2017年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

マルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』は、文学・芸術論の小説化とみなせるほどに実在の芸術家・芸術作品への言及や暗示を多く含んでいる。本研究では、プルーストにおける音楽受容と小説創造の関係に焦点を当て、草稿や書簡の調査・分析に基づいて実在の作曲家や音楽作品が小説の中にいつどのように導入され、いかなる変容をとげたかを明らかにするとともに、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのフランス、特にパリにおける音楽演奏の記録、および新聞・雑誌等の批評言説を調査し、プルーストの音楽観を音楽受容史・批評史の中に位置づけ、相対化することを目的とする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会関西支部・支部長, 2017年11月～現在に至る

大阪大学フランス語フランス文学会・会長, 2008年4月～現在に至る

関西プルースト研究会・世話役, 2005年9月～現在に至る

2. 山上 浩嗣 教授

1966年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。パリ・ソルボンヌ大学にて文学博士号取得(2010年)。東京大学大学院総合文化研究科助手、関西学院大学社会学部専任講師、同准教授、同教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2015年より現職。放送大学客員教授も務める(2015年～)。

2-1. 論文

山上浩嗣「デイドロ『サロン』抄訳(3)」『大阪大学大学院文学研究科紀要』58, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 101-140, 2018/3

山上浩嗣「山上浩嗣「デイドロ『サロン』抄訳(2)」」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 33-94, 2017/3

2-2. 著書

山上浩嗣, 寺田寅彦(共著)『2017年度版 仏検公式ガイドブック 準1級』公益財団法人 フランス語教育振興協会, pp. 13-166, 2017/4

春木仁孝, 井元秀剛, 山上浩嗣他『新・フランス語文法(三訂版)』朝日出版社, pp. 82-85, 2017/1

山上浩嗣『パスカル『パンセ』を楽しむ—名句案内40章』講談社学術文庫, 272p., 2016/11

荒木善太, 平野隆文, 山上浩嗣 『2016年度版 仏検公式ガイドブック 1級』公益財団法人 フランス語教育振興協会(APEF), pp. 157-215, 2016/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第12回(最終回)「一週間と全生涯」」『ふらんす』2018年3月号, 白水社, pp. 46-47, 2018/2
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第11回「外見の美」」『ふらんす』2018年2月号, 白水社, pp. 46-47, 2018/1
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第10回「政治と慈愛」」『ふらんす』2018年1月号, 白水社, pp. 46-47, 2017/12
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第9回「正義の不在」」『ふらんす』2017年12月号, 白水社, pp. 46-47, 2017/11
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第8回「狩りと獲物」」『ふらんす』2017年11月号, 白水社, pp. 46-47, 2017/10
- 山上浩嗣(書評) 「保苺瑞穂著『モンテーニュの書斎—『エッセー』を読む』(講談社, 2017年)—『エッセー』の魅力を、語りかけるような文体で説く」『図書新聞』2017年9月16日号(3319号), pp. 4-4, 2017/9
- 山上浩嗣, 望月ゆか(共訳) 「エレヌ・ミション「空しさ—聖書とその文学的変奏」」『思想』1122号(2017年10月号), 岩波書店, pp. 129-151, 2017/9
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第7回「習慣と直感」」『ふらんす』2017年10月号, 白水社, pp. 46-47, 2017/9
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第6回「身体と人間の有限性」」『ふらんす』2017年9月号, 白水社, pp. 46-47, 2017/8
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第5回「(圧政)と精神の自由」」『ふらんす』2017年8月号, 白水社, pp. 44-45, 2017/7
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第4回「固定点」」『ふらんす』2017年7月号, 白水社, pp. 44-45, 2017/6
- 山上浩嗣(書評) 「フィリップ・セリエ著『聖書入門』支倉崇晴・支倉寿子訳, 講談社選書メチエ, 2016年」『ふらんす』2017年6月号, 白水社, pp. 70-70, 2017/5
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第3回「夢とうつつ」」『ふらんす』2017年6月号, 白水社, pp. 44-45, 2017/5
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第2回「天使と獣」」『ふらんす』2017年5月号, 白水社, pp. 44-45, 2017/4
- 山上浩嗣(エッセー) 「『寝るまえ5分のパスカル『パンセ』入門』第1回「信仰と理性」」『ふらんす』2017年4月号, 白水社, pp. 74-75, 2017/3
- 山上浩嗣(エッセー) 「パスカル『パンセ』の楽しみ」『本』2016年12月号, 講談社, pp. 54-55, 2016/11

2-4. 口頭発表

- 山上浩嗣 「パスカル『パンセ』入門—「考える葦」から「賭け」へ」ラスタ教養大学・言葉文化コース, 伊丹ラスタホール(伊丹市立生涯学習センター), 伊丹ラスタホール(伊丹市立生涯学習センター), 2017/10
- 山上浩嗣 「パスカル『パンセ』入門—「考える葦」から「賭け」へ」空気調和・衛生工学会近畿支部記念講演, 空気調和・衛生工学会近畿支部, ガーデンシティクラブ大阪(ハービス OSAKA6階), 2017/5
- 山上浩嗣 「モンテーニュにおける「気をそらすこと」と「自己を自己からそらさないこと」」関西シェイクスピア研究会例会特別講演, 関西シェイクスピア研究会, 関西学院大学大阪梅田キャンパス, 2016/12

山上浩嗣 「モンテーニュにおける「気をそらすこと」と「自己を自己からそらさないこと」」十三社会思想研究会例会，十三社会思想研究会，大阪大学豊中キャンパス，2016/12

山上浩嗣 「パスカルの「気晴らし」(divertissement)とモンテーニュの「気をそらすこと」(diversion)」「フランス近世の〈知脈〉」第2回研究会，大阪大学フランス文学研究室，大阪大学豊中キャンパス，2016/7

山上浩嗣 「フランス現代小説の楽しみ」平成 28 年度三丘(さんきゅう)セミナー，大阪府立三国丘高校，大阪府立三国丘高校，2016/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山上浩嗣 平成 25 年度「科研費」審査委員表彰者，日本学術振興会，2013/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:26370356

研究題目:パスカルとモンテーニュの人間学および『ポール=ロワイヤル論理学』の研究

研究経費:2016 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究課題「パスカルとモンテーニュの人間学および『ポール=ロワイヤル論理学』の研究」は、1)パスカルの人間学を、草稿資料をも用いて、彼自身のテキストに即して総合的に観察すること、2)パスカル思想に対するモンテーニュの影響について、二人の作品の比較を通じて実証的に考察すること、3)『ポール=ロワイヤル論理学』に対するパスカルの影響について検討するために、最新の批評校訂版に基づいて原著の翻訳・注解を行うこと、を主たる目的とする。以上、文献学的方法を通じて、フランス16・17世紀の思想潮流の変遷の一端を明らかにする。

2-6-2. 2017 年度～2021 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山上浩嗣

課題番号:17K02594

研究題目:パスカル『パンセ』の人間学—文献学的研究ならびにモンテーニュ思想との比較研究

研究経費:2017 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究課題は、1)『パンセ』の全断章を、草稿資料も用いて正確に解釈すること、2)モンテーニュ『エッセー』がパスカル『パンセ』に及ぼした影響について、前者から後者への「継承」の側面のみならず「反発」の側面も明らかにし、パスカルの独自の思想形成の過程を精緻にたどること、を主たる目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・関西支部代表幹事，2015 年 6 月～2017 年 11 月

フランス語教育振興協会(APEF)・専門委員，2014 年 1 月～2017 年 12 月

3. AVOCAT ERIC MARC 特任准教授(常勤)

1972 年生まれ。高等師範学校エコール・ノルマル・シュペリウール卒業。ギリシア・ラテン古典文学大学教授資格取得。フランス文学博士。イエール大学(1995-1996年)、京都大学(2005-2015年)で教員を務める。フランスのリセでの教員経験もある。専攻：フランス文学

3-1. 論文

Avocat Eric Marc, “La démocratie poétique de Christian Prigent. Tumultes et mouvements divers à l’assemblée des mots”
Christian Prigent : trou(v)er sa langue, (Colloque de Cerisy (dir. Bénédicte GORRILLOT & Fabrice THUMEREL)), Hermann, pp. 281-296, 2017/5

Avocat Eric Marc, “Les hommes d’argent, l’argent dans la société : Fortune théâtrale d’un type dramatique et d’une question politique (1/2 : le XVIIIe siècle)” *Gallia*, 10, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 41-50, 2017/3

Avocat Eric Marc, “Les mazarinades, une préface à la Révolution ?” *Histoire et civilisation du livre, Revue internationale*, (Bibliothèque Mazarine, Bibliothèque Nationale de France), 17, Droz, pp. 323-339, 2016/12

Avocat Eric Marc, “Du théâtre à la théâtralité : la scène parlementaire et la pluralité des mondes dramaturgiques” *Dramaturgies du conseil et de la délibération*, (Université de Rouen), 13, Publications électroniques du CEREdI, pp. 1-13, 2016/10

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Avocat Eric Marc, “De l’usage des conflits en démocratie : fureurs et mystères de l’art oratoire pendant la Révolution française”, colloque international Transitions au pays de la civilité, groupe Transitions (Université Paris-3 Sorbonne-Nouvelle), Université Nationale Centrale de Taiwan, 2017/11

Avocat Eric Marc, “République, démocratie, etc. : la question des régimes politiques et ses échos dans le corpus du Projet Mazarinades”, L’exploration des Mazarinades, Tadako Ichimaru et Patrick Rebollar, 東京大学, 2016/11

Avocat Eric Marc, “Le parcours des hommes d’argent du dix-huitième siècle à la Révolution française, vu du théâtre : une comédie (in)humaine”, 大阪大学フランス語フランス文学会第 79 回研究会, 大阪大学フランス語フランス文学会, 大阪大学, 2016/10

Avocat Eric Marc, “Parole dévaluée, inflation verbale : la rhétorique saisie par l’économie”, Le retour du comparant, Xavier Bonnier et Ariane Ferry, Université de Rouen, 2016/6

Avocat Eric Marc, “Argent et rapports sociaux sur la scène française du XVIIIe siècle et de la Révolution”, Fiction et économie, Département de sciences économiques, Université Paris-I, 2016/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:AVOCAT ERIC MARC

課題番号:26370355

研究題目:The political scene and the dramatic stage at the time of the French Revolution

研究経費:2016 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

I made 3 research trips to France, in order to give 2 lectures (June 2016), and to finish writing 3 research papers (still to be published):- June 2: lecture on “Money and social relationships in France’s 18th century theater”, at the University Paris-I (I was invited to talk in the seminar “Fiction and economy”, organized by the sections of economic sciences and philosophy).
- June 8: “Rhetoric and its monetary metaphors”, talk given for the international symposium “Le retour du comparant” (about

comparisons in literature), University of Rouen.

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・学会誌編集委員, 2011年6月～現在に至る

2-19 英語学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：岡田 禎之、加藤 正治、神山 孝夫

准教授：田中 英理

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
36	6	5	0	0	2	1	0

*うち留学生 2名、社会人学生 3名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	21	1	0	0
2017	10	1	1	0
計	31	2	1	0

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

大学院に関する目標は、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、言語変化論、生成文法、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2) 修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3) 国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1) 機能文法、(形式)意味論、語用論、認知言語学、音声学、言語変化論、生成文法、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2) 卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書けるように教育・指導すること、(3) 中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や授業形態等に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を編纂してホームページに掲載することで、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生

に連絡することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約400部を送付する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室のHPを充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部では、学校文法、機能文法、(形式)意味論、語用論、音声学、生成文法、歴史言語学関係の講義と演習のほか卒業論文作成演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、(形式)意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を編纂し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告した。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 本(2016年度に4本、2017年度に10本)、口頭発表が 本(2016年度に10本、2017年度に6本)と活発に行われた。OUPELについても2017年度に予定通り18号を刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催した。

3. 社会連携

教室のHPは逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会(関西支部)、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、Japanese/Korean Linguistics や各種大会の論文審査員の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会、関西言語学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	3(3)	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(3)
2017	2(2)	1(0)	7(0)	0(0)	0(0)	10(2)
計	5(5)	2(0)	7(0)	0(0)	0(0)	14(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	3	4	3	0	0	10
2017	1	1	4	0	0	6
計	4	5	7	0	0	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

平山裕人「Be said to V as an evidential construction」『English Linguistics』第33巻第1号, pp.88-99, 2016/6/1

〔博士後期〕

山口麻衣子「A new approach to the mystery of the factivity in root transformation」『JELS』第33巻, pp.188-194,

2016/4/1

山口真史「On nominal depictive predicates: a view from agreement」『JELS』第33巻, pp.195-201, 2016/4/1

水谷謙太「The rescuing effect of the focus particle 'dake」『待兼山論叢 (文学篇)』第50巻, pp.65-84, 2016/12/26

【2017年度】

〔博士前期〕

Asahi Shota “An Attempt at Analyzing Verbal Ironies and Jokes” 『OUPEL』第18巻, pp.1-7, 2017/12/20

Tanaka ryoko “Contrastive Marked Exclusive Focus Particles in Japanese: A Case of Dake-wa,” 『OUPEL』第18巻, pp.55-65, 2017/12/20

〔博士後期〕

Hirayama Yuto “Asymmetry between evidentials” 『Kansai Linguistic Society』第37巻, pp.181-192, 2017/6/7

Hirayama Yuto “The possibility of licensing floating quantifiers in purely semantic terms” 『OUPEL』第18巻, pp.9-26, 2017/12/20

Mizutani Kenta “Decomposing Individual-level Gradable Adjectives” 『Kansai Linguistic Society』第37巻, pp.205-216, 2017/6/7

Kikuchi Yuki “Word Formation Processes of A-ishness and A-ishly: A Construction-Based Approach” 『待兼山論叢』第51巻文学篇, pp.63-82, 2017/12/20

Kikuchi Yuki “A Review on the Suffix -Free Related to Negation and Spatial Cognition” 『OUPEL』第18巻, pp.27-37, 2017/12/20

Mizutani Kenta “Adverbs of Quantification, Individual-level Predicates, and their Interaction with the adjective only” 『OUPEL』第18巻, pp.39-53, 2017/12/20

Yamaguchi Maiko “A Note on Dialectal Variation in the Embedded Main Clause Phenomena in English.” 『OUPEL』第18巻, pp.67-81, 2017/12/20

Yamaguchi Masashi “On Predication in Augmented Absolute Adjuncts: Toward the Unified Licensing Condition of Secondary Predication” 『OUPEL』第18巻, pp.83-98, 2017/12/20

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

平山裕人 “Evidentials and presupposition resolution”, English linguistics Society of Japan 9th International Spring Forum 2016, 神戸市外国語大学, 2016/4/23

平山裕人 “Asymmetry between evidentials”, 関西言語学会 41 回大会, 龍谷大学, 2016/6/11

〔博士後期〕

山口麻衣子 “Head movement and its consequences in the right periphery”, English linguistics Society of Japan 9th International Spring Forum 2016, 神戸市外国語大学, 2016/4/23

山口真史 “On maintaining direct object restriction”, English linguistics Society of Japan 9th International Spring Forum 2016, 神戸市外国語大学, 2016/4/23

山口真史 "On the Syntactically Unified Approach to the Resultatives" 大阪大学国際交流プロジェクト研究発表会 2016/6/10

水谷謙太 “Decomposing individual-level gradable adjectives”, 関西言語学会 41 回大会, 龍谷大学, 2016/6/11

水谷謙太 “Arguments for the situation-based approach of adverbial quantifiers and the consequences”, 東海意味論研究会, 名古屋学院大学, 2016/7/10

水谷謙太「焦点副詞『だけ』の救済効果」, 第97回待兼山ことばの会, 大阪大学文学部, 2016/8/5

水谷謙太「状況意味論に基づく量化副詞の分析に対する新たな証拠」, 日本英語学会 34 回大会, 金沢大学, 2016/11/12

菊池由記「構文形態論の視点から見た A-ishness/A-ishly の派生語形成」, 日本英語学会 34 回大会, 金沢大学, 2016/11/12
【2017 年度】

〔博士後期〕

水谷健太「日本語の量化副詞について」, 東海意味論研究会, 名古屋外国語大学, 2017/4/29

Hirayama Yuto “The time quantification by floating proportional quantifier 'hotondo' and sub-interval property” ,
関西言語学会 42, 京都大学, 2017/6/10

Yamaguchi Masashi “A Theoretical Approach to the Direct Object Restriction” , 大阪大学国際共同研究推進プログラム,
大阪大学, 2017/6/16

森藤庄平「完了-ed の構文的機能について」, 大阪大学国際共同研究推進プログラム, 大阪大学, 2017/6/16

平山裕人 “Temporal precedence as a component of evidentials: a case study of a Japanese indirect evidential” ,
第 100 回待兼山ことばの会, 大阪大学, 2017/8/5

Hirayama Yuto “The syntax and semantics of the Japanese pseudo-partitive construction” , Japanese/Korean
Linguistics 25, ハワイ大学, 2017/10/13

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2017 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 1 名)

2017 年度 学部 : 2 名 大学院 : 0 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2016 年度～2017 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

田中秀治 博士後期課程 三重大学 講師 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016 年度～2017 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2016 年度 : 1 名 2017 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

- 2016年度 OLR (*Osaka Literary Review*) No. 55 2016/12
2017年度 OUPPEL (*Osaka University Papers in English Linguistics*) Vol. 18 2017/12
OLR (*Osaka Literary Review*) No. 56 2017/12

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

シンポジウム開催 2016年6月4日 “Nominalization Festival 2”

講演者：柴谷方良(ライス大学)、有田節子(立命館大学)、田村幸誠(大阪大学)、鄭聖汝(大阪大学)
Akua Campbell (ライス大学)、Haowen Jiang (ライス大学)

シンポジウム開催 2017年7月8日 “Nominalization Festival 3”

講演者：柴谷方良(ライス大学)、米田信子(大阪大学)、堂山英次郎(大阪大学) Yuki-shige Tamura
(Osaka University)、Haowen Jiang (ライス大学)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 49回大会	2016年10月22日
第96回待兼山ことばの会	2016年6月4日
第97回待兼山ことばの会	2016年8月5日
阪大英文学会 50回大会	2017年10月28日
第98回待兼山ことばの会	2017年7月8日
第99回待兼山ことばの会	2017年8月4日
第100回待兼山ことばの会	2017年8月5日

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001年)。第37回市河賞(2003年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：英語学

1-1. 論文

岡田禎之 「身体部位名詞の概念拡張と連語環境における意味分布の初期調査」『ことばのパースペクティブ』単行本, pp. 174-185, 2018/3

岡田禎之 「高等学校・英語科授業における英語の補部構造の教授に関する一提案: 事態の結束性と記号上の距離に焦点をつけて」『大阪大学教育学年報』(大阪大学人間科学部教育学研究室), 23, pp. 169-179, 2018/3

岡田禎之 「叙述文脈と連語文脈における概念拡張分布の相関について」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 51-文化動態論篇, pp. 1-19, 2017/12

岡田禎之 「拡張概念の定着化と項・付加詞の解釈分布について」『認知言語学論考』13, ひつじ書房, pp. 107-137, 2016/9

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

岡田禎之「テキストの結束関係と名詞の語彙概念拡張」神戸大英文学会 招待講演 (神戸市外国語大学), 2017/12

Okada, Sadayuki, "The Asymmetry of Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts.", Corpus Linguistics 2017, International corpus linguistics society, University of Birmingham, 2017/7

Okada, Sadayuki, "Conceptual expansions of body part nouns and their distributions in predicational and modificational contexts", Workshop on Nominalization, University of California, Los Angeles, University of California, Los Angeles, 2017/3

岡田禎之「身体部位名詞の概念拡張と語の接続関係について」日本英語学会 34 回大会, 日本英語学会シンポジウム司会および講師として, 金沢大学, 2016/11

Okada, Sadayuki, "Lexicalization of extended references of nominals and argument-adjunct asymmetry", UK Cognitive Linguistics Conference 6, UK Cognitive Linguistics Association, Bangor University, Wales, 2016/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:25370551

研究題目:語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費:2016 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2017 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に関して、項位置と付加詞位置における概念拡張可能性には非対称的な関係があることを、英語や日本語を中心としてコーパスからデータを集積し、証明するとともに、意味変化の方向性として、項位置において発現した新しい意味解釈が慣習化することによって、付加詞位置にも浸透していくという意味変化の方向性を仮定し、これを検証していく。このためには、現代語のコーパスだけではなく歴史的なデータコーパスの集積、検証も必要であり、またある程度広範な名詞表現についての検証を行わなければならないため、多くの時間と労力が必要となる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・監事, 2016 年 4 月～2018 年 3 月

言語系学会連合・監事, 2016 年 4 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

阪大英文学会・幹事, 2010 年 4 月～現在に至る

2. 加藤 正治 教授

1955 年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979 年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。

専攻: 英語学

2-1. 論文

加藤正治 「Witkoš (2004)において提案されている there 構文の分析について」『英米研究』(大阪大学英米学会), 42, 大阪大学英米学会, pp. 41-49, 2018/3

加藤正治 「“There + Modal + Subj + V”の構文について」西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男(共編)『ことばを編む』開拓社, pp. 82-89, 2018/2

加藤正治 「句構造規則の集大成 Ray Jackendoff, X Syntax: A Study of Phrase Structure. Cambridge, Mass: The MIT Press, 1977. xii+29pp.」『関西英文学研究』(日本英文学会関西支部), 10, 日本英文学会関西支部, pp. 51-55, 2017/1

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 神山 孝夫 教授

1958年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

3-1. 論文

神山孝夫 「ズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳・註〔V〕」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 24, 日本古代ロシア研究会, pp. 13-23, 2017/8

Kamiyama, Takao, “Српскохрватски акценат – увод у генеративну фонологију српскохрватских именица” *Slavic Eurasian Studies*, (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター), 31, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, pp. 64-98, 2017/3

Kamiyama, Takao, “Српскохрватски акценат – увод у генеративну фонологију српскохрватских именица” *Студије о Србима*, (Матица српска(セルビア・アカデミー)), 22, Матица српска(セルビア・アカデミー), pp. 64-98, 2017/3

神山孝夫 「名誉会員の業績に学ぶ: 松本克己」『歴史言語学』(日本歴史言語学会), 5, 日本歴史言語学会, pp. 3-37, 2016/11

3-2. 著書

神山孝夫, 町田健, 柳沢民雄(共著)『ソシユールと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』日本歴史言語学会, 大学教育出版, pp. 3-140, 2017/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫「印欧語におけるケルト語の位置」日本ケルト学会 東京研究会, 日本ケルト学会, 慶應義塾大学, 2017/7(『日本ケルト学会ニューズレター』24-3, pp. 6-7, 2017/12)

神山孝夫「イントロダクション: ソシユールの生涯と業績」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソシユールと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 7-82, 2017/12)

神山孝夫「基調講演 母音交替の研究: 『覚え書』と喉音理論」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソシユールと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 83-140, 2017/12)

神山孝夫, 町田健, 柳沢民雄「座談会「ソシユールと歴史言語学」」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソシユールと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 231-242, 2017/12)

神山孝夫「印欧諸語における rhotacism の発生原因について」日本歴史言語学会 2016 年研究発表会, 日本歴史言語学会, 九州大学, 2016/11(『歴史言語学』6, pp. 84-85, 2017/12)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・会長, 2016 年 1 月～2017 年 12 月

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～2017 年 12 月

大阪言語研究会・世話人, 2007 年 1 月～現在に至る

4. 田中 英理 准教授

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007 年博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、愛媛大学教育学生支援機構英語教育センター講師、大阪医科大学総合教育講座講師を経て 2015 年 10 月より現職。専攻: 英語学

4-1. 論文

Tanaka, Eri, "Focus Particles in Comparative Sentences"『待兼山論叢』51, 大阪大学文学研究科, p. 41659, 2018/2

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

田中英理 「焦点辞と比較文」日本英文学会関西支部, 京都女子大学, 2017/12

田中英理 「比較を強調する副詞の意味論」153 回日本言語学会, 日本言語学会, 福岡大学, 2016/12

田中英理 「比較を強調する副詞の意味論」17 回 東海意味論研究会, 東海意味論研究会, 名古屋学院大学 栄サテライトキャンパス, 2016/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017 年度～2019 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:田中英理

課題番号:

研究題目:程度が存在論:統語論・意味論・語用論からの多角的アプローチ

研究経費:2017 年度 直接経費 4,290,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

本研究は、比較という人間の認知発達に重要な役割を果たしている概念の自然言語での表れと考えられる比較構文を対象として、この構文の意味解釈が日英語において共通のメカニズムに基づいているのかどうかを明らかにする。本研究は、比較構文の意味解釈に関わるとされる程度という概念について、(i)程度は個体と同じ振る舞いをするか、(ii)どの言語にも程度を導入すべきか、を問題とし、これまで多くの研究で取られてきたような統語論、意味論的観点だけでなく、比較構文における焦点 や前提といった語用論的な振る舞いを分析することによって明らかにすることを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・編集委員, 2012 年 10 月～現在に至る

2-20 日本語学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 5 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：青木 直子、石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己、マシュー・バーデルスキー

准教授：高木 千恵、三宅 知宏

助教：酒井 雅史

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	9	11	0	4	0	4	2

*うち留学生 25名、社会人学生 3名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	14	3	2	5
2017	15	11	1	4
計	29	14	3	9

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の間際発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。
4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。
5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をとおして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行ったりする機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. フィールド調査の報告論文を発表するなど、研究成果を社会に広めることにつとめた。
2. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力した。具体的には、文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」への協力、中間支援団体「兵庫日本語ボランティアネットワーク」の相談役、NPO法人「神戸定住外国人支援センター」主催の日本語ボランティア研修会の講師などをつとめた。
3. その他、学会の委員等を積極的に引き受けた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

社会連携の目標についてもほぼ達成されたと思われる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	5	0	5
2017	4	0	4
計	9	0	9

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

森田耕平「現代日本語における動詞の中止形の記述的研究」2017/9

主査：田野村忠温 副査：渋谷勝己、三宅知宏

岸本千秋「ウェブログの計量的文体研究」2018/3

主査：石井正彦 副査：渋谷勝己、三宅知宏

瀬尾悠希子「多様化する子ども達を教える補習授業校教師の支えとするストーリーの構築と変容」2018/3

主査：青木直子 副査：マシュー・バーデルスキー、高木千恵

韓 娥凜「日韓政治ディスコースの構築と正当化のメカニズム—批判的談話分析による異文化間対照の試み—」2018/3

主査：石井正彦 副査：高木千恵、渋谷勝己

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	2(2)	1(0)	7(5)	0(0)	0(0)	10(7)
2017	1(1)	0(0)	6(3)	0(0)	0(0)	7(4)
計	3(3)	1(0)	13(8)	0(0)	0(0)	17(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	1	4	1	0	0	6
2017	2	2	8	0	0	12
計	3	6	9	0	0	18

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

佐々井明里「近現代語における感情形容詞「切ない」の意味変化」『現代日本語研究』第9号, pp.60-75, 2017/3

〔博士後期〕

栄苗苗, 王静斎, 郭菲, 劉姝「対面式タンデム学習における学び: 日本語学習者と日本語話者のやりとりにおけるLREを手がかりに」『阪大日本語研究』第29号, pp.19-41, 2017/2/28

上林葵「首都圏に移住した他地域出身大学生の言語意識—出身地域差に着目して—」『待兼山論叢』第50号, pp.99-115, 2016/12/26

岸本千秋「ウェブログの計量的文体研究—一文とウェブ記号の関係を中心に—」『阪大日本語研究』第29号, pp.71-99, 2017/2/28

瀬尾悠希子「日本語から韓国語へ移行する学習者達—香港の成人学習者へのインタビュー—」『日本学刊』第19号, pp.49-63, 2016/7

瀬尾悠希子「教室外学習と教室内をむすぶ試みと課題—上級日本語聴解授業における実践から—」『茨城大学留学生センター紀要』第15号, pp.77-90, 2017/2

張允娥「日韓同性間の会話における不同意・否定的評価の相互行為—ジェンダーとポライトネスの観点からみる対立と冗談—」『阪大日本語研究』第29号, pp.101-128, 2017/2/28

藤原京佳「EPA 介護福祉士候補者による日本語の専有—1年間のインタビューにもとづくケース・スタディー—」『阪大日本語研究』第29号, pp.129-158, 2017/2/28

麻子軒「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照—コレスポネンス分析による成立要因の検討—」『計量国語学』第30巻第7号, pp.395-416, 2016/12/20

麻子軒「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照—対格名詞が事名詞である場合—」『阪大日本語研究』第29号, pp.43-70, 2017/2/28

【2017年度】

〔博士前期〕

石原若奈「2ちゃんねる「同人板」の「伏字」—計量分析から見る変形特徴—」『現代日本語研究』第10号, pp.35-52, 2018/3/31

王滄「困難を表す接尾辞「—にくい」「—づらい」の用法—ウェブコーパスに基づく考察—」『現代日本語研究』第10号, pp.53-65, 2018/3/31

林貴哉「自分の思いが伝わる場所: 大阪市立市岡中学校日本語教室」『未来共生学』第5号, pp.273-284, 2018/3/11

〔博士後期〕

岸本千秋「ウェブログの計量的文体研究—文末表現とウェブ記号との関係を中心に—」『阪大日本語研究』第30号, pp.17-40, 2018/2/28

韓娥凜「日韓政治ディスコースにおける正当化ストラテジー—批判的談話分析による異文化間対照の試み—」『阪大日本

語研究』第30号, pp.41-69, 2018/2/28

上林葵「関西方言における接尾辞「ラ」」『阪大社会言語学研究ノート』第15号, pp.59-71, 2017/11/1

藤原京佳「就労現場におけるEPA介護福祉士候補者の専門用語の学習—「専有」という学習観から—」『専門日本語教育研究』第19号, pp.33-40, 2017/12/25

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

佐々井明里「近現代語における感情形容詞「切ない」の意味変化」, 日本語学会2016年度春季大会, 学習院大学, 2016/5

〔博士後期〕

郭菲「中国人留学生の学術的コミュニティへの参加—新参者である文系の研究生のケース・スタディー—」, 2016年日本語教育国際研究大会, パリヌサデュアインターナショナルコンベンションセンター, 2016/9

岸本千秋「ブログにおける文と記号との関係」, 第19回ひと・ことばフォーラム, 武庫川女子大学・東洋大学, 2016/9

辛豪「多義動詞「つながる」の意味分析—「因果関係用法」に注目した通時変化の考察—」, 日本言語学会第152回大会, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2016/6

韓娥凜「政治ディスコースにおける言葉のお守り的使用について」, 社会言語科学会2016年度(第38回)全国大会ワークショップ, 京都外国語大学, 2016/9

麻子軒「文章レベルによる無生物主語他動詞文の成立要因—有生物他動詞文との比較を通して—」, 日本語文法学会第17回大会, 神戸学院大学, 2016/12

【2017年度】

〔博士前期〕

金載勲“A study of expressive behavior on Japanese variety television shows: A multimodal analysis of expressive behavior for image construction of guests appearing on shows”, 6th New Zealand Discourse Conference, AUT University, 2017/12/6

中尾未来, 青木直子“Choice, ownership and imagined other: Comparing four languages in a plurilingual speaker”, Nordic Autonomy Workshop in Language Learning and Teaching, ヘルシンキ大学, 2017/8/24

中尾未来「「在日コリアン3世」のライフストーリー—名前・言語とアイデンティティの関わり—」, 多言語化現象研究会第66回研究会, 大阪大学, 2017/12/17

林貴哉「在日ベトナム難民1世の社会参加と複言語使用」, 多言語化現象研究会第65回研究会, 関西学院大学, 2017/9/23

丁愛美・林貴哉・王静斎・劉姝・中尾未来・謝佩芳・李眩珠「大阪大学文学部における正課外言語学習活動の取り組み—学生主体によるタンデム学習プロジェクト(Tandem Learning Project)」, 第24回大学教育研究フォーラム, 京都大学, 2018/3/21

〔博士後期〕

岸本千秋「ニックネームの名付けについて」, 言語文化研究所シンポジウム2017年度(第3回), 武庫川女子大学, 2018/2/16

近藤優美子「名詞述語文における「ほぼほぼ」の用法の傾向」, 日本語/日本語教育研究会(第9回大会), 大阪大学, 2017/10/1

上林葵「関西若年層のカジュアル談話にみる「方言主流社会」的現象」, 社会言語科学会第40回大会, 関西大学, 2017/9/17

西野由起江「主婦向けテレビ番組に組み込まれる前提としてのジェンダー・イデオロギー」, 日本語ジェンダー学会第18回年次大会, 東京農工大学, 2017/7/8

西野由起江「日本の主婦層向けテレビ番組の談話の考察—ドイツの料理番組との比較から見えるもの」, 京都ドイツ語学研究会第93回例会, キャンパスプラザ京都京都外国語大学サテライト講習室, 2017/9/16

張希西「対義形態素同士で構成する表現の意味と用法—「上下」と“上下”の対照について—」, 第九回漢日対比言語学

シンポジウム, 北京工業大学, 2017/8/19-20

金賢眞「ウェブコーパス「梵天」による敬語研究—その活用可能性に関する事例的検討—」, 言語資源活用ワークショップ 2017, 国立国語研究所, 2017/9/5

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

2017年度 PD:1名 DC2:0名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:0名 大学院:2名 (計2名)

2017年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

森田耕平 神戸大学、特命助教、2016/11

大河内瞳 立命館大学、嘱託講師、2016/9

原田走一郎 長崎大学、准教授、2017/10

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期/後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3名

2016年度:3名 2017年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 3名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年1回) 定期刊行物

1989年度～現在に至る

『現代日本語研究』(機関誌・年1回) 定期刊行物

1994年度(2001～2015年度休刊)～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』(機関誌・年1回) 逐次刊行物

1999年度～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大日本語学研究会 2016年10月1日 於 大阪大学豊中キャンパス 日本学棟 405室

研究発表：張 允娥「直接話法による共有と協力」

麻 子軒「連語論的アプローチによる無生物主語他動詞文の日中対照
—単文レベルの成立要因を中心に—」

講演：三宅知宏「現代日本語研究のこれから」

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 青木 直子 教授

1954年生。1983年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。PhD (Trinity College Dublin, 2003)。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004年4月より現職(2018年7月退職)。専攻：第二言語教育学。

1-1. 論文

青木直子「教えるのをやめる:言語学習アドバイジングというもう一つの方法」『小出記念日本語教育研究会論文集』(小出記念日本語教育研究会), 25, 小出記念日本語教育研究会, pp. 68-75, 2017/3

青木直子他(共著)「対面式タンデム学習における学び:日本語学習者と日本語話者のやりとりにおける LRE を手がかりに」『阪大日本語研究』(大阪大学文学研究科日本語学講座), 29, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 19-41, 2017/3

青木直子「タンデム学習—FAQと経験値からの回答」『ことばと文字』6, 日本のローマ字社, pp. 98-106, 2016/10

青木直子「学習者オートノミーの多様な実践 はじめに」『ことばと文字』(日本のローマ字社), 6, 日本のローマ字社, pp. 4-9, 2016/10

青木直子「21世紀の言語教育:拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」『Journal CAJLE』(カナダ日本語教育振興会), 17, カナダ日本語教育振興会, pp. 1-22, 2016/7

1-2. 著書

青木直子(編)『ことばと文字』6, 日本のローマ字社, pp. 4-9, 2016/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

青木直子「教えるのをやめる:言語学習アドバイジングというもう一つの方法」第25回小出記念日本語教育研究会, 小出記念日本語教育研究会, 国際基督教大学, 2016/7

青木直子「変わりゆく世界、変わりゆく言語教育」2016年日本語教育学会研究集会第1回, 日本語教育学会, 佐賀大学, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

“Innovation in Language Learning and Teaching” Routedledge・Editorial Board Member, 2006年1月～現在に至る

2. 石井 正彦 教授

1958年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士（文学）（東北大学）。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009年4月より現職。専攻：現代日本語学

2-1. 論文

石井正彦 「探索的コーパス言語学のための覚書」『現代日本語研究』10, 文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 81-98, 2018/3

石井正彦 「文の長さの統計モデル」『現代日本語研究』9, 文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 109-123, 2017/3

石井正彦 「名詞的表現による文内情報提示の構造:新聞社説の抽象名詞「方針」を例に」『待兼山論叢(日本学篇)』50, 大阪大学文学会, pp. 21-48, 2016/12

石井正彦 「リジット解析:計数データを用いた言語研究への適用」『計量国語学』(計量国語学会), 30-6, pp. 357-377, 2016/9

2-2. 著書

斎藤倫明, 久島茂, 石井正彦他 『日本語語彙論 I (講座 言語研究の革新と継承 1)』ひつじ書房, pp. 135-165, 2016/9

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

石井正彦 「連語の慣用性はいかに獲得されるかー新聞の「デフレ～」連語を例にー」2017年台湾大学日本語文創新国際学術研
討会, 台湾大学日本語文学系, 台湾大学, 2017/9

石井正彦 「現代新聞における和語の基本語化」日本語学会 2017年度春季大会ワークショップ, 日本語学会, 関西大学, 2017/5

石井正彦 「連語の慣用性はいかに獲得されるか:新聞における個別連語の流行現象を手がかりに」国語学研究会第 401 回記念
発表会, 東北大学国語学研究室, 東北大学, 2017/3

石井正彦 「文の長さの統計モデル」計量国語学会第 60 回大会, 計量国語学会, 日本大学, 2016/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・評議員, 2009年6月～現在に至る

3. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学（言語学専攻）。文学修士（京都大学、1984）。奈良大学文

学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：言語学・日本語学

3-1. 論文

- 田野村忠温 「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』58, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 165-223, 2018/3
- 田野村忠温 「言語名「英語」の確立」『東アジア文化交渉研究』11, 関西大学大学院東アジア文化研究科, pp. 3-26, 2018/3
- 田野村忠温 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集」『待兼山論叢』第51号文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 21-56, 2017/12
- 田野村忠温 「サーチエンジンの示すヒット件数の信頼性再び—Google 検索をめぐる最新状況—」『計量国語学』(計量国語学会), 30-8, 計量国語学会, pp. 499-505, 2017/3
- 田野村忠温 「近現代語「可能」の成立—日中両語間の双方向的影響—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 97-150, 2017/3
- 田野村忠温 「真珠湾の日中名称小史」『待兼山論叢』50 文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 29-55, 2016/12
- 田野村忠温 「Web コーパスの概念と種類、利用価値—語史研究の情報源としての Web コーパス—」『計量国語学』30-6, 計量国語学会, pp. 326-343, 2016/9

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 田野村忠温 「書評 エレツ・エイデン, ジャン=バティエール・ミシェル著・阪本芳久訳・高安美佐子解説『カルチャロミクス 文化をビッグデータで計測する』」『社会言語科学』(社会言語科学会), 20-第1号, 社会言語科学会, pp. 193-198, 2017/9
- 田野村忠温 「書評 近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』」『日本語の研究』12-4, 日本語学会, pp. 151-158, 2016/10

3-4. 口頭発表

- 田野村忠温 「『華英通語』道光本とその作者、成立背景」漢字文化圏近代語研究会 2018 国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会・南京大学, 南京大学, 2018/3 (『2018 国際シンポジウム 語彙史から概念史へ』pp. 127-131, 2018/3)
- 田野村忠温 「デジタル技術が拓く言語研究の新境地」韓国日本學會第96回国際學術大會, 韓国日本學會, 淑明女子大学校, 2018/2
- 田野村忠温 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集—『諸厄利亜言語和解』『諸厄利亜興学小筌』『諸厄利亜語林大成』—」関西大学東西学術研究所研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2017/12
- 田野村忠温 「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語教材の系譜」関西大学東西学術研究所研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2017/6
- 田野村忠温 「言語名「英語」の確立」東アジア文化交渉学会第9回国際學術大会, 東アジア文化交渉学会, 北京外国語大学, 2017/5 (『东亚文化交渉学会第9届国际学术大会 全球史观与东亚的知识迁移』下册 pp. 923-930, 2017/5)
- 田野村忠温 「近現代語「可能」の成立—諸説の検討と新仮説—」漢字文化圏近代語研究会 2017 国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 延世大学校, 2017/3 (『2017 国際シンポジウム 近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』pp. 111-113, 2017/3)
- 田野村忠温 「真珠湾の日中両語における名称について」東アジア文化交渉学会第8回国際學術大会, 東アジア文化交渉学会, 関西大学, 2016/5 (『東アジア文化交渉学会第8回年次大会 東アジア交渉学の新しい歩み』pp. 975-983, 2016/5)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2012年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 24520425

研究題目: コーパス日本語研究の高度化と基盤形成のための実践的総合研究

研究経費: 2016年度 直接経費 1,300,000円 間接経費 39,000円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。

併せて、学界におけるコーパス日本語研究の基盤形成に寄与することも重要な目的とし、研究成果の国内外での発表(論文・口頭)のみならず、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開や、講演や執筆などの形での啓発活動にも積極的に取り組む。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員, 2017年8月～現在に至る

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員, 2016年12月～2017年11月

国立国語研究所・外部評価委員会委員, 2016年10月～2018年9月

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員, 2015年8月～2016年7月

日本言語学会・会計監査委員, 2015年4月～2018年3月

4. 渋谷 勝己 教授

1959年生。東京外国語大学大学院外国語学研究所日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009年4月より現職。専攻: 日本語学

4-1. 論文

渋谷勝己「標準語の癖—論理性と分析性—」『日本語学』37-1, 明治書院, pp. 50-59, 2018/1

渋谷勝己「現代社会のことばのバリエーション」『ことばと文字』(日本のローマ字社), 8, pp. 4-13, 2017/10

渋谷勝己「日系カナダ人一世・二世の日本語変種—その実態と形成過程—」『待兼山論叢 文化動態論篇』50, 大阪大学文学研究科, pp. 1-27, 2016/12

渋谷勝己「第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて—現状と問題点—」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp. 269-288, 2016/5

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

Shibuya, Katsumi, "Japanese Historical Sociolinguistics", *Methods and Perspectives in Historical Sociolinguistics: Research in Austria and in Japan Compared*, FWF - JSPS Bilateral Joint Research Seminar, ザルツブルク大学, 2016/9
渋谷勝己「歴史社会言語学が捉えることばの変化—日本語史を例として—」シンポジウム歴史言語学の新しい潮流—歴史語用論と歴史社会言語学—, 関西言語学会, 龍谷大学, 2016/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・理事、評議員, 2015年5月～現在に至る
社会言語科学会・理事, 2015年4月～現在に至る
日本語文法学会・評議員, 2015年4月～現在に至る
社会言語科学会・研究大会委員長, 2015年4月～2017年3月
日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

5. マシュー・バーデルスキー 教授

1967年生。2006年UCLA大学院東アジア言語文化科PhD修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学(米ペンシルバニア州)客員助教授・メロン財団ポストドックフェロー、同准教授を経て、2011年10月より現職。専攻：日本語学

5-1. 論文

Fukuda, Chie, BURDELSKI, Matthew, "Multimodal demonstrations of understanding of visible, imagined, and tactile object in guided tours," *Research on Language and Social Interaction*, in press.
武井紀子, BURDELSKI, Matthew(共著), "Shifting of "expert" and "novice" roles between/within two languages: Socialization, identity, and epistemics in family dinnertime interaction." Piller, Ingrid, *Multilingua: Journal of Cross-Cultural Interlanguage Communication*, (75), De Gruyter, pp. 83-117, 2018/1

5-2. 著書

BURDELSKI, Matthew, *Some insights from Chuck Goodwin's seminars and discourse labs: 2000 to 2004 and beyond*. In D. Favareau (ed.), *Co-operative engagements in intertwined semiosis: Essays in honour of Charles Goodwin*, University of Tartu Press, pp. 26-36, 2018/1
BURDELSKI, Matthew, *Pets as vehicles of language socialization*. In A. Feuerstein & C. Nolte-Odhiambo (eds.), *Childhood and pethood in literature and culture: New perspectives in childhood studies and animals studies*, Routledge, pp. 72-86, 2017/5
Cook, Haruko, BURDELSKI, Matthew(共著), *Language socialization in Japanese communities*. In P. A. Duff & S. May (eds.), *Language Socialization. Encyclopedia of Language and Linguistics (3rd edition)*, Springer, pp. 309-321, 2017/4
Cook, Haruko, BURDELSKI, Matthew(共著), *(Im)politeness in language socialization*. In J. Culpeper, M. Haugh & D. Kádár (eds.),

The palgrave handbook of linguistic (im)politeness, Palgrave Macmillan, pp. 461-488, 2017/3

BURDELSKI, Matthew, 森田笑(共著), *Children's initial assessments in Japanese* In A. Bateman & A. Church (eds.), *Children's knowledge-in-interaction: Studies in conversation analysis*, Springer, pp. 231-255, 2017/1

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト)“Distress and appeal: Children's crying and caregiver responses in a Japanese preschool. ”, American Anthropological Association Annual Meeting, American Anthropological Association (AAS), サンノゼ(アメリカ), 2018/11

BURDELSKI, Matthew, (基調講演)“Narrating exclusion, discrimination, and heritage: Discursive practices of positioning and engagement at a Japanese American museum. ”, Mobility, discrimination and cultural conflicts across time and space: A symposium celebrating 10 years of Euroculture at Osaka University, 大阪大学, 2018/11

BURDELSKI, Matthew, (招待講演)“Narrating exclusion, racism, and heritage: Discursive practices of positioning and engagement in guided tours. ” クラクフ(ポーランド), 2018/6

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト)“Symbolic competence and epistemics: Literacy activities in a Japanese as a heritage language preschool classroom. ”, American Association for Applied Linguistics (AAAL) Annual Conference, American Association for Applied Linguistics (AAAL), シカゴ(アメリカ), 2018/3

Morita, Emi, BURDELSKI, Matthew, (パネリスト)“Two-year olds' storytelling in dyadic and triadic interaction”, 15th International Pragmatics Association Conference (IPrA), International Pragmatics Association (IPrA), ベルファスト(英国)、Belfast Waterfront Convention Center, 2017/7

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト)“Embodied socialization in preschool: Preparing for a graduation ceremony in a Japanese as a heritage language classroom. ”, 15th International Pragmatics Association Conference (IPrA), International Pragmatics Association (IPrA), ベルファスト(英国)、Belfast Waterfront Convention Center, 2017/7

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト)“Mediating (potential) conflict situations in preschool: Children's use of reported speech in Japanese”, American Association for Applied Linguistics (AAAL) conference, American Association for Applied Linguistics (AAAL), ポトランド、マリオットホテル, 2017/3

武井紀子, BURDELSKI, Matthew, (基調講演)“Socialization, identity and epistemics in family dinnertime conversations”, Australasian Institute of Ethnomethodology and Conversational Analysis conference, Australasian Institute of Ethnomethodology and Conversation Analysis (AIEMCA), メルボルン大学, 2016/11

BURDELSKI, Matthew, (招待講演)“Socializing preschool children's bodies”, Australasian Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (AIEMCA) conference, Australasian Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (AIEMCA), メルボルン大学, 2016/11

BURDELSKI, Matthew, 福田知恵, (パネリスト)“Teller and recipient embodied actions in Japanese storytelling within museum guided tours at a museum”, 7th International Society for Gesture Studies Conference, International Society for Gesture Studies, パリ第3大学(新ソルボンヌ), 2016/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

マシュー・バーデルスキー 大阪大学総長顕彰 2015(教育学部), 大阪大学, 2015/7

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:マシュー・バーデルスキー

課題番号:15K02567

研究題目:子どもの言語社会化:感情、社会的行為とアイデンティティ

研究経費:2016年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

2017年度 直接経費 0円 間接経費 0円

研究の目的:

子どもは、一般的に、生まれてからわずか3~4年の間に他者とコミュニケーションを行う能力の基盤を習得する。そして言語を習得すると同時に、社会的行為・規範・思いやり・責任・道徳性・ポライトネス(丁寧さ)・アイデンティティなどといった文化的要素も身につける。つまり、相互行為への参加が言語・文化習得に先立って可能となっているのである。本研究の目的は、この言語・文化習得といった言語社会化のプロセスにある相互行為(親子、子ども同士などの会話)に参加することがいかに可能となり、実現されているのかを、実際の相互行為場面や社会活動(食事、遊び、本読み聞かせなど)を観察・記録し、収録したデータから量的・質的分析を通して明らかにすることである。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 高木 千恵 准教授

1974年生まれ、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士(文学)。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010年10月より現職。専攻:社会言語学・方言学

6-1. 論文

高木千恵「男孫を表す新語「孫息子」について」『待兼山論叢』51, 大阪大学大学院文学部, pp. 39-58, 2017/12

高木千恵「大阪方言の接続詞カテについて」『阪大社会言語学研究ノート』15, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室, pp. 36-58, 2017/11

6-2. 著書

真田信治監修, 岸江信介, 高木千恵他(共編)『関西弁事典』ひつじ書房, 2018/3

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高木千恵「一人称の「ワシ」は下品な言葉か?」『医事新報』(日本医事新報社), 4893, p.60, 2018/2

高木千恵「西尾純二著『マイナスの待遇表現行動-対象を低く悪く扱う表現への規制と配慮-』」『日本語の研究』(日本語学会), 13-3, pp.51-58, 2017/7

高木千恵「社会言語・言語生活」『日本語の研究』(日本語学会), 12-3, pp. 91-98, 2016/7

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・編集委員, 2015年6月～現在に至る

7. 三宅 知宏 准教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士(文学)(大阪大学)。鶴見大学専任講師, 同准教授, 同教授を経て, 2016年4月より現職。専攻: 日本語学・言語学

7-1. 論文

三宅知宏 「日本語の発見構文」天野みどり・早瀬尚子『構文の意味と拡がり』くろしお出版, pp. 65-78, 2017/11

三宅知宏 「日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって —語彙的意味構造と統語構造—」森山卓郎・三宅知宏(共編著)『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版, pp. 117-134, 2017/11

三宅知宏 「日本語学の課題 —「記述」と「理論」の壁を越えて—」西山佑司・杉岡洋子『ことばの科学』開拓社, pp. 74-96, 2017/9

三宅知宏 「文法性判断に基づく研究の可能性」『日本語文法』(日本語文法学会), 17-2, くろしお出版, pp. 3-19, 2017/9

三宅知宏 「“イツ”と“カモシレナイ”の共起関係に関する覚書」『現代日本語研究』9, 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 現代日本語学研究室, pp. 96-108, 2017/3

三宅知宏 「否定疑問文と確認要求的表現—対照方言研究の一試論—」『阪大日本語研究』29, 大阪大学大学院文学研究科 日本語学講座, pp. 1-18, 2017/2

三宅知宏 「日本語の疑似条件文をめぐって」『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社, pp. 352-371, 2016/5

三宅知宏 「「スロット」に基づく分析と日本語—日本語研究の立場からみた古賀論文—」『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』開拓社, pp. 246-253, 2016/5

7-2. 著書

森山卓郎, 三宅知宏(共編著)『語彙論的統語論の新展開』くろしお出版, 2017/11

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

三宅知宏 「「文法化」と共時的的研究 —日本語の補助動詞を中心に—」東北大学言語変化・変異研究ユニット招待講演会, 東北大学言語変化・変異研究ユニット, 東北大学, 2017/11

三宅知宏 「日本語の補助動詞と文法構文 —「発見構文」を中心に—」成蹊大学アジア太平洋研究センター プロジェクト研究会, 成蹊大学アジア太平洋研究センター, 成蹊大学, 2017/7

三宅知宏 「日本語の「使役」の諸相」関西言語学会第 42 回大会シンポジウム「日本語の「使役性」をめぐって」, 関西言語学会, 京都大学, 2017/6

三宅知宏 「シンポジウム「文法性判断に基づく研究の可能性」(企画・司会)」日本語文法学会第 17 回大会, 日本語文法学会, 神戸学院大学, 2016/12

三宅知宏 「現代日本語研究のこれから」阪大日本語学研究会, 大阪大学, 2016/10

三宅知宏 「日本語の発見構文」研究発表会「構文と意味の拡がり」, 大妻女子大学, 2016/10

三宅知宏 「日本語学の課題—「記述」と「理論」の壁を越えて—」東京言語研究所開設 50 周年記念セミナー, 東京言語研究所, 国立オリンピック記念青少年総合センター, 2016/9

三宅知宏 「日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって—語彙的意味構造と統語構造—」Morphology & Lexicon Forum 2016, Morphology & Lexicon Forum, 慶應義塾大学, 2016/9

三宅知宏 「日本語文法研究入門」東京言語研究所 2016 年度春期講座, 東京言語研究所, 東京言語研究所, 2016/4

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・運営委員, 2017 年 4 月～現在に至る

関西言語学会・大会委員, 2017 年 4 月～現在に至る

日本語文法学会・大会委員, 2016 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・大会運営委員, 2015 年 7 月～現在に至る

日本語学会・庶務委員長, 2015 年 6 月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2015 年 4 月～2017 年 3 月

日本語文法学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本語学会・大会企画運営委員, 2012 年 6 月～2015 年 5 月

日本語文法学会・学会誌委員, 2010 年 4 月～2016 年 3 月

8. 東条 佳奈 助教

1984 年生。2016 年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程修了。博士(文学)。2016 年 4 月より現職(2018 年 3 月退職)。専攻: 現代日本語学。

8-1. 論文

東条佳奈 「名詞の助数詞的用法の機能に関する検討—個別化と範疇化に注目して—」『阪大日本語研究』30, 大阪大学文学研究科日本語学講座, pp. 1-16, 2018/2

東条佳奈 「「擬似助数詞」の成立可否を決める要因」『現代日本語研究』9, 文学研究科日本語学講座現代日本語学研究室, pp. 76-95, 2017/3

8-2. 著書

なし

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東条佳奈 (書評) 「田野村忠温 (編) (2014) 『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』」『計量国語学』(計量国語学会), 31 巻 /3 号, pp. 222-226, 2017/12

8-4. 口頭発表

東条佳奈, 岩田一成 「新聞における数量詞の出現頻度と数量詞使用率—名詞型助数詞に注目して—」日本語学会 2017 年度秋季大会, 日本語学会, 金沢大学, 2017/11(『日本語学会 2017 年度秋季大会予稿集』, pp. 115-122, 2017/11)
東条佳奈 「「N」ノ擬似数量詞」表現の特徴」第 148 回関東日本語談話会, 関東日本語談話会, 学習院女子大学, 2016/12

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

8-8. 外部役員等の引き受け状況

言語系学会連合・事務局員, 2017 年 4 月～2018 年 3 月

2-21 美学・文芸学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

准教授 4(兼任1) 講師 1 助教 1

准教授：加藤 浩、渡辺 浩司、高安 啓介、田中 均(兼任)

講師：西井 奨

助教：土田 耕督

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
45	6	5	0	1	0	0	0

*うち留学生 5名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	8	6	1	3
2017	10	2	1	1
計	18	8	2	4

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部の教育においては、基礎的な講義、重要な個別の主題について探究する講義、原典講読の能力を養う演習を開講することによって、基礎的な知識の定着を図るとともに、自ら問題を探究する能力を育成する。卒業論文作成のための演習では、研究経過のプレゼンテーションとそれについての議論を通じて、卒業論文執筆へ向けて個々の学生の問題関心を深める。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、美学・文芸学研究の視野を広げることを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、学会での口頭発表にも耐える専門的な研究報告を行い、それについて、教員と大学院生が互いの観点を尊重し討論を行う。

学部・大学院を通じて、オフィスアワーその他の機会において、指導教員による個別指導を充実させる。

加えて、芸術学講座の他の専門分野、芸術史講座、および文化動態論専攻アート・メディア論講座との連携をはかるとともに、ティーチング・アシスタント制度を通じて、大学院生に対する教育指導能力についてのトレーニングの場を提供

し、学部教育や博士前期課程教育を充実させる。

2. 研究

本学では美学と文芸学が一つの専修・専門分野を構成しており、これは全国的に見ても特色のあることだが、古代以来の修辞学の伝統から美学が生まれた歴史的経緯に即したものである。

美学分野は哲学の一分野として、美や崇高などのカテゴリー、芸術の概念、感性の働きなどを原理的に考察するが、美術、デザイン、映画などの個別領域を専門とする芸術学とも密接な関係を保ち、理論的な深みと実証的な堅実さのどちらも重視して、多様化する美的・芸術的諸現象を探究する。

文芸学分野は、芸術としての文学を扱う。研究の関心は広く古今東西の文芸に及ぶが、特に西洋古典の理解を重視し、その上で文芸の一般原理の研究の対象とする。

上記の専修・専門分野の特質を踏まえて、各教員は、期間中に2点以上の著書または論文を執筆すること、また翻訳、書評を積極的に執筆することを目標とする。博士後期課程の各大学院生は、積極的に国内外の学会で研究成果を発表し、期間中に1点以上の査読付き論文を執筆することを目標とする。また研究推進のため、科学研究費補助金その他の競争的外部資金、および日本学術振興会特別研究員に積極的に応募する。

研究に関してはさらに以下の目標を設定する。紀要『文芸学研究』、『美学研究』を継続的に刊行すること。美学会、意匠学会、民族芸術学会、映像学会など関係学会、および学内の文学会、待兼山芸術学会の運営に協力するほか、文芸学研究会、ギリシア・ローマ神話学研究会を開催し、学内外の共同研究に積極的に参画すること。また海外から研究者を招聘する、国際的な研究集会に参加するなど、国際的な学術交流を推進すること、以上である。

3. 社会連携

国・地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営、芸術祭の開催などに、専門的な知見を生かして協力する。各種学会の運営に参画する。

研究会を広く公開して研究成果の普及を図るほか、ウェブサイト等を通じて研究室の活動内容を外部に発信するなどの活動を通じて、美学・文芸学という学問分野の社会的認知度の向上に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

「Ⅱ. 掲げた目標」に対応する授業を開講した。ティーチング・アシスタント制度も積極的に活用し、教育の充実に努めた。

美学分野では、卒業論文に向けた演習において、個人発表にたいしてグループ討議の時間を設けたり、テーマの決めかたや論文の書き方についての学びの機会をつくったり、テキストを作成して使用したり、学習を深める様々な工夫を取り入れた。非常勤講師として吉田寛氏（立命館大学）と秋庭史典氏（名古屋大学）が授業を担当した。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教育はますます重要になると思われる。非常勤講師として勝又泰洋氏が授業を担当した。

2. 研究

各教員の著書、論文等の刊行の実績、および科学研究費補助金の採択状況は、「Ⅴ. 基本情報」の「12. 教員の研究活動」のとおりである。また大学院生の研究業績は、「2. 大学院生等による論文発表等」のとおりである。

美学研究室では、美学思想をめぐる多様な視点からの研究を進めている。とりわけ① 芸術における参加の問題 ② 建築・工芸・デザインの新たな思想動向 ③和歌などに見る日本の伝統的な美学思想についての研究に重きを置いた。9月にクリストフ・メンケ教授（フランクフルト大学）を招いてシンポジウムを行い、成果を研究室の雑誌『a+a 美学研究』

12号「特集：シアトロクラシー 観客の美学と政治学」において公表した。9本の論文を所収している。1月29日には、クリストフ・ブライデニヒ教授を招いて比較デザイン学研究会 Creative Miscommunication を実施した。上記研究会はいずれも外国語で行った。

文芸学研究室はギリシアとローマの文学や神話を中心とする研究を行った。加藤准教授はプラトンの文芸論やプロクロスの詩学などを、また渡辺助教がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。西井講師は、ホラティウス『詩論』などのローマにおける文芸論を研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年3回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を継続した。またギリシア・ローマ神話学研究会から『神話学研究』創刊号を発刊した。

教員の国際学会での発表は下記「教員の研究活動」のとおりである。

3. 社会連携

外部役員等の引き受け状況および芸術評論の活動については、下記「教員の研究活動」および「大学院生等の業績」に挙げたとおりである。

平成29年度懐徳堂秋季講座「デザインにおける日本的なもの」を企画した。

また文化庁補助金「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、文学研究科を中心として運営された「アート・フェスティバル人材育成プログラム」に、渡辺准教授は事務局として参画した。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

教育については、目標を上回る成果を上げたとして自己評価する。

2. 研究

研究については、目標を上回る成果を上げたとして自己評価する。大学院生については、国内外の学会における口頭発表および学会誌への論文の投稿に向けた研究指導を今後も充実させる。

3. 社会連携

社会連携活動は全体として目標を達成したとして自己評価する。専門的知見に基づく社会連携活動を今後も継続する。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	3	0	3
2017	1	0	1
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

谷 百合子 「境界を越える詩人ジャン・コクトー——他芸術から映画への変容——」 2016/9

- 主査：三宅祥雄 副査：藤田治彦、山上浩嗣、高安啓介、田中均
 川野 恵子 「17-18 世紀フランスにおける模倣芸術としての舞踊概念の系譜と変容—メネストリエ、カユザック、ノヴェールを中心に—」 2017/3
 主査：田中均 副査：藤田治彦、山上浩嗣、小穴晶子（多摩美術大学 教授）、ナタリー・クレメール（パリ第3大学 准教授）
 佐藤 紗良「アルハンブラ宮殿修復史の研究—19-20 世紀を中心に—」 2017/3
 主査：藤田治彦 副査：内田次信、三宅祥雄、高安啓介、鳥居徳敏（神奈川大学 教授）
 関スラ「1930 年代日本映画における近代女性像研究 — 映画スタイル分析を中心に」 2017/2
 主査：高安啓介 副査：永田靖・北原恵・渡辺浩司・田中均

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	2(2)
2017	0(0)	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	3(3)
計	0(0)	0(0)	5(5)	0(0)	0(0)	5(5)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	6	1	4	1	0	12
2017	1	4	1	0	0	6
計	7	5	5	1	0	18

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016 年度】

〔博士前期〕

KAMAMOTO, Mayu “Alvar Aalto and the theory of play: Through analysis on Alvar Aalto’s furniture design”, 10th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, Proceedings, 2016/10/26-28.

〔博士後期〕

河口篤「親縁性と非感性的類似性—ベンヤミン言語論の読解—」『待兼山論叢』第 50 巻, pp.65-97, 2016/12/26

【2017 年度】

〔博士後期〕

上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』におけるピーラートゥス・エピソード——宗教的相克の物語として」ギリシア・ローマ神話学研究会編『神話学研究』第 1 号, pp. 91-117, 2017/5/31

上月翔太「ルカヌス『内乱』における fama」『待兼山論叢』第 51 巻, pp.1-30, 2017/12/25

上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』における「語り行為」—巻構造との関連から」『芸芸学研究』第 21 号, pp.46-69, 2018/3/31

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

INOUE Megumi “A study of Aldo Rossi’s works in Japan”, 20th International Congress of Aesthetics, Seoul National University, Korea, Seoul National University, 2016/7/25-29.

井上めぐみ「アルド・ロッシの建築とイメージ」, 科研成果報告会 建築とエクフラシス, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3/12

KAMAMOTO, Mayu “Alvar Aalto And Experiment: Through Analysis: On Alvar Aalto's Architectural Design Method”, 20th International Congress of Aesthetics, Seoul National University, Korea, Seoul National University, 2016/7/25-29

KAMAMOTO, Mayu “Alvar Aalto and the theory of play: Through analysis on Alvar Aalto’s furniture design”, 10th Conference of the International Committee for Design History and Design Studies, National Taiwan University of Science and Technology, 2016/10/26-28.

田添聖史「ヴィレム・フルッサー『写真の哲学のために』における“spielen”」, 第12回形象論研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3/14

〔博士後期〕

KAWANO Keiko “Dance pedagogy in Letters (1760) by J-G Noverre: The originality of the body of the dancer”, 18th Annual Oxford Dance Symposium: Teaching Dance, New College, Oxford University, 2016/4/19.

SATOH Sara “The Restoration of Alhambra in 19th Century and its Background”, 20th International Congress of Aesthetics, Seoul National University, Korea, Seoul National University, 2016/7/25-29.

関スラ「映画『東京の女』(1933)に現れる近代女性像の描写——スタイル分析を中心に——」日本映像学会関西支部第79回研究会, 大阪大学, 2016/12/24

関スラ「望ましい多言語化とは何か—大阪市博物館施設の各施設点検から」シンポジウム: ミュージアムに求められる多言語化・国際発信, 大阪歴史博物館, 主催: 大阪市歴史博物館大阪市博物館施設の国際発信強化実行委員会, 2017/1/27

河口篤「ファンタスマゴリー批判—アドルノのワーグナー論のポリティクス」, 第12回形象論研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/3/15

KAWAGUCHI Atsushi “Actuality and image, Walter Benjamin’s way of cognition”, 20th International Congress of Aesthetics, Seoul National University, Korea, Seoul National University, 2016/7/25-29

上月翔太「Vida 叙事詩の構造」, ギリシア・ローマ神話学研究会第14回研究発表会, 大阪大学, 2016/7/30

【2017年度】

〔博士後期〕

MIN Seula “A Study on Representation of Woman in Japanese Films : Focusing on Woman of Tokyo (1933)” 日韓次世代学術フォーラム第14回国際学術大会, Ajou University, 2017/7/1

河口篤「芸術の裏切り——アドルノ『ヴァーグナー試論』による、ヴァーグナーの「社会的性格」」日本シェリング協会第26回総会, 九州大学, 2017/7/2

上月翔太「Vida Christias VI 研究 —— 物語への振る舞いの諸相」, 待兼山芸術学会第27回研究発表会, 大阪大学, 2017/4/1

上月翔太「ヴィーダ『キリスト物語』の巻構造 — 「語り行為」の叙事詩的主題化」, 文芸学研究会第62回研究発表会, 同志社大学, 2018/3/24

吉野裕太「クルーゲと映像による批評の可能性」形象論研究会 第13回研究会, 京都工芸繊維大学, 2018/2/24.

吉野裕太「テレビをめぐる思想: エンツェンスベルガーとクルーゲの思想」待兼山芸術学会第28回研究発表会, 大阪大学, 2018/3/31

(3)その他(書評・翻訳など)

【2017年度】

〔博士後期〕

関スラ「外国人が見たミュージアムの多言語対応—適切な多言語化とはいかなるものなのか」『博物館研究』第53号、(公益財団法人日本博物館協会、2018年1月) pp.15-18。

西影めぐみ「新しい感覚 研ぎ澄ませ」(兵庫県立美術館 「青木千絵展 漆黒の身体」)『大阪日日新聞』2017年8月15日

井上めぐみ『ライアン・ガンダー —この翼は飛ぶためのものではない 図録』(2017年4月29日-7月2日、国立国際美術館) カタログ翻訳

井上めぐみ『福岡道雄 つくらない彫刻家 図録』(2017年10月28日-12月24日、国立国際美術館) 編集補助

井上めぐみ『開館40周年記念展 トラベラーまだ見ぬ地を踏むために 図録』(2018年1月21日-5月6日、国立国際美術館) 作家略歴執筆

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

なし

5. 大学院生・学部学生等の留学

なし

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2016年度：0名 2017年度：0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2016年度 『a+a 美学研究』10号

2016年度 『a+a 美学研究』11号

2016年度 『フィロカリア』34号

2017年度 『a+a 美学研究』12号

2017年度 『フィロカリア』35号
 2017年度 『神話学研究』第1号
 2017年度 『文芸学研究』21号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【学会等の開催】

第67回西洋古典学会	2016年6月4～5日
美学会西部会第310回研究発表会	2016年9月24日
第12回形象論研究会	2017年3月14-15日
待兼山芸術学会第27回研究発表会	2017年4月1日
美学会西部会第315回研究発表会	2017年9月16日
待兼山芸術学会第28回研究発表会	2018年3月31日

【事務局等の引き受け】

日本シェリング協会事務局	2016年度以降
--------------	----------

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

文芸学研究会	2016年度～2017年度
『文芸学研究』第20号合評会	2016年6月25日
第61回研究発表会	2017年9月30日
第62回研究発表会	2018年3月24日
ギリシア・ローマ神話学研究会	
第14回 研究発表会	2016年7月30日
第15回 研究発表会	2016年12月24日
第16回 研究発表会・講演会	2017年7月29日
第12回形象論研究会	2017年3月14～15日

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 加藤 浩 准教授

1960年生。大阪大学文学部美学科（美学・文芸学）卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程（芸術学）単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：文芸学／神話論。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 渡辺 浩司 准教授

1962年生。大阪大学文学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。大阪大学助手、助教を経て現職。専攻：文芸学／西洋古典学

2-1. 論文

渡辺浩司「カトゥルルス第六四歌のエクフラシスー言葉とイメージ」*Arts and Media*, 7, 大阪大学大学院文学研究科アートメディア論コース, pp. 56-63, 2017/7

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

渡辺浩司, 石黒義昭, 井奥陽子訳「G. F. マイアー『あらゆる美しい学の基礎』序論(§ §. 1-22) 翻訳」科学研究費補助金基盤研究(C)「美学と弁論術の交叉」研究成果報告書, 科学研究費補助金基盤研究(C)「美学と弁論術の交叉」研究代表者、渡辺浩司, pp. 66-81, 2018/3

渡辺浩司「カトゥルルス「第 64 歌」翻訳」科学研究費補助金基盤研究(C)「美学と弁論術の交叉」研究成果報告書, 科学研究費補助金基盤研究(C)「美学と弁論術の交叉」研究代表者、渡辺浩司, pp. 51-64, 2018/3

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渡辺浩司

課題番号:15K02110

研究題目:美学と弁論術の交叉——コモン・センスを中心に

研究経費:2016年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

2017年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

研究の目的:

古代ギリシア・ローマの弁論術が美学・芸術学へ受け継がれ変容していく過程を、西洋古典学および美学・芸術学の2つの観点から、歴史的かつ理論的に究明する。美学は18世紀半ばにバウムガルテンによって創建されたが、そのさい、弁論術が果たした役割は大きいとしばしば指摘されているが、美学成立において弁論術がどのような影響を与えたのか、美学成立後に弁論術がどのように変容したのかを解明した研究はほとんどない、本研究は、このような研究上の欠を補うべく、弁論術が美学成立に与えた影響を、とくにコモン・センスに焦点を当てて西洋古典学や美学・芸術学といった広い視点から解明するとともに、今日のコモン・センスに開かれた美学の可能性をさぐる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

民族藝術学会・庶務委員, 1994年4月～2016年3月

3. 高安 啓介 准教授

1971年生。一橋大学社会学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了（芸術学）。博士（文学）。愛媛大学法文学部准教授を経て、現職。専攻：美学／芸術学

3-1. 論文

高安啓介 「マックス・ビルとバウハウス」『待兼山論叢 芸術編』(大阪大学文学研究科), 51, pp. 1-30, 2018/2

Takayasu Keisuke, "Criticism of the Bauhaus Concept in the Ulm School of Design" 『The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory』(Asian Conference of Design History and Theory), 2, pp. 9-18, 2017/8

高安啓介 「形象としての具体詩」『形象』(形象論研究会), 2, 形象論研究会, pp. 50-71, 2017/3

高安啓介 「ウルム造形大学における脱バウハウス思想」『a+a 美学研究』11, 大阪大学美学研究室, pp. 118-131, 2017/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

高安啓介 「文字の星座: 具体詩の意味について」形象論研究会 特別公開研究会, 形象論研究会, 京都工芸繊維大学, 2018/2

高安啓介 「嗜好品のデザイン 過去／現在／未来」嗜好品文化研究会, 嗜好品文化研究会, 京都ホテルオークラ, 2018/1

Takayasu Keisuke, "Learning from Typographic Art: Poetry and Communication", Design Study Workshop, 大阪大学 文学研究科 比較デザイン学クラスター, Osaka University Toyonaka Campus, 2018/1

Takayasu Keisuke, "Criticism of the Bauhaus Concept in the Ulm School of Design", The 2nd Asian Conference on Design History and Theory, Asian Conference on Design History and Theory, Tsuda University Sendagaya Campus, 2017/9

高安啓介 「無装飾から超装飾へ」藝術学関連学会連合 第12回公開シンポジウム 21世紀、いま新たに装飾について考える, 藝術学関連学会連合, デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO, 2017/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2018年度、挑戦的萌芽研究、代表者：高安啓介

課題番号:16K12672

研究題目:現代デザインの用語使用をめぐる社会的考察

研究経費:2016年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

2017年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

デザインの世界においても欧米から新しい考えが次々と持ち込まれ、カタカナ外来語がしばしば吟味されぬまま売り文句のように流通している。本研究は、現代日本でのデザイン用語の使われかたの傾向をとらえ、サステナビリティなど自明視されがちな重要な用語の幾つかの検討をおこない、現代デザインの用語使用にかかわる問題点を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

意匠学会・役員, 2017年4月～現在に至る

豊中市減塩推進委員会・選考アドバイザー, 2017年

美学会・委員, 2016年4月～現在に至る

4. 田中 均 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了(美学芸術学、2007年)。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD、2005年から2008年)、山口大学人文学部講師(2008年から2011年)、同准教授(2011年から2012年)を経て現職。日本シェリング協会第7回研究奨励賞(2011年)。専攻:美学

4-1. 論文

田中均 「ルソーとシアトロクラシー—『ダランベール氏への手紙』における「見せもの」(スペクタクル)の近代性」『a+a 美学研究』12, 大阪大学美学研究室, pp. 30-44, 2018/3

田中均 「「アートプロジェクト」の美的評価—その理論的モデルを求めて ② グラント・ケスター『カンヴァーセッション・ピース』における「対話の美学」」『CoDesign』3, 大阪大学 CO デザインセンター, pp. 55-69, 2018/3

田中均 「「アートプロジェクト」の美的評価 : その理論的モデルを求めて ① グラント・ケスター『一と多』における「コラボレーティブ・アート」」『CoDesign』2, 大阪大学 CO デザインセンター, pp. 41-58, 2017/9

田中均 「プラトン『法律』における「テアトロクラティア」——沈黙する観客からポリス全体による歌舞へ——」『a+a 美学研究』11, 大阪大学美学研究室, pp. 218-231, 2017/3

田中均 「ド・マンのカント/シラー論における「美的なもの」」『シェリング年報』24, 日本シェリング協会, pp. 64-74, 2016/7

4-2. 著書

Erik M. Vogt, João Pedro Cachopo, Tanaka, Hitoshi 他, *Bruchlinien Europas: Philosophische Erkundungen bei Badiou, Adorno, Zizek und anderen*, Turia+Kant, pp. 67-89, 2016/5

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田中均 (訳)(翻訳、クリストフ・メンケ) 「演劇の批判と弁護」『a+a 美学研究』12, 大阪大学美学研究室, pp. 12-28, 2018/3

4-4. 口頭発表

Tanaka, Hitoshi, "Theatrocracy And Its Enemies: The Relationship Between Democracy And Aesthetics", International Congress of Aesthetics, International Association for Aesthetics, ソウル大学, 2016/7

田中均 「研究紹介①芸術への参加をめぐる美学理論——「プロジェクト」の批評の可能性 研究紹介②「テアトロクラシー」の概念史——(西洋)美学とデモクラシーの相関関係」コミュニケーションデザイン研究会, コミュニケーションデザイン・センター, 大阪大学, 2016/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

田中均 日本シェリング協会第7回研究奨励賞, 日本シェリング協会, 2011/7

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014年度～2017年度、若手研究(B)、代表者:田中均

課題番号:60510683

研究題目:近代美学史における「テアトロクラティア」—美学と民主主義の相関関係の研究

研究経費:2016年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

2017年度 直接経費 400,000円 間接経費 120,000円

研究の目的:

本研究の目的は、プラトンに由来する概念「テアトロクラティア」が近代美学史およびその記述において担う意義を明らかにし、それを通じて、この概念が近代美学と民主主義の関係についての鍵概念であることを示すことである。具体的に分析するのは、①ジャック・ランシエールによる近代美学史記述、②フリードリヒ・ニーチェのヴァーグナー批判、③ヴァルター・ベンヤミンの叙事演劇論であり、それらに現れる「テアトロクラティア」の用法の意義を、各思想家の思想の変遷に即して解明する。それらの用法に含まれる、芸術を通じた共同体の結合の強化、美的経験の集団性と個性、および観客の芸術への「参加」といった問題を分析して、近代美学と政治思想の交差の実相を解明する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本シェリング協会・事務局代表, 2016年7月～現在に至る

日本18世紀学会・書評委員, 2015年12月～現在に至る

日本シェリング協会・編集委員長代行, 2015年1月～2016年7月

日本シェリング協会・理事, 2008年10月～現在に至る

5. 西井 奨 講師

1982年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会特別研究員PDを経て、2015年11月より特任講師。2018年4月より講師。専攻:文芸学/西洋古典学

5-1. 論文

西井奨 「大学で教えるということ」『以文』60, 京大以文会, pp. 35-36, 2017/11

西井奨 「ホラティウス『詩論』338:「できるだけ真実に近いもの」について」『待兼山論叢 芸術編』50, 大阪大学文学研究科, pp. 1-14, 2016/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

西井奨(書評)「書評:吉田俊一郎『ワレリウス・マクスィムス』著名言行録』の修辞学的側面の研究』東海大学出版部、2017」『西洋古典学研究』(日本西洋古典学会), 66, 日本西洋古典学会, pp. 101-103, 2018/3

5-4. 口頭発表

西井奨「Heroides から Metamorphoses へ — オウィディウス『変身物語』第2巻 676-835 の物語構造」名古屋大学西洋古典研究会例会, 名古屋大学西洋古典研究会, 名古屋大学, 2017/12

西井奨「オウィディウス『変身物語』2. 676-832 における懲罰の構造」京都大学西洋古典研究会例会, 京都大学西洋古典研究会, 京都大学, 2017/12

西井奨「ホラティウス『詩論』における「狂気の詩人」批判」京都大学西洋古典研究会例会, 京都大学西洋古典研究会, 京都大学, 2016/12

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2016年度～2017年度、若手研究(B)、代表者:西井奨

課題番号:17k13422

研究題目:古代ローマにおける文芸論の形成と受容

研究経費:2016年度 直接経費 0円 間接経費 0円

2017年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

第一に、ラテン文学黄金期の代表的詩人であるホラティウスとオウィディウスの、作品全般(『カルミナ』『変身物語』等)について、弁論術の方法論が作品の構成・展開・表現にどのように活用されているのかを分析する。これを踏まえて第二に、両詩人の書簡形式の作品(『書簡詩』『詩論』『黒海からの手紙』『悲しみの歌』)において、両詩人の有する文芸観に、弁論術の特徴を有する実作経験がどのように反映されているかを分析し、両詩人の文芸論の特質を明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学文学会・委員, 2017年4月～現在に至る

日本西洋古典学会・HP運営委員, 2012年6月～現在に至る

6. 土田 耕督 助教

1980年生。2012年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2013年)。2011～13年、日本学術振興会特別研究員DC2。2014～17年、日本学術振興会特別研究員PD。2017～19年、大阪大学大学院文学研究科助教(文化表現論専攻・美学)。

6-1. 論文

土田耕督「「花の下」連歌における〈観客〉の発生と融解」『a+a 美学研究』12, 大阪大学大学院文学研究科美学研究室, pp. 118-135, 2018/3

土田耕督「つくる・風情・風流—日本におけるデザイン意識の古層」『a+a 美学研究』11, 大阪大学大学院文学研究科美学研究

室, pp. 72-85, 2017/3

土田耕督 「藤原為家の〈擬古典主義〉と中世和歌の持続可能性」『藝術研究』(広島芸術学会), 29, 広島芸術学会, pp. 1-16, 2016/7

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

Tsuchida, Kousuke, “Communication based on ‘Misreading’ From Renga to Chanoyu”, Design Study Workshop : Creative (Mis) Communication, 大阪大学, 2018/1

土田耕督 「「めづらし」/「あたらし」: 中世和歌における価値判断の変遷と〈独創性〉の出自」美学会第68回全国大会, 美学会, 國學院大學, 2017/10

土田耕督 「「やまとうた」のルールー世界をつくる集团的ゲームのゆくえ」北海道芸術学会アートトーク Vol. 41, 北海道芸術学会, 紀伊國屋札幌本店, 2017/9

土田耕督 「和歌〈Re:〉論 「本歌取」的方法の諸相から見た中世和歌」芸術学ミーティング, 北海道大学, 2017/9

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-22 音楽学・演劇学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 3 (兼任 1) 講師 0 助教 2(兼任 1)

教授：永田 靖、伊東 信宏

准教授：輪島 裕介、中尾 薫、古後奈緒子(兼任)

助教：岡田 蒔子、横田 洋(兼任)

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
43	17	19	0	8	1	3	1

*うち留学生 19名、社会人学生 5名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	17	3	2	3
2017	14	2	2	2
計	31	5	4	5

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、年1回開催されている合宿などでも、学位論文についての中間報告会を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から40年以上を経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、

カルチュラルスタディーズ的アプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告 2 本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文 2 本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に1~2回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や、共催する関連講演会などを積極的に開催する。21世紀懐徳堂などが主催するイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加する。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度~2017年度)

1. 教育

講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行のインターンシップ報告書に受講学生の報告を寄稿した。学生にとって有意義な場であるため、今後さらなる広報に努め、学生の積極的な参加をうながしたい。

2. 研究

音楽学研究室では、教員3名(上記伊東、輪島に加え、2016-17年度は斎藤桂助教が在籍したが、2018年度より京都市立芸術大学に転じた)それぞれに著書、論文などを刊行しており、順調に成果を挙げた。とりわけ斎藤桂助教による単著『1933年を聴く:戦前日本の音風景』の刊行は特筆される。演劇学研究室では教員4名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また両研究室教員の多くは、科学研究費での助成研究を続けている。さらに院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。音楽学研究室は、国際フォーラム“Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia”を2017年2月に開催し、教員3名をはじめとして研究室構成員の多くが英語での発表を行い、議論に参加した。また2014年4月には学術協定を結んでいるロンドン大学ゴールドスミス校からダニー・ドライヴァー教授(ピアノ)、および松本直美講師を招き、レクチャーコンサート「音楽的錯覚とアイロニー:リゲティ『エチュード』をめぐって」を開催した(4月22日、大阪大学会館講堂)。演劇学研究室では、2016年11月にThe 4th International Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identityを大阪大学にて開催し、院生5名が英語の口頭発表を行った。2017年11月にはThe 5th International Theatre Studies Conference: In / Out of Asiaを国立韓国藝術総合学校演劇院にて開催し、院生7名が英語の口頭発表を行った。また音楽学研究室の教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会、日本音楽学会の委員、支部長、理事などとしての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。演劇学研究室の教員も、日本演劇学会、日本演劇学会分科会近現代演劇研究会、IFTR国際演劇学会、民族芸術学会、能楽学会、藝能史研究会などの会長、事務局、WG代表、理事、常任幹事、委員を務めるなど、積極的な活動を行っている。教員、招へい研究員、大学院生による科学研究費、民間の財団への研究費の申請も毎年おこなっており、とりわけ院生の日本学

術振興会特別研究員採択については、近年着実に成果があがっている。文化庁「大学における文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても各教員は事業推進者として中心的な役割を果たし、学内外でさまざまな公演やイベントを開催した。さらに研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』も予定通り出版された。（『阪大音楽学報』は刊行時期が遅れたが、次号で取り戻す予定である）。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿、放送での解説などを定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月1回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会などの委員、理事、日本演劇学会における会長、幹事などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」など各種レクチャー・コンサートや、大阪大学シンポジウムなどを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、例年どおりの水準を維持した。博士論文についても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、引き続き多くの論文を掲載し、学会でも評価が定着しつつある。2017年2月の国際フォーラム“Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia”は、教員にとっても院生学生にとっても大きな刺激となり、研究の節目となったと評価できる。この成果は、その後の研究も含めて単行本として公刊すべく、編集を進めている。また2014年4月のレクチャーコンサート「音楽的錯覚とアイロニー：リゲティ『エチュード』をめぐって」も、具体的実践の面からの発想によってリゲティ研究に対する大きな寄与となった。また、2016年11月には国際シンポジウム The 4thnd International Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity を、2017年11月には国際シンポジウム The 5nd International Theatre Studies Conference: In / Out of Asia を開催し、国立韓国藝術総合学校演劇院の大学院生、国立台北台湾芸術大学、上海戯劇学院の大学院生らとともに演劇学研究室の教員と大学院生が参加し、英語での研究発表を行ったことによって、国際的な場での研究活動に、積極的に参加することの重要性を認識させる契機となっており、若手研究者の育成に大きく寄与している。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	3	0	3
2017	2	0	2
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

奥村京子「ジェルジ・リゲティの作曲過程 — 電子音楽からクラスター、描写音楽へ —」

主査：伊東信宏、副査：内田次信、輪島裕介、高安啓介

久岡加枝「ジョージア(グルジア)の民族的文化遺産としての合唱「ポリフォニーPolyphony」 — 20世紀の民俗音楽研究と文化政策を中心に —」

主査：伊東 信宏、副査：永田靖、輪島裕介

鷺野彰子「ピアノロールの計量的解析によるショパン《ワルツ Op.42》の演奏分析」

主査：伊東信宏、副査：藤田治彦、輪島裕介、山名敏之（和歌山大学教授）

山本 耕平「戦後音楽教育における『情操』概念の機能」

主査：伊東信宏、副査：輪島裕介、永田靖、菅道子（和歌山大学教授）

岡田蒔子「岸田理生の言葉と身体—「アングラ」から「アジア」へ—」

主査：永田靖、副査：中尾薫、古後奈緒子

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	3(2)	2(1)	1(1)	0(0)	5(4)	11(8)
2017	1(1)	2(2)	1(1)	0(0)	4(4)	8(8)
計	4(3)	4(3)	2(2)	0(0)	9(8)	19(16)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	8	12	8	0	2	30
2017	6	2	6	0	0	14
計	14	14	14	0	2	44

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士後期〕

（演劇学）

Ayako KAKINUMA, “UTSU Hideo and American Revue A comparison of *Broadway* (1930) and *Manhattan Rhythm* (1937)”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Theatre

Studies Section, Graduate School of Letters, Osaka University, pp81-86, 2016

Yayoi SEKIYA, “Hakuyokai: Untold Story of Noh Introduced by Japanese Immigrants of Brazil”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Theatre Studies Section, Graduate School of Letters, Osaka University, pp91-97, 2016

Toshiki MATSUMOTO, “The treatment and incorporation of the image of China during wartime Takarazuka: The case of HORI Seiki’s “Reimei” in 1937”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Theatre Studies Section, Graduate School of Letters, Osaka University, pp60-65, 2016

松本俊樹「堀正旗による新即物主義演劇の「宝塚化」—『泥に塗られた党旗』から『青春』へ—『近現代演劇研究』、Vol.6、pp44-60、2017/2/28

黄資絜「野田秀樹作品における言葉遊びと時間性の変遷—『ゼンダ城の虜』から『オイル』へ—『待兼山論叢』、50号、pp15-45、2016/12

Tomiko NAKAGAWA, ““The Aesthetics of Disappearance”: The Case of Ken TAKEUCHI’s Works in the 1960s”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Theatre Studies Section, Graduate School of Letters, Osaka University, pp20-26, 2016

中川登美子「劇的複合空間の実践—竹内健による演劇活動をめぐって—」『演劇学論叢』、16号、pp42-65、2017/3/30

岡田蒔子「岸田理生の未刊行初期作品について—哥以劇場創立前後を中心に—」『フィロカリア』、34号、pp29-49、2017/3

(音楽学)

樋口騰迪「シャンソン」に見る大衆歌謡の成立史——《ラ・マルセイエーズ》から《水色のワルツ》へ・音楽学的考察 『知的公共圏の復権の試み』、行路社、pp313-341、2016/9

藤下由香里「同人音楽における歌姫～その在り方と受容について～」『フィロカリア』第34号、pp.13-28, 2016/3

鷺野彰子「パデレフスキのルバート：ピアノロールの分析試論（2）」『阪大音楽学報』、第14号、pp1-33, 2016/12

【2017年度】

[博士前期]

(音楽学)

秋山良都「ボザウネンコアにおける共属感情の経験—参与型パフォーマンスとしてのプラスバンド」『待兼山論叢 芸術編』第51号、pp31-52.

[博士後期]

(演劇学)

Yun-Jeong KIM, “Consideration on the Meaning of ‘Silence’ of Ōta Shōgo—Focusing on The Water Station (Mizuno eki)” 『The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia』, pp.124-129, 2017/11/24.

鈴木星良、小川歩人、常盤成紀、関屋弥生「モスクワにおける現代アートと社会——ファブリカの事例を通して」『Arts and Media』、第7号、p.252-259、平成29年7月31日。

Tomiko NAKAGAWA, “The Characteristics of Acceptance of the Theatre of the Absurd by Tetsuo ARAKAWA: The Case of *The Zoo Story*”, 『The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia』, pp.4-11, 2017/11/24.

Toshiki MATSUMOTO, “To Be Innocent or To Improve the ‘Artistry’? The Controversy on the Beginning of Takarazuka and HORI Seiki’s Jinkakusha”, 『The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia』, pp.92-101, 2017/11/24.

松本俊樹「一九三〇年代宝塚少女歌劇におけるアジア表象とその変化—堀正旗『黎明』『モオン・ブルウメン』を例に—」『フィロカリア』第35号、大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座、平成30年3月26日、pp.49-66.

[研究生]

(演劇学)

Irina KOSTYLIANCHANKA, “The Space of Performances: the Interpretation of The Seagull and The Cherry Orchard by Miura Motoi”, 『The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia』, pp.176-182, 2017/11/24.

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

中岡愛「巖谷小波のお伽狂言—執筆目的の変遷をめぐって—」、民族藝術学会、民族藝術学会、大阪大学、日本、2017/2/11
杉本亘、「人形浄瑠璃と現代演劇 ～文楽の達人が誘う“人形浄瑠璃の世界”～」、「人形浄瑠璃と現代演劇 ～文楽の達人
が誘う“人形浄瑠璃の世界”～」、能勢人形浄瑠璃実行委員会／能勢町、大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ、日本、2017/1/6,
共同発表者：廣嶋萌衣

(音楽学)

吉村汐七「現代におけるライブパフォーマンスの変容に関する研究——応援上映と初音ミクのライブを事例に」、日本ポ
ピュラー音楽学会、2017年度第1回関西地区例会、関西大学、日本、2017/3/24

〔博士後期〕

(演劇学)

垣沼絢子「戦時下宝塚の帰朝公演における「国家」の表象—『我等の旅行記』(1939)における「興亜日本」—」日本演
劇学会、日本演劇学会、大阪大学、2016/7/3

Ayako KAKINUMA, “UTSU Hideo and American Revue A comparison of Broadway (1930) and Manhattan Rhythm
(1937)”, The 4th International Asian Theatre Studies Conference; Asian Theatricality and Identity, Osaka
University, 大阪大学中之島センター, 日本, 2016/11/5

垣沼絢子「日本におけるレビュー論争とその実践—宝塚、浅草、日劇ダンシングチーム」、近現代演劇研究会、近現代演
劇研究会、大阪大学、2016/12/24

関屋弥生「海を渡った”ニッポン”の芸能—能楽の海外公演について—」, 阪大院生五者知の横断, 大阪大学,
2016/7/10

関屋弥生「ブラジルに渡った能楽～「伯謡会」の活動を中心に～」, 六麓会, キャンパスプラザ京都, 2016/7/24

Yayoi SEKIYA, “Hakuyokai: Untold Story of Noh Introduced by Japanese Immigrants of Brazil”, The 4th
International Asian Theatre Studies Conference; Asian Theatricality and Identity,, 大阪大学中之島センター,
2016/11/4

Yayoi SEKIYA, “Zeami and his Zen Philosophy: the Travelling Monk’ s Experience of Enlightenment in His Dream”,
The European Network of Japanese Philosophy, The Free University of Brussels, 2016/12/8

関屋弥生「日系ブラジル移民と世阿弥—鈴木英子作・新作能《巨匠の石》分析—」, 民族藝術学会, 大阪大学, 2017/2/11

松本俊樹「1930年代宝塚少女歌劇のオペレッタ作品に見られるアジア表象—堀正旗『モオン・ブルウメン』『黎明』を例
に—」, 日本演劇学会, 大阪大学, 2016/7/3

Toshiki MATSUMOTO, “The treatment and incorporation of the image of China during wartime Takarazuka”, The
4th International Asian Theatre Studies Conference; Asian Theatricality and Identity,, 大阪大学中之島センター,
2016/11/4

松本俊樹「宝塚少女歌劇における「時局物」オペレッター堀正旗『愛国大学生』(1939)を例に—」, 総合学術博物館研究
発表会, 大阪大学, 2016/12/13

Tomiko NAKAGAWA, ““The Aesthetics of Disappearance”: The Case of Ken TAKEUCHI’s Works in the 1960s”, The
4th International Asian Theatre Studies Conference; Asian Theatricality and Identity, 大阪大学中之島センター,
2016/11/4

西恵野「「無躰なる能」としての《杜若》—国広伝書における「杜若の精」のとらえ方について—」, 六麓会, キャン
スプラザ京都, 2016/7/24

西恵野「観世国広の《杜若》における「杜若の精」の解釈をめぐる考察」, 「音曲面を中心とする能の演出の進化・多様
化」研究会, 京都市立芸術大学, 2016/8/6

- Ayano NISHI, "Zeami's theory of Yugen—The way to explain "HANA" in Fushikaden—", The European Network of Japanese Philosophy, The Free University of Brussels, 2016/12/8
- 岡田蒔子「岸田理生作『凧』(1979) 考察—泉鏡花『紅玉』『山吹』の引用を中心に—」日本演劇学会、大阪大学、2016/7/2
- 岡田蒔子「岸田理生の未刊行初期作品について—哥以劇場創立前後期を中心に—」近現代演劇研究会、大阪大学、2016/12/24 (音楽学)
- 秋山良都、「修士論文発表：ポザウネンコアの民族誌—共属感情の経験としての音」、日本音楽学会、日本音楽学会西日本支部 第31回(通算382回)例会(東洋音楽学会西日本支部定例研究会との合同)、大阪音楽大学、2016年5月28日
- 秋山良都「書評 トマス・トゥリノ『ミュージック・アズ・ソーシャルライフ—歌い踊ることをめぐる政治』: 参与型パフォーマンスとしてのポザウネンコア」、日本ポピュラー音楽学会、ポピュラー音楽学会 2016年度第2回関西地区例会、関西大学、2016/8/30
- 秋山良都「ヨハネス・クーローにおける「ポザウネンコア」の理念——福音主義と愛国主義のための金管演奏——」、日本音楽学会、日本音楽学会第67回全国大会、中京大学、2016/11/12
- 秋山良都「ポザウネンコアに参加することの意味：宗教と世俗との緊張関係において」、日本ポピュラー音楽学会、第28回日本ポピュラー音楽学会年次大会、2016/12/4
- Ryoto Akiyama, "A Space for Hospitality: Through the case of Posaunenchor" International Society for Ethnology and Folklore 13th Congress, The University of Göttingen, 2017/3/29
- Fumi UEHATA, "Idealizing National Identity through Pop-folk Music in Post-Socialist Serbia: Codes of Music Programs in Major Broadcast Stations", International Musicological Society, 20th Quinquennial Congress in Tokyo, 2017/3/21
- 樋口騰迪「ベルエポックのシャンソンにおける外来音楽の影響——Mayol とそのシャンソンをめぐる——」、第27回シャンソン研究会、追手門学院梅田サテライト、日本、2016/5/21
- 藤下由香里「同人音楽における歌姫～オタク系文化における女性プロデューサー～」 “The Changing Same in Transcultural Musicking”、大阪大学会館21世紀懐徳堂スタジオ、日本、2016/7
- 藤下由香里「同人音楽における声と少女性をめぐって」日本ポピュラー音楽学会 第28回年次大会、日本、2016/12
- 【2017年度】
- 〔博士後期〕
- (音楽学)
- Ryoto Akiyama, "Sing to the LORD a new song: the interaction of religion and popular music in the case of Posaunenchor in the German Protestant Church", 19th Biennial Conference of the International Association for the Study of Popular Music, June 26-30, 2017, Kassel, Germany.
- Ryoto Akiyama, "Sounding and Embodying the Faith: Participatory Brass Ensemble of Posaunenchor in the Lutheran Church in Germany", Lutheran Music Culture Conference, September 14-16, 2017, Uppsala University, Sweden.
- 杉山恵梨「戦後日本における西洋古楽運動の受容——新聞・雑誌にみられる言説をめぐる——」、日本音楽学会第68回全国大会、京都教育大学、2017/10
- 樋口騰迪「《ラ・マルセイエーズ》は「シャンソン」か? : 比較音楽学的考察」第29回シャンソン研究会、追手門学院大阪梅田サテライト、2017/5
- 松井拓史「戦後初期のハンガリー国立民俗アンサンブル：ソ連モデル受容に関する諸問題」、第44回日本ウラル学会研究発表大会、名古屋大学、2017/07/08
- 松井拓史「戦後初期のハンガリー国立民俗アンサンブル：文化ナショナリズムとスターリン主義の摩擦と妥協」、第61回文芸学研究会、大阪大学、2017/09/30
- (演劇学)
- Yun-Jeong KIM, "Consideration on the Meaning of 'Silence' of Ōta Shōgo—Focusing on The Water Station (Mizu

no eki)”, The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia, Korea National University of Arts, 2017/11/24

関屋弥生「ブラジル日系社会における能楽の展開とその特色」, サンパウロ人文科学研究所, 2017/12/12

中川登美子「1960年代初期文学座アトリエの会に夜「前衛劇」上演をめぐって」, 近現代演劇研究会 3月・5月合同例会, 大阪大学, 2017/5/27

Tomiko NAKAGAWA, “The Characteristics of Acceptance of the Theatre of the Absurd by Tetsuo ARAKAWA: The Case of *The Zoo Story*”, The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia, Korea National University of Arts, 2017/11/24

Toshiki MATSUMOTO, “To Be Innocent or To Improve the ‘Artistry’? The Controversy on the Beginning of Takarazuka and HORI Seiki’s Jinkakusha”, The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia, Korea National University of Arts, 2017/11/24

矢野郁, 「ワークショップ アメリカの演劇教育と劇づくり」第22回中国地区演劇教育セミナー, 広島演劇と教育の会, 牛田公民館 第2研修室, 2017/8/9

矢野郁, 「授業で「使える!」演劇アクティビティ」日本演劇教育連盟創立80周年記念第66回全国演劇教育研究集会, 立命館大学草津キャンパス, 2018/1/6-7

[研究生]

(演劇学)

Irina KOSTYLIANCHANKA, “The Space of Performances: the Interpretation of The Seagull and The Cherry Orchard by Miura Motoi”, The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia, Korea National University of Arts, 2017/11/25

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016年度】

[博士前期]

(演劇学)

中岡愛「時代を超える笑い 第241回京都市民狂言会」『大阪日日新聞』, 2016/4/6

中岡愛「子どもたちキノコを熱演 篠山秋の狂言会」『大阪日日新聞』 2016/10/5

杉本亘「九郎右衛門の迫力に息のむ 高槻現代劇場『高槻明月能』」『大阪日日新聞』, 2017/1/4

松澤綾子「視覚的にも楽しめる表現 4月文楽公演通し狂言「妹背山女庭訓」」『大阪日日新聞』 2016/6/1

松澤綾子(宗形真裕として)「お能にトキメク」『奈良新聞』毎月第三金曜日掲載

松澤綾子「いいね!日本の古典芸能」『ラジオ・ならどっとFM』毎月第4木曜日 15:00 放送

(音楽学)

Takushi MATSUI, „Az 5. Emlékkoncert a Tóhokui Földrengés és Cunami Áldozatainak Emlékére”「東日本大震災 犠牲者追悼記念演奏会」, Budapest, April 10, 2016 (ハンガリー国内で開催された演奏会で担当した, ハンガリー語および英語による楽曲解説と司会進行/ハンガリー語・英語)

Takushi MATSUI, „Okuma Napok - Cseresznyevirágzás ünnepe”「大隈の日一桜の祝い」, Keszthely, May 4, 2016 (ハンガリー国内で開催された演奏会で担当した, ハンガリー語および英語による楽曲解説と司会進行/ハンガリー語)

Takushi MATSUI, „Pisztráng - Japán zenészek koncertje”「鱒—日本人音楽家によるコンサート」, Budapest, June 12, 2016 (ハンガリー国内で開催された演奏会で担当した, ハンガリー語および英語による楽曲解説と司会進行/ハンガリー語)

吉村汐七「映画 KING OF PRISM by PrettyRhythm」『大阪日日新聞』 2016/10/5

[博士後期]

(演劇学)

- 垣沼絢子「言語の解体と現実の再構成 地点「CHITENの近未来語」『大阪日日新聞』2016/9/7
- 関屋弥生「虚子原作、初演から100年の復活 能「鉄門」『大阪日日新聞』,2016/5/4
- 朴英恵「インタビュー 文化をはぐくむ場所」『毎日新聞』大阪朝刊,2016/7/5
- 松本俊樹「重層的な「義」が魅力の退団公演 宝塚歌劇星組公演「桜華に舞え」『大阪日日新聞』,2016/11/2
- 黄資絜「若者の特権性強調 ニットキャップシアター「ねむり姫」『大阪日日新聞』,2016/8/3
- 中川登美子「もしも、死者と話したら…、哀しくも愛おしい幻影 PM/飛ぶ教室「足場の上のゴースト」『大阪日日新聞』,2017/3/1
- 西恵野「夕闇の古都に揺らめく予祝の燈明 第67回京都薪能」『大阪日日新聞』2016/7/6
- 岡田蒔子「松本雄吉の遺志胸に、新たな船出 維新派最終公演『アマハラ』」『大阪日日新聞』2016/12/7

(音楽学)

- 秋山良都「伝音セミナー」日本の希少音楽資源にふれる：第6回日本の作曲家を聴く（その2）～能と日本の伝統音楽」大阪日日新聞、「関西の音と人」欄、2016/12/7 掲載
- 秋山良都、「書評 Suzel Ana Reily, Katherine Brucher 編 Brass Bands of the World: Militarism, Colonial Legacies, and Local Music Making」、『音楽学』、第62巻2号 pp102-103、2017/3
- 戸田直夫「3000人の吹奏楽 目で見て楽しむマーチング」『大阪日日新聞』2016/8/3
- 戸田直夫「青春の吹奏楽 part3」プログラムノート いずみホール2016/4/9
- 樋口騰迪（堀江敏樹氏への聞き取り。ほか、伊東信宏・黒田清子・小島亮と共同）「堀江謙吉と音楽喫茶 MUSICA——あるモダニストの残影」中部大学編『アリーナ』2016 Vol.19 pp 44-96 2016/11
- 樋口騰迪「書評「ウィリアム・ウェーバー著 松田健訳 『音楽テイストの大転換——ハイドンからブラームスまでの演奏会プログラム』」中部大学編『アリーナ』2016 Vol.19 pp646-654 2016/11
- 樋口騰迪「評伝「岩淵龍太郎——戦後音楽史のなかで」、『岩淵龍太郎先生を偲んで～コンサートと感謝の会』プログラム,pp 7-14 2017/1
- 樋口 騰迪「京都大学交響楽団第200回定期演奏会・創立100周年記念特別公演」、『大阪日日新聞』,18面,2017/2/1
- 藤下由香里「日本ポピュラー音楽学会第27回大会報告 個人研究発表 B-4 『同人音楽の歌姫による自己の表現』『JASPM NEWSLETTER』、第107号 (vol.28 no.1)、pp.19-20、2015/5/29
- 鷺野彰子「書評『ピアノ、その左手の響き』』『週刊読書人』p.6、読書人、2016/4
- 鷺野彰子「新しい視点」『Music Friends』第104号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）2016/4
- 鷺野彰子「スタンフォード滞在記：スタンフォード大学」『Music Friends』第105号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）、2016/5
- 鷺野彰子「演奏法の授業」『Music Friends』第106号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）2016/6
- 鷺野彰子「アメリカにおける古楽演奏の学会と古楽音楽祭」『Music Friends』第107号、pp.20-24、現代音楽出版社（韓国）2016/7
- 鷺野彰子「スタンフォードの夏休み：サンフランシスコ」『Music Friends』第108号、pp.22-27、現代音楽出版社（韓国）2016/8
- 鷺野彰子「スタンフォードの夏休み：サンノゼのベートーヴェン・センター」『Music Friends』第109号、pp.22-28、現代音楽出版社（韓国）2016/9
- 鷺野彰子「AMICA」『Music Friends』第110号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/10
- 鷺野彰子「スタンフォード・シアターで観た2つの『メリー・ウィドウ』」『Music Friends』第111号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/11
- 鷺野彰子「スタンフォード大学音楽図書館」『Music Friends』第112号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/12
- 鷺野彰子「スタンフォード大学音楽図書館（2）：Archive of Recorded Sound」
- 鷺野彰子「書評『ピアノ、その左手の響き』』『週刊読書人』p.6、読書人、2016/4

- 鷺野彰子「新しい視点」『Music Friends』 第104号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）2016/4
- 鷺野彰子「スタンフォード滞在記：スタンフォード大学」『Music Friends』 第105号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）、2016/5
- 鷺野彰子「演奏法の授業」『Music Friends』 第106号、pp.20-23、現代音楽出版社（韓国）2016/6
- 鷺野彰子「アメリカにおける古楽演奏の学会と古楽音楽祭」『Music Friends』 第107号、pp.20-24、現代音楽出版社（韓国）2016/7
- 鷺野彰子「スタンフォードの夏休み：サンフランシスコ」『Music Friends』 第108号、pp.22-27、現代音楽出版社（韓国）2016/8
- 鷺野彰子「スタンフォードの夏休み：サンノゼのベートーヴェン・センター」『Music Friends』 第109号、pp.22-28、現代音楽出版社（韓国）2016/9
- 鷺野彰子「AMICA」『Music Friends』 第110号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/10
- 鷺野彰子「スタンフォード・シアターで観た2つの『メリー・ウィドウ』」『Music Friends』 第111号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/11
- 鷺野彰子「スタンフォード大学音楽図書館」『Music Friends』 第112号、pp.23-28、現代音楽出版社（韓国）2016/12
- 鷺野彰子「スタンフォード大学音楽図書館（2）：Archive of Recorded Sound」『Music Friends』 第113号、pp.26-31、現代音楽出版社（韓国）2017/1
- 鷺野彰子「平成28年度【音楽振興部門】より・ピアノロールの計量的解析によるルバート奏法分析」『サウンド』 第32号、カワイサウンド技術・音楽振興財団、2017/1
- 鷺野彰子「風光明媚なシリコンバレー」『Music Friends』 第114号、pp.25-29、現代音楽出版社（韓国）2017/2
- 鷺野彰子「CCRMAとCCARH」『Music Friends』 第115号、pp.24-29、現代音楽出版社（韓国）2017/3
- 鷺野彰子「平成28年度【音楽振興部門】より・ピアノロールの計量的解析によるルバート奏法分析」『サウンド』 第32号、カワイサウンド技術・音楽振興財団、2017/1
- 鷺野彰子「風光明媚なシリコンバレー」『Music Friends』 第114号、pp.25-29、現代音楽出版社（韓国）2017/2
- 鷺野彰子「CCRMAとCCARH」『Music Friends』 第115号、pp.24-29、現代音楽出版社（韓国）2017/3
- 【2017年度】
- 〔博士前期〕
- （音楽学）
- 加藤賢「シンポジウム 音楽映像をどう捉えるか——1970年代以降のポピュラー音楽史のために」、日本ポピュラー音楽学会『NEWSLETTER #115』、シンポジウム報告原稿、2018/2
- 加藤賢「世界のジャズを関西へ届けたい——ジャズ情報誌『WAY OUT WEST』」『大阪日日新聞』、2018/2/27
- 八谷誠人「アルディッティ弦楽四重奏団演奏会：情報量あふれ刺激満つ」『大阪日日新聞』、2018/8/22
- 名田青麻「トーマス・アデス 新作オペラ《皆殺しの天使》：「幽霊屋敷」の生命力」『大阪日日新聞』、2018/3/27
- 近藤美奈子「アイルランド音楽のすべてがここに：奏・聴・踊・食・話の一体型イベント」『大阪日日新聞』、2018/1/30（演劇学）
- 工藤春菜「現代的アレンジで生死つなぐ 「心中天の網島—2017リクリエーション版」」『大阪日日新聞』2017/11/7
- 杉本亘「通の鑑賞に堪える内容 夏休み文楽特別公園「親子劇場」」『大阪日日新聞』2017/9/5
- 松澤綾子（宗形真裕として）「お能にトキメク」『奈良新聞』毎月第三金曜日掲載（2017年12月まで）
- 松澤綾子「いいね！日本の古典芸能」『ラジオ・ならどっとFM』毎月第4木曜日15:00放送（2017年12月まで）
- 宮本蒔「「命と人生」考える社会派舞台劇 演劇ユニット iaku『肅々と運針』」『大阪日日新聞』2017/7/11
- 宮本蒔「イギリスの注目演劇現地レポート！『トゥー・マン・ショー』劇評—ジェンダーを超えて、ありのままに、生きやすく。」『ARTLOGUE』株式会社アートログ、2017/12/23

〔博士後期〕

(音楽学)

- 藤下由香里「同人作品即売会「京都ボカロ合同」：つながる作り手と聴き手」『大阪日日新聞』、2017/5/2
戸田直夫「公開講座「クレズマーの魅力体験する」：東欧ユダヤ系音楽の多様性」『大阪日日新聞』、2017/6/27
平尾佳子（博士後期課程3年）「天神祭の太鼓中：邪気祓う伝統の継承」『大阪日日新聞』、2017/9/19
松井拓史「特別展『音楽再生の楽しみ～はじまりは蓄音機』」『大阪日日新聞』、2017/10/24
藤下由香里「琵琶湖周航の歌 誕生100周年：友情から人生の旅へ」『大阪日日新聞』、2017/12/19

(演劇学)

- 垣沼絢子「平和への深い祈り 緑のテーブル2017」『大阪日日新聞』2017/5/16
金潤貞「感覚の供宴で自我を探す一日韓文化交流企画『パール・ギュント』」『大阪日日新聞』2018/2/13
関屋弥生「大衆にやさしく仏法説く 壬生狂言」『大阪日日新聞』2017/6/13
中川登美子「沖縄の問題意識のモリ貫く一劇団燐光群公演「くじらと見た夢」」『大阪日日新聞』2018/1/16
西恵野「一足先に咲いた早春の花々 平成29年度初回大江定期能」『大阪日日新聞』2017/4/25
西恵野「忘れ得ぬ憤怒と悲哀見事に 能「松山天狗」」『大阪日日新聞』2017/12/5
松本俊樹「男の弱さとリアリティー ミュージカル「グレート・ギャツビー」」『大阪日日新聞』2017/8/8
松本俊樹「社会風刺する宝塚の「型破り」ショー—月組公演のショー『BADDY—悪党は月からやってくる—』」『大阪日日新聞』2018/3/13
松本俊樹「砂壁のような生活—ピッコロ劇団『砂壁の部屋』—」『演劇学論叢』第17号、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室、2018/3/30、pp.100-101.
矢野郁「運命胸に「人間らしさ」描く ミュージカル「ノートルダムの鐘」」『大阪日日新聞』2017/10/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

【2016年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

- 松澤綾子「40周年記念イヤホンガイド解説員オーディション～未来の歌舞伎・文楽ナビゲーター募集～文楽部門優秀賞」
2016/3/26

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD:0名 DC2:1名 DC1:1名 (計2名)

2017年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部:2名 大学院:2名 (計4名)

2017年度 学部:2名 大学院:1名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

(演劇学)

- 李星坤(国立韓国芸術総合学校准教授)2016年度の着任ですが、年報未掲載のため追記いたします。
須川渡(福岡女学院大学講師)

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2016年度：0名 2017年度：2名

9. 刊行物

2016年度 『演劇学論叢』第16号
2016年度 『阪大音楽学報』第14号
2017年度 『演劇学論叢』第17号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

近現代演劇研究会事務局 2016年度
日本演劇学会大会「ポスト・グローバリゼーション時代の日本演劇」を開催、2016年7月
国際演劇会議 The 4th International Asian Theatre Studies Conference Asian Theatricality and Identity を国立韓国芸術総合学校と上海戯劇学院と共催、2016年11月
近現代演劇研究会10月12月例会を開催、2016年12月
講演会「人形浄瑠璃と現代演劇 ～文楽の達人が誘う“人形浄瑠璃の世界”～」を開催、2017年1月
国際フォーラム 'Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides of Eurasia'、2016年2月14日-15日
近現代演劇研究会事務局 2017年度
近現代演劇研究会3月5月例会を開催、2017年5月
近現代演劇研究会7月例会を開催、2017年7月
近現代演劇研究会10月12月例会を開催、2017年12月
国際演劇会議 The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia を国立韓国芸術総合学校と台北藝術大学と共催、2017年11月
展覧会「演じる私たち～戦後二〇年関西「新劇」の軌跡～」を開催、2017年10月～12月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東信宏教授、輪島裕介准教授、齋藤桂助教は、いずれも活発な研究活動を展開した。伊東教授は、科学研究費挑戦的萌芽研究『『演歌型』大衆音楽の国際比較研究：東欧とアジアを中心に』が採択され、前年度までのテーマを引き継ぎながら、バルカンの大衆音楽に関する研究を進め、その成果は2017年2月に開催された国際フォーラムに結実した。輪島准教授は科学研究費挑戦的萌芽研究「世界諸地域の大衆音楽における「日本」表象の關係史的研究」に採択され、日本の大衆音楽の研究に関する国際的なネットワークの形成を進めた。その成果のひとつとして、2016年7月に、コロンビア大学助教授のケヴィン・フェレス氏を招いて、フェレス氏の講演と多様な専攻の大学院生によるショート・スピーチ・コンテストからなるイベント”The Changing the Same in Transnational Musicking”を開催した。

3名の教員は、新聞、雑誌への寄稿や一般向けの講座など、アウトリーチ活動も活発に行っている。また、研究室主宰のコンサートシリーズ、大阪大学コレギウム・ムジクムも毎年開催しているが、2016年度は、ニューヨーク・スクールを代表する作曲家であるアール・ブラウンの作品と研究状況について、ニューヨークのアール・ブラウン財団からトーマス・フィヒター氏を招き、講演会「アール・ブラウン：作品と生涯」を開催した（2016年12月2日）。また2017年度

には、モンゴルを代表する歌舞団“Tumen-Ekh”（トゥメン・エヒ）と、民族楽器「角笛」の演奏家で作曲家である O. チンバト氏を招き、レクチャーコンサート「モンゴル伝統舞踊と角笛」を開催した（2017年10月10日、大阪大学会館）。

これらに加えて、外部査読を取り入れた『阪大音楽学報』は、従来どおりの規模で刊行され、「大阪日日新聞」における院生による連載（「関西の音と人」）も転載した。

（演劇学）

永田靖教授、中尾薫准教授、横田洋助教、古後奈緒子助教（2017年度より准教授昇任）とも、いずれも多く論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田教授が会長、中尾薫准教授が幹事（2017年6月にて任期満了）を務める日本演劇学会の分科会である近現代演劇研究会を永田教授が主宰して、毎年5回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。2016年7月には日本演劇学会全国大会「ポスト・グローバリゼーション時代の日本演劇」を大阪大学で開催し演劇研究の今日的国際的展開に寄与した。永田教授は引き続き、科学研究費基盤研究（B）を獲得し、日本を含むアジア演劇の近現代演劇史の再考を進めているが、国際会議への出席が頻繁となっており、主催する国際研究会「国際演劇学会アジア演劇ワーキング・グループ」を毎年2回世界諸都市で開催し、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。演劇学研究室では、2016年11月に国際シンポジウム The 4th International Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity を大阪大学にて開催し、国立韓国芸術総合学校の大学院生、上海戯曲学院の大学院生とともに、演劇学の大学院生7名が英語での研究発表にのぞんだ。また2017年11月にも The 5th Asian Theatre Conference: In / Out Asia を国立韓国芸術総合学校演劇院にて開催し、同学校演劇院の院生、臺北藝術大學戯劇学科の院生と合同での国際学会に参加し、7名が英語での研究発表をおこない、大学院生の将来的な国際的活躍への意識をうながした。中尾准教授は、一般向け講座の講師を依頼される事例が多く、研究成果を積極的に公開するほか、能楽学会の関西例会・能楽フォーラムの世話人、能楽学会常務委員、民族芸術学会理事、芸能史研究会委員のひとりとして、学会での存在感をしめしている。また、国際学会にも積極的に参加している。永田教授、中尾准教授、岡田助教はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、研究協力者、東京大学、京都市立芸術大学、羽衣国際大学など他大学の研究会に参画し、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

日本演劇学会大会「ポスト・グローバリゼーション時代の日本演劇」、大阪大学豊中キャンパス、2016年7月1～3日
The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity, 大阪大学中之島センター、
2016年11月4～6日

近現代演劇研究会 10月・12月合同例会 研究発表：垣沼絢子（大阪大学大学院）「日本におけるレビュー論争とその実践—宝塚、浅草、日劇ダンシングチーム」、岡田露子（大阪大学大学院）「岸田理生の未刊行初期作品について—哥以劇場創立前後期を中心に」、本杉省三（日本大学）「劇場空間の喜び：五感で感じる劇場へ」、喜志哲雄（京都大学名誉教授）「ピンターを演じるピンター」会場；大阪大学、2016年12月24日

講演会「人形浄瑠璃と現代演劇 ～文楽の達人が誘う“人形浄瑠璃の世界”～」講演者：永田靖教授（大阪大学）、竹本住大夫氏（人間国宝、人形浄瑠璃文楽太夫）、桐竹勘十郎氏（人形浄瑠璃文楽座人形遣い）会場；大阪大学、2017年1月6日、20日、27日

2016年12月 第18回阪大コレgium・ムジクム、トーマス・フィヒター氏（アール・ブラウン音楽財団）による講演会「アール・ブラウン：作品と生涯」、会場；大阪大学待兼山会館、2016年12月2日。

2017年10月 第19回阪大コレgium・ムジクム「モンゴル伝統舞踊と角笛」特別公演と講演（歌舞団“Tumen-Ekh”（トゥメン・エヒ）と、民族楽器「角笛」の演奏家で作曲家である O. チンバト氏を招いた）。会場；大阪大学会館講堂（豊中

キャンパス)、2017年10月10日。

近現代演劇研究会3月5月合同例会 研究発表：梁悦(京都大学大学院)「宝塚少女歌劇と民衆劇に関する一考察」、中川登美子(大阪大学大学院)「1960年代初期文学座アトリエの会に夜「不条理劇」上演をめぐって」、須川渡(大阪大学)「サークル文化運動としての演劇実践—劇団ぶどう座の新史料を手がかりに」、日高真帆(京都女子大学)「英語ミュージカル公演の実践と課題—京都女子大学での取り組みからの考察」会場：大阪大学、2017年5月27日

近現代演劇研究会7月例会 2017年7月 研究発表：西田容子(大阪大学言語文化研究科博士後期)「ミハイル・チェーホフの演技論再考」、上田学(神戸学院大学)「大正期の映画と演劇の形式的連関—日活向島と連鎖劇を中心に—」、会場：大手前大学、2017年7月29日

近現代演劇研究会10月12月合同例会 研究発表：平川大作(大手前大学)「オーウェルの『1984』—政治と演劇に関する一考察」、澤井万七美(国立沖縄工業高等専門学校)「東京都大田区立郷土博物館所蔵多摩川園「小鳥座」関連資料紹介」、横田洋・永田靖(大阪大学)「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演の考え方と実践」会場：大阪大学、2017年12月24日

近現代演劇研究会3月例会 研究発表：金裕彬(大阪大学大学院)「飯沢匡『クイズ婆さんの敵』と金大中事件」、ヘレナ・チャプコワ(早稲田大学)「Bedrich Feuerstein (1892-1936) and his theatre architecture」、鈴木暁世(金沢大学)「農民劇の理論と実践—中村星湖の活動を起点として—」会場：神戸松蔭女子学院大学、2018年3月3日

国際演劇会議 The 5th International Asian Theatre Studies Conference In/Out of Asia, Korea National University of Arts, 2017年11月24日～25日

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖「演劇は教養になるか」『演劇学論叢』日本演劇学会紀要, 65, pp. 21-30, 2017/11

永田靖「アジアの近代劇化：森本薫『大川仇討』(1941)について」『Arts & Media』, 大阪大学文学研究科文化動態論アートメディア論コース, 7, pp. 300-304, 2017/7

永田靖「伝統」の舞踊化—雲門舞集七〇年代作品『白蛇傳』『薪傳』を中心に』『演劇学論叢』16, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp.1-19, 2017/3

Nagata, Yasushi, “Destabilizing Geography: on Kara Gumi’s Taiwan Production, 1992”, Proceedings, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference Asian Theatricality and Identity, The 4th International Asian Theatre Studies Conference*, pp. 6-11, 2016/11

永田靖「ソビエト国際 SF 映画の系譜：『アエリータ』に始まる』『不思議惑星キンザザ デジタル・リマスター版プログラム』パンドラ, pp.17-19, 2016/8

永田靖「雲門舞集の新しい劇場」『Arts and Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp.274-277, 2016/5

1-2. 著書

永田靖, 上田洋子, 内田健介(共編著) 『歌舞伎と革命ロシア』森話社, 387p., 2017/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Bodies in/and Asian Theatre ATWG Convener’s Address,” Opening Program and Keynote, *International Federation for Theatre Research Manila Regional Conference, ‘Bodies in/and Asian Theatre’*, Asian Center, University of the Philippines, Diliman, 2018/2

Nagata, Yasushi, “Traditional Asian Performing Bodies in a Post-Globalized Era,” *International Federation for Theatre Research Manila Regional Conference, ‘Bodies in/and Asian Theatre’*, Asian Center, University of the Philippines, Diliman, 2018/2

永田靖「関西戦後「新劇」を考える」関西学院大学博物館/大阪大学総合学術博物館連携公開シンポジウム, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学, 2017年12月2日

永田靖「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演の考え方と実践」近現代演劇研究会 10月12月合同例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2017年12月24日

永田靖「演技論から見る身体」開会挨拶、日本演劇学会秋の研究集会「演技論から見る身体」, 日本演劇学会, 愛媛大学, 2017年1月24日

Nagata, Yasushi, “How to be an Asian in Asia”, *Korea China Japan Cultural Olympics, Art Forums*, Korea National University of Arts, November 10, 2017

Nagata, Yasushi, “Trans-Geographical Trials of the Jokyo Gekijo Theatre Company: on The Bengal Tiger”, *Unstable Geographies, Multiple Theatricalities, International Federation for Theatre Research Sao Paulo Conference*, IFTR, Sao Paulo University, July 14, 2017

永田靖「演劇は教養になるか」, 日本演劇学会「演劇と教養」, 日本演劇学会, 慶応義塾大学, 2017年6月4日

永田靖「地域劇場の未来—大学と地域との繋がりのために」21世紀懐徳堂シンポジウム, 大阪大学 21世紀懐徳堂, 大阪大学中之島センター, 2017年4月19日

Nagata, Yasushi, “The form and content of theatre in Asia through travel and displacement”, *Jaipur Colloquium “TRAVEL and DISPLACEMENT in/with ASIAN THEATRE”*, Asian Theatre Working Group International Federation for Theatre Research, Jaipur Colloquium, Manipal University, 2017/2

Nagata, Yasushi, “Destabilizing Geography: on Kara Gumi’s Taiwan Production in 1992”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Nakanoshima Center, Osaka University, November 4, 2016

永田靖「劇作家森本薫を語る」Performing Museum Vol.1 森本薫を上演する「記憶の劇場: 大学博物館を活用する文化芸術ファンリテーター育成講座」大阪大学総合学術博物館, 2016年11月12日

永田靖「適塾と大阪大学—歴史的遺産と社会学連携活動」大阪大学医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学同窓会三九会, 大阪大学医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学同窓会, 帝国ホテル, 2016/11

永田靖「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」トークイベント「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」アート・メディア論コース, 大阪大学中之島センター, 2016年10月12日

永田靖「なぜリアルを求めるのか—スタニスラフスキ・システムから考え直す」雑誌『地下室』創刊準備企画レクチャー&トーク, アンダー・スロー, 2016/8

永田靖「ポスト・グローバリゼーション時代の日本演劇」趣旨説明, 日本演劇学会全国大会, 日本演劇学会, 大阪大学, 2016年7月3日

永田靖「パフォーマンス・ミュージアム Vol.1 森本薫とその資料」記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファンリテーター育成講座, 大阪大学, 2016/7

Nagata, Yasushi, “Performing Asian Geographical Past: on Production of Binro no Fuin by Karagumi, 1992”, *International Federation for Theatre Research, Stockholm Conference Presenting Theatrical Past*, Stockholm

University,2016/6

永田靖「20 世紀と世界演劇—演劇とグローバリゼーション」甲南女学園大学清友会講演会,甲南女学園大学清友会,オーヴェルジュ・プレザンス桜井,2016/6

Nagata, Yasushi, “The Modern Perception of the Traditional Theatre in Japan: a Theoretical Perspective”, *Asian Theatre Working Group Singapore Colloquium*, National Institute of Education, Nanyang Technological University, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:26284019

研究題目:アジア近現代演劇の動態論的国際共同研究

研究経費:2016 年度 直接経費 2,100,000 円 間接経費 630,000 円

2017 年度 直接経費 2,300,000 円 間接経費 690,000 円

研究の目的:

グローバリゼーションの進行する中で演劇学・演劇史のあり方を再考することは依然として課題である。近年は徐々にアジア演劇に対する関心も高まって来ているとはいふもの、相変わらず演劇学・演劇史のあり方は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されている。ポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にしたアジア諸国の演劇研究の機運の高まりを演劇学全般に反映させる試みが求められている。それは個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワーク構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。ここでは世界演劇史的視野に立った比較共同研究によってアジアにおける近現代演劇の特徴とアジア性を見出だすのが目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2015 年度～2017 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖、伊東信宏

助成金名:大学を活用する文化芸術推進事業

研究題目:「記憶の劇場」大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成プログラム

助成団体名:文化庁

助成金額:2016 年度 直接経費 20,400,000 円

2017 年度 直接経費 20,992,000 円

研究の目的:

本プログラムは、大学博物館の特性を生かしながら様々なジャンルの芸術活動に関わり、企画運営しつつアート・マネジメント人材を育てるプログラムです。博物館に収められているいわゆる〈ミュージアム・ピース〉の豊かさを引き出し、〈生きたアート〉として公開していく文化芸術ファシリテーターの育成を目指します。様々な〈ミュージアム・ピース〉を活用したり、また創造や収集したりすることで、地域社会との協奏による芸術実践の試みと基礎研究的な潜在力とを連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求します。演劇、音楽、美術、アートなどばかりではなく、自然科学の領域までカバーして、多様な文化領域のファシリテートに柔軟に対応できる人材育成のプログラムを用意しています。受講生は、新しい展覧会や、アート・イベント等を創出していった欲しいと思います。そしてそれが広く関西や日本の文化芸術シーンを活性化することにも繋がって行くことを期待しています。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017 年 5 月～現在に至る

日本大学博物館等協議会・会長, 2015 年 6 月～2017 年 6 月

公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年5月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014年6月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009年7月～現在に至る

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年6月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

2. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科（音楽学）卒業。同大学院修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院（ハンガリー）客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授（後、准教授）、2010年4月より現職。

2-1. 論文

伊東信宏 『『ツィガース』再考:バルトーク・イェリー・ラヴェル』『アリーナ』20, pp.580-591, 2017/11

伊東信宏 「夢と音楽:リゲティの『アパリシオン』を中心に」,荒木浩編『夢と表象:ねむりとこころの比較文化史』勉誠出版, pp. 226-242, 2017/1

伊東信宏 「第一次大戦末期ウィーンにおける「歴史的演奏会」」藤原辰史編『第一次大戦を考える』共和国, pp. 63-73, 2016/5

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

伊東信宏 「東欧採音譚 27: トーマス・アデス『皆殺しの天使』を観て」(『レコード芸術』平成30年3月号, pp. 53-56) 『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2018/3

伊東信宏 「ミンコフスキ+レ・ミュージシャン・ドゥ・ルーヴル」(朝日新聞文化欄、平成30年3月12日夕刊)

伊東信宏 「東欧採音譚 26: ビョークのピエロ・リュネールを妄想する」(『レコード芸術』平成30年2月号, pp. 55-58) 『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2018/2

伊東信宏 「イザベル・ファウスト、バッハ無伴奏ヴァイオリンソナタ」(朝日新聞文化欄、平成30年2月5日夕刊)

伊東信宏 「東欧採音譚 25: 三輪眞弘+前田真二郎『新しい時代』の蘇演」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2018/1)

伊東信宏 「東欧採音譚 24: 『僕のスイング』をめぐって」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2017/12)

伊東信宏 「デジャー・ラーンキ、ピアノリサイタル」(朝日新聞文化欄、平成29年12月11日夕刊)

伊東信宏 「東欧採音譚 23: 五〇年代のヴェーグ弦楽四重奏団」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2017/11)

伊東信宏 「アンドリス・ネルソンス指揮ボストン交響楽団」(朝日新聞文化欄、平成29年11月13日夕刊)

伊東信宏 「東欧採音譚 22: リリー・パストレの城館で起こったこと」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 56-59, 2017/10)

伊東信宏 「解説:バルトーク 弦楽のためのディヴェルティメント、舞踊組曲、弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽」(『NHK 交響楽団定期演奏会』NHK 交響楽団, pp. 56-59, 2017/10)

伊東信宏 「東欧採音譚 21: ユーラ・ギュラーのフレンチ・バロック」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/9)

伊東信宏 「広上淳一+京都市交響楽団、東京公演」(朝日新聞文化欄、平成29年9月25日夕刊)

伊東信宏 「東欧採音譚 20: 只者ならぬ『迂闊者』:イル・ジャルディーノ・アルモニコのハイドン」(『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/8)

- 伊東信宏 「ルイーゼ指揮、セイジ・オザワ松本フェスティバル、マーラー」(朝日新聞文化欄、平成29年8月28日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 19: ベルミのペトルーシュカ」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/7
- 伊東信宏 「バーンスタイン『ミサ』」(朝日新聞文化欄、平成29年7月24日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 18: 音楽はどれほど根源的か?」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/6
- 伊東信宏 「ドゥナーブ+ブリュッセル・フィル」(朝日新聞文化欄、平成29年6月19日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 17: クエイ兄弟・ヤナーチェク・ペトルーシュカ」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/5
- 伊東信宏 「ロウヴァリ+タンペレ・フィル演奏会」(朝日新聞文化欄、平成29年5月29日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 16: 国際フォーラム『東欧演歌』」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/4
- 伊東信宏 「東京・春・音楽祭『神々のたそがれ』」(朝日新聞文化欄、平成29年4月10日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 15: チェリビダッケの《ルーマニアン・ラブソディ》」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2017/3
- 伊東信宏 「東欧採音譚 14: 言葉の影」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 55-58, 2017/2
- 伊東信宏 「東欧採音譚 13: ヴァイオリニスト数題」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 57-60, 2017/1
- 伊東信宏 「東欧採音譚 12: 補遺をいくつか」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 57-60, 2016/12
- 伊東信宏 「ラン・ランのリサイタル」(朝日新聞文化欄、平成28年12月5日夕刊)
- 伊東信宏 「今月死去の Kocher 没後10年のリゲティ 「実験場」のハンガリー、転換のと」『朝日新聞 平成28年11月21日夕刊』朝日新聞社, p. 7, 2016/11
- 伊東信宏 「東欧採音譚 11「クルターグ夫妻が弾くバッハ」」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 55-58, 2016/11
- 伊東信宏 「ブロムシュテット指揮バンベルク交響楽団」(朝日新聞文化欄、平成28年11月7日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 10: レヒニツの虐殺とバッチャーニ家」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2016/10
- 伊東信宏 「東欧採音譚 9: リゲティの握ったかもしれない消しゴム」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2016/9
- 伊東信宏 「マックス・ボンマー指揮札幌の演奏会」(朝日新聞文化欄、平成28年9月28日夕刊)
- 伊東信宏 「新国立劇場『トリスタンとイゾルデ』」(朝日新聞文化欄、平成28年9月21日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 8: コリンダとシンデレラ」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 47-50, 2016/8
- 伊東信宏 「東欧採音譚 7: ルーマニアにコリンダを聴きに行く」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 53-56, 2016/7
- 伊東信宏 「ベルリン古楽アカデミーの演奏会」(朝日新聞文化欄、平成28年7月11日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 6: 京都でのアーノンクール」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 55-58, 2016/6
- 伊東信宏 「東欧採音譚 5: ソペラと『管弦楽のための協奏曲』」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 63-66, 2016/5
- 伊東信宏 「クリスチャン・レオッタの演奏会」(朝日新聞文化欄、平成28年5月30日夕刊)
- 伊東信宏 「サイモン・ラトル+ベルリン・フィル」(朝日新聞文化欄、平成28年5月23日夕刊)
- 伊東信宏 「東欧採音譚 4: ズルナの表象」『レコード芸術』音楽之友社, pp. 57-60, 2016/4
- 伊東信宏 「上岡敏之+新日本フィル演奏会」(朝日新聞文化欄、平成28年4月4日夕刊)

2-4. 口頭発表

- 伊東信宏 東京春祭ディスクヴァーリースリーズ「エネスク:ルーマニアン・ラブソディ」(上野学園石橋メモリアルホール、2018年3月21日)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話6 『水車小屋の娘』(シューベルト)とは誰か?」(箕面市講座、2018年2月16日、メイプルホール小ホール)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話5 「クルターグ『遊び』の世界」(箕面市講座、2018年1月12日、メイプルホール小ホール)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話4 「ヤナーチェク「利口な女狐の物語」を観る」(箕面市講座、2017年12月1日、メイプルホール小ホール)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話3 「マーラーとクレスマー音楽」(箕面市講座、2017年7月21日、メイプルホール小ホール)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話2 「ハイドンとジプシー音楽」(箕面市講座、2017年6月23日、メイプルホール小ホール)
- 伊東信宏 中欧音楽夜話1 「ウィーン/ブダペストのオペレッタ」(箕面市講座、2017年6月9日、メイプルホール小ホール)

ール)

伊東信宏 レクチャーコンサート「音楽的錯覚とアイロニー：リゲティ『エチュード』をめぐって」ピアノ：ダニー・ド
ライヴァー（ロンドン大学ゴールドスミス校教授）、講師：伊東信宏、通訳・コーディネーター：松本直美（ロンドン大
学ゴールドスミス校講師）（2017年4月22日、大阪大学会館講堂）

Ito, Nobuhiro, “Keynote speech for International Forum “Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on
Both Sides of Eurasia””, International Forum “Pop-folk genres in East Europe and East Asia: Parallel Phenomena on Both Sides
of Eurasia”, Musicology Department, Osaka University, the Studio, Kaitokudo for the 21st Century, Osaka University., 2017/2

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 木村重信民族芸術学会賞, 民族芸術学会, 2010/5

伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2

伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12

伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11

伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2016年度～2017年度、挑戦的萌芽研究、代表者：伊東信宏

課題番号：16K13164

研究題目：演歌型大衆音楽の国際比較研究：東欧とアジアを中心に

研究経費：2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 1,400,000円 間接経費 420,000円

研究の目的：

これまで東欧地域の大衆音楽の諸ジャンルについて研究を行ってきた。これらの音楽は、東欧各地において1989年の体制転換後、自国の民俗音楽と西側の大衆音楽とを混ぜ合わせた民俗的ポップミュージックとして登場したものである。申請者は、これらのジャンルを、その音楽的な特徴の故に「演歌型」大衆音楽と呼んだのだが、それらを研究する過程で、東欧地域ばかりではなく、アジア諸国をはじめとする同種のジャンルについて国際的な比較研究へと発展させる着想を得た。今回の研究では、東欧諸国のものに加えて、日本、韓国、台湾、タイ、インドネシアなどアジアにおける「演歌型」大衆音楽の比較を行うことを目指し、その理論的枠組みの形成、国際共同研究組織の構築、多言語、多文化社会における大衆文化の比較研究のモデルを提示することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2016年度～2017年度、6：研究助成、助成金獲得者：伊東信宏

助成金名：稲盛財団研究助成

研究題目：バルカンとアジアにおける「演歌型」大衆音楽の国際比較

助成団体名：稲盛財団

助成金額：2016年度 直接経費 1,000,000円

2017年度 直接経費 1,000,000円

研究の目的：

1989年の体制転換後、東欧・バルカン諸国には西側の情報が一気に流れ込んだが、音楽の領域では欧米(西欧)の音楽が流行しただけではなく、自国の民俗音楽と西側のポップミュージックとを混ぜ合わせた民俗的ポップミュージックが登場し、大流行した。旧ユーゴの諸国(特にセルビア)では、この種の音楽は「ターボフォーク」と呼ばれ、ブルガリアでは「チャルガ」ないし「ポップフォーク」、ルーマニアでは「マネレ」、アルバニアでは「タツラバ」と呼ばれて、それぞれ独自の展開を見せると同時に、バルカン音楽流通圏とも呼び得る共通性をも示している。申請者は、これらのジャンルを、その音楽的な特徴の故に「演歌型」大衆音楽と呼び、国内

外の東欧、バルカン地域の研究者たちをメンバーとする研究会を組織し、検討を重ねてきた。本研究は、その総括を目指す。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本万国博覧会記念基金事業審査会委員, 2017年4月～現在に至る

稲盛財団、京都賞・専門委員, 2016年11月～現在に至る

文化庁、芸術選奨・推薦委員, 2015年4月～現在に至る

文化庁、次代の文化を創造する新進芸術家育成事業・審査員, 2013年4月～現在に至る

日本芸術文化振興会・音楽専門委員, 2013年4月～現在に至る

京都府、文化力チャレンジ意見聴取会議・委員, 2012年4月～現在に至る

ザ・フェニックスホール・プログラム・アドバイザー, 2011年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2008年4月～現在に至る

「ブラボー！オーケストラ」のコメンテーターNHK-FM, 2008年4月～現在に至る

サントリー音楽財団・音楽賞／佐治敬三賞選考委員, 2000年6月～現在に至る

朝日新聞音楽懇話会・委員, 2000年4月～現在に至る

3. 輪島 裕介 准教授

1974年生。東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学）博士課程単位修得退学。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師を経て、2011年4月より現職。専攻：音楽学

3-1. 論文

輪島裕介 「日本流行音楽的自我意識與異國主義的發展」『共誌』(<http://commagazine.twmedia.org/?p=4866>), 訳者:王ジェ、林, 2018/3

輪島裕介 「「日本(ニュー)ロック史」の形成とエンケン」『ユリイカ』49-22, 青土社, pp. 154-168, 2017/12

輪島裕介 「日本ポップの自意識とエキゾティシズムの行方」『ユリイカ』49-14, 青土社, pp. 127-132, 2017/8

輪島裕介 「連載 大衆歌謡の足あとをたどる 第4回 大衆音楽と学校教育との相克」『季刊 音楽鑑賞教育』28, 公益財団法人音楽鑑賞振興財団, pp. 58-59, 2017/1

輪島裕介 「大阪の永六輔」『ユリイカ』48-14, 青土社, pp. 56-63, 2016/10

輪島裕介 「連載 大衆歌謡の足あとをたどる 第3回 昭和初期メディア産業の台頭」『季刊 音楽鑑賞教育』27, 公益財団法人音楽鑑賞振興財団, pp. 54-55, 2016/10

輪島裕介 「連載 大衆歌謡の足あとをたどる 第2回 大正時代の芸術活動」『季刊 音楽鑑賞教育』26, 公益財団法人音楽鑑賞振興財団, pp. 58-59, 2016/7

輪島裕介 「文庫版解説 昭和歌謡の「あの感じ」とハマクラ」『ハマクラの音楽いろいろ』立東舎文庫, pp. 173-182, 2016/6

輪島裕介 「連載 大衆歌謡の足あとをたどる 第1回 「演歌」について」『季刊 音楽鑑賞教育』25, 公益財団法人音楽鑑賞振興財団, pp. 54-55, 2016/4

3-2. 著書

Wajima, Yusuke, *Creating Enka*, Public Bath Press, 280p., 2018/2

輪島裕介他(共著) 『NHK ニッポンサブカルチャー史 深堀り進化論』NHK 出版, pp. 113-144, 2017/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

ピーター・バラカン, 佐藤守弘, 輪島裕介他「郷愁の越境」研究集会「音とともに生きる——文化的実践としてのポピュラー音楽」, 横浜都市文化ラボ, グランベル横浜ビル, 2018/2

輪島裕介, 斎藤完, ベニー・トン他「演歌の窮状」日本音楽学会西日本支部第39回例会:ミニシンポジウム「演歌研究の新展開:歴史・実践・越境」, 日本音楽学会, 同志社女子大学, 2018/1

住友利行, 稲増龍夫, 輪島裕介他「第29回年次大会シンポジウム「音楽映像をどう捉えるか—1970年代以降のポピュラー音楽史のために—」」日本ポピュラー音楽学会第29回大会, 日本ポピュラー音楽学会, 関西大学, 2017/12

Wajima, Yusuke, “Latin Music Made in Japan?”: The Trans-Pacific Dance Craze in the Late 1950s and the Formation of Dodonpa”, SEM 2017 Annual Meeting, Society for Ethnomusicology, Denver Marriott City Center Hotel, 2017/10

Wajima, Yusuke, “Soy Source Campur: Rethinking the “World Music Phenomenon” in Japan through the Careers of Hosono Haruomi and Kubota Makoto”, Roundtable, “Voices from the ‘East’: Cross-cultural aspects of world music scenes in Japan and Serbia”, Faculty of Music, Belgrade, Faculty of Music, Belgrade, 2017/7

Wajima, Yusuke, “Situating Dodonpa Within Transatlantic / Transpacific Contexts”, 19th Biennial IASPM Conference, International Association for the Study of Popular Music, University of Kassel, 2017/6

Wajima, Yusuke, “Offbeat Chacha and Dodonpa in East Asia: Transatlantic and Transpacific Connections in Popular Dance Music”, ゲスト講義, 台湾大学音楽学研究所, 台湾大学音楽学研究所, 2017/4

Wajima, Yusuke, “The Fake Sport by the Fake Japanese?: (Trans)nationalism and Americanization in Professional Wrestling in Japan and Korea”, Annual Conference of AAS, Association for Asian Studies, Toronto Sheraton Center, 2017/3

佐々木敦, 柴那典, 輪島裕介「鼎談 ヒットの崩壊の、その先に」ゲンロンカフェイベント, ゲンロン, ゲンロンカフェ, 2017/3

輪島裕介, 大和田俊之, 葛西周他「ラウンドテーブル 初期電気録音時代の世界音楽地政学」第28回日本ポピュラー音楽学会年次大会, 日本ポピュラー音楽学会, 立教大学, 2016/12

輪島裕介「踊る昭和歌謡」豊中市立芸術文化センターウェルカムイベント, 豊中市立芸術文化センター, 豊中市立芸術文化センター, 2016/12

輪島裕介「裏口から入門する昭和歌謡」超学校 もういちど自分進化論, ナレッジキャピタル, グランフロント大阪, 2016/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

輪島裕介 大阪大学賞, 大阪大学, 2017/10

輪島裕介 第33回サントリー学芸賞 芸術・文学部門, サントリー文化財団, 2011/11

輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2019年度、挑戦的萌芽研究、代表者:輪島裕介

課題番号:16K13183

研究題目:世界諸地域の 대중音楽における「日本」表象の関係史的研究

研究経費:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、概ね第二次世界大戦後の日本内外の 대중音楽において、「日本」がどのように表象されたかを、相関的な視点から読み解くための基本的な視点を獲得し、国際研究ネットワークを構築することを目指す。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

教科用図書検討調査審議会・専門委員, 2014年4月～2017年3月

日本ポピュラー音楽学会・理事, 2012年12月～2016年12月

4. 中尾 薫 准教授

1978年生。2001年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011年、大阪大学大学院文学研究科専任講師を経て、2014年4月より現職。専攻：演劇学、能楽研究。

4-1. 論文

中尾薫 「野口米次郎が再発見した能—その出会いと傾倒の時期をめぐって—」『古典演劇研究の対象と視点』(『古典演劇研究の対象と視点』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター東アジア古典演劇研究会), 『古典演劇研究の対象と視点』金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター東アジア古典演劇研究会, pp. 81-98, 2018/1

中尾薫 「福王流平岡家一門の素謡番組—近代における京都素謡会の片鱗—」『謡を楽しむ文化—京都の謡の風景』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター), pp. 207-254, 2016/10

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中尾薫 「近代能楽集「卒塔婆小町」における詩人の死」『演劇学論叢』16号, pp66-89, 2017/3

中尾薫 「解説」(朝日会館・会館芸術研究会編『会館芸術』第16巻, ゆまに書房, pp233-238, 2017/9)

中尾薫 「観世文庫の文書85 観世正宗極并伝来書」『観世』83巻4号, 巻頭, 2016/4

4-4. 口頭発表

中尾薫 「明治・大正期の京都京都における素謡の場」第29回能楽フォーラム「近代の演能空間①—能楽堂の時代—」, 能楽学会, 灘高等学校, 2017/12

中尾薫 「世阿弥時代の足拍子をめぐって」「世阿弥時シンポジウム「演技の研究をめぐって—文字資料は、どこまで演技を語るか?」、日本演劇学会秋の集会代の足拍子をめぐって」, 日本演劇学会, 愛媛大学, 2017/11

中尾薫 「河内の榎並」と榎並荘史」六麓会4月例会, キャンパスプラザ京都, 2017/4/9

中尾薫 「名刀観世正宗と宗節」宗節研究会, 科研基盤研究(B)観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究, 財団法人観世文庫, 2016/12

中尾薫 「野口米次郎と伊藤道郎による日本再発見とその時代」第4回・公開講演会「日本古典演劇と近世・近代—その研究対象と方法をめぐって(2)—」, 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター東アジア古典演劇研究会, 金沢大学サテライトプラザ, 2016/9

Nakao, Kaoru, "The Concept of Mugen-Noh in Contemporary Japanese Shakespeare Productions With Special Reference to Its Influence on Makoto Sato's "Lear""", Shakespeare in Asia, The World Shakespeare Congress, Shakespeare Center, 2016/8

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

芸能史研究会・委員, 2017年6月～現在に至る
能楽学会・常任委員, 2016年6月～現在に至る
民族藝術学会・理事, 2015年5月～現在に至る
日本演劇学会・幹事, 2012年6月～2017年6月
能楽学会・総務実行委員, 2012年5月～2016年5月
芸能史研究会・事務局, 2003年6月～2017年6月

5. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論（美学）修了、修士（文学）。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師を経て、2014年大阪大学文学研究科助教。2017年より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻：舞踊学

5-1. 論文

古後奈緒子 「批判的反復による失われた遺産のアーカイヴ」『舞台芸術』(京都造形芸術大学舞台芸術研究センター), 21, 京都造形芸術大学舞台芸術センター, pp. 97-102, 2018/3
古後奈緒子 「BONUS から考える障害者とダンサーの協働」『BONUS ウェブアーカイヴ』(なし(京都造形芸術大学の公募プロジェクト)), 第三回, BONUS, p. 0, 2017/5
古後奈緒子 「ホーフマンスタールの舞踊創作における異質性／他者性の作用」『近現代演劇研究』(日本演劇学会分科会近現代演劇研究会), 6, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 2-14, 2017/3
古後奈緒子 「マイノリティのパフォーマンスを引き出すメディア空間」『美学研究』(なし), 10, 大阪大学美学研究室, pp. 110-117, 2017/3
古後奈緒子 「巻頭言」『Arts and Media』(なし), 6, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 2-3, 2016/7

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Kogo, Naoko, 「ダンス作品の創造と継承」, 『ダンスアーカイヴ構想』(Dance Archive Network), 第三号, NPO 法人ダンスアーカイヴ構想, pp. 2-3, 2017/5
Kogo, Naoko, 柴田隆子(共訳), 「アウストルック・モビールードイツ表現主義舞踊のその後 | AUSDRUCK-MOBIL」, 『展示』(ゲーテ・インスティトゥート東京), ゲーテ・インスティトゥート東京, 2016/10
古後奈緒子 「他者への橋 dracom 公演『今日の判定』『ソコナイ図』」『大阪日々新聞』(なし), 8月23日号, 大阪日々新聞, pp. 3-3, 2016/8

5-4. 口頭発表

Kogo, Naoko, "Gaze at Oriental Dance in Japan --a reception of Ruth St. Denis in Asia--", IFTR-Asia 2018 "Bodies In/And Asian Theaters", IFTR, University of the Philippines Diliman, 2018/2

古後奈緒子 「フーゴー・フォン・ホフマンスタールのバレエ『時の勝利』と時間概念」舞踊と音楽研究会, 大阪芸術大学, 大阪芸術大学 サテライトキャンパス, 2017/3

岡崎乾二郎, 中島那奈子, 古後奈緒子 「モデルネのパースペクティブとオーラルヒストリーの可能性」 「老いをめぐるダンスドラマトウルギー」公開研究会, 京都造形芸術大学・舞台芸術研究センター, 京都造形芸術大学 芸術文化情報センター AV ホール, 2017/3

溝端俊夫, 古後奈緒子 「ダンス作品の創造と継承」緑のテーブル 2017, 大野一雄舞踏研究所, 神戸アートビレッジセンター, 2017/3

古後奈緒子 「インスタレーションとしての空間における全能の視点の行方 ~コンテンポラリー・ダンス「を」わからない人との対話のために~」国内ダンス留学@神戸「ダンス批評の現在/批評家の仕事にせまる」, NPO 法人ダンスボックス, ArtTheater dB, 2016/8

Kogo, Naoko, "Détournement or misuse? An attempt with and around documentary films of historical performances.", 国際演劇学会 (IFTR) 2016 スtockホルム, International Federation of Theater Research, Stockholm University, 2016/6

古後奈緒子 「「ホフマンスタールの舞踊創作における異質性/他者性の作用-『見知らぬ少女 Das fremde Mädchen』と視線はいかに出会えるか-」近現代演劇研究会3・5月合同例会, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

古後奈緒子 舞踊学会研究奨励賞, 舞踊学会, 2002/12

古後奈緒子 第五回シアターアーツ賞, 国際演劇評論家協会日本センター, 2001/9

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

京都国際舞台芸術フェスティバル・アドバイザー・ボード, 2010年5月~現在に至る

国際演劇評論家協会関西支部・事務局長, 2009年5月~2016年5月

京都国際ダンスワークショップ・フェスティバル・推薦者、ドキュメンテーション・アドバイザー, 2009年5月~現在に至る

6. 横田 洋 助教

1976年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2008年、大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011年より、大阪大学総合学術博物館助教。

6-1. 論文

横田洋 「明治期の映画取り締まり-小浜松次郎『警察行政要義』の記述から-」『演劇学論叢』17, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp. 44-66, 2018/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

横田洋, 永田靖「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演の考え方と実践」近現代演劇研究会 10月・12月例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2017/12

横田洋「女性芸能者の近代—その普遍性と特殊性—」日本演劇学会 2016年全国大会, 日本演劇学会, 大阪大学, 2016/7

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:横田洋

課題番号:15K02174

研究題目:芸能史的環境における映画とその影響に関する研究

研究経費:2016年度 直接経費 900,000円 間接経費 270,000円

2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

明治末期に新しい興行物として登場した映画は既存の芸能や興行の環境にきわめて大きな影響を与え、そこにさまざまな変化をもたらした。その映画の登場という歴史的な事象を客観的に検証するには既存の芸能との関連で議論されなければならないが、従来の芸能史では芸能としてあるいは興行物としての映画を本格的な研究対象として扱ってこなかった。本研究では芸能をめぐる環境の制度的側面とその変化を中心に調査することにより、映画の登場が芸能史あるいは文化史に与えた影響を実証的に検証する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 齋藤 桂 助教

1980年生。2010年3月、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(音楽学)修了。博士(文学)。2011年4月～2014年3月、日本学術振興会特別研究員PD。2014年4月～2016年3月、シベリウス音楽院博士研究員。2016年4月より現職(2018年3月退職)。専攻:音楽学。

7-1. 論文

なし

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

Saito, Kei, "The Socialism Movement in 1920s-40s Japan and Concepts of Tradition and Folk in Music", International Musicological Society 20th Quinquennial Congress in Tokyo, International Musicological Society, 東京芸術大学, 2017/3

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

齋藤桂 柴田南雄音楽評論賞奨励賞(2006年度), アリオン音楽財団, 2007/4

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-23 美術史学

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 4(兼任 1) 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：園府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰、岡田 裕成
准教授：桑木野幸司

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
54	9	22	0	0	0	2	2

*うち留学生 5名、社会人学生 4名

3. 修了生・卒業生(2016年度～2017年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2016	9	5	2	0
2017	12	7	0	0
計	21	12	2	0

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点をひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館でのインターンシップなどの積極的な利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間1本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1人平均で年間1本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、全学教育推進機構における教育に協力し、2016年度には5セメ分、2017年度には4セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促すとともに、教員が監修・編集を担当する研究書において論文投稿の機会を提供するなど所期の目標を達成した。なお、この間1名がイギリスに留学し、国際的に研究成果を発信する能力の養成に努めた。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間3名が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、2016年度は中国仏教絵画（濱田瑞美・横浜美術大学准教授）、初期フランドル絵画（今井澄子・大阪大谷大学准教授）の専門家、2017年度は日本中世絵画（高岸輝・東京大学准教授）、日本近代美術の専門家（五十殿利治・筑波大学教授）をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

2. 研究

各教員とも、著書、論文、作品解説等をおよそ目標通り、あるいは目標以上に発表することができた。また、4人の専任教員が科学研究費の助成を受け、当該の研究を推進した（2人が基盤研究(A)、1人が基盤研究(B)、1人が基盤研究(C)の研究代表者）。なお、この間、美術史学会常任委員、民族芸術学会理事などの役職をつとめ、学会の運営にも協力した。博士後期課程の学生は論文等20件、口頭発表12件、加えて博士前期課程の学生も論文1件、口頭発表3件と、美術史学の専門分野の大学院として、めざましい研究成果を挙げることができた。

3. 社会連携

国、地方公共団体および私立の博物館、美術館の研究員、評議員などをつとめ、さらに地方史の編纂事業、文化財審議委員会などにも参画し、それぞれの事業に協力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。受賞なし。なお、学内からの大学院進学者が2016年度は2名あり、2017年度は3名あり、教育について着実な成果を挙げている。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、4人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2016	0	0	0
2017	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	1(1)	0(0)	4(4)	1(0)	0(0)	6(5)
2017	2(2)	4(0)	2(0)	1(0)	6(0)	15(2)
計	3(3)	4(0)	6(4)	2(0)	6(0)	21(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	2	6	0	2	10
2017	0	2	3	0	0	5
計	0	4	9	0	2	15

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

〔博士前期〕

関大輔「占星術とイメージをめぐるヘルメスの考察」『Arts and Media』第6巻, pp.220-231, 2016/7/31

〔博士後期〕

丹村祥子「八～九世紀菩薩形像の髪形に関する考察—平安時代初期彫刻研究の一指標として—」『フィロカリア』第34号, pp.51-73, 2017/3/30

袴田舞「草堂寺と蘆雪」『和歌山県立博物館編・発行 特別展図録『蘆雪潑刺-草堂寺と紀南の至宝-』, pp.132-137, 2016/10/18

浜野真由美「近衛信尹筆「檜原いろは歌屏風」に関する考察」『美術史』第182冊号, pp.181-200, 2017/3

鶴尾佳奈「1960年代におけるロバート・モリスとグリーン・ギャラリー」『Arts and Media』第6巻, pp.197-207, 2016/7/31

笹野摩耶「ロシア時代に制作されたカンディンスキーによる 幾何学的抽象絵画について」『フィロカリア』第34号, pp.74-95, 2017/3/30

【2017年度】

〔博士後期〕

菊川亜騎「堀内正和の構成彫刻に関する考察—1950年代における幾何学抽象の国際的伝播との関係から—」『待兼山論叢』第51号, pp.53-74, 2017/12/26

菊川亜騎「戦時下の堀内正和に関する研究—書簡に基づく辻晉堂との交流から—」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第62号, pp.87-93, 2018/03/23

菊川亜騎「京都美術の歴史学—京都芸大の1950年代—」『京都市立芸術大学芸術資源研究センターニューズレター』第4号, pp.25-25, 2018/03/31

尾崎登志子「グスタフ・クリムト作《フリーデリケ・マリア・ベアの肖像》-背景の中国の人物群像に関する考察-」『美術史』第184巻第2号, pp.289-312, 2018/3 (出版見込み)

鶴尾 佳奈「ロバート・モリスのアート・ストライキと美術市場」『Arts & Media』第7号, pp.233-243, 2017/7/31

鶴尾 佳奈「再制作にみるロバート・モリスの独自性についての試論—コレクターとの関わりから—」『フィロカリア』第35号, pp.95-110, 2018/3/31

濱住真有「池大雅筆 白雲紅樹図」『國華』第1462号, pp.19-21, 2017/8/20

濱住真有「池大雅筆「柳下童子図屏風」—その魅力と解釈の可能性—」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.335-357, 2018/3/10

寺澤慎吾「「明要寺参詣曼荼羅」について」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.63-77, 2018/3/10

橋本遼太「雪村筆「芙蓉小禽図」についての一考察」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.49-62, 2018/3/10

藤本真名美「谷口香嶠の第一回文展における挑戦」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.595-621, 2018/3/10

袴田舞「昭和初期における応挙・蘆雪画の保存運動と画家たち—草堂寺名画保存会関係資料の紹介—」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.673-709, 2018/3/10

中村真菜美「渡辺玄対筆「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」(宇土市教育委員会蔵)の制作について」『畫下遊楽〔二〕奥平俊六先生退職記念論文集』, pp.403-437, 2018/3/10

波瀬山祥子「曾我蕭白の鳥獸画と文芸」『美術史』第183号, pp.132-148, 2017/10

波瀬山祥子「盆蘭図(個人蔵)について」『大阪市立美術館紀要』第18号, pp.53-56, 2018/3

(2)口頭発表

【2016年度】

〔博士前期〕

関大輔「マルシリオ・フィチーノの建築的美学」, 建築とエクフラシス: テキストと絵画に描かれた空間イメージ, 大阪大学, 2017/3/12

多田羅珠希「マッキアイオーリと建築理論—カミッロ・ボイトとの交流から」, 建築とエクフラシス: テキストと絵画に描かれた空間イメージ, 大阪大学, 2017/3/12

多田羅珠希「15世紀美術とマッキアイオーリ」, 若手小部会企画 講演会, 大阪大学, 2016/5/14
〔博士後期〕

袴田舞「草堂寺をめぐる僧と画家のネットワーク—『蘆雪潑刺』展の成果—」, 第136回例会 特集「展覧会と美術史」, 和歌山県立博物館学習室, 2017/2/4

中村真菜美「谷文晁筆「東海道勝景」(永青文庫蔵)の制作について」, 美術史学会全国大会, 筑波大学、つくば国際会議場, 2016/5/29

乾健一「画家泉茂におけるレジェ、エルンストの影響」, 大阪大学総合学術博物館 研究発表会, 大阪大学総合学術博物館待兼山修学館, 2016/12/13

波瀬山祥子「曾我蕭白の山水画について」, 日本美術史に関する国際大学院生会議(JAWS: Japan Art history WorkShop), ハーバード大学, 2017/3/11

波瀬山祥子「蕭白画と文芸—鷹と動物を中心に—」, 美術史学会全国大会, 筑波大学、つくば国際会議場, 2016/5/28

鈴木楓ほか「阪大生がつくった展覧会 2015 ベスト」展」, 博物科学会ポスター発表会, 広島大学, 2016/6/30

渡辺千尋「ピエール・ボナール作《栈敷席》に関する一考察—ベルネーム=ジュヌ画廊との関わりを中心に—」, 広島芸術学会 第117回例会, サテライトキャンパスひろしま 604 中講義室, 2016/12/17

【2017年度】

〔博士後期〕

菊川亜騎「1950年代における堀内正和の構成彫刻—造形様式とテキストからの考察—」, 武蔵野美術大学, 2017/07/15

菊川亜騎「『もの派』と70年代の美術—彫刻の動向を中心に—」, 武蔵野美術大学, 2017/11/09

尾崎登志子「グスタフ・クリムト《フリーデリケ・マリア・ベアの肖像》における中国の人物群像-図像の着想源と主題に関する考察—」, 第70回美術史学会全国大会, 関西学院大学 西宮上ヶ原キャンパス, 2017/5/20

中村真菜美「渡辺玄対筆「蕉夢庵景勝図画詩文合巻」(宇土市教育委員会蔵)の制作について」, 美術史学会西支部例会, 京都大学, 2017/09/16

袴田舞「木村兼葭堂の博物図譜制作と紀州—『奇貝図譜』を中心に—」, 待兼山芸術学会第27回研究発表会, 大阪大学, 2017/4/1

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況(在籍)

2016年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 3名 (計4名)

2017年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2016年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2017年度 学部: 0名 大学院: 3名 (計3名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2016年度～2017年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

田村允英	博士前期課程	北海道立近代美術館	学芸員	2016/4
高志緑	博士後期課程単位修得退学	大阪大学大学院文学研究科	助教	2016/4
橋本遼太	博士後期課程	神奈川県立歴史博物館		2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2016年度～2017年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

8. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

9. 刊行物

2016年度 『フィロカリア』第34号
2017年度 『フィロカリア』第35号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際研究ワークショップ 建築とエクフラシス：テキストと絵画に描かれた空間イメージ、企画：桑木野幸司、大阪大学、2017年3月12日
美術史学会西支部 事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 奥平 俊六 教授

1953年生。東京大学文学部(美術史)卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。文学修士。國華社研究員、大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て現職(2018年3月退職)。京都国立博物館客員研究員、大和文華館評議員など。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

奥平俊六『畫下遊樂(一)奥平俊六美術史論集』藝華書院, 756p., 2018/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦「渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画(第四回)」公益財団法人渡辺美術館, pp. 1-38, 2018/3

- 奥平俊六 「内藤直子『超絶技巧』の源流 刀装具』『紫明』42, 紫明の会, pp. 96-96, 2018/3
- 奥平俊六 「久保田一洋『北斎娘 応為栄女集』』『紫明』41, 紫明の会, pp. 88-88, 2017/9
- 奥平俊六 「佐藤康宏『湯女図 視線のドラマ』』『紫明』40, 紫明の会, pp. 82-82, 2017/3
- 奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦(共編著) 「渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画(第三回)」公益財団法人渡辺美術館, pp. 1-38, 2017/3
- 奥平俊六 「乱世が生んだ桃山美術の巨匠たち 又兵衛と同じ数奇な運命を生きた武家出身の画家』『別冊太陽 岩佐又兵衛 浮世絵の開祖が描いた奇想』247, 平凡社, pp. 42-43, 2017/2
- 奥平俊六 「学界消息 中部義隆氏の訃』『日本歴史』(日本歴史学会), 821, 吉川弘文館, pp. 123-123, 2016/10
- 奥平俊六 「佐藤晃子『画題で読み解く 日本の絵画』』『紫明』39, 紫明の会, pp. 90-90, 2016/9
- 奥平俊六 「風神雷神図 万人が宗達作と認める理由』『朝日ビジュアルシリーズ 週間日本の名寺をゆく 仏教新発見(改訂版)』19, 朝日新聞出版, pp. 12-13, 2016/5

1-4. 口頭発表

- 奥平俊六 (招待講演)「ボクと美術史」退職記念講演, 大阪大学日本・東洋美術史研究室, 大阪大学・シグマホール, 2018/3
- 奥平俊六 (招待講演)「狩野山雪、17世紀の専門家族」待兼山芸術学会, 大阪大学芸術ブロック, 大阪大学文学研究科 401 教室, 2018/3
- 奥平俊六 (招待講演)「狩野山雪:「長恨歌絵巻」を描いた画家」国際シンポジウム グローバルな文脈の中の日本研究, トリニティ・カレッジ, 大阪大学, ダブリン、トリニティ・カレッジ, 2017/12
- 奥平俊六 (招待講演)「若冲と大坂画壇」新指定記念講演, 豊中市, 豊中市中央市民会館, 2017/10
- 奥平俊六 (招待講演)「宗達の目の記憶」穎川美術館セミナー, 穎川美術館, 穎川美術館, 2016/10
- 奥平俊六 (招待講演)「長崎派の旅」特別展覧会「我が名は鶴亭」記念講演, 神戸市立博物館, 神戸市立博物館, 2016/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 奥平俊六 國華賞(第2回), 国華社・朝日新聞社, 1990/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

- 京都市文化財観光資源財団・専門委員, 2015年4月～現在に至る
- 豊中市・文化財保護審議会委員, 2012年4月～現在に至る
- 丹波市・植野記念美術館運営委員, 2010年4月～現在に至る
- 大和文華館・評議員, 2005年4月～現在に至る
- 丹波市・文化財保護審議会委員, 2005年4月～現在に至る
- 京都国立博物館・客員研究員, 1999年4月～2017年3月
- 山口県立美術館・収集審査委員, 1998年4月～現在に至る

2. 園府寺司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋

2-1. 論文

- Kodera, Tsukasa, “Na de droom -- Van Gogh en Japan in zijn laatste maanden in Parijs en Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (Dutch)*, Van Gogh Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3
- Kodera, Tsukasa, “After the Dream Van Gogh and Japan in his last two months in Paris and Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (English)*, Van Gogh Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3
- Kodera, Tsukasa, “Après le rêve : les derniers mois à Paris et à Auvers-sur-Oise” *Van Gogh et le Japon (French)*, Van Gogh Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3
- 圀府寺司 「WANTED: EDMUND WALPOLE BROOKE E.W.ブルック情報求む」『Nact Review 国立新美術館研究紀要』(国立新美術館), 4, pp. 209-210, 2017/12
- 圀府寺司 「夢のあとで ファン・ゴッホと日本、その最後の2ヶ月」『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 156-183, 2017/10
- 圀府寺司 「ファン・ゴッホと日本の接点となった人々 -- 滞日経験のあった親族、知人たち」『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 200-211, 2017/10
- Kodera, Tsukasa, “After the Dream Van Gogh and Japan in his last two months in Paris and Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (English)*, 青幻舎, pp. 156-183, 2017/10
- Kodera, Tsukasa, “Van Gogh’s Links with Japan through Family and Acquaintances” *Van Gogh & Japan (English)*, 青幻舎, pp. 200-211, 2017/10
- Kodera, Tsukasa, “Introduction Reconstructing Bing’s Legendary 1890 Exhibition of Japanese Prints at the Ecole des Beaux-Arts” *Journal of Japonisme*, 2-1, Brill, pp. 1-37, 2017/1

2-2. 著書

- Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh & Japan (English)*, Van Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3
- Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh & Japan (Dutch)*, Van Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3
- Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh et le Japon (French)*, Van Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3
- 圀府寺司, コルネリア・ホンブルク, 佐藤幸宏(共著) 『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 12-17, 2017/10
- Kodera, Tsukasa, Cornelia Homburg, Yukihiko Sato(共著), *Van Gogh & Japan (編著)*, Siegensha, pp. 12-17, 2017/10
- 圀府寺司, 佐藤幸宏, 尾本圭子他(編) 『ゴッホ展 巡りゆく日本の夢 (編著)』NHK 北海道新聞社, pp. 10-11, 2017/8
- 圀府寺司(共編著) 『西洋美術研究 19 美術市場と画商』19, 三元社, 248p., p. 41292, 2016/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 圀府寺司 「座談会 美術市場と画商」『西洋美術研究』19, 三元社, pp. 8-38, 2016/9

2-4. 口頭発表

- 圀府寺司, 古賀陽子 (招待講演)「ラングロワの橋 断片を元に失われた作品を復元する挑戦」ゴッホ展 ワークショップ:ファン・ゴッホと日本, 京都国立近代美術館 NHK, 京都国立近代美術館, 2018/2
- 圀府寺司 (招待講演)「ファン・ゴッホと日本 についての最新の知見」ゴッホ展 学術講演会:ファン・ゴッホと日本, 京都国立近代美術館 NHK, 京都国立近代美術館, 2018/1
- Dov Bing, 尾本圭子, 圀府寺司他 (招待講演)「ファン・ゴッホと日本 最後の二ヶ月」ゴッホ展 開催記念シンポジウム:ファン・ゴ

ッホと日本 , NHK, 東京都美術館, 2017/10

圀府寺司 (招待講演)「ファン・ゴッホ 日本の夢を巡って」ゴッホ展 学術講演会:ファン・ゴッホと日本, 北海道新聞社 北海道立近代美術館 NHK, 北海道立近代美術館, 2017/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

圀府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:圀府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2016 年度 直接経費 6,000,000 円 間接経費 0 円

2017 年度 直接経費 4,500,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Art の研究基盤と方法を構築したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

京都国立近代美術館 北海道立近代美術館・展覧会総合監修, 2013 年 5 月～2018 年 3 月

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010 年 4 月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009 年 4 月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2000 年 4 月～現在に至る

3. 橋爪 節也 教授

1958 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室主任学芸員。専攻：日本美術史／近世近代絵画史。

3-1. 論文

橋爪節也 「キャンパスの“土壌改良”とアート・リソース」科学研究費補助金 基盤研究(A) 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究(課題番号 15H01874)『ユニヴァーシティー・アート・リソース研究』Ⅲ, 科学研究費補助金 基盤研究(A) 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究(課題番号 15H01874), pp. 55-72, 2018/3

橋爪節也 『「浪花百景」—まずはヴィジュアルの迷路に踏み込んでみる』『CEL』118 【特集】ルネッセ「耕」—文化を問い直す, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, pp. 22-29, 2018/3

橋爪節也 『『いの字絵本 恋の都大阪の巻』—堂本印象の大阪』京都府立堂本印象美術館『堂本印象 創造への挑戦』淡交社,

2018/3

橋爪節也「大大阪と画家たち第二回 菅橋彦と花街、舞楽、浪速風俗」関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会『やそしま』(関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会), 11, 関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 52-99, 2017/10

橋爪節也「大学の“記憶”とアート・リソースー大阪大学豊中キャンパスにおける調査報告ー」科学研究費補助金 基盤研究(A) 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究(課題番号 15H01874)『ユニヴァーシティー・アート・リソース研究』Ⅱ, 科学研究費補助金 基盤研究(A) 大学における「アート・リソース」の活用に関する総合的研究(課題番号 15H01874), pp. 55-72, 2017/3

橋爪節也「北野恒富と歌舞伎、浄瑠璃ー生命感の躍動と画家の個性を求めてー 大大阪の画家たち第1回」関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会『やそしま』(関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会), 10, 関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会, pp. 36-75, 2016/12

橋爪節也「T.MAEDA の見たものー大大阪のモダニズムと前田藤四郎ー」鹿沼市立川上澄生美術館『前田藤四郎と川上澄生ーモダニズム版画の実験室ー』鹿沼市立川上澄生美術館, pp. 9-23, 2016/10

橋爪節也「柳沢夫柳沢淇園の生涯と芸術」大和文華館『柳沢淇園ー文雅の士・新奇の画家ー』大和文華館, pp. 6-16, 2016/10

3-2. 著書

橋爪節也他(共著)『日本・地域・デザイン史Ⅱ』美学出版社, 2016/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也(Web掲載)「絵を飾る人のキモチ」第15回 “蒐集もまた創作なり”伝説の大コレクター魂』『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, 2018/3

橋爪節也「Sadao.N 中村貞夫の藝術 四大文明から大阪風景への回帰。モダニズムの継承としてのー」中村貞夫『中村貞夫画集』10, 中村貞夫, pp. 1-22, 2018/3

橋爪節也「スズメ君のアートのある大阪まちあるき(6) 松屋町から一挙に壮大な四大文明に至るー洋画家中村貞夫の世界」学術出版印刷『沖ゆくらくだ』学術出版印刷, pp. 45-47, 2018/3

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第88回 桃の節句と三国志ー見渡すかぎりの桃畑』『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2018/2

成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く② 駅前風景ー生活の息吹を描くー」『大阪春秋』169, 株式会社 新風書房, 2018/1

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第87回 なにわにガウディ発見ーフェニックスモザイク「糸車の幻幻想」』『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2018/1

橋爪節也(Web掲載)「絵を飾る人のキモチ」第14回 年末年始、祝祭的な色彩を求めてー日本のガウディから仏手柑そしてネオンアートからゴッサム三題断』『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, 2017/12

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第86回 民のかまどは賑わいにけり?ー高津の遠眼鏡屋』『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/12

橋爪節也「スズメ君のアートのある大阪まちあるき(4) 歌集『シーボルトの末吉橋』を読み、長崎経由で末吉橋に戻る」学術出版印刷『沖ゆくらくだ』学術出版印刷, pp. 39-41, 2017/12

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第85回 」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/11

成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く② 将棋絵ー静かなる戦いを描くー」『大阪春秋』168, 株式会社 新風書房, 2017/11

橋爪節也(図版解説)「複数」大和文華館『特別展 柳沢淇園ー文雅の士・新奇の画家ー』84, 大阪市史編纂所, 2017/10

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第84回 人の師たるに足れる芸十六に及ぶー柳沢淇園のおおさか』『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/10

- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 83 回 おどけた姿は当世仕方物真似ー落語始祖の米沢彦八と生玉人形」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/9
- 橋爪節也(インタビュー記事)「もつと関西 大阪万博に感銘 美術の道 大阪大学教授 橋爪節也さん(私のかんさい) 再誘致は芸術振興目線で」日本経済新聞『日本経済新聞』日本経済新聞, 2017/9
- 橋爪節也(Web 掲載)「絵を飾る人のキモチ」第 13 回 “宗教都市・大阪”を求めて堂本印象に至る～盂蘭盆の四天王寺と輸出繊維会館の壁画～」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, 2017/8
- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 82 回 夏の屋上もまた楽しい物見台と大阪発の屋上ビアガーデン」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/8
- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 81 回 万灯祭から絵行灯幻想ー“はんなり”と揺らぐ風物詩」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/7
- 橋爪節也(コメント)「大阪新美術館 38 年越し実現? 市コスト抑え基本設計費計上 「中之島から文化発信を」『朝日新聞』, 2017/7
- 橋爪節也「スズメ君のアートのある大阪まちあるき(2) 恒富の筆塚からー豪放磊落な書風は俳人好み」学術出版印刷『沖ゆくらくだ』学術出版印刷, pp. 45-47, 2017/7
- 橋爪節也「スズメ君のアートのある大阪まちあるき(3) ビリアード場と古書店／山口誓子」学術出版印刷『沖ゆくらくだ』学術出版印刷, 2017/7
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く②天神祭を描く」『大阪春秋』167, 株式会社 新風書房, 2017/7
- 橋爪節也「よみがえる大阪画壇の巨匠ー北野恒富の芸術ー」あべのハルカス美術館『北野恒富展』あべのハルカス美術館, pp. 10-19, 2017/6
- 橋爪節也, 谷岡彩「北野恒富年譜」あべのハルカス美術館『北野恒富展』あべのハルカス美術館, pp. 226-240, 2017/6
- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 80 回 北野恒富ルネッサンスーよみがえる大阪画壇の巨匠」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/6
- 橋爪節也, 乾健一「北野恒富・主要参考文献」あべのハルカス美術館『北野恒富展』あべのハルカス美術館, pp. 241-248, 2017/6
- 橋爪節也「図版解説 複数」あべのハルカス美術館『北野恒富展』あべのハルカス美術館, 2017/6
- 橋爪節也(作品解説)「複数」産経新聞『産経新聞夕刊』産経新聞, 2017/6
- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 79 回 当今第一風流宗匠ーおおさかを愛した田能村竹田」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/5
- 橋爪節也(Web 掲載)「絵を飾る人のキモチ」第 12 回 花街の演舞場から百貨店までアート、アート、アート……なんと芳醇な大阪文化」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, 2017/4
- 橋爪節也「郷土玩具から広がる、「趣味人」ネットワークと近代・大阪の創造力」『上町台地 今昔フォーラム』vol.7, pp. 1-12, 2017/4
- 橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 78 回 “記憶”の劇場ー道頓堀と中之島ー蔵屋敷の役人になってみた?」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/4
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く② 四天王寺舞楽を描く」『大阪春秋』166, 株式会社 新風書房, 2017/4
- 橋爪節也「つれづれ彩時記「大大阪」妄想紀行 2. 水都に降りたエジプトの神々」『朝日新聞』朝日新聞, 2017/3
- 橋爪節也「何のために新美術館を開館するのか」NPO 大阪美術市民会議『特定非営利法人 大阪美術市民会議機関誌』第 9 号「大阪新美術館特集号」, 朝日新聞, 2017/3
- 橋爪節也, 北川央「大阪の陣 400 年と大阪城対談シリーズ 40」うえまち編集局『うえまち』143, うえまち編集局, 2017/2
- 橋爪節也(コメント)「関西の力 第 3 部 スポーツの力 タニマチ気質」産経新聞『産経新聞』産経新聞, 2017/2
- 橋爪節也「つれづれ彩時記「大大阪」妄想紀行 1. 乱歩が注いだ濃厚な空気」朝日新聞『朝日新聞』朝日新聞, 2017/2

- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第77回 十円玉は旅ガラスー銅とゆかりが深い大阪」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/2
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第76回 「野良犬会」は吠えるー藤本義一と今東光」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2017/1
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞⑨」『大阪春秋』165, 株式会社 新風書房, 2017/1
- 橋爪節也(コメント)「新美術館ー 構想34年、大阪市が建設へ 設計業者決定」『毎日新聞』毎日新聞, 2016/12
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第75回 三都三府のプライドー新春に祈念する、今年はいかに」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/12
- 橋爪節也(Web 掲載)「絵を飾る人のキモチ」第11回 猫谷に笑う三賢人ー長沢蘆雪の襖絵から、再び「世界遺産」に突っ込みかけた話」『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, 2016/12
- 橋爪節也(コメント)「美の美 大大阪の風景 上・下」『日本経済新聞』2016/12
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第74回 懐徳堂が大阪にありー町人の町人による町人のための学問所ー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/11
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑧奉納画 ～祈りと鎮魂をこめて～」『大阪春秋』164, 株式会社 新風書房, 2016/11
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第73回 大阪モダニズムと私鉄沿線ーわが町にも文化の香り」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/10
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第72回 見上げてごらん、煌めく星をー天学家・間重富没後二〇〇年ー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/9
- 橋爪節也(Web 掲載)「絵を飾る人のキモチ」第10回「世界文化遺産に突っこみつつ、「環境絵画」としての襖絵が面白いという嘶」『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, 2016/9
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第71回 蟻一匹炎天下ー作家藤本義一のダンディズムー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/8
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第70回 「夏祭浪花鑑」の泥田を探せー大阪の夏芝居はこれで決まりー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/7
- 橋爪節也「大阪市中心標」大阪市史編纂所『大阪の歴史』84, 大阪市史編纂所, 2016/7
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑦報道画ー閉ざされた情景を描く～」『大阪春秋』163, 株式会社 新風書房, 2016/7
- 橋爪節也(コメント)「大阪新美術館 38年越し実現? 市コスト抑え基本設計費計上 中之島から文化発信を」『朝日新聞』2016/7
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第69回 嗚呼黎明は近づけり…友よ我らぞ光よとー 旧制高校を知っていますかー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/6
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第68回 千両箱を抱えて走ると屋根が抜けるー江戸時代からお金に宿る“金霊”ー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/5
- 橋爪節也「おおさかKEYワード 第67回 大阪人は南画が好き…だったはずがー蕪村生誕 300年、鉄斎生誕 180年ー」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』大阪市教育委員会, pp. 3-3, 2016/4
- 成瀬國晴, 古川武志, 橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑥「装幀」の美学」『大阪春秋』162, 株式会社 新風書房, 2016/4
- 橋爪節也(Web 掲載)「絵を飾る人のキモチ」第9回「サクラ咲く国のサクラの絵」『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, 2016/4

3-4. 口頭発表

- 原田平作, 太田垣實, 橋爪節也他 (パネリスト)「大阪と堂本印象」シンポジウム:座談会「堂本印象の挑戦」, 京都府立堂本印象美術館, 京都府立堂本印象美術館, 2018/3

肥田皓三, 橋爪節也, 藤田富美恵他 (パネリスト)「上町台地発、“本”をめぐる時空の旅へ～ことばと本を愛する人たちの迷宮都市再び～」上町台地・今昔フォーラム vol.9“知”の舟を漕いで, 大阪ガス エネルギー・文化研究所, 大阪ガス実験集合住宅 NEXT21 2階ホール, 2018/3

橋爪節也 (招待講演)「大阪文化と慈雲尊者」慈雲尊者生誕 300 年第 4 回記念講演会, 慈雲尊者顕彰会, 法楽寺 リーヴスギャラリー小坂奇石記念館, 2018/2

橋爪節也 (招待講演)「魂の画家 三上誠 -日本画改革と表現の実験-」三上誠展, 枚方市立サンプラザ生涯学習市民センター, 枚方市立サンプラザ生涯学習市民センター, 2018/2

橋爪節也 (招待講演)「北野恒富のモダニズムと美人画-本画、ポスター、挿絵を読み解く-」北野恒富展, 千葉市美術館, 千葉市美術館, 2017/11

佃一耀, 橋爪節也, 明尾圭造「大坂と文人画について」, 一茶庵, 四天王寺本坊, 2017/11

橋爪節也 (招待講演)「柳大夫・柳沢淇園の芸術」特別展 柳沢淇園-文雅の士・新奇の画家-, 大阪大学総合学術博物館、かんさい・大学ミュージアム連携実行委員会, 大和文華館, 2017/10

橋爪節也 (招待講演)「岩橋善兵衛ゆかりの浪花、知の巨人 博物館学から文人画まで-木村兼葭堂とその生涯」第 112 回かいづか歴史文化セミナー, 貝塚市立前兵衛ランド, 貝塚市民図書館, 2017/10

橋爪節也「阪神間の画家たち」西宮市宮水学園ふるさと講座第 6 回, 西宮市宮水学園, 大阪市立生涯学習センター, 2017/9

藤田富美恵, 橋爪節也 (基調講演)「講演・トーク「秋田實と大大阪の時代」」, 大大阪藝術劇場, 大大阪藝術劇場, 2017/9

高島幸次, 桂春之輔, 橋爪節也「座談会「船場・中之島を語る」」, 天満繁昌亭, 天満繁昌亭, 2017/8

橋爪節也 (招待講演)「EXPO'70 大阪万博の時代と大阪の前衛美術」大阪・京都の「一大事」-災害・動乱・革新」第 6 回:大阪・京都文化講座, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, 大阪大学大学院文学研究科, 立命館大学文学部, 立命館大阪梅田キャンパス, 2017/6

橋爪節也 (招待講演)「当今第一“風流宗匠”なにわをいく -田能村竹田と大坂・吹田-」田能村竹田展～吹田・なにわを愛した文人画家, 吹田市立博物館, 吹田市立博物館, 2017/4

熊田司, 橋爪節也, 船越幹央 (パネリスト)「イマジユリ蒐集と都市イメージ探求」学会シンポジウム「アート? デザイン? 道楽? -大阪イマジユリをもとめて」, 大正イマジユリ学会, 大阪市中心公会堂, 2016/7(『大正イマジユリ』2017/)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2017 年度～2019 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:橋爪節也

課題番号:17H02293

研究題目:木村兼葭堂“知”のネットワークの解析-絵画・本草学資料から探る歴史文化の再構成

研究経費:2017 年度 直接経費 6,100,000 円 間接経費 1,830,000 円

研究の目的:

江戸時代、大坂で活躍した町人学者であり、文人画、本草博物学、貴重図書、書画、金石、標本、地図などの大蒐集家として知られた木村兼葭堂を、特に絵画と本草学の面ならびに国内のみならず海外にも及んだネットワークに注目して、文理融合の立場から解明を試みるものである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

財団法人・天門美術館評議委員会・評議委員, 2017 年 4 月～現在に至る

田辺市立美術館協議会・協議会委員, 2017 年月～現在に至る
吹田市立博物館協議会・協議会委員, 2016 年月～現在に至る
大阪市経済戦略局 文案を特色とする地域魅力創出事業 有識者会議・委員, 2015 年 8 月～現在に至る
NPO 大阪美術市民会議・理事, 2015 年月～現在に至る
八尾市 今東光資料館・企画展示アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る
大阪市中央公会堂・文化財保護アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る
大阪市民表彰審査会・臨時委員, 2012 年 4 月～現在に至る
大正イマジュリ学会・常任委員, 2012 年 3 月～現在に至る

4. 藤岡 穰 教授

1962 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、同准教授を経て、2009 年 4 月より現職。1991 年に第 3 回国華賞、2014 年に大阪大学総長顕彰受賞。専攻：東洋美術史

4-1. 論文

- 藤岡穰 「河北白玉像與曹仲達風格」『佛・縁:河北曲陽白石佛教造像藝術展論文集』仏光山文教基金会, pp. 158-174, 2017/12
藤岡穰 「日本伝来の三国時代の半跏思惟像—京都・妙傳寺像と兵庫・慶雲寺像を中心に—」『日韓金銅半跏思惟像—科学的調査に基づく研究報告—』韓国国立中央博物館, pp. 506-533, 2017/12
藤岡穰 「飛鳥寺本尊 銅造釈迦如来坐像(重要文化財)調査報告」『鹿苑雑集』19, 奈良国立博物館, pp. 60-98, 2017/7
藤岡穰 「曹仲達様式の継承——鎌倉時代の仏像にみる宋風の源流」『アジア遊学』208, 勉誠出版, pp. 42-54, 2017/5
藤岡穰 「韋駄天立像」『國華』1458, 國華社, pp. 37-39, 2017/4
犬塚将英, 早川泰弘, 藤岡穰他(共著)「[報告] 可搬型 X 線回折分析装置を用いた銅造釈迦如来坐像(飛鳥大仏)の材質調査」『保存科学』56, 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所, pp. 65-75, 2017/3
藤岡穰 「日本古代の薬師如来造像史からみた芬皇寺薬師如来」『元暁学研究』(元暁学研究院), 21, 芬皇寺, pp. 103-120, 2016/12
藤岡穰 「蔵王権現をめぐる諸問題」『日本の古代山寺』高志書院, pp. 321-352, 2016/9
藤岡穰 「中国南朝造像とその伝播」『美術資料』89, 韓国国立中央博物館, pp. 216-264, 2016/6

4-2. 著書

- 藤岡穰, 関丙贊、権江美他(監修),『日韓金銅半跏思惟像—科学的調査に基づく研究報告—』, 韓国国立中央博物館, pp. 176-187, pp. 286-293, pp. 318-385, pp. 402-439, pp. 450-467, pp. 506-533, 2017/12
久保智康, 大西貴夫, 藤岡穰他(共著)『日本の古代山寺』高志書院, pp. 321-352, 2016/9

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

『八尾市文化財調査報告 81 常光寺調査研究報告書』(八尾市教育委員会、2018 年 3 月)Ⅲ. 美術工芸品の調査研究 1. 彫刻の調査研究のうち(1)木造地藏菩薩立像(市指定文化財)(2)木造伝又五郎太夫盛継坐像(市指定文化財)(3)木造毘沙門天立像(市指定文化財)(4)木造閻魔王像および木造十王等像(5)木造金剛力士像の解説。

4-4. 口頭発表

- 藤岡穰 「蔵王権現の信仰と造像」International Conference, Repositioning Shugendō: New Research Direction on Japanese Mountain Religions, UCSB, McCune Conference Room, 2017/6
藤岡穰 「河北白玉像と曹仲達様」2017《仏・縁—河北曲陽白石仏造像芸術展》暨學術研討会, 仏光山仏陀記念館シンポジウム, 仏光山仏陀記念館, 2017/3
藤岡穰 「蔵王権現はなぜ数多く伝わるのか—三徳山と金峯山の事例から—」京都国立博物館土曜講座, 京都国立博物館、三朝

市, 京都国立博物館講堂, 2017/2

藤岡穰 「守り継がれた茨木の文化財」『新修茨木市史』全巻発刊記念シンポジウム いばらきの過去・今・未来—市史編さんからみえてきたもの—:『新修茨木市史』全巻発刊記念シンポジウム いばらきの過去・今・未来—市史編さんからみえてきたもの—, 茨木市, 茨木市市民総合センター(クリエイトセンター)センターホール, 2017/1

藤岡穰 「山の神、蔵王権現の信仰とイメージ」国際共同シンポジウム「モノと文献でわかる古代・わからない古代」:国際共同シンポジウム「モノと文献でわかる古代・わからない古代」, 大阪大学文学研究科・フランス国立東洋言語文化大学, 国際交流基金 パリ日本文化会館ホール, 2016/12

藤岡穰 「日本古代の薬師如来造像史からみた芬皇寺薬師如来」国際シンポジウム「芬皇寺」:国際シンポジウム「芬皇寺」, 仏国寺会館, 2016/11(『元暁学研究』21, pp. 103-136, 2016/12)

藤岡穰 「飛鳥大仏をめぐって」橿原考古学研究所附属博物館 2016 年度秋季特別展「蘇我氏を掘る」研究講座:橿原考古学研究所附属博物館 2016 年度秋季特別展「蘇我氏を掘る」研究講座, 橿原考古学研究所附属博物館, 橿原考古学研究所講堂, 2016/11

Fujioka, Yutaka, “Early Tang Image Production at Chang’an - A Reconstructive Consideration and the Reception of Indian Art”, Association for Asian Studies Conference in Asia, Kyoto 2016:Association for Asian Studies Conference in Asia, Kyoto 2016, Association for Asian Studies Conference in Asia, 同志社大学, 2016/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 大阪大学総長顕彰 研究部門, 大阪大学総長顕彰 研究部門, 2014/7

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2016 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号:25244006

研究題目:5～9世紀東アジア金銅仏に関する日韓共同研究

研究経費:2016 年度 直接経費 6,300,000 円 間接経費 1,890,000 円

研究の目的:

5～9世紀東アジアの金銅仏および関連の金銅製品、青銅製品を対象として、蛍光X線分析、マイクロスコブ撮影、X線CTスキャン等の科学的調査を実施し、時代や地域による成分の異同、鑄造や彫金技法等の特色を抽出する。また、美術史学と文化財科学の分野の交流を深め、相互に有効な研究方法の開発に努めるとともに、考古学や文献史学との領域横断的研究により、金銅仏をはじめとする文物の東アジアにおける伝播の様相について検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

茨木市文化財審議会・文化財審議委員, 2017 年 3 月～現在に至る

摂津市史・執筆委員, 2015 年 4 月～現在に至る

美術史学会・常任委員, 2013 年 6 月～現在に至る

神戸市立博物館外部評価委員会・外部評価委員, 2012 年 9 月～現在に至る

和歌山県文化財保護審議会・委員, 2012 年 4 月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011 年 4 月～現在に至る

八尾市文化財保護審議会・委員, 2009 年 9 月～現在に至る

大阪歴史博物館・評価委員, 2009 年 3 月～2018 年 1 月

藤井寺市文化財審議会・審議員, 2008年9月～現在に至る
奈良国立博物館・調査員, 2006年4月～現在に至る
茨木市史編さん委員会・委員, 2000年4月～2017年3月

5. 岡田 裕成 教授

1963年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部准教授、大阪大学文学研究科准教授を経て現職。Archivo Espanol de Arte 誌 (CSIC, Madrid) 編集顧問。専攻：西洋美術史

5-1. 論文

-
- 岡田裕成 「大エルミタージュ美術館展 オールドマスター 西洋美術の巨匠たち」『アートランブル』兵庫県立美術館, pp. 4-5, 2018/3
- 岡田裕成 「金雲たなびくノアの大洪水: 交通する世界美術と桃山の日本」『新桃山展 大航海時代の日本美術』九州国立博物館, pp. 171-177, 2017/10
- Okada, Hiroshige, ““Lo indígena” en el arte colonial: ¿Expresión inconscient o imagen manipulada?” *Mestizaje en Diálogo*, (Encuentro Internacional sobre Barroco), pp. 29-38, 2017/9
- 岡田裕成 「美術の移動と「境界上の現象」」『民族藝術』(民族藝術学会), 33, 民族藝術学会, pp. 25-30, 2017/3
- 岡田裕成 「「アメリカの再発見」? 草創期ラテンアメリカ美術史学から問う植民地美術. 論の現在」『「美術」概念の再構築』(国際シンポジウム「日本における「美術」概念の再構築」記録集編集委員会), ブリュッケ, pp. 139-149, 2017/1

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

-
- Okada, Hiroshige, “Momoyama Japan and the Artistic Contacts via Asian and Transpacific Sea Lanes (Opening Remarks)”, Momoyama Japan and the Artistic Contacts via Asian and Transpacific Sea Lanes, 大学文学研究大阪科西洋美術史研究室(科研・基盤研究 B「16世紀イスパニア世界における帝國的な交通空間と『境界的』美術の形成」研究代表者・岡田裕成), 九州国立博物館・第一セミナー室, 2017/11
- 岡田裕成 「適応／審美的消費／収奪 征服後メキシコにおける羽モザイク聖画／聖具の制作後援と活用」近世カトリックの世界宣教と文化順応, 国立民族学博物館, 国立民族学博物館, 2016/7
- 岡田裕成 「美術の移動と「境界上の現象」」民族藝術学会大会シンポジウム, 民族藝術学会, お茶の水女子大学, 2016/4

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田裕成 第12回木村重信民族藝術学会賞, 民族藝術学会, 2015/4

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田裕成
課題番号:26370133

研究題目:初期近代植民地美術における「文化境界上の現象」: 事象研究と方法論の探求

研究経費:2016年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

大航海時代以降、今日に至る「グローバル化」の最初の段階に踏み出した世界において、ヨーロッパと非ヨーロッパの接触は、その文化の境界上に、特異な美術の領域を生みだした。とりわけメキシコやアンデス地域を中心とする、ラテンアメリカのスペイン植民地には、そうした異文化の接触と交渉の場が、多様なかたちで出現する。本研究は、この異文化接触領域における「境界上の美術」に特有の現象を、個別的な事例の詳細な研究を通して明らかにする。同時に、比較可能な事例に取り組む研究者との共同研究を通して、「文化境界上の美術」というべきものの特性を明確にし、その研究に固有の方法論を探求する。

5-6-2. 2017年度、基盤研究(B) 一般、代表者:岡田裕成

課題番号:17H02294

研究題目:16世紀イスパニア世界における帝国的交通空間と「境界的」美術の形成

研究経費:2017年度 直接経費 2,900,000円 間接経費 870,000円

研究の目的:

1492年に達成された国土再征服と、新大陸航路の発見という二つの重大事を象徴的な契機として、ヨーロッパの周縁に位置したスペインは、16世紀を通して広大な帝国を構築する。その帝国は、アイデンティティを異にする様々な人々を統合する文化の交通空間であり、そこでは、多様な図像文化や造形様式、技法・素材が時に起源の差異を超えて組み合わせられ、あるいは、本来とは異なる意味のもとに解釈・転用された。本研究は、スペインを中心とするイスパニア世界に成立した、その「境界的」な美術の諸相を、歴史的な経緯と地理的広がり両面から体系的に明らかにする。同時に、ヨーロッパ域内から新大陸・アジア海域に及ぶイスパニア世界のグローバルな美術の交通の実態を可視化する、GISを応用したデータベースを構築する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

Mirai. Estudios Japneses 誌(マドリード・コンプルテンセ大学)・編集顧問, 2017年2月～現在に至る

九州国立博物館買取協議会・臨時委員, 2016年10月～2016年10月

美術史学会・常任委員, 2016年6月～現在に至る

Archivo Español de Arte 誌(スペイン学術研究高等院)・編集顧問, 2015年1月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2007年5月～現在に至る

6. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

6-1. 論文

桑木野幸司「初期近代イタリアのヴィッラにおける庭園の自己表象とランドスケープ絵画」,小野健吉『観光資源としての庭園(2)』(「観光資源としての庭園」に関する研究会), pp. 141-150, 2018/3

Kuwakino, Koji, "L'architettura e l'arte della memoria: la fabbrica del mondo progettata nella Tipocosmia (1561) di Alessandro Citolini", in *EdA Esempi di Architettura*, EDA, pp. 1-15, 2018/1

Kuwakino, Koji, "La varietas in una sylvia geometrica che «ricrea la mente stanca dal pensiero delle cose difficili»: Daniele Barbaro e l'Orto Botanico di Padova", *Daniele Barbaro 1514-1570. Vénétien, patricien, humaniste.*, Brepols, pp. 115-134, 2017/11

桑木野幸司「テキストの中の宇宙:A.チトリーニ『ティポコスミア』(一五六一年)が提示する世界建築」,『Arts&Media』(大阪大学アートメディア論研究室), 7, pp. 32-55, 2017/7

- 桑木野幸司 「現代日本の忘却術＝記憶術のために」, 『地下室 草号』(地点 CHITEN), 3, 地下室 編集部, pp. 32-43, 2017/6
- 桑木野幸司 「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園」, 『観光資源としての庭園(1):平成 27 年度「観光資源としての庭園」に関する研究会報告書』(観光資源としての庭園(科研)), pp. 19-26, 2017/3
- 桑木野幸司 「記憶の中のイェルサレム—初期近代西欧の聖都表象と夢・幻視・想像力」, 『夢と表象:眠りとところの比較文化史』, 勉誠社, pp. 209-225, 2017/1
- Kuwakino, Koji, “From *domus sapientiae* to *artes excerpenti*: Lambert Schenkel’s De memoria (1593) and the Transformation of the Art of Memory”, A. Cevolini (ed.), *Forgetting Machines: Knowledge Management Evolution in Early Modern Europe*, Brill, pp. 58-78, 2016/11
- 桑木野幸司 「科学とアート:ルネサンス博物図譜小史」, 『Arts&Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 148-161, 2016/7

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 桑木野幸司 「ロクス・アモエヌスと[愛・智]の世界」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2018/1
- 桑木野幸司 「ホメロスの庭:神々の住まいと人間の苑」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/10
- 桑木野幸司 「楽園と庭:ギリシア神話の世界から」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/7
- 桑木野幸司 「神々と英雄の庭:シュメル神話とギルガメシュ叙事詩の世界」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/4
- 桑木野幸司 「冬の庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/1
- 桑木野幸司 ルチーア・トンジョルジ・トマーズィ&ジュゼッペ・オルミ著、桑木野幸司訳「アルチンボルドー—自然、芸術、技巧のはざまで」, 『アルチンボルド展:Arcimboldo. Nature into Art』, 国立西洋美術館, pp. 101-108, 2017/
- 桑木野幸司 プロスペロ・アルピーニ著、桑木野幸司訳「ルバーブ論」, 『原典ルネサンス自然学』, 名古屋大学出版会, pp. 119-143, 2017/
- 桑木野幸司 「狩猟の秋、幻獣の庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/10
- 桑木野幸司 「イタリア式庭園の美学」, 『紫明』39, 紫明の会, pp. 8-13, 2016/9
- 桑木野幸司 「庭のつくりようは夏をもって旨とすべし」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/7
- 桑木野幸司 「自動機械人形の詩学:庭とマシンと風景」, 『Arts&Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 266-269, 2016/7
- 桑木野幸司 「春、フローラの庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/4
- 桑木野幸司 「レトロ建築探訪」, 『歩いてめぐる神戸本』, えるまがムック, pp. 92-93, 2016/4

6-4. 口頭発表

- Kuwakino, Koji, “Il fascino dell’ecfrasi architettonica nel Rinascimento”, Giornata di studi: Il fascino dell’ecfrasi architettonica nel Rinascimento, 科研基盤B創造的思考の基盤としての建築, 大阪大学中之島センター, 2018/3
- 桑木野幸司 「初期近代イタリアのヴィッラにおける庭園の自己表象とランドスケープ絵画」, 多様な時間軸・空間軸における庭園とその観光, 「観光資源としての庭園」に関する研究会(科研・代表:小野健吉), 奈良文化財研究所小講堂, 2017/11
- 桑木野幸司 「ルネサンス庭園の見方:水の庭園ヴィッラ・ランテを中心に」, 神戸婦人大学 文化・デザインコース, 神戸婦人大学, 神戸婦人大学(神戸市男女共同参画センター3階), 2017/10
- 桑木野幸司 「驚異の時代の驚異の芸術:マニエリスム芸術と自然描写の世界」, 「アルチンボルド展:Nature into Art」特別講演, 国立西洋美術館, 国立西洋美術館, 2017/7
- 桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス③:パドヴァ植物園:植物園の誕生と占星術的園芸学」, シリーズ「世界遺産—歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/6

桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス②:水の庭園ヴィッラ・デステ」, シリーズ「世界遺産－歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/5

桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス①:ルネサンスの理想都市ピエンツァ」, シリーズ「世界遺産－歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/4

桑木野幸司 「テキストの中の宇宙:A. Citolini, Tipocosmia (1561)が提示する世界建築」, 科研シンポジウム「建築とエクフラシス:テキストと絵画に描かれた空間イメージ」, 科研基盤B(16H03373), 大阪大学文学研究科本館4階, 2017/3

桑木野幸司 「驚異のルネサンス庭園!」, リーガクラブ講演会・懐徳堂記念会共催講座, リーガクラブ・懐徳堂記念会, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/3

Kuwakino, Koji, "Hortus sapientiae: giardini come luoghi della memoria e dell'organizzazione del sapere enciclopedico", Giardini/gardens: luoghi di confluenza e di elaborazione di idee, simbolo di una privilegiata condizione umana perduta ma recuperabile, Fare arte nel nostro tempo / Associazione italiana di cultura classica Delegazione della Svizzera Italiana, Università della Svizzera italiana, 2016/11

桑木野幸司 「人文主義者が設計した庭:ダニエーレ・バルバロとパドヴァ植物園(1545年)」, 西洋建築史研究の新たな地平:受容と順応－西洋建築の行間を読む, 日本建築学会, 東海大学高輪キャンパス4号館, 2016/11

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2016年度 直接経費 4,300,000円 間接経費 1,290,000円

2017年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

7. 高志 緑 助教

1986年生。2010年関西学院大学文学部卒業、2012年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了。2016年、同博士後

期課程単位取得退学。修士（文学）。2012～2014年度、日本学術振興会特別研究員、2015年より相愛大学人文学部非常勤講師。2016年4月より現職（2018年3月退職）。専攻：仏教美術史。

7-1. 論文

高志緑 「陸信忠筆「仏涅槃図」に関する研究」『鹿島美術財団年報別冊』(鹿島美術財団), 34, 鹿島美術財団, pp. 235-245, 2017/11

高志緑 「淳熙十年銘「阿弥陀浄土図」の典拠について—鑑法の本尊画像の可能性—」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 50, 大阪大学文学会, pp. 1-26, 2016/12

7-2. 著書

井上智勝, 荒見泰史, 高志緑他(共著) 『アジア遊学 206 宗教と儀礼の東アジア』勉誠出版, pp. 158-174, 2017/3

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

高志緑 「水陸会の本尊と三教混合龕」神仏融合研究会, 神仏融合研究会, 名古屋市立大学, 2017/9

高志緑 「南宋時代の水陸会と水陸画—史氏一族の事例を中心に—」関西大学東西学術研究所 東アジア宗教儀礼研究班例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学東西学術研究所, 2016/7

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高志緑 鹿島美術財団 美術に関する調査研究の助成金 財団賞, 鹿島美術財団, 2018/3

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

7-7-1. 2016年度～2017年度、6：研究助成、助成金獲得者：高志緑

助成金名：公益財団法人鹿島美術財団「美術に関する調査研究」助成

研究題目：陸信忠筆「仏涅槃図」に関する研究

助成団体名：公益財団法人鹿島美術財団

助成金額：2016年度 直接経費 600,000円

2017年度 直接経費 0円

研究の目的：

本研究の目的は、陸信忠筆「仏涅槃図」という一点の作品を中心に、同時代や少し遡る時代の涅槃表現との比較を通して、当時の涅槃儀礼の在り方や墓葬美術と涅槃図との相互関係を探りつつ、本作品の位置付けについて考察することである。

南宋仏画の優品でありながらも特徴的な図像を有する本図は、これまで、江南地域の市井の人々に広まった庶民的な仏教観の反映と見られがちであった。本研究では、比較対象を広げ、本作品の源泉には、中原や北方を含む大陸の伝統的な涅槃表現があることを検証し、かつ作品が制作された時代の法会に相応しい本尊画像の構成となっていることを指摘したい。

7-7-2. 2017年度～2018年度、6：研究助成、助成金獲得者：高志緑

助成金名：トロポリタン東洋美術研究センター「東洋美術研究振興基金」

研究題目：南宋仏画における中国西北地域の美術との比較研究—モチーフ、構図の源泉に着目して—

助成団体名:メトロポリタン東洋美術研究センター

助成金額:2017年度 直接経費 712,500円

研究の目的:

本研究の目的は、南宋仏画と中国西北地域の美術を比較研究し、構図やモチーフ、意味内容の影響関係について考察し、地理的に離れた地域で同様の図像が見られることを明らかにすることである。具体的には、申請者がすでに取り組んでいる二つの研究、陸信忠筆「仏涅槃図」(奈良国立博物館蔵)の研究、淳熙十年銘「阿弥陀浄土図」(京都・知恩院蔵)の研究に必要な調査・資料収集を行う。両作品に描かれるモチーフに近い図像を表す中国西北地域・江南地域の石刻作品を見学調査し、地域差や表現媒体による図様や表現の差異に留意しつつ、南宋時代の江南地域で制作された作品を中国大陸の中で相対的に位置付ける。

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：藤川 隆男、堤 研二、堤 一昭

准教授：井本 恭子

助教：古結 諒子

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	0	0	0	0	0

※うち留学生 1名、社会人学生 0名

3. 修了生(2016年度～2017年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2016	3
2017	4
計	7

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに、③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、歴史学研究各分野の最新状況を知る「歴史学のフロンティア」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により、合計4本の単著論文あるいは共著であれば第一著者となっている論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての月例研究会「大阪大学歴史教育研究会」の開催に協力することなどによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が共同で行う口頭報告および論文作成を行うグループ研究に参加してプレゼンテーション能力向上をはかった。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかによる助成研究が複数行われた。

教員がメンバーである研究プロジェクト（科学研究費補助金等の研究）による国内・国際研究集会の開催に協力するという目標については、複数の教員が科研チームのメンバーとして、国内・国外での研究集会などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会（大阪大学歴史教育研究会月例会など）も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員2名が世話役の一員として大阪大学歴史教育研究会月例研究会の開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。また本コースの複数の教員が市民教養講座への出講、市議会研修会での講演を行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

修士論文提出による修了者は3名（2016年度3名、2017年度4名）であった。修了した大学院生以外の学生（長期履修制度を利用する学生を含む）も、授業以外に研究会での模擬授業準備／グループ研究および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考えられる。なお春夏学期には、修士論文作成指導のための演習を各教員が開講し、加えて修士論文作成への中間報告の場をコース全体で設けて、入学時からの修士論文作成および進路についての指導・助言体制を強化している。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

Ⅴ. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)
2017	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	1	2	0	0	3
2017	0	0	2	0	0	2
計	0	1	4	0	0	5

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

加納晴日, 川瀬陽介, 高木亮太郎「2016年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(2)「鎖国」下の日本の歴史展開—外との交流の中で」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ14 研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門(平成26-29年度科学研究費補助金・基盤研究A・課題番号26244034)』, pp.24-38, (担当箇所:はじめに, 第1章, pp.24-26;第3章(加納との共著)pp.31-36), 2017/03

【2017年度】

佐藤一希, 松平桃子, 丸山祐生「2017年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(4)政治と文化の関わりを考える—「政治文化」を中心に—」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ15 研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門(平成26-29年度科学研究費補助金・基盤研究A・課題番号26244034)』, pp.57-75, (担当箇所:はじめに(2)(3), pp.58-59;第2章 pp.63-65), 2018/03

(2)口頭発表

【2016年度】

伊藤崇展「モンゴル帝国建国期における nōkōr—千戸制における位置づけの検討から—」, 日本モンゴル学会2016年度春季大会, 東北大学, 2016/05/21

川瀬陽介, 加納晴日, 高木亮太郎「「鎖国」体制下における日本の歴史展開—「外」との相互作用の中で—」, 大阪大学歴史教育研究会第99回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/10/15

今泉奏「アジア主義者がみた「黒人問題」—満川亀太郎と黒竜会の動きを通して—」, アフリカ研究セミナー, 関西大学, 2017/2/10

【2017年度】

佐藤一希, 松平桃子, 丸山祐生「《福井憲彦『歴史学入門』を書き替える②》第11章「政治と文化の再考」—現代歴史学にみる「政治文化」—」, 大阪大学歴史教育研究会第109回例会, 大阪大学豊中キャンパス, 2017/12/16

伊藤崇展「元朝の軍糧輸送の実相—クビライ、テムル期における商人への輸送委託の事例を中心に—」, 東方キリスト教圏研究会第27回例会, 京都大学, 2018/01/20

(3)その他(書評・翻訳など)

【2017年度】

伊藤崇展「<書評>オラムパヤリン・エルデネバト『中世モンゴル地域にキリスト教の一派が伝播した略史について』(ウランバートル, 2009), 『東方キリスト教世界研究』(東方キリスト教圏研究会), vol.1, pp.87-109, 2017/05

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

なし

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2016年度～2017年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2016年度：1名 2017年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 藤川 隆男 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士(大阪大学)、MA(ANU)。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史

1-1. 論文

Fujikawa, Takao, "Chinese Museums in Austrakia: characteristics and problems"『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 15, 大阪大学西洋史学研究室, pp. 44-50, 2018/2

藤川隆男「パブリック・ヒストリー社会の歴史意識・知識とアカデミックな歴史―」『西洋史学』(日本西洋史学会), 263, 日本西洋史学会, pp. 36-48, 2017/6

藤川隆男「乾燥大陸オーストラリアの歴史と開発」*Civil Engineering Consultant*, (建設コンサルタンツ協会), 274, 建設コンサルタンツ協会, pp. 10-12, 2017/1

1-2. 著書

橋本伸也, 平野千賀子, 藤川隆男他(共著)『紛争化させられる過去』岩波書店, pp. 109-130, 2018/3

歴史学研究会, 清水光明, 藤川隆男他(共著)『歴史を社会に活かす』東京大学出版局, pp. 39-49, 2017/5

藤川隆男『妖獣バニヤップの歴史』刀水書房, 298p., 2016/7

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Fujikawa, Takao, "Chinese History museums in Australia", The Third International Workshop on Australia in Osaka, 2016: The Third International Workshop on Australia in Osaka, 2016, 大阪大学文学研究科・西洋史専門分野, 大阪大学, 2016/11『西洋史学』263, pp. 36-48, 2017/6)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:藤川隆男

課題番号:26360010

研究題目:オーストラリアにおける歴史博物館の発達—20世紀最大の草の根運動

研究経費:2016年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

オーストラリアでは、1950年代末から1970年代半ばまでに1000館以上の歴史博物館が新設された。これらの博物館は、政府からの援助を受けずに、草の根の運動によって開設されたものである。現在では、その数が2000に達するほどであり、この歴史博物館の誕生と発展を検討するのが、この研究の課題である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋史学会・代表, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・理事, 2016年3月～現在に至る

日本歴史学協会・委員, 2015年9月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015年5月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・編集委員, 2003年6月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003年6月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996年4月～現在に至る

2. 堤研二教授

1960年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009年11月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学教育・研究功績賞（2006）、大阪大学総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学。

2-1. 論文

堤研二「中等教育の地理科目における授業設計について—主権者教育を題材として—」『教育学年報』23, 大阪大学大学院人間科学研究科, pp. 215-222, 2018/3

堤研二 「地理関係科目における主権者教育の新地平 ―とくに中学校社会科地理的分野を中心に―」『待兼山論叢(日本学篇)』
51, 大阪大学文学研究科, pp. 21-38, 2017/12

Tsutsumi, Kenji, "Population Outflow and Regional Attributes of Peripheral Regions in Japan: Two Cases of Mountain Village and Ex-coalmining Region," *Open Japan, Closed Japan: Towards Interdisciplinary Studies in Human Mobility (Proceedings on the International Symposium on Japanese Studies in Global Context)*, (Graduate School of Letters, Osaka University), pp. 71-79, 2017/12

堤研二 「新刊短評:加藤久和著『8000万人社会の衝撃:地方消滅から日本消滅へ』、2016年、祥伝社」『人口学研究』(日本人口学会), 53, pp. 98-99, 2017/9

Tsutsumi, Kenji, "Social Capital" Richardson, D. (Editor-in chief, *The Association of American Geographers*) (eds.) "The International Encyclopedia of Geography: People, the Earth, Environment, and Technology," (The Association of American Geographers), 12, Wiley, pp. 6190-6196, 2017/3

堤研二 「考古学と人文地理学の間:科学性の検討」田中良之先生追悼論文集編集委員会(編)『考古学は科学か:田中良之先生追悼論文集』(田中良之先生追悼論文集編集委員会), 上, 中国書店, pp. 35-49, 2016/5

堤研二 「考古学と地理学・空間分析:『考古学方法論研究会』とその時代」田中良之『縄文文化構造変動論 I:もう一人の田中良之』(『縄文文化構造変動論 I:もう一人の田中良之』刊行委員会), 上, すいれん舎, pp. 439-445, 2016/5

堤研二 「人口のメガシユリンクと街づくり:過疎地域の実態から学ぶこと」富士通総研経済研究所『ER(富士通総研経済研究所 経済・経営・技術読本)』(富士通総研経済研究所), 2, 富士通総研経済研究所, pp. 38-39, 2016/4

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, "About Osaka University and Toyonaka City JSCs", 日本スポーツ少年団・日独同時交流事業, 豊能地区スポーツ少年団連絡協議会, 大阪大学文学研究科人文地理学教室, 2017/8

Tsutsumi, Kenji, "Grunddaseinsfunktionen and Social Capital in Peripheral Island Area: Sustainability of Regional Life in Oki Island", The 14th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group (MARG), Scenic Hotel Tonga, 2017/6

Tsutsumi, Kenji, "A Struggle for Establishment of University Coop at Shimane University, 1992-1999: An Experience of Conflicts and Contradictions through a Students' and Teachers' Movement", The 8th East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), The Organising Committee for The 8th East Asia Regional Conference in Alternative Geography (EARCAG), Hong Kong Baptist University, 2016/12

堤研二 「人口の減少と地域・社会:過疎地域の例から人口減少社会のことを考えてみよう(主権者教育の視点による)」中学校・社会科における主権者教育事業, さいたま市立桜木中学校, さいたま市立桜木中学校, 2016/12

堤研二 「大阪のスポーツ少年団」立命館プロムナードセミナー, 立命館大学・大阪大学, 立命館大阪キャンパス, 2016/11

Tsutsumi, Kenji, "Nagasaki: A Hodgepodge City of Cultures", Crossroads of Cultures and Firms: From the Age of Discovery to the Age of Globalization, MARG(Marginal Areas Research Group), Nova University of Lisbon, Nova University of Lisbon, 2016/9

Tsutsumi, Kenji, "Coal Miners and Social Capital around Them: Cases of Miike and Takashima", The 13th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside: Transforming Mining Cities, MARG(Marginal Areas Research Group), Hotel Scandic Ferrum, Kiruna, Sweden, 2016/6

堤研二 「ソーシャル・キャピタルと地域の持続可能性」島根県出雲市議会研修会, 島根県出雲市議会, 島根県出雲市議会,

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 大阪大学総長顕彰(研究部門), 国立大学法人大阪大学, 2015/7

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:堤研二

課題番号:26244051

研究題目:中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費:2016年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

2017年度 直接経費 4,600,000円 間接経費 1,380,000円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル(FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1)林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2)森林環境保全のための管理モデル、(3)中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4)それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2014年10月～現在に至る

大阪府スポーツ少年団本部・本部委員, 2014年4月～現在に至る

豊中市スポーツ振興協議会・委員, 2014年4月～現在に至る

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012年4月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012年4月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010年4月～現在に至る

3. 堤一昭教授

1960年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2013年6月より現職。専攻:東洋史学

3-1. 論文

堤一昭 「石濱純太郎の”モンゴル学事始”」『OUFC Booklet』10-2, 大阪大学中国文化フォーラム, pp. i-iv, 2017/2

3-2. 著書

『青旗』研究会田中仁, Tsutsumi, Kazuaki, 『青旗』研究会, 田中仁他(共編著), モンゴル語新聞『フフ・トグ/青旗』記事索引初稿 (1941年) OUGC ブックレット vol.10(2), vol.10--2, 大阪大学中国文化フォーラム, 457p., pp. 3-449, 2017/7

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤一昭

課題番号:26370822

研究題目:東洋学術資産としての石濱文庫の基礎的研究

研究経費:2016年度 直接経費 1,669,140円 間接経費 240,000円

2017年度 直接経費 1,354,803円 間接経費 0円

研究の目的:

内藤湖南ら第一世代を継いだ第二世代の東洋学者・石濱純太郎(1888-1968年)の収集した図書および研究資料(大阪大学総合図書館所蔵)の中から、現在の研究水準から見て資料価値の高い資料群を重点的に調査し、それらの概要の把握と各資料群が当該分野の将来の研究にどのように資するか等の展望を得ることを第一の目的とする。また本研究を基盤としてどのような総合的調査・研究が企画しうるか、「学術資産」としてどのようなデジタルアーカイブの形成と公開がなし得るかについての展望を得ることなどを第二の目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2016年度～2019年度、3: 受託研究、助成金獲得者:堤一昭

助成金名:課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(グローバル展開プログラム)

研究題目:国民国家型の大学歴史教育をグローバル化時代に適応させる方法に関する国際比較

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 7,960,000円 間接経費 2,388,000円

研究の目的:

日本を含む東アジア諸国が共有する国民国家中心の歴史学のしくみを改善する方法について、自国史と世界史の関係、授業方法など教育面から国際比較をおこない、それにもとづく授業モデルや海外発信体制を開発・提案することで、グローバル化時代にふさわしい歴史学の発展をはかる。グローバルヒストリーや地域研究の研究蓄積、国内の高大接続なども踏まえた大学歴史教育の国際比較(中心は東・東南アジア・内陸アジアほかアジア各地)および、それにもとづく日本史と世界史の統合や授業の多言語化など教育法の開発を実施し、海外での授業参画も含めた多様な形態による海外発信と若手研究者の育成に結び付ける。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事, 2008年5月～現在に至る

日本モンゴル学会・紀要編集委員, 2008年5月～2016年5月

4. 井本 恭子 准教授

1963年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究所修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学、1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパ III 講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：人類学

4-1. 論文

井本恭子 「「南イタリア」と amoral familism」『待兼山論叢』51, 文学研究科, pp. 57-72, 2017/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 中村 翼 助教

1984年生。2013年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(日本史学専攻)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学2014年)。学術振興会特別研究員(PD)を経て、2014年10月より現職(2017年9月退職)。専攻：日本史学(中世史・東アジア交流史)

5-1. 論文

中村翼 「中学校歴史教科書と日本史研究者の課題—育鵬社版の日本中世史記述の検討を通じて—」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 228, 大阪歴史科学協議会, pp. 7-14, 2017/4

中村翼 「モンゴル帝国の東アジア経略と日中交流」秋田茂・桃木至朗(編)『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版会, pp. 293-319, 2016/4

5-2. 著書

湯浅邦弘, 寺門日出男, 中村翼 『増補改訂 懐徳堂事典』大阪大学出版会, 2016/10

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中村翼 「書評 村井章介著『日本中世の異文化接触』」『日本史研究』647, 日本史研究会, pp. 86-93, 2016/7

5-4. 口頭発表

中村翼 「高校日本史用語の精選の狙いと課題

—日本史研究者に向けて—鎌倉遺文研究会第 230 回例会, 鎌倉遺文研究会, 早稲田大学, 2017/5

中村翼 「蒙古襲来と中世日本—回顧と展望—」海域アジア史研究会 3 月例会, 海域アジア史研究会, 大阪大学, 2017/3

中村翼 「モンゴルの覇権と日本—戦争・交易・国制—」昭和女子大学国際文化研究所・国際シンポジウム:ユーラシアにおけるモンゴルのインパクト—考古学・歴史学から見た「海域アジアのモンゴル襲来」—, 昭和女子大学国際文化研究所, 昭和女子大学, 2016/12

中村翼 「映画「もののけ姫」を用いた大学教養教育の日本中世史—実践と課題—」大阪大学歴史教育研究会第 100 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2016/11

中村翼 「中世日本対外関係史・仏教史からみた「遣明船の時代」」『日明関係史研究入門—アジアのなかの遣明船—』合同書評会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2016/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2015 年度～2019 年度、若手研究(B)、代表者:中村翼

課題番号:15K16828

研究題目:元代～明代初期における日中交流の歴史の変遷の研究

研究経費:2016 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2017 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は、元代～明代初期(13 世紀後期～15 世紀初頭)における日中交流の把握のための実証的基盤の構築を課題とする。《民間交流が自由で盛況な宋元代》と《それが抑圧された明代》という対比的な理解を打開し、①元～明初に日中間を往来した人々をとりまく政治・経済的環境、②日中間を結ぶ人的ネットワークの変遷を、それぞれ実証的に跡づけた上で、③日明外交成立の歴史的位置を明確化する。以上を通じ、宋/元～明初における日中交流の連続面・断絶面を総合的に捕捉することを目指す

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

高大連携歴史教育研究会・事務局長, 2016 年月～現在に至る

高大連携歴史教育研究会・事務・会計責任者, 2015 年 7 月～2016 年月

大阪歴史学界中世史部会・代表・会計責任者, 2014 年 6 月～2016 年月

大阪歴史科学協議会・研究委員, 2010 年 6 月～現在に至る

2-25 アート・メディア論

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：永田 靖、園府寺 司

准教授：桑木野幸司、古後奈緒子

助教：東 志保

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
23	0	0	0	0	1

※うち留学生 4名、社会人学生 4名

3. 修了生(2016年度～2017年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2016	7
2017	6
計	13

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えることで、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、シンポジウムの企画など、「書物」「実践」ともに研究はまずまず順調に遂行されている。なおコース紀要『Arts&Media』については、2017年7月に第7号を刊行。

3. 社会連携

美術館における講演、演劇企画・展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016 年度～2017 年度)

1. 教育

上記 1～3 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP (2015 年 10 月に旧版を全面的に刷新) から、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといつてよい。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『Arts&Media』第7号については、今回初めて論文のテーマ特集を行い、「テキストの中の建築」という企画を行なった。学内外からの反響は大きく、今後も内容を充実させてゆきたい。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといつてよい。

Ⅴ. 基本情報(2016 年度～2017 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	4(4)	0(0)	0(0)	4(4)
2017	0(0)	0(0)	6(0)	0(0)	0(0)	6(0)
計	0(0)	0(0)	10(4)	0(0)	0(0)	10(4)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	0	1	0	1	2
2017	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1	0	1	2

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2016年度】

岡本紀子「一九三六年:立原道造の京都散策—京都近代建築への関心とその影響」『Arts&Media』第6巻, pp. 94-113, 2016/7

片岡浪秀「電波監理委員会の役割とそれを巡る新聞社の動向」『Arts&Media』第6巻, pp. 184-197, 2016/7

大谷晋平「『砂の女』にみられる「主観性」」『Arts&Media』第6巻, pp. 50-71, 2016/7

松本祐香「宝塚劇団『ベルサイユのばら』における翻案の手法—楽曲を中心に—」『Arts&Media』第6巻, pp. 172-183, 2016/7

【2017年度】

西元まり「現代サーカスの可能性——シルク・ドゥ・ソレイユ トークイベント活動報告——」, 『Arts and Media』第7号, pp. 244-251, 2017/7/31

岡本紀子「詩のなかの建築——立原道造の詩にみる建築の風景」, 『Arts and Media』第7号, pp. 74-82, 2017/7/31

小池陽香「宮殿から美術館へ——公共空間としてのルーヴル, その課題と取り組み」, 『Arts and Media』第7号, pp. 150-173, 2017/7/31

渡辺陣悟「『今、ここ』で起きる虚構——ルイス・ブニュエル監督『自由の幻想』についての考察」, 『Arts and Media』第7号, pp. 134-149, 2017/7/31

竹中愛咲子「杉本博司のインスタレーションの変遷と茶の湯の関係」, 『Arts and Media』第7号, pp. 198-209, 2017/7/31

松井浩子「映像のコマとコマの間に潜むもの——伊藤高志の初期作品を中心に」, 『Arts and Media』第7号, pp. 210-221, 2017/7/31

(2)口頭発表

【2016年度】

伊藤凜、大久保敦、大堀知広、小池陽香、宍戸里帆、西元まり、渡部陣悟、大槻陽香、久保真佑子、平原美沙子、劉清影
／アート・メディア研究室主催トークイベント「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」実行委員会：トークイベント「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」@大阪大学中之島センター、2016年10月

渡部陣悟「ブニュエル後期作品における幻想性」, 第13回 関西シュルレアリスム研究会, 近畿大学東大阪キャンパス経済学部B館310教室, 2017/2/18

(3)その他(書評・翻訳など)

【2016年度】

伊藤凜／編集委員：大阪文化団体連合会『OCOS』、2016年4月

松井浩子／寄稿：「こころの泉、湧き出る所」(ゲストハウスとカフェと庭 コローム)、大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2016年4月

伊藤凜、宍戸里帆／編集委員：大阪文化団体連合会『OCOS』、2016年7月

松井浩子／監督作品「ある家族の肖像」上映：「第11回青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル」@シネマディクト、2016年7月

西元まり／寄稿：「人類の進化をアクロバットで表現」(シルク・ドゥ・ソレイユ『ダイハットーテム』)、大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2016年7月

松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映：「釜展」@大阪・EARTH、2016年7月

松井浩子／監督作品「ある家族の肖像」一部オン・エア：「あつぷるワイド」@NHK青森放送局、2016年7月

小池陽香／寄稿：「卓越した江戸庶民のファッション感覚」

(神戸ファッション美術館「写楽と豊国-江戸の美と装い」展)、大阪日日新聞「美のかたち 芸術のことば」、2016年7月

伊藤凜／パンフレットデザイン制作：大阪大学総合学術博物館主催「記憶の劇場」-大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座 プロジェクト□「ドキュメンテーション/アーカイヴ」vol.2、2016年8月

伊藤凜／寄稿：「最古のビザンチン様式伝える」(京都ハリストス正教会)、大阪日日新聞「美のかたち 芸術のことば」、2016年8月

松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映：「第16回広島国際アニメーションフェスティバル」エデュケーショナル・フィルム・マーケット@広島・JMSアステールプラザ・一階市民ギャラリー、2016年8月

松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映：『フレーム・イン』「第16回広島国際アニメーションフェスティバル」@広島・JMSアステールプラザ・七階研修室、2016年8月

松井浩子／監督作品「ORUSUBAN」上映：『日本アニメーション大特集27』「第16回広島国際アニメーションフェスティバル」@広島・JMSアステールプラザ・小ホール、2016年8月

西元まり／企画・取材：「大人も子どももサーカスでフィットネス 自分の限界曲芸で超える」、アエラ、2016年8月

西元まり／取材・編集：大阪大学グローバルサイエンスキャンパス「SEEDSプログラム ニュースレター創刊号」、2016年9-10月

伊藤凜／編集委員：大阪文化団体連合会『OCOS』、2016年10月

久保真佑子／寄稿：「京都国際映画祭2016から『立誠映画学校』能勢伊勢雄が語る実験映画史」、(京都国際映画祭2016)大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2016年11月

久保真佑子／ライブ出演(クラムチャウダー)：ミュージックアパート2016@Live house Kiruna (大阪)、2016年11月

松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映：グランプリ・WASHIDA 賞受賞：「ハンダイ映像祭2016」@大阪大学21世紀懐得堂スタジオ、2016年11月

伊藤凜／寄稿：「地下街建設時代のシンボル」(梅田吸気塔)、大阪日日新聞「美のかたち 芸術のことば」、2016年11月

大堀知広／寄稿：「形なき行為や記憶を共有」(国立国際美術館「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」展)、大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2016年12月

久保真佑子／作品投稿：日本写真映像専門学校・写真コミュニケーション専攻二年 林利香&mayusia コラボMV作品『Gerbera』@YouTube、2016年12月

伊藤凜、宍戸里帆／編集委員：大阪文化団体連合会『OCOS』、2017年1月

松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映：「あぐり展」@アートエリアB1、2017年1月

大槻陽香／寄稿：「芸術に情念注ぎ続ける」(アサヒビール大山崎山荘美術館企画展「開館20周年記念 ロベール・クー

トラス 僕は小さな黄金の手を探す)、大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2017年1月
西元まり／企画・取材・編集:大阪大学グローバルサイエンスキャンパス「SEEDSプログラム ニュースレター第2号」、
2017年2月
平原美沙子／寄稿:「じっくり観て読む仏コミック」(LOUVRE No.9 ~漫画、9番目の芸術)、大阪日日新聞「美のかた
ち芸術のことば」、2017年2月
久保真佑子／ライブ出演(クラムチャウダー): Pen Pen Acoustic LIVE! @鶴橋 LIVE BAR section3 (大阪)、2017年2
月
松井浩子／監督作品「双六アニメーション-釜ヶ崎・オブスキュラ」上映:「平和企画美術展」@大阪・ギャラリー渡来、
2017年3月
渡部陣悟／「巨匠が見せた素顔の実像」(Kobe819Gallery「日比遊一写真展”A WEEKEND WITH MR.FRANK”」)、大
阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2017年3月
【2017年度】
徐舒陽／「劇場空間に「ものの憐れ」」(京都舞踏館「黄泉の花」)、大阪日日新聞「美のかたち芸術のことば」、2017年
10月

2. 大学院生等の受賞状況

作品タイトル:『釜ヶ崎・オブスキュラ』
撮影・編集・監督:松井蛙子(浩子)
協賛:大阪大学 コミュニケーションデザイン・センター

3. 大学院生等の留学

2016年度 大学院:2名
2017年度 大学院:2名

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2016年度~2017年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、
アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4名

2016年度:2名 2017年度:2名

<内訳> 技術職 2名 ジャーナリスト 1名 アーティスト 1名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

- ・紀要『アーツ&メディア』第6号、2016年7月発行
- ・紀要『アーツ&メディア』第7号、2017年7月発行
- ・「ハンダイ映像祭」共催

日時:11月19日(日)14時-17時(開場13:45)

場所:大阪大学 21世紀懐徳堂スタジオ(豊中キャンパス)

7. 教員の研究活動(2016年度~2017年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究科客員研究員、ロシア国立映画大学研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学

1-1. 論文

永田靖「演劇は教養になるか」『演劇学論集』日本演劇学会紀要, 65, pp. 21-30, 2017/11

永田靖「アジアの近代劇化: 森本薫『大川仇討』(1941)について」『Arts & Media』, 大阪大学文学研究科文化動態論アートメディア論コース, 7, pp. 300-304, 2017/7

永田靖「伝統」の舞踊化—雲門舞集七〇年代作品『白蛇傳』『薪傳』を中心に『演劇学論叢』16, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp.1-19, 2017/3

Nagata, Yasushi, “Destabilizing Geography: on Kara Gumi’s Taiwan Production, 1992”, Proceedings, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference Asian Theatricality and Identity, The 4th International Asian Theatre Studies Conference*, pp. 6-11, 2016/11

永田靖「ソビエト国際 SF 映画の系譜:『アエリータ』に始まる」『不思議惑星キンザザ デジタル・リマスター版プログラム』パンドラ, pp.17-19, 2016/8

永田靖「雲門舞集の新しい劇場」『Arts and Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp.274-277, 2016/5

1-2. 著書

永田靖, 上田洋子, 内田健介(共編著)『歌舞伎と革命ロシア』森話社, 387p., 2017/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖「声なき声の芸術祭」『同窓会ニューズ・レター』大阪大学文学部同窓会, p.1, 2017/3

1-4. 口頭発表

Nagata, Yasushi, “Bodies in/and Asian Theatre ATWG Convener’s Address,” Opening Program and Keynote, *International Federation for Theatre Research Manila Regional Conference, ‘Bodies in/and Asian Theatre’*, Asian Center, University of the Philippines, Diliman, 2018/2

Nagata, Yasushi, “Traditional Asian Performing Bodies in a Post-Globalized Era,” *International Federation for Theatre Research Manila Regional Conference, ‘Bodies in/and Asian Theatre’*, Asian Center, University of the Philippines, Diliman, 2018/2

永田靖「関西戦後「新劇」を考える」関西学院大学博物館/大阪大学総合学術博物館連携公開シンポジウム, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学, 2017年12月2日

永田靖「記憶の上演—博物館資料を活用する演劇上演の考え方と実践」近現代演劇研究会 10月12月合同例会, 近現代演劇研究会, 大阪大学, 2017年12月24日

永田靖「演技論から見る身体」開会挨拶、日本演劇学会秋の研究集会「演技論から見る身体」, 日本演劇学会, 愛媛大学, 2017年1月24日

Nagata, Yasushi, “How to be an Asian in Asia”, *Korea China Japan Cultural Olympics, Art Forums*, Korea National University of Arts, November 10, 2017

Nagata, Yasushi, “Trans-Geographical Trials of the Jokyo Gekijo Theatre Company: on The Bengal Tiger”, *Unstable Geographies, Multiple Theatricalities, International Federation for Theatre Research Sao Paulo Conference, IFTR*, Sao Paulo University, July 14, 2017

永田靖「演劇は教養になるか」, 日本演劇学会「演劇と教養」, 日本演劇学会, 慶応義塾大学, 2017年6月4日

永田靖「地域劇場の未来—大学と地域との繋がりのために」21 世紀懐徳堂シンポジウム,大阪大学 21 世紀懐徳堂,大阪大学中之島センター, 2017 年4月19日

Nagata, Yasushi, “The form and content of theatre in Asia through travel and displacement”, *Jaipur Colloquium “TRAVEL and DISPLACEMENT in/with ASIAN THEATRE”*, Asian Theatre Working Group International Federation for Theatre Research, Jaipur Colloquium, Manipal University, 2017/2

Nagata, Yasushi, “Destabilizing Geography: on Kara Gumi’s Taiwan Production in 1992”, *The 4th International Asian Theatre Studies Conference: Asian Theatricality and Identity*, Nakanoshima Center, Osaka University, November 4, 2016

永田靖「劇作家森本薫を語る」Performing Museum Vol.1 森本薫を上演する「記憶の劇場:大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座」大阪大学総合学術博物館, 2016 年11月 12 日

永田靖「適塾と大阪大学—歴史的遺産と社会学連携活動」大阪大学医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学同窓会三九会, 大阪大学医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学同窓会, 帝国ホテル, 2016/11

永田靖「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」トークイベント「シルク・ドゥ・ソレイユという選択」アート・メディア論コース,大阪大学中之島センター, 2016 年10月12日

永田靖「なぜリアルを求めるとのカースタニスラフスキ・システムから考え直す」雑誌『地下室』創刊準備企画レクチャー&トーク, アンダー・スロー, 2016/8

永田靖「ポスト・グローバリゼーション時代の日本演劇」趣旨説明, 日本演劇学会全国大会, 日本演劇学会, 大阪大学, 2016 年7月3日

永田靖「パフォーミング・ミュージアム Vol.1 森本薫とその資料」記憶の劇場—大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座, 大阪大学, 2016/7

Nagata, Yasushi, “Performing Asian Geographical Past: on Production of Binro no Fuin by Karagumi, 1992”, *International Federation for Theatre Research, Stockholm Conference Presenting Theatrical Past*, Stockholm University, 2016/6

永田靖「20 世紀と世界演劇—演劇とグローバリゼーション」甲南女学園大学清友会講演会, 甲南女学園大学清友会, オーヴェルジュ・プレザンス桜井, 2016/6

Nagata, Yasushi, “The Modern Perception of the Traditional Theatre in Japan: a Theoretical Perspective”, *Asian Theatre Working Group Singapore Colloquium*, National Institute of Education, Nanyang Technological University, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:26284019

研究題目:アジア近現代演劇の動態論的国際共同研究

研究経費:2016 年度 直接経費 2,100,000 円 間接経費 630,000 円

2017 年度 直接経費 2,300,000 円 間接経費 690,000 円

研究の目的:

グローバリゼーションの進行する中で演劇学・演劇史のあり方を再考することは依然として課題である。近年は徐々にアジア演劇に対する関心も高まって来ているとはいうもの、相変わらず演劇学・演劇史のあり方は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されている。ポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にしたアジア諸国の演劇研究の機運の高まりを演劇学全般に反映させる試みが求められている。それは個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワーク構築を進めながら行

う比較共同研究がより効果的である。ここでは世界演劇史的視野に立った比較共同研究によってアジアにおける近現代演劇の特徴とアジア性を見出だすのが目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2015年度～2017年度、5：その他補助金、助成金獲得者：永田靖、伊東信宏

助成金名：大学を活用する文化芸術推進事業

研究題目：「記憶の劇場」大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成プログラム

助成団体名：文化庁

助成金額：2016年度 直接経費 20,400,000円

2017年度 直接経費 20,992,000円

研究の目的：

本プログラムは、大学博物館の特性を生かしながら様々なジャンルの芸術活動に関わり、企画運営しつつアート・マネジメント人材を育てるプログラムです。博物館に収められているいわゆる〈ミュージアム・ピース〉の豊かさを引き出し、〈生きたアート〉として公開していく文化芸術ファシリテーターの育成を目指します。様々な〈ミュージアム・ピース〉を活用したり、また創造や収集したりすることで、地域社会との協奏による芸術実践の試みと基礎研究的な潜在力とを連動させた「リサーチ型ミュージアム」のあり方を探求します。演劇、音楽、美術、アートなどばかりではなく、自然科学の領域までカバーして、多様な文化領域のファシリテートに柔軟に対応できる人材育成のプログラムを用意しています。受講生は、新しい展覧会や、アート・イベント等を創出して行って欲しいと思います。そしてそれが広く関西や日本の文化芸術シーンを活性化することにも繋がって行くことを期待しています。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

稲盛財団京都賞選考専門委員会・委員, 2017年5月～現在に至る

日本大学博物館等協議会・会長, 2015年6月～2017年6月

公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年5月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014年6月～現在に至る

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009年7月～現在に至る

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年6月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る

日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

2. 園府寺司教授

1957年生。大阪大学文学部美学科（西洋美術史）卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren（文学博士・アムステルダム大学）。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史／アート・メディア論

2-1. 論文

Kodera, Tsukasa, “Na de droom -- Van Gogh en Japan in zijn laatste maanden in Parijs en Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (Dutch)*, Van Gogh Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3

Kodera, Tsukasa, “After the Dream Van Gogh and Japan in his last two months in Paris and Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (English)*, Van Gogh Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3

Kodera, Tsukasa, “Après le rêve : les derniers mois à Paris et à Auvers-sur-Oise” *Van Gogh et le Japon (French)*, Van Gogh

Museum / Mercatorfonds, pp. 128-145, 2018/3

圀府寺司 「WANTED: EDMUND WALPOLE BROOKE E.W.ブルック情報求む」『Nact Review 国立新美術館研究紀要』(国立新美術館), 4, pp. 209-210, 2017/12

圀府寺司 「夢のあとで ファン・ゴッホと日本、その最後の2ヶ月」『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 156-183, 2017/10

圀府寺司 「ファン・ゴッホと日本の接点となった人々 ― 滞日経験のあった親族、知人たち」『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 200-211, 2017/10

Kodera, Tsukasa, “After the Dream Van Gogh and Japan in his last two monthes in Paris and Auvers-sur-Oise” *Van Gogh & Japan (English)*, 青幻舎, pp. 156-183, 2017/10

Kodera, Tsukasa, “Van Gogh’s Links with Japan through Family and Acquaintances” *Van Gogh & Japan (English)*, 青幻舎, pp. 200-211, 2017/10

Kodera, Tsukasa, “Introduction Reconstructing Bing’s Legendary 1890 Exhibition of Japanese Prints at the Ecole des Beaux-Arts” *Journal of Japonisme*, 2-1, Brill, pp. 1-37, 2017/1

2-2. 著書

Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh & Japan (English)*, Vab Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3

Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh & Japan (Dutch)*, Vab Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3

Nienke Bakker, Louis van Tilborgh, Kodera, Tsukasa 他(共著), *Van Gogh et le Japon (French)*, Vab Gogh Museum, Mercatorfonds, Yale University Press, pp. 128-145, 2018/3

圀府寺司, コルネリア・ホンブルク, 佐藤幸宏(共著)『ファン・ゴッホ 巡りゆく日本の夢 (編著)』青幻舎, pp. 12-17, 2017/10

Kodera, Tsukasa, Cornelia Homburg, Yukihiko Sato(共著), *Van Gogh & Japan (編著)*, Siegensha, pp. 12-17, 2017/10

圀府寺司, 佐藤幸宏, 尾本圭子他(編)『ゴッホ展 巡りゆく日本の夢 (編著)』NHK 北海道新聞社, pp. 10-11, 2017/8

圀府寺司(共編著)『西洋美術研究 19 美術市場と画商』19, 三元社, 248p., p. 41292, 2016/10

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

圀府寺司 「座談会 美術市場と画商」『西洋美術研究』19, 三元社, pp. 8-38, 2016/9

2-4. 口頭発表

圀府寺司, 古賀陽子 (招待講演)「ラングロワの橋 断片を元に失われた作品を復元する挑戦」ゴッホ展 ワークショップ:ファン・ゴッホと日本, 京都国立近代美術館 NHK, 京都国立近代美術館, 2018/2

圀府寺司 (招待講演)「ファン・ゴッホと日本 についての最新の知見」ゴッホ展 学術講演会:ファン・ゴッホと日本, 京都国立近代美術館 NHK, 京都国立近代美術館, 2018/1

Dov Bing, 尾本圭子, 圀府寺司他 (招待講演)「ファン・ゴッホと日本 最後の二ヶ月」ゴッホ展 開催記念シンポジウム:ファン・ゴッホと日本, NHK, 東京都美術館, 2017/10

圀府寺司 (招待講演)「ファン・ゴッホ 日本の夢を巡って」ゴッホ展 学術講演会:ファン・ゴッホと日本, 北海道新聞社 北海道立近代美術館 NHK, 北海道立近代美術館, 2017/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

圀府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2018年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2016年度 直接経費 6,000,000円 間接経費 0円

2017年度 直接経費 4,500,000円 間接経費 0円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Artの研究基盤と方法を構築したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

京都国立近代美術館 北海道立近代美術館・展覧会総合監修, 2013年5月～2018年3月

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010年4月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009年4月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2000年4月～現在に至る

3. 桑木野 幸司 准教授

1975年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011年4月より現職。専攻:西洋美術・建築・庭園史。

3-1. 論文

桑木野幸司「初期近代イタリアのヴィッラにおける庭園の自己表象とランドスケープ絵画」,小野健吉『観光資源としての庭園(2)』(「観光資源としての庭園」に関する研究会), pp. 141-150, 2018/3

Kuwakino, Koji, "L'architettura e l'arte della memoria: la fabbrica del mondo progettata nella Tipocosmia (1561) di Alessandro Citolini", in *EdA Esempi di Architettura*, EDA, pp. 1-15, 2018/1

Kuwakino, Koji, "La varietas in una sylvia geometrica che «ricrea la mente stanca dal pensiero delle cose difficili»: Daniele Barbaro e l'Orto Botanico di Padova", *Daniele Barbaro 1514-1570. Vénétien, patricien, humaniste*, Brepols, pp. 115-134, 2017/11

桑木野幸司「テキストの中の宇宙:A.チトリーニ『ティポコスミア』(一五六一年)が提示する世界建築」,『Arts&Media』(大阪大学アートメディア論研究室), 7, pp. 32-55, 2017/7

桑木野幸司「現代日本の忘却術＝記憶術のために」,『地下室 草号』(地点 CHITEN), 3, 地下室 編集部, pp. 32-43, 2017/6

桑木野幸司「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園」,『観光資源としての庭園(1):平成27年度「観光資源としての庭園」に関する研究会報告書』(「観光資源としての庭園(科研)」), pp. 19-26, 2017/3

桑木野幸司「記憶の中のイェルサレム—初期近代西欧の聖都表象と夢・幻視・想像力」,『夢と表象:眠りとところの比較文化史』, 勉誠社, pp. 209-225, 2017/1

Kuwakino, Koji, "From *domus sapientiae* to *artes excerpenti*: Lambert Schenkel's De memoria (1593) and the Transformation of the Art of Memory", A. Cevolini (ed.), *Forgetting Machines: Knowledge Management Evolution in Early Modern Europe*, Brill, pp. 58-78, 2016/11

桑木野幸司 「科学とアート:ルネサンス博物図譜小史」, 『Arts&Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 148-161, 2016/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司 「ロクス・アモエヌスと[愛・智]の世界」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2018/1

桑木野幸司 「ホメロスの庭:神々の住まいと人間の苑」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/10

桑木野幸司 「楽園と庭:ギリシア神話の世界から」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/7

桑木野幸司 「神々と英雄の庭:シュメル神話とギルガメシュ叙事詩の世界」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/4

桑木野幸司 「冬の庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2017/1

桑木野幸司 ルチア・トンジョルジ・トマーズィ&ジュゼッペ・オルミ著、桑木野幸司訳「アルチンボルドー自然、芸術、技巧のはざままで」, 『アルチンボルド展:Arcimboldo. Nature into Art』, 国立西洋美術館, pp. 101-108, 2017/

桑木野幸司 プロスペロ・アルピーニ著、桑木野幸司訳「ルバーブ論」, 『原典ルネサンス自然学』, 名古屋大学出版会, pp. 119-143, 2017/

桑木野幸司 「狩猟の秋、幻獣の庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/10

桑木野幸司 「イタリア式庭園の美学」, 『紫明』39, 紫明の会, pp. 8-13, 2016/9

桑木野幸司 「庭のつくりようは夏をもって旨とすべし」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/7

桑木野幸司 「自動機械人形の詩学:庭とマシンと風景」, 『Arts&Media』6, 大阪大学文学研究科アートメディア論コース, pp. 266-269, 2016/7

桑木野幸司 「春、フローラの庭」, 『パブリッシャーズレビュー』, 白水社, p. 7, 2016/4

桑木野幸司 「レトロ建築探訪」, 『歩いてめぐる神戸本』, えるまがムック, pp. 92-93, 2016/4

3-4. 口頭発表

Kuwakino, Koji, "Il fascino dell'ecfrasi architettonica nel Rinascimento", Giornata di studi: Il fascino dell'ecfrasi architettonica nel Rinascimento, 科研基盤B創造的思考の基盤としての建築, 大阪大学中之島センター, 2018/3

桑木野幸司 「初期近代イタリアのヴィッラにおける庭園の自己表象とランドスケープ絵画」, 多様な時間軸・空間軸における庭園とその観光, 「観光資源としての庭園」に関する研究会(科研・代表:小野健吉), 奈良文化財研究所小講堂, 2017/11

桑木野幸司 「ルネサンス庭園の見方:水の庭園ヴィッラ・ランテを中心に」, 神戸婦人大学 文化・デザインコース, 神戸婦人大学, 神戸婦人大学(神戸市男女共同参画センター3階), 2017/10

桑木野幸司 「驚異の時代の驚異の芸術:マニエリスム芸術と自然描写の世界」, 「アルチンボルド展:Nature into Art」特別講演, 国立西洋美術館, 国立西洋美術館, 2017/7

桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス③:パドヴァ植物園:植物園の誕生と占星術的園芸学」, シリーズ「世界遺産ー歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/6

桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス②:水の庭園ヴィッラ・デステ」, シリーズ「世界遺産ー歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/5

桑木野幸司 「庭から見えるイタリア・ルネサンス①:ルネサンスの理想都市ピエンツァ」, シリーズ「世界遺産ー歴史と文化を巡る旅」公開講座, リーガロイヤルホテル/懐徳堂, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/4

桑木野幸司 「テキストの中の宇宙:A. Citolini, Tipocosmia (1561)が提示する世界建築」, 科研シンポジウム「建築とエクフラシス:

テキストと絵画に描かれた空間イメージ」, 科研基盤B(16H03373), 大阪大学文学研究科本館4階, 2017/3
桑木野幸司「驚異のルネサンス庭園!」, リーガクラブ講演会・懐徳堂記念会共催講座, リーガクラブ・懐徳堂記念会, リーガロイヤルホテル(中之島), 2017/3
Kuwakino, Koji, “Hortus sapientiae: giardini come luoghi della memoria e dell’organizzazione del sapere enciclopedico”, Giardini/gardens: luoghi di confluenza e di elaborazione di idee, simbolo di una privilegiata condizione umana perduta ma recuperabile, Fare arte nel nostro tempo / Associazione italiana di cultura classica Delegazione della Svizzera Italiana, Università della Svizzera italiana, 2016/11
桑木野幸司「人文主義者が設計した庭:ダニエーレ・バルバロとパドヴァ植物園(1545年)」, 西洋建築史研究の新たな地平:受容と順応—西洋建築の行間を読む, 日本建築学会, 東海大学高輪キャンパス4号館, 2016/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学賞, 大阪大学賞, 2017/11
桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5
桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8
桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6
桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2
桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2016年度～2020年度、基盤研究(B) 一般、代表者:桑木野幸司

課題番号:16H03373

研究題目:創造的思考の基盤としての建築術:初期近代イタリアの美術・文芸における空間の観念

研究経費:2016年度 直接経費 4,300,000円 間接経費 1,290,000円

2017年度 直接経費 2,800,000円 間接経費 840,000円

研究の目的:

西欧では古来、建築空間を情報整理の際に分類フレームないしは創造的思考の基盤として活用する伝統があった。こうした精神内面の空間構造については、これまで建築史や美術史、思想史などではほとんど明らかにされてこなかった。本研究は、初期近代の記憶術に着目し、精神内に建築的な仮想の情報フレームを組み上げる同術が、同時代の文芸や視覚芸術にいかなる影響を与えていたのかを、領域横断的視点から解明する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012年4月～現在に至る

4. 古後 奈緒子 准教授

1972年生。2004年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師を経て、2014年大阪大学文学研究科助教。2017年より現職。2001年日本演劇批評家協会主催第5回「シアターアーツ賞」受賞。2001年舞踊学会研究奨励賞。専攻:舞踊学

4-1. 論文

古後奈緒子 「批判的反復による失われた遺産のアーカイヴ」『舞台芸術』(京都造形芸術大学舞台芸術研究センター), 21, 京都造形芸術大学舞台芸術センター, pp. 97-102, 2018/3

古後奈緒子 「BONUS から考える障害者とダンサーの協働」『BONUS ウェブアーカイヴ』(なし(京都造形芸術大学の公募プロジェクト)), 第三回, BONUS, p. 0, 2017/5

古後奈緒子 「ホーフマンスタールの舞踊創作における異質性／他者性の作用」『近現代演劇研究』(日本演劇学会分科会近現代演劇研究会), 6, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, pp. 2-14, 2017/3

古後奈緒子 「マイノリティのパフォーマンスを引き出すメディア空間」『美学研究』(なし), 10, 大阪大学美学研究室, pp. 110-117, 2017/3

古後奈緒子 「巻頭言」『Arts and Media』(なし), 6, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論コース, pp. 2-3, 2016/7

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Kogo, Naoko, 「ダンス作品の創造と継承」, 『ダンスアーカイヴ構想』(Dance Archive Network), 第三号, NPO 法人ダンスアーカイヴ構想, pp. 2-3, 2017/5

Kogo, Naoko, 柴田隆子(共訳), 「アウストルック・モビールードイツ表現主義舞踊のその後 | AUSDRUCK-MOBIL」, 『展示』(ゲーテ・インスティテュート東京), ゲーテ・インスティテュート東京, 2016/10

古後奈緒子 「他者への橋 dracom 公演『今日の判定』『ソコナイ図』」『大阪日々新聞』(なし), 8月23日号, 大阪日々新聞, pp. 3-3, 2016/8

4-4. 口頭発表

Kogo, Naoko, 「Gaze at Oriental Dance in Japan --a reception of Ruth St. Denis in Asia--」, IFTR-Asia 2018 "Bodies In/And Asian Theaters", IFTR, University of the Philippines Diliman, 2018/2

古後奈緒子 「フーゴー・フォン・ホーフマンスタールのバレエ『時の勝利』と時間概念」舞踊と音楽研究会, 大阪芸術大学, 大阪芸術大学 サテライトキャンパス, 2017/3

岡崎乾二郎, 中島那奈子, 古後奈緒子 「モデルネのパーспекティブとオーラルヒストリーの可能性」「老いをめぐるダンスドラマトウルギー」公開研究会, 京都造形芸術大学・舞台芸術研究センター, 京都造形芸術大学 芸術文化情報センター AV ホール, 2017/3

溝端俊夫, 古後奈緒子 「ダンス作品の創造と継承」緑のテーブル 2017, 大野一雄舞踏研究所, 神戸アートビレッジセンター, 2017/3

古後奈緒子 「インスタレーションとしての空間における全能の視点の行方 ~コンテンポラリー・ダンス「を」わからない人との対話のために~」国内ダンス留学@神戸「ダンス批評の現在／批評家の仕事にせまる」, NPO 法人ダンスボックス, ArtTheater dB, 2016/8

Kogo, Naoko, 「Détournement or misuse? An attempt with and around documentary films of historical performances.」, 国際演劇学会(IFTR)2016 スtockホルム, International Federation of Theater Research, Stockholm University, 2016/6

古後奈緒子 「「ホーフマンスタールの舞踊創作における異質性／他者性の作用」『見知らぬ少女 Das fremde Mädchen』と視線はいかに出会えるか」近現代演劇研究会3・5月合同例会, 日本演劇学会分科会近現代演劇研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

古後奈緒子 舞踊学会研究奨励賞, 舞踊学会, 2002/12

古後奈緒子 第五回シアターアーツ賞, 国際演劇評論家協会日本センター, 2001/9

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

京都国際舞台芸術フェスティバル・アドバイザー・ボード, 2010年5月～現在に至る

国際演劇評論家協会関西支部・事務局長, 2009年5月～2016年5月

京都国際ダンスワークショップ・フェスティバル・推薦者、ドキュメンテーション・アドバイザー, 2009年5月～現在に至る

5. 東志保 助教

1979年生。国際基督教大学比較文化研究科博士前期課程修了(比較文化論)。パリ第三大学映画視聴覚研究博士(Docteur en Cinéma et Audiovisuel)。国際基督教大学平和研究所助手、同大学非常勤講師、岩手大学非常勤講師を経て2017年より現職。専攻：映像研究／比較文化論。

5-1. 論文

Azuma, Shiho, “Les villes, itinéraires de chiffonnier: De Chats Perchés à L’Ouvroir”, 『CinémaAction』第165号, Charles Corlet, pp. 71-78, 2017/12

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

東志保 「いま、トリン・T・ミンハが問いかけていること—分断から越境へ」『ドキュメンタリーマガジン neoneo』第8号, pp. 46-49, 2016/12

5-4. 口頭発表

東志保 (招待講演)「クリス・マルケルの『レベル5』について」クリス・マルケル監督作品『レベル5』日本語字幕版特別上映:クリス・マルケル監督作品『レベル5』日本語字幕版特別上映, アテネ・フランセ文化センター, アテネ・フランセ文化センター, 2018/3

東志保 (パネリスト)「映画生誕 映画よ、動くな、死ね、甦れ！」西南学院大学「ことばの力養成講座」&KBC シネマコラボ企画:『リュミエール!』上映&トーク, 西南学院大学, KBC シネマ, KBC シネマ, 2018/1

東志保 (学会発表)「寄せ集めの芸術:クリス・マルケルの『笑う猫事件』と『ウヴロワール』」:カルチュラルタイフーン 2017, カルチュラルスタディーズ学会, 早稲田大学, 2017/6 (『カルチュラルタイフーン 2017 パンフレット』176, pp. 98-98, 2017/6)

東志保 (司会、コーディネーター)「崙利子監督作品『Blessed-祝福』上映とトーク&全体でのクロストーク」, 第6回みたかジェンダー・セクシュアリティ映画祭 in ICU, 2017/3

東志保 (パネリスト)「記録映画と難民、亡命者—クリス・マルケルの『キャンプの8時ニュース』を中心に」, 国際シンポジウム:文学と芸術における宗教・民族をめぐる問い, 岩手大学, 2017/7

東志保 (学会発表)「クリス・マルケルの映画における幸福のイメージ—『サン・ソレイユ』と『アレクサンドルの墓』」, 第42回日本映像学会, 2016/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2017年度～2018年度、研究活動スタート支援、代表者:東志保

課題番号:17H06824

研究題目:映画における移動の意味に関する研究—イヴェンス、マルケル、ヴァルダの作品を中心に

研究経費:2017年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

研究の目的:

本研究の目的は、1920年代から80年代にかけて活躍した、ヨーロッパの記録映画の草分け的存在であるヨリス・イヴェンス、そして、戦後フランスの代表的な記録映画作家のクリス・マルケルとアニエス・ヴァルダという、同時代に活躍した3人の映像作家の作品を「移動」という主題に沿って分析する。彼らの映画制作において、なぜ「移動」が重要な役割を担ったか、その理由を作品の生成過程を検討することで明らかにし、さらに、彼らが「移動」することで表現した映像美学と社会的・思想的背景の関連性を明らかにすることにある。三者の映像作品のつながりに、「移動」というモチーフから焦点をあてることで、世界各地をカメラに収めた初期の記録映画にみられる異国趣味や移動の持つ意味の変質の経緯を明らかにしていく。つまり、個別の映像作家についての研究を超え、ヨーロッパの記録映画における「移動」の系譜を問い直す、映画史に新たな視座をもたらす研究となる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-26 文学環境論

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次、平田 由美、金水 敏、三谷 研爾
准教授：石割 隆喜

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
5	0	0	0	1	0

※うち留学生 4名、社会人学生 0名

3. 修了生(2016年度～2017年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2016	0
2017	1
計	1

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界(環境)との関わりを多次的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。1つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研究の1方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にし

っかりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

ほぼ当初の計画通りに進んでいる。日本語文献と英語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることによりかなりの進歩が見られた。2016年度は、修士論文の提出者はなかったが、今後の修士論文の作成に向けて、主指導教員の指導のみならず、全教員による集団指導体制で助言を行った。また、研究生として、ノルウェー・ロシアからの留学生が在籍し、研究活動の活性化に貢献し、広く日本と海外の文学を研究領域とするの実が挙げられた。2017年度は、主指導教員を中心とした集団体制による指導の成果として、1名が修士論文を提出した。在籍中の院生に対しても、今後の修士論文の作成に向けて同様の体制で指導を行なった。また、ノルウェーとロシアからの研究生が院生として入学し、文学を国際的に研究することの実が前年度に引き続き挙げられた。年度末に修士論文を発表する会を公開で催し、成果を共有するとともに、在籍中の院生に経験に基づくアドバイスを与える貴重な場となった。

2. 研究

教員は、活発な研究活動が行い、著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼる。また、学会や各種研究会への参加等にも積極的に取り組んだ。院生は、2016年度には修了生はなかったが、研究生2名を含めて、それぞれの研究テーマについての研鑽に努めた。2017年度は1名の修了生を出し、それ以外の院生も各自の研究テーマについての研鑽に努めた。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高い。

3. 社会連携

教育においては、所属院生が学会や研究会で発表するなど、専門的な知識を社会に対して主体的に活用するための力の涵養が進んだ。教員による国内外の学術講演や一般に向けた講演会等への参加も積極的に行われた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

成果としては、それぞれの研究能力の向上があり、研究自体にも高い評価が得られている。2015年度に提出された修士論文のうちの1本は、『待兼山論叢 文化動態論篇』に掲載された。在学中の院生は授業等での熱心な取り組みだけでなく、学外の研究活動にも参加し、着実に力を伸ばした。2016年度の研究生2名はいずれも留学生で、日本の近代文学を研究対象とし、日本語能力を向上させ、将来の研究に向かう準備を整え、専門的研究の基礎となる読解力・理解力・分析力などが着実に向上している。同2名は2017年度に院生として入学し、日本人院生と機会を並べながら本格的な日本近現代文学の研究に着手すると同時に、日本人院生も日本文学を研究する留学生から大いに刺激を受け、伝統的に国際色豊かな研究室の雰囲気は引き続き院生に好影響を与えていると言える。年度末には成果および修士論文執筆のノウハウを共有するための修士論文発表会を公開で開催することができた。総じて目標の達成は実現できたと評価する。

2. 研究

教員の論文発表や学術書の刊行、国内外における学会、シンポジウム、ワークショップへの参加などを通じた研究成果が目標どおりに上がっている。大学院生の中にも、学外での複数回の研究発表やポスター発表をした者があり、研究の成果が上がっている。目標の達成は実現できたと評価する。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2017	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	1	1	0	0	2
2017	0	0	0	0	0	0
計	0	1	1	0	0	2

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

【2016年度】

榎田那美紀「初期柳宗悦の「創作」観—『白樺』発表哲学論文からの考察—」, 国際日本学研究会・琉球アジア社会文化研究会 2016年度共同学術大会, 琉球大学, 2016/9/3

榎田那美紀「初期柳宗悦の「創作」観」, 第39回静岡哲学学会大会, 静岡コンベンションアーツセンター, 2016/11/3

(3)その他(書評・翻訳など)

【2017年度】

イングヴィル・シャースタイン「近現代日本女性文学における母娘の物語——高橋たか子「相似形」」第2回大阪大学豊中地区研究交流会, 大阪大学, 2018/1/10

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

なし

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2016年度～2017年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1名

2016年度：0名 2017年度：1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 1名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 清水 康次 教授

1954年生まれ。京都大学文学部(国語学国文学専攻)卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程(国語学国文学専攻)修了。博士(文学)(京都大学、1995)。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009年10月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究

1-1. 論文

清水康次 「『白樺』における西洋美術一初期数年間の西洋美術紹介を中心に」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 113-184, 2017/3

清水康次 「『書誌学』」日本近代文学学会(編)『ハンドブック 日本近代文学研究の方法』ひつじ書房, pp. 202-210, 2016/11

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 平田 由美 教授

1956年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士（文学）（京都大学）。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究

2-1. 論文

Hirata, Yumi, "Recounting War, Experience and Memory: The Representation of Space in Zainichi Literature During the Korean War" 『哲學與文化』(哲學與文化月刊編輯委員會), 45-3, 哲學與文化月刊雜誌社, pp. 7-24, 2018/3

平田由美 「《マイナー文学》の政治と言語——後藤明生における《他者》とのめぐり合い——」 『日本学報』33, 韓国日本学会, pp. 111-128, 2017/12

平田由美 「在日朝鮮人女性文学におけるセクシュアリティの表出とその変化——宗秋月・李良枝・鷺沢萌——」 『在日朝鮮人が／を語る』(東国大学文化学院叙事文化研究所・東岳語文学会国際学術大会), 予稿集, 東国大学, pp. 38-47, 2017/11

平田由美 「《マイナー文学》の政治と言語——脱植民地過程における「他者」という隘路あるいは通路」 『東アジアの人文精神と日本研究』予稿集, 韓国日本学会, pp. 177-186, 2016/8

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

平田由美 (招待講演) 「在日朝鮮人女性文学におけるセクシュアリティの表出とその変化——宗秋月・李良枝・鷺沢萌——」 在日朝鮮人が／を語る, 東国大学文化学院叙事文化研究所・東岳語文学会, 東国大学, 2017/11

平田由美 (パネリスト) 「Southeast Asia in Japanese imagiNation: A case of the Philippines」 Japanese Studies Association in Southeast Asia International Conference 2016, Japanese Studies Association in Southeast Asia, Radisson Blu Hotel Cebu (Cebu, Phillipines), 2016/12

平田由美 (招待講演) 「《マイナー文学》の政治と言語——脱植民地過程における「他者」という隘路あるいは通路」 韓国日本学会 第5回大会: 東アジアの人文精神と日本研究, 韓国日本学会, 嘉泉大学校(ソウル), 2016/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山賞を賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 平田由美

課題番号:25370414

研究題目:移動する作家たちの東アジア:交渉の場としての文学運動

研究経費:2016年度 直接経費 565,305円 間接経費 0円

研究の目的:

20世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集团的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

2-6-2. 2016年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:60153326

研究題目:脱植民地過程における文学のナショナリズムとインターナショナリズム

研究経費:2016年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2017年度 直接経費 1,000,000円 間接経費 300,000円

研究の目的:

地域研究としての日本文学研究を脱中心化し、近代東アジアの文学活動の連関や全体像をとらえる《場》と歴史領域を設定し、《場》の意味を変革する文学主体の動きを跡づける。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究

3-1. 論文

三谷研爾 「継受される境界文学 マグリス『撞着語法としてのブラハ』再読」『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 32, pp. 83-100, 2016/11

3-2. 著書

三谷研爾, 阿部賢一, 川島隆他(共著) 『〈ブラハのドイツ語文学〉再考』日本独文学会叢書 123, 日本独文学会, pp. 1-8, 2017/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

三谷研爾 「「シレジア」の文学史記述に関する横断的研究:ドイツ語圏からの視点」『シレジア』の文学史記述に関する横断的研究会, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 北海道大学, 2018/3

三谷研爾 「日本における〈ブラハのドイツ語文学〉研究」ボヘミア・フォーラム第1回大会, ボヘミア・フォーラム, 東京大学, 2016/12

三谷研爾 「〈ブラハのドイツ語文学〉再考」日本独文学会秋季研究発表会, 日本独文学会, 関西大学, 2016/10

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:15K02414

研究題目:〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費:2016年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

2017年度 直接経費 800,000円 間接経費 240,000円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960年代から2000年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテキストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本オーストリア文学会阪神地区幹事, 2016年5月～現在に至る

関西チェコ/スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

4. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部(英語学科)卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程(英文学専攻)修了。博士(文学)(大阪大学、1999)。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻:アメリカ文学

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

石割隆喜 (Proceedings) 「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow* における現実の表象」『日本英文学会第89回大会 Proceedings』(日本英文学会), pp. 268-269, 2017/9

石割隆喜 (書評) 「三浦玲一著『村上春樹とポストモダン・ジャパン——グローバル化の文化と文学』」『英文学研究』(日本英文学会), 93, pp. 179-184, 2016/12

4-4. 口頭発表

石割隆喜 「映画的ミメシス——*Gravity's Rainbow* における現実の表象」日本英文学会関西支部第11回大会, 日本英文学会関西支部, 神戸市外国語大学, 2016/12

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2017年度～2019年度、基盤研究(C) 一般、代表者:石割隆喜

課題番号:17K02545

研究題目:「見ること」を中心とする、ピンチョン小説における認識論の残余についての研究

研究経費:2017年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究は、「見ること」をめぐる小説としてのピンチョン作品における認識論の残余」という観点からトマス・ピンチョンの小説作品の特質を解明することを全体構想とする研究の一環として、特に『重力の虹』『ヴァインランド』『メイスン&ディクスン』を取り上げ、同観点からの分析により、これら3つの小説のピンチョン作品全体の中での位置付けを明らかにしようとするものである。3作品との関連で本研究が具体的に取り上げる「見ること」とは、映画(『重力の虹』『ヴァインランド』)と天体観測(『メイスン&ディクスン』)である。また「見ること」をより原理的に考察するために、哲学における認識論を本研究遂行上の基本的参照枠とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

2-27 言語生態論

I. 現在の組織

1. 教員(2018年5月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己、岡田 禎之

2. 在学生(2018年5月現在)

2018年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
4	0	0	0	0	0

※うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生(2016年度～2017年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2016	0
2017	1
計	1

II. 掲げた目標(2016年度～2017年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5名の教員が個々に担当する講義および演習等をおとして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらず独自に研究課題を設定して、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2016年度～2017年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学の講義および演習を選択履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、課題を独自に設定し、必ずしも既存の枠組みにとらわれない独自の方法で研究を進めた。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2016年度～2017年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、5名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅴ. 基本情報(2016年度～2017年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2016	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2017	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2016	0	0	0	0	0	0
2017	0	1	0	0	0	1
計	0	1	0	0	0	1

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

【2017年度】

土井幹生「より客観的な容認性判断手法の検討」, 言語処理学会 24, 岡山コンベンションセンター, 2018/3/13

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

なし

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2016年度～2017年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

なし

5. 外国人研究者の受け入れ状況

なし

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2016年6月4日 第96回 待兼山ことばの会を開催。

シンポジウム: Nominalization Festival 2

登壇者: 柴谷方良氏 (ライス大学・神戸大学名誉教授) 有田節子氏 (立命館大学) 田村幸誠氏氏 (大阪大学)

Akua Campbell氏 (ライス大学) Haowen Jiang氏 (ライス大学) 鄭聖汝氏 (大阪大学)

2016年8月5日 第97回 待兼山ことばの会を開催。

水谷謙太氏 (大阪大学大学院) 「焦点助詞『だけ』の救済効果」

藏藤健雄氏 (立命館大学): 「空項の作用域と解釈プロセス」

2017年7月8日 第98回待兼山ことばの会を開催。

シンポジウム Nominalization Festival 3

登壇者: 柴谷方良(ライス大学)、米田信子(大阪大学)、堂山英次郎 (大阪大学) Yuki-shige Tamura

(Osaka University)、Haowen Jiang (ライス大学)

2017年8月4日 第99回待兼山ことばの会を開催。

和田尚明氏 (筑波大学) 「言語使用の三層モデルとモダリティ・心的態度・間接発話行為」

2017年8月5日 第100回待兼山ことばの会を開催。

平山裕人氏 (大阪大学大学院) 'Temporal precedence as a component of evidentials: a case study of a Japanese indirect evidential'

川原功司氏 (名古屋外国語大学) 「象徴的なオノマトペはスケールに依存し、類像的なオノマトペは依存しない」

澤田治氏 (三重大学) 'The context-dependency of the Japanese discourse marker sore yori 'than it' The interaction between a CI and a general pragmatic principle'

楠本紀代美氏 (関西学院大学) 'Clause-embedding in Japanese: to vs. koto alternation'

7. 教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 加藤 正治 教授

1955年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了(英語学講座)。文学修士(名古屋大学、1979年)。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：英語学

1-1. 論文

加藤正治 「Witkoś (2004)において提案されている there 構文の分析について」『英米研究』(大阪大学英米学会), 42, 大阪大学英米学会, pp. 41-49, 2018/3

加藤正治 「“There + Modal + Subj + V”の構文について」西岡宣明・福田稔・松瀬憲司・長谷信夫・緒方隆文・橋本美喜男(共編)『ことばを編む』開拓社, pp. 82-89, 2018/2

加藤正治 「句構造規則の集大成 Ray Jackendoff, X Syntax: A Study of Phrase Structure. Cambridge, Mass: The MIT Press, 1977. xii+29pp.」『関西英文学研究』(日本英文学会関西支部), 10, 日本英文学会関西支部, pp. 51-55, 2017/1

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 田野村 忠温 教授

1958年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学（言語学専攻）。文学修士（京都大学、1984）。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：言語学・日本語学

2-1. 論文

田野村忠温 「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語学習書の系譜—附論 福沢諭吉編訳『増訂華英通語』—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』58, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 165-223, 2018/3

田野村忠温 「言語名「英語」の確立」『東アジア文化交渉研究』11, 関西大学大学院東アジア文化研究科, pp. 3-26, 2018/3

田野村忠温 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集」『待兼山論叢』第51号文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 21-56, 2017/12

田野村忠温 「サーチエンジンの示すヒット件数の信頼性再び—Google 検索をめぐる最新状況—」『計量国語学』(計量国語学会), 30-8, 計量国語学会, pp. 499-505, 2017/3

田野村忠温 「近現代語「可能」の成立—日中両語間の双方向的影響—」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 97-150, 2017/3

田野村忠温 「真珠湾の日中名称小史」『待兼山論叢』50 文化動態論篇, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 29-55, 2016/12

田野村忠温 「Web コーパスの概念と種類、利用価値—語史研究の情報源としての Web コーパス—」『計量国語学』30-6, 計量国語学会, pp. 326-343, 2016/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田野村忠温 「書評 エレツ・エイデン, ジャン=バティスト・ミシェル著・阪本芳久訳・高安美佐子解説『カルチャロミクス 文化をビッグデータで計測する』」『社会言語科学』(社会言語科学会), 20-第1号, 社会言語科学会, pp. 193-198, 2017/9

田野村忠温 「書評 近藤泰弘・田中牧郎・小木曾智信編『コーパスと日本語史研究』」『日本語の研究』12-4, 日本語学会, pp. 151-158, 2016/10

2-4. 口頭発表

田野村忠温 「『華英通語』道光本とその作者、成立背景」漢字文化圏近代語研究会 2018 国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会・南京大学, 南京大学, 2018/3 (『2018 国際シンポジウム 語彙史から概念史へ』pp. 127-131, 2018/3)

田野村忠温 「デジタル技術が拓く言語研究の新境地」韓国日本學會第96回国際學術大會, 韓国日本學會, 淑明女子大学校, 2018/2

田野村忠温 「日本最初期英語研究書の依拠資料と編集—『諸厄利亜言語和解』『諸厄利亜興学小筈』『諸厄利亜語林大成』—」関西大学東西学術研究所研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2017/12

田野村忠温 「新出資料『華英通語』道光本と中国初期英語教材の系譜」関西大学東西学術研究所研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2017/6

田野村忠温 「言語名「英語」の確立」東アジア文化交渉学会第9回国際學術大會, 東アジア文化交渉学会, 北京外国語大学,

2017/5『东亚文化交渉学会第9届国际学术大会 全球史观与东亚的知识迁移』下册 pp. 923-930, 2017/5)

田野村忠温 「近現代語「可能」の成立—諸説の検討と新仮説—」漢字文化圏近代語研究会 2017 国際シンポジウム, 漢字文化圏近代語研究会, 延世大学校, 2017/3(『2017 国際シンポジウム 近代期東アジアにおける言語接触と交流伝播』pp. 111-113, 2017/3)

田野村忠温 「真珠湾の日中両語における名称について」東アジア文化交渉学会第8回国際学術大会, 東アジア文化交渉学会, 関西大学, 2016/5(『東アジア文化交渉学会第8回年次大会 東アジア交渉学の新しい歩み』pp. 975-983, 2016/5)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 24520425

研究題目: コーパス日本語研究の高度化と基盤形成のための実践的総合研究

研究経費: 2016 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 39,000 円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。

併せて、学界におけるコーパス日本語研究の基盤形成に寄与することを重要な目的とし、研究成果の国内外での発表(論文・口頭)のみならず、各種コーパス関連ソフトウェアの開発・公開や、講演や執筆などの形での啓発活動にも積極的に取り組む。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、卓越研究員候補者選考委員会書面審査員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員, 2017 年 8 月～現在に至る

日本学術振興会・科学研究費委員会専門委員, 2016 年 12 月～2017 年 11 月

国立国語研究所・外部評価委員会委員, 2016 年 10 月～2018 年 9 月

日本学術振興会・特別研究員等審査会専門委員、国際事業委員会書面審査員・書面評価員, 2015 年 8 月～2016 年 7 月

日本言語学会・会計監査委員, 2015 年 4 月～2018 年 3 月

3. 神山 孝夫 教授

1958 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史

3-1. 論文

神山孝夫 「スズダリ年代記(ラヴレンチー本)訳・註[V]」『古代ロシア研究』(日本古代ロシア研究会), 24, 日本古代ロシア研究会, pp. 13-23, 2017/8

Kamiyama, Takao, “Српскохрватски акценат – увод у генеративну фонологију српскохрватских именица” *Slavic Eurasian Studies*, (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター), 31, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, pp. 64-98, 2017/3

Kamiyama, Takao, “Српскохрватски акценат – увод у генеративну фонологију српскохрватских именица” *Студије о*

Србима, (Матица српска(セルビア・アカデミー)), 22, Матица српска(セルビア・アカデミー), pp. 64-98, 2017/3

神山孝夫「名誉会員の業績に学ぶ:松本克己」『歴史言語学』(日本歴史言語学会), 5, 日本歴史言語学会, pp. 3-37, 2016/11

3-2. 著書

神山孝夫, 町田健, 柳沢民雄(共著)『ソーシャルと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』日本歴史言語学会, 大学教育出版, pp. 3-140, 2017/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫「印欧語におけるケルト語の位置」日本ケルト学会 東京研究会, 日本ケルト学会, 慶應義塾大学, 2017/7(『日本ケルト学会ニューズレター』24-3, pp. 6-7, 2017/12)

神山孝夫「イントロダクション: ソシユールの生涯と業績」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソーシャルと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 7-82, 2017/12)

神山孝夫「基調講演 母音交替の研究:『覚え書』と喉音理論」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソーシャルと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 83-140, 2017/12)

神山孝夫, 町田健, 柳沢民雄「座談会「ソーシャルと歴史言語学」」2017 年春季公開シンポジウム: ソシユールと歴史言語学, 日本歴史言語学会, 研究社英語センター, 2017/3(『ソーシャルと歴史言語学(歴史言語学モノグラフシリーズ1)』pp. 231-242, 2017/12)

神山孝夫「印欧諸語における rhotacism の発生原因について」日本歴史言語学会 2016 年研究発表会, 日本歴史言語学会, 九州大学, 2016/11(『歴史言語学』6, pp. 84-85, 2017/12)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・会長, 2016 年 1 月～2017 年 12 月

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～2017 年 12 月

大阪言語研究会・世話人, 2007 年 1 月～現在に至る

4. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻: 日本語学

4-1. 論文

渋谷勝己「標準語の癖—論理性と分析性—」『日本語学』37-1, 明治書院, pp. 50-59, 2018/1

渋谷勝己「現代社会のことばのバリエーション」『ことばと文字』(日本のローマ字社), 8, pp. 4-13, 2017/10

渋谷勝己「日系カナダ人一世・二世の日本語変種—その実態と形成過程—」『待兼山論叢 文化動態論篇』50, 大阪大学文学研究科, pp. 1-27, 2016/12

渋谷勝己「第二言語習得研究と第二方言習得研究の統合に向けて—現状と問題点—」『日本語文法研究のフロンティア』くろしお出版, pp. 269-288, 2016/5

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

Shibuya, Katsumi, “Japanese Historical Sociolinguistics”, Methods and Perspectives in Historical Sociolinguistics: Research in Austria and in Japan Compared, FWF - JSPS Bilateral Joint Research Seminar, ザルツブルク大学, 2016/9

渋谷勝己「歴史社会言語学が捉えることばの変化—日本語史を例として—」シンポジウム歴史言語学の新しい潮流—歴史語用論と歴史社会言語学—, 関西言語学会, 龍谷大学, 2016/6

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・理事、評議員, 2015年5月～現在に至る

社会言語科学会・理事, 2015年4月～現在に至る

日本語文法学会・評議員, 2015年4月～現在に至る

社会言語科学会・研究大会委員長, 2015年4月～2017年3月

日本学術会議・連携会員, 2014年10月～現在に至る

5. 岡田 禎之 教授

1965年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程（英語学専攻）中途退学。文学博士（大阪大学、2001年）。第37回市河賞（2003年）。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010年4月より現職。専攻：英語学

5-1. 論文

岡田禎之 「身体部位名詞の概念拡張と連語環境における意味分布の初期調査」『ことばのパースペクティブ』単行本, pp. 174-185, 2018/3

岡田禎之 「高等学校・英語科授業における英語の補部構造の教授に関する一提案: 事態の結束性と記号上の距離に焦点づけて」『大阪大学教育学年報』(大阪大学人間科学部教育学研究室), 23, pp. 169-179, 2018/3

岡田禎之 「叙述文脈と連語文脈における概念拡張分布の相関について」『待兼山論叢』(大阪大学文学会), 51-文化動態論篇, pp. 1-19, 2017/12

岡田禎之 「拡張概念の定着化と項・付加詞の解釈分布について」『認知言語学論考』13, ひつじ書房, pp. 107-137, 2016/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

岡田禎之 「テキストの結束関係と名詞の語彙概念拡張」神戸外大英文学会 招待講演 (神戸市外国語大学), 2017/12

Okada, Sadayuki, "The Asymmetry of Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts.", Corpus Linguistics 2017, International corpus linguistics society, University of Birmingham, 2017/7

Okada, Sadayuki, "Conceptual expansions of body part nouns and their distributions in predicational and modificational contexts", Workshop on Nominalization, University of California, Los Angeles, University of California, Los Angeles, 2017/3

岡田禎之 「身体部位名詞の概念拡張と語の接続関係について」日本英語学会 34 回大会, 日本英語学会シンポジウム司会および講師として, 金沢大学, 2016/11

Okada, Sadayuki, "Lexicalization of extended references of nominals and argument-adjunct asymmetry", UK Cognitive Linguistics Conference 6, UK Cognitive Linguistics Association, Bangor University, Wales, 2016/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2013 年度~2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 岡田禎之

課題番号: 25370551

研究題目: 語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費: 2016 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2017 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に関して、項位置と付加詞位置における概念拡張可能性には非対称的な関係があることを、英語や日本語を中心としてコーパスからデータを集積し、証明するとともに、意味変化の方向性として、項位置において発現した新しい意味解釈が慣習化することによって、付加詞位置にも浸透していくという意味変化の方向性を仮定し、これを検証していく。このためには、現代語のコーパスだけではなく歴史的なデータコーパスの集積、検証も必要であり、またある程度広範な名詞表現についての検証を行わなければならないため、多くの時間と労力が必要となる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・監事, 2016年4月～2018年3月

言語系学会連合・監事, 2016年4月～現在に至る

日本英文学会関西支部・理事, 2013年4月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013年4月～現在に至る

阪大英文学会・幹事, 2010年4月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 鄭聖汝 講師

1957年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。専攻：日韓対照言語学／類型論。

1-1. 論文

Chung Sung-Yeo, Shibatani Masayoshi, "Causative Constructions in Japanese and Korean" *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics.*, De Gruyter Mouton, pp. 137-172, 2018/2

鄭聖汝, 柴谷方良, 「속격이란 무엇인가? : 체언화사로서의 분석」(属格とは何か—体言化辞としての分析)『言語的多様性』多文化時代の辞典, 韓国辞典学会・韓国類型論学会, pp. 129-153, 2016/8

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Chung Sung-Yeo, "Nominal-based nominalization in Korean", International Workshop: Nominalization and Noun modification. , Sponsor: NINJAL & Osaka University, San Francisco State University, 2018/3

Shibatani Masayoshi, Chung Sung-Yeo, "Nominal-based nominalization", Japanese/Korean Linguistics Conference 25, Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawaii, Center for Korean Studies & Imin International Conference Center, 2017/10

Shibatani Masayoshi, Chung Sung-Yeo, "Metonymy and Grammar.", 西江大学校言語情報研究所講演会, 西江大学校, 2017/8

Shibatani Masayoshi, Chung Sung-Yeo, "機能類型論講義—体言化(Grammatical nominalization)を中心に", 韓国言語類型論学会 2017年度夏季学術大会, ソウル市立大学校, 2017/8

鄭聖汝 「歴史的観点からみた韓国語の連体修飾の形式と構造」 「名詞修飾表現」平成 29 年度第1回研究発表会, NINJAL プロジェクト, 大阪大学, 2017/7

Chung Sung-Yeo, "Korean interrogative sentences: Nominalization and cross-dialectal perspectives.", Workshop on Nominalization, International Collaborative Research Program/ Terasaki Center for Japanese Studies, Sponsor: Osaka University, UCLA/ Department of Asian Languages & Cultures, & UCLA/Asia Institute, UCLA, 2017/3

鄭聖汝, 柴谷方良, 「속격이란 무엇인가? : 체언화사로서의 분석」(属格とは何か—体言化辞としての分析), 韓国辞典学会・韓国言語類型論学会 2016 年夏季学術大会, 韓国辞典学会・韓国言語類型論学会, 漢陽大学校, 2016/8

鄭 聖汝 「韓国語における体言化辞-s の歴史的展開と共時的分布」, シンポジウム: Nominalization Festival 2, 平成 28 年度大阪
大学国際共同研究促進プログラム, 大阪大学, 2016/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2017 年度～2020 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭 聖汝

課題番号:17K02681

研究題目:他動性と言語類型—実証的他動性理論の構築を目指して—

研究経費:2017 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究は、個人的に適用すると相反する結果のである、Hopper & Thompson の普遍仮説ならびに池上の類型仮説による他動性についての二つのアプローチを融合し、他動性パラメータの適用優先順位が最適理論の手法で決められることによって、自他構文の選択が予測できる、実証的他動性理論の構築を目的とする。方法論的には、日本語(ナル型)と英語(スル型)を基軸に置き、SOV 型の 4 言語と SVO 型の 4 言語を取り上げ、自他構文選択に関与するパラメータについて、優位性を独立に測りうる実験的調査を実施して、他動性パラメータの適用優先順位を見極め、理論の構築につなげるものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2015 年度～2017 年度、2: その他共同研究、助成金獲得者:鄭 聖汝

助成金名:国際共同研究促進プログラム

研究題目:準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開

助成団体名:大阪大学

助成金額:2016 年度 直接経費 3,150,000 円

2017 年度 直接経費 3,150,000 円

研究の目的:

本研究は、過去 50 年間にわたり学会を席卷してきたチョムスキーによる哲学的理論から経験的で実証的な学問へと言語学のパラダイムを念頭に、近年発達してきた認知・機能文法の展開を目標としている。準体法研究を具体的な課題に掲げ、当分野で先進的研究に取り組んできた(米)Rice University の Masayoshi Shibatani 教授の研究チームと文学研究科ならびに言語文化研究科の専門教員・大学院生からなる研究グループとの国際共同研究を促進することによって、本学における個別言語ならびに言語学研究の一層の発展を図るとともに、その研究成果を海外発信に繋げようとするものである。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・学会誌編集委員, 2014 年 10 月～現在に至る

関西言語学会・大会運営委員, 2011 年 4 月～現在に至る

2-29 国際交流センター

教員の研究活動(2016年度～2017年度の過去2年間)

1. 小林 柔子 助教

1-1. 論文

Kobayashi Hassall Yasuko, “Kobayashi, YH & Nakanishi, H (2017) Involvement of immigrants in community planning for disaster resilience: a prospect and paradigm, *Quality Design*, pp16-23. ” *Urban Perspective*, (Quality Design Institute), 2, pp. 17-24, 2017/12

小林柔子「小林、柔子・ハッサル (2017) 越境する力:シンガポールの日常における第三の場所 —華人イスラム教改宗者の事例から 第71巻第4号, pp.17-33.」『中国研究月報』(中国研究所), 71-4, pp. 17-33, 2017/4

Kobayashi Hassall Yasuko, “Kobayashi, YH (2017) Debunking negative representations of Muslim minorities to overcome the binary between white Australia and minorities” *Journal of Australian Studies*, (Australian Studies Association of Japan), 30, pp. 17-36, 2017/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Kobayashi Hassall Yasuko, (2018) Discussant for the panel, “Bringing the Archives of Wartime and Occupied Japan to Life: Perspectives from the Public and Private Sectors” organized by Professor Kristine Dennehy (California State University), Fullerton, *The Association for Asian Studies Annual Conference, Washington*, the United States. 22-25 March 2018.

Kobayashi Hassall Yasuko, “Kobayashi, YH (2017) Social resilience against hate through the cases of Australian Muslim phobia”, International workshop, Mobilities, Migration and Hate, , Centre for Diaspora and Asia, Konkuk University , Konkuk University (Seoul, South Korea) , 2017/12

Kobayashi Hassall Yasuko, “Kobayashi, YH (2017) “Soldiers as mobile subjects: Japanese POWs Experiences through ATIS Interrogation Reports””, Australian Historical Association 36th Annual Conference, Australian Historical Association , University of Newcastle (Newcastle, Australia), 2017/7

Kobayashi Hassall Yasuko, “Kobayashi, YH (2017) “Japanese Soldiers Migrant Experience - through the ATIS Interrogation Reports””, American Asian Studies Conference in Asia, American Asian Studies (AAS), Korean University (Seoul, Korea), 2017/6

Kobayashi Hassall Yasuko, “Japanese Total War System, War Mobilisation and Migration: The Case of Comfort Women”, GENDER PERSPECTIVES ON COLONIAL INTER-ASIAN LABOUR MIGRATION, Asia Research Institute, National University of Singapore, Asia Research Institute, National University of Singapore, 2017/2

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

小林柔子 Japanese Studies Fellowship, National Library of Australia, 2017/2

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. CHUNG AEMEE 助教

1981年生。2015年、京都大学大学院教育学研究科修士号取得(教育科学)。P&Gジャパン、フェアモントホテル&リゾーツ、パソナ、The Japan Times、Kansai Time Out 等にて勤務。2015年、京都大学高等教育研究開発推進センター研究員。2016年より現職。専門:高等教育/外国語教育/教育工学。

2-1. 論文

青木直子, 栄苗苗, 郭菲, 劉姝, 王静斎, 丁愛美.(共著)「対面式タンデム学習における学び: 日本語学習者と日本語話者のやりとりにおける LRE を手がかりに」『阪大日本語研究』29, 文学研究科日本語学講座, pp. 19-41, 2017/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

丁愛美, 林貴哉, 王静斎, 劉姝, 中尾未来, 謝佩芳, 李眩珠.(共同発表)「大阪大学文学部における正課外言語学習活動の取り組み —学生主体によるタンデム学習プロジェクト (Tandem Learning Project)—」第 24 回大学教育研究フォーラム, 京都大学高等教育研究開発推進センター, 京都大学, 2018/3

CHUNG, A. “A Case Study of How Content-Based Instruction Course in English Changed Perspectives and Attitudes of University Students in Japan”, The Asian Conference on Education and International Development (ACEID) 2018: Surviving and Thriving: Education in Times of Change, The International Academic Forum (IAFOR), Art Center, Kobe, 2018/3

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

編集後記

本巻『年報 2018』は、文学研究科および文学部の2年間（2016/2017年）の教育・研究活動を記録したものである。前巻までと同様、本巻も研究科に所属する教職員の理解と協力のもと、当初の予定通り完成させることができた。各種データの提供や各報告事項のご執筆をいただいた方々には、厚く御礼を申しあげたい。

本巻の構成は基本的に従前通り、前半で研究科・学部の基礎データと教育研究プログラムの紹介を、後半では専門分野・コースごとの活動報告をまとめたものとなっている。個別の専門分野を超えた教育・研究活動を記録した前半の第1部では、大学院・学部学生の受入状況などの基礎的なデータや各室の活動報告のほか、国際連携・分野横断的な教育・研究を促進するために実施されているプログラムの概要と活動状況について、関係教職員に依頼し報告いただいた。エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）や「人文学クラスター」などの継続プログラムのほか、大学博物館を活用してファシリテーター養成を目指すプログラム「記憶の劇場」や、全学の大学院にむけた高度教育プログラムである「グローバル・ジャパン・スタディーズ」が新たに加わり、専門分野の壁を超えた様々な教育・研究の試みが活発におこなわれている状況が確認できる。

一方、専門分野・コース別の教育・研究活動を記録した後半の第2部では、これも従前通り、専門分野・コースごとの概要報告のほか、教員に個別に入力いただいた教員基礎データに基づいて個人別の業績を集成している。この教員基礎データの入力方法については現在、論文と著書のカテゴリー分けに教員間の不統一がみられるなど、改善を要する点が指摘されており、評価・広報室で見直しが検討されているところである。現在の教員基礎データの入力方法は、一部の優れた成果が見えにくくなっている面がある。研究業績評価の指標は専門分野によって異なるため厳密な書き分けは困難だが、本研究科の業績を対外的により客観的かつ正当に示す記載方法が検討される必要があるだろう。

末筆ながら、データの収集・整理から刊行に至るまでの煩雑な作業をご担当いただいた評価・広報室の皆さんには心より感謝したい。

2019年3月

佐藤 廉也、村田 路人、園府寺 司

大阪大学大学院文学研究科
年報 2018
教育・研究(2016-2017年度)

2019年3月発行

編集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
TEL:FAX 06-6850-5107(評価・広報室)
